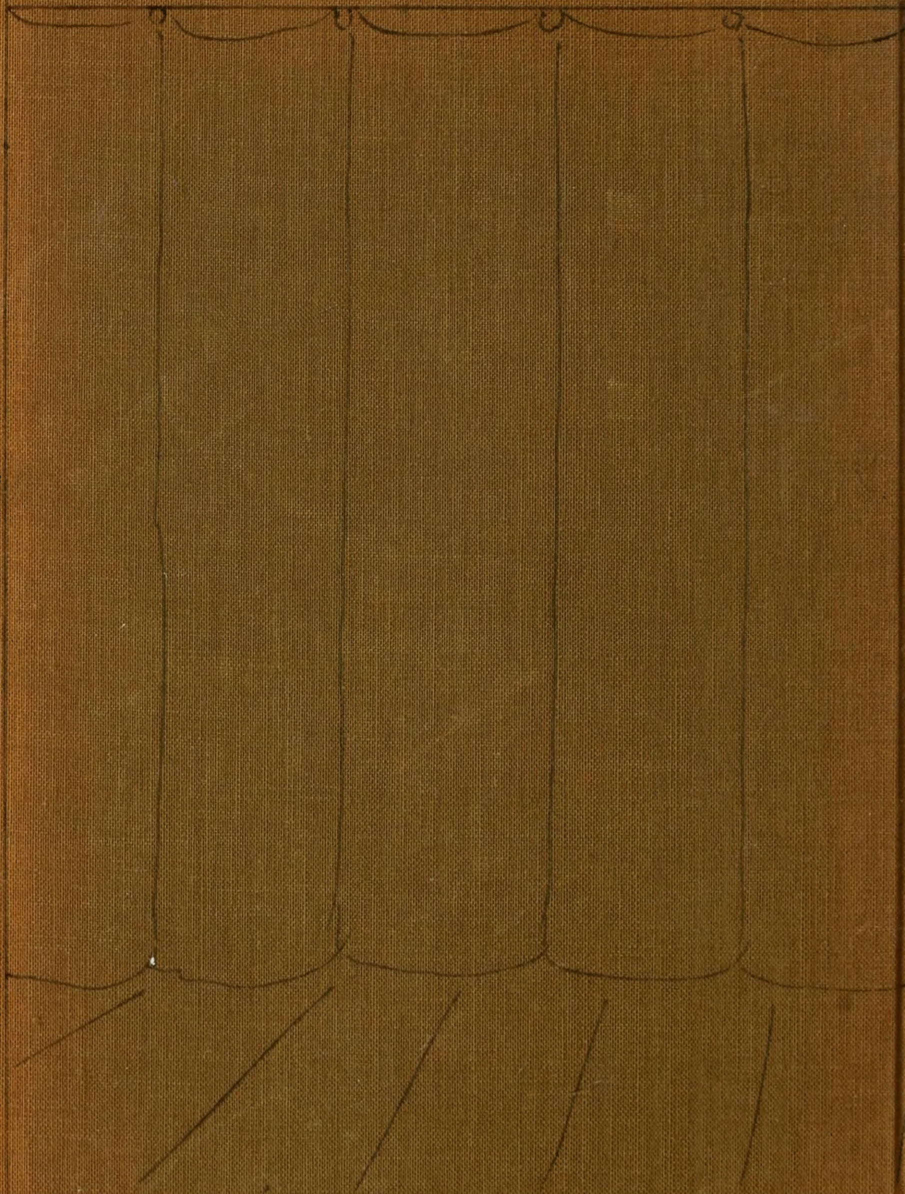


Nihon gikyoku zenshū

日本戲曲全集
第十卷

初代櫻田治助集

東京
春陽堂版



「大商蛭子島」三建目舞臺面の錦繪

日本戲曲全集 第十卷 目次

初世櫻田治助篇

國色和曾我（二幕）……一
――鬼王新左衞門と鷄大盡――
大商蛭子島（四幕）……八四
――河津俣野の角力、賴朝旗揚――
傾情吾嬬鑑（六幕）……二六七
――長兵衞權八、龜山仇討――

江戸富士陽曾我（一幕）……四一九
——おそめ久松、稻荷の九藏——
春錦伊達染曾我（四幕）……四六一
——初期の鏡山——
赤松蟾兎見島臺（四幕）……五三三
——今川の猫、志津平、三保平——
けいせい鏡臺山（四幕）……六二一
——播州皿屋敷、鏡臺院——
傳記及解說……渥美清太郎　七七

髪梳
戀女房
如何時致
爾成梓紋
衛友呼
岸流島

附

小林が二月醉三日の三谷通も
關の小萬が畠山ならぬ敵討
色を含みし男予管お花半七と
名を假初の開帳參郎を放れ
て片貝が嫁入の和田酒盛

今様道成寺段
春組大佛供養
打納鎌倉榮
景清痣丸息杖對
秩父重忠鵜昇姿

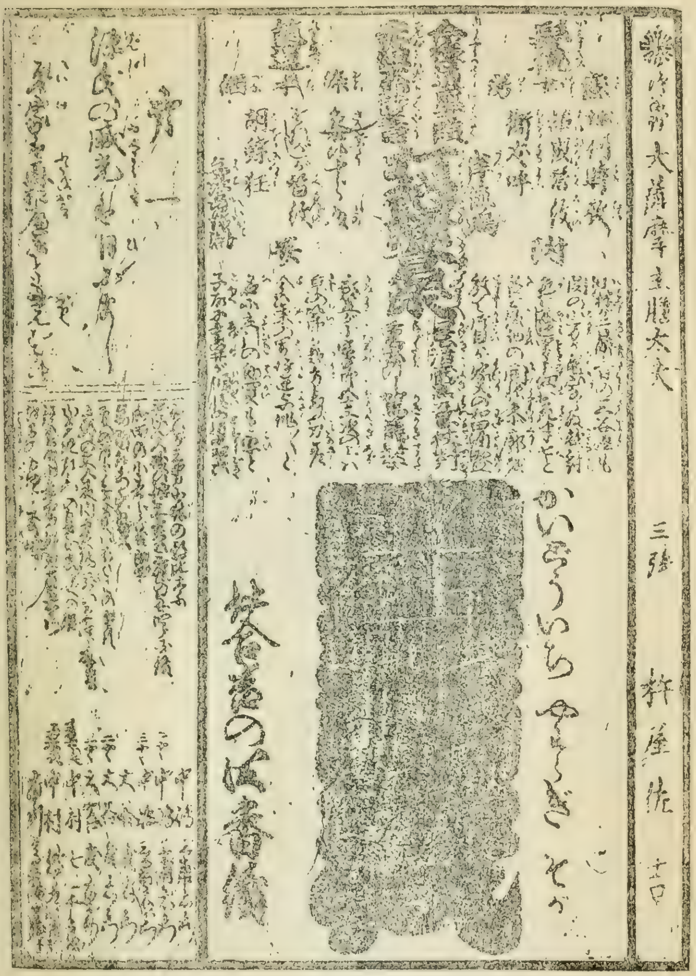
筐送
染手綱
參候十郎殿
某梓紋
胡蝶狂
與次兵衛灘

並

衣笠が小室節五十三次の上は
京の次郎が越方しのぶ刀差
今は東の男伊達與作〱と
名に達引の初買も戀と子故に
重の井が傾城の道中双六

國色和曾我

仕合吉の四番續



初演の紋番附

國色和曾我

序幕　淺草觀音の場

役名　鬼王新左衛門。夢の市郎兵衛。山形屋儀平次。黑雲武兵衛。茶屋娘、おみち。大磯屋市七。鬼王娘、おしげ。梅澤の町人、小五郎兵衛。

本舞臺、淺草觀音の地内、東西の見附け柱、櫻の大樹。下座の方に水茶屋の飾り附け。爰におみち、振り袖やつしにて床几にかゝり居る。大勢の仕出しに茶を運んで居る。尤も前垂れ、駒下駄にて、西の方に疱瘡神の社、赤い幟大分立てゝあり、傍へに屋根なしたる手水鉢に三ツ大と五三の桐の比翼紋付けたる手拭吊してあり、この下に鬼王新左衛門、深編笠の浪人、袖乞ひの形にて、茣蓙の上に坐つて居る。新左衛門娘おしげ、振り袖やつしにて往來の仕出しに錢を貫つて居る見得。仕出し大勢、花道と下座より出て行き違ひ、辻打ちにて、幕明く。おしげに錢を遣る。

仕出　なんと見さつしやつたか。この頃評判のある袖乞ひのあの娘、美しいものぢやござらぬか。

同　それ〳〵、何所の家持ちのお孃樣と云つても、恥かしくない器量。惜しい者を袖乞ひにして置きますなア。

同　娘に見惚れて觀音詣りを、おらア忘れやうとした。サア〳〵、一緒に參りませう。ござれ〳〵。

ト辻打ちになり、皆々奥へ入る。花道より、黑股引、大小、羽織の侍ひ出て來る。これに大勢町人付き、後より、黑雲武兵衛、やつし一本差しにて付き、お觸れがある〳〵と皆々本舞臺へ來る。

武兵　モシ〳〵お家主樣、お觸れがあると仰しやるは、如何樣な儀でござりまするな。

侍ひ　コリヤ〳〵、家主、あれは何者ぢや。

町人　イヤ、この者は黑船町に居りまする、黑雲武兵衛と申しまする、若い者でござりまする。

侍ひ　武兵衛とやら、この度のお觸れと云ふは外でもない。先達て箱根山に於て、紛失なしたる友切丸の一腰、曾我

一家へお疑ひかゝり、祐信の難儀となる、彼の友切丸を所持なす者あらば、早速に召捕つて罷り出でよ。まつた二つには、義經の公達經若丸、搦め捕つて出すものならば、例へ同類たりとも、その罪を赦し、御褒美を下されんとの事。この旨キッと心得てよからう。

武兵　すれば、何と仰しやりまする。義經の公達經若丸、まつた友切丸の在所、御注進申さば、御褒美下されるとな。

侍ひ　如何にも。ナニ武兵衛とやら、其方は町人に似合はぬ、善惡も理非も辯まへさうな男ぢや。まだ申しつける用事もあれば、隣町へ案内いたせ。

武兵　外にも御用がござるとな。

侍ひ　加何にも。

武兵　然らば御案内仕りませう。

侍ひ　武兵衛、參れ。

武兵　先づお出でなされませい。

ト辻打ちになり、皆々入る。武兵衛も付いて入る。

しげ　モシ／＼父さん、今のお觸れを聞きなされましたか。お前の御苦勞になさんす、友切丸の事でござんすぞえ。

新左　さればさ、箱根山にて紛失の砌りより、御主君の御難儀となる。何卒人手へ渡らぬうち、名劍の在所を尋ね求め、一度は上々様の汚名を雪ぎたきの儀、それゆゑにこゝの態……おしげ、もう日が暮れうか。

しげ　お前、まだ日は高うござんすが、なぜさう云はんす。

新左　そんなら曇つた加減が、きつう霞んで見えるわいの。

しげ　そりや大方、いつもの御持病で、眼が霞んだものでござんせう。ちつとお氣晴らしに、編笠を取つて御覽じませい。

新左　イヤ／＼、矢張り此まゝ。

しげ　それもさうかえ。ドレ／＼、あなたへ御無心申して、茶を一つ頂いて上げませう。

ト新左衞門、袂より茶碗出して渡す。おみちの前へ持つて行く。

みち　アイ／＼、幸ひ今入れた煮花。遠慮なしに進ぜさんせ。

しげ　アイ／＼、有り難うございまする。

トこなたへ來る。

いつものお方に頂いて參りました。モシ、煮花でござんすぞえ。

新左　そりやよからうわいの。いつもの姐様へ御無心申し

たのか。
しげ　アイ〳〵。
新左　ようお禮申しやつたか。ドリヤ〳〵。
ト新左衞門、茶を呑む。辻打ちになり、花道より、夢の市郎兵衞、羽織衣裳にて、大磯屋亭主清七、羽織衣裳にて、醉うたるこなし。これを介抱して出て來る。
清七　コレ〳〵、市郎兵衞どの、必らず醉つたと思うて下さるな。醉ひはせぬぞ〳〵。
市郎　ようごんす〳〵。向うの水茶屋へ行つて、娘の蓮花を呑んだなら、醉ひが醒めませう。
清七　ハテ、醉ひはせぬ〳〵。
市郎　ア、、危ない〳〵。
ト辻打ちになり、兩人、本舞臺へ來る。おしげ、清七が前へ袖乞ひに來る。
清七　これがいつもの美人か。惜しい者を斯うして置くワ。市郎兵衞どの、やらつしやい〳〵。
市郎　オ、、合點だ〳〵。
トはやみちより錢を出してやる。おみち、茶を酌んで出し
みち　これは清公さん、市郎兵衞さん、お前方は其やうに、來る日も〳〵、お樂しみでござんすの。
清七　お樂しみとは有り難いわえ。有やうは今、並木で田の字と食べやしたが、まだ足らないでごんす。
市郎　時に、この中から出て居る、あの物貰ひ。たんと美しい者ではごんせぬか。
清七　さればサ。あゝ云ふ奴を袖乞ひにして置くは、鐘ヶ淵の釣鐘を見るやうで惜しいものだ。コレ〳〵、お娘、爰へ來なさい〳〵。
しげ　アイ〳〵、わたしの事でござりまするか。
清七　お前の事サ。マア、どう云ふ譯で袖乞ひをしなさる。マア〳〵、爰へお出で〳〵。
トよろ〳〵しながら、おしげに抱きつく。その拍子に懷中より金財布下がる。
市郎　コレサ〳〵、危ない〳〵。そして、こりや金ぢやアござりませぬか。
清七　金サ。しかも小判で三百兩。田町の茶屋へ仕拂の金を、拂はうと思つて來ました。邪魔になつてどうもならない。
市郎　お前のやうな諸白に、三百兩と云ふ大金を持たせて出すと云ふは、ハア、羨やましい身上ぢやなア。シタガ

斯う云へば、どうか味噌を上げるやうだが、わしが内は金はない。その代り借錢もない。土藏もあり、惣銅壺の竈もあり、佛檀はまた結構づくめ。三つ具足はみんな唐銅。白檀の四枚障子を建つて、燈明を灯した所は、籬から見立てるやうで、マア、内はたくわいでごんす。邪魔になる物は、行水盥と車長持。たんとある物は、借りた箱と流れの書出し。足らない物は緞子の枕。一年三百六十日、三分五厘と暮らして居る、浮世を夢の市郎兵衞。それに付けても金の欲しさよ。

清七　おきやアがれ。無駄を云はずに、あの娘に橋をかけてナ、コレ、くりやれサ〳〵。

市郎　橋をかけろとはえ。

清七　ハテ、野暮な。取持つてくれと云ふ事よ。

市郎　わしは又、船饅頭でも買ふのかと思ひました。

清七　ドレ〳〵、清公直にお目にかゝらう。

トよろ〳〵おしげに抱きつく。新左衞門、思ひ入れ。市郎兵衞、留めて

市郎　マア〳〵、奥山へ行つて、もう一杯呑み直さう。サア、ござりませ。

清七　それでも、あの子を。

市郎　ハテ、ようごんす。危ない〳〵。

ト辻打ちになり、市郎兵衞、清七を引摺つて下座へ入る。向うより、小五郎兵衞、羽織袴にて、草履取り連れて出て來る。直ぐに本舞臺へ來る。おみち、茶を出して

みち　小五郎兵衞さん、今日はキッとしてお出でなさんしたが、觀音詣りと云うて、内を出る手筈もある事ぢやぞえ。

小五　さう見拔かれて堪るものか。今日ばつかりは觀音へ參詣して、戻りに坂本を勤めようと思つて出かけたのぢや。時にてまへ、硯があるか。

みち　ありはあるが、筆が惡いぞえ。

小五　なんでもよい。ちよつと貸してくりや。

トおみち、抽出しより硯箱を出して貸す。小五郎兵衞、鼻紙へ何か書いて、供を呼び

これを堀の藤屋へ持つて行て、息子に喜瀬川が返事を聞いて置いてくれろと云つて、もし息子が居ずば、内儀にでも見せろ、早く行け〳〵。

ト供の者、文を持ち入る。

みち　モシ〳〵、昨日藤屋の兒さんが、お前が來さんした

なら、上げてくれろと、一昨日の返事が來て居やんす。

ト文を出して小五郎兵衞へ渡す。

小五　よし／＼。これは大方、明日の晩の事であらう。おれが逢はずば解るまいし。

ト新左衞門、謠を諷ふ。おしげ、小五郎兵衞に袖乞ひする。

ホウ、浪人衆さうなが、さて／＼氣の毒な。折惡しう家來を使ひにやつたれば、持ち合せが……おみち、その茶代を、ちよつと貸してくりやれ。

トおみち、紙に包みし錢を出し、小五郎兵衞、取つて

幸ひ今日は志しの命日、心ばかりの手の內。取りや／＼

トおしげ、頂いて新左衞門へ渡す。此うち、おみち、捨ぜりふにて、奥へ入る。

見れば御浪人さうなが、零落しながらも、袖乞ひしても、刀を放さぬと云ふは武士の嗜なみ、それに引替へ、有爲轉變とは云ひながら、刀を捨てしは亡き父への不孝の罪。惣じて人と云ふ者は、兩親ある時は、それ程には思はぬものぢやが、ひよつと片親に放るゝか、また兩親に別れた上では、云うて返らぬ不孝の罪。隨分人は孝行が第一ぢや。いとしや器量と云ひ、並々ならぬ生れ付きで、大勢の袖褄に縋り、一錢二錢の合力を受け、その恥かしめもいとはずに、親の手元で袖乞ひするとは、ハテ、孝行な事ぢやなア。

ト新左衞門が前にある書附けを見て

長々の病氣の上、浪人の身の今日に難儀仕り候ふ。これに依つて多少に限らず御合力……コリヤ娘御、親御は御病氣ぢやさうなが、病症はなんでござる。

しげ　お話し申すもお恥かしうござりまする。御主人にお別れ申してよりは、久しい浪人の身の上。刀の役目は立つれども、只立ち兼ぬるは朝夕の煙り。また私しの弟が一人ござりますれど、これも藁の上より人手へ渡し、今頃は何所にどうして居りまするやら。まめでさへ居つたなら、丁度今年は十二になりまするが、これもさぞ力なう思うて居るでござりませう。何やかやの苦勞が、積り積りて心の痛み、この頃は目が霞むと申して、ござりまする。

小五　ハテナウ、聞けば聞く程いとしい事。其やうにキナキナ思はぬがよい。兎角苦勞は病氣の毒ぢや。追ツつけ眼もさつぱり癒るであらう。これはハヤ、云はずとも知つてゝござらう。上々樣にも御苦勞が絶えぬやう。鎌倉

の諸士方中にも工藤左衛門祐經さま、何晴からぬお身の上ながら、御苦勞ばしあつての事か、この頃御病氣ぢやといの。

新左　モシ〳〵、卒爾ながらお尋ね申しまする。只今仰しやりました、その祐經さまの御病氣は、どのやうな御病氣で、御大病でござりまするかな。

小五　ハテ、味な事を……祐經さまの御病症は、丁度おまへのやうな御眼病ぢやとの事。

新左　御眼病でござりまするか。すりや、お命に拘はりまする程の、御病氣でもござりませぬな。

小五　左程の事には承はらぬが、左衛門祐經さまは、賴朝公のお覺えめでたく、五月下旬御狩の惣奉行を蒙むり給へども、御眼病のゆゑ御辭退との事。いよ〳〵御眼病御平癒なく、狩場へ御出立なき時は、兄弟の衆の大望も…………ハヽヽヽ、わしとした事が、役にも立たぬ事に獨り言ドリヤ、觀音へ參詣しようか。

ト行かうとする。新左衛門、縋つて

新左　憚りながら承りたい儀がござりまする。暫らくお待ち下されませい。

しげ　何やら父さんが、お尋ね申したい事があると申しまする。親の願ひを、お聞きなされ下さりませい。

小五　御浪人、尋ねとは何事でござるな。

新左　只今仰せられましたる通り、祐經さま御眼病平癒なき時は、狩場へ御出立はござりませぬか。

小五　さればサ、祐經さま惣奉行を蒙むり給へども、御病氣ゆゑ狩場へ御出立なき時は、諸士方も御難儀。これに依つて、いろ〳〵の藥をお用ひなさるゝ中にも、辰年辰の月辰の日辰の刻に出生なしたる、男子の生血を取つて用ゆれば、早速御平癒あるとの事、なんとマア、味な藥もあればあるものでござるなう。

新左　そんなら、なんと仰しやりまする。辰の年辰の月辰の日辰の刻に出生の、男子の血汐を用ゆれば、御平癒遊ばされまするとな。ハテ、どうぞして辰の年の年月日時に當つた者を、欲しい事でござりまするなア。

しげ　なんぼ祐經さまの御威光でも。お尋ねなされぱとてこの子が辰の年の年月日時に當りましたと云うて、お知らせ申す者はござんすまいなア。

小五　さればサ。人の親の心は、闇にはあらねども、子に絆さるゝは親の常。子は又親を思ひ兼の、三ツや五ツの振分け髮を

新左　云ふに云はれぬ身の願ひ。御主人達のお力に、なる甲斐もなき素浪人。

しげ　尾羽打枯れし木の下に、かき合せたるうばかいの、妻をば戀はで親を戀ふ、こかいのすその紅葉鹿。

小五　身巾も狹き袖乞ひは、浮世の義理に隔てられ、明けて云はれぬ中垣の、露の宿りの朝顔は

新左　朝な／＼の起臥しも、浪の立ち居かそのお方に、繋がる緣の一筋は、昔語りに奈良の京。

小五　京で育ちし鶯の、法法華經も父の爲、古巣に殘る母鳥へ、ゑかいの便り袖のうち。

ト小五郎兵衛、紙に包みし二三兩の金を投けやる。

新左　これは。

小五　御浪人、緣あらば、重ねて逢ひませう。

ト唄になり、小五郎兵衛、思ひ入れあつて、奥へ入る。

新左　今の詞の端々と云ひ、思はぬ合力。正しく京都にて御出生ありし、京の次郎祐俊さまではあるまいか。

しげ　サア、わたしも常々お前のお話しに聞いたゆゑ、大方その京の次郎さまと思はるゝわいなア。

新左　時に最前から爰に居たれば、少と並木の方へ行かうではあるまいか。

しげ　それがようござんす。危ないぞえ。後はわたしが片付ける程に、マア、先へお出でなさんせ。

ト新左衛門、編笠を手に持ち、花道へかゝる。おしげ、片付けて居る。此うち、辻打ちになり、向うより、山形屋儀平次、親仁、羽織着流しにて、長き煙管を脊負ひ出て來る。新左衛門を見付け

儀平　イヤア、こなたは鬼王ぢやアないか。

新左　儀平次どのか。

ト笠をかぶる。

儀平　これサ／＼、鬼王、隱れる事はない。お主に逢ひたくつて一遍尋ねて居た。よい所で逢つた。マア／＼。

ト新左衛門を引廻す。おしげ、その手に縋つて

しげ　モシ／＼、これはマア旦那様、父さんをどうなされまする。

儀平　イヤ、わりやアおしげだな。われにも好い所で逢つた。コレヤイ、七ツの時からこの山形屋儀平次の所へ年季奉公。おれに足手を伸ばさせて、一人歩きのなるやうになると、禮奉公も勤めずに、去年の暮に親仁が眼病を云ひたてに、無理に暇を取つたが、主の罰と云ふものは怖いもの。その態で居やうより、なぜおれが所に奉公を

せない。なぜ無理暇を取つたよ〳〵。

しげ　段々のお腹立ちは、御尤もでござりまするが、七ツの時から去年の暮まで、十年の年季奉公。これまでの御恩は忘れは致しませぬ、御覽じまする通り、父さんの眼病、御存知の通り只今では、曾我にも居られませねば、誰れあつて看病いたす者もござりませぬゆゑ、お暇を頂きましたも、父さんの御看病が致したさの儘。お腹立ちの所は幾重にも、お免しなされて下さりませい。

新左　只今娘が申しまする通り、七ツの年から御奉公いたし、當年で丁度十七になりまする。これまでの御恩の程、有り難いやら勿體ないやら、疎かに存じまする、新左衞門でもござりませぬ。御存知の通り、曾我中村の成行き、お前樣にお隱し申す事はござりませぬが、とんと取りつづきが致されませぬ。それゆゑ女房月小夜を、御老母樣の御介抱に殘し、私しは去年の秋過より、曾我を立退き、この誓願寺店あたりに裏借家を致し、瘦浪人のその日過ぎ。それにお聞きなされませ。去年冬から流行り眼に取りつかれまして、難儀いたしまする。それゆゑ娘めが見兼ねまして、舊冬お止めなさるゝを、無理にお暇を取りましたが、右の仕合せでござりまする。ソレ〳〵、其所へ出て、旦那樣にお詫び申しや〳〵。

しげ　お聞きなされまする通り、全くあなたを粗末と存じましての事ではござりませぬ。父さんの御介抱が致したさの儘。幾重にもお免しなされて下されませい。

儀平　さう聞けば尤もらしい。無理暇の譯はそれでも濟むが、新左衞門どの、ちつと氣の毒な事が出來たわえ。

新左　そりや、如何やうな儀でござりまする。

儀平　先達て娘を奉公に寄越した緣を以て、わしが所へ三百兩の質物に置かしつた、逆澤瀉の鎧。疾に月は切れてしまつた。こなたの方へ催促やれば、今日の明日のと云つて利上げもせず、また腹は立たつしやるな。袖乞ひの身で三百兩と云ふ金の出來やう筈もない。と云つてあの質物を置かれては、三百兩棒に振らにやアならない。そこでわしが、外に望み手はあるまいかと、脇を聞き立てたれば、鎌倉のさるお方、三百兩の元利金揃へて、お求めなされたいとの事だて。そこで今日は、わしもこなたに逢つて、この渡りを付けやうと思つて來ましたワ。いよいよ逆澤瀉の鎧は、三百兩で外へ賣り渡しまする程に、さう思つて下され。

新左　段々御尤もでござりまする。畢竟、娘が御奉公いた

して居るを御覧に、餘儀ない御無心。疾に月は切れて居りまするを、只今までお差留め下されまするは、千萬忝なう存じまする。さりながら、今更あの鎧を人手へ渡しましては、鬼王めはどうも立ちませぬと、申し譯は御存知でもござりませう。主人祐成が廓通ひの揚げ錢が、積り積りて三百兩。廓の掟と桶伏せの御難儀。老母はこれを苦勞に思し召され、コリヤ鬼王、弟めは知る通りの不孝な奴、河津どのゝ菩提の爲、出家させよと箱根山へ登せたれば、いつの程にか下山なし、師の坊のお腹立ち、滿江が義も立たぬゆゑと、勘當なした時宗、力に思ふは祐成ばかりと、思ふ甲斐なき廓通ひ。この頃は揚錢のたたまりゆゑ、桶伏せとやらになつて居るとの風聞。いよいよそれに違ひはないか、コレ鬼王、河津どのには死別れ、時宗は勘當する、兄は兄とて生別れ、此やうな因果な者も世にあらうか、つく〳〵思へば思ふ程、おりやこの頃は夜の目も碌に合はされぬと、この鬼王が布子の袖に縋り、疊を叩いての御述懷。お年の上の御苦勞と、當座遁がれの心安めに、お氣遣ひ遊ばされまするな、鬼王めが三百兩の金拵らへ、若旦那の御難儀を救ひまする、必らず御苦勞になされまするなと、間に合ひ口を誠と思し召してやら、そんなら其方を頼んだぞと、好い氣にしてくれよ、おりや看經しようと佛間へござる後影、見る目が開いて居られませうか。御膳棚片隅で、手を組んで思案しても、三百兩と云ふ大金と云ひ、差當り祐成さまの御難儀、ハテどうがなと、思ひついた逆澤瀉の鎧、三百兩の質物にお頼み申し、その金を以て若旦那の御難儀を救ひました、とは申すものゝ、逆澤瀉の鎧質物に入れしは、鬼王が一存で致した事、今さら人手へ渡りましてはどうも私しが武士が立ちませぬ。長うとは申しませぬ、もう一月、それがならずば、せめて十日なりと、どうぞお待ちなされて、モシ、お願ひでござりまする〳〵。

儀平　これサ〳〵、鬼王どの、ア、喧ましい。其やうに明日の明後日のと、いくら騙されたと思はつしやる。たんでも先のお屋敷は、明日の朝金を持つてござる約束だ。それともこなたの方で、今宵中に三百兩、元利揃へて持つてござれば、元主の貴様へ渡す。それが出來ねば外へ渡しますから、さう思はつしやい〳〵。

し げ　旦那様、段々お腹立ち、御尤もでござりまする。只さへお腹が立つてお出でなさるに、私しが申しまするは異なものでござりますれど、只今お聞きの通り、その鎧

が外へ渡りましては、いとしや父さんは、重ねて曾我へも歸られず、人一人をお助けなさると思し召されましてどうぞ四五日、旦那樣、モシ〱。

儀平　エヽうるさい。旦那々々と、あんまりふかしてくれるな。強飯じやあるまいし。四五日はさて措き、明日の晝までも待ちはせぬ。カア〱と一緒に夜が明けると、先樣へ賣り渡す。

　ト行かうとする。兩人、縋つて

しげ　マア〱、お待ちなされて下さりませ。左樣なら明後日まで、お待ちなされて

儀平　イヤ〱、今云ふ通りだ。夜が明けると外へ渡すよ、斷わつたよ〱。

新左　モシ〱、其やうに仰しやりますするな。まだ御相談もござりまする譯に、ちよつと奧山までお出でなされて下さりませい。

儀平　なんだ、奧山へ行つてくれろ。相談の出來る事なら、何所までも行かう。サア〱、ござい〱。

　ト無理に新左衞門を引立てる。

しげ　危なうござりまする。其やうになされずとも

　ト取りつくおしげを突き飛ばし

儀平　サア、ござれ〱。

新左　ちよつと刀を帶しませう。

儀平　刀も何も要らうかい。サア、來やれ〱。

　ト辻打ちになり、儀平次、新左衞門を引摺つて奧へ入る。おしげ、後より行かうとする。市郎兵衞、淸七、出て來る。奧へ行きたがるおしげを無理に引留める。淸七、銚子杯を持つて出て

市郎　こりやアえいやア、お娘の所へ行かう〱。

しげ　マア〱、お放しなされて下さりませい。私しはちつと急な用事が出來まして、マア〱、爰をお放しなされて。

市郎　エヽ、醉つたと思つて、そもじは逃げるのか。なんでも話さにやならない〱。

しげ　そんならその御用を、ちよつとお話しなされて下さりませい。

市郎　こりやア、お前、聞く氣だの。

しげ　ハイ〱、どうかお話しなされませ。

　トおしげ困るこなし。市郎兵衞、しなだれる思ひ入れ。淸七、床几に腰をかけて無性に呑みながら、これを見て

清七　さばけるな〳〵。

しげ　モシ〳〵、お話しなされたいとは、なんでござりまする。早う仰しやつて下さりませい。

市郎　話したいとは頼みでえす。そもじは爰に何をして居た。

しげ　先刻にから、父さんのお側に居りましたわいなア。

市郎　ハヽア、浪人は去なれたな。これでは一人話せるわえ。コレ〳〵息子、お娘にさし給へ〳〵。

清七　オツと心得た。ちよつとお娘、相をしてくれる氣は中諸か〳〵。

市郎　オツと、ありはし〳〵。

清七　おきやアがれ。てまへではないわえ。サア〳〵お娘。

しげ　ハイ、有り難うござりまするが、わたしは酒は下さりませぬ。

市郎　ハテ、さう云はずに呑みなさいな。おれが助けるわな〳〵。

しげ　これはお慮外でござりまする。

市郎　なにサお前。

清七　うまいな〳〵。その上へ注ぎ足してやらう。

ト及び腰に酌をする。この時また財布の金、懐よりドドる。

市郎　コレ〳〵息子、ありやア金ぢやアないか。

清七　かの字サ。

市郎　よく藏つて置かしやりませ。

ト杯を清七へさす。おしげ、この金を見て、キッと思ひ入れにて

しげ　わたしがお酌いたしませう。

清七　これはお憚りだの。

しげ　モシエ、お前樣の最前仰しやるには、廓のお方のやうに仰しやりましたが、いよ〳〵左樣でござりまするかえ。

清七　マア、そんなものサ。

しげ　そんならお前に承りませう。廓の女郎さん方になるには歌を詠んだり、手をよう書いたり、琴三味線に達して、酒も強くて、そしてアノ、美しうなければ、その女郎さん方にはなられませぬかえ。

清七　そりやアナニハヤ、覺えて居た程の事はないが、それなしでも隨分出來る事サ。

しげ　そんなら其やうな事を知らいでも、だんないかえ。

市郎　てまへ、味な事を聞くが、女郎にでもなりたいか。

しげ　サア、わたしはちつとした事で、アノ金の要る事がござんすが、どうもマア、わたしがやうな不束な者が、どうしてマア。

清七　いきやすぞえ〳〵。其所にござる市郎兵衛さんは知つてだが、五丁町の内でもおらの内は、いつち勤めよい内サ。ナア市の字。

市郎　それ〳〵、マア、大磯屋と云つて名が大きい。新造禿を集めたら五百人もあるべい。先づ朝は倦きる程寝て不承々々に起きて、湯へ入つて放れず、莨入れと煙草は何時でも人の物。ちつと惠比壽講に給仕に出る時、氣が詰まるばかり。草履袖は斷わりなし、大きな聲で呼びつけて質を置く。モウ〳〵、女郎程氣散じなものはないよ。

しげ　そんならわたしは、父さんの爲に、その勤め奉公がしたいものぢやが、なんと、お抱へなされては下さんすまいか。

清七　そりやハヤ、隨分抱へまいものでもないが、親御達は合點か。

しげ　主の爲にする奉公。後で聞かしやんしたとて、わたしが好いやうに申しませう。

清七　それにしても、相談相手がなければなるまい。

しげ　その相談相手はお前、好いやうにして下されませい。

市郎　成る程、男と見掛けて頼まれて、引かれもしまい。てまへも袖乞をして居やうよりは、それも増しと、又おれも世話にして、大磯屋へやつて置けば、思ひらなしに願ひも叶ふと云ふものぢやが、そのマア入用の金は、どの位だ。

しげ　サア、わたしが方の入用は、たんとぢやけれど、それも、お前好いやうにして下さんせいな。

市郎　息子、どうか相談が出來さうだが、主の思ひ入れはどう云ふ山だ。

清七　マア、この位さの。斯う云つた所だわえ。

ト袂の内にて思ひ入れする。市郎兵衛、呑み込み

市郎　成る程〳〵。コレ〳〵お娘、其方の望みはどの位だ。爰になつて遠慮は要らぬ。ちつとも力になつてやりたい。

しげ　サア、父さんの入用は、三百兩とやら云ふ事でござんした。

清七　コレ／＼市の字、それではちつと腹が違ふわえ。
市郎　ハテ、ようごんすわえ。マア、一つ呑まんせ。酌をしや／＼。
しげ　アイ／＼。
ト酌をする。清七、無性に呑んで醉ひたるこなし。
清七　全體この子は、疾からおれが目掛けて居たよ。市坊よいかな／＼。金は爰にあるわさ、小判で丁度三百兩。マア／＼、一つたべよう／＼。
ト首に掛けたる財布を側に置き、酒を呑む。
市郎　さうサ／＼三百兩や千兩は、めくりにも負けるわサ。
しげ　そんならいよ／＼、お抱へなされて下さんすか。
清七　さうサ／＼、相談は出來山々々々。
ト最前より後へ黑岩武兵衛、出かゝり居て、財布の金と石と入れ替へて奥へ入る。
しげ　そんならお抱へなされて。エゝ。有り難うござりまする。昨日までも今日までも、お側で御介抱と、思ひの外の今日の御難儀。わたしや悲しい奉公に參りまする。常々お前の仰しやるには、袖乞ひしても盜みせぬとのお詞を、餘所事には承りませぬが、御老母樣のお心安めと思し召して、お免しなされて下さりませい……わたしとした事が、どのやうに思うても返らぬ事。これからモウ思ひ直すがようござんすなア。
市郎　唐天竺へ行くではなし、其やうに思はぬがよいわいの。
しげ　それでもちよつと父さんに……幸ひなこの硯。それそれ。
ト合ひ方になり、おしげ、鼻紙へ書置を書くこなし。
世の中に、悲しい勤めをさんす程のお身の上に、義理のないお方もござんすまいが、わたし程因果な身の上があらうか。七つの年より他人の手汐にかゝり、去年の冬から父さんのお側に居て、嬉しい事ぢやと思ひの外、始めて聞いたる今日の御難儀。わたしやお前に話さずに、廓とやらへ參りまする程に、必らず後でお叱りなされて下さんすな。申したい事はたんとござんすが、お顏を見ては申されませぬ。必らずお目の惡いに、怪我ばしなされて下さんすなえ。
ト思ひ入れ。
市郎　ハテ、思ひ切りのよいやうでも惡い。どうで證文する時には、親仁どのにも逢はにやならない。きな／＼

思はないがよい。
清七　市郎兵衛どの、證文して今渡さうではないか。
市郎　ハテ、あの子の方では今要る金、爰から直ぐにこの子を連れて行つたなら、證文は日を見てしてもようごんすわいの。
清七　成る程、それもさうかえ。サア〳〵、約束の三百兩。渡すから、もうおれが奉公人だよ。
しげ　アイ〳〵。
　ト金と書置を持つて
そんならお供を致しませうが、ちよつとマアこれを父さんに渡しまして。
　ト奥を見ると、おみち出て來る。
みち　市郎兵衛さん、お前方はまだ爰にかいなア。
しげ　ほんにお前さんは、よい所へお出でなさんした。ちよつとお頼み申したい事がござりまする。お慮外ながらこの二品を、わたしが父さんへお屆けなされて下さりませい。どうぞお頼み申しまするわいなア。
みち　アイ〳〵、心得ました。
　ト取つて財布を探り
この中は慥かに

市郎　この子の身の代三百兩。
みち　そんならお前はアノ廓へ。
しげ　アイ、おさらばでござりまする。
みち　アノ、お前の心一つで。
しげ　委細は文に。お屆けなされて下さりませい。
みち　心得ました。
清七　コレ〳〵おみち、次手に裏門の四つ手を一挺、寄越してくりや。頼むぞよ〳〵。
みち　アイ〳〵。
　ト二品を受取り、おみち、奥へ入る。
市郎　サア〳〵、親仁に逢つては却つて惡からう。清公さんと一緒に早う行きや。おれも後から行て逢はう。
　ト此うち、四つ手駕籠を持つて來る。
オイ、駕籠の衆、この子を乘せて大門まで行くのだ。
しげ　そんならお前は、後からお出でなされて下されませいなア。
市郎　斯う云ふうちも親仁が來れば惡い。早う行きや行きや。
　トおしげを無理に駕籠に乘せる。
しげ　アイ〳〵。

市鳥　サア〳〵、駕籠の衆、やつて下さい〳〵。
　　ト辻打ちになり、おしげ、駕籠に乘り、淸七、付いて
　　花道へ入る。
ハテ、よくしたものだ。なんでも、あれを大磯屋へやつ
て置けば、日頃の願ひも……それと、武兵衛に逢ひたい
ものぢやが。
　　ト時の捨て鐘になり、奧より武兵衛、儀平次、最前の
　　藁苞を持つて出る。
儀平　これは夢の市郎兵衛どの。
市郎　山形屋儀平次どの、武兵衛どのと連れ立つてお樂し
みな。
武兵　市郎兵衛、聞いてくりやれ。お主もおれも、困つた
事が出來て來たわえ。
市郎　そりやア奇怪だ。なんの事でごんす。
儀平　武兵衛どのには今、奧山で話しましたが、外の事で
もござらぬ。いつぞや二人から預かつた友切丸の事。そ
れはそれは御詮議が強くて、わしが方に預かつて置いて
は、どうも心元ないに依つて、二人立會ひの上、渡さうと
思つて、持つて來ましたサア〳〵、受取つて下さい〳〵。
　　ト藁苞より友切丸を出し、武兵衛に渡す。

武兵　成る程、しつかりと受取りましたが、市郎兵衛や、
主が方へ預かつちやアくれまいか。
市郎　おれが預かつて居てもよけれど、それより矢ッ張り、
ソレナ、儀平次どのに頼んで。
儀平　これサ〳〵、それが嫌ぢやに依つて戻しに來ました。
逆澤瀉の鎧の日延べで、うるさくつてなるものぢやアご
ざらぬから、わしやアもう歸りまする。彼の品は二人へ
キッと戻しましたよ。ヤレ〳〵、これで落ちついたぞ。
　　ト儀平次、捨ぜりふにて向うへ入る。
武兵　ハテ、氣の狹い奴でござるわえ。時に、斯う云ふう
ちにも人目にかゝつちやア惡い。市郎兵衛、お主、差し
てくりやれな。
市郎　ドレ、爰へ寄越さつしやい。成る程、心遣ひなもの
だわえ。
　　ト市郎兵衛、一腰を差す。ト奧より、お役人様ぢや
　　お役人様ぢやと云ふ。これにて市郎兵衛、友切丸を懷
　　へ隱して思ひ入れ。奧より、藤明きの侍ひ、町人付い
　　て出る。時の捨て鐘。
侍ひ　コリヤ〳〵、最前の町人武兵衛とやら、其所に居る
は何者だ。

市郎　ハイ、私しは花川戸の町人、夢の市郎兵衞と申す者でござりまする。

供　下に居ろ〳〵。

侍ひ　大方其方も、お觸れの趣き承はつたであらう。何者にもせよ。友切丸を所持いたして居る者を見當り次第、早速に搦め捕り、代官所へ訴へい。キッと申し渡したぞ。

市郎　お觸れの趣き、キッと承知いたしました。

侍ひ　町役人、案内いたせ。

町人　ハッ。

　ト侍ひ皆々向うへ入る。武兵衞、市郎兵衞、殘り

市郎　武兵衞どの、これは其方へ返さうわえ。貴樣の方へ預かつて置いて下さい。

武兵　ハテ、おれは一本きめて居るから、猶目に立つわえ。歸るまで預かつてくりやれな。

市郎　これは迷惑な。首と釣替への預かり物、早く其方へ返したいものサ。そんなら晩に取りに來て下さいよ。

武兵　おれはまだ奥山に用があるから、ちよつと行て來る。

　ト通り神樂になり、武兵衞、奥へ入る。

市郎　早く來さつしやいよ。おれ獨りでは心細いぞえ。何所ぞへマア隱したい物ぢやが、何所も幸ひな所もなし。ハテ、何としたものであらう。

　ト矢張り通り神樂にて、あたりを見廻し、最前新左衞門が置いて入りし刀を見付け

こいつは好い物があるわえ。こりやア慥か最前の浪人の刀。よい仕樣があるぞ。

　ト煙管にてこの刀の目釘を同じく友切丸の目釘とも拔いて白刃を入れ替へ、友切丸の拵らへを取集め、捨てある藁苞に包み、茶見世の床の下へ蹴込んで

これでよい〳〵。よもやこれでは誰れも氣が付くまいす。

新左　おしげやい〳〵〳〵。

　ト聲するゆゑ、市郎兵衞、うろたへて刀を差して居る。奥より、新左衞門、財布と書置を持つて、おしげを尋ねながら出て來り、刀を探す思ひ入れにて、あたりを見廻し、市郎兵衞が差して居る刀を見付け、これを沒義道に取りにかゝる。屋體囃子の鳴り物になり、市郎兵衞やるまいとするを無理に引ッたくつて、新左衞門腰に帶し、一散に花道へ入る。後に市郎兵衞、呆れて立つて居る。奥より、武兵衞、出て

武兵　市郎兵衛どの、コレサ市郎兵衛、お主は何を其やうに、うつかりと立つて居るのだ。
市郎　武兵衛どの、お身樣の手から預かつた友切丸を、たつた今、取られました。
武兵　ヤア。そりや又誰れに。
市郎　彼の袖乞ひの浪人めに。
武兵　遠くは行くまい。追ツかけろ。
市郎　合點だ。
ト時の捨て鐘にて、市郎兵衛、一散に花道へ追つて入る。
武兵　エヽ、大方市郎兵衛めは又、喰ひ醉つて居るであんべい。どうぞ取返してくれればよいが。時に、最前思はず手に入りしこの金。
ト財布を出して
正しくこれが浪人の、娘の身の代金三百兩。忝ない。
ト最前より、おみち、後へ出かゝり居て
みち　さては。
ト武兵衛、思ひ入れして
武兵　わりやア茶店の姐えだな。
みち　アイ。
武兵　なんと、今のを見たであらう。
みち　アイ、イ、エ。
武兵　何も見も聞きもしない。そんならよい。早く行きや。
みち　アイ、武兵衛さん、これに。
ト行かうとする。武兵衛、拔打ちに浴びせる。忍び手、時の捨て鐘。武兵衛、おみちを酷く殺し、止めを刺し、脇差を納めて、行かうとする。奥より、小五郎兵衛、小提灯を下げ出て來り、おみちが死骸を見付けて
小五　ヤア／＼、こりやアおみちぢやないか。何意趣あつて無理殺し。最早縡切れたか。
ト疵を檢めながら、側に落ちてある袱紗に色鳥の書の矢の根を取上げ
この矢の根は。
武兵　それは。
トかゝる。小五郎兵衛、提灯を差出す。武兵衛、これを切り落し、兩人、烈しき立廻りあつて、好き見得をキツカケに、チヨン／＼。
拍子幕

大切　大磯屋の場

役名──鶏大盡慶政 實ハ近藤七國平。男達、梅澤の小五郎兵衛 實ハ京の次郎祐友。傾城、喜瀬川 實ハ佐藤忠信娘信夫。禿、春野 實ハ義經の公達經若丸。傾城、花町。同、花の井。同、花岸。同、龜菊。同、若梅。同、小動。同、三淮幡。同、雛松。化粧坂の少將。くめん十兵衛。おとがいの長。こみつの小兵衛。大磯屋清七。若い者、庄二郎。同、久助。子分、喜助。黒雲武兵衛 實ハ童の菊王。樽拾ひ三吉。山形屋儀平次。遣り手、お浦。禿、胡蝶。同、早苗。男達、揚羽の長吉 實ハ曾我五郎時宗。新造、重の井 實ハ鬼王娘、おしげ。鬼王新左衛門。男達、夢の市郎兵衛、實ハ姉輪の平次。

本舞臺、三間の間、大磯屋の格子先、暖簾口、吉原のやうに仕立て、誰哉行燈、水溜桶、蔀の内、長床几に毛氈掛け、これに、清七、亭主の形。花岸、花町、花の井、何れも襠衣裳、女郎の形。くめん十兵衛、おとがいの長、男達の形にて、舞臺先に緞子の枕を土俵にして、この中に鶏を合せて居る。籠に入れたる鶏に松を付けて三羽づゝ振分け、白囃子に清搔をかぶせて弾いて居る。幕明くと、鶏合せる事あり

十兵　ごいしが勝つた〳〵。

長　逃げたがよい〳〵。

ト引分けて又合せるうち、向うより花松屋庄二郎、若い者にて提灯をさげて出る。後より慶政、鶏大盡の形にて出て來る。小動、若梅、手越、龜菊、何れも女郎の形にて付いて出る。こみつの小兵衛、やつしにて、あぶら鳥を一羽抱へて出て、花道の中程にて

小兵　モシ〳〵、旦那、今日鶏合せの御趣向、どうも云へたものではござりませぬ。

慶政　さう云はれたさに、鶏大盡慶政が思ひ付き。定めて仲の町からも、揚屋町からも、鶏を持つて來るであらうな。

小動　そりやア來いでわいなア。名にしおふ鶏大盡さまの思ひ付きぢやもの、我れも〳〵と競合うて、夥しい事ぢやわいなア。

亀菊　ほんに、お前に目があるなら、此やうな賑はしい事を、お目にかけたいわいなア。

手遊　それ〳〵、見ぬ戀にばかり憧れて、思へば見ぬ鳥にも、氣を揉んでおやわいなア。

若梅　サイナア、儘ならぬ浮世とは、よう云うたものぢやわいなア。

四人　ホヽ、笑止。

庄二　モシ、どうでござりまする。めりやすの文句に、なんとあらうとも、儘になるのが浮世の色事、御眞實さへ見えますれば、鶏大盡さまのお心任せでござりまする。

小兵　それ〳〵、高が君をば身請けの相談。先づ〳〵向うの床几へお出でなされませい。

皆々　待ちかけ山でござりまする。

慶政　待ちかけ山とは有り難い。サア〳〵、みんな來れ。

皆々　サア、ござんせいなア。

ト騒ぎになり、皆々本舞臺へ來て、床几にかゝる。

清七　これは鶏大盡さまには、お早い事でござりました。先づ〳〵この床几へ〳〵。

皆々　待つて居たわいなア。

慶政　取分け今日は、待つて居られて嬉しい、鶏合せの趣向。揚羽の長吉とやらに、屈託して居る化粧坂の少將、何卒我れらが手に入れんと思ひついた鶏合せ。どちらなりとも勝つた方へ身を任せんとのみことのり。三月三日に倣らへ、鬪鶏の戯むれ。なんと有り難い事ぢやアないか。

十兵　有り難いと思へば、うそ十兵衞を始め、小みつ小兵衞、おとがひの長を始めとして、御前へ相勤め罷りあります。

長　斯うした好い日の出る鶏大盡を袖にして、否だの應だのと吐かしやアがる、女郎の氣が知りたい。

小兵　それ〳〵、おらが旦那を褒めるぢやないが、達引があつて金遣ひが荒いワ。今日も今日とて鶏合せの趣向が濟むと、齋宮太夫の淨瑠璃を聞かうと思つて、十兵衞に齋宮を連れて來やれと、約束をして置いたも、みんなに嬉しがらせうと思つての事よ。

庄二　そりやア有り難うござりまする。斯う云ふ所へてんつゝで出にならうとは、よく云ふ奴サ。ヤア、その舌も乾かぬうち、仲の町の方から市郎兵衞さんが、お出でなされまするぞえ。

皆々　ドレ〳〵……ほんになア。

ト清掻になり、花道より、市郎兵衞、やつし羽織衣裳細輪の中に、三つ柏の紋付けたる提灯提げ出て來る。後より、齋宮太夫、羽織袴の形にて出て、直ぐに舞臺へ來る。

皆々　市郎兵衞さん、ござんしたかえ。

市郎　凡そ市郎兵衞と云ふ名も、百萬人もあらうけれども、口と心とこれ程も違はぬ、男の中で男と云はるゝ夢の市郎兵衞、強い奴程此方に意地の出來ると云ふが、魂ひの据つたところ。今日鷄大盡の鷄合せの趣向、もしもの事があつた時に、引けになると云うて頼まれて來ました、この市郎兵衞を合せて、勝つた方へ化粧坂の。萬々一負けても、市郎兵衞が負かせはせまいと、落ちついてごんせ〳〵。

慶政　その大丈夫な所を見込んで、頼んだはこの慶政。芝居の若君ではないが、其方をよいやうに頼んだぞや。

市郎　呑み込んで居ますわいの。

十兵　若君と云へば、五丁町のうちに、義經の公達經若丸どのとやら、隱れて居ると云ふ噂でごんすぞえ。

長　そればかりぢやアない、友切丸の刀が、箱根で失くなつたゆゑ、詮議が嚴しくあると云ひまするぞえ。

小兵　そんなら義經の公達友切丸と、箱根で經若丸が失くなつたかの。

長　なにサ、義經の公達が經若丸、失くなつたのが友切丸サ。

小兵　今のはおれが粗忽サ。

庄二　久しいものだ。

慶政　久しいものと云へば、お七の淨瑠璃、いよ〳〵齋宮は來る筈かの。

市郎　モシ、この中茅場町の日待で、約束して置きましたに依つて、わしより先へ富士見町のきくとじが所へ來て待つて居たのを、直ぐに連れて來たでごんす。

齋宮　大盡樣、御機嫌ようござります。

慶政　エ、有り難い〳〵。

皆々　早う聽きたいものぢやなア。

ト花道にて、喧嘩々々と人聲する。とバタ〳〵にて、喜助、やつしの形にて下駄を持ち、額より血の流れたるを手拭にて縛り、駈けて出て來る。

皆々　どうした〳〵。

喜助　聞いてくりやれ。揚羽の長吉に仲の町で出ツくはして、少將が事を一つ二つ云ふと、喧嘩になつて、たうと

うおれが顔を尺八でぶッ裂いたが、これぢやア喜助が立たぬ。友達のよしみに、立てゝくりやれ〳〵。

十兵　合點だ〳〵。

清七　モシ〳〵、仲の町に喧嘩があるさうでござります。マア〳〵、齋宮さん、此方へお出で〳〵。

ト清七、齋宮太夫、女郎四人、下座へ入る。喧嘩々々と口々に云ひ、清搔になり、花道より若い者三人、棒を振り上げ出る。後より、揚羽の長吉、着流し頰冠りにて一本差し、下駄がけにて、腰に尺八を差し、懷手にて出て來る。後より、若い者三人、同じく棒を振り上げて出て來る。

若者　ソレ、合點か。

大勢　合點だ。

ト棒を振り上げる。

長吉　その棒を振り上げて、この長吉をどうせうと思ふ。コレヤイ、その六尺棒の一分でも、おれが體へ觸るが最後、うぬらが五尺の體を、大地へ三尺踏み込むぞ。

皆々　イヤア。

長吉　キリ〳〵棒を引きやアがれ。

若者　面倒な、ソレ、棒伏せにしろ。

皆々　合點だ。

ト棒伏せにせうとかゝる。尺八拔いて叩き散らし、皆皆を花道へ追ひ込む。ト女形、側へ寄つて

小勘　コレナア長吉さん、大概にさんせいなア。

龜菊　もうよいわいなア。

手越　早う此方へござんせいなア。

長吉　誰れだと思ふ、揚羽の長吉だぞ。うぬらにけちを付けられて、この吉原へ來られるものか。ア、つがもない。

女皆　もうよいわいなア。

長吉　こりやア、お揃ひなされて留めさつしやるに、長追ひする事もない。さらば其所らへ分け込むべいか。

女皆　サア、ござんせいなア。

ト清搔になり、長吉、下座の床几へかける。煙草吸ひつけて出す。

清七　長吉さん、お早うお出でなされました。

慶政　市郎兵衞、ソレ、長吉とやらが來たではないか。

市郎　長吉とやら云ふ奴も、吉原の内にごんすかの。

慶政　それだ、揚羽の長吉。

市郎　わしやついぞそんな奴に、出會つた事がござんせ

ぬ。
皆々　そんたら長吉を知らつしやらぬか。
市郎　先づこの五町のうちでも、達引の好い譯知りと云ふは角町のたんこ頭、その手先に付いて居る廓中の通り者に、この市郎兵衛が知らぬ者もない。俠か客か知らねども、法外な味噌を上げると、その分にしちやア置かれぬが、その長吉と云ふ奴は、どつちの方から來る奴だな。
長吉　東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、花のお江戸の眞中から、熱風に吹き立てられ、命の糸目の切れ口から、この廓のそんじよそこらへ、落ちかゝつたる三升凧。御贔屓の張りを後楯に、揚羽の長吉と云ふ前髪立ち。この吉原から顔見世にやア、幕まで貰つた者でごんす。可愛がつてくんなさい。
市郎　ドレ、しやツ面を見てくれべい。
慶政　さうだ〳〵。
ト市郎兵衛、長吉が顔を見て思ひ入れ。
市郎　この市郎兵衛が側へ……寄るには及ばぬ。コレヤイ、この餓鬼めに甘酒でも嘗めさせろ。
慶政　さうだ〳〵。
市郎　十兵衛も小兵衛も、何をウロ〳〵してけつかる事がある。其所へ出て、喜助が立つやうにしてやれ〳〵。
十兵　合點でごんす。喜助、其所へ出ろ。
喜助　ドレ〳〵、其所へ出べいか。
小兵　ヤイ、わツぱしめ、どう云ふ事で、これが額を、その火吹竹で叩き壞した。
十兵　その代りにやア、うぬがしやツ額を、爰へ出しやアがれ。これだけの事をせにやアならぬ。相手になれ。喜助、氣遣ひするな。われが骨は、おれが拾つてやるべい。
喜助　ア、口惜しい〳〵。
皆々　サア、相手になれ〳〵。
長吉　わいらにこの長吉が手を下ろすものか。とても喧嘩をする位なら、夢の市郎兵衛とやらに近付きになるべい。
十兵　アレ〳〵、近付きにならうと云ひまするぞえ。
市郎　なんだ、近付きにならうと云ひまするぞえ。
三人　それ〳〵、身を知らぬ奴でごんす。
市郎　わいらが知つた事ぢやない。死んだやうにして居ろ。怖い事はないワ〳〵。
慶政　てもさても氣味のよい。

市郎　コリヤヤイ、この夢の市郎兵衞の、夢と云ふ異名を知らぬか。人間僅か五十年の、浮世は夢と思ひ切つて、たつた今でも死ぬる事をいとはぬ男の一徹。云ひ出した事を五厘でも後へ引かぬ市郎兵衞。惡い者を相手にするぞよ。

長吉　そりやア此方から願ふ所でごんす。木挽町の幕で又御見もじもない市郎兵衞どの、揚羽の長吉が近附きになりますべい。

小兵　コレヤイ、おらの親分に近付きにならうと、心安立て、措きにしやアがれ。うぬにはおれ樣が相應だ。主を相手にすべいとは、それこそほんに途方もない。

市郎　いつその事に、疊んでしまへ。

皆々　合點だ。

ト　かゝる。見事に投げる。市郎兵衞にかゝらうとする。市郎兵衞、慶政を襷に取つて

市郎　なんだ／＼。うぬが騒いだと云つて、びつくりともする市郎兵衞ぢやアないぞ。

長吉　相手になれ／＼。

小兵　ソレ、長吉を、合點か。

皆々　動きやアがるな。

ト向うにて

少將　待つた。

皆々　待てとは。

少將　喧嘩の樣子は知らねども、化粧坂の少將が留めやんした。皆さん、待つておくれたア。

ト鳴り物入りの出門になり、花道より、若い者、結綿の提灯を下げて出る。少將、裲襠衣裳、駒下駄。禿胡蝶、春野、後より、傾城三津橘、雛松、前流し、抱へ帶、駒下駄、煙管莨入れ持ち出る。遣り手一人付いて出る。花道にとまり

春野　申し太夫さん、また鶏犬盡がござんして、無理な事を云はんせうぞえ。

胡蝶　長吉さんが腹を立てさんせうぞえ。

兩人　オヽ、笑止。

遣手　又か／＼、久しいものだ。つべこべ口をきくと、えらい目に遭はすぞや。

若者　コレナア、こんたも其やうな大きな聲をせぬがよい。おいらがの外聞が惡いがよ。

雛松　さうぢやわいな。怖い顏するがきつい好き。

三津　ほんに、ちつと二十六夜でも拜んだがよいわいな。

春野　それぢやに依つて、皆が熊鷹と云ふわいなア。

三人　オヽ、辛氣。

遣手　いつその事、熊鷹と云はれ次手に、その口を引ッ裂いて上げ申さう。

三人　オヽ、怖。

少將　怖いと云ふも癖ながら、今日はしみ〴〵少將が、紅葉を顏に化粧坂。見れば縺れた喧嘩沙汰、貰ひにこれまで出船の、舳御げんの不束者。もしやお叱りを受けうかと、胸はわく〳〵氣もそゞろ。いつその事に、みんなおぢや。

皆々　アイ〳〵。

ト清掻になり、皆々本舞臺へ來る。

皆々　少將さん、ござんしたかえ。

少將　皆さん、お早かつたなア。

慶政　ヤレ少將か、待ち兼ねた〳〵。今日はそもじが身請けの相談。揚羽の長吉にくッ付いて、なか〳〵苦勞苦患をするが、この鷄大盡に身を任せ、小判で拵らへた富士の山を見るは、どうです〳〵。

長吉　夢の市郎兵衞、揚羽の長吉が相手になれ。

少將　なんぢやいな長吉さん、少將が來たわいな。なんにも云ふ事はござんせぬ。わたしがお前に逢ひ遂げさへすれば立つではないかえ。

市郎　そりやならない。兼ねて約束の通り、少將が鷄と、鷄大盡の鷄と、爰で合せ、勝つた方へどちらなりとも、少將が客サ。

少將　サア、それは。

慶政　嘘をつくのが傾城の商賣と云はせまい爲に、若い者久助、そこへ出て、少將が云つた事を並べろ〳〵。

久助　ハイ〳〵。今日の鷄合せの御趣向は、兼ねて我れらが呑み込み山。どちらなりとも勝山の方へ、少將さんを請出し山。鷄山さんもそのお心。男と瀬戸物は當つて碎けろとござりまする。

慶政　我れらを瀬戸物に譬へ、當つて碎けろとは、出かした〳〵。揚羽の長吉とやら、まだ伊勢町の白玉餅の味も知らいで、この鷄大盡に楯を突くのか。なんでも鷄を合せて勝負したい。少將が身請けは、おれがするぞ。

長吉　こりや面白い。鷄の勝つた方へ、少將は連れて行くぞよ。

少將　サア、例へ長吉さんの方が負けにならうとも、少將が心にあるわいなア。

長吉　さらば見物いたさうか。

小兵　コレ〳〵新造、枕を土俵に拵らへて、鶏大盡の鶏は黒雲と名付けたるこの鶏。

庄二　まつた少將さんの鶏は、梅が香と名付けたるこの鶏。

市郎　勝負次第で少將が身の上。サア〳〵、早く合せた合せた。

女形　合點ぢやわいなア。

ト白囃子になり、女形、土俵を拵らへ、鶏を合せる。

ト、慶政が鶏少將が鶏に勝つて鬨の聲を上げる。

皆々　黒雲が勝つた〳〵。

慶政　サア〳〵、少將、我れらと一緒に、仲の町へお出でお出で。

長吉　待て。例へ黒雲が勝たうとも、少將はこの長吉か相方。どつちへもやる事はならないぞ。

少將　それ〳〵、どのやうな事があつても、この少將は鶏大盡の所へ行く事は嫌ぢやわいなア。

市郎　嫌ぢやと吐かしやア、この夢の市郎兵衛が、腕づくで連れて行くぞよ。

長吉　そりや又どうして。

市郎　斯うして。

ト立廻りあつて

兩人　ドッコイ。

ト見得になる、東西の揚げ幕にて、

小武　待つた。

皆々　待てとは。

武兵　黒雲に依る黒雲武兵衛がおッ留めた。

小五　梅が香に依る梅堀の小五郎兵衛が留めました。

兩人　一番待つてもらひませう。

皆々　ドッコイ。

ト誂らへの出の唄になり、東の方より武兵衛、西の花道より小五郎兵衛、何れも男達の形にて出て來る。東西の中程にとまる。

長吉　合點がゆかぬ。黒雲の武兵衛とやら。

市郎　梅堀の小五郎兵衛とやら、この達引を。

兩人　なぜ留めた。

皆々　どうだ。

武兵　凡そ黒雲々々と、名に立つ雲のこの武兵衛。廓の出入り達引も、我が身の上と白雲の、命の消ゆるを棚にして、罷り出でたる男でごんす。

小五　春雨おくる梅が香に、梅堀からの里通ひ、我れこそ小五郎兵衞なりと、名を月の夜の星見草、命の散るを花にして、罷り出でたる男でごんす。

武兵　聞き及んだる梅堀の小五郎兵衞。黒雲武兵衞が近付きになるべいか。

小五　噂に聞いたる黒雲武兵衞。梅堀小五郎兵衞が知る人になりませうか。

武兵　替つた所で大磯屋の格子先。

小五　待つともなしに待合の

武兵　男を磨く仲の町から

小五　逢ひたい

武兵　見たいと

兩人　樂しんで居ました……さらばお側へ參らうか。

ト清搔になり、兩人、本舞臺へ來る。

市郎　好い所へ黒雲武兵衞どの、サア、これからは鬼に金棒と云つても怖い事はないぞ。

武兵　夢の市郎兵衞、こりやマア、どう云ふ事でごんす。

市郎　高が鷄合せの勝負で、勝つた方へ少將が身を任せんと約束をしたれども、その約束を無茶にして、揚羽の長吉が方へ連れて行かうと云ふから起つた出入り。わしが手先の喜助めも、その長吉に頭を壞されたと云ふものサ。おやに依つて、わしが立たぬ。そこでこの市郎兵衞は、命を捨てゝなりとも

武兵　ようごんす〳〵。

市郎　よいかえ〳〵。

武兵　ようごんす〳〵。黒雲武兵衞が來るからは、何所へ雷が落ちやうとも知れぬと、酒でも呑んで鷄大盡と一緒に、見物してござい。

市郎　サア、これからは黒雲おやぞ〳〵。目の寄る所に大谷廣右衞門友右衞門、二人寄つたら小五郎兵衞とやら、鬼一掴みにならぬうち、早う去ないでか。

小五　怖いこつちや。其方が黒雲ならば、此方は闇雲。喧嘩の相手は闇とせう。幾人でも何人でも、此方はこの小五郎兵衞が、行くまいと云ふなら。

市郎　掴み拉ぐ。

小五　これも凄まじい。

市郎　おきやアがれ。

小五　小五郎兵衞々々々々々々。

小兵　なんだ小五郎兵衞々々々々々々と、洒り憎い木戸おやアあるまいし、この吉原で味噌を上げると、うぬを。

トかゝる。小五郎兵衛、見事に投げる。小兵衛、起き
て
小兵　これで二度だが、どうもない。
喜助　うぬを。
　トかゝる。
小五　どうした。
喜助　氣が狂つたさうな。
小五　揚羽の長吉どの、こなさんの心はどうでごんす。
長吉　化粧坂の少將を、わしが相方にせにやア、ちつと男
が立ち憎うごんす。
少將　お前を好いやうに賴んだぞえ。
小五　ようごんす／＼。わしに任せて置かつしやりませ。
慶政　黒雲武兵衛、この鷄犬臺慶政が、立つやうにしても
らひたい。
武兵　氣遣ひさつしやりまするな。大磯屋の太夫喜瀨川が
身の上の事に付いて、云ひ分のある小五郎兵衛。少將を
わしが貰つて進ぜませう。
慶政　忝ない／＼。
小勳　少將さん、お前は鷄さんの所へ行かしやんすかえ。
女皆　それでは濟むまいぞえ。

小五　よい／＼。何も云ふ事はない。喜瀨川の事に付いて
云ひ分のある黒雲武兵衛。少將はやる事ぢやアない。
武兵　梅翁の小五郎兵衛、大儀ながら、ちよつと其所へ出
てもらはう。
小五　出ろと云はれて斯うしては居られまい。さらばそれ
へ參らう。
市郎　面白い／＼。
武兵　ちよつと下に居てもらひたい。
小五　御亭主方から。
兩人　イザ／＼。
小五　下に居ろと云ふ事ゆゑ、下に居ましたが、武兵衛ど
のゝ用は何でごんす。
武兵　外の事でもないが、化粧坂の少將を、鷄犬臺の方へ
貰つてくりやれ。そればかりおやアない、おれが馴染み
の喜瀨川は、小五郎兵衛が相方さうな。不承ながら切れ
てくりやれ。賴みと云ふはこの事。小五郎兵衛、返事を
しやれ。
小五　たま／＼の御無心だが、少將は揚羽の長吉に、死ぬ
程惚れて居る者を、可哀さうに取持ちこそしやうけれど
貰つてやる事はならない。また喜瀨川が事は、喜瀨川に

逢つての上。三つ鼎で挨拶しやらかえ。
武兵　そんなら返事はならないか。
小五　氣の毒ながら。
武兵　ならざアよい。黒雲武兵衛が眞劍で返事を聞かうか。
小五　面白い。わしも眞劍で挨拶しやらか。
武兵　お身様も眞劍で。
小五　お身様も眞劍で。
武兵　面白い。
小五　サア、拔け。
武兵　合點だ。
ト互ひに拔き合せ切り結び、トゞ武兵衛、小五郎兵衛が腰差しを打ち落し、直ぐに切りつける。その刃物を留めて支へになり
小五　合點のゆかぬ。黒雲武兵衛が一腰に、さも生々しきこの血は。
武兵　サア、それは。
ト振り放す。立廻り。長吉、見兼ね、武兵衛が刃物を引ッたくり、直ぐに武兵衛を手詰めにする。
長吉　黒雲武兵衛、動くとたつた一突きだぞ。

武兵　おれを殺しやア、うなア下手人。くたばりたかア、サア突け、サア殺せ。久しく殺されないに依つて、殺されたいわい。
長吉　くたばりたくば殺してくれべい。
小五　コリヤ〳〵、揚羽の長吉、假初めならぬ身を以て、人を殺めて身が助からうか。急く所でない、早まるまいぞ。
長吉　エヽ、切りたいわえ〳〵。
武兵　切られたいわえ〳〵。
小六　この分で濟まぬ少將が身の上。殊に喜瀬川が事に付き、云ひ分のある黒雲武兵衛。滅多に歸す事はならないぞ。
武兵　此方からわいらを歸す事はならぬワ。この武兵衛が云ひ分も一分も、今夜中に立てゝ見せう。コレヤイ、夢の市郎兵衛、何を其やうにキヨロ〳〵と、狐に化されたやうにして居る事はない。ソレ、そこに脇差や鼻紙袋や下駄や煙草がある程に、爰へ持つて來てくりやれ。何奴が怖くつて後へ寄つて居るのだ。其所へ出やれ出やれ。
市郎　こなたもをかしい事を云はんすわえ。この市郎兵衛の身の上に怖いと云ふ奴があるものでごんすか。一生の

うち怖いと云ふものは、三兩一分と宮の下、遭うた地震より外に覺えぬ男。何奴も此奴も同じ人間。この市郎兵衞が相手になる奴が因果でごんす。ドレ〳〵、脇差も何もかも、わしが其所へ進ぜませう。

ト武兵衞が側へ寄らうとする。長吉、脇差を提げて立つて居る。市郎兵衞、これを見て思ひ入れにて、方々に落ちてある紙入れや煙管を集めて武兵衞に渡し、トド武兵衞が脇差の鞘を取つて、長吉が持つて居る、脇差を取りに寄らうとして思ひ入れあるべし。

武兵　市郎兵衞、脇差はどうだ〳〵。

市郎　合點ぢやわいの〳〵。

皆々　早く見たい〳〵。

市郎　見て置け〳〵。

ト思ひ切つて長吉が側へ寄る。長吉、小物を投げる。市郎兵衞、恟りする。

長吉　キリ〳〵持つてうしやアがれ。

市郎　おれがうしやアがる事を、うぬらに習ふものか。この脇差を渡すまいと吐かしても、見ろ、この市郎兵衞が、その分にしちやア置かぬワ。早く寄越して、其方の仕合せ。アヽつがもない。

ト脇差を鞘へ納め、武兵衞に渡す。武兵衞、取つて立ちかゝる。

小五　喜瀨川が事なら、喜瀨川が座敷で云うたがよいわいの。

武兵　そんなら喜瀨川が座敷で。

小五　如何にも。

武兵　面白い。

市郎　少將が身の上は、鷄合せの勝負次第と、番うた詞反古にはなるまい。

慶政　それ〳〵、今夜中に金渡して、この慶政が請出す。サア〳〵來やれ〳〵。

武兵　色でも戀でも、金の力に叶ふものか。

小五　金盡くでも意地盡くでも、心が買はれるものか。

慶政　金銀の威が強いか。

長吉　廓の意氣地が強いか。

小五　武兵衞。

武兵　小五郎兵衞。

長吉　市郎兵衞。

市郎　長吉。

少將　胸を固めて

皆々　後に逢ふべい。
ト唄になり、皆々思ひ入れして入る。直ぐに時の捨て鐘になり、花道より、新左衛門、序幕の形にて、走つて出て

新左　思ひも依らぬ娘が身の上。三百兩の金の爲に廓の勤めに身を沈めし、その心根は過分なれども、鬼王新左衛門が娘と云ふ事が、世間へ知れては、曾我御兄弟の御名の出る事。是非ない事と思うたばかり。何は兎もあれ、大磯屋へ尋ねて行かずばなるまい。これにつけても友切丸の行くへ、尋ね出して祐信さまの御難儀が、お救ひ申したいものぢやなア。
ト思ひ入れする。ト清掻になり、下座の方より、侍ひ一人、覆面頭巾をかむつて出て來る。これより新左衛門、行き違ひさまにその侍ひの刀を檢め、突き放してやる。侍ひ、膽を潰し

侍ひ　アタ不作法な、侍ひの魂ひを拔いて見ると云ふやうな、不屆きな事があるものか。所が惡いから、その分にして置く。重ねてキッと嗜なみ居れ。
ト花道へ入る。後より、また侍ひ一人、生醉ひのこなしにて出て來る。

侍ひ　山寺の春の夕暮れ。
ト唄ひながら來るを、新左衛門、また刀を拔いて見て返す。侍ひ悔りして

何者なれば慮外千萬な。武士の刀へ手をかけた、相手になれ……と云ふ所を、吉原で腹を立つ場でもないと高麗屋もどきに、山寺の春の夕暮れ。
ト唄ひながら花道へ入る。向うより、山形屋儀平次、序幕の形にて出て來る。新左衛門、儀平次の脇差を見ようとする。その手を留めて

儀平　何者だ〳〵。
ト花道より、樽拾ひの三吉、酒屋の御用の形にて、小提灯を提げて出て來る。新左衛門は儀平次の手を放さうとする。

合點のゆかぬ奴だ。おのれは慥かに泥坊であらう。どうぞ明りがあらば、面なりと見てやりたいものだが。
ト來かゝる三吉が提灯を、儀平次引ツたくつて、新左衛門が顔を見て、悔りして思ひ入れ。

新左　其許は山形屋儀平次どの。
儀平　お身樣は鬼王新左衛門。
ト云ふうち、新左衛門提灯を叩き落し、儀平次を振り

切つて下座へ入る。これに續いて儀平次、三吉も入る
ト騷ぎになり、この道具替る。

本舞臺、三間の間、大磯屋の下座敷の體。東西に二階の體。正面に葭簾をかけ、手水鉢、掛け樋、萩垣石燈籠の飾りつけ、以前の格子を引いて取る。

ト直ぐに若い者久助出て、煙草盆を三つ、上の方へ直して置くうち、慶政、十兵衛、小兵衛、市郎兵衛、出て來る。直ぐに庄二郎、硯蓋、銚子を直す。龜菊、手越若梅、出て來る。煙草盆へ直る。新造重の井、火鉢を直し、煙草を吸ひつけ出す。遣り手お浦、吸ひ物膳を三膳持つて出て、慶政より銘々へ据ゑて

うら　ヤレ／＼、今晩はようお出でなされました。市郎兵衞さん、お出でなされませ。ちとお頂き申しませう。
市郎　それ／＼、時に武兵衞どのゝ、相方は、さして居ると云ふやうな事かな。
久助　お氣の毒でござりまする。
庄二　久助どん、お馴染のお客か。
久助　この間機嫌の惡いお屋敷のお客サ。
十兵　コレ／＼久助、外の者ぢやアあるまい。今夜の喜瀬川が客は、梅堀の小五郎兵衞であんべい。隱す事はない。武兵衞どのはそんな野暮白痴な人ぢやアない。小五郎兵衞が武兵衞どのを、せくと云やれな／＼。
慶政　シタリ、武兵衞は通り者だな。我が惚れて居る女郎に逢はれぬ晩は、胸むしがムッとする所を、料簡して小五郎兵衞に、喜瀬川を出して置く心のうち感心／＼。それに引替へ、この野暮めは、喧ましく云つて、揚羽の長吉に少將を逢はせまいと、絡み散らすこの慶政、目の見えぬだけ、女郎の買ひやうが愚痴だ。
市郎　誰れが笑ふものでござりまする。女郎に惚れたせうがには、隨分喧ましく云つて、少將を側に引きつけて置きなさいませ。
慶政　そんなら不粹と云はれても、相方を側に置くのか。
市郎　眞實が、キッとでござりまするわいの。
慶政　有り難い／＼。
十兵　そんなら小五郎兵衞にせかれる、あの武兵衞どのは眞實がないのか。
小兵　なにサ、せく奴は客、せかれる者は間夫深間。
慶政　そんならせく奴は客か。
小兵　せく奴は眞實サ。

慶政　それぢやアどつちがどうか。
小兵　解らぬかえ。
慶政　解らぬ〳〵。
小兵　これが解つて堪るものか。
皆々　なぜ〳〵。
小兵　ハテサテ、先がみんな色男。紋をつけるにも、三ツ大と三升は、つけ手が多うごんすわいの。
皆々　おきやアがれ。
十兵　おきやアがらずと、杯をこれへ〳〵。
うら　さらばお酌を致しませう。
十兵　これサ、お主が酌で吞めるものか。新造の重の井、爰へ來なさい〳〵。
重の　畏まりました。
うら　コレ〳〵、畏まりましたとは、お屋敷の女中ではあるまいし、ありんすござりんすを忘れぬやうに、合點かえ。
久助　それ〳〵、こは馬鹿らしい、おかみんす知つたかと、吉原符牒に云ひなさい。畏まりましたとは、ついぞない。
重の　サア、わたしも其やうに思うては居れども。ナ、こは馬鹿らしうありんして、どうも云はれぬでござりんすわいなア。
十兵　その里馴れぬ所が有り難い。一つ注いでもらはう注いでもらはう。爰へ〳〵。
重の　拜みますわいなア。
十兵　拜みんすと云ふ事か。
重の　怖いわいなア。
十兵　怖とばかりサ。
市郎　少將が新造の重の井とは、この子の事サ。
喜助　なんと美しいものでござりませうが。
慶政　この慶政に取持つてくれいと、市郎兵衛が頼み。尤もな筋かな。
十兵　さらばこの杯は鷄大盡へ。
慶政　押へた〳〵。
十兵　差詰め相は君達へ。
女形　上げ申しんせう。
十兵　そんなら小兵衛、さしたぞ〳〵。
小兵　一昨日から持越して、酒の事は御免々々。
總菊　重の井さん、主に袖の梅を振出して來て上げさんせいなア。

重の　アイ〳〵。

ト合ひ方になり、重の井、奥へ入る。皆々捨ぜりふの酒盛りあるべし。此うち、奥より、新左衞門、藁草履を持つて、ウロ〳〵舞臺へ出る。皆々、見て

久助　コレ〳〵、こなたは何をウロ〳〵と、座敷を尋ねるのだ。

庄二　胡散くさい形で、キヨロ〳〵と、何所からござつた。

新左　イヤ、手前事は、當所不勝手の者でござれば、失禮の段は御容赦にあづかりませう。

三人　サア〳〵、早く行つたり〳〵。

十兵　コレ〳〵、おいらが居座敷へ、案内もなく踏み込んで、その分で濟す事はならぬ。待ちやれ〳〵。

新左　お腹立ちの段、御尤も千萬でござる。幾重にも御料簡にあづかりませう。遊里の儀は一向に存ぜぬ事ゆゑ、斯様なる所へ參り合せ、申し譯もござらぬ仕合せ。免さつしやりませう〳〵。

小兵　なんだ。遊里の勝手を知らない。

新左　曾て不案内でござる。

十兵　その西も東も知らない所へ、さうしてお身様は、なんの用があつて來た。

新左　手前推參仕つたは

十兵　枕探しか、強請りに來たのか

新左　全く左様な。

小兵　さうして爰へ、何しに來たのだ。

新左　拙者も傾城を、一兩はい求めに參つた。

小兵　アノその形で女郎買ひに來たと。こいつも有り難い。

新左　ちと左様でもござるまい。

慶政　コレ〳〵、どのやうな客人が見えたぞ。

十兵　紙子仕立ての破れ羽織、尾羽打枯らした素浪人。金でも耳掻きが三文と云ふ身で、女郎買ひに來たとサ。

慶政　こいつも有り難い。なんとその客人を此方の間へ入れて、この慶政大通の遊びを見せて、膽潰させうではあるまいか。

久助　そりや、大盡様のお心任せ。なれど、如何にお遊びの上でも、うそ外聞の悪いあんな者を、一座には止しになされませい。

慶政　大事ない〳〵。サア〳〵御浪人、慶政が近付きになり申さう。これへ〳〵。

久助　こなたは飛んだ仕合せな人だ。鶏大盡樣の一座になるとは、又と叶はぬ御開帳。信心をして御拜あられませう。

庄二　靈寳は左へ〳〵。

うら　早う其所へござんせいなア。

新左　ハイ〳〵、然らば御免を蒙むりませうか。

慶政　これへ〳〵。

新左　これは不思議な御縁で、青樓の參會を仕りまする。

慶政　早速ながら、貴公もこれまでのうち、女郎買ひで手を廣げられた事がござらうの。

新左　ござりまするとも〳〵。

慶政　定めて話しが面白からう。

三人　承りたい〳〵。

新左　イカサマ、今年で二十三年にもなりませうか。伊豆の下田で傾城を一人求めました。十九歳の年、先主京都在番の砌り、三筋町にて傾城を求めまして、揚屋に一宿仕りました。其うちに、三島の宿にて、おこぜと申す者を買ひましたるより外に、近年遊君なぞと語らひました事はござりませぬ。

慶政　そんなら、十九の年に一度、伊豆の下田で、一度は三島の宿で一度、たつた二度の女郎買ひかえ。

新左　拙者もその時分は、花をやりました身でござるが、只今にては斯樣な體たらく。遣ひ捨てました金銀の罰かと思ひ當りましてござる。

慶政　成る程、さう遊んぢやア金の要る筈。定めて三味線なぞは、なるでごんせうの。

新左　三味線なぞも少しばかりは。

慶政　なりますか。

新左　若い時稽古いたしてござれども、久しく手に持ちました事がござりませぬ。

慶政　こりや有り難い。どうあらうとも、今夜は貴公の三味線を承らう。

新左　これは迷惑千萬な。

十兵　モシ〳〵、其やうに手馴けぬがようごんす。鶏大盡の座敷へ、あんな態で居られちやア、座敷の風が惡くなりますぞえ。

慶政　そこらはぬからぬ鶏大盡。コレ〳〵駿河町の越後屋で、八兩三分で買つた八端がけの羽織、ひらりと貴公へ進上いたさう。サア〳〵、これを着てもらひたい〳〵。

新左　然らばこの羽織を、拙者へ仰せつけられまするか。

慶政　慮外ながら進上々々。
新左　これは／＼忝なう存じまする。
慶政　まだその上に、傾城を一人進上いたさう。
新左　その儀ばかりは。
慶政　否應云はれぬうち、早く相方を定めたり。オヽ、それぞれ、誰れ彼れなしに、少將の新造の重の井／＼。
うら　こりや、ようござんせう。重の井さん／＼。
重の　アイ／＼。
　ト重の井、茶碗と藥罐を持つて出て來る。
サア／＼、袖の梅とやらを振り出して參りましたわいなア。
うら　モシ／＼、重の井さん、お前のお客は主さんぢや程に、サア／＼、ちよつと杯事。
重の　あのお方が、わたしの今宵のお客さんかえ。
　ト新左衞門、重の井、顔見合せ、新左衞門、呆れて思ひ入れ。重の井、恟りして藥罐を落し、十兵衞にかける。これより、大騒ぎになり、皆々同じやうに恟り。
慶政　何をザワ／＼。サア／＼、二階でわつさりと酒にせう。皆々來れ／＼。
庄二　鷄大盡のお入り。

皆々　先づお入りあられませう。
　ト騒ぎになり、慶政、皆々入る。新左衞門、殘り、思ひ入れ。
重の　父さん、恥かしいわたしがこの形、お免しなされて下さんせいなア。
新左　出かした娘、よう身を賣つた。お主の爲とは云ひながら、思ひも依らぬ其方が、君傾城となりたるさへあるに、如何に廓の習はしなればとて、斯く云ふ新左衞門の相方となり、杯を取つての親子の對面。武士たる者の行跡にあらうか。
重の　世の成行きとは云ひながら、思へば父さん。
新左　娘、エヽ、口惜しき世の
兩人　有樣ぢやなア。
　ト簾の内にて
小五　垂乳根はかゝれとてしも烏羽玉の
喜瀬　我が黒髪をなでずやありけん。
重の　ヤア、あの聲は。
新左　娘來い。
　ト誂らへの唄になり、簾上がると、小五郎兵衞、鏡臺に向ひ、莨をのんで居る。この後に喜瀬川、傾城の補

襠衣裳にて櫛を持ち、髮梳きの見得。禿早苗、春野、茶を拵らへて居る。

春野　見初めしと淨瑠璃や、唄の文句にあるけれど、喜瀨川さんと小五郎兵衞さんのその仲は、いつが初會であつたぞいなア。

早苗　移る月日は昨日今日と、ツイ開き馴れしやうなれど、假初めならぬお二人さん。

兩人　深い緣でござんすなア。

小五　イカサマ、子供までに云はるゝやうになつた仲、花の元に歸らん事を忘るゝと、內の事もさらりと忘れ果て面白やと、いかいたわけの小五郎兵衞。水臭い女郎の心を當てにして、うか／＼と誤まつては半日遁がれたり。明日は夜のうちに御用意と、仲の丁へさう云うてやつて駕籠を入れさせてたもれ。

喜瀨　心こそ我れにもあらずなりにけり、まだ里馴れぬ野暮の鶯、喜瀨川と云ふ不束者。小五郎兵衞さんゆゑに人には云はれ、內ではせかれ、辛い氣兼ねのその中に、添はるゝ事もあらうかと、お前を思うて來たものを、疑ひらしいは聞えぬわいなア。

ト膝で突く。

小五　それ／＼、その膝觸りの鹽梅のよさ。白痴めは本の事かと思うて嬉しがる奴サ。喜瀨川、わが身がどのやうに誠らしう云やらうとも、黑雲武兵衞と切れてしまはぬうちは、この小五郎兵衞のものとは思はぬ。マア、さう思うてたも。

喜瀨　また其やうな事云うてかえ。わたしが心の突詰めた所は、神さんや佛さんが御存じ。淺草の觀音樣へ、三ツ大の宮と五三の桐の、比翼に染めし手拭の紋所。小五郎兵衞さん、見やんせぬか。こなさんの云はんすばかりでわたしが事は、なぜに思うて下さんせぬ。

小五　なにを。

喜瀨　何をとは餘所々々しい。去年の霜月に、木挽町のお芝居へ下つてから、又このお芝居へ參じたわたし。あなた方へ

小五　お引合せ申してくれいと云ふ事か。

喜瀨　初々しうてならぬわいなア。

小五　其方が切れ憎かりや、武兵衞を賴んだがよいわいの。

喜瀨　なんのこつちやいらア。思ひ思うて來た者を、其やうに、つれなう云はんす事はござんせぬ。拜ぬわいな

ア。

小五　其やうに云やるもの、野暮らしく引ッ張つても居られまい。そんなら其所へ出や。ちよつと申し上げまする。

ト爰にて小五郎兵衞、引合せにて、喜瀬川、目見得の口上ある。

マア〳〵、其方もお目見得が濟んだで、落ちつきやつたであう。あなた方の御機嫌も好い程に、わつさりと酒にしようではないか。

喜瀬　ほんに、それがようござんせう。コレ〳〵、銚子を持つてぢや〳〵。

早苗　アイ〳〵。

ト合ひ方になり、早苗、奥へ入る。小五郎兵衞、あたりを見廻し、喜瀬川、春野を上座へ直し

小五　お痛はしや義經公、奥州高館に於て御落命あつてよりこの方、經若丸の御身の上、鎌倉どのゝ爲に襲はれ給ひ、かゝるいぶせき御有樣。さぞ物憂く思し召されませう。何事も世の成行きと、必らずお嘆きなされまするな。

春野　其方達夫婦の志し、忘れは置かぬ。嬉しいぞや。如何なれば頼朝公、經若丸とは、現在の叔父甥、敵の末かなんぞのやうに、この身を御詮議なさるゝとは、エヽ、お情ない。何かにつけてお懷かしい、父上樣のありし昔、夢になりとも見たいわいなう。

喜瀬　御尤もでござんす。私し事は忠信が娘清瀧と、名乘る甲斐なき今の身の上。喜瀬川と名は替りましても、替らぬ心はお主樣への忠義の道。何卒御世に出しましたいと、甲斐ない女の身の願ひ。

小五　私しとても、梅堀の小五郎兵衞と申しまするは、心願成就仕るまでの假の名。誠は義經公の北の方、京の君さまの京の一字を賜はりし、堀川武士の京の次郎と申しますればこそ。何は兎もあれ、暫しのうち、せめて御膳なりと差上げたいが。

喜瀬　成る程〳〵。幸ひ〳〵。

ト奥より盛り並べたる膳を持つて來て、春野に直し

サア〳〵、少々なりと召上がられて下さりませい。

春野　イヤ〳〵、欲しうないわいなう。

小五　思ひ出せば義經公も、吉野に於て、經若丸さまの只今の如く、御膳も召上がられず、落ちさせ給ふ雪中の御難儀。

喜瀨　さうぢやといなア。頃は極月末の三日、大和の國讓
　葉とやら云ふ所での事であつてと、父忠信の物語り。
春野　とても事に、その話しを、經若丸に聞かせてたも。
小五　サア、そのお話しは。
　ト奧にて
武兵　喜瀨川や〳〵。
小五　あの聲は黑雲武兵衞、ソレ。
　ト春野を下の方へ下げる。奧より、武兵衞、出て來
　る。
武兵　イヤア、しけるな〳〵。
喜瀨　ヤア、こなさんは。
武兵　武兵衞だ。小五郎兵衞と喜瀨川が、うまい話しのそ
　の中へ、月に村雲この武兵衞、少と聞き手になるべいか。
小五　コリヤ〳〵、黑雲武兵衞、お主は爰へ何しに來た。
武兵　おれか、おらア喜瀨川に、ちつと見せる物があつて。
　コレ喜瀨川、お主は日頃繪が好きだと云つたに依つて、
　面白い繪をおれが持つて來た。コレ〳〵見やれ、なんと
　この繪も好く書いたぢやアないか。
　ト經若丸の繪姿を出して見せろ。
小五　ナニ〳〵、義經の公達經若丸の繪姿。

喜瀨　エヽ。
武兵　愕りしやんな喜瀨川。替つた事があるぢやアない
　か。この繪姿に、其方の禿のこの餓鬼が、寸分違はぬ生
　寫し。聞きやれ、この經若丸の首を切つて出せば、そく
　たくとして黃金百枚、有り難い事ぢやないか。喜瀨川、
　隨分見咎められぬやうにしやれ。
喜瀨　いろ〳〵な事を云はんすわいなア。
武兵　イカサマ、經若丸は男の餓鬼。その禿は女。よもや
　經若丸ではあるまい〳〵、かけも構はぬ經若丸が詮議よ
　り、身にかゝつたる喜瀨川が身の上。小五郎兵衞、お身
　樣はどうしてくれうか。
小五　どうしてと云うたら、高が男の意地盡くで、切れま
　いと云ふより外に、料簡もない、小五郎兵衞サ。
武兵　そんなら、どうあつても、喜瀨川と切れる心はない
　か
小五　心が替れば殺してなりとも、此方の一分を立てる氣
　でごんす。
武兵　それに違ひはないか小五郎兵衞。
小五　男の詞に二言はない。
武兵　面白い。喜瀨川、小五郎兵衞と切れてなりとも、こ

の武兵衛に逢ひ通さうと云つた詞は忘れはせまい。まだ小五郎兵衛と切れずに居るか。

喜瀬　ナンノイナア、氣遣ひさんすな武兵衛さん、お前の顏を立てようと思うて、小五郎兵衛さんの事は、疾から切れてあるわいなア。

武兵　アノ小五郎兵衛と切れてしまつたか。

喜瀬　オヽくど。

武兵　喜瀬川、これを見ろ。

ト序幕の手拭を出して見せる。

喜瀬　ヤア、その手拭は。

武兵　三ツ大の字と五三の桐、喜瀬川、覺えがあらうがな。

喜瀬　サア、それは。

武兵　切れたと云ふ喜瀬川、切れぬと云ふ小五郎兵衛、切るも切れぬも經若丸が身の上。經若丸の繪姿に、寸分違はぬ喜瀬川の禿、喜瀬川に預けて、黑雲武兵衛が立つやうな返事を、奥で待つて居るぞよ。

ト唄になり、武兵衛、奥へ入る。

喜瀬　小五郎兵衛さん、それと知つたる黑雲武兵衛、若君樣のお身の上になつたぞえ。こりやマア、どうしたらよからうぞいなア。

小五　經若丸をお助け申す

喜瀬　好い料簡か。

小五　コレ……聲が高い。喜瀬川、二階へおぢや。

ト唄になり、三人、奥へ入る。暖簾口より、久助、出て、三ッ布團、錦の夜着を出して床を敷き、屏風を立て、油をついで入る。若梅、重の井、出て、こなたへ床を敷き、長吉を連れて出て

若梅　コレイナア、長吉さん、追ッつけ少將さんがござんす程に、必らず待つて居さんせや。

長吉　コレ／＼、さうしてこの床は誰れが床だ。

重の　アイ、わたしが床ぢやわいなア。

若梅　おくまどのゝ目にかゝらぬやうに、少將さんを待つて居さんせ。

ト奥へ入る。重の井、もじ／＼して莨の火を入れたり、行燈を掻き立たりして、銚子杯を持つて來て、長吉が側に居たがる。此うち、兩人、いろ／＼こなしの捨ぜりふあるべし。二階にて

久助　サア／＼齋宮さん、お七の淨瑠璃が聞きたうござりまする。

大勢　所望ぢや〳〵。
ト これより「散りても春に合ふ事の」と云ふ文句より「小指を切つて血を絞り」と云ふまでに兩人、振りでない振りの模樣あつて、長吉、沒義道なるこなし。トヾ淨瑠璃一ぱいに
重の　オヽ嬉し。
ト重の井、長吉に抱きつき、屏風を引き廻す。ト直ぐに唄になり、奥よりお浦、新左衞門を連れて出て
うら　モシ〳〵、お屋敷樣、お前のお床はこれでござんす。おしつけ重の井さんのござんせう程に、待つてござんせ。
新左　フトした事で、いかいお世話になります。然らば今宵の揚げ代金は、貴樣へ渡し申すのかな。
うら　イエ〳〵、鷄大盡さんの一座のお方は、皆大盡樣のお物入り、必らず氣遣ひさんすなえ。
新左　左樣なら、その儀にも及ばぬとな。併しあの喜瀨川どのゝ少將どのゝと、美しいお傾城を、結構な座敷で、旨い物を喰つて、縮緬の蒲團に錦の夜着を着て寐ると云ふは、下直な物と思へば、金は有り難いものでござる。
うら　何を云はんすわいなア。

新左　イヤ、それはさうと、最前から見て居るに、そもじは可愛らしい、いたいけな人ぢやと見える。そのいたいけな所を見込んで、少と恥かしながら無心がある。なんと聞いてはくれまいか。
うら　なんと云はしやんす。わたしに無心があるとかえ。
新左　如何にも無心がある。そもじへ我れらが無心と云ふは。
うら　オツと皆まで云はんすな。わたしや推して居るぞえ。ほんに殿御も多いに、この廓でツイに無心云ひかけて下さんしたお方もなかつたに、今宵と云ふ今宵、わたしも譯と云ふ字を知り初めやんした。そしてモウいつそ上氣したやら、頭が痛うなつて。
ト思ひ入れ。
幸ひ爰に床もあり、お前の願ひを叶へて上げやんせう。
ト帶を解きかける。
新左　これは迷惑千萬な。何所でか乾物を燒くさうな。あんまりパツ〳〵として下さりまするな。
うら　わたしが方から解けて出る帶。それにお前は、なんで迷惑でござんすえ。
新左　サア、氣の毒ながら、そもじへ無心と云ふは。

うら　わたしへの無心と云はんすは。
新左　世話ながら、茶漬を一杯喰はせてもらひたい。
うら　そんならわたしへの無心と云はんすは、茶漬の事かえ。
新左　如何にも左様。
うら　しつたかえ。
　ト お浦、ムッとして入る。合ひ方になり
新左　ハテサテ、廓ぢやなア。あのやうな奴でさへ、譯と云ふ字を知り初めたとは、戀の水上、手管の淵。祐成さまの嵌らしつたも、今思へば尤もかえ。それはさうと、踏みつけぬ揚屋、奥を踏んだれば、大分腹がきたわえ。どうぞ夜食に有りつきたいものぢやが。
　トあたりを見ろと最前の膳の儘にあるを見付けて
イヤア、あるワ〳〵。併し、これは主が付いて居るであらう。最前鷄大盡が、夜食は後に〳〵と洒落居つたが、大方それで退けてあるのであらう。併し、地獄で佛、人目のないうち、ドリヤ〳〵。
　ト膳を引寄せ、
爰の内は叮嚀にするワ。
　ト汁椀の蓋を取り

なんぢや、粒椎茸に細かな蕗の薹をパッと云はせた汁。力に合はぬ。大平に近付きにならう：　オ、、粹にしたワ粹にしたワ。本名は何か知らねども、こんがりと云はせた切り身、三ツ葉芹を、さて行儀よく並べた〳〵ワ。明日も爰にいさらごの、皺を延ばしに縮緬麩、寐よとの鐘のつく〴〵し、山葵の姑、嫁菜の猪口、行燈の影のはりはりで、さらば茶漬と出かけうか。
　ト唄になり、奥より、慶政、下着の形、少將、補襠、扱帯にて、慶政が手を引いて出る。飛胡蝶、春野、最前の油鳥を籠に入れて持つて出る。新左衞門、これにて膳を持ち、屛風の内へ隱れようとする。
少將　ア、、コレ〳〵、お前、その屛風の内へ行かんしては惡い。コレ、惡いに依つて、わたしに遠慮はない。ハテ、爰に居さんせいなア。
慶政　少將や、お主は味な事を云ふが、誰れぞ爰に居るか。
少將　誰れも爰には居やんせぬが。
慶政　それでも、今のやうに云つたは。
少將　サア、今のは。
慶政　エ、、自烈たい。子供、誰れぞ爰に居るか。

ト少將、禿、思ひ入れする。
胡蝶　アイ、イ、エ。
少將　コレ〳〵、其方衆はもうよい程に、早う行きや行きや。
慶政　これサ〳〵、子供よ、誰れぞ居るか〳〵。
少將　早う行きや〳〵。
禿二　アイ〳〵。
ト奥へ入る。合ひ方になり
慶政　娘や、今夜に限つて、お主は味にするの〳〵。
少將　そりや又何をえ。
慶政　ハテ、お前、その屛風の内へ行かしやんしては惡い。わたしに遠慮はござんせぬと云つたが、外に人が居るか知らないが、おれが屛風の内へ入るは、なぜ惡いよ。
少將　お前もマア、愚痴な事云はしやんせ。外に客衆があればとて、最前の鷄合せに、お前の鷄が勝つたではござんせぬか。それに詞咎めさんすは、わたしが疑はしいかえ。
慶政　なにサ、お前、さう云ふ心ではなけれども、今のやうに。
少將　云うたはな、お前一人、屛風の内へやるまい爲。
慶政　そんならそもじと一緒に。
少將　サア、一緒に、ナ、サア、あの床の内へ、サアござんせ。
ト少將、慶政が手を引いて上の方の床へ入ろ。新左衛門、膳を持つて下の方へ行かうとする。
少將　コレ〳〵、それでは惡い、ナ、惡い事があるに依つて、わたしが側に居さんせいなア。
慶政　少將や、何所へも行かうと云やアしない。そもじの側に居るに、何が惡い。
少將　エ。
慶政　おれが爰に居まいと云やアしまいし、それに爰に居てくれろとは、なんの事だ。
少將　惡い事があるとはな。
慶政　云つたのは。
少將　なにサ、わたしや癪が發つたわいなア。
慶政　ナニ、癪が發つた。
少將　アイ、それぢやに依つて、勝手へ行て、ちよつと藥服んで來やんせう。
慶政　これサ〳〵、藥を服みに行くに及ばぬ。おれが好い藥を持つて居るよ。

ト藥包みを出し
サア〳〵、この丸藥を服んで見な。直に癪が治る。
ト少將が掌へ載せてやる。これを服む振りにて捨てる。

慶政　どうぢや、好いか〳〵。これからおれが揉んでやりませう。
ト少將が胸へ手を差込む。

少將　イエ〳〵、わたしや癪の發つた時、揉んでもらふは、きつい嫌ひでござんす。其方へ行つて居て下さんせ。

慶政　其方へ退いて居ろ。

少將　アイ、癪の發つた時、人に手を付けられるは、きつい嫌ひぢやわいなア。

慶政　少將、今夜に限つて、斯うされる覺えはないが、たつた今、そもじが云つた通り、鷄合せに勝つた上は、味にされては、鷄大盡が顏が立たぬよ。

少將　味にするとは何をえ。

慶政　癪の發つたと云ふ奴も古い奴だ。

少將　わたしぢやとて、癪が發るまいものかえ。それ程にお前、氣にかけやんすなら、わたしやモウ、心ようなつたわいなア。

慶政　そんならそもじ、さつぱりと心よいか。

少將　お前に貰うた今の藥で。

慶政　そんなら。

少將　お前、御機嫌が直つたかえ。

慶政　やうないで、どうするものだ。

少將　そんならお前、外々に惡性さんすと、斯うするぞえ。
ト慶政を抓る。

慶政　有り難い〳〵。とてもの事に、もつときつく。

少將　斯うかえ〳〵。
ト新左衞門、慶政を抓る。

慶政　有り難い〳〵。
ト新左衞門きつく抓る。
オヽ、痛い〳〵。なんだか腕が折れるやうだ。そもじはきつい力だの。

少將　お手が痛んで惡くば、お免しなんし。

慶政　また腹を立つよ。機嫌直しに一つ呑みなえ。おれも一杯いかう。注ぎ給へ〳〵。

少將　そんなら、わたしが燗して來やんせう。

慶政　ハテ、面妖な。なんぞと云ふと奥へ行きたがる。もう冷でやらう〳〵。

少將　冷は毒ぢやぞえ。
慶政　ハテ、冷でもよい。全體おらア冷が好きよ。
　ト少將、酌をしてやる。
サア／＼、さしませう／＼。
少將　わたしや冷は嫌でござんす。燗して來やんせう。
慶政　嫌な物を無理とは申さぬ。そんならおれがもう一つ。
　トまた呑み
少將、なんぞ輕い物をちよつといきたい。
　ト少將、硯蓋の肴を挾んでやる。慶政、探つて
蛸だの／＼。蛸とは有り難い。少將や、とても事に、そもじの口で噛んでもらひたい。
少將　そんな事は知らぬわいなア。
慶政　ハテ、側に人目はなし、恥かしい事はない。噛んでくりやれ／＼。
　ト無理に少將の口へつける。新左衞門、取つて噛みこなす。
蛸を取つたは、噛んでくれる心だの。有り難い／＼。
　ト新左衞門、慶政が掌へ置く。
少將　人に云うて下さんすなえ。

慶政　エヽ、有り難い。これでさつぱりと心が解けたかえ。
　ト新左衞門、膳をしまふ。
少將や、何か屏風の側で、膳の音がするが、誰れぞ飯でも喰つて居るか。
少將　アイ。イヽエ、大方いつもの猫でござんせう。
慶政　いつもの斑めであらう。面妖、引け過ぎになると來て、廊下鳶をしをる。シイ／＼、あつちへうしやアがれ。
　ト煙管にて無性に叩く。これにて新左衞門、夜着の裾へ隱れる。
少將　もうあつちへ行くさうにござんす。お前もちつとお休みなんせ。
慶政　先刻から休みたくつてならなんだ。
　ト枕を取つて
少將や、なぜこの枕だ。
少將　久助どんとした事が、お前の枕を知つて居ながら、新造衆も又、縁結びにばかり精が出て、ほんに馬鹿らしい。重の井さん／＼。
　ト呼び立てる。重の井、下の方の床より自墮落な形にて出て來る。これを見て、少將、ムッとする。
重の　お呼びなんしたはお前かえ。

少將　アイ、わたしでござんす。今見れば、お前は味な所から出て來なんした。あそこに今まで何をして居なんしたか。

重の　アイ。

少將　若梅さんと二人して、賴んで置いた事をしてしまはんしたら、なぜ奧へ行て居さんせぬ。そこに何をして居さんした。

重の　アイ、文のぶんを習うて居やんした。

少將　文のぶんを習はんしたら、面白かつたでござんせう。なぜいつも知つたやうに、主の枕を出して置かしやんせぬ。

重の　喜瀨川さんの座敷に置きやんしたから、ちよつと取つて來やんせう。

慶政　アヽ、コレ〳〵、取りに行くには及ばぬ。おれが仕樣がある。この蒲團の下へ斯うして……これでよい〳〵。サア〳〵重の井、早くあつちへ行て、休みや〳〵。

重の　左樣なら鷄大盡さま、花魁、お休みなんし。

ト行かうとする。

少將　重の井さん、お前も茶臼を挽きたがらずと、まちつと話さんせ。マア、一つつけて下さんせ。

ト重の井、莨をつけて出す。

少將　重の井さん、お前、爰にちつとの間居て下さんせ。わたしやちよつと店へ行て來る。晝の花松屋の返事を聞いて來やんせう。

慶政　アヽ、コレ〳〵、なんぞと云ふと奧へ行きたがる。アヽ、こりや聞えた。われが惚れて居る揚羽の長吉が來て居るな。さう氣が付いては、一寸も外へやる事はならない。ハテ、どうぞ仕樣が……あるぞ〳〵。

ト慶政、帶を解き、少將が帶へ結びつけ

コレ、これでよい〳〵。なんぼ長吉めに逢ひたくつても、斯うして置けば行く事はならない。よし〳〵。

少將　お前もマア疑ひ深い。例へ長吉さんがござんしても、今宵はお前に逢ふ筈ぢやござんせぬかえ。

重の　黑雲とやら云ふ鳥が勝つたからは、お前も愚痴を云はずに、好い加減にさんせいなア。

慶政　それはさうでも、奧へ行きたがる少將が腰へ、おれが帶を斯う結びつけて、三日振りで歸つた野良猫のやうにして置けば、心が落ちついてよい。

少將　そんならお前は、それで心が落ちついたかえ。

慶政　落ちついたとも〳〵。重の井や、一つ注いでくりや

注いでくりや。

ト重の井、酌をする。慶政、重の井が袂を探つて

少將や、追ッつけ重の井が袖も取つてやらずばなるまいによ。重の井、おれが好いやうにしてやらうぞ。

重の 其やうな事は知らぬわいなア。

ト此うち、慶政が帶を重の井の腰へ結びつけ、兩人、囁く。

慶政 知らぬと云つても、追ッつけ賴みに來るであらう。

重の エヽ、措かしやんせ。

ト慶政を抓る。

慶政 オヽ、痛い／＼。無性に抓る奴サ。

少將 これはしたり、大切の主を、さうあんまり抓つてもらひやんすまいぞ。モシ、この子はもう寐かさうではござんすまいか。

慶政 さうとも／＼、早く行て寐や／＼。

重の そんならお二人さん、お休みなさんせ。

少將 早う行つて、寐やしやんせ／＼。

ト少將、襠裲を重の井に着せ替へ、重の井に付け臀にて、少將、下の方へ行く。慶政、帶をたぐり、袖を探つて少將と思ひ、

慶政 もう重の井は行つたさうな。成る程、新造と云ふ者は、よく寐たがるものだぞ。

ト少將、下の方の屛風を明けようとする。

少將や／＼、新造ぢやアないが、もう寐ようぢやアないか……なぜ物を云はない／＼。

ト少將立戻り

少將 わたしや觀音樣を拜んで居る程に、ちつとのうち話しをせずに居て下さんせ。

慶政 ハテ、それは御殊勝な事だの。大方それも長吉が爲であらう。

少將 ちつとのうちでござんす。話しをせずに居て下さんせ。

慶政 ほんにさうだつけ。

ト少將、屛風を開けようとする。

少將や／＼、もう看經は濟んだか。

少將 勿體ない、其やうにお看經が早うなるものかいなア。わたしがよいと云ふまで、話しを仕掛けずに居て下さんせ。

慶政 合點ぢや／＼。

ト少將、拔足をして下の方の屛風の内より長吉が胸づ

くしを取つて引出す。重の井、これを見て思ひ入れ。

少將　お前、アノ、先刻に重の井さんを、惡い事さんしたでござんせうが。

長吉　これは迷惑な。なんだか知らないが、追ッつけ少將さんがござんす程に、待つて居ろと云つたから、あつけらかんとたつた一人で、天井を數へて居たが、わりや又今まで何所に居た。

少將　サア、わたしや先刻にから、お前の所へ來ようと思うたけれど、あの鷄大盡が。

長吉　もう後を聞くに及ばぬ。なんぼ鷄合せに負けても、斯うする筈がないが、此奴は太い奴だわえ。うなア慶政に惚れたな。

少將　靜かに云はんせ。あそこに居るわいなア。

長吉　聞いても大事ない。喧ましく吐かせば、取ッ捉まへて踏みのめすワ。

ト行かうとするを少將留めて

少將　今宵の事は、お前も合點ぢやアござんせぬか。其やうな短氣な事を云はずとも、わたしが話したいと云ふはな、コレ、斯う〳〵。

ト長吉に囁く。

長吉　そんならアノ、委細は後に。

少將　なんであろと、わたし次第にして居やしやんせ。

長吉　合點だ〳〵。

ト此うち、重の井、いろ〳〵と思ひ入れあるべし。始終慶政を後にして花道を見詰めて居る。

慶政　少將や、そんなら話しはしまいから、爰へ一つ注いでくりや。今更云ふではないが、今宵と云ふ今宵、あの長吉が事を、さつぱりと思ひ切つて、斯ういたいけにしてくれるものを、なんでおれが憎からう。

ト重の井、片手にて、行燈の油差しを持つて、油を注いでやる。

慶政　オヽ、ツと零れる〳〵。斯う受けたところが、どうも云つたものぢやアない。有り難い〳〵。

ト一口呑んでむせ返り

オヽ、おきやアがれ〳〵。こりやア油だわえ。エヽ、うなアおれを、なぜ茶にしやアがる。アヽ、胸が惡い胸が惡い。

ト少將、悧りして

少將　これはしたり、何を其やうに云はんすぞいなア。

慶政　云はないでどうするものだ。よくおれに油を呑ませ

たな〳〵。

少將　何をいなア。

慶政　何をとはイケ業腹な。口がニチャ〳〵してならない。漱ひをするに、茶をくれろ〳〵。

ト喚く。

少將　アイ〳〵。

トうろたへ、火入れを取つて出す。慶政、これを取つて父灰にむせろ。

慶政　エヽ、おきやアがれ。こりや、火入れだ。一度ならず二度ならず、酷い目に遭はしやアがつたな。少將め、これからうぬを存分にする。

ト木枕にて、重の井を叩く。

重の　モシ〳〵、少將さん、好いやうに云うて下さんせいなア。

慶政　その聲は重の井だな。

ト帶をたぐり

オヤ〳〵〳〵、おれに沓へ玉を喰はせたな。少將、何所にけつかる。

少將　先刻にから爰に居るわいなア。

慶政　おきやアがれ。爰に置くから面倒だ。奥へ連れて行て抱いて來る。おれと一緒に來い。

少將　ヤア、お前は目が見えるかえ。

慶政　喧ましい。うしやアがれ。

ト慶政、少將を引立て奥へ入る。合ひ方になろ、新左衛門、夜着より出る。

重の　お前は父さん。

新左　娘か。

ト下の方より長吉出て來ろ。これにて重の井、新左衛門を隱す心にて屏風を引廻す。

長吉　鷄大盡めは騒々しい奴だわえ。それはさうと、あの新造の重の井に、ちつと逢つて聞きたい事がある。何所に居るか知らぬ。

ト屏風を開けようとする。

重の　長吉さんかえ。爰にはちつと人が居やんす程に、必らず開けて下さんすなえ。

長吉　ナニ、この內には人が居る……ハテナ、人が居るとは面白いわえ。昨日や今日の新造でも、色と間夫とのあたつきか。その間夫の男に長吉が、近付きになるべい。爰へ出せ。

重の　イエ〳〵、其やうなお方ではござんせぬ。構へて開

けて下さんすな。

長吉　隱される程猶逢ひたい。重の井が間夫の男を開帳すべいか。

ト屏風を開ける。重の井、支へる。長吉、無理やりに夜着の内なる新左衞門が襟を摑んで引摺り出し

重の井が間夫の男の、しやツ面を拜むべいか。

ト新左衞門を見て

ヤア／＼、其方は鬼王新左衞門か。

新左　お前の目にも新左衞門と見えますか。イヤサ、鬼王と見えまするか。若旦那様、時宗さま、下にござりませ。

重の　申し父さん、あなたを若旦那様、時宗さまと仰しやりますが、そんならあなたが、御主人五郎時宗さまでござんすかえ。

新左　成る程、幼少の折から曾我を放れ、山形屋儀平次が所へ、奉公に行つた其方、お見知り申さぬは尤も。其方やおれが三代相恩の御主人、時宗さまぢやわいの。

重の　そんならあなたが御主人時宗さまでござんしたか。さうとは知らいで、アノ、ホイ。

長吉　鬼王、さう云やれば、あの重の井は、其方の娘おしげであつたか。

新左　只今も申す通り、七つの時他所へ奉公いたさせましたる、拙者が娘、しげめでござりまする。お見知り下さりませう。

長吉　ハテナア、さうとは知らぬ假の縁……して又、そのおしげが、この大磯屋に勤め奉公するその仔細は。

新左　逆澤瀉の鎧の質物、三百兩の金ゆゑに、親が難儀を身に引請け、おのれが心一つにて、この大磯屋へ勤め奉公。娘のお庇で手に入りし三百兩、今宵中に逆澤瀉の鎧を取戻し、御老母様へお渡し申すでござりませう。親にも知らさぬ娘が忠義、お褒めなされて遣はされませい。

長吉　出かした／＼。おしげ、兄祐成の放埒ゆゑ、人手へ渡りし澤瀉の鎧、再び我れ／＼が手に入るも、其方が働らき。娘が忠義。禮は詞に盡されぬ。いかい苦勞をしやるなう。

新左　時宗さま、先達て紛失なしたる、友切丸詮議の爲、揚羽の長吉と名を替へ、廓へ入込み、友切丸の詮議なさんと仰しやりましたが、友切丸は御手に入りましたか。

長吉　某も一旦、曾我のお名を雪がんと、千々に心を碎いて詮議なせども、未だその名劍の行くへとても

新左　知れませぬか。

長吉　如何にも。

新左　時宗さま、今なんと仰しやりました。兄祐成の放埒ゆゑ、逆澤瀉の鎧、一旦人手へ渡りしと仰しやりましたが、放埒くらべをなされたら、御兄弟とも、あんまり勝り劣りもござりますまい。友切丸の詮議より、間夫の詮議をなされたがようござりまする。おいとしや祐信さまには、友切丸の御詮議の爲、鎌倉より百日の日延べ仰せつけられ、その百日も今日限り、今宵中に名劍手に入らねば、祐信さまを始め、曾我殿原は一生埋れ木。花咲く春に逢ふ事はなりませぬわいの。最前も承れば、少將が事にて、大勢の町人を相手に、格子先での打ち叩き。仲の町で喧嘩があるは誰れぢや揚羽の長吉。土手で拔いたワ、切られた相手は誰れだ揚羽の長吉。烏の啼かぬ日はあれど、喧嘩沙汰を聞かぬ日とては、一日もござりませぬわいの。如何にお若いと云うて、もしもお身の上に凶事あつては、どの命を以て年來の御本望はお遂げなされまするぞ。殊には又、辰の年の年月日の時に當りたる、男子の生血が手に入らねば、祐經どのゝ病氣平癒すらも叶はず、それと云ひこれと云ひ、捣てゝ加へた鬼王が心の中、どのやうにあらうと思し召すぞ。それになんぞや色慾に魂ひを奪はれ、大切なお願ひを等閑に思し召すとは、見下げ果てたるお心ぢおなア。と御兄弟に向つて斯樣に申すは、鬼王新左衛門より外に云ひ手はござりませぬ。時宗さま、ちと御思案なされて下さりませい。

長吉　鬼王、料簡してくれい。あやまつた。友切丸の詮議も、徒らには暮らさねども、今宵に限る百日の日限り。

重の　逆澤瀉は手に入つても、祐經さまの御病氣、御本腹ないその時は、心遣ひも水の泡。

新左　合せて見れば主從親子、三人三つの身の成行き。曾我御一門に引替へて、祐經路次の行裝は

長吉　連るゝ時は百騎二百騎。

重の　連れざる時も五十騎三十騎。

新左　如何なれば御兄弟は、連れる時にも鬼王團三。世の盛衰とは云ひながら

長吉　主も家來も斯程まで

重の　移れば替はる

三人　世の中ぢやなア。

ト奥にて

市郎　重の井〳〵。

ト呼ぶ

長吉　ヤア、あの聲は。

新左　市郎兵衛にお逢ひなされてはむづかしい。先づ〳〵あの二階へ。

ト新左衛門、長吉を上の方の二階へ上げ、灯火吹き消す。奥より、市郎兵衛、探り出て來る。

市郎　重の井〳〵。ハテ、暗いワ。重の井、何所に居る何所に居る。

重の　爰に居やんすが、なんぞ用でもござんすかえ。

市郎　用が無くつて呼ぶものか。マア〳〵、爰へ來や〳〵。ハテ、暗いワ。

ト重の井を捉へて

しめたぞ〳〵。そもじは、この暗い所に何をして居た。

重の　サア、わたしや爰に。

市郎　何をして居た。

重の　オヽ、それ〳〵、歌がるたを取つて居たわいなア。

市郎　アノ、この暗闇で。

重の　アイ、有明の月を待ち出づるかなと、月の出汐を待つて居るわいなア。

市郎　月の出汐を待つて、歌がるたを取らうとは、殺すな殺すな。たゞ有明の月ぞ殘れる、心のありッたけを殘しはせない。うつりにけりな花の頃、茲な徒ら者め。

重の　市郎兵衛さん、なんでわたしが徒ら者ぢやえ。

市郎　知るまいと思ふか。最前揚羽の長吉を見て、あまけ付いたも知つて居る。おれにこれ程に氣を揉ませて、返事をしてくれぬは、重の井、酷いぞや〳〵。なんでも思ひを晴らしてもらはにやアならぬ。

ト抱きつく。新左衛門、探り寄つて市郎兵衛を投げる。

市郎　オヽ、痛い〳〵。暗闇と云ふものは、勝手を知つて居ながら轉ぶものだ。また斯う云ふ首尾はないものだ。拜むぞ〳〵。

ト探り〳〵新左衛門を捉へ

全體そもじを勸めて、この廓へ寄越したも、お情にあづかりたさのまゝだ……これサ、其やうにぷりしやりする事はない。この暗闇を幸ひに、應と云や〳〵。

ト頭を撫で見て

イヤア、こりやどうだ。聞えた。重の井、わりやア先刻にからこの暗闇に居たは、これだな〳〵。遣り手若い者の眼を忍んで、盗みをひろぐ男の面を見てやらう。誰れぞ、灯を持つて來い〳〵。

ト奥より、喜瀬川、手燭を持つて出る。春野も付いて出る。

喜瀬　お前は夢の市郎兵衞さん、重の井さんを捉へて、なんでごんす。

市郎　オヽ、喜瀬川か。その灯を

ト取つて新左衞門を見て

オヤ〳〵、こりやどうだ。

新左　市郎兵衞どの、なんと重の井が色客と見えまするかの。

重の　最前も知つて居やしやんす、わたしが父さん、疑ひ晴らして下さんせえ。

喜瀬　最前奥で、小五郎兵衞さんの話しで聞いた、重の井さんの父さんと云ふは、お前かえ。

新左　様子御存じの上は、包みまするにも及びませぬ。この上とも隨分、お目をかけさせられ下さりませ。

喜瀬　なんのマア、勤めの苦界は儘の事。其やうにお案じなさんすなえ。そして、此やうな所に居さんせずと、重の井さん、連れまして、奥へ行かんせいなア。

新左　左様ならば、奥へ參りませう。重の井、おぢや。

重の　アイ。

市郎　重の井待て。奥へやる事はならない。

重の　そりや又なぜえ。

市郎　返事をしろ。

重の　何をえ。

市郎　この市郎兵衞に抱かれて寐やうと云ふ、色好い返事をしろ。

重の　市郎兵衞さん、なんぼわたしが昨日や今日の女郎ぢやと云うて、其やうに云はしやんしたものでもござんせぬ。好いた客をば間夫と云ひ、好かぬ客を袖にして、獨り寐さすも勤めの習ひ。アノ、わたしや嫌でござんす。夢の市郎兵衞さんに逢ふ事は、アイ、嫌ぢやわいなア。

市郎　面白い。よくさつぱりと云つてしまつたな。この廣い五丁町で、名だゝる全盛な女郎を差措いて、うそ寒い新造を口說くのも、惚れたが因果、男の意地盡く。否でも應でも抱いて寐にや、この市郎兵衞、重ねて廓へ顏が出されない。嫌はれる程猶惚れた。重の井、サア、奥へ來い。

新左　そりや又無體な。

市郎　何が無體だ。

新左　如何に勤めの身なればとて。

市郎　さればよ、一夜別れの君傾城、見立てられたが身の不承。嫌でも應でも抱いて寐る。來い。

喜瀬　市郎兵衞さん、待たしやんせ。奧へ行かんすとなら、お前獨りござんせ。重の井さんをやる事は、なりやんせぬ。

市郎　喜瀬川、重の井を奧へやる事はならぬと云ふが、なんぞ譯でもあつて留めたのか。

喜瀬　譯はござんせぬが、客衆がござんす。

市郎　なんだ、客がある。

喜瀬　アイ、鷄大盡さんの指圖で、重の井さんへ杯さんしたあのお客さん。すりや今宵の重の井さんのお客は、あのお侍ひさん。なんぼお前が氣を揉ましやんしても、客人を捨てゝ奧へも行かれまいし、また客衆もやりもさんすまい。人の揚げた女郎衆を、無理に奧へ連れて行かうと云はしやんすは、市郎兵衞さんでもござんすまい。それとも達て逢ひたくば、重ねて來やしやんせ。なんであらうと今宵は重の井さんに、指でも差さしやんしたら、市郎兵衞さん、お前の顏が立つまいぞえ。そこを思うて留めやんした喜瀬川は、あんまり無理でもござんすまいがな。

市郎　成る程、喜瀬川の云ふ通り、こりやアおれが惡かつた／＼。重の井、腹が立つたであらう、料簡しや／＼。時に今宵、この重の井に杯さんした客人と云ふは、あの浪人どの、こなさんかえ。

新左　左樣でござる。最前鷄大盡のお指圖で、身共も久々にて、好い樂しみを致してござる。

市郎　さうでごんせう／＼。折々は女郎は買はずとも、仲の町で一杯飮んで歸るも、命の洗濯でごんすて。重の井や、主ももう睡からう。早う寐かしましたらよからう。

重の　市郎兵衞さん、先刻のやうに云うたのを、お氣に留めて下さんすな。

市郎　なんの、おれが事、捨てゝ置いて、早く主を寐かしましたがよい。

重の　お前のやうに云うて下さんすりや、わたしやモウ大抵や大方、嬉しい事ぢやござんせぬ。そんなら皆さん、これに。市郎兵衞さん、後にお目にかゝりませう。

新左　然らば何れもさん、これにゆるりと。ドリヤ、奧へ參らうか。

ト兩人行かうとする。

市郎　重の井、お主は何所へ行く。

重の　お前も聞分けの惡い。主を寢させませと云はしやんしたに依つて、奥へ行くのぢやわいなア。

市郎　奥へ行かずと、爰で寐や。

重の　エ、。

市郎　奥へ行かずと、この市郎兵衞の見る前で、二人ともに帶紐解いて、しつぽりと抱かれて寐ろ。

皆々　エ、。

市郎　重の井が今宵の客は浪人どの、サア、それぢやに依つて抱かれて寐ろ。人の揚げた女郎に、指でも差さすやうなこの市郎兵衞でもない。ナウ喜瀨川。幸ひあそこに床もあり、これからお二人の睦言を、これで聞いて樂しまうか。浪人どの、重の井を抱いて寐さつしやい。重の井、帶紐解いて抱かれて寐ろ。何をウヂ〳〵して居る。但し寐られぬか。親子一緒に寐ても大事ないと云ふはこれだ。

　　ト最前の籠に入れたる鷄を持つて來る。

帶紐解いて抱れて寐ても、大事ないと云ふはこれだ。此やうに立派な顏をして居ても、親子の差別もない所が畜生。ハテ、畜生にさへならうと思へば、誰れに遠慮も入らない。市郎兵衞が眼の前で、二人とも抱かれて寐ろ。

重の　それぢやと云うて、これがマア。

市郎　但し抱かれて寐られぬか。そんならおれと抱かれて寐ろ。

重の　サア、それは。

市郎　嫌なら畜生になれ。

重の　サア、それは。

市郎　この市郎兵衞と寐るか。畜生になりたいか。

重の　サア。

　　ト新左衞門、口惜しき思ひ入れ。

市郎　サア〳〵〳〵。どうだ。なんだ〳〵、眼に角をぶッ立つて、赤鰯をひねくり廻すが、浪人、其方はおれを切る氣か。こりや面白い。切られませう〳〵。殊に其方の腰の物に付いては、ちつと友達の武兵衞に、云ひ譯のない事もあれど、それはそれよ。畜生も人を切るものなら、サア、切つてもらはう。

　　ト新左衞門、いろ〳〵思ひ入れ。

喜瀨　こりやア最前奥で、小五郎兵衞さんの話しで聞いた、お二人さんのお身の上。願ひのある身は誰れしも同じ、苦界の世の中。かまへて粗相ならんすなえ。

市郎　エ、、拔いて切られずば、おれが方から切られてや

るべい。

トかゝる市郎兵衛を重の井隔てゝ

重の　市郎兵衛さん、お前の心に從ふわいなア。
市郎　そんならおれと帶紐解いて
重の　しつぽりと
市郎　抱かれて寐るか。
重の　オゝくど。
喜瀨　それではお前、立つまいぞえ。
重の　誰れにえ。
市郎　揚羽の長吉に。
新左　そんならいよ〳〵最前の。
重の　コレ……立つも立たぬも苦界の習ひ、一夜流れの仇枕、ツイ脊向けても一夜明かす、客と間夫との裏表。表を張る女郎の意地、立てゝ逢うたら濟まうかいなア。
市郎　インニヤ、立てゝは嫌だ。眞實で。
重の　逢うてくれかえ。
市郎　長吉と切れて。
重の　エヽ。
市郎　揚羽の長吉と云ふ間夫に切れて、夢の市郎兵衛へ命と云ふ、極印が打つてもらひたい。
新左　餘りと云へば。
市郎　なにを……畜生め、すツ込んで居やアがれ。サア、夢の市郎兵衛へ命と云ふ、入れ黒子をしろ。
重の　エヽ。
市郎　嫌なら浪人と抱かれて寐ろ。
重の　サア、それは。
市郎　畜生になりたいか。入れ黒子をするか。重の井、とての事に市郎兵衛が、顏を立てゝもらひたい。
重の　アイ、立てやんせう。所詮お前を立てるからは、どうなりとさんせいなア。
喜瀨　市郎兵衛さん、そりやお前、あんまりぢや、胴慾でござんすぞえ。親子の難儀を身に引請け、チッと堪えて居やしやんす、重の井さんの弱身へ付け込み、難題はそりやお前、男でもござんせぬぞえ。
市郎　夫婦と名の付く市郎兵衛、入れ黒子をさせても大事ない。喜瀨川、われも小五郎兵衛と切れて、黒雲武兵衛に抱かれて寐ろ。
喜瀨　お前もきつい世話燒き。小五郎兵衛さんの事は、疾に切れてしまうたわいなア。
市郎　インニヤ、まだ切れない。

喜瀬　そりや又どうして。
市郎　最前奥で武兵衛が手から、受取つたこの文。小五郎兵衛さま喜瀬川と云ふ、宛名のあるが慥かな證據。これでもわりやア切れたと云ふか。
喜瀬　ドレ。
　ト取つて披いて見て
　ナニ〳〵「義經の公達經若丸の人相書」、エ、これは。
市郎　なんと替つた文であらうが。眼の内すゞしく、鼻筋通り、瘦肉にして色白く、生年積りて十二才、その繪姿に寸分違はぬ禿の春野。經若丸と名乘らせろ。
喜瀬　サア、それは。
市郎　但し引ッ捕へて詮議しようか。
喜瀬　サア、それは。
市郎　市郎兵衛命と彫るか。
重の　サア、それは。
市郎　經若丸と名乘らせろ。
喜瀬　サア、それは。
市郎　サア〳〵〳〵、どうだ。
兩人　ハア。
　ト戀慕の合ひ方になる。喜瀬川、花活の梅が枝を持つて、春野を詮議する。市郎兵衛、側なる硯箱を引寄せ、重の井の右の手へ夢の市郎兵衛と書いて、小刀に紙を卷き、重の井が手へ突ッ込む。新左衛門、思ひ入れ。
市郎　經若丸と名乘らせろ。
喜瀬　經若丸と名乘りや〳〵。
春野　知らぬわいなう〳〵。
　ト上の方、二階の障子を開け、長吉、出かゝり居る。
新左　コリヤ、出まいぞ〳〵。
市郎　何が出まいぞ。
新左　サア、出まいと申したは。
市郎　出まいと云つたは。
新左　この鷄。鷄大盡の御祕藏の鷄ぢやに依つて、籠を出ては悪い。ナ、サア、場所が悪いに依つて、出ては悪いと申したのでござりまする。
市郎　重の井、もちつとぢや。痛からうが辛抱しろ。喜瀬川、經若丸と名乘らせろ。
喜瀬　經若丸と名乘らにやならぬ。名乘りや〳〵。
　ト梅の枝にて經若丸を叩く。
春野　どのやうな憂き目を見るとも、其やうな事は知らぬ知らぬ。

市郎　さて、死太い餓鬼めだ。キリ／＼名乘つてしまへ。

春野　知らぬわいの／＼。

市郎　いつその事に、おれが代つて責めようか。

　ト長吉、思ひ入れ。皆々思ひ入れ。

新左　コリヤ、出まいぞ／＼。

市郎　何が出るよ。

新左　アノ鷄が。

市郎　なんと。

新左　主從親子はあの鷄の、羽搔も狹き籠の內、見るに忍びぬ友鳥の、塒放れて羽ばたきせば、その身も直ぐに籠の鳥。餌刺しの棹に刺されぬやうに、ナ、合點がいたか。

　ト長吉、思ひ入れにて忍ぶ。

市郎　イヤ、死太い奴だ。經若丸と名乘らせろ……おれが替つて名乘らせて見せうか。

　ト立ちかゝる。喜瀨川、春野を圍ふ。新左衞門、重の井を支へるを、市郎兵衞、重の井を足蹴にする。重の井、悶絕する。喜瀨川の持つたる梅が枝を市郎兵衞取つて

餓鬼め、名乘れ／＼。

春野　知らぬわいなう／＼。

市郎　ハテ、よく云ひ含めたな。是非名乘らずば、斯うして云はせる。

　ト側なる枠火鉢の燒け火箸を取つて、春野を取つて引据ゑ、顏へ燒き金當てる。春野、ウンと氣を失ふ。

喜瀨　ヤア／＼／＼、もう此まゝでは。

　ト駈け寄らんとする。新左衞門、これを留めて

新左　これサ、誰れしも命惜しまねど、願ひある身の悲しさ。ヂツと無念を堪えませうぞ。

喜瀨　でも。

新左　コレ。

市郎　ハテ、二人ながら脆い奴等だ。併し、この餓鬼はこの上苛なんだら、本當にごねてしまふであらう。喜瀨川、この餓鬼はわれに預ける程に、今宵八ツの鐘の鳴るまでに、經若丸と名乘らせろ。最早引け過ぎだ。八ツまではもう僅か。その間、オ、ソレ。

　ト鷄を出し、掛け樋へとまらせ

アレ、あの鷄の初聲を上げるが合圖。經若丸が首を受取る。重の井も抱いて寢る。兩人ともに、返事を奧で待つて居るぞよ。さらば。

　ト唄になり、市郎兵衞、奥へ入る。重の井に新左衞門、

氣を付ける。喜瀬川、春野を抱き上げ、花活の水を呑ませ介抱する。

喜瀬　若君様、經若丸さま……コレ春野、心は慥か、氣は付いたかいなう。

新左　重の井、心が付いたか。どうぢや〳〵。

重の　父さん、氣遣ひして下さんすな。心は慥かでござんす。

喜瀬　春野、心は付いたか。私しでござりまする……コレ喜瀬川ぢやわいなア。

春野　わしゆゑに苦勞してたもる其方。力に思ふは其方一人。とは云ふものゝ、これがマア、流れは同じ源の、義經の忘れ形見、經若丸か。

喜瀬　コレ、滅多な事を仰しやりまするな。なんであらうとわたし次第……サア、明けて云はれぬ身の上は。

重の　お前もわたしも勤めの習ひ、子供をいたはる夜毎の添ひ寐。

新左　常さへ憎む鳥鐘も、今宵に限る初聲の

重の　聲を合圖に

喜瀬　情ない。

新左　お嘆きはさる事ながら、暫しのうちもマア奥へ。

喜瀬　お二人さん。

兩人　喜瀬川さん。

喜瀬　後方お目にかゝりませう。

ト唄になり、喜瀬川、春野を連れて奥へ入る。

新左　如何なれば我れ〳〵親子は、苦勞の上にこの仕儀。これに付けても逆澤瀉の鎧、友切丸、まつた辰の年月日時に當る男子の生血、この三品を早う手に入れたいものぢやなア。それはさうと、其方、心持ちはよいか。

重の　只さへ奉公は辛いもの、ましてや苦界のこの勤め。これ程の事はありさうなものと、諦めて居て見ても、諦められぬはあの長吉さま。

新左　ヤア。

重の　サア、まだ文も見ぬ初戀の、切れとの縁であつたかいなア。

ト奥より、武兵衞、儀平次、出て來る。

武兵　其所に居るは重の井ぢやアないか。何をくよ〳〵思つて居るのだ。

新左　これは〳〵、最前ちよつとお目にかゝつた、武兵衞どのでござりまするか。

儀平　イヤ、鬼王どの、爰にござつたか。其方に逢ひたく

、つて、一通り探しましたわいの。

新左　拙者も急にお目にかゝりたい事があつて、お待ち申して居りました。

儀平　さうでごんせう〳〵。奥山で逢つた時、是非とも今日まで待つてくれとの話しを、聞き屆けたは其方の顏を立てゝの事。併しハヤ、今宵に限る三百兩の質物。どうでごんす。金の借り口でも出來ましたか。

新左　されば、その儀でござりまする。娘が才覺を以て、三百兩の形に調達いたしました。

儀平　エ、そんならなんと云はつしやる。アノ三百兩と云ふ大枚の金が、出來ましたか。

新左　即ち懷中いたして居りまする。今宵までの日限りの質物、只今金子お渡し申して、これより直ぐにお供いたし、逆澤瀉の鎧、受取りまするでござりませう。

儀平　何がさて〳〵、煎豆に花と云はうか、三百兩の大金さへ受取れば、質物はいつでも其方の物。利息は負けて進ぜませう。そんなら金受取らう。

新左　外々より望み手のござるあの鎧、只今までお差留め下されまする上、利息まで御容赦下されうとは、千萬忝なう存じまする。これと云ふも其方の働らきゆゑ。某が忠義も立つた。嬉しいぞや〳〵。

重の　なんのマア、其やうに、お心遣ひなさらずと、ちつとも早う儀平次さんへ、お渡しなされたがようござんすわいなア。

儀平　金さへ受取れば、代物は直ぐに渡しまする。マア、受取りませうかえ。

新左　然らばお渡し申しませう。

ト新左衞門、財布を出して開ける。財布に武兵衞が入れ替へたる石出るゆゑ、新左衞門、恟りして、落ちたる石を袖にて隱し、財布を隱す。思ひ入れ。武兵衞、上の方に莨のんで居る。

儀平　成る程、人と云ふものは萬能より一心とは、よう云うたものだ。袖乞ひをしながらも、三百兩と云ふ金の出來ると云ふは、主人大事々々と思ふ一心で、出來たでござらう。鬼王どの、サア、ちつとも早く受取りませう。これサ鬼王、新左衞門どの、早う渡して下さい。てもさても、味な所に念が入る。ツイちよつと數へても知れる事を。ドレ、爰へ寄越さつしやい。わしが數へて進ぜませう。

ト儀平次、この體を見て

こりやアどうだ。鬼王どの、金は何所にござるよ。

新左　お渡し申す三百兩の金は。

儀平　その金は。

新左　紛失いたしてござりまする。

儀平　エ。

重の　ヤア／＼／＼。

ト駈け寄つて、いろ／＼檢めて

申し父さん、この中お前にお屆け申して下さんせと、水茶屋のおみちさんへ、お頼み申したこの金。よもや主が其やうな事を……なんであらうと、この金がなくては、逆澤瀉の鎧も手に入らす、わたしが心も水の泡。こりやマア、どうせうぞいなア。

新左　そのおみちも、何者にか殺されたとの噂。すりや、先達てこの金を盗んだ奴が、なくては叶はぬ。

ト武兵衛思ひ入れ。

何は兎もあれ、今となつてこの金が紛失なしては、今宵に限る鬼王が難儀。新左衛門が武士は立たぬわやい。

重の　如何なれば此やうにも、なす事毎に鶍の嘴。

新左　友切丸も行くへ知れず

重の　折角手に入る逆澤瀉の鎧も

新左　金が無ければ手に入らず。

重の　父さん。

新左　娘。

兩人　ホイ。

ト儀平次、新左衛門が襟髮を取つて引寄せ

儀平　曾我が御家來の鬼王どの、鬼王め、新左衛門の大騙りめ。

新左　武士に向つて騙りとは。

儀平　ナ、なんとするのだ。怖くはないぞ。騙りと云つても大事ない。盗人と云つても大事ない。コレヤイ、なぜ嘘をつく。三百兩の事は措け、三文にもならない。こりやア石ころだわえ。今日までこの儀平次を、釣りつけて置くのみならず、なぜ騙した。エ、腹の立つ。

ト新左衛門を打擲する。

新左　御尤もでござりまするが、何しにお前を。

儀平　騙さないものが、金だと云つて石ころを、なぜ出したよ。

新左　それには深い樣子が。

儀平　おきやアがれ。樣子も何もいらない。今まで釣りつけられた腹癒せに、うぬを斯うするワ／＼。

ト打つを武兵衛留めて

武兵　これサ、ようごんず。先刻からのあらましを、あそこでとつくと聞きました。さぞ腹が立ちませうの。

儀平　腹が立つて〳〵。

武兵　ようごんす〳〵。時にお侍ひ、こなさんも武士ぢやアないか。この儀平次どのに踏んだり蹴たりされて、なぜ默つて居さつしやる。ハテ、金の貸借りは別の事。今にも出來れば事は濟む。それになんだ、素町人の泥脛を、しやッ額へ頂いて、默つてござる心が知れない。なぜ拔打ちに切らない。その刀は伊達に差して居るのか。拔かしやいな〳〵。拔かれずば、おれが拔いてやるべい。

ト拔きにかゝる。新左衛門、その手を拂つて

新左　大功は細瑾を顧みず、鷄を割くになんぞ牛刀を用ひんや。切らうと思へば何時でも切らるゝ。滅多に生死に拘はるやうな、新左衛門ではござらぬ……約束の三百兩、紛失なせしは何所までも、拙者が越度。腹が立てば打擲おしやれ。お主の爲の恥辱、敢て無念なとも口惜しいとも存ぜぬ。儀平次どの、存分におしやれサ。

儀平　存分にしないでどうするものだ。エヽ、コレ、年寄つて腕の埒が明かない。エヽ、力が欲しいわえ〳〵。

武兵　力が欲しくば貸して進ぜう。若い者ども、來い。

皆々　オイ〳〵〳〵〳〵。

ト奥より、十兵衛、小兵衛、喜助、おとがひの長、大勢出る。樽拾ひの三吉、この中へ交つて出る。

十兵　こりやア親方、儀平次さん、なんぞ御用でもごんすかな。

武兵　用と云つて外でもないが、わいらは、あの侍ひを見知つて居るか。

十兵　ドレ……成る程、どうか見たやうだわえ。三日月さまぢやアねえが、宵にちらりと鷄大盡さまに、羽織を貰つたお侍ひだな。

長　十兵衛、お主は物覺えの惡い者だ。此奴は觀音の奥山で、袖乞ひをして居た乞食でごんす。

小兵　乞食を見て、乞食と云ふやうな、不機轉な事があるものか、途方もない。

喜助　見れば、はッつけはの狐を見るやうに、キヨロ〳〵して居ますが、儀平次さん、此奴はどうぞしましたか。

儀平　さればよ、聞いて下さい。此奴は騙りでござるワ。

皆々　イヤア。

儀平　おれが所へ返す三百兩の金だと云つて、石ころを投

けようとしました。併我の家來、鬼王ひん左衞門と云ふ、騙りでごんす。大泥坊でごんすよ。

新左　モシ〳〵、それを仰しやつて下されては。

儀平　云はないぢやア。なぜおれを騙した。こんな奴が爰の内へ入込むと、第一大磯屋の名が出るよ。いつそこんな奴は

トかゝる。

重の　コレ申し。

ト重の非を武兵衞押へる。皆々新左衞門を散々にぶつ。奥より、小五郎兵衞、出て、皆々を突き退け、兩人を圍つて見得。

重の　ヤア、お前は。

小五　梅堀の町人、小五郎兵衞と云ふ若い者。何か下座敷が騒々しいから、仲の町の子供狂言でも始まつたかと思つて、來て見ればこの仕儀。武兵衞との、こりや、どう云ふ譯でごんすの。

武兵　ひよつくりひよつと、後からつん出たが、金が無ければ濟まない出入りだ。小五郎兵衞、この出入りを、お主は濟まさうと思つて出たのか。

小五　事と所とに依つたなら、濟ますまいものでもないが、その金は又、どこへ返す金だ。

儀平　わしが所へサ。逆澤瀉の鎧の質物、今宵に限る三百兩の元金、今さら間違ひだと云つて濟まうと思はつしやるか。

小五　すりや、三百兩の金が間違つたゆゑのこの騒動。ようごんす。その金は、わしが濟しませう。

儀平　小五郎兵衞どの、こなさんが請合つても、端下金ではないよ。三百兩だによ。

小五　その三百兩、わしが濟しませうが、今は無い。わしも梅堀の小五郎兵衞だ。番つた詞に違ひはない。明日まで待つて下さい。

儀平　これサ〳〵、明日まで待つ位なら、斯うは云はない。いつぞやから望み手のある代物を、今宵までの日限り、待つてやつたはこの人の顏を立てゝの事。こなさんの扱ひは聞えたが、どうも明日までは待たれませぬよ。

小五　ようごんす、明日まで待たれぬと云はつしやるものを、達てとも云ひますまい。そんなら約束通り、今宵中に金揃らへ、明け六ツの鳴るを合圖に、こなさんに渡したなら、云ひ分はござるまいの。

儀平　知れた事サ。

小五　ハテ、約束通り、夜の明けるまでは待たずばなるまい。儀平次どの、マア、さう思つて下さい。

儀平　成る程、男を立てる梅堀の小五郎兵衛程あつて、さつぱりとした譯の付けやうと褒めたいが、褒められない。所詮金がなければ、この出入りが濟まない。

武兵　この黒雲武兵衛が、この出入りを濟ませば、明日とも云はず、たつた今

小五　濟まして見せるか。

武兵　おんでもない事。小五郎兵衛、見物して居ろ。儀平次さん、三百兩と云ふ金が、たつた今、爰へ降つて湧いたら、云ひ分はごんすまい。

儀兵　そりやハヤ、金さへ受取れば、云ひ分はござらぬ。

武兵　ようごんす。たつた今渡しませう……お侍ひさん、わしが知つた事でもない。僅か金なら三百兩が三百兩で濟む出入りを、武兵衛も其所で見て居ながら、濟まさないと云はれては、金が惜しいやうで、わしが顏が恥かしい。三百兩貸して進ぜませう。儀平次どのへ返してしまはつしやい。

新左　先刻より、御覽の通りの拙者が難儀を、お見兼ねなされ、お貸し下されうとある武兵衛どのゝ御深切、添なう存じまする。然らば金子、拜借いたしませう。

武兵　廓緒切つて廓へ入込む日から、三百兩や五百兩の目腐れ金は、何時でもごんす。心措きなく使はしつたがよい。小判で丁度三百兩。小五郎兵衛が見る前で、儀平次どのへ返さつしやりませ。

ト懐中より財布を出して見せる。

新左　見る影もなき拙者に、三百兩と申す大金を、手放してお貸し下さる武兵衛どのゝ御深切、添なうござる。併しながら、假初めにも金づく。ちやつと借用いたしたと申す一札を、進上いたしませう。

武兵　證文には及びませぬが、心ばかりの印、なんぞお前の身に付いた物を、一品、金の代りと云ふ印に、渡して下さいませせ。

新左　何がさて、斯く御深切にあづかるおてまへ樣の事、惜しみませうやうはござらねど、何を申すも御覽の通り、尾羽打枯らせし浪人の身の上。これを斯うと申す一品もござらねば、何なりとお指圖次第、進上いたすでござりませう。

武兵　三百兩の質物に、御浪人の魂ひが預かりたうござる。

新左　ヤ。

武兵　武士の魂ひが預かりたうごんすよ。

新左　錦を以て劍頭を包み、綾を以て身を纏ろふとも、この場の難儀にや替へられぬ。ましてや錆びたる浪人が、糸のほつれの片手卷き、人の嘲り世の誹りも、お主の爲に賣代なす、寶はこの身の差合せ。武兵衞どの、お望みに任せ拙者が魂ひ、恥かしながら、進上いたすでござりまする。

武兵　望みの一腰、得心ならば當座の値、三百兩、金と引替へに、イザ。

小五　御浪人、賣り物が違つた。

新左　なんと。

小五　身にかゝる難儀とは云へど、わしが見る前で、その一腰は賣らせられぬ。武兵衞どのもその通り、望みの品が違つた。

武兵　そりや又なぜ。

小五　いつそこなたに合つたなら、賣つて進ぜうと思つて、待ちに待つて居た好い代物がある。お主が見たら、買はずばなるまい。

武兵　おれに賣らうと云ふ代物はなんだ。

小五　こなたに限る代物と云ふは。

武兵　その品と云ふは。

小五　これサ。

　ト序幕の矢の根を出して見せる。

武兵　その矢の根は。

小五　なんと覺えがあらうがの。所は淺草觀世音、はや暮れかゝる夕月の、闇はあやなし暗紛れ、いづくの誰れか知らねども、打つて捨てたる振り袖の、死骸の側に落ち散りし、鷄の舌のこの矢の根、なんと武兵衞どの、こなたが買つたら三百兩や、五百兩がものはありさうなものでごんす。

武兵　その矢の根こそは、平家の大將、能登守敎經、既に八島の戰ひに、義經の御内に於て、腹心と呼ばれたる、佐藤次信、君に代つて能登どの、矢面に進み、潔よく討死なす。

　ト簾の内より喜瀨川、出かゝり居る。

船に有り合ふ童の菊王、次信が首取らんと磯打つ浪に楫取つて、爰の渚に馳け寄れば、弟忠信賢くも、矢取つて番ひ菊王が、馬手の膝に射通せば、菊王も大事の痛手堪り得ず、渡打ち際に撞と伏す。

　ト武兵衞、立廻りにて新左衞門、右の膝を見て

新左　ヤア、この創は。
武兵　何がなんと、
小五　武兵衛どの、三百兩ぢやア廉い物だ。買つて置く氣はござらぬか。
武兵　サア、それは。
小五　但しは嫌か。
武兵　エ、。
小五　キリ〳〵するは嫌か。嫌なら措かつしやい。ようごんす。賣りますまい。おれが大事の代物の賣り口、邪魔をした浪人どの、こなたさんの一腰も、賣らせる事はならない。また買はせる事もならない。武兵衛、マア、さう思つて下され。
儀平　小五郎兵衛どの、わしが方の方は、どう付けさつしやる。
小五　さればよ。三百兩の代物があつても、金の惜しいかして買ひ手がない。儀平次どの、こなたも不承ながら、小五郎兵衛が顔を立て、明日まで待つて下さい。夜が明けたら三百兩の金、わしが手から進ぜませう、それとも待たれぬと云はつしやれば、この矢の根の飛ばしりが何所へかゝらうとも知れない。ハテ、罪は同罪遁がれはない。待たれませぬか。早く返事を聞かせて下さい。
儀平　武兵衛どの、こりやどうしませう。
武兵　どうと云つて小五郎兵衛が顔を立てゝ、明日まで待つてやらつしやい。
儀平　小五郎兵衛どの、そんなら明日までに、キッと三百兩持つて來て下さい。鬼王では待ちませぬ。こなたの顔で待つよ。
小五　人も知つたるこの出入り、請合つた小五郎兵衛、逃げも隱れもしますまい。落ちついてごんせ〳〵。
重の　父さん、おさらば。
　ト重の非、新左衛門が差添に手をかける。
新左　コリヤうろたへ者、なんで死ぬのぢや。
重の　イ、エ、放して殺して下さんせ。
新左　イ、ヤ、放さぬ〳〵。なんで死ぬのぢや、様子を云へ。
重の　これが死なずに居られませうか。この間儀平次さんのお話しに聞けば、無くてはならぬ三百兩の金。お前に話し申したら、よもや得心はあるまいと、わたしが心一つで、斯う云ふ賤しい勤めの身の代も、せめてはお前のお力にと、思ひし事も水の泡。その金ゆゑに、ヤレ鬼王

は騙りぢやの、新左衛門は盗人のと、大勢の人中で、打ち打擲は何事ぞ。初手から無い金なら、これ程までに御難儀はあるまいと、思へばわたしや生きては居られませぬ。放して殺して下さんせいなア。

新左　親なればこそ、子なればこそ、それ程までにしてくれる。忝ないぞよ嬉しいぞよ。満江さまや御兄弟様へ、死んでお為になる事なら、其方より先へ鬼王が、疾に生きては居ぬわいやい。お力少ない御主人達が、御本意お遂げなさるゝまでは、まだこの上にどのやうな、恥面かいてもいとひはせぬ。合點がいたか。必らず早まつた事をしてくれるな。

重の　アイ〳〵。

ト思ひ入れ。

武兵　いんにや、重の井は死なずばなるまい。

小五　そりや又何ゆゑ。

武兵　重の井には間夫がある。

小五　ハテ、味な事を聞いたわえ。臍の緒切つて、この廓へ入込んだ日から、五丁町を寝所にして居ると云ふ、若衆の武兵衛。こりやアお主でもあるまい。深い淺いは客と間夫、間夫がなければ女郎は闇、その度毎に死なう事なら、五丁町に女郎の種が盡きるであらう。武兵衛、ちつと譯と云ふ字を知つたがよいわいの。

武兵　いんにや、譯と云ふ字が違つたに依つて。

小五　どうして違つた。

武兵　重の井が間夫は、揚羽の長吉だに依つて、死なずばなるまい。

小五　ハテ、替つた事を云ふ男だ。揚羽の長吉に惚れゝば、なぜ死なにやアならない。

武兵　あの長吉と云ふわつぱしめは、此奴等二人が主人、曾我五郎時宗であんべい。主人に惚れても大事ないか。これぢやア、死なずば居られまい。

小五　いんにや、死なずとよい。

武兵　そりや又なぜ。

小五　間夫が違つた。

武兵　ナニ、たんと。

小五　重の井が間夫の男は外にある。

武兵　外にあると云ふ、その男は誰れだ。

小五　重の井が右の手に、しつかりとした證據がある。

武兵　ドリヤ。

ト重の井が最前の入れ黒子を見て

夢の市郎兵衛。

小五　なんと、どうでえす。重の井が間夫は、夢の市郎兵衛と云ふ、友右衛門に似た好い男サ。いらざる間夫の詮議立て、黒焼もちをやかないものだ。それとも達てせく氣なら、間夫の詮議より、この矢の根の詮議をしようか。

武兵　サア、そりやア。

ト喜瀬川、最前の所より見ろ。

小五　なんと。ハ、……、武兵衛が疵は足曳の、山路の菊を折り得て、かたき岩根に露結ぶらん、かたき岩根に、サア、露結ぶらん。御浪人、重の井、奥へ來い。

ト唄になり、小五郎兵衛、新左衛門と重の井を伴ひ奥へ入る。

儀平　武兵衛どの、この始末は、こりやマアどうなりますの。

武兵　どうと云つて仕様はない。折角巧く仕掛けたものを、けちをくッつけやァがつたあの小五郎兵衛め、仕様がありさうなものだが。

儀平　氣遣ひさつしやるな、彼奴が請合つた三百兩のこの出入り、今宵中にどうして金が出來るものだ。夜が明け次第、こなたの顏を立てゝ進ぜます。それまで奥へ行つて、若い者を相手に一杯飲みませう。みんな奥へござい。武兵衛どの、後に逢ひませう。

ト合ひ方になり、儀平夫、皆々入る。武兵衛、三吉、殘り、武兵衛は三吉を居ぬと思ひ。

武兵　この中淺草の奥山で、水茶屋のおみちを手にかけたその時、取落したあの矢の根。いま小五郎兵衛が手に入れて、覺り知つたる我が身の上。彼奴も只の町人ぢやアない。騙し寄つて一討ちに。

三吉　エ、。

武兵　わりや誰れだ。

三吉　アイ、私しは山谷の永樂屋と申す酒屋の、三吉と申す、樽拾ひでござります。

武兵　そんなら今、おれが云つた事を聞いたか。

三吉　アイ、聞たやうでもあり、また聞かぬやうでもあり。

武兵　南無三方。

三吉　ア、お前もいかう苦勞なされまするの。併しハヤ、世の中に、人の苦勞は絶えぬもの。今のお侍ひも、金ゆゑ起る身の苦勞。大勢の人中で、叩かれたりぶたれたり、丁度わしどもが得意先で、德利の一つも割ると、番頭どのが算盤を振り上げての打ち叩き。わしが身に引比べて

見れば、口惜しい事ぢや。どうぞ金があらば、貸して進ぜたいと思うてからが、高の知れた端下錢。一日の賣溜めを貸しても屆かぬ事。只金があらば貸して進ぜたいと思つたばかりサ。

武兵　われは又、ませた事を云ふ奴だな。金と云ふ物が、仇に容易く出來る物ぢやアない。わいらがやうな樽拾ひの身で、固まつた金は一生見る事はなるまい。おれが拜ませてやらう。

ト財布を出し。

小判で丁度三百兩。

三吉　そんなら、そりや金でござりまするか。

武兵　なんと有り難いか。頂いて置け〳〵。

三吉　有る所には有り餘り、三百兩と云ふ大枚の金を、ツイした事のやうに、懐に入れてござるが、わしがその金を持つて居るならば、お侍ひの難儀を救つて進ぜうに。これに付けても金の欲しさよ。さらば奥へ參りませうか。

ト行かうとする。武兵衞、後より拔きかける。喜瀨川も出かゝり居る。

三吉　武兵衞さん、何をなされまする。

武兵　なんともしない。一緒に奥へ行かうと思つて。

三吉　お前は後からお出でなされまし。わし一人參りまする。

トまた拔きかける。喜瀨川、出て、これを留めて

喜瀨　武兵衞さん、何をさんすえ。

武兵　こりやア喜瀨川か。お主は又、替つた所へ何しに來た。

喜瀨　お前に逢はうと思うて。

武兵　そりやアなぜ。

喜瀨　お前に聞く事がござんすに依つて。

武兵　それで來たのか。

喜瀨　アイナア。

武兵　して、おれに聞きたいとは、なんの事だ。

喜瀨　外の事でもござんせぬが、今あの子が奥へ行かうとする後から、人は白刃の鯉口を、見咎められてはツイちやつと……ありやアなんでござんすえ。

武兵　サア……小五郎兵衞を切れて、この黑雲武兵衞に逢つてくれやうと云ふ、喜瀨川に心中を見せうと思つて。

ト思ひ入れ。

喜瀨　ハテ、心中見すとようござんす。日頃から心の素直な武兵衞さんと云ふ事は、人は知らぬが、この喜瀨川は、

よう知つて居るわいなア……こなさんも、此やうな所に長居せずと、早う奥へ行かしやんせ。お前もわたしが座敷へ來やしやんせ。

ト喜瀬川、武兵衞が手を取つて、二重舞臺の床の上へ連れて來ると、武兵衞、ブル／＼思ひ入れあつて

武兵　これサ／＼、喜瀬川、どうする／＼。

喜瀬　武兵衞さん、わたしへの心中には、帶紐解いて寢て下さんせ。

武兵　そりや、本の事か／＼。

喜瀬　なんの嘘を云はうぞいなア。

武兵　そんなら眞實寢る心か。

喜瀬　疑ひ深いは客衆の習ひ。

ト武兵衞が手を取つて思ひ入れ。

武兵　エヽ、有り難い／＼。今日は如何なる吉日ぞや。モウモウ、堪えられない／＼。

ト武兵衞、帶を解く。この時、懷中の財布を落し、三吉、これを見て思ひ入れ。喜瀬川もこれを見て思ひ入れ。武兵衞は心付かぬこなし。

喜瀬　オヽ、嬉し。

ト抱きつく。キツカケにて簾下りる。唄になり、三吉、この金を取上げ

三吉　エヽ、忝ない。

ト三吉、この金を持つて奥へ入る。合ひ方になり、重の井、脇差と鏡を抱へ出て來る。側なる鏡臺へこれを掛けて

重の　幼少の折、山形屋へ奉公に行くその時に、母さんの仰しやるには、鏡は女の嗜なみぢや程に、大切にせよと下さんしたこの鏡。どうした緣やら、父さんの側にはありながら、母さんのお側には、七つの時からお別れ申し、丁度今年で十年餘り、お側を放れしこの身の不孝は、お免しなされて下さりませい。せめてこの鏡にお詫び申すも、心ばかりのお暇にて、わたしが死んだとお聞きなされたら、ひよつと御持病のお積が發りはせまいかと、思ふも一つの迷ひの種。二つには二世までと、思ひし殿御はお主樣、又その上に父さんの、御苦勞なさるがおいとしさに、苦界の勤めの身の代も、云ひ甲斐もなき今宵の仕儀。これが死なずに居られませうかいなア。

トきつかけにて、西の方の亭座敷の障子開くと、齋宮太夫、杯臺の上に本を置き、新左衞門、三味線にて

〽口に唾のたまる異名や梅座しぶ、由兵衞は外へ出商ひ、

小梅は内に誂らへの、菊染め手染めはもゝかはに身のいる仕事明晩と、出來ねば延ばし人の手も、かりかやすかけて絞り出す、身の油よりする業の、澁もきくやうと染めなせり。

重の　あの淨瑠璃は鷄大盡を、もてなしの長吉殺し。いづくの果でも金ゆゑに、苦勞は絶えぬ浮世の中。四百四病の病より、金程辛い物はないなア。

〽はや人相の鐘ゆゑに、命取らるゝ長吉は、夏の虫かや灯し火を、灯す時分に來かゝりて。

トこの淨瑠璃のうち、奥より、三吉、思ひ入れにて出て來て

三吉　申し〳〵重の井さん、お前はマア、なんでござりまする。今時分に鏡臺を飾つて、髮をお上げなされまするか。今宵はもう引け過ぎ。明日の事になされたがようござりまする。ドリヤ、私しが片付けて上げませう〳〵。

重の　待らや〳〵。其方は本にいたいけな事、よう云うてたもるなう。今時分に端近へ來やつて、風でも引けば惡い。早う奥へ行きや〳〵。

三吉　重の井さん、お前はいから瘦せが見えるが、お心待ちでも惡いか。但しはなんぞ苦になるか、煩らはぬやうになされませや。

重の　其方はマア、優しい事を、よう云うてたもるの。そしてマア、いたいけさうな好い生れ付き。此やうないたいけな子を持ちながら、さもしい奉公をさせる親達の心は、よく〳〵の事であらうなう。

三吉　イエ〳〵、わたしには父さんも母さんもござりませぬ。

重の　そんなら其方は死別れか。

三吉　イエ〳〵。

重の　生別れしやつたのか。

三吉　アイ、藁の上から兩親に離れ、それより他人の手汐にかゝり、今年で丁度十二年、艱難苦勞の其うちにも、夜は沓打ち草鞋の、紐は解けても解け兼ぬる、氷の上に朝起きして、雨の降る日も雪の夜も、德利摑んだ手も凍え、取落した過ちを、番頭どのに見付けられ、かぢけた奴と打ち打擲。悲しい事や苦勞な事を、つく〴〵と思へば思ふ程、夜の目もろくに臥せられませぬ……いつそ此やうな苦勞をしやうより、身を投げて死なうか、藏の二階で首縊らうか、いつそ一思ひに死んでしまはう、死なう〳〵と思ふ事、幾度と云ふ事はござりませぬが、どう

ぞ父さんや母さんが、この世にまめでござるなら、せめて一目逢つて見たいと、天神樣や地藏樣を、拜まぬ日とては一日もござりませぬが、よく／＼薄い緣ぢややら、今日の今まで父さんにも、母さんにも尋ね逢ひませぬ。もう大方逢はずに死んでしまふでござりませうが、重の井さん／＼、お前はなぜ泣かつしやりまする。モシモシ其やうにお前が泣かつしやると、わたしも泣きたくなりまする。

ト三吉、重の井を見い／＼、手拭にて涙を拭く。

重の　これが泣かずに居られうかいなう。世の中に、親を大切に思はぬ者はなけれども、其方のやうな孝行な、子を持つた親御の心は、どのやうにあらうと思やるぞいなう。それには引替へ兩親に、先立つ不孝の罪、お免しなされて下されませい。初鷄まではもう僅か。重なる御難儀を、お側で見ては居られませぬ。おしつけ未來でお目にかゝつて、申し譯を致しませう。お免しなされて下されませい。

三吉　エシ、重の井さん、そりやお前、誰れに仰しやるのでござりまするぞ。

重の　エ……わたしとした事が、其方の話しを聞いて、貰ひ涙がこぼれたわいなう。サア／＼、其方は早う歸りや。夜が更けたら、誰れぞに送つてもらやらぬか。早う歸りや歸りや。

三吉　イエ／＼、今日は番頭どのゝ云ひつけで、得意廻りの掛取り集め、夜が更けたら家の内にでも泊つて來いと、即ち金も爰に持つて居りまする。

重の　して、その金はなんぼ程。

三吉　小判で丁度三百兩。

重の　ア、その金が。コレ、三吉や、云ふまではなけれども、隨分奉公大切にして、親方の物塵一本、粗末にせまい、違へまいと、心願かけて勤めたがよいぞや。人が見るとツイ取るぞや。見せるが目の毒。ちやつと隱して、早う行きや。サア／＼、早う行きや／＼。

ト三吉を介抱してやる。三吉、花道の方へ行く振りにて、西の方へ隱れる。

重の　三吉はもう去にやつたか。大枚のなア、あの金を、幼ない子に持ち步かせ、なんとも思はぬ身代に、半時なりともなつて、父さんの御難儀を救うて見たい。八ツの鐘の鳴るまでは、もう間もあるまい。お二人ともに、隨分おまめで、お出でなされて下されませい。父樣、鬼王

さま。

ト鏡臺の剃刀を取り、自害せんとする。三吉蔭より

三吉　コレ早まるまい。待つた〱。

重の　誰れぢや。爰放しや〱。

三吉　わしでござりまする。必らず死んで下されまするな。申し姉様。

重の　ヤ……わしを姉ぢやと云やる其方は。

三吉　今お前が鬼王さまと仰しやりましたが、その鬼王さまと云ふは、わしが父さんでござりまするわいなう。

重の　鬼王さまを父様と云やるには、なんぞ慥かな

三吉　證據と云ふは、コレ、この守り袋。

ト出し

わたしが捨てられしその時に、添へてあつたとの人の話しを、コレ、これを見て下されませい。

ト重の井、守を披き

重の　「元暦二年辰の月辰の日辰の刻に誕生の男子、幼名乙松、鬼王これを書す」。ヤア〱、そんなら其方は、母様の話しに聞いた、わしが弟の乙松であつたかいなう。

三吉　鬼王書すとあるからは、疑ひもなき親子の證據。

重の　弟であつたか。

三吉　姉様でござりましたか。

重の　親を忘れぬ一筋は

三吉　天道様の惠みにや

重の　始めて知つたる兄弟の

三吉　はしをり鏡の雲晴れて

重の　巡り逢うたる今日の今。

三吉　姉様。

重の　弟。

兩人　不思議な縁であつたなア。

ト三吉、この剃刀を取つて

三吉　姉様、さらば。

重の　コリヤ乙松、なんで死ぬのぢや。早まるまいぞ。

三吉　最前奥で様子を聞けば、辰の年月日時に當る男の生血なければ、御兄弟様方の御本望は叶はぬとの事。その年月に當つたわたしが命、お主の爲に死にまする。姉様、放して殺して下されませい。

重の　いたいけな事、よう云うてたもつたなう。とても死なねばならぬわしが身の上。其方は殺さぬ。わしが死ぬる。

ト剃刀を奪ひ取つて、南無阿彌と死なうとする。三吉、

留めて
三吉　マア〳〵、待つて下されませい。死なうと云ふはわたしが事。お前がお死になされては、辰の年のお役には立ちませぬわいなう。
重の　辰の年の生れには當らずとも、お主を思ひ親を思ふ、忠と孝とに捨てる命。誠の道に叶ひなば、祐經さまのお役に立つまいものでもない。其方は後に殘りて、お二人へ孝行盡してたも。乙松さらば。
三吉　イヤ〳〵、なんぼうでもお前は殺さぬ〳〵。わしが死にます。姉様さらば。
重の　イヽヤ、どこまでも其方は殺さぬ。わしが死ぬ。爰放しや爰放しや。
三吉　イヽエ、わたしが。
重の　イヤ、わたしが。
三吉　イヽエ、わしが。
重の　イヤ、わしが。
ト互ひに死を爭ひ、顔を見合せて
重の　絶えて久しき兄弟の、初めて知つたる今日の今、その喜びが脇になり、互ひに爭ふ死出の旅。
三吉　思ひ廻せば古への、野中の清水ぬるけれど
重の　互ひの心は汲みてしが
三吉　忠と孝とは替れども
重の　捨つる命は兄弟が
三吉　末なし川の一筋に
重の　姉も
三吉　弟も
重の　同胞の、親を大切と思へばこそ。
三吉　これが死なずに
兩人　居られうかいなう。
ト兩人、泣き落す。
〽しやくり上げたる有様に、小梅は身も世もあられればこそ、優しい志し、聞けば聞く程猶悲しい、兩親に別れてより、其方もわしも難行苦行、もうこれ程で年が明く、年は幾つと數へて待つたるこの姉の、連れ添ふ夫が殺さうとは、釋迦でもよもや御存じあるまい、世界の因果が固まつて、夫婦ともなり又兄弟とも、生れ來たかと身ももだへ、嘆き口說けば由兵衞は。
新左　兄弟出かした。
兩人　エ。
トきつかけにて、障子下りる。

三吉　兄弟と仰しやつた、今のは慥かにわたしが父様。ちよつとお顔を。

重の　コレ〳〵、其方がお目にかゝつては、身の爲にならぬ。逢ひたい見たいは尤もぢやが、早う内へ歸つてたも。斯う云ふうちにも心が急く。早う歸りや〳〵。

三吉　イエ〳〵、死なうとさへ思ふもの、父さんに逢はずに歸る事は、わたしや嫌でござりまする。

重の　さう云ふ其方を爰に置いて、もしもの事が……サアサア、早う歸りや。これ程に云ふに歸らぬは、姉が詞を背くのか。

三吉　なんの、お前の詞を背きませうぞ。

重の　そんなら早う歸りや〳〵。

三吉　アイ〳〵。

重の　わしが詞を聞き分けて、歸つてたもるか。

三吉　なんの勿體ない。初めて知つた姉様の、詞を背きませうぞ。わしはもう歸りまする。

重の　そんなら歸つてたもるか。よう聞き分けてたもつたなう。泣き顔見せたら不審が立たう。わしが好いやうにしてやりませう。

ト腰の手拭を頬冠りにしてやり

飯はどうぢや。お腹は好いか。飢じうはないか。コレ、必らず煩らはぬやうにしてたも。サア〳〵、早う行きや早う行きや。

ト三吉、悄々花道へ行く。後影を重の井見送り、懐中より薬を出して

三吉、こちら向きや。お腹が痛まば、これ嗜みに持つて居や。

ト薬包を抛ろ。

三吉　戀しい床しい父様に、逢はせる事はならぬと云はつしやる、胴慾な姉様に、貰ふ薬は要りませぬ。コレ、病まうと死なうと要らぬお構ひ。この薬を返しまする。覺えてござれ姉様。

ト本舞臺へ駈け戻り

胴慾ぢやわいなう〳〵。

ト薬を打ちつけて泣く。重の井、抱きかゝへ

重の　尤もぢや道理ぢや。其方の目からは、鬼とも鬼神とも見えやうが、いとしい其方に憂き目を見せまい爲ばかり。機嫌直して早う行きや。

三吉　どうでも奥の父様に。

重の　逢うては悪い程に、早う歸りや。

三吉　イエ〳〵、どうでもたつた一目。
重の　エヽ、聞分けのない。早う去にや〳〵。
ト無理に三吉を突きやる。後へ新左衛門、出かゝり居る。
新左　三吉待て。
三吉　エヽ。
新左　藁の上より人手にかゝり、成長なしたる倅乙松。ようまめで居てくれたなア。
三吉　そんならお前が、父様でござりまするか。
重の　其方やわしが、父様ぢやわいなう。
三吉　父様、逢ひたかつた〳〵、逢ひたうござりましたわいなう。
新左　逢ひたい見たいは其方ばかりか、鬼ぢやござらぬ鬼王も、片時忘れはせぬわいやい。
重の　サア、父さんに逢うたからは、もうよい。早う歸りや歸りや。
新左　コリヤ〳〵、三吉、今宵に限る親が難儀。胸にせきくる八ツの刻限。様子は未來で聞いてくれ。命は貰つた覺悟せい。
ト立ちかゝる新左衛門が差添に手をかけ
重の　南無阿彌陀佛。
新左　コリヤ、なんで死ぬのぢや。早まるまいぞ。
重の　あの子に憂き目を見せまい爲、最前よりの僞て口。どうでわたしは亡い命。放して殺して下さんせ。
新左　最前あれにも様子を聞けば、辰の年月日時に當つたは、この鬼王に忠義を立てよと、天より賜はる倅が命。其方が死んでは祐經どのゝ、お役には立たぬわいやい。
重の　タヽ、たわけ者めが。例へ辰の年月日時に當らずとも、お主を思ひ親を思ふ、忠と孝とに捨つる命。祐經さまのお役に立つまいものでもござんせぬ。放して殺して下されませい。
新左　イヽヤ放さぬ。
重の　イヽヤ放して。
ト兩人、差添にて爭ふ。ドロ〳〵になり、虛空より雲氣下がる。と新左衛門が刀自づと拔け出て、この脇差を打折る。これにて、三人思ひ入れ。
新左　ハテ、合點のゆかぬ。いま娘が自害を止めんとなせば、某がこの刀、自づと拔け出で、これなる一腰を二つに切り折り、虛空に一つの雲氣を生ず。それより思ひ當りし事こそあり。その上、源の爲義公の御時、御寢所に

於て獅子の子小烏丸、二つの劍抜け出て、打合ひしを見給へば、日頃は二分ばかりも長しと覺えたる小烏丸、獅子と同じやうになりけるゆゑ、また獅子の子を友切丸と名け給ふ。その爭ひに劣らざる。この場の不思議。すりや、日頃念ずる友切丸は、この一腰にてありけるか……ハテハテ、稀代な事を見るものぢやなア。

ト新左衞門、雲氣消えると、ドロ／＼止む。三吉、蔭より折れたる白刃を手拭にて卷き

三吉　南無阿彌陀佛。

ト思ひ入れにて腹へ突ッ込む。

新左　ヤア／＼、何ゆゑあつて生害なす。仔細があらう、樣子はどうぢや。

重の　この憂き目を見まい爲、つれなう云うたは歸さうと、思ひし事も皆仇事。何ゆゑ死ぬのぢや、譯を聞かしてたもいなう。

三吉　父樣姉樣、例へこの場は生き延びても、死なねばならぬこの身の上。

兩人　ヤ……、なんと。

三吉　最前あの山形屋儀平次とやらに、打ち打擲の難儀を、側で見て居る氣の毒さ。親子の緣であつたやら、どうぞと思ふ心から、わしやこの金、盜んで來たのぢやわいなう。

兩人　エヽ。

三吉　先刻に姉樣と聞いた時、お役に立てゝ下されと、進ぜたいは一杯なれど、親方の物匣一つ、粗末にすなとの御意見ゆゑ、どうも遣らうとも云はれず、見せびらかして居ましたわいなう。申し姉樣、この金で父さんの御難儀を、救うて下されませ。父樣、盜みする氣はなけれども、お前の爲に盜んだこの金。お免しなされて下されませい。

重の　乙松、出かしやつた。この金ゆゑに、今宵手に入る逆澤瀉の鎧。其方の心は屆いたぞや。

新左　辰の年月日時に當りし、其方が生血、一方ならぬ忠と孝。流石鬼王新左衞門が悴、よう死んでくれたなア。

三吉　有り難うござりまする。又この上に母樣に、逢はぬが心がゝり。母樣のお顏が見たい。姉樣、母樣によう云うて下さりませ。わしやモウ目が見えぬ。父樣姉樣、おさらばでござりまする。ア、……。

ト死ぬ。

新左　コリヤ／＼、心付けい乙松。父ぢや、鬼王ぢや。新

左衞門ぢやわいやい。最早縡切れたか。

重の　ハア〳〵。

ト兩人、思ひ入れ。後に小五郎兵衞、長吉、出かゝり居て

小五　初めて知つたる鬼王が忰、幼名は乙松。

長吉　三百兩の金と云ひ、不思議に手に入るその生血。

小五　孝と云ひ

長吉　忠義と云ひ

兩人　健氣な最期であつたなア。

新左　忰が最期をば賞美下さる

重の　其許樣は。

小五　京で育ちし京の次郎祐友。

長吉　曾我の五郎時宗。

重の　お二人樣。

長小　鬼王。

新左　ハテ珍らしい

兩人　參會ぢやなア。

長吉　疾にも斯く知るならば、仕樣もやうもあるべきに、不便な最期を遂げたなア。

小五　不思議に手に入る乙松が生血。いよ〳〵祐經本腹なし、五月下旬お狩場へ立越え、その折からは曾我兄弟、年來の本意を遂げなば、この上もなき彼れが忠義。持つべきものは忰ぢやなア。

新左　主人を思ふは親も子も、忠義の心屆きしにや、初めて知つたる友切丸、祐經さまへ、お渡し下されませう。

ト長吉、取つて

長吉　ナニ、これが友切丸……紛ふ方なき源家の重器。汚名を雪ぐ曾我殿原。時宗しかと受取つた。

新左　祐友さまに忰が生血、お渡し申さん。

ト最前の花瓶を持つて來て側に置き、刀を逆手に振り上げる。重の非、縋つて

重の　マア〳〵、待つて下さりませい。

新左　未練な事を。

重の　コレ待つた。

へ待つて下され由兵衞どの、死顏なりと今一目、姉おや小梅ぢや、さぞわしどもが憎からう。お主の爲めと諦らめて、未來は浮んでたもいのと、もだへ嘆くぞ道理なり。

ト此うち重の非を膝に敷き、乙松が血汐を花瓶へ移し

新左　忰が生血、イザ、お受取り下されませう。

小五　辰の年月日時に當る、乙松が血汐、祐友慥かに受取

つた。

長吉　我れ〱ゆゑに命を捨てし乙松、兄弟へ時宗が寸志。

ト小指を喰ひ切り、淺黄むらの片袖へ、夫婦は二世と書いて引切り、重の井へ渡す。重の井、これを見て

重の　夫婦は二世。

新左　なんと。

長吉　夫婦は二世の固めの片袖。

重の　有り難うござりまする。

新左　親子は一世。

長吉　夫婦は二世。

小五　主從三世の死別れ、結びも留めぬ亡き魂の、歸り來んとは思へども

長吉　定めなき世に定めなき

重の　人の命は草の露。

新左　葬禮がましき事なくとも、せめて闇路を晴らす爲、門火々々。

ト重の井、柴垣を手折つて來り、火鉢にて焚く。

〽附木のありたけ取集め、行燈の火にさしつければ、ぱつと燃え立つ光明の、十萬世界を照らすなる。

皆々　南無阿彌陀佛。

〽念佛を力に出でて行く、無常の風も音立たぬ、義理は夫婦が胸と胸、心ばかりの手向け草、野邊の送りぞ哀れなり。

ト淨瑠璃のうち、長吉、友切丸を受取り、重の井と心意氣あつて花道へかゝる。

長吉　さらば。

ト三重にて、長吉、思ひ入れして向うへ入る。上の方の亭屋體の内にて

儀平　經若丸觀念。

ト障子へ血汐かゝる。この血汐、掛樋へ傳ひ手水鉢へ流るゝ。最前市郎兵衞が置きたる掛樋の鷄聲を發す。これに合せて方々にて鷄の聲する。障子上がると、儀平次、春野を抱へて居る。喜瀨川、儀平次を抉つて居る見得。

皆々　これは。

儀平　女と侮り、やみ〱と手にかゝるか。エ、、口惜しい。

喜瀨　お主の仇に替へられうか。覺悟をしや。

ト喜瀨川、儀平次を刺し留める。奥にて

市郎　契約の八ツの上刻。經若丸が首受取らう。

ト大小の合ひ方になり、市郎兵衛、上下衣裳、大小にて、首桶を抱へ、同じく慶政、上下衣裳にて、兩人、出る。

小五　合點のゆかぬ御兩所の出立ち、御本名お明かし下されませう。

市郎　夢の市郎兵衛とは、經若丸詮議の爲。誠は鎌倉の武夫、姉輪の平次景行と云ふ者だワ。

慶政　鷄大藏慶政とは僞り、經若丸が檢視の爲、姿を替へて入込みし、近藤七郎國平。

市郎　首打つ役は姉輪の平次。

慶政　檢視の役はこの國平。

兩人　經若丸觀念。

喜瀨　斯くまで傾むく御運の末。今まで包みしお身の上も、退引きならぬこの場の手詰め。成る程、推量の通り、義經公の御公達經若丸さま。斯く云ふわたしは、佐藤忠信が娘、信夫と云ふ者ぢやわいなう。

兩人　さてこそ。

喜瀨　名乘り開かす上は、若君樣、祐友さま、おさらば。

ト小五郎兵衛が差添にて自害しようとする。

小五　コリヤ待て信夫。この場に於て其方が死ぬとも、若君樣のお役に立つか。

喜瀨　サア、それは。

小五　女子心の迴るは尤も。さりながら、若君樣の御先途も見ず、いま生害なさんとは、たわけ者、早まるまいぞ。

喜瀨　死ぬに死なれぬこの身の上。こりやマア、なんとせうぞいなう。

慶政　時刻が移る。經若丸、覺悟召されい。

春野　遁がれ難なき我が運命。疾から覺悟極めて居る。死恥を晒さんより、イザ兩人、用意よくば、經若丸が首を早う討て。

慶政　よい覺悟だ。近藤七郎國平が、たつた一討ちに御首賜はるでござらう。

ト立ちかゝる。

市郎　お待ちやれ國平、おてまへは檢死の役。介錯はこの姉輪、身共を差措き、何をおしやる、扣へ召されい。經若丸、もう叶はぬ。お念佛でも申さつしやい。賽の河原へやつてくれべい。

ト小五郎兵衛、喜瀨川、思ひ入れ。

何を眼に角ぶッ立てゝ、鎌倉よりの上使、姉輪の平次を、なんとせうと思ふのだ。こな素浪人めらが。手向ひひろ

ぐと、鎌倉どのへ敵對も同然だぞ。サア、經若丸、お命を賜はりまするぞ。

春野　南無阿彌陀佛。

市郎　經若丸觀念。

　ト春野を廻し、三吉が首を討つ。

皆々　それは。

市郎　九郎判官源の義經公の御公達、經若丸の御首、姉輪の平次が首討つたワ。

慶政　待つた。打つて替へたる姉輪が有樣。こりやア聞えた、二心だな。爭つても爭はれぬはこの繪姿。似ても似つかぬその似せ首。それを經若とは。

市郎　いんにや、經若丸と名乘つた似せ者。眉尻の痣に氣が付かぬか。

慶政　ドレ。

　ト春野を引ッ捕へ、繪姿に引合せ

　思ひも依らぬこの痣は。

市郎　なんと、人相書とは違つて居やうが。誠の經若丸の御首、某が受取つた。

皆々　忝ない。

慶政　いんにや、さうはならない。痣があらうがあるまいが、誠の經若丸はこの餓鬼だ。尋常に名乘らねば、火水の責め拷問する。餓鬼め、うしやアがれ。

　ト春野を引ッ立てようとする。立廻りにて、市郎兵衞、慶政が首をポンと打ち落す。

皆々　これは。

　ト市郎兵衞、刀を納め、三吉が首を首桶に入れ、これを抱へて、靜々花道へかゝる。

市郎　乙松ならぬ經若丸の御首。姉輪の平次が受取つたぞ。訴人の褒美。

　ト市郎兵衞、金の入りし財布を投げつける。新左衞門、取つて、

新左　この金は。

市郎　乙松どのゝ追善供養。

皆々　忝ない。

市郎　方々、さらば。

　ト三重にて、平次、悠々と花道へ入る。

小五　これより直ぐに我が君の御供なし、知るべの方へ落ちられよ。

新左　伜が亡骸、野邊の送りを、娘、合點か。

重の　心得ました。

ト奥より、武兵衛、出て

武兵　經若丸待て。似せ首を持つて、鎌倉どのを欺くと云ひ、殊に忠信が娘信夫、山形屋儀平次を手にかけ、人殺しの罪は遁がれぬ。片ッ端から動くな。

新左　身に應ぜぬ詮議立て。汝も本名なくては叶はぬ。サア、尋常に名乘るまいか。

武兵　如何にも名乘つて聞かすべい。我れこそ平家の大將、能登守どのゝ御内にて、一騎當千と呼ばれたる、鬘の菊王とは、おれが事だわやい。經若丸、觀念。

小五　愚かや、汝も同じ鎌倉の怨敵ならずや。我が君へ手向ひなすと、眞二ッだぞ。

武兵　エヽ面倒な。うせろ。

トかゝる。立廻りにて、新左衛門、しやんと隔て、皆皆見得にて

新左　動くな。

先づ今日はこれぎり。

國色和曾我（終り）



次頁『大商蛭子島』紋番附

一、御町中樣益々御機嫌能被爲遊御座恐悅至極奉存候隨而此度文覺上人勸進に依而源氏再興の見世開仕候狂言の儀は源平盛衰記石橋山合戰より鎌倉入り勸賞迄隨分入念奉入御覧候別而當分は曾我物語の役人趣向めづらしき品澤山に仕入仕候間相かはらず御贔屓被成下賑々敷御見物に御出の程偏奉希候已上

辰の霜月朔日　成田屋重兵衛

東講御江戸榮

大商蛭子島

四番續



「大商蛭子島」初演繪番附

大商蛭子島

第一番目三建目　伊豆權現の場

役名――白拍子風折實ハ鎌田正淸娘、淸瀧。江間小四郎義時。祐信妹、梛の葉。近江小藤太成家娘、眞弓。河津三郎祐安一子、箱王丸。長柄四郎義景。藍澤彌五郎重俊。三島の入道茯苓。海老名源八季門。瀧口三郎經利。土肥次郎眞平。馬方、眞鶴の吉。飛脚、空目飛藏。損料屋、猫又與兵衞。八幡三郎行氏。伊藤祐親入道寂心。河津三郎祐安。俣野五郎景久。工藤金石丸祐經。

本舞臺、伊豆權現の廻廊、東西の見附け柱、紅白の梅の木、所々に石燈籠据ゑてあり、上の方に瀧口三郎經利、大小上下衣裳にて、三方に幣帛を載せ持つて居る。下の方に海老名源八季門、同じく上下、衣裳、三方に幣帛を載せ持つて居る。眞中に小藤太成家娘眞弓、衣裳着流し後ろ帶にて、簑を肩に掛け、竹笠を持ちて、兩人を支へて居る。左右に長柄の四郎義景、藍澤の彌五郎重俊、上下、衣裳、弓矢を持ち、立ちかゝつて居る。下の方に神主、白丁の宮奴大勢立ち並び、笛を入れたる祝詞にて、賑やかに幕明く。

義景　女め。

皆々　動くな。

眞弓　待つた、聊爾なされまするな。怪しい女ぢやござりませぬぞ。

經利　忝なくも平相國淸盛入道、淨海公の御恩澤萬國に溢れ、上御一人より下萬民に至るまで、その仁德を謝せんが爲

季門　當八ヶ國の若殿原。當社伊豆權現、まつた箱根權現、兩社の神慮をすゞしめ、平家の御武運長久の御神樂。

義景　殊に以て伊豆箱根の神體は、彥火々出見の命にして、武家一統を守りの御神。

重俊　さるに依つて、伊豆相模の大小名、當社に參籠して、今日の祭禮、不淨に不淨を拂つたる、大切の神事の庭へ

經利　見れば賤しい賤の女の、簑笠に面を隱し、神事の場所へ、紛れ込みしは訝かしい。

季門　何ゆゑあつて、神前間近く忍び込んだ。仔細があらう。女め、サア、尋常に吐かせ、エ、。

眞弓　お歷々のお尋ねに、あづかりまするやうな、仔細のある女ではござりませぬ。この伊豆權現樣は、武運を守りの御神と承りまして、主親の爲に、忍んでの參詣。なんにも怪しい者ぢやござりませぬ程に、いづれも樣、お放しなされて下さんせいなア。

經利　いんにや、ならぬワ。當國へ流人となつたる、右兵衞の佐賴朝同樣、淸和源氏に由緣ある、女と見たに違ひはあるまい。

季門　側へ源氏へ、心を通ずる侍ひにもせよ、當時平家の御威勢に歯が立つものか。見咎められたが百年目、詮議したその上で

義景　もし源氏侍ひの娘なら、引ツ括つて拷問する。やだアと吐かせば、これ見たか、流鏑矢に用ひるこの弓矢で

季門　われがどてツ腹へ風穴明くが、らぬが主親の本名を、明かすまいか。

眞弓　イエ〳〵、どのやうにお尋ねなされましても、氏素性のあるやうな者の娘ぢやござりませぬ。どうぞお免しなされて下さんせいなア。

經利　何にもせよ、怪しい女に極まつた。ソレ、引ツ立て召されい。

季門　心得てござる。遁がれん所だ。女め。

皆々　立て、エ、。

ト向う幕の内にて

茯苓　小父さん達、一番待つておくれなさいよ。

ト大太鼓入りのあばれ、丹前の出になり、三島の入道茯苓、總坊主、羽織、衣裳、莫大なる形にて振つて出て來る。後より奴の宗、同じく富、條、村、いづれも一對の奴にて、附いて出て來り、皆々直ぐに本舞臺へ來て、茯苓、眞弓を圍ひ、しやんと留める。

皆々　どこだ。

經利　待て〳〵。こりやア誰れだと思つたら三島の入道。いま我れ〳〵が、怪しい女を引ツ立てる所へ

季門　待てと聲を掛けてお出やつたが、御しんの程が訝かしい。なぜ我れ〳〵が引ツ立てるを支へるのだ。

義景　三島入道、

皆々　茯苓もし。

茯苓　茯苓だ〳〵。土茯苓だ。先づ顔見世は、一陽來福りうと改まる。これ時藥の正月にて、めでたき時に黄連葛根、この小僧めも此お庭へ、踊り新參、辰砂、大黄、麻黄、寄つてかゝつてその女の、詮議を升麻と引ツ立てる、所へ枳殻の茱が、貰つた木香、白朮の、びやくらい料簡紫蘇、陳皮。まけて三稜、甘草五兩、甘い詞の其うちに、逃がしてやりな細辛、獨活。人の川芎頭痛に病む、肉桂、棗と思さうが、これも愛敬茴香に、桂枝けいはく手を地黄に、下げても我慢の莪朮をはり、びく芍藥と騷ぐが最期、獨參湯でもいけないぞ。なんと生姜を一へぎ入れ、憂き目に黄耆、熊の膽の、苦い藥を飲まぬうち、止めるが其方も薏苡仁、野暮な羌活とり措いて、そこは大通、木通に、騷ぐがこの場の天門冬と、ホ、敬つてつん出るこんだ。

奴宗　なんと、みんな聞いたか。おらが旦那茯苓さまは、中々の物識り樣ぢやないか。

奴富　さうだ〳〵。あのやうなむづかしい事をよく仰しやつたが、日頃から物覺えのよいお方だに依つてな。

奴森　そこへ、開き直つてつらねかけさつしやると、おらア側で、ハア〳〵と思つて居たわえ。

奴村　イカサマ、顔見世は怖いものだ。すつぱりとやらしつたが、どこぞに物覺えのよい藥店でも出たかしらぬ。

奴森　おれも一服服みたいものだ。

茯苓　おきやアがれ。こんたつらねはお茶の粉だ。外郎賣りの白でもやるものぢやアない。拙者親方と申すは、お江戸を立つて二十里上方、相州小田原外郎、男女の花のお江戸の花外郎、この花を見て

　ト眞弓が手を取り

お心が味になるみの五郎四郎。

經利　コレ〳〵、入道。モシ、其やうな思ひ附きは後へ廻して、今日は關八州の若侍ひ、當社に於て、伊豆箱根兩社の御神をすゞしめ奉り、平家の御武運長久を祈りのお神樂。それに就いても、流人賴朝に心を運ぶ輩の心底を探らん爲、この瀧口三郎經利が、携へたるこの御幣帛。

季門　まつた箱根權現の御幣帛は、この海老名の源八季門が預り奉り、近々奥野の狩くらの歸るさ、伊豆相模の諸士會合の折から、源氏へ心を運ぶやつらにこの御幣帛を捧げさせ、心腹を吐き出させる湯起證、誓紙に等しき神祕。

茯苓　成る程、そりやア好い思ひ附きでござる。當時伊豆權現に於て、伊藤の館を逐電した頼朝に心を運ぶは、北條を始めとして曾我祐信、三浦の一統、瘦せ浪人の工藤金石。

奴宗　その中にも、氣の知れぬ俣野の五郎景久。兄の大場と一つかと思へば、眞赤な面に似合はぬ、時々に仁義立て。

義景　そりやア河津の三郎も同じ事。親の伊藤に似もつかず、やゝともすれば頼朝が贔屓口。

經利　兩人ともに、氣の知れぬ奴等でござるて。

奴宗　イカサマ、瀧口さまの仰せの通り、その氣の知れぬ中にも、工藤金石どのは、當時盛んの平家を振り捨て

奴富　若輩にも似合はぬ、伊藤さまを所領の仇のなんと、附け狙ふとの風聞でござるが、世にはイケ太い奴もあるものでござるて。

眞弓　そりやアノ云はしやんすな。知れた事いなう。いま伊藤さまの御知行、宇佐美、久須美、河津三ケの庄は、工藤祐繼さま御代々の御領地、金石十五歳になるならば、相違なく三箇庄を渡さうと、請合うて置きながら、返さしやんせぬゆゑの事ぢやわいなア。

奴森　ヤア、この女めは、賤しいざまに似合はぬ、味な事に四文と出たな。

奴村　伊藤さまが三箇の庄を返さつしやらぬのも、主の耳ツ朶のよいといふものだ。

眞弓　そりや無理といふものぢやわいなア。人の所領をまざまざと盜み物。それ故にこそ、御主人といひ父上まで

ト思ひ入れ。

サア、知行を返して上げたがよいわいなア。

季門　おきやアがれ。うぬが世話にならぬ事に、息ひッぱるこの女め。

經利　どうでも怪しい

トかからうとする。

茯苓　コレサ、今日は大切な神事の庭、此やうなべんなごをこま附けて、何かの噂をするならばな。

ト經利に呑み込ませる。

經利　成る程、源氏方の奴等が心腹をも

ト思ひ入れ

それは兎もあれ、最早神事の刻限に間もあるまい。神主方へ、いづれもお來やれ。

季門　神主、案内。

神主　畏りました。イザ、神前へお越しあられませう。
茯苓　瀧口どの。海老名どの。
經季　いつれも同道。
皆々　先づ、ござりませう。
ト神樂になり、この人數殘らず下座の方へ入る。眞弓一人殘る。
眞弓　ても、危ふい事であつたなア。
ト向う幕の内にて
吉　ほてツぱらめ、歩びやアがれ。
飛藏　馬方、早く追つてくれろよ。
トてんつゝになり、馬の手綱を牽いて出る。この駄賃馬に瀨尾の三郎が飛脚、空目飛藏、大小、飛脚の形、胸當、ぶツ裂き羽織にて乘つて出る。乘下に鳥を一羽入れたる鳥籠附けてある。直ぐに本舞臺へ牽いて來る。
吉　サア〳〵、親方。爰がお前の尋ねさつしやる、伊豆權現樣のお宮でござる。なんと、早く來たでごんせう。サア、下りさつしやりませ。
飛藏　合點だ〳〵。世話ながら、下ろしてくれろ。
ト馬方、眞鶴の吉、抱き下ろす。
さて〳〵、この馬は埒の明かない馬だ。後の宿より二里程あるとお主は云つたが、なんだか遠く覺えた。
吉　お前も無理な事ばつかり云ふお人だ。二里餘りある所を、三十二文か四十で、戻り馬なればこそ乘せもするが、値の廉いその代り、ちつと遲い事もごんせう。
飛藏　その遲いのが身共が迷惑だ。見る通り、おらア六波羅から急のお飛脚に下つた者だが、今日この伊豆權現に神事があるゆゑ、海老名の權の頭といふお人が來てござる筈だが、お主は知つて居るか。
吉　なんだ。海老の蒟蒻だえ。旅籠屋のびらを見るやうな名だ。爰の立場に其やうな馬方は居ませなんだ。
飛藏　べら坊め。馬方ぢやアない。お大名樣だ。成る程、馬方船頭お乳の人とはよく云つたものだ。何にも知らない下司ばつた奴だ。
吉　コレ〳〵、そんなに安く云はつしやるな。馬方も馬方に依るよ。この海道で眞鶴の吉と云はれちやア、五十三次で知らぬ者はない男だ。こな樣はなんだ。たかゞ飛脚だ。馬士は馬の足で飯を食つて通るが、こなたその足をはかりに歩かずば、骨箱が干上がるであらう。そんなら餘り退いた仲でもないわえ。
飛藏　イヤ、此奴が〳〵。此お飛脚樣を下さげに見た

な。おれを何だと思ふ。當時平家の執頭第一、瀬尾の太郎兼康さまの家老職、うつ鳥次五右衛門家來の又が家來、容目飛藏といふ侍ひに向つて推參。憎くい奴だ。

ト刀の柄へ手を掛ける。

吉　ハヽヽヽ。その赤鰯をひねくり廻して、どうするのだ。慈な盛切りめが。

飛藏　イヤ、一大事を吐かしたな。もう料簡が

ト立ちかゝる。後より眞弓出て、飛藏を留める。

眞弓　マア〳〵、お待ちなさんせいなア。

吉　ヤア、こなたは。

トこなし。

眞弓　ア、コレ、わたしやこの伊豆權現樣へ、願參りに參詣したる女子でござんす。お前方の口論を聞くに忍びず、留めに出ましたのでござんす。マア、料簡なさんせいなア。

飛藏　そもじは女子か。

眞弓　知れた事いなう。

飛藏　ても美しい者な。女子の殺人なれば料簡する。馬方め、おのれ仕合せ者だ。眞二つにする所を、この女性がお留めなさるゝゆゑ、料簡するぞ、憎くい奴の。

眞弓　ハテ、もうよいわいなア。

飛藏　そもじのお留めゆゑに、料簡いたす。

吉　イヤ、料簡してもらはいでも大事ないぞ。瀬尾の家來とあれば猶の事だ。この伊豆の國へ何しにうしやアがつたか。

眞弓　これはしたり、お前さんも今日の神事に、其やうなお姿で

ト思ひ入れ。

サア、馬方なら馬方のやうに、外によい駄賃になる事を聞きにござんしたであらうがな。

吉　成る程、部屋住みの馬方、諸士の見知らぬを幸ひに、神事の庭へ紛れ込み、佐殿の

ト思ひ入れ。

サア、助けてやる仕事でも、もしあらうかと思つて來たのサ。

眞弓　そんならもう、何にも云はずに、堪忍したがよいわいなア。

飛藏　アレ、あの通りだ。そもじが堪忍しろと仰しやれば、今までの事は水にして、コリヤ、馬方。

吉　なんでごんす。

飛藏　野暮め、嘘だワ。
眞弓　さうお心が解け合うて、わたしも嬉しいわいなア。
吉　時に、お飛脚樣、お前は當國へ何の用で下らつしやります。
飛藏　おれが御用で下つた譯は。
トあたりを見て
コレ〳〵、馬方、その馬に附けて來た大切な狀箱を取つてくれ。
吉　なんだ。馬に附けた狀箱を取つてくれろえ。狀箱を馬に附けた覺えはないが。
飛藏　イヤサ、附けた筈だよ。狀箱を取つて、爰へ寄越せよ。
吉　お前も無理ばつかり云はつしやる。
トうろ〳〵する。飛藏じれて
飛藏　エ、、これほど爰にあるものを。
ト馬より下ろしてくる。
眞弓　そりやアお前、鳥籠ぢやアごんせぬかえ。
吉　その鳥籠を狀箱とは。
飛藏　サア、この謂はれ因緣は、おれも白鷺ぢやアないこの鳥を、狀箱と云つて遣はされた旦那の御心底、合點がいかねえ。
吉　そんなら、何と云はつしやる。瀨尾どのより海老名權の頭どのへ、この鳥を狀箱とて。
ト取りにかゝるを突き退け、籠を取上げ
飛藏　こりやコレ、大切な狀箱だ。
吉　でも、その籠を。
ト隔てる。奧にて「神事の刻限」と呼ぶ。
眞弓　コレ、ソレ、あれを聞かしやんせ。最早神事の刻限とや。
吉　供に紛れて諸士の風說。
飛藏　おれも假屋へ、
眞弓　サア、ござんせ。
ト所作のかゝりの鳴り物になる。眞鶴の吉、飛藏へかかる。眞弓これを隔てる。三人よろしくこなしあつて、下座の方へ入る。ト右鳴り物にて、正面の廻廊を左右へ引分けると、九尺の大島臺を押し出す。これに祐信妹、椰の葉、振り袖、羽織、衣裳、白柄の大小、紫の置き頭巾、丹前の形にて立ち身。こなたに江間小四郎義時、若衆形、奴の形にて草履を持ち、後は松梅の飾り附け、この見得にて兩人所作。手踊りまで存分に

あつて、この所作の散らしになると、花道より「伊藤入道參詣」と呼ぶ。矢張り散らしの鳴り物を借りて、花道より伊藤祐親入道寂心、白髮亂髮、十徳法、眼袴、大小にて出て來る。土肥の次郎實平、中老、大小、上下、衣裳にて出る。後より足輕。その外侍ひ大勢附いて、皆々花道に留まる。奥より瀧口三郎經利、海老名源八季門、三島の入道茯苓、長柄の四郎義景、藍澤の彌五郎重俊出て來る。

祐親　三秋の峯雪は、花初めて白し。一夜の林霜は、葉悉く紅みなりと、誠や一陽來復の、氣候運つて今を盛りの寒紅梅、我れもこの地へ返り花、眞先かけて伊藤祐親入道、この寂心、當社伊豆權現へ社參の折から、身が後に引ッ添うたるは、土肥の次郎實平どの、神事の警衞、御苦勞に存ずる。

實平　これは姻の祐親どの。今日は當社に於て、平家の御武運祈願の爲、伊豆相模の若殿原、諸士一統に神事の營み。其許にも、ようこそ御參詣でござるな。

足輕　お旦那へ申し上げます。最早神事の今様も相濟みましてござれば、急いで神前へお越しあられまして、御尤もに存じます。

祐親　イカサマ、若殿原も先達ての參籠。イザ、實平どの。

實平　祐親どの、先づお先へ。

祐親　皆參れ。

皆々　ハ、ア。

ト神樂になり、皆々本舞臺へ來り、祐親、上へ通る。

經利　祐親どの、只今

皆々　御參詣でござるかな。

祐親　これは〳〵、瀧口海老名を始めとして、諸士の面々。殊さら今様の役人は、時政の子息江間の小四郎義時どの。

實平　祐信の妹御、梛の葉どの。御兩所ともに、御苦勞に存ずる。

義時　これは〳〵、痛み入る御兩所の御挨拶。この義時も、改名のお見得に、神事を幸ひ、見苦しき一指しを、御賞美のお詞にあづかり、忝なう存じまする。

梛葉　ソレイナア、兄さんの名代に、あられもない大小羽織、殿御出立ちの拙い舞ひ振り。お目にとまつて、お恥かしう存じまするわいなア。

經利　なんの恥かしい事があるものだ。その美しい可愛らしい御器量で、今様の所作ッ振りといふものは、堪つたものか。おらア後で見て居て、肩で息をして居たワ。

季門　こなたは肩で息をして居たか知らぬが、おらア涎で大小の柄をびつしよりにした。何か今様の振りのうちに、時々あの義時に、味な目使ひをしたが、ちつと御しんに澤村仲丁だわえ。

足輕　モシ、海老名さま、お前もきつい好きだぞ。

季門　何が。

足輕　夜角力が。

季門　おきやアがれ。夜角力の嫌ひな者が、誰がある者だ。

茯苓　それ〱。この三島の入道などは、夜角力も、晝角力も好きだよ。ナニ伊藤どの。近々奥野の狩の折から、赤澤山に於て、伊豆相模の若殿原が力量を試さんと、角力の催しがあるとの噂でござるが、誠でござるかな。

祐親　成る程、流人兵衛の佐頼朝、この祐親が心を疑ひ、娘辰姫を連れて身が館を逐電。これ將に平家を傾けんとする、叛逆の企てと睨んだゆゑ、今日の神事に事寄せ、源平の鬮を取つて、近日角力の勝負を試みるは、諸士の心を探らん爲。大場俣野と心を合せ、この伊藤が老年の思ひ立ちでござるて。

貫平　祐親どのゝ御尤もの仰せ。當時平家の恩澤を蒙むる我れ〱。日蔭者の頼朝に、誰れあツて荷擔いたす者もござるまいて。

祐親　イヤ〱、貫平どの、左やうでござらぬ。この席に連らなるうちにも、頼朝方へ心を運ぶ輩がござるて。

經利　そりやア、何者でござるな、祐親どの。

祐親　外でもない、これにお居やる、義時の親仁北條四郎時政。代々平氏でありながら、兎かく世になし者の頼朝贔屓。

義時　イヤ〱、祐親どの。諸士滿座の中と申し、そのお詞は、ちと御麁忽かと存じまする。

祐親　そりやア、なぜ。

義時　御心底潔白には見えますれど、現在其許の御息女辰姫どのは、佐殿の御寵愛厚く、御男子まで出生と承りましたが、それを見ぬ顔、知らぬ顔で、お濟ましなさるる御所存はな。

梛葉　さうでござんすとも。わたしが兄さん祐信どのも、常々その事を云うて居られますわいなア。

祐親　ハ、、、ハ、、、、。蔦雀何ぞ大鵬の心を知らん。娘辰姫を餌に飼ひ、戀のほだしを以て頼朝の腸を知らんが爲。案に違はず身が館を逐電は、謀叛の萌しに極まる。さるに依つて、平家無二の諸士を語らひ、頼朝が行くへ

詮議の眞ッ最中。今日の會合にも、件を出して出合はぬ神事。時政の心底、祐信が胸中、この寂心は呑み込まぬ。

義時　その一言こそ心得ぬ。時政に御不審は、慥かな證跡あつての事か。

祐親　證據があれば、目代たる八牧へ訴へ、時政は縛り首。

義時　何がなんと。

ト柄に手を掛けて思ひ入れ。實平隔てる

祐親　じたばた召さるな。埃が立つワ。若輩者を相手に詞爭ひ、無益の論議。これより神職方へ罷り越し、源平鬮取りの判斷いたさう。兼ねて用意の御幣帛はな。

經利　貴殿の御意の通り、伊豆箱根兩社の神職、丹誠を擢んで、二つの御幣帛、卽ち神前へ飾り置きましてござる。

季門　祐親どのにも、イザ神前へ

皆々　お越しなされませう。

祐親　左樣いたさう。若殿原も一緒に。

皆々　祐親どの。

祐親　方々、こなたへ。

ト唄になり、祐親始め皆々附いて入る。義時、梛の葉殘る。合ひ方になり、義時、跡を見送り

義時　エヽ、誠に極惡無道の伊藤入道、工藤の所領を押領し、金石に返さぬも道理、末々は佐殿の仇となるべきあの祐親。

ト奥を見て思ひ入れ。

梛葉　さうでござんすとも。わたしが父上とても、日頃からお仲の惡い伊藤さま。何かにつけて腹の立つ事ばかり云はしやんすわいなア。それはさうと義時さま、最前も奥の假屋で申した通り、御合點であらうなア。

義時　合點であらうとは。

梛葉　ソレイナア。

義時　それとは。

梛葉　エヽ、つんともう、あのなア。

トこなしある。

オヽ、恥かし。

ト袖にて顏を隱す。

義時　とんと合點がいかぬわいの。梛の葉どの、こなたはマア、何を云ふのぢやぞいなう。

梛葉　オヽ、辛氣。今日神事の今樣に、お前と二人選り出されて、斯う出たのも、よく〳〵深い緣であらうと、エヽ、モウ〳〵、よい加減に推量して下さんせいなア。

ト義時に抱き付く。最前より後へ茯苓出て、二人が濡

れを見て居て、いろ／＼こなしある。トゞ茯苓、目を廻しツンと倒れる。兩人恟りして立退き、茯苓を見て

椰葉　ヤア、こりや三島の入道さまぢやわいなア。

義時　誠に、何ゆゑ氣絶召されしぞ。入道どの／＼。

椰葉　入道さんイなア／＼。

ト手水鉢の水をすくつて來て、飲ませ、いろ／＼介抱すると、茯苓心付いて起き上がり

椰葉　お心が附いたかいなア。

義時　氣を慥かに持たつしやい、入道どの。

茯苓　これは／＼、大きに御苦勞を掛けました。兎かく近所に事なかれぢや。先づ／＼、何事もなくつて、お互ひにおめでたうござります。

ト辭儀をする。

義時　腹痛でも召されたのか。何ゆゑ正氣を失はれたぞ。

茯苓　されば／＼、聞いて下さい。こなたとあの椰の葉どのが、ちやほや／＼と、互ひの口を一所へ寄せて、何かお云やるに依つて、それを聞きたいものだ／＼と思つて、すう／＼云ふうち、氣がのぼせて、頭ばかり先へ出たやうだと思つたら、がらり目を廻してのけ申した。ア、、面目次第もござらぬ。

椰葉　それはほんとに、危ない事でござんしたなア。

茯苓　危ないとはこなたの事だ。あんな若衆の井戸の端へ寄るものぢやない。君子は危ふきに近づかず。此方へ、きなこ餅／＼。

椰葉　エヽ、コレ、何をなされまするぞいなア。

茯苓　何をするものだ。ちよつと當つて見るのだ。

ト無理に抱き附くを、義時引分ける。所へ奥より眞鶴の吉出で來り、椰の葉と入れ替るゆゑ、茯苓、椰の葉と思ひ、眞鶴の吉が口を甜める。眞鶴の吉、肝を潰し、飛び退く。茯苓も恟りする。眞鶴の吉、胸の惡きこなしいろ／＼ある。

吉　ゲイ／＼。エヽ、とんだ目に遭ふものだ。コレ、坊樣、なんの因果で舌の切れる程、おれが口を吸はしつた。そしてマア、生葱が好きかして、ウヽ、堪えられたものぢやない。

茯苓　インニヤ、おれは生葱は好きぢやアないが、一體これが持ち前ぢや。

吉　そりや御免だ。時に、坊さんの事なり、おれが若衆なら、まだ尤もな事もあるが、但しこの馬方に氣でもご

んすか。
茯苓　おきやアがれ。おれもうぬが口を餘り吸つて、どうか麥飯でも吸ひ出したやうで胸が惡い。彼方へ行きやアがれ。
吉　なぜ〳〵。
茯苓　何にも用はない。おれが用のあるのは梛の葉の君ぢや。
義時　コレ〳〵、入道どの〳〵。神事の役人たる梛の葉どのに無禮あつては。
茯苓　ハレ、無禮ぢやない。色事だ〳〵。
吉　さては上人、あの女性に戀慕れゝつか。
茯苓　れゝつとも〳〵、大れゝつだ。
吉　れゝつの筋なら、さう氣儘にはいかぬ筋だ。
茯苓　魂膽があるか。
吉　有る段か。先づ、あのお娘は若衆が好きと見えて、兎角彼方の側へ寄つて居るから、お前も若衆になる算段がよからう。
茯苓　その算段とは。
吉　先づ前髮を附けるワ。
茯苓　この坊主頭へか。
吉　待つたり〳〵。
ト茯苓が兩方の鯰髯を取つて額で結び合せる。茯苓、手水鉢で顏を見る。
茯苓　先づ前髮は出來た〳〵。時に後が詰まらぬの。
吉　その後は、これであやなす。
ト梛の葉が着たる丹前の頭巾を取つて茯苓に着せる。此うち梛の葉、義時にいろ〳〵こなしあり
茯苓　こいつは有り難い。若衆大盡と見えるか。
吉　とんと市松そこのけだ。
茯苓　そろ〳〵やりかけようワ。
吉　やりかけさつしやい。
ト茯苓こなし、こなたへ來て
茯苓　コレ、梛の葉どの、この三島入の助は、そもじの器量に首ツたけ、ほうれん草のひたし物だ。
義時　コレ〳〵、入道どの、其許は酒狂召されたか。氣が狂ひましたか。ちとお嗜なみなされい。
茯苓　斯う並んだ所は、われか、おれかといふ若衆であらうがの。コレ〳〵、拜むワ〳〵。
梛葉　知らぬわいなア。
ト眞鶴の吉、義時と梛の葉へ囁く。

サア、そりやどうなりとも。

吉　アレ、どうなりともとサ。

茯苓　エ、、有り難いワ。

吉　それも顔を見合せては。

茯苓　斯くの通り。

ト頭巾をすつぽりと冠る。

吉　ソリヤ、抱き附かせるぞ。

茯苓　有り難い〳〵。

ト此うち眞鶴の吉、顔で教へる。梛の葉心得、義時が手を取り、無理に下座の方へ連れて入る。眞鶴の吉、茯苓が兩手を取つて

吉　ソリヤ〳〵。

ト石燈籠の側へ突きやる。

茯苓　エ、有り難い〳〵。本望や。

ト石燈籠へ抱き付く。

吉　それにゆるりとござりませ。

ト神樂になり、下座へ入る。

茯苓　エ、忌々しい。古い仕組みで一杯やりやァがつた。馬蠅め、待ちやァがれ〳〵。

ト裾を引き上げ追つて入ると、本神樂になり、バツタリと音して正面の廻廊を切り破り、盜賊、忍び頭巾、眞黑出立にて、一通を咬へ、投身を引ッ下げ、ヌツと出て、あたりを窺ふ。向うにて「箱王丸參詣」と呼ぶ。矢張り本神樂にて、花道より祐安が一子箱王丸、好みの鬘、大小、衣裳にて、ツカ〳〵出て來り、花道の中程にて本舞臺の盜賊を見て、キツと思ひ入れ。扇子咬へ、しやんと股立ちを取り、振つて本舞臺へ行く。盜賊は窺ひながら花道へかゝる。これを本舞臺へ押し戻す。入れ替つて、しやんと見得になる。

箱王　黑ン坊め、待ちやァがれ。

盜賊　なんと。

箱王　顔回は飴を見て老を養はん事を思ひ、盜跖は飴を見て鍵を開かん事を思ふ。その心一ならず。いつはならずと顔見世の、一陽來復のつと出でたる、朝日に烏の眞黑出立ち。いま箱王が參詣の、目に遮るは百年目。遁がれぬ所だ、曲者め、刀の引導受けぬうち、五臟六腑をそこへ卷き出せ。返答はどうだやい。

ト思ひ入れ。

盜賊　おやツかな。こりやァ顔見世のお定まり。大事のお爺に頼まれて、神前の一通を、引ッ湊つて來た晝鳶。忍

び姿の黒出立ちは、こりやアお泥坊樣の附け目といふものだ。妨げせずと、そこ退いて通しな。

箱王　ハ、、、、。吐かしたり、むくろんじめ。その一通を速やかにおれに渡せ。やだアと吐かすと、その體へ羽根を附けて抛り上げる。羽子板でぶち殺すが、尋常に渡すまいか。

盜賊　面倒な。邪魔せずと退け。

箱王　渡せ。

盜賊　退け。

箱王　小癪な。

ト　かゝる。立廻りにて盜賊、逃げんとするを、襟髮を持つて引き戻す。見事に投げる。又かゝるを取つて押へ、一通を取つて、刀の下げ緒にて縛し上げる。

盜賊　なめら三方。

箱王　曲者め、立て。

盜賊　エ、、忌々しい。

箱王　いづれも樣、後程お目にかゝりませう。

ト神樂になり、箱王、盜賊を引ッ立て、こなしあつて下座の方へ入る。矢張り神樂にて、花道より工藤金石丸祐經、角鬘、小さ刀、長上下にて出て來る。後より八幡の三郎行氏、大小、麻上下、中股立ちにて、刀を紫の袱紗にて持ち添へ、附いて出る。花道中程に留まり

祐經　今日は當社伊豆權現の神前に於て、伊豆相模の大小名、平家の武運長久を祈らん爲、神樂を奏して會合ある由。必定伊藤祐親入道も社參あるべし。是非々々今日面談なし、三箇の庄の所領の儀を

行氏　成る程、左やう。親旦那の御知行を、横取りにした蛇親仁、白髮頭の素ッ首を押へても、三箇の庄を受取らにやア、この八幡めがお供いたした甲斐がござらぬ。イザ、神主方へお越しあられませう。

祐經　必らず短氣は望みの妨げ、節義を以て對談いたせと、くれ〳〵も近江の小藤太が教訓。諸士會合の滿座の中、何事も粗忽なきやう、合點か八幡。

行氏　畏まつてござります。

祐經　參れ。

行氏　ハア、。

ト神樂にて、本舞臺へ來る。奧より土肥の次郎實平出て來る。

實平　これは〳〵、工藤金石丸祐經どの、今日はようこそ

社參召されてござる。お供の若者は忠臣の八幡の三郎、大儀にこそあれ。

行氏　ハア。

祐經　土肥の次郎實平どのには、この程の御疎遠。いつとても御氣丈の體を見まして、大悅に存じます。從ひまして今日は、伊豆相模の若殿原、當社權現に於て、平家長久の神事の次手、賴朝公に荷擔の族を、詮議の會合と承はつたが、左やうでござるかな。

實平　如何にも。佐殿、伊藤が館を御遷幸あつて、御行くへ知れさせ給はぬゆゑ、伊藤を始め大場兄弟、八牧の判官、佐殿、叛逆の萠しなりと、草を分かつて詮議最中。

祐經　すりや、伊藤入道祐親どのも、今日の會合に

實平　來て居るとも／＼。いッちはなだつてさゝへこさへ。

行氏　お聞きなされましたか、金石さま、今日の御面談は一生懸命。是非三箇の庄をお受取りなされずば、この社內を退散は、御無用と存じます。

祐經　すりや某も武士の意地、是非受取つて立歸る。實平どの、伊藤と出會ひ致すやうの、お執成し賴み存じまする。

實平　心得申した。さりながら、六波羅のお覺えめでたき祐親入道、粗忽あつては却つてお爲になり申さぬ。たゞ穩便に、ナア、八幡の三郎。

祐經　委細承知仕つてござります。この上ともに御判斷を。

實平　何事も奧の假屋で、金石どの。

祐經　實平どの。

實平　八幡も一緒に。

行氏　イザ先づ、お入りあられませう。

ト神樂になり、三人奧へ入る。下座の方より飛藏、最前の鳥籠を持ちて出て來り

飛藏　さて／＼、大勢の諸士方を尋ねても、海老名權の頭といふお侍ひは、今日の神事に見えぬさうだ。おらが旦那も、外に使ひものもあらうに、どこにも澤山なこの鳥を、遙々あの上方から下すといふは、何ぞ樣子でもある事か知らぬ。コレ／＼／＼、鳥よ、われは知らぬか。

ト烏啼く。

なんだカアだ。これもなんぞの玉かア。

トまた烏啼く。

おきやアがれ。こりやア權の頭どのゝ屋敷へ戻つて行かざアなるまい。ドリヤ。

ト籠を持つて行かうとする。後より眞鶴の吉出かゝり居て、この籠を取りかゝる。立廻り。

わりやア先刻の馬方ぢやアないか。この籠へほてぶしをさツかけて、なんとするのだ。

吉　なんともしないが、瀬尾どのから海老名どのへ、狀箱がはりのこの烏、何か様子があらうと思ふゆゑ、おれが貰はうと思つて。

飛藏　そこでこの鳥籠へ、手を掛けたのか。

吉　小父さん、おれにくれなさい。

飛藏　否だワ。玆な畜類、寒烏め。われにこれを取られちやア、おれは身のひしくひだ。鶉が知つた事ぢやない。いらざる邪魔を四十雀、憂き目白に會はぬ鷺、早く飛ぶのがましこであらう。

吉　われがみそさゞいをぶち上げても、そのてりうそでゆくのぢやない。その鳥籠をおれに渡せ。やだアと惡く囀ると、庭籠にぶち込み白鳥させる。あやまり足鳥、鵯の、ひたきを土にすりつけて渡せばよし、切り身の仕合ひ、尾長な事を吐かすが最後、れんじやくめつと覺悟しろ。

飛藏　吐かしたり、小雀の、羽ばたきすると一掴みに、鷲熊鷹の餌食にする。鳳凰な目に遭はぬうち、山雀へでも巣を造れ。

吉　そのたわ言は鶍の嘴。鴨面倒な世迷ひ言、雁々三口、鳩のかへら鷺、川せみの、雲雀骨をぶち折るが、その鳥籠を渡すまいか。

飛藏　ひよツこめ、そこ退け。

吉　椋鳥め、退け。

飛藏　退け。

吉　渡せ。

トかゝる。立廻り

兩人　どつこい。

ト摺り鉦入り篠笛の合ひ方にて、兩人鳥籠を枷に、いろいろタテありて、トヾ兩人鳥籠を引き合ひ、籠崩れて中の烏トヒヨにて、花道の上に飛んで行く。兩人これを見るより、立廻りにて、烏を追うて花道へ入る。靜かなる神樂になり、奥より祐親入道寂心、土肥の次郎實平、長柄の四郎義景、藍澤の彌五郎重俊出て來る。後より工藤金石丸祐經、八幡の三郎行氏、小腰を屈めながら附いて出る。兩人下の方へ來て

實平　イヤ、ナニ、祐親どの、モシ、最前より其許の後に

従ひ、訴訟ありげな両人の若侍ひ。何人かと存ずれば、其許の御一家、工藤金石丸主従でござる。

ト祐親、祐經を見て

祐親　ドレ、誠に工藤金石丸祐經。そちらに居る若者は

行氏　ハア。

祐親　そちらに居る若者は、家の子八幡の三郎行氏。

行氏　ハア。

祐親　金石丸には重盛公へ給仕の爲、上京の以後は、絶えて久しき今日の參會。主從ともに、壯健の體を見て、年寄つたる寂心も滿足に存ずる。

祐經　これは〳〵入道どの、御懇情のお詞誠に、一家の端たる金石なればこそ、他事なき只今の御挨拶、千萬忝なう存じまする。

行氏　年來の御武略と申し、御仁心厚き祐親さまの御懇志のお詞。金石は元より、數なりませぬ八幡めまで、憚りながら、大慶に存じ奉りまする。

義景　さてはこなたが工藤武者祐繼の長男、工藤金石丸どのでござるか。某は長柄の四郎義景と申す者でござる。

重俊　拙者めは藍澤の彌五郎重俊と申す武骨者。以後は互ひに御別懇に申し談じませう。

祐經　ハツ、幼少の砌りより、京家の武士に交はり、武藝も鈍きこの金石。何事も御師範の頼み存ずる。

祐親　そりやア好い心掛けだ。隨分劍術馬術を、怠りなく心掛け召されい。それは兎もあれ金石丸。この度の關東下向は、六波羅の御用あつてか、但し又、私用に依つて下向召されたか。

祐經　この度金石丸が、本國へ下向仕つた、その趣意と申すは

行氏　外でもござりませぬ。祐親さま、工藤武者祐繼卒去の砌り、其許樣のお預かりなされた宇佐美、久須美、川津、三箇の庄の領地、祐經十五歳になるならば、渡されんとの御契約。その儀を申し入れしは去々年。當年祐經十七歳に罷りなれども今以て何の御沙汰もござらぬゆゑ

祐經　重盛公にお暇を乞ひ受け、本領安堵仕りたく、さてこそ下向いたしてござる。祐親どの、三箇の庄を速やかに、お返しなされて下さらば、某も喜ばしう存じまする。

祐親　ハ、、、、。主從ともに何事を云ふかと思へば、身が本領の三箇の庄、宇佐美、久須美、川津の領地を、速やかに返せとは、思ひも依らぬ其一言。人にこそ依れ、この入道、他門の所領を掠め取るやうな祐親と思ふか。

諸士歴々の中といひ、麁忽を申した、誤まつたと後悔しても、その分には差措かれぬぞ。三箇の庄は伊藤家代々の領地、この寂心が本領だワ。

兩人　ナニ、其許の本領とや。

ト思ひ入れ

實平　コレ〳〵、粗忽せまいぞ。

祐親　金石丸は幼少にて、先祖の由緒を知らぬも理り。某が父祐家は、寂運入道が嫡子にして、また金石が父祐繼は當腹の愛子、さるに依つて、祐繼が母奸計を廻らし、我が子を家督に立てん爲、祐家を毒殺して、寂運祐繼に家を讓る。某成長の後、相渡すべきと遺言するといへども、祐繼正しく父が敵なれば、宿意を遂げぬは、先祖への不幸を思ひ、無念を堪ふる星霜積つて、祐繼末期の際に望んで、某に本領を返し渡す。斯程潔白なる我が領地。仇は仇、節は節と、孤兒の其方は、六波羅どのへ申し入れ、重盛公の給仕さするも身が情。それになんぞや。三箇の庄を返せなぞとは、一家の長たる祐親に向つて、粗忽とや云はん、無禮とや云はん。主從ともに見苦しい。そこ立つて行け。

祐經　すりや其許ばかり御合點の、その由緒を云ひたてに、三箇の庄は戻されぬか。

祐親　伊藤代々の本領を、誰れに返さう覺えがない。

祐經　エヽ、そりやこなた、非道であらうぞ。

ト反りを打ちかけて、詰め寄る。行氏驚ろき、祐經をこなたへ引き廻し、祐親が前へこなしあつて、兩手を突き

行氏　御尤もでござりまする〳〵。若輩の金石丸、麁忽の段は眞平御高免なし下されませう。さりながら、祐親さま、親祐繼に離れしより、所領の一ヶ所もござらぬ祐經。重盛公に給仕は致せど、御覽の通り、主從ともに見る影もなき浪人同然の身の上。日頃御仁心の祐親さま、殊に以て六波羅の、お覺えめでたき御大家、申さば、僅か三箇の庄は馬の飼ひ料。一家の端たる祐經へ、御分地に下し置かれませうならば、生々世々の御厚恩と、ナ、若旦那。

祐經　ムウ。

ト思ひ入れ。行氏押へて

行氏　コレ、有り難う存じ奉りまする。

祐親　イヤ〳〵、八幡、其やうな詞巧みに乘るやうな入道ちやないぞ。僅か三箇の庄と侮しても、宇佐美、久須美

は伊藤が本領、一所の分地も思ひも依らぬ。
行氏　すりやこれ程に詞を盡し、金石が身の上の瑕瑾となるべき恥辱まで、利害を說いて申し上げても。
祐親　いつかな、叶はぬ〳〵。
行氏　どのやうにお願ひ申しても。
祐親　くどいワ。
行氏　チエ、こなたはなう。

ト摑みかゝらうとする。祐經、行氏に縋り、引き廻して扇子にて打ち据ゑ

祐經　慮外者めが〳〵。
行氏　待つた。お待ちなされい、金石さま。思ひも寄らぬこの御打擲は。
祐經　伊藤入道寂心どのは、この祐經が爲には誰れ人。一門の御老年といひ、某が爲には養父も同然。主ともいふべき祐親どのへ、過言を吐いて無禮の振舞ひ。打擲なしたが誤まりか。

ト行氏、祐經が顏をヂツと見る。互ひに涙を持ちながら

行氏　重々誤まり入りましてござりまする。
祐經　祐親どの、八幡が無禮は、御覽の通り、打擲いたした。これにて御立腹を宥められ、父が所領の一所なりとも、御厚志にあづからば、草葉の蔭の祐繼も、さぞかし滿足に存じませう。どうぞこの儀を。
祐親　罷りならぬ。
祐經　人前の耻辱を捨て、斯程にお願ひ申しても。
祐親　開く耳持たぬ。
祐經　すりや、どうあつても。
祐親　一所も返す覺えはない。

ト祐經、行氏手を取り合つて、ヂツと思ひ入れ。

祐經　斯くまで武運の拙きものか。
行氏　若旦那樣。
祐經　八幡の三郎。
行氏　頼み少なき
兩人　身の上ぢやなア。

ト兩人思ひ入れ。ト花道より損料屋猫又與兵衞、木綿やつし、羽織を着たる町人の形にて、ツカ〳〵出て來り、直ぐに本舞臺へ來て、祐經、行氏を見附けて

與兵　ヤア、金石どの。八幡どの、爰に居さしつたか。

ト兩人恟りする。

行氏　こなたは熱海の與兵衞どのか。

與兵　與兵衞どのか。與兵衞が面をよく見忘れずに居たの。コレ、八幡どの。三郎どの。四五日あとに、おれが所へ泣き込んで、明日一日主從二人の形を拵らへてくれろ、頼むと云つて涙をこぼしたに依つて、侍ひのあのやうに云ふは、むじつこい事だと思つたから、下着から上着、上下にまで、急に定紋を附けて貸してやつたを忘れはしまいの。

行氏　コレ〳〵、與兵衞どの。日限を違へたは段々の不調法、申し譯もない仕合せながら、見らるゝ通りお歷々の參會。滿座の中で、こなたにそれを云はれては

與兵　外聞が惡いか。恥かき道具か。よくそんな世迷言をまけ出すの。滿座の中であらうが、千歳樂であらうが、それに頓着はない。もうちよつとの事はさて措いて、一時も待つ事はならない。サア〳〵、脫いでもらふべい脫いでもらふべい。

行氏　サア〳〵、尤もぢや〳〵。尤もは至極なれど、約束の延びたその譯は、先達てこなたにも云うた通り、三箇の庄さへ此方の御知行になりさへすれば、今の御恩はキツと報ずる。今暫らくの所を料簡して。

與兵　コレサ〳〵、料簡したら其方の勝手はよからうが、おれが勝手が惡い。每日損料を一貫五百か六百も取らうと思へばこそ、齷齪と拵らへて貸したものだ。いくら催促に行つても、二人ともに留守を使つて、損料も寄越さにやア、小袖も返さない。それで世の中が濟まうと思ふか。イケ圖太い。こなたもいゝ面の皮で、まち〳〵と猿が稗を採んだやうに、それでも武士かよ。侍ひかよ。こんな事を云やア、互ひに愛想が出て惡い。返して下さい。返してもらふべいぞ。返しやれの。なんの事だ。風吹いたおさぶでござるわい。

實平　ハテサテ、氣の毒千萬な。

義景　ハ、ア、そんなら金石主從は、損料借りで表を張るか。併し知行がなくば、食ふべきしがくがあるまいサ。

重俊　道理で、伊藤どのをねだりに來た。なんぼぎしや張つても、借錢乞ひに逢ふと蛭に鹽だ。

兩人　ハ、、、、。ハ、、、、。

祐經　八幡の三郎。この面目はなんと雪がう。どうせうぞいやい〳〵〳〵。

行氏　お氣遣ひなされますな。常々目を掛けて、心安うしてくれられまする與兵衞どの、無得心な事も致されまい。ナア、與兵衞どの、何事も拔目のない其許なれば、斯程

に申す我れ〳〵心の內を推量して、幾重にも今日の所は料簡して

與兵　ならないよ。蟲のよい男だ。そんなにぬらくらとあやなしかけても、口先に乘るやうなおれぢやアない。名さへ猫又與兵衞だわな。どなたの爲でも遠慮はない。早く脫ぎやれよ。これ程に云ふ事だから、貸した金は料簡する。四の五の云へば、手を出して引ッ剝ぐによ。

行氏　サア、そこがお賴みぢや。若旦那はお年がゆかいで。お心の附かぬ事もあらうが、拙者がこれ程にお賴み申す事だ。どうぞ料簡を附けて、賴みますわいの〳〵。

與兵　ならない〳〵〳〵。おれが否と云ひ出しては、八萬奈落の自身番から、閻魔大王が革羽織を着てわりに入つても否だ。サア〳〵、金石どの、その縕袍を脫がつしやい〳〵。

祐經　サア、これは

ト行氏と顏見合せ、思ひ入れ。

與兵　但し、三郎どのから引ッ剝ぐべいか。

行氏　サア、それは。

與兵　面倒だ。いつそお主から脫ぎやれよ。

ト祐經にかゝる。後より眞弓出て、與兵衞を止め

眞弓　マア〳〵、待つて下さりませいなア。

祐經　ヤア、其方は眞弓か。

行氏　爰へはどうして。

眞弓　わたしは父さんの小藤太どのゝ云ひ附けで、權現樣へ願參り、何かの樣子は承りました。コレ、與兵衞さんとやら、內證の入り譯は、わたしがどうともする程に、どうぞこの場は機嫌よう、戾つて上げて下さんせいなア。

與兵　こなたは誰れだ。

眞弓　サア、わたしは、あなたに由緣のある女子ぢやわいなア。

與兵　この二歲どのが云ひ譯ぢやア、ちつとも料簡しないが、女中の賴みなら、合點しまいものぢやアないが、こなたはこの出入りの方を附けるのか。

眞弓　サア、今も云ふ通り、どうなとしてお前の心の濟むやうに。

與兵　面白い。そんならこの與兵衞が云ふ通りになる氣か。

眞弓　料簡さへして下さんすなら。

與兵　勤め奉公さつしやい。

眞弓　エ、。

與兵　女郎に身を賣らつしやい。

ト祐經、行氏、眞弓顏見合せ、思ひ入れ。
否か。そんなら埒の明かぬ相談だ。手短かに引ッ剝いでしまふべい。
ト祐經に立ちかゝる。
行氏　コレ待つた。
ト支へる。
與兵　エヽ、退きやれな。
ト突き退ける。眞弓留めて
眞弓　マア〳〵、待つて下さんせ。
與兵　面倒な。
ト與兵衞、行氏を突き退け、祐經の衣裳を取り、上下を引ッ剝ぐ。祐經、下に汚れたる紋付きの袷一つになる。面目なげに俯向いて泣き居る。眞弓介抱する。
與兵　先づ一人は方附いた。サア、二歳め、二歳どの、脫がつしやい。
行氏　成る程、この身は其許の存分にならう程に、せめて旦那のお小袖は、コレ、與兵衞どの、拜みまするわいの拜みますわいの。
ト手を合せ、泣きながら云ふ。
與兵　尤もだ〳〵。さう泣き附かれちやア、なんぼ鬼のやうなこの與兵衞でも、料簡してこの小袖を貸さないでどうするものだ、と云つたらよからうが、そんな甘口なおれぢやアない。うぬも引ッ剝ぐ。脫ぎやれ〳〵。
ト無理に行氏を押し進め、衣裳、上下を引ッ剝ぐ。これも下に襤褸の袷を着て居る。面目なきこなしあるべし。祐親、最前より此あらましを見て、せゝら笑つて居る。義景、重俊、同じやうに笑つて居る。實平、氣の毒なるこなし。與兵衞、小袖どもを一つに紮げ
與兵　これから又貸した金の代りに、二人が刀は、おれが金の代に預かる。
ト二人の刀を取りにかゝる。
行氏　こりや武士の魂ひ、この刀は
與兵　渡す事が否なら、金を返すか。
行氏　サア、それは。
與兵　なにを。グッとでも云つて見ろ。これが欲しくば金を持つて來い、二本棒めら。
兩人　でも、その刀は。
トかゝる。兩人を蹴飛ばし
與兵　忌々しい奴等だ。
ト合ひ方になり、與兵衞、刀を二腰に差し、上下、

小袖を肩に掛け、捨ぜりふ云ひながら向うへ入る。

重俊　行氏、眞弓あとを見送り、拳を握つてこなし
祐經どの、あの態を御覧じたか。ハ、、、、、。ハ、
ハ、、。

祐親　世になし者の痩せ我慢と、武士のあるまい素町人に、損料借りの衣服、上下、滿座の中で引ッ剝がれ、恥かいても恥辱とは思はぬ業濟し、家門と云ふも無益しい。不淨を拂ふ神詣でに、淺ましい態を見るも身の穢れ。ドレドレ、この入道は歸館いたさう。實平どの。

實平　先づ〳〵、お先へ。

祐親　然らば左やう。

ト行かうとする。

行氏　待つた、入道どの。

祐親　こりやア八幡、なぜ支へる。

行氏　一家に列なる我れ〳〵主從。工藤代々の本領を、こなたに押領されしゆゑ、御主人といひ、この八幡まで、斯く淺ましき今の身の上。破れたる縕袍を肩に結んでも、こなたと違つて、腸が呉葉の綾だ。綿だワ。きたない。むさい。非道を止め、三箇の庄を速やかに

祐經　この金石へお戻しあるか、祐親どの。

行氏　その返答が

兩人　承りたい。

祐親　又しても〳〵、所領を論ずる金石主從。相手になるも奇ッ怪至極。惡く妨げすると、身の破滅。咫尺の御池も、返すまいが、何とする。

行氏　狼藉なしても、いま受取る。

ト祐親に詰め寄る。

祐親　小癪の行氏、狼藉なせば、まツこの通り。

ト刀を鞘ごと拔き出し、鐺にて行氏が額を打つ。血潮流れて、タヂ〳〵となる。祐經、眞弓驚ろく。

祐經　ヤア、この八幡が面に

眞弓　この疵は。

行氏　ドレ。

ト額の血を手に受け、悸へて思ひ入れ。

雜言過言の惡口ばかりか、武士の面に疵まで附けられて、主從が絶體絶命。もう料簡が。

ト勢ひ込んで立ちかゝる。祐經も思ひ入れ。眞弓留めるを、突きのけ、祐親が前へ行かうとするを、實平留めて

實平　コリヤ待て、八幡。

行氏　イヽヤ、お留めなさるな、實平さま。

實平　粗忽者、控へぬか。大望ある主人を持ちながら、些な事に身を果すか。

行氏　何がなんと。

實平　短慮功をなさゞる譬へ。如何に若いと云うて、そこへ心が附かぬのか。マ、鎭まれ、八幡。

行氏　エヽ、大望ある御主人との御一言。五臟六腑に沁み渡つて、堪え憎いこの場所を

實平　堪忍するが身の藥。

祐經　只何事も。

眞弓　時節を待つて

行氏　今の鬱憤。

祐親　彌勒の代まで待つて居る、金石主從。

行氏　祐親どの。

ト眞弓隔てる。

祐親　いづれも、お來やれ。

ト三重になり、皆々思ひ入れあつて、祐親、靜かに花道へかゝる。實平、義景、皆々これに附いて向うへ入る。祐經、行氏見送り、思ひ入れ。眞弓留めてこなしあるべし。

祐經　エヽ、口惜しいわい／＼。

眞弓　御尤もでござります／＼。

行氏　斯く鬱憤の重なる上は、助けて置かれぬ伊藤祐親。討取らんと思へども、與兵衛めが持參なしたれば、主從が重代の二腰は、金の代りに退引きならず、

眞弓　そりやお氣遣ひなさんすな。兼ねてお主へ貢ぎの爲、下田の遊女町へこの身を沈めん心の覺悟。金調へて、今の御無念を、晴らせ申したうござんすわいなア。

行氏　すりや、傾城奉公に身を沈めて。

眞弓　お主のお爲、親への孝心、身を捨てゝこそ浮かむ瀨もあれ。

行氏　出かし召された眞弓どの。さりながら、貧は諸道の妨げとは、誰がいつの世の詞なるぞや。この艱難も祐親ゆゑ。主從刀を請け戻さば

祐經　時日を移さず、今の鬱憤。

行氏　晴らす時節は奧野の狩倉。小藤太成家と心を合せ、歸りを待ち請け、赤澤山に身を潛し、椎の木三本小楯に取り

祐經　伊藤親子と見るならば

眞弓　一のまぶしは近江の小藤太。

行氏　二のまぶしはこの八幡。幸ひありあふ流鏑の、この弓矢こそ天の賜物。

ト幕明きの弓矢を取上げる。

眞弓　面を隱すこの蓑笠。

ト同じく蓑笠を取上げる。

行氏　只この上は、伊豆箱根の神慮を仰いで、所領の仇。

祐經　伊藤を一矢

行氏　コレ。

ト三人思ひ入れ。後へ伊藤入道の足輕出掛かゝり居て

足輕　金石覺悟。

ト祐經へ切つてかゝる。立廻りにて祐經、足輕を見事に切り倒す。

行氏　お出かしなされた。

祐經　兩人、續け。

眞弓　ハ、ア。

トかけりになり、祐經先に行氏、弓矢、眞弓、蓑笠を持ち、三人一散に花道へ入ると、神樂になり、奥より椰の葉出て來る。後より瀧口三郎經利、海老名源八季門、附いて出る。

經利　コレ〳〵、椰の葉どの。久し振りの顏見世に、さうつれなうするものぢやない。どうでごんす〳〵。

椰葉　サア、そのお心ざしは嬉しけれど、わたしやちつと願掛けがあつて

季門　ア、コレ〳〵、その前置きも久しいものだ。古風なせりふは退けて置いて、新らしくおれが心に隨ふ氣は、仲五郎か〳〵。

椰葉　お心に隨ひたいは山々なれど、今も云ふ通り、願ひある身の上なれば、

季門　そんならどうか半分は出來たやうなものだ。此方へお出で〳〵。

ト手を取つて引いて行く。

經利　ヤア、さうはならねえ。おれが抱いて寢にやアならぬ。否でも應でも連れて行く。此方へござれ〳〵。

季門　インニヤ、おれが連れて行く。

椰葉　コレ、待つて下さんせ。

兩人　面倒な。歩ばつしやい。

ト兩人、椰の葉を引立てる所へ、後より義時出て、兩人を突き退け、椰の葉を圍ふ。

經利　こりやア、江間の小四郎義時。

季門　なぜ我れ〳〵が色事の

兩人　邪魔方と、つん出たのだ。
義時　愚かや。大切な神事の庭で、女子を捕へて無禮緩怠、身のお爲にならぬゆゑ、支へたが誤まりか。
經利　おきやァがれ。われがこの梛の葉を甜めかけるに違ひない。
季門　戀の敵だ。覺悟をひろげ。
ト兩人柄に手を掛け、思ひ入れ。立廻り。
梛葉　滅多な事さしやんすな。
義時　コレ〳〵、梛の葉どの。爰構はずと、こなたは館へ、合點か。
梛葉　心得ました。さりながら、路次の狼藉、それも氣遣ひ。
義時　こなたに附ける送り手が、
梛葉　誰れぞ欲しい事ぢやなア。
ト奥より箱王丸、最前の一通を懐中して出て來る。
義時　河津の次男箱王どの。
ヤア〳〵、お前は。
箱王　おれが送つて行くからは、猪牙船に乘つたと思つて、氣遣ひさつしやるなよ。
經季　そんならわれが送つて行くか。

箱王　オイヤイ。誰れだと思ふ、ア、つがもない。
義時　そんなら其方を頼んだぞや。
梛葉　義時さん、もうおさらば。
箱王　イザ、ござりませう。
ト三重になり、梛の葉先に箱王、振つて花道へ入る。
經季　それをやつちやア
ト兩人行かうとするを、義時引留める。立廻り。奥より奴四人、てんでに鳥毛の鑓を持つて出て來る。此うち經利、季門、義時を振り切り、早神樂にて、兩人梛の葉が後を追うて花道へ入る。こなたの四人は義時を「どつこい」と押取卷く。神樂打上げる。
義時　こりや義時を何とするのぢや。
奴一　何とするとは知れた事。命を鳥毛でぶッちめるワ。十文字ざいに働らいても、最早叶はぬ鎌鑓の、鑓のしほ首この世の別れ。
奴二　冥途へやり梅、やり羽子の、痛い目をせぬ其うちに、手鑓を下げて、誤まる方が身のため鑓。
奴三　免してやりてが一ぱい酒。くだ鑓卷くとやりばなしに、この場で憂き目にあふみ鑓。
奴四　えんやらえいの木遣りでも、いけぬ所と諦らめて、

鑓玉に上がらぬうち、義時、尋常に腕

四人　廻せやい。

義時　今日顏見世の改名に、鳥毛の鑓の御馳走は、心の竹鑓すぐ鑓の、氏の面目、名の譽れ、ほんに思へば嬉しさの、變らぬ御贔屓引請けて、鑓の一曲

四人　アリヤ〳〵〳〵。ドツコイ。

ト立廻り。

義時　ヨイヤサ。

トこれより鑓踊りの唄になり、義時、四人を相手に鑓踊りの所作タテ、花々しくあるべし。トヾ四人を追ひ込む。片シヤギリにて花道へ入ると、主膳太夫の淨瑠璃になる。

〽陽春の曲の調べは高うして和し難し、實に信友の交りは、共に樂しむ盤上に、勝負を決する碁の圍み、この爭ひも君子なる、目覺ましくこそ見えにける。

ト大小入りの人寄せになると、チヨン〳〵〳〵のキツタケになると、正面の廻廊を引いて取る。一面の段幕の飾り附け。矢張りこの鳴り物にて、俣野の五郎景久、赤面大小、羽織、衣裳にて左の手に碁器を持ち、こなたに河津の三郎祐安、同じく大小、羽織、衣裳、右に碁器を持ち、前にある岩組みの碁盤に肘を掛けて見得。眞中に白拍子風折、裲襠、衣裳、傾城の形にて、軍配團扇を持ち、三人この見得にてセリ出す。

〽傳へ聞く唐土の、爛柯山の碁の眺め、彼の王質が斧の柄も、朽ちず變らぬ花の色、花の顏見世潔く、花やかなりしその風情。

景久　それ圍碁の起りといつぱ、堯の代に始まる。

祐安　我が朝にては、孝謙帝の御宇、吉備の大臣歸朝の時

風折　その器を悉く携へ給ふ。

景久　この大概は、大千世界月日の行道、二十八宿。四方に盛りし四つの目は

祐安　東西の四維に象り、まつた三百六十の石の數は

風折　一歳につもる日數の重なりて、春より先に來る春は

景久　周の正月、顏見世の、歌舞伎の花を取りあへず

風折　この岩組みの盤上に

祐安　離々たる馬目。

景久　遠々たる雁行。

風折　切つて押へて

祐安　はね飛ばす

風折　手段は花の亂れ碁や

景久　その黒白に引替へて、紅白盛りの梅の花。
祐安　これ源平の旗の色。
景久　勝負も一興。
祐安　時の興。
風折　所は伊豆の神路山。
景久　眺め
祐安　盡きせぬ
三人　景色ぢやなア。
トこなし。
祐安　誠や、碁は敵手に會うてその手計り難しと。さらば鉄らを繼ぎ掛けて置きませうかえ。
景久　ところを、斯う刎込んで、どこぞでは四鳥にかけ
祐安　四つ目殺しにならぬやうに、斯う打ち込まば
景久　斯う押へて。
ト兩人梅の花にて、碁を打つのこなし。
風折　お二人ともに劣らぬ妙手、どちらへ團扇を上げうかと、行司のわたしも、ほんに見惚れて居るわいなア。
祐安　閑碁に見惚れて山人の、斧の柄朽ちし古へも、今も斯くこそ面白き、手段を盡して打つて取る。
景久　イヽニヤ、その手ぢやアいかない。斯う渡つて、この俣野が方へ團扇を上げて見せうワ。
祐安　イ、ヤ、この河津が方へ、勝たんと石を打ちかける。
風折　手並の程の如何なれば、取るべき濱の渚なるらん。取るべき濱の
祐安　亂れ石。思ひ忘れて
景久　取り直しけん。
ト白い花の地を作る。
祐安　取り直す手に、斯う搦めて。
ト景久、盤上を見て思ひ入れ。
一手も出まいが。
風折　ソレ、河津さんの勝ちぢやわいなア。
祐安　サア、勝つたぞ〳〵。
風折　それ〳〵、白い方が、勝ちぢや〳〵。河津さんの勝ちでござんす。
景久　おきやアがれ。此べんなごめは、よく差出る奴だ。先刻からおれが氣を附けて居れば、生白けた河津が贔屓ばかりしやアがつて、はまを拾つたり、助言を云つたり、うぬはマア、どこから降つて來た引きさがれだ。今日は大切な神事の庭に、女郎は汚らはしい。あつちへうしや

アがれ、うしやアがれ。
ト無理に風折を引ッ立てろ。祐安、呆れて見て居る。
風折　コレ、待つて下さんせいなア。
景久　待つ事はならない。早くうしやアがれ〳〵。
ト風折を引ッ立て、無理に花道の中程まで連れて行つて、突き倒す。
風折　エ、、なんぢやぞいなア。
景久　忌々しい奴だ。
ト云ひながら本舞臺へ歸り來る。
祐安　コレ〳〵、俣野先生、日頃に似合はぬ、負け腹を立つとは、どうでごんす。畢竟が神事會合の慰みに、盛りの梅を碁石にして座興にした事を、さう上つてもらうては氣の毒ぢやわえ。
景久　そりやア云はないがよい。おらア何でも人に負ける事が嫌ひだに依つて、小鬢先から汗を流して打つて居るのに、あの女めが無性におれが負けるやうに、側から石を作るに依つて、そこであつちへ追拂つたものだが、コレコレ、河津、シタガ今の女めを、あつちへやりはやつたが、見れば見る程、彼奴は美しい者だに。
祐安　サア、おれも最前から、側目にヂロ〳〵見て置いたが、可愛らしい者であつたぞや。
景久　なんでも怪しい奴だ。今日の會合を幸ひに、神樂堂でも汚しにうしやアがつたに違ひない。おれがマアちよつと、先づ當つて見べいか。
祐安　それ〳〵、手のあるせりふが、聞きたい〳〵。
景久　ドレ〳〵。
ト花道へ來る。祐安、花道の角に扇をかざして見て居る。景久、風折が側へ來て
景久　コレ、女。
ト大きな聲にて云ふ。
風折　オ、、怖。
景久　そんなら、女性や。
ト小さな聲にて云ふ。
風折　わたしが事かえ。
景久　そもじの事よ。
風折　なんぢやぞいなア。
景久　なんぢやぞいなア。
風折　オ、、をかし。
景久　をかしくばお釜の前で笑ひなさい。時に、そもじは今日の神事を幸ひに、誰れぞ可愛い奴があつての御來臨

か。

風折　イヽエ。

景久　そんなら當なしか〳〵。

風折　マア、そんなものぢやわいなア。

景久　有り難い。然らば美なる女性に申すべき事の候ふ。少し色は赤く候へども、亭主に持つて德用向き、達者作りの大通男。どうだ。畜生め〳〵。抱かれて寢る氣は中村か。どうでごんす〳〵。

　ト凭れかゝつてしなだれる。

風折　エヽ、知らぬわいなア。

　ト突き放す。

景久　おきやアがれ。安くするやつサ。

　ト云ひながら本舞臺へ來る。祐安待ちかねて居て

祐安　どうぢや〳〵。今の美しい奴は、手に入つたか〳〵。

景久　彼奴は赤い者は嫌ひださうサ。

祐安　然らば入れ代つて、一問答仕らうか。

景久　よしにしたがいゝ〳〵。大通のおれさへ長棹を喰つた。貴樣のやうな野暮が行つたら、直に恥をかくであらう。

祐安　イヤ〳〵、色事ばかりは、ちつと恥をかゝねばいかぬものぢやて。

景久　蟲のいゝ男だ。おれが猪牙に乘らぬ奴が、どうして貴樣の手に入るものだ。よしにさつしやい、よしにさつしやい。

祐安　ところを、厚皮に一つ出て見る氣ぢや。

景久　ハテ、氣の毒な男でござるわえ。

　ト云ふうち、祐安、花道の風折の側へ行き

祐安　コレ、モシ。

風折　なんぢやえ。

祐安　最前からお姿を見奉るに、町風でなし、屋敷でなし、風俗、しこなし、物腰まで、山に千年、海に千年、里に千年住吉の、聞かずと知れた松の君。手練手管も意氣張りも、色客、地色の、門たち身上がり、口舌、所謂の座敷の掛引き、あらゆる全盛しつくして、たつた一人の可愛い男に、命も遣り手が目を忍び、逢ひにお出でか。その男めは、何處の何奴ぢや。どなたでごんすぞ。肖る爲に、聽聞が致したいわいなう。

　ト肩で突きながら、こなしあるべし。

風折　なアに、わたしや、其やうな浮氣な事ぢやござんせぬわいなア。今日の神事に來たも、ちつと身に替へて、

逢はねばならぬお方があつて。
祐安　そのお方といふは。
風折　アノナ。
祐安　アノナ。
風折　お前のやうな美しい、可愛らしい殿御にな。
祐安　そりやほんの事かえ。
風折　ほんぼんぢやわいなア。
　ト互ひに顏を見合せる。
祐安　ヤア、其方は。
風折　お前は。
祐安　都九條の廓で逢うた、そちや風折ぢやないか。
風折　祐安さん……逢ひたかつた〳〵わいなア。
　ト祐安に抱きつく。景久、最前よりこれを見て居て、頰をふくらし、ツカ〳〵と來て、祐安を突きのけ
景久　おきやアがれ〳〵。おらア先刻から、洒落てばかり居るかと思つたら、ほんの事をおッ始めたな。それぢやアおれが合點しない。洒落れる事におれが負けるものか。此方へ、きくらげ〳〵。
　ト風折が手を取り、無理に本舞臺へ連れて來る。
祐安　どうするのぢや。
　ト云ひながら、後に附いて本舞臺へ來る。
景久　どうするものだ。これからおれが强面を云ふのだ。コレヤイ、女め。大切な神事の庭へ、汚れた體を以て、なぜ來た。その分に差置く奴ぢやないぞ。
風折　サア、わたしが惡くば、堪忍して下さんせいなア。
景久　これがどう堪忍なるものだ。
風折　お前、よいやうに賴むわいなア。
　ト祐安へ云ふ。
景久　コレサ、何も人を賴む事はない。直に挨拶にしろ。
風折　それでもアノ。
景久　堪忍しろか。
風折　堪忍ぢやわいなア。
景久　そんなら此方へ、來い〳〵。
　ト手を取つて引ッ張る。
祐安　コリヤ〳〵〳〵。たるぬき先生、お待ち〳〵。
景久　なぜ留める〳〵。
祐安　これが留めずに見て居られるものか。可哀さうに、その女子を何處へ連れて行くのぢや。
景久　どこへでもサ。
風折　否ぢやわいなア。

祐安　此方へおぢや。
風折　アイ〱。
景久　インニヤ、此方へ來いよ。
風折　知らぬわいなア。
祐安　本鬮は、此方ぢや〱。
景久　せめて花でも取らしてくれろ。
ト景久、風折が手を取つて連れ行く。祐安支へて、風折をこなたへ連れて來る。景久また中へ入り、邪魔をする事。ト〻風折が兩手を取つて、あちこちへ引ッ張る。立廻り。この立廻りのうちに、風折、袱紗包みの位牌を落す。これを祐安取り上げる拍子に、懐中より願書を落す。景久この願書を拾ふ。はずみに賴朝の繪姿を落す。この繪姿を風折取り上げる。この仕組み、立廻り、いづれ見物へ見えるやうによろしく賴み上げ候。ト〻祐安、景久を突き倒し、風折を花道へ連れてくる。此うち景久、本舞臺にて拾ひし祐安が願書を見て居る。合ひ方。
景久　ハテ、心得ぬ。この願書の表を見れば、祐安が父伊藤入道が惡事を嘆き、伊豆權現へ祈願を籠め、再び祐親が心を廉直になさしめ給へ、もし納受なからんときんば祐安が一命を縮め、家門の鬱憤を晴らさせ、父が壽命を長久ならしめ給へと書いたるこの願書。ハテナア。
ト此うち祐安、風折、花道にて景久が心に從ふかといふやうな捨ぜりふを云ふ。風折はお側に居たいといふやうな事を云ふうち、景久は右のせりふを云ひ仕舞ふ。
祐安　この祐安が側には置かれぬ。
風折　そりやなぜにえ。
祐安　これゆゑに。
ト拾ひし位牌を出して見せる。
風折　ヤア、その位牌は。
祐安　平治二年正月三日、見入來山居士、俗名鎌田兵衞政清。風折、其方が親の名か。
風折　恥かしうござんす。祐安さま。
ト涙ぐむ。
祐安　これゆゑにこそ離緣なす。その趣意は、源家の棟梁左馬頭義朝公、野間の內海の御落命。主人の敵もえい討たず、闇々討たれし鎌田が娘、祐安が妾になるべきか。
風折　サア、それは。
ト思ひ入れ。

祐安　親の敵の在所を尋ね、本望遂げて立歸らば、その時こそ再び呼び迎へん。

風折　そんならどうでも。

祐安　本望遂げて我れに見えよ。さらば。

ト振り切つて本舞臺へ來る。風折、後より走り着いて

風折　そりや胴慾でござんす、祐安さま。

景久　イヤア、すつぽりと、契りかけたな〳〵。見れば、女がその泣き顔。もう口舌したか。泣かせるとは餘り早いぞ。あまけづいたな。

風折　イヽエイナア。そのやうな事ぢやござんせぬ。敵を討たう便りにも、都の空を遥々と、尋ねて來た甲斐もなう、本望遂げねば逢はぬとは、そりや胴慾ぢや、胴慾ぢやわいなア。

景久　今のコソ〳〵話しの紛れに、互ひに本望遂げたぢやないか。おらア兩國の帆柱丸を飲んだやうに、堅くなつてゐたワ。所詮色事はおれにはふさはぬから、やけ取持ちに取持ちかけよう。頓着なしに、喰らひつけ〳〵。

ト風折を祐安が側へ突きやる。

風折　どうぞわたしを。

祐安　ヤア、未練な奴の。敵を尋ねに行かぬか、風折。

景久　待て、祐安。敵を尋ねに行かぬかとは。

ト祐安、風折思ひ入れ。

祐安　サア、敵を尋ねいと

景久　今云つたは。

祐安　そりやア、アノなにサ。

景久　なんだ。

祐安　父が館を逐電召された、頼朝のその行くへを

景久　その頼朝は、なぜ敵だ。

祐安　ハテ、平家の爲には正しく敵。敵の末は、根を斷つて葉を枯らすのが平家のお爲。

景久　何がどうした。

ト篠笛、三味線の合ひ方になる。

祐安　平家の恩顧を蒙る、父の祐親。その嫡子たるこの河津、源氏の流人に容赦があらうか。伊藤が館を逐電は、正に謀叛の下心。今にもあれ、頼朝と見るならば、この祐安が搦め取つて

景久　インニヤ、さう巧くゆくものぢやアない。この東國には源氏累代の侍ひも大分ある。佐殿義兵を擧げ給はゞ荷擔すべいと心を配るこの時節。逐電の頼朝は、そいら

が深く匿まつて、中々お身様達の手に廻る事ぢやァな
い。

祐安　例へ何方に匿まひあるとも、當時平家の威勢を以て、上は忉利天、下は金輪奈落の底までも、尋ね探して頼朝を、三寸繩に縛し上げるワ。

景久　そりやア誰れが。

祐安　この祐安が。

景久　見ん事お主が。

祐安　おんでもない事。

景久　搦め捕るかよ。

祐安　云ふにや及ぶ。

景久　小積な事を。

祐安　イヤなにを。

ト兩人反りを打ちかけて立ちかかる。

風折　コレ。

ト隔てる。景久、祐安こなしあつて

景久　ム、。

祐安　ハ、、、、。

兩人　ム、、、、ハ、、、、。

ト兩人こなしにて笑ひ

景久　ほんに、おれとした事が、日頃から懇ろにして、一杯酒も飲み合ふ仲で居ながら、役にも立たぬ事を云ひ募つて、貴樣の思し召す所も面目次第もない。おらァ氣の毒で、ほんに赤い面が白くなりさうだよ。ハ、、、、。

祐安　イヤモウ、この祐安も同じ事。親大事、お主大事と思へばこそ、今のやうな事を云うて、ハレ、益體もない。何事も、お免しなされ〳〵。

風折　オヽ、それで落ちついたわいなア。わたしやどうなる事ぢやと、ハア〳〵思うて、痞へが差込みさうであつたわいなア。

景久　おれもさうよ。日頃の氣質に似合はぬ河津先生が、佐殿を搦めるのなんのと云つたに依つて、つい今のやうに、いかいたわけの。

風折　イエ〳〵、なんぼ俣野さんが今のやうな事を云はしやんしても、心の底は、お前が頼朝さんを搦める心であらうがな。

景久　何がなんと。

風折　その證據はこの畫姿。

ト最前の繪姿を出して見せる。

景久　ヤア、その繪姿を。

ト取りにかゝる。立廻り。

風折　待たしやんせ。頼朝さんのこの繪姿を、持つて居やしやんすからは

祐安　兄の大場と心を合せ、佐殿を討ち奉らん俣野が奸佞。口と心の表裏侍ひ。誠の武士の刀の切れ味試みさゝうか。サヽヽ、なんと〳〵。

景久　待て、河津、早まるな。僞はり表裏を云ふやうな俣野ぢやアない。生れついての一徹短慮。武骨、不器用、癇癖はおれが持ち前。その代りに、腹腸が水晶輪。曇らぬ所は、カウ〳〵〳〵。

ト風折が持つて居る繪姿を引裂き捨て

まツこの通りの我が心底。

風折　そんならお前は頼朝さまを

祐安　討つて捨てるはこの祐安。

景久　インニヤ、それも僞はりだ。

祐安　何を以て僞はりとは。

景久　噓の證據はこの願書。

ト最前拾ひし願書を出して見せる。

祐安　ヤア、大切なこの願書を。

景久　これでも佐殿を搦め取る氣か。

祐安　人に知らさぬ我が本心。イデ、その願書を。

ト取りにかゝる。立廻り。

こりやア渡さぬ。

ト突きのける。風折、中へ入る。景久、祐安左右へしやんと留まる。これより三味線、角力の合ひ方になる。兩人角力の立廻りよろしくあつて、トヾ願書を開き、兩方へ引ツ張る。眞中に風折立ち身。

景久　待て、祐安。父の非道を諫めかね、伊豆權現へ祈誓をかけ

風折　お命縮めるこの願文。

祐安　浮世の節義にこの身を捨て、父への孝道、二つには末代氏を殘さんばかり。

景久　そんならどうでも、親の爲。

風折　子孫の爲にお命を

祐安　捨て身の大願、感應あつて、伊豆、箱根、兩社の御神、直ちに奇瑞を見せしめ給へ。

ト景久の持つて居るのを突き退け、祐安、願書を一つに持つ。景久直ぐに取りにかゝる。立廻り。ドロ〳〵仕掛けにて、願書パッと燃え上がる。風折こなし、祐安、合掌する。景久飛び退き、手を組んでキッと見得

各々よろしくあつて　ちよん〳〵引幕

第一番目四建目　石橋山の場

淨瑠璃「眞田帯闇の組打」富本連中

役名――烏帽子賣り、烏丸お京 實ハ岡部彌次郎時元娘、照葉。祐信奥方、玉琴。天野藤内遠景妹、歌形。土肥彌太郎遠平妹、八重機。伊藤九郎祐清娘、三崎。菊綴源吾妹、寄木。佐々木三郎盛綱娘花園。土屋三郎妹、浪の戸。飛藏 實ハ長尾新六定景。盗賊、天城の鬼夜叉。祐信家來、梅澤左仲太。盗賊、藍澤の瀧夜叉。五平次倅、賴朝長六。新吾爲景。俣野五郎景久妹、誰ケ袖。眞田與市義貞。

本舞臺、三間の間、卒都婆を結ひ込みし柾の垣。後ろ一面の黒幕。上下に稻村を飾りつけ、隨分手輕く引き勝手よき道具立て。チヤン〳〵にて幕明く。ト西の方より序幕の烏、舞臺の高欄へ引いて取る。これを追ッかけて飛脚飛藏、以前の形にて、花道よりパタバタにて出て來て、直ぐに舞臺へ來る。烏を見失つたる思ひ入れあつて

飛藏　ヤ、、、。たうとう烏を見失つたワ。なめら三方。あの烏こそ、瀬尾の太郎兼康どのより、海老名權の頭季定どのへ内通の密書。つん逃がしちやア飛脚の役は阿房烏。その云ひ譯にやアあの馬士め、引ッ捕へてそびいて行くべい。ソレ。

ト向うへ行かうとする。大勢の聲にて「ハイ〳〵」といふ。思ひ入れあつて伸び上がり

ヤ、、、あの提灯の紋は、庵に木瓜、曾我の太郎祐信の提灯。合點がゆかぬ。爰で樣子を。ソレ。

ト行列になり、飛藏、稻村へ蔭をする。捩ぢ切り奴二人、庵に木瓜の紋附いたる箱提灯を下げて出て來る。後より長刀持ちの侍ひ、續いて陸尺四人にて、鋲打ちの乘り物を擔ぎ出て來る。後より、梅澤左仲太、熨斗目、麻上下、股立ちの形にて附き添ひ出て來る。後より侍ひ、油箪掛けの挾み箱を擔ぎ出て來る。これに奴、同じく庵に木瓜の附いたる提灯を下げて來る。後より賴朝長六、百姓の形、財布と、風呂敷包みを割掛けにして菅笠を持ち、この駕籠に附き出る。續いて侍ひ三

人、股立ちを取つて出て來る。直ぐ舞臺へ來る。此う
　ち行列の合ひ方。

侍皆　下がれ〳〵。

長六　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。

侍ひ　下がらぬか〳〵。

左仲　イヤ、待て〳〵。見れば田舍人さうなが、何事を申
すのぢや。

長六　ハイ、私しは當國安久村の百姓、賴朝五平次と申し
まする百姓の倅、賴朝長六と申しまする者でございます
が、此お提灯の紋所を見ますれば、庵に木瓜ゆゑ、佐我
の太郎祐信さまとお見かけ申し上げまして、それゆゑお
駕籠に附いて參りましたのでござりまする。

左仲　合點のゆかぬ。當國安久村の百姓、賴朝五平次が倅
賴朝長六と申す者が、庵に木瓜のこの提灯を見掛け、附
いて參りしとは、何とも心得ぬ。差當つて尋ねうは、そ
の方等親子の名前。當時お行くへの知れざる佐殿の、お
名を申し立つるが、賴朝と申すは、其方が苗字なるか、
異名なるか。

長六　これは又、變つた事をお尋ねなされまする。私しが
賴朝長六と申しまするは、これには譯のある事でござり
まする。

左仲　定めて譯があらいで叶はぬ。賴朝公の御身の上、近
近八牧の判官兼隆を夜討ちになされ、これを御開運のお
軍始めあらんとの、御企てのよし、まち〳〵の風聞。平
家方より佐殿の御在所を尋ぬる折から、賴朝五平次、賴
朝長六と、めい〳〵に賴朝公の御名を名乘る事、合點が
ゆかぬ。右の樣子、詳しく申してよからう。

長六　ハイ、私しども親子ばかりでもござりませぬ。安久
村の百姓が、賴朝と申しまする名を附けて居りまするは、
賴朝さまがこの蛭が子島へ流人になつてお出でなされま
した時から、あの三島明神樣を御信心なされまして、
年に四度のお祭禮に、お逢ひなされたいとの御心願。或
る年の事でござりました。大祭の時、御病氣で御代參を
お立てなされましたが、その時、安久村に、源氏方の由
緒ある百姓七人をお尋ねなされまして、賴朝と申すお名
をお附けなされて下さりまして、代々、子孫に至るまで
賴朝といふ苗字が附きました、七人の者の苗字のいはれ。
賴朝と申す名は、勿體なくも佐殿樣から、御拜領を致し
ましたるお名でござりまする。

左仲　然らば何と云ふぞ。當國安久村の百姓のうち、源氏

方へ由緒ある百姓七人、其方が親の五平次ともに、頼朝と申すお名を拝領いたしたと申すのか。

長六　ハイ、それゆゑ、親の五平次も頼朝五平次、倅の私しまでも頼朝長六と申しまして、頼朝さまは御主人様も御同然でござりまする。

左仲　イカサマ。正直一遍の百姓の事なれば、頼朝といふ名を拝領いたさば、有り難いと思ふは、道理道理。その又頼朝長六が、何ゆゑ曾我の太郎祐信さまへは用事あつて、此お乘り物へは附き添ひ參りしぞや。

長六　サ、その儀は。

左仲　一通り申してよからう。

長六　成る程、その様子を申し上げたらはござりまするが、私しが祐信さまにお目にかゝりまして、直々申し上げたうござります程に、どうぞよろしうお願ひ申し上げまする。

左仲　コリヤ／＼、夜中と申し、途中の儀。例へ其方が頼朝長六と名乘つたればとて、高が身分の知れたる百姓の儀、お逢ひなされうやうがない。斯く申すは梅澤左仲太と申す取次ぎ役の者、随分遠慮はない程に、何なりとも申してよからう。

長六　左やうではござりませうが、祐信さまのお目にかゝりませぬうちは、どうも様子は申し上げられませぬ程にお願ひなされて下されませい。

左仲　直々にお逢ひなさるゝ事ではない。取次いでくれう程に、願ひの様子を申してよからう。

長六　サア、左やうではござりませうが、只の百姓でもござりませぬ。頼朝さまに由緒のござりまする安久村の頼朝長六、只管お目見得を、お願ひなされて下さりませ。

左仲　コリヤヤイ。御領分の百姓ならば格別、其方が頼朝と名乘つて、源氏方に由緒のある百姓ゆゑ、途中に於て容易にも逢ひなさるゝ事ではない。達てと思はゞ、杉山のお山屋敷へ願つて參れ。叶はぬ事ぢや。下がれ／＼下がれ。

長六　どうござりましても、お目にかゝらにやなりませぬ。お願ひなされ下されませい。

左仲　さて／＼、こな者は聞分けのない。叶はぬ事を。

長六　幾重にも、推してお願ひ申しまする。

左仲　まだ申すか。叶はぬ事を。

長六　例へ叶ひませずとも、この所にてお乘り物に行き合ひましたるが私しの幸ひ、狼藉者になりましても、お目

にかゝらにやなりませぬぞ。

左仲　不届きな奴の。ムウ、聞こえた。おのれは騙り者か。物取りか。怪しい由緒を名乗つて、主人祐信さまへお目見得を願ふ頼朝長六。侍ひ中、この者を引据ゑ召されい。

皆々　ハア、動くな。

ト提灯を差出して立ちかゝる。乗り物の内にて

玉琴　左仲太、曾我の太郎祐信が、その百姓に直々に逢うて様子を聞かう。マア〳〵控へい。

皆々　ハア。

ト合ひ方になり、乗り物の内より玉琴、衣裳、裲襠の形にて出る。侍ひ、後へ下がり。扣へて居る。左仲太、玉琴を見て驚ろき

左仲　ヤア、あなた様か。

玉琴　曾我の太郎祐信が妻玉琴といふ者。今日、赤澤山の狩倉に、関八州の若殿原、酒宴の興を催ほされ、源平と立ち分れ、角力興行あらんとの事。連合ひ祐信どのにもその興宴に召さるれども、頼朝公、伊藤入道寂心さまのお館より、その息女たる辰姫どのを誘ひ給ひ、お行くへ知れぬ折なれば、平家の聞えを思し召され、この玉琴を夫の名代。夜中といひ、途中といひ、心得ぬ願ひの様子。連合ひ祐信どのに成り代り、この玉琴が聞かう程に、サア、一通り申してよからう。

長六　有り難うござりまする。祐信さまの奥様と承りますれば、取りも直さず、祐信さま。左やうならば、あなたへ申し上げませう程に、近頃申しかねましたが、御家来様方を暫らくがうち。

左仲　成る程、密事とあれば遠慮もあらん。いづれも、暫らく木蔭へ、立ちめされい。

皆々　ハア。

ト皆々小隠れする。長六、あたりを見廻し、玉琴が側へ寄る。此うち稲村の蔭より飛蔵出かゝり、様子を窺ひ居る。

左仲　サア、お供廻りは遠ざけた程に、あなたへ様子を申し上げてよからう。

長六　ヘイ〳〵。然らば御免下されませう。仔細と申すは、外の儀でもござりませぬ。頼朝さま、この蛭が小島へ流人となりて、お下りなされました砌より、御肌常持御前さまの御肌身に添へられましたる、髻の観世音の尊像、いつぞやより紛失なしたるとの事承りますると、我れ

我れまでも、何卒その髻の尊像を尋ね出して、差上げたいと存じましたところに、何者の仕業にや、石橋山の山中に埋めあると申しまする噂。慥かな證據は、夜な／＼石橋山の光り物、同村の百姓どもが見屆けまして、不思議な事に申しまするゆゑ、その山中へ參つて尋ねませうとは存じまするが、石橋山は祐信さまの御領分。私しどもは北條の四郎時政さまの御支配下の百姓。御領分が違つて居りますに依つて、滅多に山も荒されまいと存じまして、それゆゑ祐信さまへ直々に、お願ひ申し上げましたいと申しましたるこの長六がお願ひ。モウ／＼髻の觀世音の御在所は、正しく石橋山の山中に埋めござりまするに、少しも相違はござりませぬ。

玉琴　ヤヽ、そんなら頼朝公御開運の爲、御幼少より御母君、常磐御前さまの御肌身に、添へ給ひし髻の觀世音の尊像、伊藤どのゝ館を立退き給ふ砌りより、紛失なされしとの事であつたが、そんなら連合ひ祐信どのゝ領地の内、あの石橋山の山中に、埋めあるとの事かいなう。

長六　左やうでござりまする。不思議といふは、夜な／＼の光り物。その安久村の百姓は、大方慥かに見屆けましてござりまする。

左仲　靈驗灼なる髻の尊像。兼ねて岡崎四郎義實さまの御嫡男、眞田の與市義貞さま、その御在所をお尋ねなさるとの事。我れ／＼までも承知いたして罷り在る觀世音の尊像、さては惡人ばらの仕業で埋め置きしか。玉琴さま。

玉琴　梅澤左仲太。

左仲　何にもせよ。

玉琴　聞き捨てならぬ

兩人　訴へおやなア。

長六　頼朝さまへ御奉公申し上げたいこの長六。何卒領分の石橋山の山中へ立越えまして、その尊像の御在所を尋ね出しまして、頼朝さまへ差上げたうござりまする程に、何卒、殿樣祐信さまへ、よろしくお願ひなされて下されませう。

玉琴　成る程尤もなる其方が願ひ、さりながら、連合ひ祐信どのとても、頼朝公の御身の上、如何あらんと朝夕の心遣ひ。髻の觀世音、在所知れしと聞き給はゞ、百姓づれの其方へ、お云ひ附けあるは氣遣はしい。いづれにしても頼朝公の御爲、一つにはしをらしき百姓の長六とやら、御名を拜領せし事を有り難う思ひ、御奉公申したい

とは奇特な事。この玉琴が同道して、我が夫曾我の太郎どのへ、其方をお目見得させうわいなう。

長六　左やうござりますれば、アノ、殿様曾我祐信さまへこの百姓の頼朝長六を、あなた様が御同道下されまして、アノ、お目見得を、仰せ附けられ下されまするか。

玉琴　其方が志しをしをらしう思うて、妾が同道せうわいなう。

長六　エヽ、有り難うござりまする。

左仲　イヤ／＼、奥様、その儀ばかりは御無用でござりまする。

玉琴　そりや又なぜに。

左仲　當時、頼朝公の企ての様子、大場の三郎景親どの、清盛公へ訴へしとの都の評定。この近國の平家武士、草を分けての詮議最中。斯やうに申せど百姓の長六、もしや平家の廻し者かと、心附かざる儀もござつては、玉琴さまにも御不念。拙者儀も粗忽。御同道なさるゝ事は、

玉琴　ちつとも大事ないわいの。

左仲　左やうではござりませうか。

玉琴　サイノ、この玉琴が同道すれば、例へ何者なればとて、擒も同然。髻の尊像の御在所知るゝまでは、祐信の館の内に、その長六とやらは、いつまでも留め置くわいの。

左仲　然らばこの長六を、擒になされて

玉琴　尊像の御在所を、とくと詮議をせうわいの。

長六　シタリ、流石は祐信さまの御奥様。御尤もなる御計らひ。百姓ではござれども、頼朝さまの御恩には、親五平次が無得心なる心にも違ひまして、御奉公仕りたい私しが願ひ。如何やうとも仰せ附けられ下されませい。

玉琴　其方が願ひ聞き屆けた。祐信どのにもお喜びなされて、折入つてのお尋ねもあらう程に、妾と一緒に、館へおぢや。

長六　エヽ、有り難うござりまする。

飛藏　紛失なしたる髻の観世音の、在所を知つたる土百姓め。詮議がある。動くな。

ト飛藏ツカ／＼と寄つて、長六にかゝる。玉琴、飛藏を突き退け、長六を直ぐに乗り物へ入れて、戸をしやんと締める。飛藏立ちかゝり

飛藏　あの百姓めを。

玉琴　慮外な奴の。誰れぢやと思ふ。曾我の太郎祐信が妻。玉琴が乗り物へ、狼藉なさば免さぬぞ。

飛藏　免されないが面白い。平家へ仇なす頼朝へ、荷擔人のあの百姓、ひッ縛つてそびいて行く。その乘り物を。

ト又かゝる。左仲太引き留め

左仲　待て。無禮とやいはん。不屆きとやいはん。お歷々の奧方の乘り物。賤しき身を以て手をさゆるといひ、慮外をひろぐ狼藉者。お供に立ちし梅澤左仲太が、手は見せぬぞ。

飛藏　お身樣が手を見せずば、此方から乘り物の內を、明けて見てくれべい。退きやれ。

ト立廻り。

左仲　動くな。いづれも、お供の用意々々。

皆々　ハア、。

ト侍ひバラ／＼と出て、乘り物を擔ぎ下座へ入る。飛藏、追ひかけて行かうとする。これを侍ひ立ちかゝり隔てると、飛藏拔き放し、提灯を切り落す。これより黑闇の思ひ入れにて、立廻りあつて、侍ひうろたへ騷ぐ。此うち玉琴探り寄つて、飛藏に行き當る。直ぐに飛藏、一太刀玉琴を切り下げ、ツッと脇へ退いて居る。玉琴、「アッ」と倒れる。左仲太驚ろき介抱せうと立ち寄る。飛藏また左仲太を後から一太刀切る。左仲太「アッ」と倒れる。玉琴起き上がり、そこらを探す思ひ入れ。飛藏、蔭をして居る。

玉琴　只ならぬ曲者。例へ深手は負ふとても、祐信が女房玉琴、やみ／＼と取逃がさうか。

左仲　奧樣、左仲太めも手は一ヶ所負うたれども、かゝる曲者、仕留めいであるべきか。イザ／＼、これにてお防ぎあられませう。

ト差添を玉琴に渡す。

玉琴　左仲太、其方も手疵を負やつたか。

左仲　おのれ、曲者め。いづくに隱るゝとも、眼前にお主の敵。返せ。戾せ。

トそこらを切り散らし、下座の方へ探し、追うて入る。玉琴、苦しき思ひ入れにて、脇差を杖に立ち上がる。飛藏また小藪を出て、後より浴せる。玉琴倒れる。これより拔き合せ、飛藏と切り結ぶ。此うち玉琴數ヶ所の手負ひになる。

玉琴　何者なれば、かゝる狼藉。聲をも掛けず騙し討とは卑怯な奴。祐信が妻玉琴、イザ尋常に立合うて、勝負せい。さはさりながら、名もなき匹夫の手にかゝるか。チエ、、口惜しいなア。

飛藏　ヤア、匹夫とは寄ッ怪至極。最期の際に聞きやアがれ。我れこそ大場の三郎景親が家來、長尾の新吾爲景が弟、同苗新六定景といふ者。頼朝開運の髻の觀世音、石橋山の山中に在る事、しつかり聞き屆けたれば、これより直ぐに石橋山へ立越え、尋ね出し、主人大場どのへ差上げん。殘念ながら、くたばつてしまへ。

ト また切りつける、立廻り、玉琴を切り倒す。バタ〳〵にて左仲太出て來て、飛藏に行き當る。兩人透かし見て

左仲　曲者、覺悟。

ト 切り附ける。飛藏切り結ぶ。立廻り。切り合ひながら、下座の方へ入る。玉琴やう〳〵心附き、刀を杖に起き上がる。苦しき思ひ入れ。

玉琴　我が夫祐信どの〻名代にて、赤澤山へ赴く路次にて、か〻る狼藉。剰へ、頼朝公を失はんとなす、心よからぬ大場が家來、長尾の新六。陪臣もの〻手にか〻り、爰で死ねとの約束か。か〻る事とは知り給はず、この有樣を聞き給はゞ、さぞや本意なく思うてゞあらう。祐信といふ夫を持ち、羨まれたる自らが、姫御前の身で此やうに、刃にか〻つて死ぬるとは、モシ、太郎どの、祐信どの、永い別れになりますわいなう。その上に、曲者に、薄手なりとも負はする事か、やみ〳〵とこの手で死ぬるか、口惜しい〳〵。口惜しいわいなう。お名殘り惜しいは祐信さま。もう目が見えぬか。エ、、

ト 苦しみながら、立ち上がり、ヨロ〳〵して後の卒塔婆の垣へ凭れる。心づき、振り返つて、卒塔婆をバッタリと切つて、其ま〻倒れる。左仲太バタ〳〵にて出て來り、死骸に行き當り、透かし見て驚ろきて

左仲　ヤ、、、、。玉琴さまには事切れたか。ホイ。左仲太御供仕り、か〻る横死を遂げ給ひ、館へ歸つて御主人へ、何と申し譯仕らん。云ひ甲斐なくも、曲者は取逃がし、所詮、生きて歸られぬ左仲太がこの命。死出の御供。さうぢや。

ト 刀の柄へ手をかける。最前より飛藏、後に窺ひ居て

飛藏　腹を切つてくたばるより、定景が手にか〻れ。覺悟。

ト 切りつける。立廻りにて、受け留め

左仲　われから覺悟。

飛藏　いざござなしに、くたばつてしまへ。

ト突き放して又切り込む。これより鳴り物になり、兩人見事なる立廻りありて、トヾ引き臺に乘る。キッと思ひ入れ。早神樂にて、これを東の方へ引いて取る。

本舞臺、三間の間、高さ四尺程の草土手。これに毛氈を敷き、宮本太夫連中、三味線、上調子、ともに誂らへの紅葉の模樣にて居並び、正面水引き。橋がかりへかけて一面の紅葉。上の方へ誂らへの筒守りを提げたる紅葉の枝を仕掛けにて振り出す。この途端に、東の棧敷、西の棧敷、共に仕掛けにて一面の紅葉になる。道具替るまで誂らへの鳴り物。打ち上げると、直ぐに下がり葉になり、向う幕の內にて、「安德帝の出御」と呼び、花道より宿木、八重機、花園、三崎、浪の戶、歌形、いづれも翠簾に紅葉をあしらひ對の振り袖、襠裲衣裳の形にて、三方に冠、裝束を載せ、笏を持つて出て來る。

ト花道の中に留まる。下がり葉打ち上げる。直ぐに淨瑠璃になる。

〽久方の天の昔の神遊び、今も雲井の神樂歌、言の葉草や星の數、列ぬる袖もたゑんなり、濃い奴袴も名にそ知る、澤紫を市川の、色よし澤と岩井てし、男なりけり舞ひ姬の、踏歌の姿一樣に、双びが岡の色見草、後に下がりて上﨟の。

ト花道より誰が袖、振り袖、襠裲衣裳の形にて、三方に金冠、白衣を乘せ、笏を持ち、赤ッ面の拵らへにて出て來る。

〽二八餘りの細眉に、柳の腰と餘所目から、思はれたさの男好き、愛目かはつてめだこだま、立てば立臼、とゝすりや牡丹、歩く取りなり仙石屋、どた〱として行き惱む。

宿木　小倉山、峯のもみぢ葉心あらば、今一たびの御幸待たなん。

八重　赤澤山のもみぢ葉も、君が御幸を待ち顏に、散りも始めぬ梢の風情。

花園　錦色どる木々の色、濡れてや鹿の妻戀ひに、細き流れの水の音。

三崎　柵かけし谷紅葉、猛男ならぬ紅葉狩、山より山を狩り暮らす、今日ばかりとてこの姿、人な咎めそ狩り衣、殿御出立ちの供奉の役。

歌形　行平さまにあらねども、當今安德君さまの、御幸に

等しき神参り。實に眺めある

皆々　景色ぢやなア。

誰袖　自らとても今日の役目。兄さん俣野の五郎景久さんの、名代に來やんしたが、さて〳〵山道といふものは、しんどうてならぬものぢやわいなア。

三崎　わたしらとても兄々達の名代。供奉の役目を勤むるのぢやわいなア。誰が袖さんは、今日の君様、先づ〳〵あれへ

皆々　入らせられませう。

誰袖　そんなら自らが、アノ君様の御名代かいなア。

歌形　知れた事いなア。土肥の總社の八幡様を、宇佐八幡になぞらへ、安德君さまの紅葉の御遊、平家長久の御神事、誰が袖さまは、君様でござんすわいなア。

誰袖　どうでも自らは、君様かいなア。

歌形　サイナア。ぢやに依つて、それ〳〵、お前の持つて居やしやんすは、金巾子の冠り、袞龍の御衣、誰が袖さんが君様ぢやわいなア。

誰袖　こちや、否いなう。

花園　でも、兄々さん達の云ひ附けぢやわいなア。

誰袖　こちや、否々。

宿木　でも、お前より外に。

誰袖　こちや、否いな。

浪戸　お前が君様ぢやわいなア。

誰袖　こちや、否いな。

皆々　君様ぢやわいなア。

誰袖　オ、辛氣。どうしてマア自らが、君様にならるゝものでござんすぞいなア。どうぞ斯ういふ所へ、君様になりさうな者が來てくれぬ事かいなア。

ト向う幕の内にて

お京　御贔屓を頭に戴く烏帽子折り、烏帽子の御用はござりませぬか。お求めなされて下さんせいなア。

誰袖　アレ、聞かしやんしたか。よい所へ女中の商人。幸ひな事ぢやござんせんかいなア。

皆々　ほんになア。

ト直ぐに摺り鉦入りの鳴り物になり、花道より、烏丸お京、烏帽子賣りの形にて頬冠りなして、紅葉の枝に烏帽子を五つ六つ附けて擔ぎ、中啓を持ち、出て來る。花道の中にとまる。

〽烏帽子召され候へ、八十氏人に參らせん、堅い烏帽子に心も堅い、まだ生娘の外知らず、吾妻殿御をつい見習

うて、なんのこつちやえ〳〵、なのこちや知らぬ戀の譯、いづれも樣へお許し請けて、情かけ緒の烏帽子折り、椋の實色に身は痩せもせで、思ひに細き女氣の、初々しさに顏紅葉、會釋をこぼし來りける。

誰袖　よい所へ烏帽子折りの商人どの、サア〳〵、爰へ爰へ

皆々　ござんせいなア。

お京　斯樣に候ふ者は、都烏丸より參りたる烏帽子屋にて候ふ。只今居りまする所は、人形町の片ほとりに居りまする。御當地馴れぬ者でござりまする。烏帽子の御用は附けたり、お針なりと、水仕なりと、致しませう程に、何なりと、御用仰せ附けられ下されませう、と、ほゝ、憚つて申す。オヽ、恥かし。

歌形　ほんに、氣のよさゝうな女中さんぢやわいなア。

皆々　サア〳〵、爰へござんせいなア。

お京　ハイ〳〵、有り難うござりまする。

誰袖　自らはそもじを待つて居たわいなア。早速ながら、賴まにやならぬ事があるわいなア。

お京　ハイ〳〵、何なりと、承りまするでござりませう。

誰袖　そんなら、なんと賴まれて下さんすかえ。

お京　ハイ〳〵。烏帽子の御用でござりまするか。

誰袖　なんと、君樣になつては下さんすまいかえ。

お京　オヽ、をかし。君樣とは何の事でござりまするえ。

誰袖　ほんに、自らとした事が、後も先も云はいで、コレコレ、斯うぢや〳〵。自ら事は、俣野の五郎景久が妹、誰が袖といふ者でござんす。兄さんの云ひ附けで、安德君さまの御名代を勤めるが今日の神事の役目。賴むといふは、こなさんを君樣になつてもらふが、賴みぢやわいなア。

お京　あなたとした事が、どうしてマア。

誰袖　ハテサテ、大事ないわいなア。

お京　ぢやと申しまして、私し風情の卑しい者が。

誰袖　ハテサテ、そこが賴みぢやわいなア。

お京　イエ〳〵、どう仰しやつても、女子の身を持ちまして。

誰袖　コレイナウ、ちつとも〳〵大事ないわいなア。

お京　どのやうに仰しやつても。

誰袖　ならぬかいなア。

お京　これぱつかりは。

誰袖　否かえ。

お京　どうしてマア。
誰袖　おきやアがれ。
　ト大きな聲して云ふ。お京恟りして
お京　オ、怖。
誰袖　否ならよしやアがれ。はッつけ阿魔め。誰れだと思ふ、俣野の五郎景久が妹だぞ。大名の妹で壺振りまでする、この誰が袖さまの仰しやる事を、よく否だと吐かしたな。否なら否にしてやらう程に、サア、たつた今、あつちへうしやアがれ。ケチ忌々しい阿魔めだわえ。
お京　ひよんな事云うて、御機嫌に違うたさうな。モシモシ、お腹がお立ちなされまするならば、幾重にも御堪忍なされて下さりませい。
誰袖　ざまわえ。
お京　あの木挽町のお芝居から、願ひに願うて、やう〱の事で、此お芝居へ參りました者でござりまする程に、どうぞ御機嫌をお直しなされて下さりませい。
誰袖　おきやアがれ。この誰が袖が云ふ事を、聞きやアがらないひッ裂かれめ。爰に置く事はならない。キリ〱立つてうしやアがれ。
お京　そんなら、どのやうに申しましても。
誰袖　お取上げはないワ。
お京　これは又、難儀な事ではあるぞ。この上はモウ、あなた方樣のお力でなければ參りますまい。……高うはござりますれども、役目でござりますれば、御免を蒙りまして、これより顔見世の御禮、お目見得を申し上げますやうにござりまする。誠に、私し事は、市村德次郎と申しまして、何にも存じませぬ不調法者。小さい時から念願にて、當春不思議に木挽町のお芝居へ罷り下りまして、まだお江戸の勝手も存じませぬ、初々しい者でござりまする。今日、斯樣に有り難いお芝居へ參りまして、賑々しくお目見得を致しまするすると申しまする事は、ほんにヤレ、京大坂へ聞こえましても、私しが身の上の外聞、冥加ないと申しませうか。有り難いと申しませうか。誠に涙がこぼれまして、此やうな事はござりませぬ。さりながら、只今お聞きなされまする通り、爰へ置く事はならぬ。キリ〱うせをれのと云うてござりまする程に、何卒あなた樣方のお庇を持ちまして、この芝居に萬萬年も居りまして、追ひ出されませぬやうに、隅から隅まで、ずいと御贔屓をお願ひ申し上げまする。
誰袖　また私しが身にもなつて御覽じませ。五年振りでの

歸り新參の顏見世、定めて憎い役か、荒事かと存じましたれば、やつこの作者と、新場の作者の思ひ附きで、わたしを振り袖の娘形に致しまして、剩さへ、君様になれと申しまする。中村助五郎といふ君が、どこの國にあるものでござりまする。私しはわい／＼天王でござりまする。いづれも様の御料簡で、あの烏帽子貰りが私しに代つて、君様になりまして、その上で御贔屓は、私しばつかりなされて下されまするやうに、ずいとお頼み申しんすにえ。オヽ、恥かし。氣が狂つたさうだ。

お京　そんならお前さんは、どう申しましても、御機嫌は直りませぬかいなア。

誰袖　君様にさへなれば、そもじの勝手になる事よ。

お京　此やうな迷惑な事はござんせぬわいなア。

ト筒守りを見かけ思ひ入れ。

あの筒守りの書附けは、岡崎の四郎義實さま。あのお方は眞田の與市義貞さまの親御様。そんなら、爰に居たなれば、逢ひたい、見たい、と戀ひ慕うた、あの眞田の與市さまに。

ト思ひ入れ。

モシ／＼、君様になりませうわいなア。

誰袖　そんなら君様になる氣になつたか。

お京　ならいでかいなア。わたしやモウ先刻から、なりたうて／＼、樂しんで居りましたわいの。

誰袖　そんならよいワ。いよ／＼君様にならうと吐かすのか。

お京　なりませいでわいな。

誰袖　いよ／＼なりやアがるのか。

お京　アイ／＼、なりやアがります程に、どうぞ／＼御機嫌をお直しなされまして、うしやアがれの、吐かしやアがれのと仰しやつて下されまするな。怖うござりますわいなア。

誰袖　ナンノ、自らも俣野が妹。どうしてふざけてよいものかいな。

お京　アレ又、ふざけてとは何の事でござります。

誰袖　オヽ、恥かし、ホヽヽヽ。

お京　嬉しや／＼。御機嫌が直つたさうな。

誰袖　サア／＼、これからは、そもじは今日の君様。サア、この冠りや裝束を、早うその形へ着てもいの。

お京　ハイ／＼。勿體ない此お冠りやお召し物。ひよつとわたしに、罰が當りは致しますまいかいなア。

誰袖　ナンノ、そこが神事の役目ぢやわいの。サア〱、早う〱。
お京　そんなら、御免下さりませい。
ト誰が袖、お京に冠装束を着せ、笏を持たせる。
これは又、窮屈な事ではある。
誰袖　なんと、皆さん、見やさんせ。よう似合うたではないかいなア。
皆々　さうぢやわいなア。
お京　これはまた迷惑な事の。
誰袖　出御。
ト早下がり葉になり、お京、上の方の岩臺へ乘つて、床几にかゝる。
宿木　今日の神事は、惣社の八幡宮へ奉幣を捧げ、御代長久を祈りの爲
八重　平家の代とて紅葉までも、紅ゐ深き赤澤山。
花園　騎射も角力も、神事の爲、赤白の、八幡の中の爭ひは
三崎　素直なるをや現はれぬべき。我れ〱とても供奉の役。
浪戸　身にも應ぜぬ冠裝束、いづれも袖を翻し
歌形　神を諫めの小忌衣。御代萬歳。
皆々　おめでたう存じまする。
誰袖　さうぢやわいな。當時盛んの平家の御代、坂東八ヶ國の其うちに、誰れ一人敵たふ者もない筈なれど、心得ぬはこの筒守り。殊に、書附けを見れば、願主岡崎の四郎義實と書いてあるが、聞えたわいな、この岡崎の四郎といふは、兼ねて源氏へ心を運ぶとの噂。二心ある義實が奉納、平家の爲には不吉の守り。この誰が袖がたつた今、引き下ろして捨てようか。ドレ。
ト筒守りへ手を掛ける。向う幕の内にて
義貞　暫らく
皆々　エヽ、ムウ。
誰袖　合點のゆかぬ。平家へ不忠のこの筒守りを、引き下ろさうと自らが、手を掛けた所へ、暫らくと聲を掛けたは
皆々　誰れさんぢやぞいなア。
義貞　暫らく。
誰袖　暫らくとは。
義貞　暫らく〱〱。
〽かゝる所へ向うより、眞田の與市義貞は。

ト大小入りの人寄せになり、花道より眞田與市義貞、衣裳、長上下の形にて、鮫鞘巻きの小さ刀を差し、弓に竹笠を結び附け、左にかたげ、扇子を持ち出て來り、花道の中にとまる。

〽四夷八荒の荒夷、取拉ぐべき勢ひも、若衆盛りに隠し裏、紅葉も酒の醉ひ心、奥野の狩の杯に、醉うたとさ醉うたとさ、足は千鳥か、鶯か。山鳥の尾の長袴、裾たぶやかに踏みしだき、折目すゞしく控へ居る。

誰袖　オヤ〳〵、誰れぢやと思うたれば、岡崎の四郎義實どのの息子どの、眞田の與市義貞さん。

大勢　ござんしたかいなア。

義貞　東岸西岸の柳、遲速同じからず、南枝北枝の梅ならで、既に異なる暫らくは、師匠の指圖で只一聲、かけ奉る筒守りを、邪魔にしぐれの振り袖は、ふり葭町のぽつとり者、魚樂が向うへ廻つたら、三升の素袍で出るところを、長上下と捻つたは、及ばぬ事と顧みて、爰へ乙の巳の顔見世。眞田の與市義貞が、今日ぞいなりの初舞臺、御贔屓願ひ奉りまする。

お京　エヽ、そんならお前が眞田の與市さんかいなア。

ト岩臺より下りようとする。

誰袖　コレ〳〵、これはしたり。其やうに暫くの請けが、ぐにや〳〵としてよいものかいの。どのやうな事があらうとも、矢ッ張り敵役のやうに、引ッ張つて居さんせいなア。

お京　これは又、迷惑な事ではあるぞ。

誰袖　サア〳〵、皆さん、暫らくのお定りでござんす程に、あのお若衆を、引ッ立てたがようござんすわいなア。

皆々　エヽ。

誰袖　サア〳〵、早うあつちやへやつたがよいわいなア。

お京　そんならあの與市さんを、あつちへやらうと云はしやんすのかえ。

誰袖　知れた事いの。

お京　そんならわたしも一緒に行かうわいな。

誰袖　コレ〳〵、一緒に行かれて詰まるものか。

お京　イエ〳〵、あの與市さんを脇へ去なさうと云はしやんすなら、君樣は否でござんすわいな。

誰袖　コレ〳〵、今になつて、よされて堪るものかいの。

お京　そんならあの與市さんを、爰へ呼んでおくれたがよいわいな。

誰袖　ならぬと云つたら君樣も、否だと云ふであらうに依

つて、いつそのくされにあの若衆めを、爰へ呼んでやるべいか。

お京　サア〳〵、早う呼んで下さんせいなア。

誰袖　サア、皆さん、あのお若衆を、爰へ早う引ッ立てゝ來て下さんせ。

歌形　合點ぢやわいな。ドレ〳〵〳〵、わたしが行て與市さんを。

ト花道を行かうとして、取つて返し

どうしてマア、顔に髭のある坊さんのやうに、引ッ立てに出らるゝものかいなア。

八重　そんなら誰れ彼れと云はうより、わたしが行かうかいな。

皆々　サア〳〵、早うござんせいなア。

八重　合點ぢやわいなア。なんの與市さんぢやと云うて、恥かしい事があるもので。たつた今わたしが

ト花道へ行かうとして

怖や。行かれぬわいなア。

三崎　氣の弱い事云はしやんすわいなア。そんならあの與市さんを、何の事もなくたつた今。

ト花道へ行かうとして

怖や。御免ぢやわいなア。

花園　エヽ、埒の明かぬ。そんならいつその事に、三人一緒に行かうかいな。

宿木　それがようござんすわいなア。中よう一、二、三で行かうかいな。

浪戸　こりや、けうといわいな。サア〳〵、そんなら一緒に。

三人　一二三。

ト花道へ行かうとして、義貞を見て恥かしき思ひ入れあつて

どうも行かれぬわいなア。

誰袖　おきやアがれ。どうで暫くに度々逢ひつけたものでなければゆくまい。差づめこの誰が袖が、あのお若衆を引ッ立てゝ來べいか。

ト誰が袖、義貞が側へ寄つて

コレ、振り袖に好い若衆。おれに所作があつたら、爰が淨瑠璃になる所であんべいが、ひよつとおれがないわいなといふ所で、橫ぎばでもして見たがよい。立ち所で中氣病みになる。こんな所へおれを出して、手古摺らせると云ふものぢやアない。サア、眞田の與市さん、自らと

一緒に、あそこへ來な。

義貞　其許はどなたでござる。

誰袖　俣野の五郎景久が妹、誰が袖ぢやわいなア。

義貞　これは〱、誰が袖どのでござるか。誰が袖どのには赤いお顔の。

誰袖　こりやコレ、鹽飽に醉つたのぢやわいなア。

義貞　拙者はこれに差置かれて下されい。

誰袖　なぜ〱。

義貞　安德君の、御座間近く參る事は、御容赦にあづかりませう。

誰袖　でも、連れて來いとの勅諚ぢやわいな。

義貞　身不肖なる與市。畏れ多うござれば、幾重にも御免下されい。

誰袖　どう云へば斯う云ふと、そのしやツ面を。

義貞　ても、しをらしい物ごし。

誰袖　サア、こりやア。

義貞　何となされまする。

誰袖　オヽ、恥かし。

ト思ひ入れあつて舞臺へ來る。

お京　そんなら、爰へはござんせぬか。

誰袖　梃でもいけるものぢやアない。

お京　そんならようござんす。こちらから直々にお出でなされませうわいなア。

誰袖　いつそそれもましだんべい。

ト お京、義貞が側へ行き、恥かしき思ひ入れあつて、義貞が手を取り、もぢ〱として

お京　コレイナア。

義貞　御用かな。

お京　アイ。

〽思ふ事、云はで置かにや闇の梅、浪花で聞いて見ぬ戀に、憧れ焦れ口癖に、云うた眞田の與市さん、三浦一統多けれど、誰れとも譯がないさうな、ほんに心の竹笹も、一樹の影と寄り添ひて、流れを汲むも緣の端、詞の端も義貞が、色ある波に誘はれて、萩より先へ散る思ひ、薄は枯れて手もあやに、引かれ引かるゝ。

ト送りになり、無理やりにお京、義貞を本舞臺へ連れて來る。

皆々　與市さん、ござんしたか。

義貞　合點のゆかぬ。女中、何ゆゑ與市義貞を、この所へは誘ひ召された。

お京　何ゆゑとは與市さん、わたしやお前に逢ひたうて、遙々爰へ來た者でござんすわいなア。

義貞　身共に逢ひたうて、遙々爰へ來りしとは、そりやなんで。

お京　恥かしながら、戀ゆゑでござんすわいなア。

義貞　滅多な事を云ふまいぞ。こりや聞えた。岡崎の四郎義實が倅、眞田與市義貞、若輩者と思ひ心底を探らんと、こりや六波羅よりの間者の女子か。

お京　むごい事云うて下さんす。どうしてマア、其やうな者でござんせう。まだ見ぬ戀に憧れて、わたしや來たのでござんすわいなア。

義貞　いよ／＼以て合點ゆかぬ。まだ見ぬ戀に憧れて、尋ね來りし女子とや。

お京　ハイ、恥かしながら、義貞さま、此お羽織にお覺えがござりまするか。

ト袱紗に包みし羽織を出して、義貞が前へ置く。

義貞　合點のゆかぬ。この羽織は、慥かに覺えある身が羽織。それ／＼。先つ頃、佐殿の御供仕り、三島明神へ參詣の折から、境内に於て、都烏丸の烏帽子折り、大太郎と申す者に出合ひ、御烏帽子一頭差上げようと所望なせし時、如何なる事にや、左折りの烏帽子を差上げたりし喜びに任せ、後の印とて、この羽織を彼の大太郎へ得させしが、さては其方は由緣の者か。

お京　ハイ、わたしが事は、その御烏帽子を差上げたる大太郎の娘、お京と申しまする者でござんすわいなア。

義貞　さては其方が大太郎が娘とや。

お京　此お羽織を拜領いたし、歸りましてのそのお噂、聞けば聞く程おしをらしさ、まだ覺めやらぬ移り香に、及ばぬ戀にこの身を責め、義理ある親のその内を、家出いたして遙々と、お尋ね申して參りましたわいなア。

義貞　物數ならぬ義貞に、心を掛けしとは忝ない。さりながら、當時平家の威勢強く、佐殿の御在所、嚴しく詮議ある中に、三島明神の境内にて、烏帽子を求めしなどと噂あつては、安からぬ御大事。假初めの女子に情かけては、父上義實へ身の云ひ譯は立つまじきぞ。思ひ直してとく／＼歸り召されい。

お京　そりやお情なうござりまする。よく／＼お慕ひ申せばこそ、人目を忍び此やうに、隱して肌身を離しませず、これまで持つて參りましたるこの羽織。持つて去ねとは、お胴慾でござりまするわいなア。

誰袖　コレ〳〵、その羽織は、この誰が袖が預からうわいな。

ト誰が袖、羽織を取上げろ。

お京　こりや、何となされまするぞ。

誰袖　細工は流々、仕上げを見るがよいわいの。サア、與市どの、この羽織を着さんせいなア。

義貞　身共に羽織を着ろとはな。

誰袖　しやッ面ばかり侍ひで、力の似合はぬ眞田の與市。サア、キリ〳〵と、この羽織を着たがよいわいの。

義貞　誰が袖どの、何ゆゑ義貞を嘲弄召さるゝ。

誰袖　知るまいと思ふか。蛭が子島より兵衛の佐行くへ知れぬ、落ち行く先も見屆けざる眞田の與市義貞と、親義實の不興を請け、武士のあるまい大小を取上げられ、それそれ、その鮫鞘巻きの短刀ばかりで、侍ひ顔がなるものか。町人にも等しき眞田の與市、キリ〳〵羽織を引ッ張りな。

義貞　すりや、蛭が子島より、お行くへの知れざる佐殿の、御先途をも見屆けざる斯くいふ義貞。父の不興に依つて鮫鞘巻きの右手差一腰帯し居るゆゑ、着せし衣服を改めよとの、誰が袖どのゝ嘲りよな。

誰袖　知れし事サ。腰抜けなら腰抜けのやうに、マアこの上下をひッたくり、羽織姿がよからうわいの。

歌形　さうぢやわいな。マア、堅苦しいこの肩衣、取らしやんせいな〳〵。

三崎　さうぢやわいな。この長袴が好かぬわいなア。

花園　女子ばかりを相手にして、堅いがお前の疵ぢやわいなア。

八重　さうぢやわいな。皆さん寄つて、與市さんの、マア、上下を取らしやんせいなア。

浪戸　合點ぢやわいな〳〵。

歌形　サア〳〵、與市さん、取らしやんせ〳〵。

皆々　取らしやんせ〳〵。

ト無理やりに義貞が上下を取つて、羽織を着せる。

歌形　なんと見やしやんしたか。また羽織姿は、けうといものではないかいなア。

皆々　ほんに〳〵、さうぢや〳〵。

義貞　これは迷惑千萬な。

三崎　サア、これからは、何にも遠慮はない程に、早うお側へ行かしやんせ。

お京　有り難うはござりまするが、誰が袖さんがあのやう

に、怖い顔しておいでなさんすに依つてな、どうもお傍へ參られませぬわいなア。

誰袖　コレ、野暮め。今のやうに高飛車でやらにやア、羽織衣裳になるまいと思つて、話しに聞いた事を好い加減に云つて、云ふなりにしてやつたは、有やうは、そもじが色事を取持つてやる心サ。

お京　そんならわたしが戀を、お取持ちなされて下されまするか。

誰袖　知れた事サ。そもじの初めての顏見世、あのお若衆と二人が仲を、取持つてやるべいと思つて、振り袖姿でござんすわいな。

お京　エヽ、有り難うござりまする。

誰袖　嬉しがるやつサ。

お京　そんならお前さん方も。

皆々　知れた事いなう。

お京　エヽ、有り難うござりまする。

誰袖　マア、取持ちのぶちこが出來た程に、早く博奕をおッ始めなさい。ヨウヨウ。

トお京を義貞が側へ突きやる。此うちに拍子臺の連へ居並ぶ。

お京　義貞さま、どうぞお側へ置いておくれなさんせいなア。

義貞　斯くいふ與市義貞は、父義實の不興を請け、佐殿の御行くへをも知らざるとて、三歳足立ち給はざる、蛭子の神の昔に慣ひ、蛭が子島に蟄居の身の上。女子は側へ叶はぬぞ。

お京　そんなら、お側に居りまさうわいなア。

義貞　そりやまた何ゆゑ。

お京　お前さんが蛭が子島にお出でなさんすなら、わたしや津の國西の宮の者でござんすに依つて、お側に居ても大事ないわいな。

義貞　何と云ふぞ、其方は津の國西の宮の者か。

お京　蛭が子島と云ふからは、御緣が深いぢやないかいな。

義貞　然らば天照皇太神宮、第三番目の御子たる、事代主の由來を知つて居やるであらう。

お京　詳しい事は存じませぬ。お側のお伽になる事なら

義貞　尋ぬる與市に挨拶するか。

お京　ハイ、心のたけが云ひたさに。

義貞　相手になつて

お京　津の國と
義貞　伊豆の小島の
義貞　宮どころ、
お京　その垂跡を
兩人　いま爰で。
　トこれより大小入りになる。
義貞　さても佐殿御座ありし、蛭が子島と云ひ傳ふ、その來歷を尋ぬるに、風土記に伊豆の名たゝる事、相模駿河の中間に、出づるによつて名くとかや。
お京　浮かれ女の、浮かれてありく旅やかた、すみつきがたきものにぞありける。それは傀儡、これは又、國々修行の名も高き、傀儡師にはあらねども
義貞　爰に箱根の壺菫、夕紫の西の宮。
お京　沖の小島の御子本、この島にこそ鎭座ある。
義貞　伊豆のいの字も津の國や
お京　その神崎の浮かれ妻。
〽小褄揃へて一つ前、同じ歩みにさしかけし、和田のかさ松女夫松。
義貞　豐葦原の
お京　仲の町。

義貞　商ひ神の
お京　かなふ神。
義貞　紋日は柏手。
お京　鯛を釣り夜着。
義貞　沖漕ぐ船は
お京　流れの身。
義貞　流人の爲に
兩人　この神を
〽蛭が子島に勸請ある、事代主の御事を、話し上手に聞き上手、千早振りにし神代より、八雲立つ名を知りながら、天照らされし戀の意地、初會と裏のしなしぶり、第三會目の事かとよ、夜も蛭子の間夫狂ひ、三歳足立ち給はざる、にしの身あがり居續けは、通なおさんぢやないかいな、さてまた產湯を參らせん、なんだが口より熱湯をぼ出し、ぼつだが口よりぬる湯を出し、口から口へ睦言に、變るまいぞとゆふ襷、綾がせんだん錦がせんだん、金襴緞子の夜着の敷初め、月並の、紋日物日の通ひ路に、岩越す船の二丁立ち、はゝらつぽ、しつちやつぽ、椎の木ぢや、合點ぢや、急ぐに早き仲の町、茶屋の知らせの嬉しさは、かゝり次第の上草履、いつも逢られて浪枕、

濡れて干すてふ置き所、來る夜來ぬ夜の置き炬燵。

トこの淨瑠璃のうちにお京、文を落す。

誰袖　これからが天の岩戸の床入りの段。差づめおれが遣り手の役に廻らうか。

ト振り袖を帶に挾み、手拭を頭に置く。

モシ〳〵、花魁え、主をあつちへやり申しなさんせんかえ。

義貞　コレ〳〵、其やうに床を急いでもらふまい。手練手管にかけられて、我れらは嫐られますまいわえ。

お京　そんならわたしが云ふ事を、みんな嘘ぢやと思さんすか。

義貞　また嘘であるまいか。この眞田の與市義貞を、どこに惚れて、其やうに云はるゝものでござんす。見ぬ戀ぢやの、焦るゝ戀ぢやのと、そりや惚れ所の門違ひでごんせう。

お京　そりや又お前、あんまりな事云はしやんす。眞實誓文、義貞さまに

ト側へ寄らうとする。此うち義貞落ちたる文を取上げ

義貞　「照葉どのへ、岡部の彌次郎。」この岡部彌次郎こそ平家の侍ひ。

お京　エヽ、その文は。

義貞　さては其方は、岡部の彌次郎時末が娘なるか。

トお京恟りしてその文を手ばしかく取る。直ぐに義貞が差して居る鮫鞘巻きを拔き放し、小指を切る。皆々驚ろく。

皆々　エヽ。

誰袖　オヤ〳〵、こりやマア怪しからぬ。小指を切るといふやうな事があるものかいな。マア〳〵、危ない。この刃物は、早う納めたがよいわいの。

トうろたへて刃物を取上げ、直ぐに義貞が鞘へ納める。此うちにお京、指を鼻紙に包み、義貞が側へ置く。義貞と顏見合せて思ひ入れ。

〽嘘に小指が切らりよかえ、どこに惚れたと云はんすが、姿がようて氣が粹で、思ひに餘る殿御振り、それそのお顏に問はしやんせ、花にも譬へ、月ならば、十三筋のいとしさに、引かるゝ心爪琴の、たんと手のある譯知らず、惚れたこの身の因果には、書かれ足らいで嫐られて、なんと身も世もあられうと、指より思ひ切りかぬる、神に血潮の淚川、龍田を染むるばかりなり。

義貞　さほどに思うてたもる志しを、仇に見捨てやうはた

い。とは云ふものゝ、この義貞、父の不興を請けたる上に、佐殿のお行くへを知らず。それのみならず、紛失したる髻の觀世音の在所も知らざるうちに、不義の惡名立つならば、いよ〳〵この身は武士道立つまじ。不便に思へども、この戀ばかりは。

誰袖　コレ、野暮め。これ程に思つて、この色事が出來にやア、小指を一本、棒に振るといふものだ。なんであらうと、おれに任せて、あの平張りの幕の内で、何かのお禮を云うたがよい。

義貞　サ、それは。

誰袖　コレ〳〵、こなさん達も合點か。

皆々　合點ぢやわいなア。

誰袖　マア〳〵、あそこへ行かんせいよ。

皆々　ハテサテ、平にござんせいなア。

義貞　これは又迷惑な。

皆々　平にござんせ〳〵。

〽ひらに〳〵と平張りの、浮世に馴れて戀路には、誠の幕に引かれけり。

トこの淨瑠璃のうち、義貞お京を無理やりに下座の幕の内へ入れる。誰が袖あたりを見廻し

誰袖　ヤレ〳〵、無理な者をお杉に使つたぢやないか。彼奴ら二人を、あの平張りの内へ入れてしまへば、これからはあの筒守り。あの内が合點がゆかない。引摺り下ろして、岡崎の四郎が企みの底を、詮議をすべいか。

ト寄らうとするを、六人、誰が袖を取卷き

皆々　待つた。

誰袖　なぜ留める。

歌形　留めいでわいなア。あの筒守りは義實さまの奉納にて、賴朝さまの御利運を、祈願の爲の捧げ物。

宿木　詮議をせうと云はしやんすりや、菊綴源五が妹宿り木。

三崎　伊藤九郎が娘三崎、

花園　佐々木の三郎盛綱が娘花園、

浪戸　土屋の三郎が妹浪の戸、

八重　土肥の彌太郎遠平が妹八重機、

歌形　天野藤内が妹の歌形が、誰が袖さん

皆々　邪魔するぞえ。

誰袖　おきやアがれ。六人ともに名を名乘れば、みんな源氏へ身方の武士。その二心の侍ひの、妹や小娘の分際で、この誰が袖を支へるか。

六人　知れた事いなア。
謙袖　退きやアがれ〳〵。
六人　コレ、待つた。
謙袖　イヤ、どつこい。
〽行くをやらじと留むる袂、振り切る袖の追ひ風に、さつと木の葉の雨ならで、ふりに時雨の花紅葉。
トこれより摺り鉦入りの踊りになる。謙が袖も踊る。
〽櫻紅葉に梅紅葉、見染めて文をかき紅葉、焦れ梢もみな紅葉して、色の浮世ぢやないかいな。
〽ぬるで紅葉に蔦紅葉、浮き名も眞間の川紅葉、色ながら散る紅葉とは、派手な浮世ぢやないかいな、浮世なりけり、浮世なりけり。
ト踊り切れると、立廻りになる。
六人　待たんせいなア。
謙袖　退きやアがれ。
六人　待つた。
謙袖　退きやアがれ。
〽無理に押しやり、押しやられ、麓をさして。
ト謙が袖を六人にて、代る〳〵押し返し向うへ入る。直ぐに本神樂になり、花道より藍澤の瀧夜叉、東より天城の鬼夜叉、雙方への伊達の形にて窺ひながら出て來て、瀧夜叉、花道の中にて「エイ」と手裏劍を打つ。仕掛けにて筒守りはパッタリと落ちる。鬼夜叉、ツカツカと寄つて取上ぐる。この中より錦の袱紗包みを取り出す。瀧夜叉、ツカ〳〵寄る。
瀧夜　藍澤の瀧夜叉。
鬼夜　天城の鬼夜叉。
瀧夜　狙ひを違へず、打つたる手裏劍。
鬼夜　立ち寄り見ればこの一品。
瀧夜　この筒守りに秘め置きしは
鬼夜　察するに違はず、天杯の土器
瀧夜　我れ〳〵が手に入りしか。
兩人　忝ない。
瀧夜　この天杯の土器こそ、故左馬の頭義朝へ、先帝高倉の院より下し置かれし御土器、惣社八幡へ奉納なしたるは、正に兵衛の佐頼朝が仕業。領主は岡崎の四郎義實。いよ〳〵平家を亡ぼす手段。宗盛公の明察に違はず、事を企みし義實親子、いよ〳〵助けちや置かれぬわえ。
鬼夜　近々八牧の判官を、軍始めに夜討ちにせんと、はや軍評定終つて、頼朝が指圖に任せ、安達藤九郎盛長、

諸國の源氏を集むる由、大場の三郎景親より、淸盛公へ訴へしと、上總之介の物語り。油斷ならざる源氏の謀。北條の四郎時政、曾我の太郎祐信、平家に叛く當時の有様。いよ〳〵源氏に組みなさば、先づ彼れらからぶッ放して、平家の爲の血祭りか。

瀧夜　岡崎の四郎義實、まつた眞田の與市義貞、彼れらからぶッ放して、平家の爲の血祭りか。

鬼夜　何にもせよ、源氏開運の祈願の爲に、奉納なしたる天杯の土器。鬼夜叉が持參なし、八牧の判官兼隆どのへ差上げん。

瀧夜　この瀧夜叉は、義實親子の首ぶッ放して持參せん。

鬼夜　瀧夜叉。

瀧夜　鬼夜叉。

鬼夜　續け。

瀧夜　來い。

ト鬼夜叉、瀧夜叉、奧へ行かうとする。下座よりお京、太鼓を持つて出て來て、押し返して立廻りにて留める。

兩人　女め、こりや何とする。

お京　サ、これは

兩人　なぜ留める。

お京　留めいでわいなア。アレ〳〵、あの梢々を見やしやんせ。なんと見事に紅葉したではないかいなア。

瀧夜　おきやアがれ。紅葉面白くない。紅葉見たくない。目ざす敵の眞田の與市

ト行かうとする。お京立ち塞がり

お京　なんぢやいなア、お前は紅葉は否かいなア。

瀧夜　武士の、女にこりず紅葉とは、おらア女に懲りた者だ。

お京　所をわたしが、無理云うて留めねばならぬ。待たしやんせ。

瀧夜　見事そもじは、留める氣か。

お京　マア、さう思うて下さんせ。

鬼夜　我が手に入りたるこの一品。兼隆どのへ、ソレ。

ト行かうとする。立廻り。

お京　待つた。

鬼夜　なぜ留める。

お京　お前も紅葉は否かいなア。

鬼夜　おらア紅葉は否だ。きつい嫌ひよ。

お京　そんならお前は好きかいなア。

鬼夜　今まで連れがなかつたが、引留められていゝ幸ひ。

そもじと一緒に紅葉を見べいか。
お京　そんならわたしも、ちよつと紅葉を。
ト鬼夜叉が懐へ手を掛ける。振り放して
鬼夜　何をする。
お京　見ようと思うて。
鬼夜　ハテ、ナア。
お京　モシ〳〵、お前は酒はお嫌ひかえ。
瀧夜　おれか。
お京　アイ、ならぬかえ。
瀧夜　きつい好きよ。酒と聞いちやア目のない男サ。
お京　そんなら幸ひ、わたしも酒は好きぢやわいなア。
鬼夜　酒はどこにある。サア、杯をさしてくれろ。
お京　その杯は。
瀧夜　どこにある。
お京　モシ〳〵、お前のその杯、ちやつと爰へ出さんせいなア。
鬼夜　杯とは何の事だ。
お京　ソレ、杯を隠して持つて居やんせうがな。
鬼夜　サ、そりやア
お京　出さんせいなア。

瀧夜　その杯ぢやアおらア飲むまい。
お京　そりや又なぜえ。
瀧夜　そもじが持参の杯なら、おらア一杯飲む氣であつた。
お京　そんなら外の杯では
瀧夜　飲んだも同然、おらア否だ。
お京　そんならようござんす。わたしが持参の杯なら、コレコレ、幸ひのこの掛け烏帽子、烏帽子を杯にして、處は山路の菊の酒。サア〳〵、これで一つ上がれいなア。
ト掛け烏帽子を取つて、瀧夜叉が前へ置く。
瀧夜　シタリ、機轉の利いた烏帽子の杯。きついものだ、きついものだ。
鬼夜　目の内といひ、立ち振舞ひ、合點のゆかぬこの場の様子。元來そもじは何者だ。
お京　サア、わたしは何やらであつたわいなア。オヽ、それそれ。今の商賣は烏丸の烏帽子折り。紅葉の枝へあのやうに、數の烏帽子を結び附けて、商ひまするがわたしがすぎはひ。以前は流れの果てぢやわいなア。
鬼夜　イカサマ、さう聞けば男ざはりの和らかさ。折入つて話して見たなら、どうやら白の附きさうな事。打寛いで話すべいか。

お京　こりやよからうわいな。お前も爰で、色事の話しをする氣はないかいなア。
瀧夜　氣がないかとは恨みだぞえ。おらア話せば、女になつて、男の氣持ちが聞きたいが、なんと、そもじは男になつて、話して見る氣はごんせぬか。
お京　こりやよからうわいな。そんならわたしが殿達になつて、お二人さんに挨拶をして見ようかいなア。
鬼夜　こりや有り難い。そもじが男で見ようならば、どんな氣持ちの男でごんすぞ。
瀧夜　それが、聞きたい〳〵。
お京　わたしが男であらうならば、心が逞ましうて、義朝公へ高倉の院より、下し置かれし御土器を隱してチッと……納めて居るか。但しは岡崎の四郎義實さまや、眞田の與市義貞さまを、只一討ちに討ち止めんと、さも恐ろしい……こんな心になりたいわいなア。
兩人　さちやア樣子を。
お京　なんとえ。
瀧夜　ハヽヽヽ。ハヽヽヽ。そもじが男でその氣なら、おらア女の氣になつて、マア、物好きを云ふべいなら、先の男はどうあらうと、惚れて惚れ拔いて男にかゝつて、その命をも捨てゝ見る氣の女になりたい。
鬼夜　おれも女になつたなら、男ゆゑには、サ、その小指トかゝらうとする。撥にて拂ひ、テンと一つ太鼓を打つ。
お京　モシ、これぢやわいなア。
兩人　何がどうした。
お京　一つ鳴つたはその杯。烏帽子で一つあがらぬかえ。
瀧夜　酒よからう。さちやアそもじは太鼓も打つか。
お京　イヽエ、太鼓打ちぢやござんせぬ。太鼓女郎でござんすわいな。
瀧夜　そんならおれは相方か。
鬼夜　差づめおれは大盡か。
お京　それは金持ち。
瀧夜　これは惟茂。
鬼夜　虎溪を出でし古へも
お京　志しをば捨てがたき
瀧夜　里の情の
兩人　紅葉狩り。
〽林間に酒を暖めて紅葉を焚くとかや、爰は山路の菊の酒、千代も變らぬ色上戸、汲み交はしたる杯に、おのが

羽こぼす白鷺は、寝巻ながらと凭れ寄る、ほんに勤めの其うちは、嘘と酒とに慾知らず、やがて素人に形振りも、野暮のやの字に帯引き結び、飯も炊いたり水汲んで、洩らさぬ仲の世帯持ち、今の寝足らぬ逢ひたらぬ、屏風の外に心なき、茶屋船宿の迎ひ酒、あれ暁の明星が、西へちらり、東へちらり、ちらり／＼とする程に、扇おッ取り、刀差して行かうよ、戻らうよと、云うては小腰に取り附いて。

ト これより太鼓地の踊になり、お京、太鼓を打つ。瀧夜叉、鬼夜叉、紅葉の枝にてお京に打つてかゝる。あしらひの立廻りいろ／＼。

〽今宵小詰と便りの風折、烏帽子へ結んでしやんとえ、浮名はそよ／＼、誰れにまかせん柳さび、きつと心中立烏帽子、解けぬ心をほどくや文の、様の姿のすき額。

ト これより下座の鳴り物に合せ、お京太鼓を打つ事ありて、トゞ立廻り、見事に納まり

〽立ち舞ふ姿は妙なりや、空吹く風に鵞毛を降らし、浪は鶴氅、袖は回雪、鋭き刃金はひら／＼／＼、さながら雪に群鳥の、あさり争ふ風情なり。

ト この文句切れると、瀧夜叉を投げのけ、鬼夜叉が懐の天杯を持つて行かうとする。鬼夜叉引留める。トゞ鬼夜叉と瀧夜叉を一刀に刺し通し、刳り殺し、天杯を取つて戴き

お京 忝ない。

〽寶に有り難き初舞臺、勇み勇んで。

ト 勢ひ三重になり、お京は向うへ入る。瀧夜叉、鬼夜叉の死骸を引いて取る。ゴン／＼にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、一面に石橋山の體。松の村立ち物凄く取りつけ、日覆一面の吊枝。西の高欄、三日月を下げたる星月夜の道具立て。正面に長尾の新吾爲景、本行の形にて、松明を持つて、仁王立ちに立つて居る。下の方に眞田の與市義貞、廣袖、丸括け帯の脱ぎかけたる形にて、鮫鞘巻きを差し、長尾の新吾爲景を引き留めて居る。カケリにて道具廻り、すぐにコイアイ。兩人キッと思ひ入れ。

義貞 石橋山の山間に、それかあらぬか窺ふ人物、何者やらんと見てあれば、大場の三郎景親が郎黨、長尾の新吾爲景、松明かゝげて來りし様子、仔細ぞあらん、有りやうに云ふまいか。

爲景　まだ霧深き五更の天、紅葉の御遊に事寄せて、岡崎の四郎義實、まつた伜の眞田の與市。賴朝源氏再興の企てを挫かんが爲、彼れら親子を討取れとの、主人の仰せに止む事なく、窺ひ寄つたる新吾爲景。與市義貞、首を渡せ。

義貞　愚かや、佐殿御開運の手始めに、兼ねて八牧の判官を討ち亡ぼし、坂東八ヶ國のお身方を狩り集め、直ぐに義兵の御旗上げと、聞くと等しくその先陣の先驅けと、仰せも重き主君の嚴命、畏まつて候ふと、了承なせし眞田の與市。某に組まんず者、大場兄弟ならでなし。匹夫に等しき長尾の新吾。汝づれの手にかゝり、やはか斯くいふ義貞が、前髮首を取らんとは、存じも寄らぬ及ばぬ願ひ。させる敵の新吾爲景、只一刀に討つて捨てん。そこ一寸でも動くまいぞ。

爲景　我れ聞く、與市が差し料は、鮫鞘巻きの右手差ならずや。身にも及ばぬ新吾が生首、打ち落さんとは事をかしや。サア、尋常に觀念ひろげ。

義貞　さいふ爲景、覺悟をなせ。

爲景　義貞、觀念。

義貞　汝覺悟。

爲景　小癪な奴の。

義貞　推參な。

爲景　なんと。

ト兩人詰め寄り、キッと思ひ入れ。その山颪しの音にて、はら〳〵と梢の露こぼれる。これにて爲景の持ちたる松明消える。兩人驚ろき

義貞　ヤ、、、、。杉の梢の露落ちて

爲景　我が携へし松明を

義貞　打消したるは

爲景　オ、、、、。南無三。

義貞　所は名におふ石橋山の絕所。

爲景　木の間隱れの眞の闇。

義貞　互ひに討つとも、

爲景　討たるゝとも。

義貞　徒歩だちの

爲景　勝負せん。

義貞　長尾新吾爲景。

爲景　眞田の與市義貞。

兩人　觀念。

トこれより誂らへの鳴り物になり、爲景、義貞、見事

なる間の立廻りありて、トヾ引ッ組んで、義貞、爲景を下に引敷くと、バタ〳〵にて、花道より長尾新六定景、爲景と對の出立ちにて窺ひながら、走り出て來て、直ぐに舞臺へ來て、立ちかゝり

定景　はや何者か先驅けしたると覺えたり。何者なるぞ、名を名乘れ。

爲景　待て。さいふ汝は我が弟、長尾の新六定景ならずや。

定景　ヤ、、、。さういふ聲は爲景どのか。

義貞　爲景、動くな。

定景　さては下なるが兄者人か。

義貞　イ、ヤ、上なるが長尾の新六。

ト云ふうち爲景起き上がつて義貞を組み敷く。

爲景　與市、動くな。

定景　ヤ、、、。さては敵の眞田の與市は。

ト云ふうち立廻りにて、義貞、爲景を取つて押へる

義貞　組み敷かれしは與市義貞。長尾新六、早まるまいぞ。

爲景　うろたへるな長尾の新六、上なるこそは眞田の與市。とく立寄つて首を取れ。

定景　心得た。與市、動くな。

ト定景窺ひ寄つて義貞にかゝる。義貞、定景を見事に取つて投げ退け、鮫鞘巻きを拔いて爲景が首を搔きにかゝる。

義貞　長尾の新吾、觀念。

ト首を搔く事度々あるべし。搔かれぬゆゑ思ひ入れあつて、鞘を探り、拔けざる事を考へ、口に啣へて拔かうとして、拔けぬゆゑ、驚ろき

眼前に敵を組み敷き、鮫鞘卷きの右手差にて、首を搔けども押し切れぬ。この場に及んで一腰の、鞘詰まりして拔けざるは、運の極めか、是非もなや。さりながら、合點のゆかぬはこの鞘の

ト雲月に透かし見て、思ひ當つたるこなしにて

さては岡部の彌次郎時恭が娘、照葉の前が最前の、小指の血汐の拭はずして納めしゆゑ、血づまりしたる刀ゆゑ、かゝる手詰めの場に及んで、不覺を取るか、淺ましや。思へば〳〵、エ、、口惜しい事だなア。

ト無念なるこなしにて、舞臺先の岩をこの鮫鞘卷きにて打つ。途端にこの岩、仕掛けにて割れ、焰硝の火カツと立つ。ドロ〳〵にて、眞鍮の光明さす。この時、爲景を取つて投げ退け、岩の挾間をキッと見て

ヤ、、、、。持ちたる所の鮫鞘巻きの、鞘を砕かん一心にて、巖を打てば二つに砕け、正しくこれこそ頼朝公の、御髻の観世音。

ト手ばしかく取上げる。

我が手に入りしか。アラ／＼、有り難やなア。

定景　その尊像を。

ト取りにかゝる。義貞、鮫鞘巻きの鞘の儘にて定景を切り倒す。見事なる宙返り。直ぐに爲景、義貞を引据ゑ、立ち蹴にせうとする。ドロ／＼にて光明さし、爲影、立ちすくみになる。義貞、尊像を戴き、懐へ入れると、ドロ／＼止む。

直ぐにシャギリ。　　ひやうし幕

第一番目五建目　　曽我祐信館の場

役名――曽我太郎祐信。河津三郎祐安。鬼王庄司左衛門近淸。安久村の百姓、五平次。伊藤祐親入道寂心。源賴朝公實ハ五平次倅、長六。海老名權ノ頭。八牧奴、鐵平。忍び者實ハ尾形三郎時兼。海老名源八季門。三島入道茯苓。神職、羽根倉大之進。長柄四郎義景。藍澤彌五郎重俊。河津が一子、一萬丸。同次男、箱王丸。祐安妻、滿江御前。腰元、白糸。同、白瀧。近淸倅、鬼王丸。江間小四郎義時。祐信妹、梛の葉。

本舞臺、正面、二間の障子屋體。尤も升組みの揚げ障子、左右に妻戸。東の方に梅の大木、この洞人の出入りあり。下の方に手水鉢、枝折り門あり。すべて祐信館のかゝり。爰に安久村の百姓、五平次、親仁方、木綿やつし、短か羽織にて、小さき太鼓と撥を持つて居る。上の方に三島入道茯苓、長柄の四郎義景、藍澤の彌五郎重俊、上下、衣裳、下の方に反りを打ちかけて居る。股立ちの侍ひ三人、後に居並び、幕の内より「下がれ／＼」といふ聲して、太鼓謠にて、幕明く。

ト直ぐに茯苓、義景、五平次へかゝる。ちよつと立廻りにて、左右へ突き退ける。

茯苓　こりやア、老ぼれめ。

義景　我れ／＼へ

重俊　手向ひするのか。
皆々　下がれやい。
五平　モシ／＼、何れも様。全く手向ひは致しませぬ。其やうに下がれ／＼と喧ましく云はずに、この親仁が云ふ事を、マア／＼、一通り聞いて下さりませ。
茯苓　卑しいうぬらが云ふ事を、聞いて居る隙がない。今日は、曾我の太郎祐信が別荘、柏ケ峠のこの山屋敷に於て、伊豆相摸の大小名。
義景　流人頼朝が逐電より、平家のお疑ひを蒙むり、各々家の瑕瑾となる。さるに依つて、この館へ諸士の面々を招き、伊豆箱根兩社の御神を驚ろかせ奉り
重俊　平家無二の忠臣たる、六波羅へ神文の差上げんと、大切なる今日の會合。殊に以て、頼朝が行くへ詮議の眞ッ最中。うぬらがやうな卑しい老ぼれの來る場席でない。憂き目を見ぬうち歸るまいか。
皆々　親仁め、立てやい。
五平　立つて居ますわな。そんなむづかしい寄合ひなら猶の事。マア／＼、わしらがやうな年寄りの云ふ事も、聞いて見さつしやるものだよ。
茯苓　イヤ、どう云へば斯ういふと、面倒な死さがりめ。

義景　侍ひども、引ッ立てろ。
皆々　立てえい。
ト侍ひども五平次へかゝる。立廻りのうち、向うにて「伊東祐親さまお入り」と呼ぶ。五平次、侍ひを突き退け、捨ぜりふにて、花道へかゝる。三味線入りの下がり葉になり、花道より伊東祐親入道寂心、十德、法眼袴にて出て來る。江間小四郎義時、三方に三建目の帶串を二本載せ持ちて出る。海老名權頭、中老、上下、衣裳。海老名の源八季門、同じく上下、後より鬼王庄司作鬼王丸、上下、衣裳、高股立ちにて、附いて出る。侍ひ三人附き出る。五平次、この人數を見て、小腰を屈め、前を通つて行かうとする。
祐親　老人、待て。
五平　エ。
義時　祐親どのがお留めなさるゝ。老人、待て／＼。
權頭　何も怖い事はない。用がある程に
季門　老ぼれ、控へろ。
五平　ヘエ、。
トこなし
祐親　あれから見れば、仔細ありげな下様の老人。今日こ

義時　流人頼朝の行くへ知れざるに依つて、もしや佐殿にの曾我の太郎祐信が別莊に於て、伊豆相摸の大小名。
荷擔の諸士もあらんかと、御不審立ちし平家のお疑ひを
◉避けんが爲
禰頭　面々兩社權現の神慮をすゞしめ、六波羅へ神文を捧げんと評定決談の會合。
季門　それと知つて紛れ込んだか。頼朝は勿論、源氏贔屓な奴を詮議の最中。怪しい親仁め、動きやアがるな。
鬼王　イヤ〳〵、憚りながら、見受けましたるところが、百姓體の老人。さして怪しい者でもござりますまい。お咎めなくとも、お赦しなされ、御尤もに存じまする。
コリヤ〳〵、老人、お詫びは某いたしてくれう。早く罷り立て。
五平　有り難うござりまする。
ト行かうとする。
祐親　イヤ、待て〳〵。
五平　まだ呼ばつしやりますか。
季門　用がある。待てえゝ。
祐親　仔細ありげの親仁め、何にもせよ、身に續いて參れ。
五平　心得ました。この親仁が願ひの筋を、どうか聞いて下されさうな御隱居樣。何處までも參りますべい。
祐親　然らば、何れも。
皆々　先づ、ござりませう。
ト矢張り右の鳴り物にて、皆々本舞臺へ來る。祐親、上へ通り、並よく並ぶ。奥より梛の葉、振り袖、裲襠、衣裳にて出て來る。
衣笠　祐親どの、今日の會合
御苦勞千萬に存じます。
皆々　若殿原にはお早い出席、お氣の毒に存ずる。
祐親
梛葉　これは〳〵、伊藤入道祐親さま。ようこそお出で遊ばしました。兄祐信、お噂いたして居られましたわいなア。
祐親　こりやア祐信の妹御、梛の葉どの。その後は疎遠に打過ぎ申した。
梛葉　御機嫌の體を見まして、お嬉しく存じますわいなア。
禰頭　この海老名權の頭は、館の主祐信が爲には現在の舅ながら、祐信が妻、身共が娘の玉琴、不慮に横死なしてより、何となく疎遠ながらも、今日の會合に罷り越したるは、聟祐信が心底、何とも心得ぬ事あるに依つて、それゆゑ祐親どのに同道いたした。

季門　成る程、權の頭どのゝ云はつしやる通り、頼朝が逐電以後、諸士會合の折からは、いつとても出合はぬ北條時政、三浦の一黨、さては當家の主祐信。二股武士に極まりましたわえ。
義時　お控へなされ、季門どの。同苗時政は、この程所勞に依つて、この義時が父の名代、何れも方の御料簡に從ひまするが、我れ／＼親子が潔白かと存じまする。
椰葉　ほんに時政さまは、好い折からの御病氣で、親御樣の御名代に、お前樣がお出でなさんすといふは、此やうな嬉しい事はござんせぬわいな。
義時　コレ、椰の葉どの。つか／＼と何仰しやる。今日は大切の會合でござるぞや。
椰葉　サア、その會合が、結ぶの神のお引合せぢやわいなア。
義時　アレ、まだ其やうな。
椰葉　オヽ、辛氣。
五平　オヤ／＼、この姐樣は何をふりしやりさつしやるのだ。それはさうと、伊藤さまとやら、この親仁に御用とは、何の御用でござりまするな。
祐親　外でもない、其方が云ふ事を聞いてくれうと思うてサ。
五平　そりや有り難い。わしが來た樣子を申し上げませう。
鬼王　慮外のないやうに、それへ出て、逐一申し上げよ。
ト五平次摺り出る。
五平　聞いて下さいまし。斯うでござります。わしやア安久村の百姓、五平次といふ親仁でござりますが、わしが一人息子に、長六といふ律氣者があるだて。
季門　ハテナ、律氣者がどうかしたか。
五平　サア、そこでござります。その長六めが、廿日ほど前に、御地頭屋敷へ行くと云ひまして、内を出ましたワ。それから、待てども暮らせども、歸らないだて。
鬼王　そりやア、狐の若衆にでもなつたのであらう。
五平　おらがお地頭は、爰の祐信さまだに依つて、お上屋敷へ行つて聞いて見ても、誰れが一人おらが息子を知り人がない。そこで友達どもに聞けば、廿日前に屋敷へ來たとサ。お地頭の祐信さまが、長六めを側へ引きつけて何か云ひつけさつしやると思つたら、奥へ連れてござつたげな。あんまり遲いから、友達どもは歸る。其の屋敷へ來て聞いて見れば、疾に歸つたとある事なり。それから村中が亂騷ぎよ。

季門　さうであらう〳〵。

五平　コレ、聞かつしやりませ。それから村中が手分けをして、太鼓や鉦を叩いて、夜も晝も、迷子の長六やい長六やいと尋ね廻つても、今に行くへが知れませぬわいの。

鬼王　それは氣の毒なものだ。

五平　わしが身にもなつて見て下さりませ。この秋から家を讓り、隱居すべいと思ひの外、たつた一人の伜に別れて、わしやア一夜さも、まんぢりした事もござりませぬ。

季門　そりやア尤もだ〳〵。

五平　あんまり不思議だに依つて、法印どのを賴んで、占方を見てもらつたところが、矢張りこの屋敷に居ると占ひましたよ。

祐親　しかと左樣に占つたか。

五平　サア、そこでわしも合點がいかないと思つたから、爰へ來たところが、今日は伊豆相摸のお大名樣方の、寄合ひがあるとの事を聞いて、幸ひ詮議してもらふべいと罷り申したところ、先刻から、コレ〳〵、爰にござる

ト伴眷、義景、重俊を指ざして

二本棒達にいぢめられて、わしも度を失ひましたよ。

祐親　最前からの話しのあらまし、しかとそれに極まらば、兼ねて心附け置いたる祐信が心底。何れも何と思ひ召さる。

權頭　イカサマ、祐親どの御意の通り、何とも心得ぬ

皆々　祐信が心底。

義時　その疑ひなさる事ながら、祐信どのも平家無二の忠臣。この節、餘人の不審にあづかる仕事も致されまいかと存じまする。ナ、椰の葉どの、左樣ではござらぬか。

椰葉　義時さんの仰しやる通り、日頃から堅くるしい兄さんの御氣質。コレ、そこな人。

五平　わしが事かえ。

椰葉　其方が事ぢやわいなア。其方の子が見えぬというて、この屋敷で誰れが知らうぞ。疑はやるは心の迷ひ、殊さら今日は大切の會合。其方衆が居やつては爲にもならぬ程に、早う歸つたがよからうぞや。

ト五平次、思ひ入れ。

祐親　歸るには及ばぬ。親仁が今の話しを聞けば、我れ我れにその伜が詮議をしてくれろと云ふのか。

五平　左樣でござりますとも。どうぞあなた方のお慈悲に、伜が行くへを御詮議なされて下されませい。ハイ〳〵、お願ひでござりまする。

權頭　氣遣ひするな。伊藤どのを始め、我れ〳〵がこの館へ罷り越したるは、面々の潔白を磨かんが爲。義時の持參されたる、伊豆箱根兩社の幣こそ、諸士の善惡を探るの神寶。疑はしき者はこれを持たせて九字を切りかけ、兩社の託宣ある、神道の祕文を唱へるときんば、その者の心にある事を口走るが、この幣の奇瑞。後程までに伜が有無を糺してくれうぞ。

五平　そりやア、有り難うござりまする。

茯苓　時に、祐親どの。御子息河津の三郎祐安どのも、今日の會合にはお出でゞござらうな。

祐親　如何にも、出席仕るて。

義景　然らば最早、お出でに間もござるまいがな。

祐親　イヤ〳〵、伜祐安は、先達て約せし通り、當時朋友の若殿原と、奥野の狩より赤澤山へ打登り、源平晴れの角力の一興。これとても諸士の心底計る方便。

重俊　すりや、河津どのには、赤澤山より直さまお越しなさるでござりませうな。

祐親　如何にも。何は兎もあれ、これより奥へ罷り越し、主の祐信にも面談いたさう。

義時　然らばこの義時も、大切なこの幣、奥の假殿へ持參仕りませう。

椰葉　左樣なされませい。奥の假屋の不淨を拂ふ、宮仕達の管絃催馬樂、皆神諫めの支度でござりまする。

季門　祐親どのにも、いざ先づ奥へ。

祐親　如何にも、左樣仕らう。椰の葉どの、御案内。

椰葉　畏まりました。

五平　この親仁も、そこらに屈んで伜が吉左右。

祐親　有無は後方。何れも奥へ。

皆々　先づ、ござりませう。

ト管絃になり、祐親、椰の葉、殘らず附いて下座へ入る。向う幕の内にて「滿江御前さまお入り――」と呼ぶ。下座にて「祐信どのゝお入り」と呼ぶ。出の唄になり、花道より滿江御前、裲襠、衣裳にて出て來る。これに腰元白糸、白瀧、腰元の形にて、附いて出る。小姓、左門、若衆方、上下、衣裳にて附いて出る。この途端に正面の障子を引き上げる。この内に曾我太郎祐信、長上下、小さ刀の形にて、三方に神酒德利を据ゑ、持つて居る。

左門　申し上げまする。祐信さまも、あれにお出でなされまする程に、お早う入らせられませう。

満江　これは〳〵、曾我太郎祐信さまでござりまするか。河津の三郎祐安が妻、満江でござりまする。今日は、夫の名代として、これまで参りましてござりまするわいなア。

祐信　これは〳〵、河津の三郎祐安どのゝ奥方、満江御前。未だしみ〴〵御意得ませねば、今日こそ幸ひ、お知るべになりませうか。

満江　左様ならば、お側へ参りまして、御挨拶申し上げませう。

祐信　サア〳〵、これへ〳〵。

満江　そんなら、御免下されませい。

祐信　拙者もそれへ参らうか。

トまた唄になり、満江、皆々、舞臺へ來る。祐信、平舞臺へ下りて來る。直ぐに合ひ方。

祐信　サア〳〵、これへ。

満江　御免なされて下さりませ。

祐信　早速ながら、承りませうは、伊藤どの御親子には、類葉の太郎祐信、疾にも満江には御意得ます筈でござつたが、折もござらいで、御疎遠に罷りなりました。

満江　左様でござりまする。兼ね〴〵承り及びましたる曾我の太郎祐信さま、いつぞはお近づきになりたいものぢや、御縁を求めまして、お側へなりとも参りたいものぢやと、朝夕存じて居りましたが、不思議に河津の三郎に縁を組みまして、斯様にお出合ひ申しまする事、大抵や大方、有り難い事ではござりませぬ。何にも存じませぬ不束者、この上ともに、よろしうお願ひ申し上げまする。

祐信　これは〳〵、物和らかな御挨拶。斯く申す祐信儀も何卒御同席いたしたいと、お連合ひ祐安どのとも、度々お噂申して居つた。先づ〳〵斯やうにお出合ひ申せば、拙者も大慶。萬事は心措きなう、仰せられてようござらう。

満江　これは有り難うござりまする。

祐信　して、満江どのには、何ゆゑお越しなされしぞ。

満江　御存じの通り、夫祐安は、奥野の狩倉より赤澤山へ罷り越せとの、舅祐親どのの云ひ附け。お歴々の中へ遅参いたす憚りあれば、名代に其方参れと、頑なゝ夫が申し附けに依りまして、殿御ばかりのその中へ参りましたが、あられもない女子だてらに大膽なと、思ひ召しの程も、ハイ、お恥かしうござりますわなア。

祐信　イヤ、なんの〳〵。河津どのゝ御名代とあれば、ちつとも苦しからず。ようこそお出でなされた。アヽコレ奥玉琴が居つたなら、御馳走の致し方もござらうに、何を申すも武骨の祐信、粗末の段は、何事も許し召されい。

蒲江　ほんにマア、私しとした事が、此方の申す事ばかり。いつぞや奥様玉琴さまには、不慮にお果てなされて後、何事も御不自由のやうに思し召されませうな。

祐信　老いて妻なきを鰥といふ。我れら妻なきやもめの身の上。何者の仕業にや、小早川の藪垣にて、あらぬ死を遂げました女房玉琴、不便な事を致してござる。年頃馴れました者ゆゑか、秋の徒然、雨夜の寝醒め、思ひ出しましては、何とやら心淋しいものでござる。

蒲江　そりやモウあなたに限りませず、夫は大切、女房は不便と思し召しましてこその、夫婦の情合ひとは申しませぬか。玉琴さまがお出でなされいでは、お淋しいも御尤もでござりまするわいな。

祐信　これは〳〵、女儀なればこそ忝ない御挨拶。時に、御息子の一萬箱王二人ともに、堅固で成人召さるゝかな。

蒲江　イエモウ、二人ともに腕白な事ぢやござりませぬ。今日も今日とて、赤澤山に諸士方の角力があると聞きますや否、鬼王庄司に、連れて歩めと取りついて、やんちやばつかり申して居りまするわいな。

祐信　それはわやくな筈でござる。随分心任せにお育てなされい。

蒲江　有り難うござります。

白糸　申し〳〵、あなたが祐信さまでござりまするか。

白瀧　さうぢやわいなア。昨夜一萬さまのお伽に、縁結びを致しましたれば、祐信さまと蒲江さまと、撚り結ばれてゞ

皆々　ござりましたわいなア。

左門　コレ〳〵、女中方、滅多な事を云はぬものでござる。

白糸　それでも此やうに結ばれてござりましたに依つて、私しが持つて居りまするわいなア。

ト懐より縁結びを出して、左門に見せる。

左門　これは又氣の毒千萬な。斯やうな物は出さぬものでござる。

祐信　コレ〳〵、何と云うたのぢや。

左門　ハッ、夜前一萬さまのお伽に、緣結びとやらを致しましたと、イヤ、他愛もない遊び事。その儀を申したのでござりまする。

祐信　祐信が興なぞにても、姊梛の葉など、折ふし左樣な事も致す事ぢや。ドレ／＼、慰みに見申さう。これへこれへ。

左門　ハッ、御覽なさるゝものではござりませぬ。

滿江　コレ／＼、何ぢやあらうと、祐信さまの御意ぢや。左門、上げたがよいわの。

左門　然らば御免下されませう。

ト緣結びを扇へ載せ、祐信が前へ置く。祐信、取上げにつこりと笑ひ

祐信　滿江どの、御覽なされい。祐信さま、滿江さまと、斯やう結ばれましてござる。なんと、をかしいものではござらぬか。

滿江　子供の遊びと申しまするものは、をかしいものでござりまする。

祐信　例へ戯れにも致せ、一萬は男子、斯やうな事は御無用になされい。旣に忠臣は二君に仕へず、貞女兩夫に見えずと申せば、遊び事にせよ、許さぬ儀でござる。重ねてはキッと仰せ附けられませい。

ト火鉢へくべる。

滿江　左樣でござりまする。女の愼むべきは不義徒ら。殊に兩夫に見えまするは、女子の道にあられぬ事、祐信さまの今仰しやつた通り、貞女兩夫に見えず、忠臣二君に仕へずと、申しますれば、定めて祐信さまにも、二君にお仕へなされぬお心でござりませうな。

祐信　曾我の太郎祐信とても、河津三郎祐安とても、事に依り、世に臨んでは、良弓たりとて二張の弓も引く心。忠臣たりとて二君にも仕ふる心サ。

滿江　モシ、そんなら祐信さまには、二君にお仕へなさるるお心もござりまするかえ。

祐信　豫讓は晋の人なり、故あつて范中行氏に仕へて、而うして名を知らるゝ事なし。去つて智伯に仕ふ。智伯甚だ之を尊寵す。忠臣として二君に仕へざるには非ず。例はゞ當時盛んなる平家に從ひ、主從の禮儀はなせども、源氏の尊寵にあづかるからは、義の爲に仕へ、志しを顯すが、武士たる者の磨くところ。某に限らず、滿江どのの連合ひ、河津どのゝ心底とてもその通り。祐信二君に仕へる心サ。

満江　思ひも依らぬ祐信さまの仰せ。連合ひ河津の三郎も

祐信　斯く申す祐信も同腹中サ。

満江　舅伊藤入道さまと、ふさはしからぬ御仲ゆゑ、そんなら夫祐安どのも、お行くへ知れざる頼朝さまへ

祐信　コリヤ、滅多な事をお云やるな。

満江　ハイ。

祐信　して、満江どのには、兩夫に見える心でござるか。

満江　穢らはしい事、仰しやつて下されますな。

祐信　忠臣は二君に仕へても、貞女は兩夫に見えぬ心か。

満江　お痛はしや、故左馬頭義朝公の北の方、常磐御前さまは、野間の内海に於て頭の殿、長田が爲に討たれ給ひてその後に、御公達のお命をお助けなされんばつかりに、清盛公に御身を任され、貞女の道をお破りなされし貞女の鑑、聞くも中々愛たてしき常磐御前の御身の上。もしや妾が身の上にも、此やうな事があるならば、マア、悲しい事ではござりませぬかいなア。

祐信　節義に餘る満江どのの志し、飽くまでも祐安どのへ、操を立てられんとは頼もしい。幸ひなるかな、今日は、伊豆相模の諸歴々、六波羅どののお疑ひを避けんが爲、この所に於て會合いたし、伊豆箱根兩社の御幣を以て、胸中を探り知る大切なる參會。祐信とても斯くの通り、兩社へ神酒を献げ、汚名を雪むらん事を恐るゝ折から、満江どのには祐安どのの名代、心を淸淨に召されて、參拜いたされてよからう。

満江　畏まりましてござりまする。

ト立つて角盥へ手水鉢の水を汲み、持つて行かうとする。

祐信　満江どの、こりや何をなさる。

満江　忠臣二君に仕へ、貞女兩夫に見ゆるとは、忌はしい事聞いたる耳の、その穢れを洗うて參りませうわいな。

祐信　穢れし耳を洗はんとて

満江　お次へ立つのでござりまする。

祐信　許由耳を洗へば、巣父牛を牽いて歸る。心も淸き女の鑑。満江御前、それをお見やれ。

ト角盥を差出す。顏を映す。

満江　祐信さま、妾が顏がこの水へ、映れば映る水鏡。

ト角盥の中を見るうちに、トヒョロ／＼、薄ドロ／＼にて、日覆より鳩數多舞ひ下がる。満江キッと見て

アレ／＼、水に映るは數多の鳩。已に漢の高祖、楚の項

羽に戰ひ負け、榮陽の井の内に隱れ給ひしその時に

祐信　鳩來つて井上に集まる。敵の項羽これを見て、隱れ給ひし井の内の、その疑ひを避けしとかや。

滿江　その後、漢家四百年の、基となりしも鳩の不思議。不思議臥木のあの中に

ト寄らうとする。祐信、盥の水を明けて

祐信　覆水盆に返らず。滅多な事を云ふまいぞ。

ト思ひ入れ。其うちに滿江、火鉢の内をフッと見附けて

滿江　合點のゆかぬ、この灰に、祐信さまと妾が名の、コレ、滿江とあり〳〵と、じやうとなつても殘りしは。

ト祐信が側へ寄る。扇にて打消し

祐信　これとても人を思ひの初煙り、馴れぬ眺めの空の浮き雲。滿江どの、後ほどお目にかゝりませう。

ト唄になり、祐信入る。

滿江　其方衆も休息しや。

皆々　畏まりました。

ト左門、腰元、皆々下座へ入る。滿江あたりを見て

滿江　燕雀騒ぐ時は高人到るとやら、古き書にも記せし通り、思ひ廻せば最前、梅の梢に群がる白鳩。正しくこの木の洞の内にこそ、尊き人の在す印か。もしや館を遷幸なされし、彼のお方では

ト思ひ入れあつて

何にもせよ、イデ、この洞を。

ト幕明きに五平次が腰に附けて出た菅笠を取上げ、こなしあつて、洞を見當てに投げる。洞の内より源頼朝、笹龍膽の附いたる白き壺折衣裳にて、中啓を持ちズッと出る。滿江見るより恟りして

滿江　ヤ、頼朝さまには、どうして爰に。

頼朝　コリヤ。

ト兩人あたりに心を附けて

滿江　ようマア、御機嫌ようお出で遊ばされましたなア。

頼朝　河津の妻の滿江御前。一別以來、堅固であつたか。

滿江　君の遷幸遊ばせしは、この年月の御欝憤、そのお憤りを晴らされん爲の儀でございませうな。

頼朝　この兵衛の佐が欝憤を晴らさん爲とは。

滿江　憚りながら、御心中を、お推もじ致しまして、自らがお目にかけまする一品は。

頼朝　某に見する物とは。

滿江　ハッ。

ト合ひ方になり、蒲江立つて、障子屋臺に飾りある三方に載せたる神酒徳利を持ち來り

御心底は、まッこの通りでござりませうがな。

ト徳利を取つて打ちつける。徳利微塵に割れる。

頼朝　これは。

蒲江　今打ち割りし神酒徳利の、瓶子は即ち平家にして、微塵になさんお心でござりませうがな。

頼朝　イヤ、頼朝が心底は違うた。この通りぢや。

ト一つの瓶子を取つて打ちつける。これも微塵になる。

蒲江　瓶子を微塵に遊ばしながら、御心底が違ひましたとは。

頼朝　神道は捨てる存念。

蒲江　神道を捨てたと、御意遊ばすは。

頼朝　某が心願は、斯くの通りぢや。

ト壺折衣裳ともに、肌を脫ぐ。下に袈裟を掛けて居る。と二重舞臺へ海老名權の頭、長柄の四郎義景、藍澤の彌五郎重俊、下座の方へ、三島の入道茯苓、下の方、海老名の源八季門出る。

蒲江　ヤヽ、其お姿は。

頼朝　我が父左馬頭義朝は、朝廷に叛き奉り、その企み事ならずして、鳳闕の忠臣たる清盛一家の鋒先に敗北なし、野間の内海に於て、長田が爲に落命は自業自得。これ天命の歸するところ。何ゆゑ平家を怨みんや。せめては父義朝を始めとして、兄の菩提を弔らはん我が存念。出家堅固を遂げたいわえ。

蒲江　イエ〳〵、そりや思し召しが違ひました。お前樣は、マア、腑甲斐ない、御出家をお遂げ遊ばさうとは、そりやマア、どういふ御所存でござりますぞ。奢る平家を討ち滅ぼし、二度源氏の白旗を押し立て、義朝公の御恨みを晴らされんと、思し召すお心はござりませぬか。なぜに義兵の思し立ちはござりませんぞ。お情ない。

頼朝　天晴れ頼もしき蒲江が今の諫言。女子心にこの頼朝を、腑甲斐ないと思ふは道理。さりながら、斯く漂泊の身の流人。世になし者の某へ、力を添へる者があらうか。

蒲江　ござりまするぞえ。舅の伊藤入道は、平家へ無二の忠臣ながら、夫河津の三郎は、先祖累代の御恩を忘れず、今にも義兵の企てあらば、夫は一の御身方、また伊豆相模の諸士方にも、北條どのを始めとして、三浦の一黨、土

屋岡崎、土肥加藤、元より主の祐信さま、君を匿まひ申さるれば、云はずと知れたる副將軍師。片時も早く、大義を思し召し立たれませい。

賴朝　さほど汝が勸むるとも、佛道歸依の初一念、飜へさぬが出家侍ひ。

滿江　すりや、どうあつても御出家を。

賴朝　淸和源氏の嫡流たる、兵衞の佐賴朝が、とても開運なすまじきと、世を見限つて腰拔け坊主。

滿江　世の盛衰とは云ひながら、源氏一統の御代であるならば、淺ましき姿にてはあるまいものを。賴朝さま。

賴朝　滿江御前。

滿江　味氣なき世の

兩人　有樣ぢやなア。

トこなし。バッタリと音して、下より拔き身を兩人が前へ突き出す。賴朝思ひ入れ。滿江飛び退いてこれをキッと見る。賴朝に目配せする。心得て元の洞へ忍ぶ。こなたは小隱れする。本神樂になり、二重舞臺の蹴込みを切り破り、忍びの者、尾形三郎時兼、白黑の片身變りの忍びの形、手甲、股引、切り草鞋にて、拔き身を引ッ下げ、顯はれ出て

時兼　まんまと下屋へ忍び込み、祐信が匿まひ置く、賴朝がその在所を、見屆けたが出世の種。生ッ首を打ち落し、六波羅へ持つて行きや、一ヶ國や二ヶ國にやなりさうなものだ。ドレ、爰へそびき出し

ト此うち滿江、裲襠を脫ぎ、こなしあつて、梅の洞へかゝる時兼を支へる。立廻り。

滿江　待つた。

時兼　こりやア女。なぜ妨げをひろぐのだ。

滿江　見れば怪しい姿の曲者。この梅の木へ立寄つて、何とするのぢや。

時兼　何をするものだ。こんな姿で忍び込むからは、云はずと知れたお泥坊樣。この梅の洞に隱してある、金の蔓を盜みに來たのだ。惡く邪魔をすると此だんびらが閃いて、うぬがその美しい生ッ首を、ころりぽつたりれん飛びだが、小母さん、姉さん、とち女郎め、あまめ、女め、べんなごめ、そこ押ッ開いて通すまいか。返答はドゞうだエ、。

滿江　愚かや曲者。あの梅の洞こそは、宿り定める鳥の塒。器物の類が隱してあらうか。是非狼藉を働らくと、侍ひどもに云ひ付けて、搦めさするぞ。

時兼　ハヽヽヽ。繩目の恥は覺悟の前。水責火責を怖がつて、こんな商賣がならうと思ふか。面倒な。退きやれ。

ト洞へかゝる時兼を引戻す。立廻り。この立廻りに時兼が刀を滿江打ち落し、見事に取つて押へる。

滿江　狼藉者が入つたるぞ。左門、參れ〳〵。

左門　ハツ。

ト奥より左門、茯苓出て來る。

滿江　繩。

左門　ハツ。

ト繩を取つて滿江、時兼を縛る。

時兼　エヽ、殘念な。

茯苓　こりやア河津の奥方滿江どの、天晴れ、お手柄〳〵。

滿江　今日の會合の紛れに、忍び込みたるこの曲者。お前にお預け申しまする。よろしう御詮議なされませい。

茯苓　心得ました。

左門　滿江さまのお出でとお聞き遊ばし、親旦那入道さまにもお待ちかね。イザ、奥へお越しなされませい。

滿江　成る程、舅御のお目にかゝらう。其方もおぢや。

茯苓　曲者、立て。

時兼　立つて居るわえ。づく入め。

滿江　イザ、入道さま。

茯苓　滿江どの。

滿江　サア、お出でなさんせいなア。

ト唄になり、滿江、左門を連れ、障子屋體へ入る。茯苓、時兼を引ッ立て、下座へ入る。奥より伊東祐親入道寂心、海老名の源八季門、神職羽根倉大之進、麻上下に木綿襷を掛けて出る。

大之　祐親さま、モシ、只今奥の一間で談ぜし通り、賴朝を匿まひ置く、この家の主祐信は、云はずと知れた源氏方。

季門　まつた貴殿の子息祐安どの、慥かに賴朝へ荷擔と見える。その證據は、御内寶の滿江どの、賴朝に義兵を勸める先刻の諫言。必らず御油斷はあられまするな。

祐親　成る程、嫁滿江が親土肥の次郎實平も、賴朝へ力を添へる彼奴が心底。例へ伜の河津めが、賴朝へ荷擔なすとも、親中妻にこの入道、その分に致し置き申さうか。それより差當る祐信めを搦め捕り、白狀させて縛り首。

季門　そのお料簡は專一ながら、曾我の祐信は關八州に並びなき武藝鍛錬の豪傑、なか〳〵我れ〳〵が腕先で

大之　それ〳〵、酢でも酒しほでも、いける祐信ではござ

らぬてサ。

祐親　それにこそ屈竟な、伊豆箱根社の御幣、あの御幣を持たせて、いゝよりに立つて恍惚になつてけつかる所を、押へ附けて三寸縄。

季門　こりやア出來ました。して神職の大之進、手段があるか。

大之　そりやアお氣遣ひなされますな。この羽根倉大之進、神道の祕密を以て、祐信が幣帛を捧げる時、後へ廻つて呪文を唱へ、有る事無い事、彼奴が企みの有るやうに、祐信にしやべらせる事は、神道加持で、やるものぢやアござりませぬ。

季門　こりや出來ました。そんならこれから手段を廻らし、祐信めをぶッちめる

祐親　コリヤ。

ト三人思ひ入れ。後へ左門出かゝり居て樣子を聞く。

左門　さては祐信さまを。

トこれにて三人惘りして、寂心兩人に目くばせする。兩人心得奥へ入る。左門、入らうとする。

祐親　左門、待て。

左門　ハツ、これは親旦那入道さま、何ぞ御用でござりまするか。

祐親　用が有る。爰へ來い。

左門　ハツ。

トこなしにて側へ來る。

祐親　今の密談、其方は聞いたであらうな。

左門　イヤ、何も承知いたしませぬ。

祐親　吐かすな。丁稚め。樣子を聞いた面魂ひ、生け置いては事の妨げ。

左門　イヤ、全く以て私しは。

ト思ひ入れ。

滿江さまの御用のある身。お前はこれに。

ト行かうとする。祐親、左門を引き戻し、逃げる所を拔打ちに浴せる。管絃になる。

左門　こりや、どうあつても私しを。

祐親　立ち聞いたが身の因果、尋常に死んでしまへ。

ト引上げて抉り殺す。止めを刺して血刀を振り、あたりを見廻し居ると、下座の方より五平次、窺ひ出て、手水鉢の水を汲みて、祐親が刀へ注ぎかける。祐親キッと思ひ入れ。また手拭掛けの手拭を取りて來て刀を拭ひ、下へ下がる。祐親死骸を片附けろと顏で教へる。

五平次心得、左門が死骸を梅の木の蔭へ隱し、羽織を脱いで、そこらを拭き廻る。祐親切りつけるを、そこにある三方にて、しやんと請けとめる。

五平　こりや何となされます。

祐親　下郎は口のさがなき者。

五平　成る程。

ト思ひ入れして、どつかと坐り、合掌して首を差出す。祐親は試す事二三度あつて、刀を納め

祐親　行け。

ト五平次こなしあつて、づう／＼と花道へ行く。

五平次待て。

ト矢張り行かうとする。

イヤサ、五平次、用がある。待て。

ト五平次立戻つて、祐親が側へ坐る。

五平　どうでも助けちやア、寢覺めが惡うござりませう。イザ、すつぱりとやつてしまはつしやりませ。

祐親　老人ながら大丈夫の面魂ひ。何を云ひつけても仕兼ねさうもない親仁め。われも望みがあるであらうな。

五平　御意の通り。人間と生れた習ひ、安久村の土百姓、土ほぢりで浮世を渡れども、その古へは武士の切れ端。保元平治の亂れより、關東へ下つて淺ましいこの樣。一人の伜を武士にしたいが身の願ひ。親仁相應な御用がござらば、何なりと仰せ付けられて下さりませう。

祐親　出かした。身が大望に荷擔なせば、其方とても身の活計。

五平　して又、お前のお望みは。

祐親　平家の恩顧は蒙むれども、一ヶ國や二ヶ國の端下大名、望みでない。清盛入道の果報に肖り、關八州の大小名をぶッ潰し、東八ヶ國の押領主とならば、子孫の繁榮目の當り。あはよくば日本國中一呑みに

五平　四海の主に、なりたいと仰しやるか。

祐親　掌握なさば其方にも、西海道を宛て行なはん。

五平　面白い。して、思し召しの御手段は。

祐親　其方を平家の侍ひ、武藏の左衛門有國に仕立て、諸士の奴等が見知らぬを幸ひ、時政祐信を始め、土肥岡崎に至るまで、賴朝を取立てる二股侍ひと云ひ立て、淸盛公の上意ごかしに詰め腹切らせる密談。殘りの青二才めらは、饗應に事寄せ、毒殺の皆殺し。

五平　出來ました。その似せ侍ひ、やるものおやアござらぬ。武藏の左衛門有國とやらになつて、只今の御計策の

通り、すつぱりとヤツつけてお目にかけませう。その代りには、關八州は些細な事、お望みの通り、この日本がお手に入つたら

祐親　その時こそは九州の、國司となすワ。

五平　君は日本の弓矢の棟梁。

祐親　其方は西海筑紫の探題。

五平　忝ない。

祐親　「蜻蛉と見れば小さい秋津州

五平　四海を握る掌もあり。」

祐親　五平次。

五平　祐親さま。

祐親　ハテ

五平　心地よき

兩人　熟談ぢやなア。

ト思ひ入れ。奥にて人音する。兩人心附き

祐親　また奥の間で。

五平　何かの樣子、

祐親　五平次、來い。

ト唄になり、祐親こなしあつて、五平次附いて下座へ入る。バタ〳〵にて、屋體より梛の葉出て來る。後より長柄の四郎義景出て來り

義景　コレ〳〵、お娘。其やうにつれなくする事はない。今日の會合に、首を長くして來たも、そもじの顔を見たいばつかり。ついちよこ〳〵と初物を、戴かせてくれろくれろ。

梛葉　エヽ、アタうるさい、知らぬわいなア。

義景　知らぬに依つて敎へてやる。否でも應でも御内陣を探らねばならぬ。

ト無理に抱きつく。梛の葉が帶を解く。

梛葉　エヽ、コレ、惡い事をさしやんすな。アレエアレエ。

義景　やかましい。これからが、命だ〳〵。

ト抱きすくめ。立廻りに上着を脱がせる。梛の葉、白無垢になる。無理やりに押し倒さうとする。よろしくある。梛の葉身をあせる。所へ義時出て來り、義景を引き退ける。梛の葉起き上がる時、義景が袖を踏まへて居るゆゑ、是非なく袖を引切つて起き上がる。此うち義時、落ちたる杓子にて水を汲み、義景が頭へ掛ける。これにてうろたへ

義景　ヤレ、切つた〳〵。人殺し〳〵。お娘は、どこへ行

つた行つた。
ト月に水入りしこなしにて、そこらを掴み探して奥へ入る。此うち梛の葉、帯を締める。
義時　梛の葉どの。
梛葉　義時さま。今のを見やしやんしたか。わたしや恥かしいわいなア。
義時　引く手數多の梛の葉どの、この義時に兎やかうと仰せられたも、お嬲りなさるゝお心であらうな。
梛葉　アレ、あのやうな、無理ばつかり云はしやんすわいなア。命に代へて添ひたいと、思うて居る大事の殿御、僞はり云うてよいものか。兄さんにも打明けて、早う祝言がしたいわいなア。
義時　なんぼ其やうに云はしやれても、今のやうな體を見ては、この義時と添ふ心はあるまいがの。
梛葉　なんの／＼、誓文かけ、その美しい御器量に、わたしやどうもならぬ程
義時　そりや僞はりであらうがの。
梛葉　僞はりと仰しやるは、わたしを嫌はしやんすのか。とても添はれぬ戀路なら、焦れて死ぬより一思ひに。
ト義時が刀へ手を掛け、死なうとする。

義時　コレ、待つた。
ト留める。立廻り。最前より後へ滿江出かゝり居て
滿江　死なしやんせ、梛の葉さん。
トこれにて兩人恟りする。
梛葉　ヤア、お前は滿江さま。
滿江　戀路が叶はぬものならば、ソレナ、合點か。
ト教へる。
梛葉　さうぢや。南無阿彌
トまた死なうとする。
義時　コレ、早まるまいぞ。
滿江　そんならあの子の仰しやる通り
梛葉　戀を叶へて下さんすか。
義時　サア、それは。
滿江　否なら、早う死なしやんせ。
ト梛の葉また死なうとする。
義時　コレ、待つた。
滿江　留める心は合點ぢやな。
義時　ぢやというても。
滿江　見殺す心か。
梛葉　放して殺して

義時　早まるまいぞ。
梛葉　そんならどうぞ。
滿江　可愛がつて上げなんすか。
義時　サア、それは。
三人　サア、〳〵〳〵、
滿江　どうぢやぞいなア。
義時　サア、其やうに云うてなら、この上は
兩人　この上は。
義時　どうなりとも。
滿江　ソレ、どうなりとも。
　ト梛の葉を突きやる。
梛葉　オヽ、嬉し。
　ト抱きつく。奥より季門、重俊、義景出る。
三人　不義者、動くな。
三人　これは。
季門　大切な會合の席といひ、伊豆箱根兩社の御幣を預かる身を持ちながら
重俊　神前も同然たるこの屋形に於いて、色事をおッ始めた江間の義時、諸士面々へ云ひ譯があらうと思ふか。
義景　義時ばかりぢやない。梛の葉どの、この長柄の四郎を、蛙ではあるまいし、面へ水を掛けて、よくむごい目に逢はせたな。
季門　これからは、兩人ともに引ッ立て
重俊　時政、祐信が心腹を聞かにやァならぬ。義時、立て。
　ト義時にかゝる。立廻り。滿江、後より重俊を突き退ける。
重俊　こりやア河津の奥方滿江どの、不義者めらを引ッ立てる所へ罷り出て、なぜ妨げをおしやるのだ。
滿江　イヤ、妨げは致しませぬが、海老名さま、お二人様、こりやお前方の仰しやるは、無理ぢやぞえ。
季門　默らつしやれい、滿江どの、我れ〳〵が申す事を、この場に於て
三人　無理だとは。
滿江　無理ぢやいなア。いとしほさうに、義時さまと梛の葉さんが、なんの不義でござんせうぞ。外に不義者は澤山にござんすが、この滿江が、憚りながら詮議して上げうかいなア。
季門　外に不義者が
重俊　澤山あるとは。

蒲江　最前奥で見て居れば、藍澤の彌五郎も、當世の色男ぢやと云うたお方があらうがな。梛の葉さん。
梛葉　そりや此お方ぢやわいなア。
重俊　そんな事を云つたかの。ハテ、面目次第もない。
梛葉　まだござんす。日頃から濡れ事の好きなお方が、初物お藏かせいのなんのと云うて、水を浴びたお方もあり。
義景　そりや誰れだ。
梛葉　お前ぢやわいなア。
義景　嘘ばつかり。
蒲江　まだござんす。
季門　ハア、澤山に色男もあるものだな。まだあるといふは何者でござる。
蒲江　これぢやわいなう。
ト懷より文を出して見せる。
季門　艶書かな。
蒲江　艶書も艶書、アタ嫌らしい文ぢやわいなア。
季門　そりや大方、この義時が送つた文であらう。
蒲江　この文言を讀んで見ようかいなア、海老名さま。
季門　それがよい。爰で讀み上げて、爰で業を晒させてやらつしやい。
梛葉　さうせうかいな。
義時　でも、それでは
蒲江　覺えがござんすか。
義時　サア、それは。
蒲江　默つて居さんせ。
季門　早く讀まつしやい。
義重　蒲江どの。
蒲江　ドレ／＼、讀んでお聞かせ申しませう。
ト文を開き
「一筆申し上げまゐらせ候、我れら事、そもじ様の、一ナニ「そもじ様の。」これは又、あんまり惡い手蹟ぢやに依つて、讀めるものぢやござんせぬ。
季門　ドレ／＼、おれが讀んで、面の皮を剝いてくれませう。
ト文を取り
我れら事、そもじ様の、その美しい御器量に、惚れて可愛のいの字こそ、こちの師匠の紋所、それゆゑわたしも濡れ事師に、なつて見たいが身の願ひ、この戀叶へて下さんしよなら、すつぽん食ふまい、てんぷら食ふまい、

おでんも食ふまい、甘酒飲むまい、薩摩芋でも、唐茄子でも、夜鷹蕎麦など愚かな事よ、買ひ食ひなんどの好いた事を止めましよ、さつても殊勝な戀の願ひ、だて山伏の山伏の槇屋の門に立ち留り、生木は損だ、ばさらさらんだ、エイ、サラサラ〳〵さつと一筆示しまゐらせ候と、ホ、、敬つて申す、めでたくかしく。椰の葉さまの君へ、海老名の源八、俳名仲町より。」こりや慥かな不義の證據だ。

重俊　海老名の源八、俳名仲町とは誰れの事ぢや。

ト季門心附き、思ひ入れ。

季門　そりやアまア誰れが事ぢやの。

義景　サア、どうか聞いたやうな名でもあり。

重俊　おかつしやい。貴様の事だワ。

季門　無機轉な、それを云ふものか。面白次第もない。

満江　仲町とは、お前の事かえ。それゆゑ濡事師になつて見たいが身の願ひ。

季門　コレサ、あやまつたよ。

満江　この戀叶へて下さんしよなら、すつぽん食ふまい、てんぷら食ふまい。

季門　コレ〳〵、満江どの、海老名あやまつて居るぞ。

満江　これでも不義の詮議をさしやんすか。

季門　誰れが不義の詮議をせうと云つたな。

満江　そんなら、義時さんにも、椰の葉さんにも、不義の過りはござんせぬぞえ。

季門　知れし御事。

満江　キッとさうぢやぞえ。

季門　オ、、くど。

義時　何事も満江さま。

椰葉　お前のお庇。

兩人　忝なうござんす。

三人　こりやア何の事だ。

ト奥より祐親出てくる。

祐親　満江、これにおいやるか。

満江　ハイ、これに居りまするが、何ぞ御用でござりまするかな。

祐親　用といふのは外でもおりない。未だ伜河津は參らぬか。

満江　左樣でござります。最早我が夫河津さまにも、お出でありさうなものでござります。

祐親　彼れが遲參につけても、心元ないは赤澤山の角力の一興。伊豆權現の神前に於て、源平の亂取りしたる若殿

原、いづれに勝がこみしやら。

季門　入道どの、そりやアお氣遣ひなさるな。見ずとも知れた平家方の勝ち角力。

義景　それサ、どうして、源氏方の鬮を取つた者は、ひら負けであらう。あれがほんとの貧乏鬮。

重俊　當時平家の御威勢には、空飛ぶ鳥も羽を縮め、猪狼も耳を垂れ、今日の狩倉にも、定めし獲物が澤山あるでござらうわえ。

祐親　狩倉過ぎての花角力、勝負の程が

皆々　聞きたうごんす。

ト角力の太皷になり、花道より鬼王庄司左衞門近清、大小、上下、衣裳にて、河津三郎祐安が一子一萬丸、垣に朝顔の振り袖衣裳にて出る。近清この手を引いて次男箱王丸、同じく紅葉に鹿の振り袖衣裳、これを肩車に乘せ、イソ／＼出て來る。

近清　滿江さま、これにお出でなされまするか。只今戻りました。

一萬　お祖父樣も、これにかいなア。

箱王　お母樣、いま戻りました。

滿江　オヽ、戻りやつたか／＼。庄司、今日はいかい大儀であつたなう。定めし二人の子供が、いろ／＼わやく云うて、其方をせがんだおやあらう。爰へおぢや／＼。

ト子供二人とも滿江が側へ來る。

椰葉　定めし大勢の見物でござんしたおやあらう。マア、息づきに一獻たべたがよいわいの。

ト長柄の銚子、三方、土器を持つて來る。

近清　ハイ、これは／＼有り難うござりまする。イヤ、これは親旦那樣も、これにお渡りなされまするか。あなたは義時さま。その外のお歷々樣方、ようこそ／＼此お館へ御入來でござりました。左やうなら御免なされませ。

椰葉　サア／＼、一つたべたがよいわいの。

祐親　コリヤ／＼、庄司。

近清　ハツ。

ト飲みさした土器を下に置く。

祐親　今日其方は孫どもを伴ひ、赤澤山の角力見物に參つたと、最前奧で滿江の物語り。時に、角力の勝負はどうだ。みな平家が勝つたであらうな。

三人　さうか／＼。

近清　左やうでござりますとも。赤い廻しをなされた平家

のお方は、皆勝ちでござりまする。

祐親　さうであらう〳〵。何れも、お聞きなされたか。

三人　めでたう存ずる。

滿江　コレ〳〵、庄司、そんなら源氏の諸士方は、ほん〳〵にお負けなされたかや。

義時　よもやさうであるまいが、有やうの話しを聞きたい。

梛葉　早う云うたがよいわいなア。

近清　申しませうとも〳〵。

祐親　それ〳〵、平家方が勝ち誇つた話しを早う

三人　聞きたい〳〵。

近清　もう一つ下されて、お話しを申し上げませう。

皆々　どうだ〳〵。

ト飲みかけた杯を下に置き

近清　先づ、奥野の狩倉にも、伊豆相模の大小名方、獲物獲物を澤山なされて、赤澤山へ打登り、大狩屋に幔幕打たせ、桟敷々々の花やかさ。ナニガお歴々の角力の事なれば、見物の群集は山の如く充滿して、イヤモウ、お話し申し盡されませぬ程の群集でござりまする。

滿江　さうぢやあらう〳〵。

近清　東西の土俵入りが濟みますと、お年寄りのお方々はいづれも行司にお立ちなされ、惣じて角力と云ふものは、小冠者原から取り上がり、段々に取り上ぐるこそ面白けれ。瀧口の四郎どの、藍澤の七郎どのこそ年頃も相似たり、出でて取り給へと行司の指圖。得たりと土俵へ躍り出る。瀧口さまは三番續け勝ち。

皆々　平家が勝つたか〳〵。

ト祐親皆々喜ぶ。滿江、義時、梛の葉、氣にかゝりたる思ひ入れ。

近清　源氏は色めき立つところに、波多野次郎忠勝さま、勢ひ込んで四股踏みかけ、豐田舟越八木下ら、投げる程に勝つ程に、續けて九番の勝ち角力。

滿義　源氏が勝ちかや〳〵。

ト三人喜ぶ。

近清　ヤモウ、源氏は十分の勝ちでござります。

ト祐親脇見をして煙草をのみにかゝる。季門、義景、重俊、顏見合せ、思ひ入れあるべし。

波多野さまは鬼神かと、皆々目を驚ろかすその時に、大場御兄弟、御舍弟俣野五郎景久さま。

ト祐親こちらを向く。

祐親　俣野が出たか。
皆々　占めたぞ／＼。
近清　小山の如くゆるぎ出で、波多野どのをかい摑み、何の苦もなく人礫。それより源氏の諸士方を、十番までの續け勝ち。
皆々　出來た／＼。
祐親　俣野は天晴れ剛の者、それで源氏は鏖殺し。
滿江　そんなら源氏の負けになつたか。
近清　源氏方には手ぐすね引き、攻めつけて取りかゝれど、負ければ出で、こければ代り、入替へ／＼、取りも取つたり勝ちも勝つたり、名に負ふ角力の手だれのお方を、二十三番勝ち續け。仁王はなきか、夜叉羅刹はあらざるかと、阿修羅王の荒れたる如く、モシ、廣言を吐いて突ツ立つて居られましたよ。
祐親　さて／＼、小氣味のよい勝ちやう。平家が勝ち誇つたか。
季門　伊藤どの、今の話しをお聞きなされたか。
義景　イヤモウ、心地よくて、氣がわさ／＼致すわえ。
三人　我れ／＼ども大慶に存ずる。
ト滿江、義時、椰の葉顔見合せ、氣の毒の思ひ入れ。

近清　行司にお立ちなされたる土肥次郎實平さま、扇をサッとお開きなされ、俣野どのを煽ぎ立て、天晴れ無双の御角力、今日の酒宴の花なるぞや、實平が年二十だに若くんば、出で一手も候はんに、殘念さよと、御述懷を仰しやりますると、サア俣野さまはいつも左様な方でござりませぬが、餘り角力に勝ち續けて、高慢におなりなされたか、實平さまの手をむずと取つて、角力は年によらぬもの、イザ、出で給へ、一手仕らうと、悪せがみにせがまれ、座中も白けて見えましたに依つて、あそこの溜り、爰の棧敷、諸見物もひそめき立ち、イヤモウ、私しも人溜りに見物いたして居りましたが、この仕舞ひはどうなる事かと、實平さまがひよんな事仰しやつて、御一家方の御恥辱にならねばよいがと、ハア／＼／＼と思つて居りました。
滿江　そりやマア、ほんに氣の毒な事であつたなう。父さんはどうなされた。日頃の氣丈もお年の上、さぞ御殘念に思し召したであらうなう。
祐親　いらざる爺の實平が、俣野に向つて氣丈だて、一家に列なる伊藤にまで、恥辱を與へるたわけ者。なんと何れも、左やうぢやござらぬか。

三人　左やうでござる。
祐親　保野が勝ちとは平家の長久。
滿江　仕様もやうもなかつたかいなう。
近清　棧敷も、下もどよめき立ち、保野が相手はあらざるかと、口々にのゝめくその時に。
ト云ひながら、ニコ〳〵とこなしあつて
モシ、これからがお話しの肝心勘文、も一つたべてお話し申しませう。
滿江　サア〳〵、たべて話してたも。
ト注いでやる。近清引請け、飲みさして下に置き、思ひ入れして、そこへにじり出て
近清　實平さまの御一言、御家門中の瑕瑾とも、なるべき程の晴れの場所、舅御樣の御恥辱、保野どのゝ廣言を、目覺ましうや思しけん、モシ、若旦那河津三郎祐安さま直垂さつと脱ぎ捨て給ひ、手綱二筋ふつて締め。
トこなしにて立ち上がる。大小を打ちかける。これを聞いて滿江、いそ〳〵と乘り出して喜ぶこなし。
しんづ〳〵土俵へ上がり、保野どのゝお振舞ひ、イヤ、驚ろき入つて候ふぞや、物の數にはあらねども、イザ、お相手になり申さんと仰しやつて、そこへお出でなされた、その御人表と申すものが、モウ〳〵〳〵、その健やかさ、潔よさ、見物群集は騒ぎ立ち、坂東一の河津が出たぞ、關八州の勇力士、これに勝つべき角力やある。取らせ〳〵と罵る聲々、イヤ、潮の湧くやうでございましたわえ。
滿江　さうぢやあらう〳〵。さうして、どうなされたや。
近清　ナニガ、萬夫不當のお二人樣、土俵の上へお上がりなされた、その骨柄と申するものは、保野さまの御人表、菩薩なりにて色赤く、また若旦那の河津さま、元より人表力士なりにて色白く、これ源平の晴れ角力と、見物群集、方や〳〵の贔屓聲。この庄司めも固唾を飲み、どうぞ若旦那にお勝たせ申したいと、祈らぬ神も佛もなく、手に汗握つて見て居るうち、お聞きなされませ、滿江さま、イザお相手と土俵の眞中、互ひに一揖、手合せして、行司が團扇を引くやいなや、イザと聲かけ、むんづと組み
トこなしあるべし。滿江始め祐親皆々中腰になり、聞いて居る。
引捨て追ひ投げ、腕取り、矢がら、四つんばい、膝櫓。鴫の入れ首、腰車、鴫の羽がへし、向うづけ、コリヤ〳〵

コリヤ〳〵、かゝれば外し、入ればあます。河津は聞ゆる大力、俣野は元より手取りにて、上帶摑んで、アリヤアリヤ〳〵、目よりも高く差上げて、下ろす所をはずみを打ち、素首落しに河津が大力、俣野は土俵へ眞逆さま、赤澤山の赤土へ、八寸ばかり投げ込んだり。

滿江　オヽ〳〵、お出かしなされた〳〵。

ト近清を煽ぎ立てる。義時、椰の葉も嬉しがる。祐親殘念なるこなしにて、側にある長柄を引寄せて、へし折る。季門、義景、重俊、氣の毒なるこなしあるべし。

モシ〳〵、お喜びなされませ、河津さまがお勝ちなされたといなア。夫が角力に手柄をなされたといなア。お前さんもお嬉しうござりませう。わたしや、モウ、嬉しうて〳〵、差込んだ疝へが一時に、下りたやうぢやわいな。

椰葉　わたしらも此やうな、嬉しい事はないわいなア。

義時　庄司、其方も、さぞ喜ばしう思ふであらうな。

近清　イヤ、モウ〳〵、嬉しいと申さうか、喜ばしいと申さうか、拙者めはあんまり嬉しうて、小袖も、上下も一絞り、嬉しい汗が汲み流すやうに出ました。親旦那も、さぞお嬉しうござりませう。

ト祐親かぶりを振る。

見物群集はどよみを打つて、取つたり河津どの、したりやしやりと褒むる聲、赤澤山も崩るゝと存じました。角力の後はまた御酒宴、御一門方は私しをお見かけなされ、めでたい庄司、一つ飮め、河津が勝つたぞ、一つ飮めとあなたこなたのお杯を、そこ〳〵に請けまして、なんでも河津さまの勝ち角力を、滿江さまにお話し申して、お喜びのお顏を見ようと存じて、一萬さまも、箱王さまも、手を引いたやら、負うたやら、一目散に駈けて參りました。追ッつけ又お供を致しませう。直にお話しをお聞きなされませ。また私しがお話し申すやうな事ぢやござりませぬ。一萬さまも、箱王さまも、あのマア嬉しさうなお顏わえ。めでたい〳〵〳〵、此やうなめでたい事はござりませぬ。

滿江　そんなら其方は、また行てたもるか。

近清　お迎ひ申して參りませう。

箱王　べいよ、早く戻つてくれよ。

近清　ドリヤ、行つて參りませう。

ト合ひ方になり、いそ〳〵花道へ行き、また立戻り、

飲みかけた酒を飲んで喜び勇んで花道へ入る。滿江あと見送る。

滿江　あれ見や、一萬、箱王、あのマア庄司が、嬉しさうに行く事わいなう。イヤ、それはさうと、赤澤山の角力の事を、案じてお出でなされた祐信さまへ、我が夫が勝ち角力の樣子を、お話し申しませう。

義時　左やうなされい、滿江さま、樣子をお聞きなされたら、祐信どのも、さぞお喜びでござりませう。

梛葉　そりやモウ兄さんも、大抵や大方の、喜びやうではござんすまい。

滿江　そんなら、早う奧へ行て、お二人樣。

義時　滿江さま。先づ／＼、お先へ

滿江　一萬、箱王、サア、おぢや。

一箱　心得ました。

ト矢張り合ひ方にて、滿江、一萬丸、箱王丸を連れ、奧へ入る。義時、梛の葉も共に入る。

三人　祐親どの。

祐親　何れも。

三人　心憎き角力の勝負。

祐親　平家の方が勝ちと思ひの外、役にも立たぬ倅めが勝ちざま。親の心子知らずとは、斯やうな事を申すでござらう。ハヽヽヽヽ。

ト苦笑ひする。

季門　こんな事につけても、早くぶッちめてしまひたいは

三人　主の祐信。

祐親　コレ。

ト皆々思ひ入れ。奧にて

祐信　祐信それへ參つて、伊藤どのに御面談仕らん。

ト合ひ方になり、奧より祐信出る。

祐親　祐信どのには今日の會合、お心遣ひの段、この伊藤を始め

三人　我れ／＼も滿足に存ずる。

祐信　これは／＼、痛み入る御挨拶。餘り粗末な亭主ぶり、眞平御宥免にあづかりませう。時に、只今赤澤山の角力のあらまし、そこ／＼に承つたが、御子息の河津どの、萬夫不當とは申しながら、今に始めぬ勇悍力量、豪傑の俣野を投げらるゝと申すは、イヤハヤ、驚ろき入つたお手柄。其許にもさぞ御滿悦と、察し入りますて。

祐親　倅河津が勝ち角力、この入道、さして滿足にも存ぜ

ぬ。
祐信　そりや又、如何の思し召しでござるな。
祐親　この寂心は平家無二の忠臣。源氏方の鬮に當つた、倅めが手柄話し、聞くもどうやら、耳が穢れるやうに存ずる。ナア、何れも。
三人　御尤もに存じまする。
祐信　河津どの　勝ち角力は、お氣に入らぬ入道どのゝ御胸中、何ともハヤ。ハテナア。
ト思ひ入れある。奥より五平次、ツカ〳〵と出て來り祐信を見て
五平　ヤア、この屋敷の旦那様。イヤ、祐信さまよ。爰にござつたな。爰に居をつたの。お身様のお目にかゝらうと思つて、今朝から首を長くして待つて居ました。返して下さい。返してもらふべい。
祐信　イヤ、待て〳〵、老人。見れば賤しい下郎の身で、諸歴々の列座の中も憚らず、尾籠千萬な。下がるまいか。
五平　インニヤ、下がりますまい。何も尾籠千萬な事はない。返して下さいよ。
祐信　祐信に向つて、返せとは、そりや何を。
五平　おれが息子をよ。
祐信　なんと。
五平　わしやア安久村の五平次といふ土百姓。おれが倅の長六を、この屋敷へ引摺り込んで、なぜ返さないのだ。
祐信　此奴、何を云ふかと思へば、此方に覺えもなき過言。祐信は國取りの大名、何不自由な事があつて、おのれが如きの倅を身が屋敷に留め置かうか。ア、、聞えた。おのれ、こりや狂人ぢやな。家來どもに申し附け、安久村の埴生へ送らせてくれう。立て〳〵。
五平　何をたわ言。
ト胡坐をかく。
季門　祐信どの、あの老人は
義景　何者でござるな。
祐信　察するところ、倅に生別れでも致した奴の、子ゆゑに亂心いたして、某が屋敷とも辨まへず、紛れ込んだと相見えまする。老人と申し、不便な事に存じますて。
五平　コレ〳〵、祐信どの、この五平次は狂人ぢやアないぞ。おれが子の長六を早く返して下さい。
祐信　おのれ、まだ立たぬか。

五平　誰が立つものだ。伜を連れて歸らぬうちは、爰におらア生えぬいて居るのだ。
祐信　此奴、慮外な下郎め。老人だけと差免せば附けあがり、此方に覺えもない事を、云ひかけひろぐ老ぼれめ。違て意地張ると、憂き目を見せるが、おのれ、速かに歸るまいか。
五平　そんならどうでも伜が事は。
祐信　存ぜぬ。知らぬ。
五平　しかとそれなら
祐信　くどい。
五平　そんならようごんす。知らざア知らぬやうに、おれも又、料簡があるから、まだら／＼として居やうより、このやかばねの家探しをすべい。
ト立つて奥へ行かうとする。祐信引戻し、取つて突き飛ばす。
こりやアどうするのだ。
祐信　無禮をひろぐと、老ぼれめ、泥臑切つて切り下げるぞ。
ト反りを打ちかけて思ひ入れ。五平次恟りして、後じさりする。

祐親　コレ／＼、祐信どの、最前から聞いて居るが、あの親仁めが、よもや筋の無い事も申すまい。我れ／＼に御遠慮なく、彼奴が伜を、おてまへに差置かれたら、返して遣はされるがようござるて。
祐信　祐信、かつ以て存じませぬ。
祐親　存ぜぬとお云やる其許の胸の中には、どんな企みがあらうも知れぬ。何れも油斷おしやるな。
三人　心得てござる。
祐信　待たつしやい、伊藤どの。この祐信が胸の中に、企みがあらうとお云やるが、そりやア何事を見附けてお云やるのだ。
祐親　見附けた事がある。
祐信　見附けた事があるとは、そりや何を。
祐親　外でもない、これだ。
ト懷より三建目に箱王丸が取りし廻文を出し見せる。
祐信　それを。
祐親　これこそ伊豆權現の內陣に、籠めありたる賴朝の廻文狀。
祐信　ナニ、アノ、それが。
祐親　孫の箱王めが社參の折から、子伜の盗人めが手から、

奪ひ取つたこの廻文。開き見れば身方催促の文言。「曾我太郎祐信へ　藤九郎盛長」と記してあれば、寄り〳〵身方を集めんが爲、あの百姓の伜をも、引込み置いたに違ひあるまい。

五平　それ見さつしやい、そんな事だ。おれが大事の一人息子を、世になし者の賴朝が家來にする事は、おらア先づ否だ。こなたは立派に上下をためつけて居ても、人かどわかしも同然だ。

祐親　伊豆權現の內陣へ、納め置いたは、こなたであらうが。祐信、この廻文の云ひ譯があるか。

祐信　全く以て覺えござらぬ。かゝる疑ひを避けん爲、今日の會合は、伊豆箱根兩社の御神を驚ろかす、幣帛を振つて六波羅へ神文を差し上ぐるやくだく。後程までに某が胸中は知れ申す程に、祐親どの、餘りお世話を燒かれぬがよいてサ。

祐親　インニヤ、そんな云ひ譯で濟まうと思ふか。そりやア何事もない諸士の事だ。かゝる證據のある上は、寄り寄り荷擔せぬとは云はれまい。外に云ひ譯の筋でもあるか。

祐信　サア、その申し譯は。

五平　おれが伜を返さつしやるか。

祐信　祐信覺えないワ。

五平　そんならやかばねの詮議すべいか。

　トまた行かうとするを引留め

祐信　コリヤ、待て、五平次。

祐親　この廻文の云ひ譯あるか。

祐信　サア、それは。

皆々　サア〳〵〳〵。

祐親　祐信どうだ。

祐信　ヘイ。

　ト思ひ入れする。

祐親　祐信に繩をぶたつしやい。

重俊　捕つた。

　ト左右より義景、重俊、祐信へかゝる。見事に取つて投げる。

祐親　こりやア手向ひか。

祐信　全く以て。

祐親　ぶちのめして繩を打て。

兩人　心得ました。

　ト五平次かゝるを捻ち上げる。

五平　アイタ〳〵。
祐親　この祐親が云ふ事は、清盛公の上意も同然。若殿原、ソレ。
皆々　捕つた。
ト又かゝるを、突き退ける。立廻り。五平次、祐信が襟髪を取つて引きつける。
祐信　こりやア老ぼれめ。何とする。
祐親　廻文の云ひ譯があるか。
祐信　サヽそれは
五平　清盛公の上意だぞ。
祐親　ぶつて〳〵〳〵ぶちのめせ。
皆々　合點だ。
ト五平次始め皆々寄つて祐信を打擲する。トヾ五平次踏みにかゝる。足首を捕へ
祐信　無實の罪とは云ひながら、目前の證跡に、退引きならぬこの打擲。我れも大織冠鎌足の苗裔たり。西夫下郎の土足にかけんとは、奇ッ怪至極。
ト突き飛ばす。
五平　イヽヤ、踏めのめしても大事ない。清盛公の上意だ。廻文の云ひ譯があるか。伜を返すか。返答がなければ、

コレ〳〵カウ〳〵。
トむごく踏みのめす。祐信起き上がつて、立ちかゝるを五平次蹴附ける。信信、タヂ〳〵となる。
祐親　もうよい〳〵。その位にして置けば此方のものだ。
三人　ハテ、よい態な。
祐親　これを肴に、一獻たべようか。
五平　祐親さま。
祐親　何れも、奥へ。
ト唄になり、祐親、五平次、こなしあつて、足にて祐信をこづき廻して、笑ひながら附いて、皆々奥へ入る。合ひ方になり、祐信起きあがつて
祐信　エヽ、殘念やなア。極惡無道の平家に、屬せん事の口惜しく、源家の嫡流たる佐殿を、取立てんと心を盡すこの祐信。かゝる恥辱は氏の穢。頼朝公旗上げまでは、大切なるこの命。さりながら、西夫下郎の土足にかけられ、この有樣は武門の恥。思へば〳〵、殘念な。
トどろ〳〵になる。トヒュ〳〵にて烏一羽舞ひ下がると、最前の鳩大分飛び來り、この烏とくひ合ふ事あり。トヾ烏は下にある白無垢の振り袖の上に落ちる。祐信始終これに目を附け。烏の落ちたるを見てキッと見

得。

祐信　已に詩經に曰く、維れ鵲巢あり、鳩之に居すと。元より兩爲一致にして、禮有り孝あるも、その鳥の栖に爭ひ、剰へ、群れ居る鳩の嘴に掛けられ、烏は地上に落命なす。かゝる奇怪もあるものかな。ハテ、ハテ〳〵怪しき事を見るものぢやなア。落ちたる烏は、ちぎれたるこの片袖に羽を敷いて、文字かあらぬか、イデ。

ト白無垢の片袖を取上げて

ナニ〳〵「先達て預け置き候ふ源氏重代小烏の名劍、急ぎこの者に渡さるべく候ふ。恩賞は追つて御沙汰あるべく候ふ。東國武士の披見を憚り、斯くの如くに候ふ、月日、海老名權の頭どのへ、瀨の尾の太郎兼康。」

ト讀み終つて

その昔、敏達天皇の御宇、唐土より烏羽の書翰を渡す。王辰爾といふ者。その羽を蒸して絹に浮かし、その返翰をなすと聞く。されば古歌にも「我が戀は烏羽に書く言の葉の、うつらぬ程に知る人もなし。」知る人なきこそ幸ひなれ。舅權の頭に近き、小烏丸を手に入れ、佐殿に參らせん。これ正に氏神正八幡の靈瑞、源氏再興の礎なるか。ハ、、、、有り難いなア。

ト思ひ入れ。

この上は、河津の三郎が來るを待ち受け、面談の上、何事も計らはん。一先づ舅權の頭に。さうぢや。

ト後へ羽根倉大之進出かゝり居て

大進　さては祐信

ト祐信にかゝる。立廻りにて、大之進を引立て、片袖を持ち、奧へ入る。矢張り唄にて、花道より鐵平、奴の形にて状箱を持つて出て來る。後より侍ひ二人附いて出て來る。

侍一　コレ〳〵、奴どの。こなたはどなたのお使ひかは知らぬが、今日此お館には、伊豆相模の大小名。

侍二　大切なるお寄合ひのある所へ、斷わりもなくツカツカと、おいらを踏み附けたる仕方。こなたはマアどこから來た。

兩人　どなたの使ひだ。

鐵平　おらア八牧さまのお側去らず、鐵平といふ奴らさ。御知行は貴樣達と、同じやうな盛切りだ。今日祐信さまのこのお屋敷へ、伊藤入道さまがござつたといふ事を聞いて、お使ひに來たのだ。何も咎める事はない。打ッちやつて置かつしやい。

侍一　打捨て置いては、我れ〳〵が役目が立たぬ。

鐵平　そんな事はおらア知らない。

　ト云ひながら舞臺へ來る。

侍一　狼藉者め。

　ト兩人附いて來る。

　奥へはやらぬ〳〵。

　ト鐵平へかゝる。立廻り。奥より鬼王丸出て來る。

鬼王　騷々しい。何事だ〳〵。

侍ひ　外でござりませぬ。この奴めが

鐵平　その後はおれが云ふべい。下拙めは八牧が家來、鐵平と申す二合半で、伊藤さまへ密々の御用あつて、お使ひに參つたところ、此お侍ひ達が邪魔をさつしやるゆゑ、つい爭ひましたのでござります。時に、伊藤さまは此お館にお入りでござるかな。

鬼王　成る程、おらがお旦那は、この屋敷にお入りだ。密々の御用とあらば、おれが屆けてやらう。侍ひ中は引かつしやりませ。

侍ひ　心得ました。

　ト奥へ入る。

鬼王　ドレ〳〵、お屆け申してやらう。その狀箱を爰へ出しやれ。

鐵平　インニヤ、滅多にやア渡されない。貴樣はマア誰れだ。

鬼王　ナニ、おれか。おらア伊藤家の近臣、鬼王丸といふ古今獨歩の侍ひだ。その狀箱をおれにわたいた入れ〳〵。

鐵平　この男は、おれを折介と見下してやかけるな。そんなぶしやれに負けるおれぢやアない。滅多に渡す事は中村傳ぼう〳〵。

鬼王　こいつは味をやり田の不動だ。無駄を云はずに、その狀箱を、おこし米〳〵。

鐵平　インニヤ、奈良づけ。

鬼王　わさび。

鐵平　なた豆。

鬼王　わりな。

鐵平　面倒な、のゝ字〳〵。

鬼王　わの字。

鐵平　との字。

　ト此うち立廻りある。これより大小の合ひ方にかゝりて、鬼王、鐵平、狀箱を枷に立廻り、トゞ奪ひ合ふはずみに、この狀箱を障子屋體の内へ投げ込む。兩人、

あわてゝ立ち寄る。キッカケにて障子上がる。内に祐信、祐親、この狀箱に手を掛けて見得。直ぐに舞臺先へ出て來る。

祐親　お待ちやれ、祐信。伊藤が宛名の狀箱へ、手を掛けて何とするのだ。

祐信　今日參會の場所へ、八牧が方よりこの書翰、慥かに密書と睨んだ。怪しくなくば速かに、今この所で披見召されい。

祐親　インニヤ、こりやア他人に見せる書翰ぢやアない。妨げせずと入道へ、渡したく〳〵。先刻のやうな目に遭うても、まだ固意地を張る心か。

祐信　云ふにや及ぶ。是非この密書を。

ト立廻り。後へ滿江出かゝり、この時兩人が中へ入り、この狀箱を取る。兩人驚ろく。

祐信　こりやア滿江どの。

祐親　その狀箱を祐親へ渡せ。

滿江　イエ、この狀箱は、この滿江が預かりました。

兩人　そりやア何ゆゑ。

滿江　サア、この狀箱をこの所で、預かりまするも互ひのお爲。なぜと仰しやれ、お二人さん。祐信さまはこの書翰を、怪しい密書と思し召し、御披見なされたその時に、怪しい事がないならば、御短慮な男御樣、よも料簡はなされまい。二つには又、この内に、もしや密書があるならば、祐信さまもその分に差置きもなされまい。男の難儀は夫の身の上。これにつけても祐安さま、早うお出ではなされいで。

鬼王　鬼王庄司が參つたからは、追ッつけお出でござりませう。

鐵平　伊藤さまには主人が書翰、急いで御披見あられませう。

祐親　八牧が書翰の詮議より、六波羅のお咎めを請けぬうち、頼朝が廻文の云ひ譯に、切腹せざアなるまい祐信。

祐信　イヤ、某が胸中の善惡は、日頃斷琴の交はりなす、河津一人承知にて、滅多に腹切る祐信でない。身が詮議よりあの密書。

祐親　明けて云はれぬこの入道が存念も、河津ならで知る者ない。祐信如きにあの密書披見させうか。愚か〳〵。

滿江　お二人樣の御本心、知つたる者は夫の河津。早うこの場へお越しなされて。

祐信　河津が來るをべん〳〵と、待つて居る場所でない。

是非その狀箱。

ト滿江が持つて居るを取りにかゝる。鐵平支へるを當てる。祐親隔て

祐親　狼藉なさば曾我の祐信、伊藤が刃金の試みせうか。

祐信　おんでもない事。是非妨げると、祐信が刀の引導、その白髮首打ち落すぞ。

祐親　小積な一言。

祐信　なにを。

ト兩人反りを打ちかけて、詰め寄る。滿江中へ入る

滿江　コレ、待つた、お二人樣。これにつけても河津どの、なぜ早う來ては下さんせぬぞいなア。

ト向うにて「河津さまお入り」と呼ぶ。

ナニ、我が夫のお入りとや。

兩人　河津が來るか。

ト皆々向うをキッと見る。又「河津さまお入り」と呼ぶ。合ひ方、時の太鼓になり、花道より陣笠、兵糧を腰に附けたる勢子四人、乘物舁いて、靜かに出て來る。後より近清、中腰にて悄れたるこなし、思ひ入れあつて、乘り物に附き出て來り、直ぐに乘り物を本舞臺へ舁き据ゑ、近清、花道の角に立ちとまる。

滿江　オヽ、庄司、我が夫のお供してたもつたかいなう。一萬、箱王、早うおぢや。父樣がお出でなされたわいなう。

ト奧より一萬、箱王出る。

一箱　父樣に逢ひたいわいなう。

滿江　逢ひたからう〳〵。其方衆より自らが、早うお目にかゝりたい。さぞ御機嫌はよいであらうの。コレ、庄司、早うお顏を見せてたもいの。

ト急き立つて云ふ。近清そこへ坐り、何か云はうとして、胸を叩いて唾を飲み込み、花道の方へ行かうとする。

祐親　コリヤ〳〵、庄司、倅河津が供を致して參つたか。早う伴へ。

箱王　庄司どの、早う若旦那の、お供召されい。

祐信　河津どのの供申さぬか。祐安には何とぞ召されたるか。

ト口々に問はれて、近清立戻り、また下に居て、何か云はうとして立ち上がり、そこらをウロ〳〵と物ありげなこなしにて、立つたり、居たりするゆゑ、滿江急いて連れて來り

滿江　コレ、庄司、何をウロ〳〵しやるぞいなう。酒でも過ぎたか、氣色でも惡いか。物をも云はず、うつとりと、どうぞしやつたかいなう。コレ、我が夫のお顏見せてたもいなう。

二人　父樣のお顏が、早う見たいわいなう。

ト一萬、箱王、近淸に取り附いてせがむゆゑ、近淸、術なき思ひ入れ、いろ〳〵あつて、トヾ氣色を變へ、切腹せうとする。滿江あわてゝ留める。祐信、祐親思ひ入れ。箱王丸、近淸に取りつく。

箱王　コレ、待ちや庄司。何ゆゑ其方は死なうとするのぢや。

近淸　これが死ないで居られませうか。

滿江　死ないで叶はぬその譯は。

近淸　その申し譯は。

トまた腹を切らうとする。留める。立廻り。乘り物の内にて

祐安　庄司、早まるな。河津の三郎祐安、祐信どのへ御對面。

ト竹笛、三味線の合ひ方になり、鬼王丸、乘り物の戸を明ける。内より河津の三郎祐安、好みの狩場の形、手負ひのこなしにて、野太刀に縋つてよろぼひ出る。近淸泣き伏す。滿江これを見て、大きに恟りする。

滿江　ヤア〳〵。我が夫の此お姿。こりやマアどうぢや。樣子があらう。庄司、譯を云うてたもいなう。

子兩　父樣、逢ひたかつたわいなう。

ト左右へ縋る。

祐親　合點がゆかぬ、伜河津、見れば深手のその有樣、何者の爲めに殺害された。心元ない。樣子は、どうだ〳〵。

祐信　コレ〳〵、河津どの。思ひも依らぬこの手疵。いづく如何なる場所に於て、かゝる矢疵は負はれしぞ。コレ、氣を慥かに持ち召されい、河津どの。

祐安　祐信どのの御厚志のお詞、滿江、伜ども。斯く手負うたる河津が有樣、さぞかし驚ろきであらう。親人祐親さま、祐安がこの有樣は、皆業因のなすところ。逆緣とは存ずれども、お年寄られし父上の、その御壽命を延ばしたく、憚りながら、お身替り。

祐親　ヤ、、そりやア何ゆゑ。

ト祐安、祐親が顏をヂッと見て、思ひ入れ。

祐安　エ、、何ゆゑとはお情ない。親人樣。いま御安堵の三箇の庄、宇佐美、久須美、河津こそ、工藤代々の本領

にて、祐繼横死の砌りより伊藤へ預かり、金石が十五才になるならば、渡されんとある契約の、約を變じて今日まで、彼れに一所も渡されねば、若輩ながら金石は、元より武邊に逞ましく、所領の仇と親人を、附け覘ひたる彼れが胸中。

滿江　コレ、氣を慥かに持つてたべ。河津さま。我が夫いなう。

トうんとのり返る。

鬼王　若旦那樣。河津さま。お心慥かに、コレ、申し。あなたが只今お果てなされ、一萬さまや箱王さまは、どのやうにお嘆きなされうと思し召しまする。祐安さま。

ト呼び生けて介抱する。祐安心附き

祐安　その本心を知つたるゆゑ、奥野の狩倉に、狩裝束も狩衣も、人の目に立つ秋野の摺り、これ皆親人のお物好き、これを着して出で立ちしも、親人に代らん爲。河津が孝心、伊豆權現も感應あつて、今日に迫りし我が一命。赤澤山の絶所なる、椎の木の木蔭より、一二と來たる尖き矢先。鞍の山形射削つて、行縢の膏け際より、前へすつぽと射通され、かねて覺悟はしながらも、心にかゝるは二人の倅。コリヤ滿江。

ト滿江と顔見合せ、ヂッと思ひ入れ。

燒野の雉子、夜の鶴、子を思はぬはなきものを、河津不便と思すなら、今の嘆きを恩義にかへ、彼れに一所も宛て給はゞ、猶長久。爰の道理を聞き分けられ、河津が今際の此のお願ひ、親人樣、お聞き屆けなされて下さりませ。

ト又のるを

滿江　コレ。

ト箱王丸と共に介抱する。

祐親　イヤ、その願ひ聞き屆けぬ。平家へ無二の忠心も、子孫の榮華をあらせん爲。その倅を人に殺され、のめのめ見て居る祐親が氣性でない。敵は慥かに工藤金石。コリヤ、孫ども、親の敵を討つて手向けよ。

一萬　祖父樣、氣遣ひさつしやるな。この箱王と云ひ合せ

箱王　コレ、父樣、お前の敵を取つてやらう程に、必らず死んで下さるなや。

祐安　ナニ、兄弟心を云ひ合せ、この祐安が敵を討つとか。

滿江　アレ／＼、あのやうに大人しい事を云ひまするわい

なう。我が夫、此やうな子供を見捨て、お前は死ぬるお心か。後に殘つてこの滿江が、この身は何となりませうぞ。そりや胴慾ぢや　聞えませぬ。一緒に死ねと只一言、仰しやつて下さりませい。拜みまするわいなア。

ト泣く。近淸頭を上げ

近淸　御尤もぢや、滿江さま。御尤もでござります。御一緒に死にたいとは、よう仰しやりました。お道理樣ぢや。そのお嘆きを見るにつけ、云ひ甲斐なきはこの庄司。狩り場の賄ひ取方附け、遲れ馳せなる御供に、はや御落馬の場所へ駈けつけ、三代相恩の御主人を、人に討たれてやみ〳〵と、當の敵もえい討たず、立歸つたるこの生恥。面目ないと申さうか、恥かしいと申さうか。直に切腹と存ずれども、大事の痛手にましませば、恥辱を捨て若旦那を、お供いたした庄司めが心の中、推量なされて下さりませ。

祐信　庄司が嘆きさる事ながら、滿江どのといひ二人の子供ら、誰が撫育して成長させん。死は一旦にして遂げ易し。必らず〳〵、早まる所でないぞ。

祐安　あれ聞いたか、庄司。祐信どのの御諫言、我が骨身にも堪えるわえ。仁義に厚き祐信どの、お賴み申すは二人の伜、平家へ無二の親人ながら、この祐安は重恩ある、佐殿へお身方と、心は盡せど親の爲、斯くなり果つる後にても、源氏の御代となるならば、伊藤が末とて疎まれん。祐安が血迷うて、何をか云ふと思されんが、孫子の一萬箱王、不便と思はれ、養子となし、御養育下さらば、分けて妻の事、夫婦別ある世の習ひ、祐信どのにもこの程は、奧方に不慮のお別れ、滿江とてもこの河津に、不慮の別れは同じ事。互ひに妻なし、夫なし。お乳の人とも後妻とも、思し召されて祐信どの、今際のお願ひ、賴み申す。

ト云ひさしてウンと反り返へる。滿江、近淸、介抱する。

近淸　河津さまア。

鬼王　祐安さまア。

滿江　我が夫いなう。

ト祐信、祐安が側へ立寄り

祐信　ヤア、腑甲斐なき河津どの。萬夫不當と呼ばれながら、かゝる薄手に屈するは何事。いんじ奧州の戰ひに、鎌倉の權五郎景政、鳥の海が精兵に左の眼を射られながら、三日三夜追ひ廻して、當の敵を射たとある。名に負

ふ勇士でありながら、御卑怯候ふ河津どの。
トきつと云ふ。祐安心附き、野太刀を取つて起き直つて思ひ入れ。
滿鬼　お心が附きましたか。
トこの時、滿江上の方へ廻り、近淸下の方に居て
近淸　若旦那様、庄司めでございます。
ト祐安キッと見る。
祐信　祐安どの、今際のお頼み、承知いたした。かゝる時こそ親友の交はりならん。あひ席は踏まずとも、滿江どのを館へ引取り、二人の子供は養子となし、指を折つて成長させ、曾我の苗字を名乘らせん。必らず／＼氣遣ひ召されずと、淸く最期を遂げ召されい。
滿江　すりや、どうあつても、我が夫のお命を助ける事はならぬかいなう／＼。エヽ、情ない。今朝狩倉へのお出馬が、この世の別れであつたかいなう。いつも嘶く御乘馬の、村雨月毛が乘り仕ひ、どうやら心にかゝりしが、かゝる嘆きを畜類も、知つて人の別れを悲しみ、それゆゑの事であつたか。それとも心が附かざるは、畜類にも劣りしこの身。辛い、悲しい、情ない。お助け申す事はならぬかいなア。

祐安　とても存命叶はぬ祐安。滿江が事、伜が事、祐信どのへお頼み申すも親の因果。未練と笑うて下さるな。この上ともに鬼王庄司、祐信どのへ隨ひ申し、伜どもを頼むぞよ。
近淸　お氣遣ひなされまするな。祐信さまのお下知に隨ひ、お二人の若殿方は、この庄司めが命に代へ、御成長なされた上、御身の敵工藤金石を、討たさせ申さで置きませうか。一萬さま、箱王さま、必らず敵を討ちなされや。
箱王　父様の敵を
一萬　討たいで置かうか。
ト近淸が左右へ來て云ふ。これを見て近淸立ち上がり
近淸　敵の工藤金石も、御家門の端なれば、定紋變らぬ庵に木瓜。この庄司めが紋所も、拜領したる庵に木瓜。コレコレ／＼、この紋所をよく見覺え、必らずお討ちなされませい。
一箱　討つて見せう。
ト一萬丸、箱王丸、庄司に詰め寄る。これをキッと見て
近淸　云ひ甲斐もなき小冠者ばら、この工藤金石に、なま

くら刃金が立たうと思ふか、たわけ者め。わいらが親の祐安は、三箇の庄の遺恨に依つて、奥野の狩の歸りを待ちうけ、この金石丸祐經が、遠矢を以て射落させたワ。

ト箱王丸、一萬丸、中腰になつて拳を握り、近清が顔をキッと見詰める。

滿江　オヽ、道理ぢや／＼。幼な心にも、それ程まで口惜しいと思ひ詰めたか。可愛や／＼。

ト泣き伏す。近清も二人を見て涙を呑み込み

近清　お出かしなされた。さうぢや／＼。まッこの通りに工藤金石。一家の端たる箱王さまへ、初めて見參なればと、もしも土器さしつけて

トそこに在る三方を取つて箱王丸にさしつけて

箱王エヽ。

箱王　なんだ。

近清　小僧エヽ、親を討たれて殘念なか。

ト箱王丸、三方へ手を掛け、近清を見て慄へる。一萬丸も思ひ入れする。鬼王丸、箱王丸が後に立ちづめながら無念のこなし。

箱王　さん候ふ／＼。

近清　口惜しいか。サア、殘念なか。

ト祐安が方へ指をさし

アレ／＼、あれにまします父上様は、この金石が射落したワ。

ト箱王丸三方を摑み碎き、近清に飛びかゝるを、鬼王丸支へる。これを突き退ける。立廻り。近清を引据ゑ。中啓にて打ち据ゑ。

箱王　親の敵、覺えたか／＼。

ト突きやる。また一萬丸引ッ捕へ、同じく中啓にて打ち据ゑる。

一萬　父上の敵、覺えたか／＼。

ト近清、箱王一萬に打ち据ゑられながら嬉しきこなしにて、鬼王丸、庄司近清を介抱する。

近清　兄弟ともお出かしなされた。それでこそ萬夫不當と呼ばれ給ふ、河津の三郎祐安さまのお子様方ぢや。若殿様ぢや。ようマア、この工藤をお打ちなされた。打擲なされた。サア、もつとお打ちなされい。河津さまのお供をしながら、當の敵を討ち損じた、不忠者のこの庄司。せめてこの場の申し譯に、お二人様の手の内に、頭に瑕でも蒙むらば、拙者が大慶。滿江さま、かほど健氣な御兄弟、日を月に換へ、月を又年に換へても、片時も早う

御成人がさせましたい。父御の敵が、討たせたい〱わいなう。

ト一萬丸、箱王丸が手を取り、祐安が前へ連れて來る。一萬丸を滿江上の方へ廻す。

近清　祐安さま。

滿江　コレ、我が夫、とても叶はぬ壽命なら、二人の子供によく御顏。

ト祐安兩人を引寄せ、キッと見て

祐安　この世の名殘り、一萬箱王、父が面をよく覺えよ。親子は一世の契りと思へば、お年寄られし父上に、お別れ申す不孝短命、お免しなされて下さりませい。

近清　そのお嘆きも誰れゆゑぞ、工藤金石祐經ゆゑ。指を折り、日を數へ、修羅の妄執、御無念は晴らさせまする。御兄弟、今の嘆きをお忘れなく、敵工藤と見るならば

箱王　飛びかゝつて

一萬　敵を討つ。

祐安　出かした、兄弟。

近清　よう仰しやつたと、お褒め申すも云ひ甲斐なき

祐安　この世の別れ。

滿江　夫婦の別れ。

祐安　親子の別れ、主從の、別れも宿執、過去因緣。

滿江　この身の因果か。

近清　拙者が不運か。

滿江　二世の契りも

近清　三世の恩義も

祐安　今日に迫つて

近清　祐安さま。

ト近清、祐安が兩手を取り

祐安　庄司近清。

近清　思へば果敢なき

祐安　主從の

近清　淺き奇緣で

祐安　あつたなア。

ト思ひ入れあつて泣き落し、祐安苦しむこなし。

祐信　ハヽア、孝子なるかな。忠臣なるかな。主從親子、夫婦の別れ、哀別離苦を目前に、見聞なして祐信も、思はず落涙いたしたわえ。

祐安　最早知死期の廻り來て、五臟の惱亂、この世の暇。親人樣、もうさらば。祐信どの、必らずともにお頼み申す。滿江、庄司。二人の子供。

満江　ト引寄せて、キッと思ひ入れ。
もう御最期か。コレ、我が夫。

子供　父様いなう。

祐信　三十年來夢窓々、須彌山碎けて、盤石に花開く。喝

ト祐安苦しみながら、矢をかなぐり抜き、こなしあってバッタリと前へ倒れる。箱王丸、一萬丸取りつき泣く。

子供　父様いなう／＼。

満江　ハア／＼ハア、。

ト死骸に取りつき、泣き伏す。祐親死骸を見て

祐親　この祐親が固意地を、一生苦に病み剰へ、人手にかかってこの死様。我が子の別れに氣後れして、忠心を忘れるやうな、未練な寂心ぢやアない。

ト險で涙を拂ひ

コリヤ、満江、死骸をこれに差置くは、祐信へ憚りあり。急ぎ相模寺へ葬送なせ。庄司、用意々々。

近清　ハッ。

ト始終此うち合ひ方にて、満江、近清、祐安の死骸を乗り物へ入れる。最前の勢子四人出て來る。満江乗り物に取りついて泣く。祐信、抜き捨てし矢を取上げ

祐信　父が形見のこの一矢。兄弟、受取れ。

ト兩人矢を一本づゝ受取る。

近清　然らば此まゝ、満江さま。

満江　送らにやならぬか。お名殘り惜しいわいなう。いま我れが身の上を、思ひ廻せば末の露、元の雫や世の中の

近清　おくれ先立つ例しなるらん。

満江　庄司近清。

近清　満江さま。イザ／＼、お立ちあられませう。

ト靜かなる三重になり、乗り物を先きへかゝせ、一萬丸、箱王丸、満江、鬼王丸、近清附いて、こなしあって、皆々花道へ入る。祐信、祐親見送って思ひ入れ。後へ海老名權の頭、海老名の源八季門、長柄の四郎義景。鐵平、心附いて起き上がる。

權頭　祐信をソレ。

皆々　動くな。

ト義景、重俊かゝるを、突き退ける。鐵平かゝるをグッと捻ぢ上げ

祐信　舅太夫の海老名どのを始め、諸士の面々、この祐信を動くなとは、こりや何をおしやるのだ。それのみならず、見馴れないこの下郎。同じやうに羽根叩きをするか、

うぬはマア、何所から來た二合半だ。
鐵平　アイタ、、、、。コレ、親方、腕骨がちぎれる。ちつとゆるめておくれなさい。おらア伊藤さまへ、お使ひに來た八牧が家來の、鐵平といふお奴樣だ。今お前に取りついたは、ほんの人ぞよめき。御免なさんせ。
祐信　べら坊め。なくなれ。
　ト突き飛ばす。見事に宙返りする。
權の頭、モシ、こりやマア、どういふ仔細でござる。
權頭　知れた事。賴朝に心を運ぶ祐信だに依つて搦め捕るワ。
祐親　その證據といふは賴朝が廻文狀。まだ爭へば、五平次、參れ。
五平　心得ました。
　ト五平次出て來る。
コレ、祐信どの。最早こなたの絶體絶命。おれが倅を返さぬは、こま附けて間者に使ふに違ひない。
祐信　ハ、、、、。老ぼれめ、動くな。祐親、モシ、今日の會合は六波羅の疑ひを避けん爲、伊豆箱根兩社の御幣を振つて、六波羅へ神文の渡さんと約せし通り、面々に御幣を振らせて、腹わたを洗はせにやアならぬ。

皆々　イヤア。
祐信　江間の小四郎。伊豆、箱根兩社の御幣を持參召されい。
義時　ハツ。
　ト祝詞になり、義時、幕明きの幣帛を二本載せたる三方を持つて出る。
祐信どの。仰せに從ひ、兩社の御幣、持參仕つてござりまする。
祐信　出かし召された。サア、伊藤どの。伊豆、相模の大小名のうちぢやア、マア、こなたがいつち老分だ。お年役にこなたから、御幣の番を始めさつしやい。
祐親　インニヤ、この祐親、何も御幣を振る覺えはない。
祐信　覺えないとは云はせない。最前八牧が密書といひ、それよりは先に、お目の醒める物をお目に掛けよう。尾形の三郎、お來やれ。
時兼　心得てござる。づく入め、うせろ。
　ト奥より尾形の三郎時兼、茯苓に繩を掛け、引いて出る。
季門　ヤア、三島の入道。
皆々　この繩目は。

茯苓　自らが質屋の代物となつたる仔細は、

時兼　この尾形の三郎時兼が、祐信どのの仰せを請け、盗賊となつて忍び込み、最前繩目に遭ひし時、この入道が預かつて、敵役の仲間へ入れたがるを、ぶッくりかけて様子を問ひ、斯う引ッ縛つた上からは、もう叶はぬと諦らめて、伊藤が企みを白狀しろ。づく入め、返答はどうだ。

茯苓　インニヤ、おらア何も白狀する覺えはなゐみだ。

祐信　締め上げ召されい。

時兼　吐かしやアがらぬか。

　ト刀の鐺にて締め上げる。

茯苓　アイタ、、、、。斯う責められちや何もかも

　ト云はうとする。權の頭拔きかけて、立ちかゝるを祐信突き退け

祐信　この坊主が白狀に及ばうとする所を、後からその首を打ち落し、證據がないと云ふ仕組みも、あんまり古手だ。おや。いかぬ。先づ、お身様の腰にある、源氏重代の名劍、小烏丸の一振りを、この祐信が、たい〳〵せうかえ。

權頭　滅多な事をお云やるな。小烏の名劍、どうしておれが知るものだ。イケ馬鹿々々しい男でござる。

祐信　盗人猛々しいと、お主が持つてゐる證據を見せうか。

權頭　この季定が小烏を持つてゐる證據とは。

祐信　これだワ。

　ト懷中より最前の片袖を出して

お身様達の心腹を知るべいと、退引きならず打擲にあふその折から、鳩に追はれし旅烏、この片袖の上に落ちかかつて、羽根を敷くや否、うつりし文字をよく〳〵見れば、瀬尾が送る密書の文言、小烏丸を渡せとある、宛名は海老名權の頭。

權頭　ヤア、それを。

　トかゝるを引ッ捕へ

祐信　大方これが小烏丸。

　ト權の頭が差添へを取つて

義時、改めて見られよ。

義時　心得ました。

　ト義時受取り、拔いて、改め

地金の鍛へ、燒刄の見事さ、中心に大權現と彫り附けてあるからは、疑ひもなき小烏丸。

祐信　義時、キッと守護召されい。もう男太夫に用はない。
ト突き飛ばす。
權頭　なめら三寶。
祐信　サア、これからは伊藤どの、早く、幣帛を振らぬか。
祐親　何も幣帛を振る覺えがない。
五平　心底怪しい祐信どの、悴が事から先へ聞くべい。こなたから、先づ幣帛を捧げさつしやい。
祐信　默りやアがれ。うぬにも云はにやならぬ事がある。惡い企みをするがやと、名に大谷の御隱居樣。どう仙國やのお爺どの。達て御幣を振るまいと云やア、お家の肝癪を起さにやならぬ。何れも樣、御免なされませ。
ト肌を脱ぎ、股立ち取つて、最前の烏を取つて引裂き長柄の銚子にて絞り込んで
烏は熊野の使はしめ、牛王代りの烏酒を、喰はせて詮議せにやならぬ。どこへお盆が廻らうやら。もう問はないぞ。
皆々　イヤア。
祐親　そんなら、どうでも御幣を振らせるか。

祐信　こなたは下戸だけに、烏酒は免してやる。
ト祐親、五平次兩人持つ。ト義時三方の幣帛を取つて祐親に渡す。此うち五平次逃げようとする。
土ほぜりめ。動きやアがるな。
五平　この五平次にも御幣を
祐信　振らせにやならぬ。早く持て。やだアと吐かしやア、空竹割りだ。
五平　今持つわな。
ト幣帛を持つ。
祐信　尾形の三郎、そのづくに入が細目をゆるめさつしやい。
時兼　ハア。
ト茯苓が繩を解く。
茯苓　こりやア有り難い。
祐信　小僧め、そこへ出ろ。
茯苓　なにを。
祐信　うぢ〳〵ひろぐと、鯰髭をひッこ抜くぞ。
茯苓　アイタ、、、。
トおづ〳〵出る。
祐信　料紙、硯。

時兼　ハア。

ト紙と硯を持つて來る。

祐信　坊主め。今、伊豆箱根兩社の御神、祐親と五平次めに移らせ給ひ、腹わたにある事をしやべる程に、いろ〳〵に書き附けろ。

ト祐親、塵手水をつかひ、拍子を鳴らし

南無伊豆、箱根兩社の御神。神慮速かにうつらせ給へ。

トこなしにて九字を切り、口の内で唱へ言をする。祐親、五平次、御幣を持ちて左右に立ち、顏を見合せ思ひ入れ。

奇妙頂禮々々々々。

ト合掌する。かすめたるドロ〳〵にて、五平次、祐親、幣帛を持ちながら慄へ出す。

ヤア、あの體は。

五平　して又、御用のお望みは。

ト茯苓書きにかゝる。

祐親　平家の恩顧は蒙むれども、一ケ國や二ケ國の、端下大名望みにない。淸盛入道の果報に肖り、關八州の大小名をぶッ潰して、東八ケ國の押領司とならば、子孫の繁榮目のあたり、あはよくば日本國中一呑みに

五平　四海の主になりたいと仰しやるのか。

祐親　掌握なさば其方にも、西海道を宛て行はん。

五平　面白い。して、思し召しの御手段は。

祐親　其方を平家の侍ひ、武藏の左衞門有國に仕立て、諸士の奴原の見知らぬを幸ひ、時政、祐信を始め、土肥岡崎に至るまで、賴朝を取立てる二股侍ひと云ひ立て、淸盛公の上意ごかしに詰め腹を切らせる密談。殘りの靑二才めらは、饗應に事よせ、毒殺の皆殺し。

五平　出來ました。その似せ侍ひ、やるものぢやアござらぬ。武藏の左衞門有國とやらに、なつてお目に掛けませう。その代りには、關八州は些細な事、この日本がお手に入つたら

祐親　その時こそは九州の國主となす。

五平　君は日本弓矢の棟梁。

祐親　其方は西海筑紫の探題。

五平　エヽ、忝ない。

祐親　蜻蛉と見れば小さき秋津州。

五平　四海を握る掌もあり。

祐親　五平次。

五平　祐親さま。

祐親　ハテ
五平　心地よき
兩人　熟談ぢやなア。
　ト此うち始終薄ドロ〳〵にて、五平次祐親が企みをしやべるうち、祐信、兩方を見ながら笑つて居る。茯苓、兩人が企みを云ふやうに書くまいとする。祐信、拳を振り上げると身を縮めて書くこなし。皆々企みを聞いて氣の毒がる。また祐信、九字を切り、合掌すると、ドロ〳〵にて、五平次、祐親、心附いて顏見合せ
祐親　この伊藤、御幣を振つても、正直正銘な祐親ゆゑ、何も變つた事はないぞ。
五平　おらア御幣を振つて居る暇がない。早く件長六を返してもらはう。
祐信　あんまり騷ぐな。とうにわるさいの神はよかつて居る、ハヽヽヽヽ。太い奴等だ。關八州の押領司になつて、日本を一吞みにしたい。
　ト祐親思ひ入れ。
武藏の左衞門といふ似せ侍ひになるとか。
　ト五平次思ひ入れ。
これから二人とも繩打つて、六波羅の目代、八牧の判官へ渡さにやならぬ。
祐親　そりやなぜ。
祐信　ナニ、なぜであらう。伊豆箱根の神罰を蒙むり、うぬらが腹わたに有る企みの荒まし吐かしたのを知らないか。讀ませて聞かしてくれう。コリヤ、ヤイ、鯰、そこへ出て、いま書いた物を高らかに讀み上げろ。
茯苓　サア、こりやア。
祐信　讀まないか。
茯苓　讀むのサ。
　ト書附けを出し、開きして叉、お前のお望みは。平家の恩顧は蒙むれども、一ケ國二ケ國の端下大名望みにない。清盛公の果報に肖り、關八州の大小名を打ツ潰し、東八ケ國の押領司とならば、子孫の繁榮目のあたり。あはよくば日本國中を一吞みに、四海の主になりたいと仰しやるのか。掌握なさば其方にも西海道を宛て行はん。面白い。して、思し召しの御手段は。其方を平家の侍ひ、武藏の左衞門有國に仕立て、諸士の奴原の見知らぬを幸ひ、時政、祐信を始め、土肥、岡崎に至るまで、賴朝を取立てる二股武士と云ひ立て、清盛公の上意ごかしに詰め腹を切らせる密談。殘りの靑

二才めらは、饗應に事よせ、毒殺の皆殺し。出來ました。その似せ侍ひ、やるものぢやござらぬ。武藏の左衞門有國とやらに、なつてお目に掛けませう。その代りには、關八州は些細な事、お望み通りこの日本がお手に入りましたなら、その時こそは九州の國主となす。君は日本弓矢の棟梁。其方は西海筑紫の探題。エヽ、忝ない。蜻蛉と見れば小さき秋津州。四海を握る掌もあり。ハテ、心地よき、熟談ぢやなア。

祐親　ヤイ、そんならその荒ましを

五平　しやべつてのけたか。

祐信　なんと、肝が潰れるか。

祐親　意氣地はねえわえ。

五平　ケチ忌々しい。

祐親　その企みを知られちやア。

五平　伊藤さま。

兩人　祐信、觀念。

ト切つてかかる。祐親が刀を踏み落し、それとかかる五平次を突き退け、拔身を取つて祐親、五平次を胸打ちに据ゑる。

祐信　動き廻ると、打ツた切るぞ。

權頭　コレサ、祐信、われが其やうに味噌をぶち上げても伊豆箱根の御幣いらずに、われが肝玉をひツくり返してやるべい。

ト梅の木の洞へ立ちかかる。祐信支へるな、鐵平、季門、かかる。この立廻りのうち梅の洞より賴朝を引出す。

賴朝　こりや某を何とする。

權頭　賴朝は雲にうせたワ。

ト賴朝を引据ゑる。

祐親　ナニ、賴朝が。

ト祐信、賴朝が首を拔打ちに打ち落す。皆々驚く。

皆々　これは。

ト祐信、賴朝が首を三方に載せて

祐信　六波羅を傾けんとする流人、兵衛佐賴朝が首、二心なき祐信、たつた今打ち落した。サア、伊藤の蛇親仁、この首を八牧が方へ持參するか。

祐親　サア、そりやア。

祐信　但し、今の書附けを六波羅へ言上せうか。

五平　サア、そりやア。

皆々　サア〳〵〳〵〳〵。

祐信　返答はどうだ。
祐親　忌々しい、持參せう。
祐信　グッとでも云つて見ろ。誰れだと思ふ、ア、つがもない。
五平　おらアぶちのめされて一言もない。併し、その頼朝の生ッ首を。
ト立ちかかり、頼朝が首を見て悄りして
ヤア、こりやアおれが倅が長六め。
ト云はうとするうち祐信、五平次が首を打ち落す。
祐親　なぜ、五平次を
皆々　手に掛けた。
祐信　ぶッた切つても大事ない。餘人は頼まぬ。頼朝の首級は、八牧が方へおれが持參する。
皆々　慥かにそりやア。
ト祐信、茯苓が持つて居る書附けを取り、懐中して
祐信　ドリヤ、首を持參すべいか。
ト首をひッ抱へ、拔身を提げて、花道の角へ來る。
權頭　祐信を
皆々　やつちやア。
ト皆々立ちかかる。義時、時兼、しやんと隔てる。祐親舞臺の中へ來て
祐親　祐信。
祐信　入道寂心。
祐親　ムウ。
ト思ひ入れ。
祐信　さらばだ。
ト三重になり、祐信、刀を擔ぎ、しやんと見得。本舞臺は皆々見事に居並ぶ。
ト祐信、振つて向うへ入る。　チョン〳〵〳〵幕

二番目　正木幸右衞門内の場

役名‖北條四郎時政。地獄谷の淸左衞門坊主實ハ高雄山文覺上人。下田の手習ひ師匠、正木幸右衞門實ハ右兵衞佐源頼朝。八牧判官兼隆。菲山次郎武足。下田の家主、彌次兵衞實ハ長田太郎景宗。下女、おぬひ。下男、六助實ハ猿島平太國景。手習ひ子、おきく。同、おそめ。同、お梅。同、小糸。同、おはん。同、お花。同、おます實ハ時政娘政

子の前。住吉屋丁稚、次郎吉。住吉屋平兵衞。鎌田兵衞正清娘、清瀧。幸右衞門女房、おふじ實ハ伊藤娘、辰姫。

本舞臺、三間の間、橋がゝりへかけて一面に、どつさりと雪の降り積つたる世話場の道具立て。正面暖簾口、押入れ。東の桟敷際に明け障子の二階を取りつけ、下の方に門口、これに門松を飾り、舞臺の軒にも注連を張り、簾の内より手習ひ子おはん、小糸、おきく、お花、おそめ、お梅、いづれも略振り袖の形にて、机に懸かり、手習ひをしてゐる。てんつゝに曲撥をかむせて幕明く。

うめ　おはんさん、今朝より雪が強うなつたぢやないかいなア。

はん　さうぢやわいなア。わたしが硯は凍つたわいの。

そめ　ほんにな。アレ／＼、あのやうに積つた所は、よい景色ではないかいの。

小糸　皆さん、雪まるめせうぢやないかいなア。

はな　どうしてマア、お師匠樣のお留守ぢやに依つて、遊んで居ては悪いに依つて、早う清書をせうぢやござんせぬかえ。

きく　それがよからうわいな。また話して居たなら、あのおかみさんに叱られやうわいな。

うめ　さうぢや／＼、めんえう話して居ると、御機嫌の悪いあのおかみ樣。サア／＼、早う習はうわいなア。

はん　そんなら皆さん、無言ぢやぞえ。

皆々　さう／＼、さうぢやわいなア。

ト手習ひにかゝる。通り神樂になり、花道より、下女お縫、木綿やつし、前垂れ掛けの下女の形にて、塗り下駄を穿き、味噌こしに豆腐を入れて持ち、番傘を差して出て來る。住吉屋平兵衞、絹やつし、麻上下の禮者の形にて、お縫と相合傘にて出てくる。後より次郎吉、木綿やつし、股引、草鞋にて三尺手拭を締めたる形にて、文庫を風呂敷に包み、これを提げて、頬冠りをして附いて出る。花道の中程にて

ぬひ　平兵衞さん、お前はこの雪の降るのに、ようお禮にお出でなさんしたの。

平兵　サア、此やうに降らうとは思はなんだ。とんだ降りではござらぬか。時に、お縫どの、何を買ひに出たのでごんす。

ぬひ　わたしやアノ、今日は手習ひの稽古始めでござんすに依つて、お節の支度、豆腐屋へおかべを取りに參じました。
平兵　イカサマ、今日は手習ひの稽古始め、さぞ忙しうごんせうの。
ぬひ　アイ、忙しいのと、内のおかみさんの燒餅やきとに、ほんにホツとしやんすわいなア。
平兵　それは又どうしたものでごんすぞ。あのマア物堅い正木幸右衞門さま、手習ひの指南なさる程のお方が、どうして不埒な事があるものであらう。そりやおかみさまの惡いのであらうわいの。
ぬひ　イヤ〳〵、おかみさんがおかみさんなりや、旦那さんも旦那さん。又この幸右衞門さまと申すお方が、女に孝行といふものは、女郎でも娘でも、後家でも下女でも、やらず遁がさず、女の事には、ほんに油斷のならぬ旦那さんぢやわいなア。
平兵　それでは、おかみさまのやかましいも尤も。これはしたり、雪が大分強くなつたが、次郎吉、年玉物は濡れはせぬか。
次郎　イエ〳〵、文庫を風呂敷へ包みましたに依つて、どこぞへ參つたならば、後へ脊負ひませうよ。
平兵　それがよい〳〵。幸右衞門さまへ上げる扇箱も出して置きや。
次郎　ハイ〳〵、畏まりました。
ぬひ　そんならお前さんは、此方の内へお禮にお出でなさんすかえ。
平兵　サア、久しぶりで、そもじの顏を見ようと思つて。
ぬひ　あのまた平兵衞さんのお嬲りかえ。
平兵　どうして嬲るものでえす。
ぬひ　何を、わたしがやうな中位な者を。
平兵　中位とは有り難い。
ぬひ　そんならござんせ。
平兵　サア、行きませう。
　ト また通り神樂になり、お縫、平兵衞、次郎吉來る。
住吉屋平兵衞、年始の御慶申し入れます。
　ト 次郎吉、扇箱を盆に載せ、内へ差出す。お縫取つて
ぬひ　マア〳〵、此方へお入りなされませ。
平兵　そんなら、幸右衞門さまにお目にかかつて參らう。
ぬひ　サア〳〵、お烟草お上がりなされませ。

ト煙草盆を持つて出て來る。

平兵　これは〳〵、娘御達、よう手習ひに精が出ますの。ドレ〳〵、お手本を拜見いたさう。

ト お半が手本を取つて

今川になぞらへて自らを誡むる贊詞の條々」さて〳〵、これはお見事な事ではある。此お手本は「女今川」、女の好きなお師匠様には似合はぬ文體でござるの。コレ〳〵、お縫どの、わしが幸右衛門さまへ、お頼みと申すは、娘の弟子を上げたいが、なんとお世話なされて下されうかの。

ぬひ　そりやマア、幾つ位な娘御でござんすぞえ、

平兵　されば、十六七でもあらうか。

ぬひ　そして器量はえ。

平兵　大方器量は誰れ程であらう。役者で云つて見やうなら、山下萬菊に其まゝの娘。美しいものサ。

ぬひ　そんなら御無用でござんすわいなア。

平兵　そりや又、なぜサ。

ぬひ　なぜといふ事があるものでござんすかいなア。十六七で器量がようては、マア第一旦那さんが、只は置きもなさんすまいし、そしておかみさんが燒餅で、內がやかましうござんすに依つて、其やうな美しい弟子は御無用ぢやわいな。

平兵　これはまた氣の毒千萬な。わしも折角頼まれて、こなたの幸右衛門さまへ弟子入りに上げうと思つて來ましたが、お內儀がやかましくつて、娘の弟子は取らぬとは、どうした事でござるぞ。

ぬひ　其やうな生優しい事ぢやござんせぬわいなア。燒餅やきも世間に澤山あれども、マア、此方の內方のおかみさんといふものが、マアあらう事か、あるまい事か、わたしとあの六助どのが、なんぞ話しでもして居ると、何を話して居たのぢや、其方と六助とは、あんまり仲がよすぎる、と云うては、やかましく云うてぢやわいな。

平兵　其やうに云つても、わしらが方のその娘の姉御、ちつと譯があつて後家同然で居られるが、これは又今日爰へ、妹を連れて見えるであらうが、この人の燒餅は、なんの別して構ひもせぬものゝ事まで、悋氣をするがきつい好き。ひよつと燒餅をやき出すと、五日も六日も物も食はずに燒餅をやく女中サ。

ぬひ　何と云はしやんしても、此方のおかみさんのやうな、燒餅やきはござんすまい。如何に燒餅がやきたいとて

ト此うち奥より正木幸右衛門の女房おふじ、やつし着流し、前帯の形にて、くひつみの三方を持つて暖簾口より出て、これを聞いて居る。
朝から晩まで夫婦喧嘩。聞いておくれなさんせ。その度度に、ヤレ、去り狀書いて下んせの、暇の狀を書かんせのと、日に幾度ともなく去り狀三昧。あんまりの事で旦那さんが、あの六助に云ひ附けて、去年の暮れにおしつめて、向う神田の斗園さんの所へ、去り狀を板行に起しに行てぢやわいなア。

平兵　これは呆れるワ。如何に夫婦喧嘩に去り狀がいればとて、去り狀を板行に起して置くとは、沖を超えた夫婦喧嘩でござるの。

ぬひ　それぢやに依つて、手習ひにござんす娘御達の中にも、めぼしいがあると、内がやかましうてなるものぢやござんせぬわいなア。

平兵　さういふ所へわしらが方から、燒餅やきの姉御が、妹を連れて弟子入りに見えたなら

ぬひ　それこそほんに、燒餅で目鼻が危ないわいの。

平兵　いつその事に、どちらが燒餅が強いか、燒餅比べをさせて見たいな。

ぬひ　定めしおかみさんに、角が生えやうわいなア。

平兵　弟子入りの姉御の口が、耳まで引裂けやうわいの。

ぬひ　マア、あのやうに燒餅がやきたいとは

平兵　燒餅も病のうちか。

ぬひ　片輪のうちでござんせうわいなア。

平兵　肝が潰れるわえ。

ぬぬ　しや、ほんに

兩人　顏が見られる。

ト この中へおふじ出て

ふじ　サア、その顏をお目に掛けようわいな。

平兵　なめら三方。これは幸右衛門さまのお内方樣、明けましては好い春でござりまする。

ふじ　早々とお噂をなされて、有り難うござります。

平兵　夢になれ／＼。

ふじ　お縫、人が聞くまいと思うて、ようわしが噂をしやつたの。

ぬひ　ナニ、勿體ない。

ふじ　わしぢやと云うて、なんのやかましう云ひたい事はなけれども、あのこちの人の身持ちの惡さと云ふもの

が、此やうに人樣の大事の子供衆を預かつて、手習ひの指南もする人が、あのやうな自墮落では、親御達へも立たぬと思うて、やかましう云ふのぢやわいなう。わしが悋氣するが惡いか、又こちの人の身持ちがよいか。それを知つて居る者は、其方とあの六助。どうぢやあらうか、よう思うて見てくれたがよいわいなア。

ぬひ　ほんに仰しやれば、此方の旦那さん、お前さんと申すおかみさんがあつてさへ色事がお好き。マアひよつとおかみさんが無い時は、どのやうでござりませうぞいなア。

ふじ　マア、平兵衞さん、有り難うござります、何か差措いて、先づ、おくひつみをお祝ひ申しませう。

平兵　これは〳〵有り難うござります。時に今日、弟子入りの事をお頼みなされて下されますまいか。

ふじ　そりやモウ、お前さんとはお心安い幸右衞門が事、ちつとも御遠慮はござりませぬ程に、その弟子衆をお寄越しなされませいなア。

平兵　それは忝なうござります。左やうならば、只今參りますやう申しませう。お弟子になされて下されませうと申したら、さぞ喜ばるゝでござりませう。

ふじ　時に、平兵衞さん。それはさうと、そのマア弟子衆は、幾つ位のお娘御でござりまするえ。

平兵　ト云はうとするを、お縫云ふなといふ思ひ入れ。平兵衞呑み込み

サ、その娘の年は、丈はずんと高うござるが、まだ年は十三七つでもござらうか。

ぬひ　平兵衞さんとした事が、お月さんではあるまいし。

ふじ　して、そのお子の器量はえ。

平兵　サ、その器量は

ト云はうとする。お縫また云ふなと思ひ入れ。又呑み込み

承知々々。その器量は、先づ誰れであらうぞ。役者で云つて見やうならば、松本大五郎が女形に生寫しサ。

ぬひ　そりや見たいものでござんす。

ふじ　して、そのお子の姉御さんがござんすかえ。

平兵　サア、その姉御は

ト云はうとする。又お縫云ふなと思ひ入れ。

呑み込み〳〵。姉御があつてからが物云はず、あのやうに見えるが、大方姉御の年は、六十五か七か八か七十で

あらうか。何にもしろ、そんならたつた今寄越します程に、幸右衛門さまへ、よろしくお頼み申しますぞえ。
ふじ　アイ〳〵、そんならわたしが、こちの人には好いやうに申して置きませう程に、そのお子をお寄越しなされませい。
平兵　左やうなら、善は急げ。これから直ぐに、さう申しに參るでござらう。
ふじ　もうお歸りなされまするかえ。
平兵　永日お目にかかりませう。コレ〳〵、次郎吉、その扇箱をなくさぬやうに、合點か。
次郎　ハイ〳〵。脊中へ脊負ひましてござりまするから、濡れる氣遣ひはござりませぬ。
平兵　よし〳〵、ひだるからうが、茗荷屋へ行けば、あそこでなんぞ出るであらう。左やうならば幸右衛門さまへ、よろしうお頼み申します。
ふじ　ヘイ〳〵。ようお出でなされました。
ぬひ　平兵衛さん、松の內でござんす程に、一二三枚ひツペがさうではござんせぬか。
平兵　ようござらう。そんならお縫どの、
ぬひ　お供の衆、御大儀。
平兵　さらば參らうか。
　ト通り神樂にて、平兵衛、次郎吉花道へ入る。
ふじ　サア、皆さん達も、主の歸らぬ內に、隨分と精出して淸書きをするがようござんすぞえ。習ふばかりでもござんせぬ。その手本の讀みを覺えるやうに讀みながら、稽古するがようござんすわいなア。
皆々　ハイ〳〵〳〵、畏まりました。
ふじ　コレ、お縫、このマア旦那どのは、なぜに歸りが遲い事ぢやしらぬ。松の內は稽古も早仕舞ひぢやと云ふに、歸りの遲い事ではあるぞ。
ぬひ　このマア六助どのは、なぜ遲い事ぢやしらぬ。もしも年玉に貰うたあのおあしで、てつきりあの藪下の切見世へ、初鐵砲を放しに行きはさんせぬか。何かにつけて色事ほど、御しんの揉めるものはないわいなア。
ふじ　コレイノ、お節の支度にかからぬかいの。
ぬひ　ハイ〳〵、さらばお膳にかからうか。
ふじ　サア〳〵、精出して習うたがよいぞや。
皆々　ハイ〳〵。
　トおふじ火鉢を引寄せ、火をおこしにかかる。お縫は味噌こしを持つて奥へ入る。皆々手本を讀みながら手

習ひをする。

はん　御文下され、有り難く存じ上げ參らせ候ふ。御機嫌よう入らせられ

きく　この梅の花庭前に咲き候ふまゝ、お慰みに一枝持たせ上げ參らせ候ふ、ちと〳〵夕方お話しに御越し待入り參らせ候ふ。

小糸　父母の深き恩を忘れ、孝の道疎かになる事。一つ、夫を輕しめ、我れを立て、天道を恐れざる事。

はな　新玉の御祝儀、いづ方も同じ御事に祝ひ納め參らせ候ふ。御賑々しく若葉の春を御迎へなされ候はんと、御めでたく存じ上げ參らせ候ふ。

そめ　秋の夜の月、隈なからん事を思ひ、淺茅が原の松風を時雨とや疑はん。

うめ　法隆寺、三輪、在原寺や初瀬にかゝり、多武の峰、大織冠鎌足の苗裔。

トてん〳〵に繰返し〳〵、稽古して居る。唄になり、通り神樂をかぶせ、花道より手習ひ子おます、振り袖着流しの形にて、腰帶締めて、引ずりを穿き、蛇の目傘をさして出る。後より清瀧、やつし、着流し、前帶の形にて、手拭を頭に置き、引ずりを穿き、蛇の目傘をさして出て來る。その後へ、六助、木綿やつし、着流しの形にて、十九文下駄を穿き、机と文庫を提げて雨掛けに、右の手に柄樽を持つて、竹の子大笠を冠り出て來て、花道の眞中に留まる。

六助　モシ〳〵、女中さん。こりやマアわしを、どこまで連れて行くのでごんす。

清瀧　もうちつとぢや程に、大儀ながら、一緒に來ておくれいなア。

六助　こなさんのやうな美しい女中さんに、おくれいなと云はれては、わしやア唐天竺までも行く氣でごんす。マア此やうに、机や文庫を擔がせて、お柄樽まで提げてくれろとの頼みでごんすが、どこへ行くのでごんす。

清瀧　どこへ行くのぢややら、わたしも知らぬわいなア。

六助　これはまた滅相な。行く所も知らいで、近附きでもない者に、此やうに物を持たせて歩くと云ふやうな事があるものかいの。裾からは吹き上げる。袖口からは寒風が入つて、寒うて〳〵なるものぢやごんせぬわいの。

清瀧　お前も重からうが、辛抱しておくれ。此やうに歩いて居るうちに、どこへ行くのか、行く所も大方知るゝであらうわいなア。

六助　これはまた情ない。行く先も知らいで、尋ねて歩くと云ふ事があるものか。こなさんは知らんせずとも、大方、主は知つてゞあらうな。

ます　サイナ、わしぢやと云うて、ろく／＼に知らねども慥かに手習ひのお師匠さんぢやわいなア。

六助　滅相界な。この下田は下田千軒というて、家數の千軒もある所で、手習ひの師匠とばかり聞いて知れるものかいの。

ます　サア、さうではござんせうが、お師匠様のお名は知らいでも、そのお師匠様のお内儀さんが、よう燒餅をおやきなさんす、お内儀さんぢやといふ事いなう。

六助　ムウ、そんなら寺子屋のお内儀さんの、やき餅をやかるゝ所かえ。

ます　アイ、きつう燒餅でやかましいと云ふ、評判のお内儀さんぢや。

六助　そんなら、外の内でもごんせぬ。此方の旦那の内でごんすわいの。

清瀧　そんなら、こなさんが知つてかえ。

六助　知らいでわいの。その燒餅やきのお内儀さんは、誰れあらう。この下田の七軒町に隱れのない、正木幸右衞門さまといふ、手習ひの指南なさるお人のお内儀様。わしやその内の、小鬢ながら、御家老でごんすわいの。

清瀧　そんならこなさんが、その正木幸右衞門さまの内方のお人かいなア。

六助　六助といふ者でごんすわいなう。

清瀧　それはマア、好いお人に逢ひましたわいの。そんなら、なんと、その幸右衞門さまの所へ、この子やわたしを、連れて行ては下さんせぬかいなア。

六助　袖の振合ひも他生の緣、ようごんす。二人ともに、わしが案内しませうわいの。

清瀧　そんなら、連れて行て下さんすか。

六助　オイナウ。定めて弟子入りでがなごんせうの。

ます　ソレイナア。

六助　習はいでもよい手習ひをしたものゝ

ます　そんなら、こなさんは

六助　祐筆ぢやわいの。

ます　祐筆とはえ。

六助　書く事は

ます　どうしたえ。

六助　無筆ぢやわいの。

清瀧　そんなら讀む事も
六助　盆禮ぢや。
清瀧　そんならそれで
六助　祐筆サ。
兩人　オヽ、辛氣。
六助　えらう寒うなつた。サア、ごんせ。
兩人　合點ぢやわいなア。
ト通り神樂になり、おます、清瀧、六助、舞臺へ來る。
六助　ハイ、おかみさん、只今歸りました。
ふじ　六助、其方はマア先刻にから、何所へ行つたのぢやぞいなう。
六助　私しは旦那の御用がござりまして、お使ひに參りましたが、布子もこの皮足袋も、臺なし濡らしました。ドレドレ。
ト皮足袋を脱いでそこへ置く。
ふじ　そりや又大方、碌な使ひぢやあるまいわいの。
六助　何ぢややら、祐筆でござりまするに依つて、お手紙を持つて參りまして、何の譯やら存じませぬわいの。
ふじ　ツントモウ、無筆といふものは、物が分らいで、辛氣な者ではある。
六助　モシ／＼、私しは無筆でも、脇から内方の旦那幸右衛門さまに、御指南が請けたいとて、上がり子がござりまするわいの。
ふじ　そりや何所へ、弟子入りのお人が見えたのぢや。
六助　此方へ呼びますでござりませう。
ト門口へ出かかり
サア／＼、此方へ入らつしやりませ。
清瀧　そんなら、それへ參りましても、ようござんすかいの。
六助　サア／＼、大事ごんせぬ／＼。
清瀧　ハイ／＼、そんなら、妹、おぢや。
ます　モシ／＼、姉さん、わたしやお前に、云うて置かねばならぬ事がござんす。
清瀧　云うて置かねばならぬ事とは、何の事ぢやぞいなア。
ます　サイナ、外の事でもござんせぬが、聞けばお師匠様のお内儀さんは、きつう燒餅やきぢやとの事。お前もちつと、その方はやかましうござんす程に、大概な事は聞き遁がしにして、何にも云うて下さんすなえ。

清瀧　オヽ、この子とした事が。なんぼ云ふまいと思うて居ても、あんまり先の女中が、アタしつこう悋氣らしい事を云はしやんすと、どうして聞いて居やうぞいなア。必らず〳〵、側から何も云はせて置いてたもや。

ます　それはマア、氣の毒な事でござんすわいなア。

清瀧　なんの氣の毒な事があるもので。云うて見やうなら、其方はあの幸右衞門さまを、爰の内の女中さんに、寢取られたのではないかいの。そんなら其方が、やかましう云はねばならぬ所を、今日の弟子入りをかこつけに、逢はせてくれいと云やつたに依つて、この姉が連れて來たのでないかいの。わしがやかましう云はうと思うて案じる位なら、其方、云うたがよいわいの。

ます　どうしてマア。わたしやどのやうな事があつても、云ふ事はならず。生れついて悋氣する心は、微塵もござりませぬわいなア。

清瀧　そんなら、どのやうな事があつても、怨み云うたり、燒餅やいたりする事はならぬかいの。

ます　アイナ、あのいとしいと思ふ幸右衞門さんが、わたしが見る前で、先の女中さんと帶紐解いて、抱かれて寢やしやんせうが、わたしや何とも思はぬわいなア。

清瀧　ほんに呆れて、物が云はれぬわいの。そんなら、どのやうな事があつても

ます　幸右衞門さんがいとしいわいなア。

清瀧　其方は平氣な者ぢやな。

ます　それぢやに依つて、何も云うて下さんすなえ。

清瀧　イヤ〳〵、わが身の代りに來た、わしが云うてやらうわいの。

ます　コレイナ、拜むわいなア。

六助　コレ〳〵。此方へござんせぬのかいの。

ます　ハイ〳〵、それへ參りますのでござりませう。姉さん、拜むぞえ。

清瀧　合點ぢや〳〵。どなたも御免なされませ。

ト清瀧、おます、内へ入る。おふじ二人を見て、煙草盆を引寄せ、煙管にて灰吹き叩きたて

ふじ　六助、そのマア女中は何ぢやぞいの。

六助　ハイ、主達は、手習ひの弟子入りに見えたのでござります。

ふじ　なんぢや、弟子入りぢや。どこの國に、其やうな美しい弟子入りがあるものぢや。此方の内では、モウ〳〵、今日から弟子は禁制ぢやと云うて、去なしてやりや。

六助　モシ〳〵、それはどうでござりまする。旦那もお留守でござりますれば、マ、靜かに挨拶をなされませサ。
ふじ　これが靜かに挨拶がなるものかいの。何ぢやあらうと斷わり云うて、サア〳〵、早う去なしや〳〵。
ト灰吹きを叩き立て、無性に腹を立つ。
六助　これは又、氣の毒な事ではある。
淸瀧　そんなら主が、內方のお內儀さんぢやの。
ます　モシ〳〵、姉さん、かんまへて、何にも云うて下さんすなえ。
淸瀧　イヤ〳〵〳〵。云ふまいと思うたが、あんまりな挨拶ぢやに依つて、どうも云はねばならぬわいの。
ト帶を締め直す。おます氣の毒なる思ひ入れにて
ます　コレイナ、何にも云うて下さんすなえ。
ト淸瀧なだめ、笑ひながら、おふじの側へ行き、手を突いて
私し事は、ますと申しまして、何にも存じませぬ不調法者。先刻にあの住吉屋平兵衛さまをお賴み申して、どうぞこなたの幸右衛門さまの、お弟子になりたうござりまして、わざ〳〵參りました者でござりまする程に、憚りながら、よろしうお賴み申しまするわいなア。
ふじ　あのマア美しい顏わいの。此方の內では、モウ〳〵色事が物騷でござんす程に、こなさん達のやうな、可愛らしい弟子は取らぬわいの。
ます　サア、どうござりましても、あの住吉屋の平兵衛さまをお賴み申して置きましたわいの。
ふじ　なんの、住吉屋の平兵衛、知りもせぬものを。
ます　其やうな事仰しやらずとも
ふじ　知らぬわいなア。
ます　サア、その所は幾重にも
ふじ　やかましいわいの。
ト煙草盆を持つて脇の方へ退いて後を向いて居る。おます、おふじが側へ寄つて手を突き
ます　サア、お腹は立ちませうが、幾重にもお弟子になされて下さりませ。
ふじ　又かいなう。顏形なら風俗なら、どちらも揃つて、こちの人に譯のありさうな女中さん。此方の內では、色事の稽古はせぬ程に、早うどつちへなりとござんせいなア。
淸瀧　イ、ヤ、行くまいわいない。行きやんすまいなア。色

事の稽古がならずば、御不請ながら、手習ひの御指南が受けたうござんす程に、近頃々々、お大事のものでも、お連合ひ幸右衛門さんに、どうぞ逢はせて下さんせ。

ふじ　そりやならぬわいな。どうしてマア、あの素早いこちの人に逢はせてやれるものかいなア。

清瀧　さう云はんすと、振り込んで來たせうがには、ゐしかつて居て、逢はにや置かぬわいなア。

ます　コレイナア。其やうに云ふと、幸右衛門さんの愛想が盡きようかと思うて、わたしや苦勞になるわいなア。

清瀧　わが身が苦勞になる事を、わしが知つた事かいの。

ます　これは又、氣の毒な事ではあるぞ。

六助　モシ〳〵、お內儀さん、折角この土產まで持つてござりましたものを、マア〳〵、禮でも仰しやつて、お受けなされたがようござりまするわいの。

ト柄樽に目錄を附け、盆に載せ、おふじが前に置く。

ふじ　おいてたも。なんの、受けたうもない土產物。其方へやつたがよいわいの。

六助　これは又、氣の毒千萬な。

清瀧　それ程に弟子入りが氣に入らずば、此方から師匠に賴まぬわいの。サア〳〵、妹、おぢや。

ます　コレイナア、それでは幸右衛門さまに逢はれまいぞえ。

清瀧　よいわいの。今日逢はいでも、そりや又仕樣があらう程に、何ぢやあらうとも、わしとおぢや。

六助　そんならこの柄樽は、持つてござりまするか。

ト清瀧が前に置く。清瀧、柄樽を抛り出して

清瀧　なんのこつちやいなア。阿房らしい。妹、おぢや。

ます　コレイナア〳〵。

ふじ　サア〳〵、早う去んだがよいわいなア。

清瀧　去ないでわいの。

ふじ　あの美しい顏わいなう。

清瀧　大きにお世話の。

ふじ　早う行きや。

清瀧　行かいでワ。

ふじ　まだ行かないなア。

清瀧　妹、おぢや。

ト嫌がるおますを無理やりに連れ、花道へかかる。唄になり、向う花道より正木幸右衛門、羽織、衣裳、前帶の形にて、小さ刀を差し、路次下駄を穿き、から傘に誂らへの竹の子笠を着て、鰒を二三杯繩にて結へ、

下げて出て來る。花道の中にて淸瀧、おますに行き逢ひ、顏見合せ、思ひ入れあるべし。

ます　エヽ、幸右衞門さんかいなア。

幸右　其方はおます女郎か。

淸瀧　よい所で、お目にかゝりましたわいな。

幸右　このマア大雪に、二人ながら、どこへ行たのぢやぞいの。

淸瀧　斯うぢやわいな。聞いて下さんせ。この子がお前に逢ひたいと云うてな、わたしを賴んだに依つて、どうぞして逢はるゝ事もあらうかと思うてな、あの住吉屋の平兵衞さんを賴んで、弟子入りぢやと云うて、あなたの所へ參りましたれば

幸右　雷が落ちたか。

淸瀧　ほんにマア、あのやうな喧ましいお內儀さんもあるものかいな。わしも雷には

幸右　イヤモウ、甚だ雜澁に及べども、知つての通りの譯ぢやに依つて、愛想盡かしを云ふ事ならず。箸の上げ下ろしにやかましく云ふのを、堪えて居るばかりぢや。定めて其方衆二人が、此方の內へ行つたならば、ほんに見るやうぢやわいの。なんと、斯うしてはたもるまいか。わしが好い時分に知らさう程に、アレ〳〵、あの藪蔭の物置へ行つて、寒からうとも、ちつとのうち、待つて居てはたもるまいか。

淸瀧　どうして待つて居らるゝものでござんすぞいなア。わたしやモウ、腹が立つて〳〵、どうせうかと思うたわいな。

幸右　さうぢやあらう〳〵。

淸瀧　サア〳〵、此やうな所に居やうより、妹、おぢや。

ます　コレイナ、わたしや何にも腹の立つ事もなうて、爰で幸右衞門さんにお目にかゝつた事ぢやに依つて、此やうな嬉しい事はござんせぬ。

淸瀧　其方もあんまり氣のない子ぢやわいの。今のやうに云はれても、腹が立たぬとは、さりとは〳〵平氣な者ぢやわいなア。

ます　どうしてマア。ひよつとしたらわしが云うた事が、幸右衞門さんのお氣に障つて、御機嫌が惡うなつたら、どうせうぞいなア。ぢやに依つて、寒からうとも、凍えやうとも、例へこの身は今降る雪に埋もれても、幸右衞門さんがゆゑぢやと思へば、ちつとも大事ないさかい、いつまでも待つて居る心ぢやわいなア。

清瀧　ほんにあんまりで、挨拶にも困るわいの。そんなら其方は、いつまでも待つて居るのかいの。

ます　お前もどうぞ、わたしと一緒に、待つて居て下さんせいな。

清瀧　これは又、情ない事ではあるぞ。

幸右　サア〱、段々に降り積るこの雲。道の知れるうちに、マア〱、あそこへ行て、わしが知らせう程に、それまで待つて居てたもいの。

ます　アイ〱、いつまでも待つて居やうわいな。

清瀧　ヤレ〱、情ない事ではあるぞ。

ト また唄になり、おます、清瀧、橋がゝりへ小隠れする。幸右衛門は簑笠を取つて、内へ入る。

幸右　サア〱、戻つたぞや〱。

ト 鰒を六助に渡す。

六助　これは旦那。只今お歸りなされましたか。

うめ　お師匠様、只今

皆々　お歸りなされましたか。

ふじ　こちの人、お前はどこへ行てござんしたのぢやえ。

幸右　ハテ、知れた事を問うたものぢや。今年の惠方ぢやに依つて、下田の八幡へ參詣して、寺町を通つたれば、アレ〱、あの鰒が、あんまり新らしう見えたゆゑ、なんでも鰒汁をして、其方と我れら、宿の雪見と樂しまうと思うて、わざ〱下げて參つた幸右衛門、なんと女房思ひであらうがや。

ト 火鉢を抱へ炭をつぐ。

ふじ　さう云はしやんすが、ほんの事ならよけれども、今までどこにか面白う、樂んでござんしたであらうわいの。

幸右　めいやう、其やうな事云うたものぢやわいの。今日は雪風で寒いに依つて、稽古も早うしまうてやらう。コリヤ〱、六す〱、其方の鰒庖丁が、見たい〱。

六助　ハイ〱。畏まりましてござります、大根は編笠がようござりませうな。

幸右　勿論々々。必らず茄子を忘れまいぞ。

六助　ハイ〱、呑み込んで居りますわいの。

幸右　サア〱、奥方は、差詰め鰹節へお廻りなされい。汁も餘り濃うないやうに、女に云ひ附けたがよいぞや。

ふじ　アイ〱。云ひ附けは云ひ附けませうが、こちの人、お前其うち、何をしてござんすえ。

幸右　なんと云うたら知れた事。いつもの通り、一人づゝ、

手習ひの稽古してやらうわいの。
ふじ　大方さうでござんせう。わたしや六助を奥へやつて置いて、定めて稽古であらうわいな。
幸右　又かいの。久しいものぢや。そんならよいワ。この幸右衛門が側に居て、手習ひの稽古か、色事の稽古か、よう頑張つて居るがよいわいの。
ふじ　知れた事。油断がならぬに依つて、わたしや爰でかかを搔かうわいな。
幸右　どうとも〳〵。
六助　ドレ〳〵、我れらは、鰒の庖丁お目に掛けようか。
幸右　さらば手習ひの稽古してやらうか。

ト合ひ方になり、六助は爼板、庖丁、手桶を出して、鰒を拵らへにかかる。おふじは鰹節箱を出して、鰹節を搔く。幸右衛門は小糸が机の側へ、火鉢を持つて寄り、煙草をのみながら

小糸、其方は大分手が上がつたわいの。随分精出して習ひませうぞ。それ〳〵、その、お文下されの下されが、さうではないわいの。もちつと伸々と書いたがよいわいの。

ト云ふうち、小糸、讀みながら手習ひをする。

小糸　ハイ〳〵「お文下され有り難く存じ上げ參らせ候ふいよ〳〵御機嫌様よう入らせられ」
幸右　その入らせられは見事ぢや〳〵。其方は絲屋の娘の小糸、おし附け色事の口が明いて、男の枠にかゝるであらうわいの。
小糸　お師匠様の、をかしい事を仰しやるわいの。
幸右　サア、これから、おはんが稽古を見ませう。
はん　「父母の深き恩を忘れ、孝の道疎かになる事。一つ夫を輕しめ」
幸右　待ちや〳〵。それ〳〵、その夫を輕しめと云ふ所が大事の所ぢや。其方の名はお半、我れらは幸右衛門、お半幸右衛門で、その夫の可愛いと云ふ事を教へてやりませうか。
はん　又お師匠様の、をかしい事を仰しやりますわいなア。ほんに女子は一生に、夫と云ふは、一人持つものではござりませぬかいなア。
幸右　なか〳〵わが身はませた者ぢやわいの。よい〳〵、來月になつたら伊勢參宮に連れて行きませう。コレ〳〵、おそめ、その書きやうはどうしたものぢや。
そめ　「淺茅が原の松風を時雨とや疑はん」

幸右　それ〳〵、その疑ふと云ふ字が、さらではないわいの。さらば手を取つて敎へてやらずばなるまい。

　ト幸右衛門後へ廻り、お染が手を取つて

斯うぢやわいの。「秋の夜の月隈ならん事を思ひ、」コレコレ、この思ひと云ふ字がむづかしい字ぢやぞや。お師匠樣にばつかり思はせて置いて、いつまでも生娘で濟むものかいの。其方の名はお染、おしつけわしも幸松とか、久松とか名を替へて、其方にもちつと思ひと云ふ事を覺えさせたいものぢやわいの。

そめ　モシ〳〵、おかみさんが見てお出でなさんすわいなア。

幸右　手習ひの稽古するに、ちつとも大事ないわいの。

そめ　ぢやと申しまして。

　ト幸右衛門を退けようとする。此うち、おふじ見て居て、うか〳〵鰹節を掻き、うつかりと見惚れて、鰹節も小刀も取落し、手ばかりにて鰹節をかく眞似をする。

　幸右衛門、お染にひ附ツいて

幸右　大事ない〳〵。お師匠樣が筆法傳授の色事を敎へませう。コレ〳〵。

　ト抱きつく。おふじ見かねて、ツカ〳〵と寄つて、幸右衛門が胸づくしを取つて連れて來る。お染、氣の毒なる思ひ入れ。おふじ急いて

ふじ　ありや何ぢやいなア。

幸右　手習ひの稽古ぢやわいの。

ふじ　稽古ぢやえ。

幸右　稽古々々。

ふじ　成る程、稽古ぢやわいの。手習ひの稽古はほつたらかして、よう色事の指南さんすの。お前は〳〵お前は。サア、わたしや、お前のやうな男を持つて居ては、心の安まる暇がござんせぬわいなア。アタ阿房らしい。サアサア、モウ〳〵〳〵、添うて居る事はいやでござんす程に、サア、たつた今、去り狀を、書いて下さんせ〳〵。

幸右　コレ〳〵、又しても、去り狀〳〵と、年明けても元日から今日まで、何枚去り狀書いたと思やるぞいの。役にも立たぬ去り狀、書く事はならぬわいの。

ふじ　イエ〳〵、今までとは違ひやんす。此やうな腹の立つ事はない程に、去り狀、取らにや措かぬ〳〵。

六助　モシ〳〵、おかみさん、もう好い加減に、御料簡なされませい。

ふじ　イヤ〳〵、誰れが何と云うても。サア、たつた今、

書いてもらはうわいの。

ト硯箱と紙を幸右衛門へ突きつける。

サア〳〵、書いて下さんせ。

幸右　其やうに云うて、後で又、誤まりましたと云はうでの。望みの通り、たつた今書いてやるからは、反古にする事は罷りならぬぞ。

ト云ひながら、すら〳〵と書いておふじに打ちつける。

ソレ、望みの通り三くだり半。サア〳〵、其方へ渡した渡した。

トおふじ、取上げる。皆々氣の毒なる思ひ入れ。

ふじ　この去り狀を取るからは、さつぱりと緣を切つたと思へば、此やうな嬉しい事はないわいなア。

幸右　さうであらう〳〵。

ふじ　モウ〳〵、去り狀取つたからは、ナンノ、爰の內に居るものぞ。さらば、父さんの所へ行かうわいなア。

ト外へ出ようとして、幸右衛門に心殘つたる思ひ入れありて

このマア意地の惡い雪わいの。コレ〳〵、六助、わが身大儀ながら、わしを送つてたもらぬか。

ト幸右衛門、六助に送るなと云ふ思ひ入れ。六助呑み込み

六助　イエ〳〵、お前のやうな情の剛いお人を、わしやア送りますまいわいの。

ふじ　そんなら、其方は。

六助　送る事はなりませぬ。

ふじ　そんならよいわいの。其方が送らずば、こちやたつた一人行かうわいの。こちの人、ナンノ、こちの人ではなかつたもの。コレ、幸右衛門さん、此やうに雪が降つて、今宵は寒うござんすが、お前は一人寢る心かえ。わしやたつた今、爰の內を出て行くぞえ。コレイナア、其やうに默つて居やしやんすが、そんならほんまに、わたしを思ひ切つて去らしやんすかいなア。そりや又あんまり、胴慾ぢやわいなア。

ト泣き伏す。皆々氣の毒なる思ひ入れ。幸右衛門、構ふなといふこなし。

幸右　ソレ見たか。それ程に云ふ位なら、何の役にも立たぬ事を云うて、重ねてから去つてくれいの、暇くれいと云ふまいなら、今日は松の內でもあり、料簡する程に、以後をキッと嗜なまうぞ。

ふじ　腹立ち紛れに云うた事、堪忍して下さんせいなア。
幸右　サア、堪忍してやる程に、重ねてキッと嗜なまうぞ。
ふじ　そんならこの去り状、お前の方へ返さうわいな。
幸右　これぢやに依つて、書くまいと云うたに。
　ト去り状取つて引裂いてしまふ。
ふじ　弟子衆や、六助が前も恥かしいわいの。こちの人、お前も機嫌が直つたなら、また手習ひの稽古して進ぜ申したがよいわいなア。
幸右　イヤ〳〵、また稽古にかゝつたなら、われも腹を立つたり、人にも腹を立たせたりするであらう程に、イヤイヤ、もう〳〵、稽古をしまい〳〵。
ふじ　さう云はしやんすと、わたしや弟子衆の前へ氣の毒でござんす程に、どうぞ稽古をして下さんせいなア。
幸右　それ程に云ふ事ならば、せう事がない、さらば、お梅が稽古をしてやらうか。
ふじ　それでわたしも、氣がようござんすわいな。
六助　モシ〳〵、旦那、ひよつと又去り状のいるやうな事なら、稽古をなされませぬがようござりませうぞえ。
ふじ　どうしてマア、其やうに暇の状が取らるゝものぢやぞいの。
六助　よもや其やうに去り状も取られますまい。去年も七月から大晦日まで、去り状の紙ばかりが一百と十八枚。今年から氣を替へて、夫婦喧嘩をなされても、紙費えでないやうに、去り状なしになされませい。
幸右　いつその事に、重ねてから去り状を通ひにして置かうかいの。
六助　結句、その方が御勘定にはようござりませう。ハヽヽヽ。
幸右　さらば、お梅が稽古にかゝらうか。
　トお梅が手を取つて、後から引寄せる。
うめ　「法隆寺、三輪、在原寺や初瀬にかゝり」モシ〳〵、何をなされまするぞいの。
幸右　默つて〳〵。イヤ〳〵、手習ひの稽古といふものは、頬摺りをせねば、手の上がらぬものぢやわいなう。
　ト幸右衛門、お梅と頬摺りをする、おふじこれを見て、ムッとしたる思ひ入れにて、幸右衛門が側へ寄らうとする。六助立ち塞がり、おふじを鎮めて居る。
ふじ　あんまりぢやわいの〳〵。
六助　見るものぢやない。通らつしやい〳〵。

幸右　コレ〳〵、爰が肝心の所ぢや。在原寺や初瀨にかゝり、」斯うぢやぞや。男の方から初瀨にかゝり、此やうにかゝつても、びくしやくせずと、ヂツとして居や〳〵。

ト幸右衛門、懐へ手を入れる。お梅、氣の毒なる思ひ入れ。

うめ　モシ〳〵、おかみさんが、見てお出でなされまするわいの。

ト幸右衛門を突き倒すと、幸右衛門直ぐにお菊に抱きつく。お菊も氣の毒なるこなし。

きく　何をなされまするぞいなア。

ト幸右衛門を突きこかす。幸右衛門咳拂ひなして起き直り、お花を見て、ニコ〳〵して

幸右　この中で手の上がりさうな者というてはお花ばかり。コレ〳〵、其方には大事の事を敎へてやらう程に、ちやつと爰へ來て、稽古しや〳〵。

ト炬燵へ入つて寢轉び、お花が手を取つて蒲團の中へ引込む。お花、氣の毒なる思ひ入れあつて、モヂ〳〵して居る。

はな　モシ〳〵、これは又、氣の毒な事ではあるぞ。

幸右　大事ない〳〵。其方の手本は、新玉の御祝儀。サア、爰へおぢや。新玉の御祝儀を祝ひ納めてやらう程に、おぢやいの〳〵。

はな　モシ〳〵、惡い事なされまするな。お師匠様。

ト逃げようとする。幸右衛門、無理やりに手を取つて、蒲團の中へ引込む。おふじ、腹の立つ思ひ入れにて、側へ寄らうとする。六助留めて

ふじ　あんまりぢや〳〵。

六助　サア、尤もぢや〳〵。

ふじ　云ふまいとは思うたが

六助　モシ〳〵、旦那、また去り狀が入りますぞえ。

幸右　合點ぢや〳〵。

ト云ふうちおふじ、ツカ〳〵と寄つて、幸右衛門を炬燵の内より引出す。幸右衛門、直ぐに引摺られて、出たなりに寢轉んで居る。おふじ、急いたる思ひ入れにて、

ふじ　こちの人、如何にわたしがお前の自由になるものぢやと云うて、あんまりな事さんすわいな。腹が立つわいな〳〵。

ト云ふうち幸右衛門、去り狀書いて

幸右　これぢやあろ〳〵。

ふじ　こりや何ぢや。
幸右　家例の通り、去り狀ぢや。
ふじ　なんぢや、去り狀ぢやえ。
幸右　來月から斗閑が所から板行にしてくる程に、マア其うち、これでしまや〳〵。
ふじ　何の役にも立たぬこの書附け、引裂いてしまふわいの。
ト引裂く。
六助　モシ〳〵、おかみさん。其やうに喧ましう仰しやつても、どうで旦那の女好きは、止みますこつちやござりませぬ程に、あんまり政道なされぬのがようござります。また旦那様も、これ程氣を揉んでござるおかみ様の事、ちつとは思し召して、お嗜なみなされませ。幸ひ雪は降りまする。今日は稽古も早仕舞ひになされたがようござります。サア〳〵、お弟子衆も爰らは粹を通して、小降りのうちに、お歸り〳〵。
うめ　アイ〳〵。おかみさん、御機嫌をお直しなされませ。
皆々　お師匠様、明日。
うめ　お半さん、お先へ。
はな　お梅さん、お先へ。
はん　お花さん、お先へ。
そめ　小糸さん、お先へ。
小糸　お菊さん、お先へ。
きく　お染さん、お先へ。
六助　さらば、鰒汁にかゝりませうか。
ト六助、俎板を持つて奥へ入る。唄になる。お梅、お染、お花、お半、お菊、小糸、てん〳〵に駒下駄を穿き、手習ひ草紙を提げ、相合傘にて花道へ入る。
幸右　コレ〳〵、其方も其やうに腹を立てる事はないわえ。サア〳〵、機嫌直して酒にしや。
ふじ　嫌ぢやわいなア。嫌でござんすわいなア。
幸右　サ、嫌ではあらうが、此やうに雪は次第に降つてくる。オヽ、寒々。どうやら脊中がぞく〳〵して來た程に、鰒汁の出來るまで、炬燵へなりと寢てやらうか。
ト幸右衛門、炬燵を持つて來て、おふじが側へ寢轉ぶ。おふじ、立つて上の方へ行く。
ふじ　アタ阿房らしい。わたしが色事ではあるまいし、珍らしさうに、寢る事は嫌でござんすわいなア。
幸右　サア、嫌ではあらうが、夫婦喧嘩と云ふものは、寢てからでなければ納まらぬものぢや。サア〳〵、一緒に

炬燵へ、あたつてたも〳〵。

ト炬燵を持つておふじが側へ行く。直ぐに寝轉んで

初雪や内に居さうな人は誰ぞ。また斯う女房と一緒に雪を見た所といふものは、どうも堪つたものではないわいの。

ト云ふうち、おふじツツと立つて、下の方へ煙草盆を持つて行く。

ふじ　よい加減に人を嬲つたがよいわいな。

幸右　南無三方、また河岸が變つたさうな。

ト炬燵を持つて來て、直ぐに寝轉び

雪降れば木毎に花ぞ咲きにける。いづれを梅と、どうも云へぬ〳〵。

ト煙草盆を引寄せ、煙草をのまうとする。おふじ、その煙草盆を持つて、また上の方へ行く。幸右衛門續いて炬燵を持つておふじが側へ行く。この事幾度もあるべし。よい程に次第を打ちかける。〇「行くへ定めぬ道なれば、こし方もいづくならまし」と「鉢の木」の次第のうち、花道より地獄谷の清左衛門坊主、誂らへの乞食坊主の形にて、十九文下駄を穿き、破れ笠をかつぎ出て來て、花道の中にて

清左　ソレ、雪は豆腐の粕に似て、きらず汁に飛んで散亂し、鐵火は天徳寺を着て、番所を抱へて卑縮ると云へり。忌々しいこの大雪。今夜はどこぞへ寝べいやら。番所もないおれが身の上。どこぞへにじり込みたいものだわえ。よし〳〵、あそこに家がある。さらば、あのやかばねへしけこむべいと存じ候ふ。氣が狂つたさうだ。

ト通り神樂になり、清左衛門坊主、舞臺へ來る。此うちに幸右衛門、無理やりにおふじを炬燵の内へ引込んで、蒲團を無理に、裾へ足にて掛けて居る。

ふじ　なんぢやぞえ。措かしやんせいな〳〵。

幸右　どうしてこれが措かるゝものぢや。サア〳〵、寝や寝や。

ト嫌がるおふじを無理に寝かす。清左衛門坊主、門口を叩き

清左　モシエ〳〵。ちつと頼みたうごんす〳〵。

幸右　通らつしやい〳〵。

清左　おきやアがれ。わしやア手右の彌陀へ參詣の者サ。どこへでもようごんすから、なんと、一夜の宿を貸しちやア下さるまいか。

幸右　そんな所ぢやごんせぬ。此方にちつと取込みな事が

ごんすに依つて、どつちへなりとも、早く行かつしやい
行かつしやい。

清左　コレ〳〵、其やうに情なしをくらはせないものだ。どうも寒くつて立ちきれないわな。宿を、貸して下さい貸して下さい。

幸右　あのやうな者に構はずと、サア〳〵、寝よう〳〵。

ふじ　聞けば旅のお方さうな。わたしが挨拶せうわいなア。

ト幸右衛門を突き退けて、蒲團の内より出て、門口を明ける。此うち幸右衛門、寝腹這ひて煙草をのんで居る。

清左　オヽ、寒い〳〵。

ふじ　アノ、いま門口を叩かしやんしたのはお前かえ。

清左　アイ、わつちサ。

ふじ　いま一夜の宿を貸してくれいと云はしやんしたは、お前かいなう。

清左　アイ、わつちでござりやす。簀の子の端でも、物置きでも、なんでも屋根のある所でさへあればようござりやすから、どうぞ今夜ばかりは、なんと、泊めちやア下さりやせんか。

ふじ　見れば見る程、怖らしい御出家様。お泊め申したいものなれども、どうも〳〵今宵は

清左　なりませぬか。

ふじ　アイ、お氣の毒ながら。

清左　そりやとんだ事だ。こりやマアあんとすべいな。

ふじ　モシ〳〵、これより十八町あなたに、米山寺の門前に、好い旅籠屋がござんす程に、日の暮れぬうち、早うそこまでござんせいなア。

清左　コレナ〳〵、その旅籠屋に泊る位なら、何しに爰まで來るものでごんす。十二文出しやア、ぶつま宿へ泊られるが、その十二文さへないこの御出家坊ぢや。宿ぢやア怖がられる。野宿をすべいにやアこの大雪。一昨日の朝、沼津の立場で、腹太餅を三つ食つたまんま、ひだるいと寒いので、一足も歩かれぬやつサ。どうぞそこらに泊めて下さい。

ふじ　サア、泊め申したいは申したらござんすが、人を泊めるは處の法度。お宿はどうもなりませぬわいなう。

清左　そんなら、どうでもならぬのでごんすか。

ふじ　アイ、お氣の毒ながら。

清左　エヽ、忌々しい。そんならどうすべい。

トおふじが顔を見て、思ひ出したる體にて

ヤア、お主はおれが妹ぢやないか。

ふじ　エヽ、氣味の惡い。なんのこつちやいなア。

清左　どう見ても妹に違ひない。コレ〳〵、お主やア兄を見忘れたのだ。ヤレ〳〵〳〵、逢ひたかつた〳〵。

　トおふじ恟りして

ふじ　コレ〳〵、滅多な事云はしやんすな。わたしや、こなさんのやうな兄さんを、持つた覺えはないわいなア。

清左　コレ〳〵、そりやアおぬしやア情なしといふものだ。おれが如何にこの態になつて居ればとて、兄でないとはどうしたものだ。おらアお主が行くへを、方々と今日まで尋ねて居たわいの。血を分けた兄に違ひはない。思ひ出して見ろ〳〵。

ふじ　いろ〳〵な事云うてぢやわいなア。どうしてマア、こなたのやうな兄さんがあつてよいものかいなア。

清左　こりやア、成る程、おれが惡かつた。一人身でも居る事か、御亭主のある妹の所へ、兄で候ふとて、こんな態で尋ねて來られちやア、お主も外聞が惡い筈。こりやアおれが惡かつた。おれだと云つて、どうしてこんな態で來たいものだ。ソレ、覺えがあらう。少さい時に別れてから、お主は人に貰はれる、おらア後に殘つて、死なれた親仁の商賣をして居ればよかつたが、生れ附いて賽ころばしが好きで、小二才の時分から、酒と博奕で親の讓りの株式も、いつの昔にか無くしてしまひ、それからとう〳〵、宿無しになつてこんな態。惡い事はしまひものだ。この雪降りに爰で逢うたは地獄で佛。ヤレ、嬉しやと思つても、おれが身状がこれだに依つて、現在の妹にさへ突き出されるといふも、みんな親の罰。妹、其方の前も、面白ない〳〵。

　ト空泣きする。

ふじ　何ぢややら、怖い人ぢやわいの。わしが身にとつて覺えもない事を云うて、妹ぢやの、兄ぢやのと、氣味の惡い。わしやこなたのやうな兄さんは、持たぬわいなア。

清左　コレ〳〵、なんぼこの態でゐたればとて、指が切つて捨てられるものか。よく思ひ出して見やれ。おぬしやア十一、おらア十四、見附けのかつたいと虎の尾で分れた兄弟に違ひない。久し振りで逢つた兄樣だ程に、たつた一言、妹でござりまするとて云つて、まめな顏を見せてくりやれ。コレコレ、水洟と涙で、我が衣手は露に濡れつゝ。

　ト無性にしやくり泣きに泣く。

ふじ　オヽ、嫌いなう。ちつとも覺えのない事を、よう其やうに云はるゝ事ぢやな。どうも合點がゆかぬわいの。モシ／＼、こちの人、マア、爰へ來て下さんせいな。

幸右　なんぢや／＼。鶯や雪より夜着の放れ際。この寒いのに、其方は何をして居るのぢやぞいの。

ふじ　コレイナア、あの御出家が、わたしを妹ぢやと云うて、いろ／＼な事を云ふわいなア。お前挨拶して、早う去なして下さんせいなア。

幸右　其やうな事も、ある事／＼。

ト煙草盆を提げて、淸左衞門坊主が前へ來る。

コレ／＼、見れば御出家さうなが、我れらが女房を妹ぢやとの事、合點がいかぬ。マア、貴僧はどつちからごんしたぞ。

淸左　わしかえ、わしやアどこやらでごんした。オヽ、それそれ。わしやア箱根の地獄谷から來た者でごんす。

幸右　あの箱根の地獄谷から。そして、名は何と云ひます。

淸左　名かえ。名は地獄谷の淸左衞門坊主といふ、いとも尊い御出家サ。

幸右　地獄谷の淸左衞門坊主。こりや有り難い名でごんす。

淸左　して、お身樣は、誰れでごんす。

幸右　この家の主、正木幸右衞門と云ふ者でごんす。

淸左　そんなら、こなさんは宿六どのでごんすか。ヤレヤレ、好い折に逢ひました。わしやアこなさんの女房の兄でごんす。近附きになりませう。

幸右　コレ／＼、滅多な事を云はつしやるな。わしが女房は、ちつと譯があつて、歴々の娘で、兄弟はごんせぬが、こりやア、間違ひであらう／＼。此方ではごんせぬ程に、外を尋ねて見さつしやい／＼。

淸左　コレナ／＼。少さい時に別れても、兄弟は兄弟。妹を忘れていゝものでごんすか。ア、聞えた。こりやアわしが態が惡いに依つて、妹を尋ねて來て、錢金の無心でも云ふか、搦み廻つて、いたぶりにでも來たのかと思つてかえ。コレナ、そんなのぢやアないよ。マア、久し振りで逢ひに來たこの兄さん。兄は親なり、小舅なり、ドレ／＼、座敷へ通つて、御馳走になるべいか。

トつか／＼と上の方へ通り、炬燵にあたり

ヤレ／＼、いゝ心持ちだ。妹や、兄さんにお茶でも上げないか。煙草盆を持つて來いよ。

ト寢轉ぶ。おふじ、幸右衞門と顏見合せ、思ひ入れあつて

ふじ　こちの人、こりやマア、どうしたものでござんせうぞいなア。

幸右　ある事〳〵。コレ〳〵、その手でゆく幸右衛門でないぞ。錢金が望みなら、少々は合力してくれう。サアサア、早う歸れ〳〵。

清左　なんだとほざく。錢金が欲しくば合力してやらう。合力してもらふまいわえ。そんならどうしても、おらア兄ぢやアないか。

幸右　此方に覺えもない事を。

清左　妹ぢやアないか。

ふじ　アレ、まだいなア。

幸右　サア〳〵。キリ〳〵、歸れ〳〵。

清左　歸るべい。さういふ事なら歸るべい。ちつと炬燵で人心が附いたから、歸るべい〳〵。サア、來やれ。

ト炬燵より出て、おふじが手を取つて連れて行かうとする。

ふじ　コレ〳〵、わしをどこへ連れて行くのぢやぞいの。

清左　どこへ連れて行くものだ。この態になつて、食ふべいやうのないこの兄樣。われを下田の商賣屋へ、年一杯取つてやつて、それを元手に、小田原の宿で、博奕を振らにやアならない。兄樣への孝行に、サア〳〵、妹、賣られにあゆべ〳〵。

ふじ　そんならわしを

清左　女郎につかふのだ。

ふじ　エヽ。

ト驚ろく。幸右衛門立ちかかり

幸右　最前から詞を控へて居れば、どういふ事ぢや。この幸右衛門が女房を、下田の町へ勤め奉公に連れて行くとは、不屆きたと云はうか、不埒と云はうか、こりや聞えた。おのれは強請り者ぢやな。騙りぢやな。物取りぢやな。その分にしては置かぬ奴なれども、此やうに雪は降り積つて居れば、その分にして歸す程に、すら〳〵どつちへなりとも失せ居らう。

ト清左衛門坊主を突き倒す。清左衛門坊主、雪の中へこけ込み、方々痛む思ひ入れにて、やう〳〵、起き上がる。幸右衛門、おふじを圍ひ居る。

清左　オヽ、痛いな〳〵。こりやアとんだ目に遭はしやアがつたな。この分ぢやア濟まないぞ。なんでも宿六が相手だぞ。もう動かれない〳〵。オヽ、痛いな〳〵〳〵。

トよろ〳〵しながら、内へこけ込んで寢て居る。

ふじ　コレイナア、どうせうぞいな／＼。
幸右　ある事／＼。その手でゆくやうな幸右衛門ではないぞ。強請りがましい事を申さば、その分にしては歸さぬぞ。
淸左　こいつはいゝわえ。歸されないが此方の望み、これからはおれが縛られて突き出されるか、あの女めをそびいて、下田の町で金にするか。二つ一つ。どうで坊主で淸左衛門と附いて居る男だぞぃくらはれるのぢやアない。オ、痛い／＼。
ト仰山に痛む思ひ入れ。幸右衛門、思案して、おふじと囁き、幸右衛門は杯と燗鍋を持ち來て、おふじは暖簾の內よりいろ／＼盛り並べたる膳を持つて來る。合ひ方になる。
幸右　コレ／＼、例へ體は痛まうとも、マア、雪消しにどうでごんすぞ。
ふじ　何はなしと出來合ひのお節、幸ひ今日は精進日。サアサア、わざとお箸を取らしやんせ。
ト淸左衛門坊主が前へ杯ともに並べる。
淸左　オヤ／＼、こりやア御馳走かえ。
ト起き上がる。

幸右　何はなくとも、雪消しに一つようごんせう。
ふじ　わざとお箸を取らんせいなア。
淸左　オヤ／＼、これぢやア、さりとは／＼御迷惑でごんすが、そんなら御造作になりますべいか。
幸右　サア／＼、ゆるりと、參れ／＼。
ト火鉢へ燗鍋を掛ける。
淸左　有やうは斯うでごんす。この二三日は食らひ物にかつゑて、腹が脊中へひッついて、ひだるくつて／＼、一足も引かれぬ所へ、この忌々しい大雪。後へも先へも參り難し。そんなら御馳走になりますべいか。
ふじ　サア／＼、加減が違つたでござんせうが、たんと上がつて下さんせ。
淸左　かッちない／＼。ドレ／＼、献立てを拜見いたさうか。オヤ／＼、汁はなんだ。銀杏大根。平皿にお目にかからうか。
ト蓋を取り
オヤ／＼、昆布に油揚け。久し振りでの御對面、さらば米の飯にありつくべいか。
幸右　これはどうです。食後に酒は飲まれまい。マア／＼、燗の熱いうち、サア／＼、一つ／＼。

清左　イカサマ、酒もようごんせうが、時に、宿六どの、わしやア變つた癖で、ついぞ精進酒を飲んだ事がごんせぬから、マア〳〵、酒よりは菩薩にありつきませう。

幸右　成る程、精進酒は飲まれまい。そんなら貴僧は

清左　おはもじながら生臭坊主サ。

幸右　ヤレ〳〵。それはお奇特な事の。

清左　ナニサお前。

幸右　幸ひ〳〵。コレ〳〵、六助に云ひ附けて置いた、先刻の吸ひ物。其方、ちよつと一膳持つておぢや。

ふじ　アイ〳〵、合點ぢやわいなア。

ト暖簾の内より盆に吸ひ物椀を乘せて、持つて來り、清左衛門坊主が前に置く。

サア〳〵、そんならこれで、一つようござんせうわいな。

清左　こりやアお吸ひ物かえ。

幸右　鹽梅はどうか知らねども、藥味も入れて來たであらうの。

ふじ　さうぢやわいなア。

清左　云ふ目が出ると云ふものぢやアない。

ト椀を取り、蓋を取つて

オヤ〳〵、こりやア鐵砲かえ。有り難うござんすわえ。鰒汁や意見しに來て食うて行く。番頭、一文やらつしやい。これで一杯飲みませうか。

ふじ　ドレ〳〵。わたしが酌をせうかいなア。

清左　お慮外樣でござりやす。いつその事に、この茶碗でやッつけべい。

ト飯を膳へぶちまけ、茶碗へ酒を注がせる。

幸右　客僧も左がきくと見えますわい。

清左　きゝ過ぎてうんざりものサ。

ト半分飲んで下に置き、吸ひ物を食ふ。

さて好いお鹽梅の。百日ぶりで味噌汁にありついた。

幸右　鰒は南海の美味と賞して、雪の日の命ではごんせぬか。併しながら腸に大毒あり、これを食へば命を失ふ。なんと好味なれども、怖いものではごんせぬか。

清左　ナニサ、唐土には詩にも作り、煮賣り屋の店の大立て物、西施乳とも名けて、西施が乳に例へたは、旨いものゝ素天邊で、鰒で命を取られゝば、なんと本望ぢやごんせぬか。鐵砲で死にたいが願ひでごんすの。

幸右　ハテ、變つた願ひもあるものでごんすの。

清左　鐵砲で死んだも、あんまりはごんせぬが、鐵砲といへば、風呂ぢやア人のよく死ぬ奴サ。それ〳〵、宿六ど

のに好い物を見せますべい。

ト懐より錦の袱紗に包みし白骨を出す。おふじ、悄りする。

ふじ　氣味の悪い。ありやマア何ぢやいなア。

幸右　そりやァ何者の白骨でござるぞ。

清左　これかえ。こりやア鐵砲ぢやア死なないで、湯風呂で死んだ人間のしやれかうべサ。

幸右　ナニ、その白骨が。

清左　野間の内海の風呂の内で、おッくたばつたべら坊大將、義朝がしやれかうべサ。

幸右　ナニ、その白骨が。

清左　折に觸れたる髑髏杯。これで一杯どうでごんすぞ。

幸右　思ひも寄らぬ其むくろ。

ト思ひ入れ。

清左　酒は飲む氣はごんせぬか。

幸右　イエ／＼、飲みますまい／＼。正月しまから忌々しい。汚れ不浄な髑髏杯。どうしてそれで飲まるゝものぢや。

清左　飲まれまい。出家となればくたばつたも同然。それでさへ命が惜しくつて、縁起を祝ふ松の内。此しやれかうべに肖らぬやうに、宿六どのも、御用心／＼々々。

ト白骨を火箸の先へ掛けて、幸右衛門が前へ突き出すと、薄ドロ／＼になり、盛り並べたる膳の上に燒酎の火燃える。三人顔見合せ、思ひ入れ。

幸右　その白骨は。

ト取りにかゝる。清左衛門坊主、手ばしかく懐へ入れる。

清左　御亭主。

幸右　客僧。

ふじ　奥でゆるりと

三人　話しませうか。

ト唄になり、清左衛門坊主、幸右衛門、おふじ、奥へ入る。この唄のうち、時の鐘鳴ると、花道より下田の家主彌次兵衛、やつし、羽織の形にて、下駄を穿き、弓張り提灯を持つて出て來る。後より韮山次郎武足、上下、衣裳、大小の形にて、足駄を穿き、蛇の目の傘をさして出て來る。後より侍ひ大勢附き出る。花道の中程にて

彌次　申し上げまする。この所が卽ち、正木幸右衛門が宅でござります。

武足　雲中にろうぎを放ちたる、管仲にはあらねども、勝手知れざる韮山次郎武足、地理に精しき彌次兵衛が案内にて、この所へ發向なせしも主人の嚴命。先つ頃、伊藤入道寂心が館より、逐電なしたる、兵衛佐頼朝が、行くへ知れざるこそ審かしい。心當りを詮議いたせ。隱して置きやア磔刑道具と、われが組下へ申し渡せ。

彌次　畏まりましてござりまする。心憎きはこの家の主。武足さまを御同道いたし、家内の樣子を御覽の上、怪しい事もござりまするなら、直ぐに御詮議あられませう。

武足　云ふにや及ぶ。案内しろ。

彌次　イヤ／＼。暫らくお控へ下さりませう。

武足　なぜ留める。

彌次　幸右衛門が身の上、しかとそれとも知れませねば、表立つての御詮議は、却つて御無用でござりまする。憚りながら、この彌次兵衛が存じまするには、彼奴も大抵な者ぢやござりませぬ。食はうが食ふまいが、先づ武足さまを、手道の稽古をなされたいと、申す事を云ひ立てにして、お供を致さば、よもやお目にかゝるは知れた事。初めは和らげて、先づ幸右衛門へお逢ひなされませい。

武足　イカサマ、八牧の判官兼隆が身内に於て、韮山次郎武足と名乘らば、なか／＼彼奴めも油斷はせまい。さる浪人と僞はつて、手道稽古に事寄せ、家の樣子を見聞せん。然らば流儀を望んで參りしと、彌次兵衛、幸右衛門へ申してよからう。

彌次　畏まりましてござります。幸ひ／＼、幸右衛門が召使ひ六助と申す者は、拙者が奉公に遣はしましてござります。何事も私しにお任せなされませい。

武足　兎も角も計らうてよからう。

彌次　左やうならば武足さま、ならぬ御浪人。

武足　幸右衛門どのの御指南が受けたい。よろしく賴み存ずる。

彌次　御案內申しませう。

武足　お行きやれ。

彌次　斯うお出でなされませう。

ト唄になり、侍ひを花道へ歸れと仕方にて敎へ、彌次兵衛と連れ立つて舞臺へ來る。

彌次　賴まうぞや／＼。幸右衛門どのはお宿かな。

六助　オイ／＼、誰れぢや／＼。

ト奥より行燈下げて出て來て、門口を見、

イヤ、これは大屋樣でござりまするか。この雪の降るの

に、ようお出でなされました。

彌次　まだ年明けて禮にも出ぬが、爰の内の御亭主に、ちつと用があつて、わざ〳〵來たが、幸右衛門どのはお宿かな。

六助　ハイ〳〵、宿元に居られまする。彌次兵衛さま、何の御用でお出でなされました。

彌次　外の事でもない。おれも爰の内の師匠どのとは別懇な仲ゆゑ、お主までも世話をやいて、奉公に寄越したやうなもの。今日來た用と云ふも、矢ツ張り爰の内の事。おれは據ろなく頼まれて、弟子入りを一人連れて來たが、なんと、指南をしちやア下されまいかの。

六助　そりやア女中ではござりませぬか。

彌次　イヤ、さる歴々の御浪人よ。

六助　オヽ、そんなら弟子に取られませいでわいの。

彌次　そんなら弟子に取られやうか。

六助　取られいで。わしらまでを世話をやいて、奉公に寄越して置かれた、彌次兵衛さまのお頼みなら、御承知でござりませう。

彌次　そんなら先のお人を、たつた今連れて來やう程に、お身様、よいやうに挨拶して、なんと、幸右衛門どのに、引合せてはくれまいか。

六助　サア〳〵、いつなりともそのお人を、直ぐに同道なされませ。

彌次　そんなら爰へお呼び申さう。

ト内へ入る。

六助　サア〳〵、これへお通りなされませい。

武足　心得申した。許し召されい。

ト武足、上の方へ通り、座に着く。六助、煙草盆、茶を出す。

六助　ようお出でなされました。

武足　これは〳〵、構はずと差措かれい。

六助　彌次兵衛さま、手道稽古をなされたいと仰しやる御浪人は、あなた様かえ。

武足　それ〳〵。幸右衛門へ頼んでくりやれ。

六助　畏まりましてござります。

武足　時に、早速承らうは、幸右衛門どのの御流儀、正木流の御手道、拙者見申したが感心いたした。この度、幸ひ仕官の望みがござるについて、何卒先生の筆意を稽古いたし、せめてにじり書きでも仕りたい身共が願ひ。筆道稽古の爲め参上いたしたと、よろしう申しておくり

やれ。

六助　これは〳〵、御叮嚀なる御挨拶でござります。随分御指南いたされまするでござりませう。定めて只今までも、御稽古なされたでござりませうな。

武足　稽古といへば云ふやうなもの、御指南受ける爲なれば、ちよつと手見せに認め申さう。

ト硯箱を取つて紙を出し、さら〳〵と書く。

如何ながらそれ。それをお見やれ。

ト六助に渡す。取つて逆さに見る。

六助　シタリ。流石でござります。見事にようお書きなされました。幸右衛門もさぞ、御手蹟をお褒め申すでござりませう。

ト彌次兵衛、氣の毒なる思ひ入れにて

彌次　コレ〳〵、六助、そりや逆さまだワ。

六助　アノ、これが逆さまかえ。

彌次　お主もちつと氣を附けやれ。

六助　こりやァ彌次兵衛さまにお目に掛けうと思うて

彌次　それでわざと逆さまか。

六助　なんと見事に出來たではござりませねか。

彌次　そんならお身様にも讀めるか。

六助　祐筆おやに依つて。

彌次　どうした。

六助　意氣地はないよ。

彌次　おきやアがれ。

武足　して、幸右衛門どのには、いづれにござるぞ。

幸右　幸右衛門これに居ります。

ト合ひ方になり、幸右衛門、煙草盆を下げ、出て來る。

これは〳〵、大屋様、ようお出でなされました。

彌次　幸右衛門さま、明けましては好い春でござります。まだ年禮には出ませぬが、今日は據ろないお人に頼まれて、お世話を頼みに來たのでござんす。

幸右　これは〳〵。サア〳〵、お煙草上がりませ。

ト煙草盆を出す。

武足　おてまへ様が正木幸右衛門どのでござるか。拙者は浪人者でござるが、仕官の望みござつて、諸侯方へ罷り出まするにつき、手蹟稽古いたしたく、わざ〳〵參つてござる。近頃お世話ながら、御指南下されませうなら、忝なうござる。

幸右　これは〳〵、御叮嚀なる御挨拶にあづかりましてござる。當時、手蹟稽古は致しまするが、畢竟子供ばかり

集めまして、誠に渡世の爲ばかり、なか〱御指南申すやうな儀ではござりませぬ。お尋ねにあづかりまして、迷惑千萬に存じます。

武足　イヤ〱、左やうに卑下召さるゝな。毎度拜見いたしてござる。

幸右　これは〱。左やうござらばあなた樣にも、御手蹟はようなされまするでござらう。

武足　これまで稽古いたしても、畢竟にじり書き、俗に申す釘の折れ。御指南受ける爲と存じて、認めた物がござる。それを幸右衞門どの、御覽下され。

幸右　ドレ〱、拜見いたさうか。

ト武足が書附けを取上げ

これは見事な儀でござります。ナニ〱「この度池の尼公の慈赦によつて、一命を助け、伊豆の國蛭が子島へ流罪申し附くる者なり。月日、賴朝、小松の內府平の重盛。」

ト讀んでこなし。

武足　なんと、それでも手蹟になり申さうか。重盛公の書翰にて、習ひ覺えしその筆法。御覽に入れるも面目ない。

幸右　イヤ〱、これは天晴れな御手蹟。幸右衞門なぞ遠く及ばぬ儀でござります。御指南なぞとは恐れ入りまする。

武足　然らばお弟子には召されぬか。

幸右　その儀ばかりは。

武足　不學文盲なる身共ゆゑ、斷わりでござるか。但しこの度の池の尼公の慈赦に依つて一命を助け、蛭が子島へ流罪せらるゝと書き申したる、その消息が、先生の氣に叶はぬのか。推參いたした上からは、この所にぶッ坐つて、御指南受けにやアなり申さぬ。

幸右　御執心とござらば、隨分御指南いたしませう。

武足　早速の承知、過分でござる。

彌次　幸右衞門どの、よろしうお賴み申します。

幸右　これは〱、大屋樣にはお寒うござりませう。マアマア、火鉢を上げませう。

彌次　イヤ〱、構はつしやりまするな〱。

六助　旦那、お食摘みを大屋樣へ。サア〱、わざとお祝ひ申しませう。

彌次　これは〱忝ない。

ト戴き

時に、幸右衞門どの、この食摘みを見れば、昆布と勝栗、

精進物ばかりとは、お寺の食摘みださうな。これにも何ぞ譯がござんすのか。

幸右　大屋様、聞いて下されませ。わしが實父の命日が正月三日。死なれたその年からこの食摘みを、此やうに精進物でしますわいの。

彌次　そんなら其許の親御の命日は、アノ正月三日かえ。

幸右　松の内に死なれました。

彌次　アノ、松の内に。

ト彌次兵衛ゾッとして、食摘みを持ちながら、ブルブル慄へる。

幸右　モシ〳〵、大屋様、なぜ其やうに慄へさつしやります。氣色でも悪うござるのか。

彌次　こりやア

幸右　寒さ慄ひか、但し又、長田慄ひぢやアごんせぬか。

彌次　なんだか知らぬが、ぞく〳〵〳〵と、俄かに寒くなりました。

六助　モシ〳〵、薬が御用なら、爰に年玉に來た薬がござりますよ。

彌次　わしやア變つた事で、ちつと氣に障つた事があると、じつ〳〵と腹が立つて、此やうに慄へる事がごんすが、變つた癖ぢやアごんせぬかえ。

幸右　サア、人にはいろ〳〵な持病があるものでござるわいの。

武足　身共にも癖があるて。

幸右　アノ、其許様にも。

武足　如何にも。身共が癖は素面の生醉、すつぱ抜きが癖さ。

幸右　それは怪しからぬ事の。

武足　斯う云ふうちにも。

ト「エイー」と手裏劍を打つ。幸右衛門、烟草盆にてしつかと受け

幸右　危ない事の。

彌次　御亭主、奥へ

武足　案内しろ。

幸右　案内いたさう。

ト唄になり、武足、幸右衛門、彌次兵衛、目禮して奥へ入る。

六助　イカサマ、無筆ほど忌々しいものはないわいの。丸いものがしの字やら、角なものがのゝ字やら、一字を讀めぬと云ふものは、苦々しい事ではある。それはさうと、

あの旦那の云ひ附けには、あの藪蔭の物置きに、女を二人置いたとの事。マア、寒うてどうもなるまい。ドレドレ、爰へ呼んで、火鉢へでもあてませう。

ト合ひ方になり、橋がゝりよりおますと清瀧を連れて來る。

清瀧　これはいかいお世話でござりますわいなア。

六助　ナンノ〳〵、さぞ寒かつたでござりませう。サアサア、早う爰へ來て、火にでもあたつてござりませう。

ます　アイ〳〵、其やうに構うておくれなされまするな。

六助　久しい間の事ぢやに依つて、さぞ待ちかねてござりましたらう。

ます　イエ〳〵、いつまで待つて居りましても、幸右衛門さんに逢はるゝ事ぢやと思へば、ちつとも大事ござりませぬわいなア。

清瀧　又しても其やうな、氣の長い事を云うて居やるわいの。其方は何とも思やるまいが、わしはモウ〳〵堪えて居られぬ程に、幸右衛門さんに逢うて、どう云ふ心か、聞かせてたも。

ます　めいよう、お前は急かしやんすわいなア。どうしてマアあの幸右衛門さんに、惡い心がござんせうぞいなア。

清瀧　まだかいなう。モシ〳〵、お前さんを頼む程にな、どうぞ幸右衛門さんを、爰へ呼んでは下さんすまいか。

六助　サア〳〵、わしも旦那を寄越す心。定めて幸右衛門さまも、二人の衆に逢ひたう思うてござりませう。何を云うても、お内儀のこれ〳〵で

ト指にて角の眞似をする。

滅多に爰へ呼ぶ事もならず、燒餠の嵩じたは、なんと、ふさぐものでござりませぬか。

清瀧　そんならどうも逢はれぬかいなア。

ます　好い料簡はござんせぬかいなア。

ト六助、手を打つて

六助　出た〳〵。妙と云ふ智惠が出たわいの。

兩人　あるかえ〳〵。

六助　ござりまするわ。斯うぢやわいの。たつた今、あの旦那を呼んで來ると云うても、互ひに顔を合せては、又どのやうな事が出けうも知れぬに依つて、智惠と云うたは爰の事。コレ〳〵、この行燈の火を消して、眞暗闇にして置いて、あの幸右衛門さまを寄越し申せば、人に見らるゝ氣遣ひはないが、なんと、文珠であらうがな。

清瀧　こりや好い思ひ附きぢやわいの。そんなら、この行

燈の灯を消し、暗い所で逢ふのかいなア。

六助　オヽヨ。誰れにも顏を合はさぬやうに、暗い所で逢はつしやりませ。

ます　エヽ、忝ならござりまする。そんなら爰に待つてゐれば、幸右衛門さんに逢はるゝかいな。

六助　逢はれるとも〳〵。たつた今この譯を云うて、あの旦那を爰へ寄越しませう。

ます　そんならお前を頼んだぞえ。

六助　必らず待つてござりませ。

兩人　合點ぢやわいなア。

六助　さらば旦那を

ト行燈を吹き消し

寄越しませうか。

ト唄になり、暗闇の思ひ入れにて、六助、奥へ入る。この唄のうち、奥より以前の形にて清左衛門坊主、暗闇を探りながら出て來る。おます行き當る。おます、清左衛門が手を取つてその手を戴き

ます　幸右衛門さまでござりまするか。此やうな嬉しい事があらうかいな。先刻にお目にかゝりましたる時は、云ひたい事もよう云はず、心がかりでござりましたが、斯ういふ首尾で我が君樣に、お目にかゝるはこの身の本望。何にも申しませぬ、頼朝どの、エヽ、有り難うござりまする。

ト手を取つて喜ぶ思ひ入れ。清左衛門坊主、肝を潰す。清瀧、暗闇を探り、清左衛門に行き當り、直ぐ、清左衛門が手に取りついて

清瀧　頼朝どのでござりまするか。私し事は、御父左馬頭義朝公の御最期まで、お側に附き添ひ居りましたる、鎌田兵衛政清が娘、清瀧でござりますわいなア。

ト清左衛門、悧りする。

あなた樣のお行くへをもお尋ね申し、何卒お主の敵、父さんの仇、長田の太郎を、一太刀なりとも討ちたいと思ふは、せめても武士の娘。これまで憂き目に合ひましたも、我が君樣の御在所を尋ねんものと、この身一つ、世に存らへて居りましたわいなア。

ます　コレ申し、頼朝さま。暗うてお顏を見ませねども、モシ〳〵、わたしが父さん、あの北條の四郎時政どのにも、あなたにかね〴〵、お心を運ばれ、もし御開運の思し召し立ちあるならば、あの兄さんの義時さままで、お身方に參らんとて、後の印に、コレ〳〵。

ト懷より錦の袱紗に包みし三鱗を出して
これこそは時政が家に傳はる所の重寶、江の島辨才天より授かり給ふ三鱗。政子が手より頼朝さまへ、お渡し申すやうにと、わざ〳〵參りましたわいなア。
ト袱紗包みの三鱗を清左衛門坊主に渡す。清左衛門、受取り、戴いて懷へ入れる。
清瀧　斯やうにお目にかゝるさへ、人目を遠慮の身の上ゆゑ、時政さまの御息女、政子の前さまを姉ぢやと申し、わたしが姉になりまして、もしや知る人あらんかと、心遣ひを致しまして、斯やうな折から、我が君樣に、お目見得申し上げまするも、主従の縁も盡きぬかと、此やうな有り難い事はございませぬわいの。
ます　申し、頼朝さま。なぜに物は仰しやつて下されませぬ。コレイナア、頼朝さま、なぜ物仰しやつて下さりませぬ。
清瀧　どうなされてござりまする、幸右衛門さま。我君樣、お詞を下し置かれませ。
ます　コレイナア、物仰しやつて下さりませい。
清瀧　お詞を下されませい。
ト　おます、清左衛門が體を段々探つて見る。清瀧も合點のゆかぬ思ひ入れにて、段々探つて見て、清左衛門が頭を撫で、恟りして
ます　ヤヽ、こりや我が君ではないわいなア。
清瀧　オヽヽ、幸右衛門さんぢやないわいなア。
兩人　エヽ。
ト驚ろく。この合ひ方のうちに、奧より幸右衛門、手燭を持つて來る。この灯にて何れも顔を見合せ、恟りして
ます　エヽ、お前が幸右衛門さまかいなア。
幸右　爰にどうして居たのぢやぞ。
清瀧　オヽ、人違ひであつたか。ホイ。
清左　さらば奧へ參らうか。
ト清左衛門云つて行かうとする。清瀧ツカ〳〵と寄つて、清左衛門を引留め
清瀧　待つた、御出家樣。
清左　愚僧に用でもござんすかの。
清瀧　ある段ぢやござんせぬ。
清左　あんたる用だか聞きますべい。
ト　ぶッ坐つて、煙草をのむ。
ます　モシ〳〵、幸右衛門さん、暗闇紛れに人違ひして、

あの父上より送られたる、家の重寳三つ鱗を、あの御出家に渡しましたわいなア。

幸右　ヤ、、、。あの三つ鱗を。

ます　アイ、渡しましたわいなア。

幸右　ある事〳〵。暗闇の人違ひ、心の附かぬは女の情。取返さうと思うても、それと云はれぬ其方の身の上。また料簡もあらう程に、必らず何も云ふまいぞ。

清瀧　そればかりでもござりませぬ。人違ひしてわたしまで、この身の願ひを云うたわいなア。

幸右　それもある事ぢや程に、何も其やうに驚ろく事も、騒ぐ事もない程に、マア〳〵、何ぢやあらうと、我れらに任せて、急かぬものぢや〳〵。

ます　イエ〳〵、さうぢやござんせぬ。人手へ渡してそもやそも、どう云ひ譯があらうぞいなア。たつた今、取返して、あなたへお上げ申しませう。

ト清左衛門が側へ寄らうとする。

幸右　コレ〳〵、それはどうしたものぢや。たかゞ、其方の身の上は、今宵のうちに幸右衛門と、祝言の杯して、假にも女夫になるならば、其方の願ひは叶ふぢやないか。何ぢやあらうと、我れらに任せて置きやいなう。

ます　そんならお前と、今宵のうちに

幸右　祝言の杯せう。

ます　エ、、忝なうござりまする。

ト云ふうち清瀧、帶を締め直して

清瀧　人違ひしてこの身の上を、云うたは女の淺はかなれど、聞かせたからは一大事。よう安穩で置かうかいなア。

幸右　コリヤ〳〵。それは何を云ふのぢや。人違ひしたはその身の麁忽。人に怨みがあるものか。マア〳〵おれに任せて置きや〳〵。

清瀧　それぢやと云うても。

幸右　大事ない。

清瀧　イ、エイナア、この事ばかりは。

幸右　云うても云はいでもの事を。ハレ、箆棒もない。なんであらうと、其方の願ひは幸右衛門が心にある。我れらに任せ、奧へおぢや。

ます　そんなら、姉さん。

清瀧　妹、おぢや。

ト唄になり、おます寄らうとするを、清瀧とめ、清瀧寄らうとするを、おます隔てゝ、連れ立ち、奧へ入る。

清左　ドレ〳〵、我れらも奧へ參らうか。

ト行かうとして立戻り

イヤ〳〵、行かれないわえ。おれが方に覺えない、北條の四郎時政が重寶、この三つ鱗、持つて居たとて三文にもなるまい。こりやア今夜の宿賃に、御亭主へ遣りますべいか。サア〳〵、受取つて置かつしやい。

ト懐より出して置く。

幸右　どう云ふ譯か知らねども、今宵お宿を申したる、一禮とあるからは、申し請けぬも叉異なもの。幸右衞門、申し請けませう。

ト袱紗のまゝ取上げる。淸左衞門その手を取つてひッたくり

淸左　太い野郎ぢやアないか。うぬに渡してよいものか。

幸右　その三つ鱗は。

ト取らうとする。

淸左　これが欲しいか。べかッこう。惡い者の手に入つたと思へ。この三つ鱗は時政が家の重寶。おれに渡したあの女めは、北條が娘の政子の前。八牧の判官兼隆が女房にする筈を、何の某といふ奴めが乳繰り合つて、八牧めをあげ壺。これからおれが金儲けは、この三鱗を持つてかッ走つて、八牧の判官へ訴人すりやア、その男めはキッとした間男。たつた今、あの女めも繩目の恥に遭ふべい程に、吠え面かはいて、待つてけつかれ。

ト行かうとする。幸右衞門立廻りにて、引留め

幸右　これはどうでえす。御出家ではごんせぬか。訴人をするの、金儲けのと、在家の者ではあるまいし、其やうな人の難儀になる事を、云はぬものでえす。

淸左　落ちつくなえ〳〵。外の者なら格別、この賴朝と云ふ奴は、イケづう〳〵まぢ〳〵と、面はのつぺりとしてけつかるが、土性骨の知れない奴、お身様も聞いて置きやれ。先づ、びんぞろに伊藤入道が、娘の辰姫とやらとどれ合つて、すんでの事に臺座後光を見る所を、伊藤九郎に助けられ、やかばねを出奔。それもうぬばかり帆をかける事か、伊藤が娘、その辰姫をひッ攫つてうしやアがつたが、今ぢやアどこにどうしてけつかるやら。その後聞きやア、命を惜しがつて、まだこの伊豆の國にかゝんでけつかると云ふ事だが、なんと不便な事ぢやアないか。今は食ふ事もならない樣で、時政が娘の政子の前と、戀慕れゝつとは沙汰の限りの大べらぼう。こんな奴は見せしめに、間男にして引出すがよい。お身様も待つて居やれ。褒美の金を分けてやるべい。退きやれ〳〵、

ト行かうとする。

幸右　ハテサテ、其やうに急かぬものでえす。人の命を助けるが、出家の役ではごんせぬか。この雪に酔狂らしい、八枚の判官へ訴人するなぞとは、さりとは野暮な事でごんす。ア、、どうぞこの客僧を泊めたいものぢや。

ト幸右衛門、扇箱より扇を出して、有り合せたる硯箱にて、中筆に戀といふ字を書く。

清左　おきやれ〱。お身様がやるまいと云つても、これ見やれ、おれ様がお御足でおひろひなされて行らつしやるソ。どう留めたとて行かずに居べいか。

ト突き退け、行かうとする。幸右衛門、舞臺先の雪の中へこの扇を立てる。清左衛門ヂロ〱見て

こりやマアなんだ。扇に字を書いておツ立てたが、思ひつきでもない。さらば訴人に行くべいか。

幸右　客僧、それをお見やれ。

清左　こりやアなんだ。

幸右　一字を書いたれば、取りも直さず鳥羽の戀塚。戀塚と云ふ關を据ゑたれば、滅多に爰は通られまい。

清左　何が、どうした。

幸右　老いたるも、若きも、智あるも、愚なるも、彼の惑ひ捨て難く、渡が妻の袈裟御前を討つて、輪廻を離れたる、戀と云ふ字の墨衣。滅多に爰は通られまい。

清左　ナニ、この扇が戀塚とや。

ト清左衛門その扇を取つて

一首を殘せし袈裟御前の最期、露深き淺茅が原に迷ふ身の、いと〻闇路に入るぞ悲しき。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト清左衛門思ひ入れ、ホロリとする。

幸右　朝に紅顔あつて世路に誇れども

清左　暮に白骨となつて郊原に朽ちぬ。

ト清左衛門思ひ入れ、以前の白骨を出す。

幸右　蓮の骨、哀れは美女の骸かな。よもやこれでは行かれまい。

清左　骸に恥を曝らせしは、故左馬頭義朝が白骨。なんと、哀れな樣ぢやアないか。

ト幸右衛門に投げて渡す。幸右衛門直ぐに取上げ、押戴きて、キッと見て、無念なる思ひ入れ。

幸右　一定とは知らざれども、この髑髏が義朝公とや。御身は下野の守たりし時、頼朝未だ十歳にて、御憐みの深き餘り、鬼武者とその名を呼ばれ、御膝の上に据ゑら

れ、愛し給ひし報いにや、いま、御髑髏をこの如く、膝の上に取上げて、見奉るは涙の種。世の盛衰とは云ひながら、淺ましき父の御有樣ぢやなア。

トむせび入つて泣く。

清左　その白骨を見ては

幸右　無念とも

清左　口惜しいとも

幸右　思へば〳〵、いかいたわけの。

清左　もう好い加減に本心を明かしやれ。

幸右　我れらは明かす本名なし。先づ客僧から、お明かしお明かし。

清左　俗稱を明かさずば、おれが方から聞く事はない、たつた今、名乘らせてくれべい。この白骨こそ義朝が白骨、わが見る前で踏み碎いてくれべいか。

ト白骨を踏まうとする。幸右衛門その足に取りつき

幸右　待つた。

清左　なぜ留める。

幸右　サ、これは。

清左　義朝に由緣の者か。

幸右　サア、全く由緣はなけれども、義朝公は何人、六孫王の末葉ならずや。その位内大臣、正二位に贈位し給ひし、いとやんごとなき御方の、白骨にもせよ御頭を、凡夫の身を以て、土足に掛けんとは慮外者めが。

ト突き放す。直ぐに淸左衛門、幸右衛門が側へにじりより

清左　本心を明かせ。

幸右　手蹟指南の幸右衛門に

清左　本心はないか。

幸右　勿論々々。

ト直ぐに淸左衛門、幸右衛門を引寄せて、白骨にて打ち据ゑる。幸右衛門その手を取つてキッと思ひ入れ。

こりや何ゆゑに打擲なしたぞ。

清左　この白骨の打擲は、取りも直さず、義朝が折檻。義兵を擧ぐる心もなく、あつか茫然と命を惜しむ臆病者。打擲なしたが誤まりか。おらアあんまり誤まりぢやアござるまいかと存ずる。

ト打ち据ゑ

グッとでも吐かして見ろ。

幸右　どうとも吐かさぬ心。例へ賴朝なればとて、義兵なぞとは思ひも依らぬ。一日なりとも雪でも見て、酒でも

飲むが、樂しみ〳〵。

清左　どう云へば斯う云ふと、いよ〳〵それが本心なら、側へ賴朝と名乘つても、人間の數ぢやアない。いゝワ。この世から畜生道へ落してくれべい。コレ〳〵、雲に好いものがあつた。

ト六助が脫いで置いた皮足袋を取上げ、幸右衛門が頭の上に載せる。幸右衛門その足袋を取つて見て、こなし。

清左　無念なるか。

ト立ちかゝる。幸右衛門思ひ直して足袋を頭の上に置き

幸右　いつそ畜生も、まし〳〵。

清左　畜生と云はれても、口惜しいとも思はぬとは、イケ業曝しめ。もつと仕樣がありさうなものだ。ある〳〵。あの雪は諺に云ふ犬の伯母樣。犬つくばひにつくばらせて喰はせる程に、そこにさうして待つてけつかれ。

ト盆を持つて門口の雪を取りに行く。

幸右　地を走る獸、空を翔ける翅まで、親子の哀れは知るものを、況んや佛體。

トこれを云ふうち淸左衛門、雪を持つて來て、幸右衛門が顏を見て、試す思ひ入れあつて

清左　サア、その雪を喰へ。

幸右　アノ、この雪を。

清左　ソレ、この雪は會稽の雪。

トきつと云ふ。幸右衛門、頭の足袋を取つて

幸右　なんと。

清左　雪にすゝぐの訓あれば

幸右　今の恥辱をすゝげとや。

清左　源淸き雪の謎。

幸右　我が本心も

清左　我が胸も

幸右　解ける時節を

ト白骨も三鱗も幸右衛門に打ちつけ

清左　待ち召されい。

ト唄になり、淸左衛門、思ひ入れあつて奧へ入る。幸右衛門あと見送り居ると、この唄のうち、淸瀧、おますを連れて出て來る。

ます　幸右衛門さん。

清瀧　今の樣子を

幸右　コリヤ、何も云ふまいぞ。察するところ、あの客僧

こそ慥かに文覺。今宵のうちには。今宵のうちと云へば、コレ／＼、聞いてたも。あの辰姫の心が直つて、其方と祝言させうと云うたわいの。

ます　エヽ、そんなら何と云はしやんす。あの辰姫さまのお心が直つて、今宵わたしとお前と、アノ祝言を。

幸右　オイノ。取持たうと云うたわいの。

ます　そりやマア夢ではないかいなう。

清瀧　わたしやどうも、合點がゆかぬわいなア。

幸右　イヤ／＼、政子が事を氣の毒に思うて、今宵のうちに、祝言させうと云うたに違ひはないわいの。

清瀧　それ程に云はしやんす事ならば、よもや違ひはござんすまいわいなア。

幸右　サア、それぢやに依つて、あの辰姫とこの政子を、隔てぬ心をいふは、コレ／＼、この三つ鱗をあの辰姫へ預けて置き、この大切なる父上義朝公の御髑髏を、政子が代りに、清瀧へ此まゝ預ける心ぢやわいの。

ます　そんなら、何と仰しやりまする。お心の直つた辰姫さまへ、時政が家の重寶、辨才天より授かり給ひしあの三つ鱗を、お預けなさるゝお心かえ。

幸右　それ／＼。悋氣嫉妬の心の深いあの辰姫へ、意見の爲に、この三つ鱗を、わしは預ける心ぢやわいの。

ます　そりやようござんせうわいなア。

幸右　又この髑髏は、野間の内海にて御最期ありし、義朝公の御髑髏。政子の前へ預けたけれど、清瀧が事は、鎌田兵衛政清が娘とは云へども、實の親は父上の敵、長田の庄司が娘。例へ主從敵同士となつたればとて、河津の三郎が縁につながる、白拍子の風折。彼れこれ思うて、これまでの志しに免じて、隔てぬ心のこの髑髏、清瀧へわしは預ける心ぢやわいの。

清瀧　有り難うござります。御父義朝公を討ち奉りし長田が娘、お側を遠ざけられましても、申し譯なきわたしが身の上。養ひ親の鎌田兵衛政清が事も思し召され、又一つには赤澤山にて、敢へない最期を遂げましたる、河津が事も思し召して、大切なる義朝公の御髑髏を、この清瀧へお預けなされて下されまするとは、エヽ、有り難うござりまする。

幸右　それと云ふも辰姫が、今宵政子の前と祝言させうと云うたゆゑ。コレ／＼、この三つ鱗を其方へ渡して置く程に、あの辰姫へ意見の爲ぢやと云うて、其方の手から預けてたも。サア／＼、三つ鱗を渡して置かう。

清瀧　ハイ〳〵、お預け申しませう。

幸右　又この骸は大切なる義朝公の御白骨。これに其方へ。

ト戴いて清瀧へ渡さうとして、袱紗の書附けを見て

ヤ、、、。合點のゆかぬ。この袱紗の書附けを見れば、俗名長田の庄司と書いてあるからは、そんならこの白骨は、誠父上義朝公の髑髏ならず。某が心を引き見ん爲、敵長田が白骨を、義朝公の髑髏にして、持參なせしか。訝かしい。

清瀧　エ、、そんならその白骨が、アノ長田の庄司が髑髏でござりまするかえ。

幸右　如何にも。いづれにしても其方の由緣。今宵樣子の知れるまで、清瀧へ預けて置かうわいの。

ト白骨を清瀧へ渡す。清瀧戴いて思ひ入れ。

清瀧　怨めしいと思ふも親の長田どの。懷かしいと思ふも親の庄司どの。この髑髏を見るに附け

幸右　今宵はめでたく祝言の夜。

ます　千代も變らぬ逢ふ夜の始め。

幸右　何も云はずと、此方へおぢや。

ト唄になり、幸右衛門、おますが手を引く。清瀧三つ鱗と白骨を持ち入る。この唄のうち、下座より下女お縫、六助が胸づくしを取つて出て來る。六助、やつしの上に麻上下を着て、引摺られて出て來る。直ぐに胸づくしを振り廻して

六助　どうするのぢや〳〵。

ぬひ　聞えぬわいな〳〵。

六助　急かずと譯を云やいなう。

ぬひ　譯を云うたら、六助さん、お前、わたしへ立つまいがの。それ覺えてゐやんしよが。こなたの旦那へ、わたしが目見得に來た時に、飯についたぢやござんせぬか。その時おかみさんのお椀を拭く時、ソレ何やらが氣に入つて、チッと目と目を見合せたが、斯うなる始めがわたしの因果。その時、お前が云はしやんすには、今まで何所に居たとの事、わたしや隱さず、三ツ物屋へもかたづくな、誓願寺前の煮賣り屋にも居たと云うたれば

六助　まだそればかりぢやござるまい。新石町の中程に、松本と云ふ茶店に、其方の居やつた時、大師參りの歸りがけ

ぬひ　寄らしやんしたを覺えて居て、それ覺えてか、ズッと差出す茶臺と茶碗。

六助　手先へ指が觸つたが

ぬひ　濡れの始めの
六助　緣の端。
ぬひ　コレ〳〵、その時、お前に貰うたる
六助　紙煙草入れは
ぬひ　コレ、爰に。
　ト大きな紙煙草入れを出す。
六助　錢と楊枝と齒磨と
ぬひ　大津の畫があつたぞえ。
六助　それを今まで
ぬひ　身に添へて
六助　持つて居たとは
ぬひ　盡きせぬ緣。
六助　深い二人が
兩人　仲ぢやなア。
ぬひ　聞えぬわいな〳〵。わたしがお前に心中は、コレ幕明きからまだ一度も、わたしやさまよと云はぬわいな。さまよと云ふは、こちの人、六助さまよと云ひたいばかり。ソレ、わたしを疑はしやんす、お前のさまよが心が聞えぬさまよ。
六助　尤もぢや〳〵。其方の厚い志し、どうして憎う思ふものか。コレ、ほんぼんの女房ぢやぞや。
ぬひ　そんならお前はこちの人。
六助　女房ども。
ぬひ　オヽ、さまよ。
　ト抱きつく。
六助　時に、早速聞きたいは、其方を賴んだ納戶の押入れ、簞笥の中の軍令狀。盜んでくれたか。どうぢや〳〵。
ぬひ　いとしいお前のお賴みゆゑ、戀の盜みに貧の歌。コレコレ、盜んで置いたわいなア。
　ト懷より墨附きを出し
定めてこれが、賴朝の軍令狀であらうわいな。
　ト六助に渡す。淸瀧、後へ出て、見て居る。
六助　エヽ、有り難い。忝ない。コレ〳〵、この軍令狀を盜み取らん爲ばかり、この家の內へ入込みし猿島平太國景。我が手に入りしは、宗盛公へこの上の手柄はない。出かした〳〵。さりながら、これが誠の軍令狀やら、コレ、無筆と云ふものは、情ないものではある。コレ〳〵、そもじはこれが讀まれるか。どうだ〳〵。
ぬひ　恥かしい事でござんすが、わたしや矢ッ張り無筆ぢやわいなア。

六助　そんなら其方も、同じ無筆か。
ぬひ　イエ〱、わたしやいの字と仙の字ばかり知つて居るわいなア。
六助　そりや又、どうして〱。
ぬひ　あのひつぺがしで覺えたわいなア。
六助　そんならこれは讀めまいか。
ぬひ　どうしてマア。
六助　これは又困つたものではないか。斯ういふ所へ誰れぞ來て、讀んでくれるものはないかの。
ト此うちに清瀧わざと目にかゝるやうに六助が前を通り、花道へ行かうとする。
コレ〱、こなさんは先刻の、お女中ぢやないかいなう。
清瀧　なんぞ用でもあるかいなう。
六助　サア、近頃慮外な事ながら、頼みたい事がごんす。なんと、ちつと頼まれては下んすまいか。
清瀧　ちつと此方に急ぎの用がござんすが、つい濟む事なら、云うて見さしやんせ。
ぬひ　そんなら聞いておくれるか。
清瀧　モシ〱、わたしや此やうに見えてもな、聞いた事でも、見た事でも、つい忘れてしまふが生れ付き。薄鈍な者ぢや程に、むづかしい事なら、あやまるぞえ。
六助　そんならこなさんは、見掛けと違うて、見た事も聞いた事も、つい忘れてしまふが生れ附きでごんすか。
清瀧　つんと覺えが悪いわいなア。
六助　此方の爲には、幸ひ〱。そんならちよつと頼みたい。
清瀧　マア、その用と云ふはえ。
六助　外の事でもごんせぬ。なんと、讀んで見て下んすまいか。
清瀧　わたしや讀んでも覺えぬぞえ。
六助　それが此方の幸ひでごんす。
清瀧　わたしが讀むものは、なんぢやいなア。
六助　わしも何やら知らねども、先刻に下田の坂下に、落ちてあつたるこの書附け。こりやマァなんだか、見て下んせ。
ト清瀧へ渡す。清瀧見て恟りして、思ひ入れあるべし。
ぬひ　早う讀んで聞かせて下さんせいなア。
清瀧　さて、むづかしく書いてあるワ。何の事ぢやか。
兩人　聞きたい〱。
清瀧　オヽ、忙しない。讀むわいなア。ナニ〱「わざわ

ざ一筆啓上、申し參らせ候ふ。」

兩人　その後は、なんと〳〵。

淸瀧　「然れば內方に居り候ふ者」

兩人　居り候ふ者

淸瀧　「六助と申す者は、平家の侍ひ猿島平太と申す者にて候ふまゝ、御油斷なされまじく候ふ。」

六助　ヤ、、、で。そんならその書附けに、六助と云ふ者猿島の平太と、アノ本名まで書いてあるかいなう。

淸瀧　コレ〳〵。爰にしかも立派に書いてあるわいなア。

六助　オ、、、。こりやマアどうした事ぢやぞいの。

ぬひ　オヤ〳〵。どうせうの。

六助　その後は〳〵。

淸瀧　「不義はお家の法度ゆゑ、もし色事でも致し候はゞ、女も男も縛りお討ちなされべく候ふ、めでたくかしく。」

六助　ヤ、、、。そんなら、不義はお家の法度ゆゑ、縛り首を討てと、マア、その書附けにあるかいの。

ぬひ　そんならわたしとお前の仲は、添はれぬやうになつたかいなア。ハア。

ト泣く。

六助　コレ〳〵。宛名は、何と〳〵。

淸瀧　ドレ〳〵、「めでたくかしく。幸右衞門さま參る、宗盛より。」コレ〳〵、宗盛さまからのお文ぢやわいなア。

兩人　エ、。

ト大きに驚ろく。

淸瀧　サア〳〵、此やうな怖い書附けは、其方へ取つて置かしやんせいなア。

ト差出す。六助、身慄ひして

六助　コレ〳〵。其やうな氣味の惡い書附けが、どうして取つて置かるゝものぢや。こなさんにやらうわいな。

淸瀧　どうしてマア此やうなものを、貰うてよいものでござんすかいなア。こなさん、早う持つて去んで、幸右衞門さまへ上げさんせいなア。

ト書附けを出す。六助かぶりを振つて

六助　コレ〳〵、幸右衞門さまへ上げて堪るものか。早う其方へ持つて行つたがよい。こりやマア情ない事ではある。

ぬひ　モシ〳〵。好い料簡がござんすかいなア。

六助　あの書附けを聞いては、早速智慧も出ぬわいの。

ぬひ　そんならわたしや、どうせうぞいの。

六助　コレ〳〵、其方は早う下田の七軒町へ行つて、駕籠

を二挺拵らへて置きや。今宵のうちに沼津の方へ逃げようわいの。
ぬひ　そんならわたしも、お前と一緒に行くのかいなア。
六助　ハテ、知れた事。未來も變らぬ女房ぢやもの。
ぬひ　よう云うて下さんした。
六助　そんならお縫。
ゐひ　こちの人。
六助　早う行きや。
ぬひ　さまよ。
ト通り神樂になり、お縫、向うへ走り入る。六助下座へ入る。清瀧あとを見送つて
清瀧　コレイナア、この書附けを其方へ持つて行かんせぬかいなア。此方に置いては氣味が惡いわいなア。
トあたりを見廻し
思ひも依らぬ頼朝公の軍令狀。これを平家へ渡しては、御身の大事となるものを、危ふい事であつたわいなう。
ト思ひ入れ。合ひ方になり、奥より彌次兵衛出て來て、清瀧が側へ寄り、ちよつと軍令狀を見る。清瀧顔見合せ
彌次　こなたは誰れだよ。
清瀧　わたしやわたしだが、お前は誰れぢや。
彌次　わしやア爰の内の大屋様だ。
清瀧　アノ、お前が大屋様かいなア。
彌次　そしてこなさんは、どつちからござつたぞ。
清瀧　わたしやあつちから來たわいなア。
ト指をさす。
彌次　そんならあつちから。
清瀧　アイ。
彌次　合點のゆかぬ女の所體ぶり。時政の娘政子の前は、當國の目代、八牧の判官兼隆さまの奥方に極つたるところに、流人頼朝と乳繰り合うて、兼隆さまを嫌つて、頼朝へくツついて、今夜この所へ來たとの事。ついに見慣れぬ形ふりで、目褄にかゝりやア只は置かれぬよ。お身様も用心して居やれ。
清瀧　おいておくれ。ナンノ、別にこちらが知つた事ぢやござんせぬ。頼朝さまであらうが、政子さまであらうが、ついしか逢うた事もないお方ぢやわいなア。
彌次　慥かに今のは軍令狀。
清瀧　どうしたとえ。
彌次　女中、こなたは何者だ。

清瀧　わたしや何やらであつたわいなア。オヽ、それ〳〵。まだ獨り身でござんすに依つて、男が欲しさに、誰れなりと、わたしがやうな鈍な者でも、女房にさへ持つて下さんす男があらば、夫に持たうと、それを尋ねに來たのぢやわいなア。
彌次　そんなら男が欲しさに、尋ねに來たといふのか。
清瀧　アイ、どのやうな男でも、可愛がつてさへ下さんすりや、わたしや男に持つ氣ぢやわいなア。
彌次　それでも望みがあるであらう。
清瀧　アイ、ちつとは望みがあるわいなア。
彌次　そりやアどんな望みがあるのだな。
清瀧　わたしが望みは、苦みのある、中丈で、瘦せ形男が望みぢやわいなア。
彌次　して、商賣は商人か。職人か。
清瀧　イエ〳〵、商人でもなし、職人でもなし、どうやら處で、口もきかんす男が、望みでござんすなア。
彌次　そんなら此方に心當りの男があるが、なんと相談して見る氣はないか。
清瀧　そりやマア嬉しうござんすが、して商人か、職人かえ。

彌次　商人でも職人でもない、芝居ですれば惡い役だが、下田の町の大屋樣よ。
清瀧　そりやマア耳寄りでござんすわいなア。
彌次　男はちつと臺は立つたが、しかも瘦せぎすで、下田千軒で小口もきく男だが、それを亭主に持つ氣はないか。
清瀧　そりやマア注文はようござんすが、なんぞ藝でもあるかいなア。
彌次　藝といつちやア何もないが、鞠をちつとばかり蹴て、揚弓がきつい好きよ。
清瀧　そんなら色事があらうわいな。
彌次　インニヤ、色事もこの頃まで吉原から「半兵衞さま參る」と云ふ文も來たが、今は眞面目の生男サ。
清瀧　そりやマア見たいものぢやの。
彌次　その男を見せうか。
清瀧　そりやマア遠い所かえ。
彌次　インニヤ、近い所サ。
清瀧　どこぢやえ。
彌次　ツイそこらサ。
清瀧　そこらとはえ。
彌次　ツイ側よ。

彌次　側とはえ。
清瀧　鼻の先。
彌次　どこぢやな。
清瀧　爰サ。
彌次　爰とはえ。
清瀧　その男は。
彌次　男は。
清瀧　おれよ。
彌次　そんならお前かいなア。
清瀧　どうだ〳〵。氣はないか。
彌次　あるわいなア。

ト彌次兵衛に寄りかゝる。

彌次　そりやマアほんの事か。

ト引寄せて抱きつく。

清瀧　ほんの事でならうてわいなア。お前が男になつて下さんすと、わたしや此やうな嬉しい事はござんせぬわいなア。
彌次　おれもそもじのやうな女房を持てば、こんな有り難い事はない。
清瀧　そんなら、なつて下さんすか。
彌次　下さらないでどうするものだ。
清瀧　そりやマアいつの事。
彌次　今。
清瀧　どこでえ。
彌次　爰で。
清瀧　オヽ、恥かし。

ト彌次兵衛に抱きつく。彌次兵衛、清瀧を突き退ける。

彌次　寄りやアがるな。
清瀧　エヽ。

ト起き上がる。拍子に、懐より以前の白骨を取落す。

彌次　太い女めぢやないか。今時分、うぬらに騙されてつまるものか。詮議がある。動きやアがるな。
清瀧　そんなら、今云はしやんしたのは嘘かいなア。
彌次　ほんの事で堪るもるか。
清瀧　そんならわたしは騙されたのぢやな。
彌次　知れた事よ。
清瀧　さうぢや。南無阿彌陀佛。

ト有り合せたる庖丁を取つて、自害せうとする。彌次兵衛驚ろき留めて

彌次　待て〳〵。早まるな〳〵。

清瀧　イエ〱、放して下さんせ。女の口から恥かしい事云うて、どうしてこれが生きて居て、お前に顔が合されう。放して下さんせ〱。

彌次　コレサ〱、早まるまい〱。

清瀧　死なねばならぬ〱。

ト清瀧、嘘に自害せうとする。彌次兵衛は眞面目に留める。これを爭ふうち、清瀧が持つてゐる庖丁にて彌次兵衛が指を切る。この血汐白骨へかゝる。兩人顏見合せて驚ろき、兩方へ立退く。

エヽ、わたしが麁相で、お前の指を切つたわいなア。

彌次　切つても大事ない〱。これぱかりの疵は、烟草を附ければツイ癒る。危ない程に、庖丁を捨てたがよい。

清瀧　堪忍して下さんせえ。

ト白骨を見て驚ろく。

オヽ、こりや大切なるこの髑髏へ、お前の血汐がかゝつたわいなア。どうせうぞいなア。

トうろたへて白骨を取る。薄ドロ〱になる。清瀧思ひ入れあつて

合點のゆかぬ。たつた今、この白骨へ主の血汐がかゝると思へば、コレ〱、血汐に染みし痕もなう、かゝりし血汐の浸み込みしは、常々聞いたる父さんのお話し。親子兄弟の印には、年月たつても白骨へ、血汐の染むる一つの不思議。さてはお前は、長田の庄司忠宗さまの惣領子、長田の太郎景宗さまかいなア。

彌次　なんと。

清瀧　コレこの白骨は、長田の庄司さまの白骨。この白骨にお前の血汐が浸み込んだからは、疑ひもない親子の證據。サア、有やうに云うて聞かせて下さんせ。

彌次　待て。庄司どのゝ白骨に、おれが血汐浸み込みしか。

清瀧　疑ひもない親子の印。太郎どのであらうがの。

彌次　コレ、滅多な事を云ふまいぞ。そしてお主は何者だ。

清瀧　わしが誠の親といふは、長田の庄司忠宗さま。少さい時に貰はれ、養ひ親は誰れあらう、義朝公の身内に於て、鎌田兵衛政清さま。長田太郎どのゝ妹、少さい時に別れたる、わたしや清瀧でござんす。

彌次　ヤヽ、ヽヽ。そんなら話しに聞き及んだ。たつた一人の妹は、鎌田が養女となつたると、父の話しに聞いたれども、幼少ゆゑに面は知らず。さては其方はおれが妹。

清瀧　清瀧と云うたは、わたしぢやわいなア。

彌次　ヤレ、懐かしや妹か。
清瀧　長田の太郎さまでござりますか。
彌次　清瀧。
清瀧　兄さん。
彌次　不思議な所で
兩人　逢うたなア。
　ト入れ替つて思ひ入れ。二階の障子屋體の内にて
幸右　新玉の年の三歳を待ち詫びて
ます　只今宵こそ新枕すれ。
彌次　ヤア、あの聲は
清瀧　我が君様。
彌次　來い。
　ト唄になり、清瀧を引連れ、奥へ入る。チョン／＼にて二階の障子上がる。この内に絹の夜着蒲團の上に幸右衛門、杯を持つて居る。おます酌をして居る。
ます　夢見たやうな今日の祝言。此やうな嬉しい事はござんせぬわいなア。
幸右　その筈／＼。これといふも辰姫が志し、必らず忘れぬがよいぞや。
ます　アイ／＼。あの辰姫さんのお心が、わたしやどうもお氣の毒ちやわいなア。
幸右　なんの／＼。サ、色直しの杯は、我れから始めて、姫君へ差上げうか。
ます　戴きませうか。
　ト合ひ方になり、幸右衛門、おますに杯をさすうち、奥よりおふじ實は辰姫、鏡臺を持つて出て來る。
辰姫　いろ／＼な事があつて、今日は髪さへ取上げぬわいな。今宵は政子さまと頼朝さまの、めでたい御祝言に、此やうに取亂しても居られまい。ドレ、わざと櫛を入れようかいなア。
　ト鏡臺に向ひ、髪を梳かうとして、鏡の内を覗き、ニツコリとして
あのマア政子さまの、嬉しさうな顔わいなア。さらば髪を
　トまた鏡を見て
頼朝さまには、たんと酒を上がつたやら、きつうお顔が赤うなつたわいな。
幸右　コレ／＼、政子。大分寒うなつたではないかの。ササ、寝ようではあるまいか。ドレ／＼、我れから帯を解きませう。

ト立つて帶を解く。辰姫、鏡の中を見て、髮を梳きかけ

辰姫　賴朝さまには、もうお鎭まるさうなわいな。

政子　そんならわたしも帶を解かうかいな。

幸右　勿論々々。

政子　どうやら氣が改まつて、恥かしいわいな。

ト辰姫髮を梳きかけて

辰姫　政子さんにも、もう寢さんすさうなわいなア。

幸右　サア〳〵。爰へおぢや〳〵。

政子　そんならお免しなさんせえ。

トおますの政子、中へ入る。幸右衞門、夜着を政子にかけて

幸右　今宵斯うして寢るからは

政子　未來も變らぬ

幸右　女房ども。

政子　我が夫。

幸右　寢やいの。

政子　オヽ、恥かし。

トこなし。幸右衞門寢る。

辰姫　アレ〳〵、寢やんしたわいなア。

ト障子をぱつたりと下ろす。矢張り合ひ方。

二階の障子がたつたわいなア。さぞ政子さまには嬉しうござんせうわいなア。もうこの辰姫は、さつぱりと悋氣せぬ氣になつたに依つて、例へあのやうに帶紐解いて寢やしやんしても、ちつとも大事ないわいな。人の心といふものは、持ちやうが惡いと、つい腹の立つ事があるもの。此やうにさつぱりと悋氣する氣のないといふは、をかしいものではあるわいなア。

ト立つて二階の障子内を、つく〴〵見て思ひ入れあつて

モウ〳〵、どのやうな事があつても、腹は立たぬ〳〵。オヽ、寒々。あの障子の内では、今まで積る思ひの數々、しつぽりと話してゞあろ。ドレ〳〵、髮を撫でつけてしまはうか。

ト誂らへのメリヤスになり、鏡臺に向ひ、髮を撫でつける。此うち二階の事を思ひ出して、段々腹の立つ思ひ入れあつて、幾度も思ひ直す事あるべし。唄一くさり切れると合ひ方。

こりやモウどうも堪えられぬわいの。なんぼ心で心に意見しても、思ふまい、云ふまいと思うて見ても、アレ、

あの二階で、我が君様と政子の前さま、あのやうにして、寢て居やしやんすあの樣子を見ては、腹が立つて〳〵。

ト行かうとして胸を摩り

イヤ〳〵、云はぬ筈ぢや。此やうな心になつては、あなたのお爲にも、この身の爲にもならぬに依つて、こりや料簡をするがよいわいの。此やうな時は、それ〳〵、酒でも飲んで心を晴らすがよい。幸ひ爰に銚子杯、さらば溫めて一つ飲まうかいなア。

ト又メリヤスになり、此うち火鉢にて酒の燗をして飲む事あり。此うちにも二階の事を思ひ出し、無性に腹の立つこなしありて、トヽ酒を茶碗に注ぎ、飲まうとして飲まれぬ思ひ入れ。これまでにメリヤス切れる。

ト持ちたる茶碗を打ち碎き

もう堪忍がならぬわいなア。如何にわたしが料簡して、今宵祝言もあれかしと、二人の衆に云うたとて、マア現在今まで連れ添ひし、この辰姫が見る前で、ようも〳〵、あのやうに、厚かましうしやんす。腹が立つわいの……腹が立つわいの。腹が立たいで何とせう。子まで儲けしその仲を、政子の前にさけられて、よう安穩で添はせうか。胸が苦しい。……胸が熱い。これ此やうに心を使ひ、氣を揉むも、みんな殿御のいとしさゆゑ。この辰姫を可愛い事ぢやとも思はしやんせぬか。賴朝さま。聞えぬわいな〳〵。

ト泣き伏し、胸の痛む思ひ入れ。

胸が熱い。……胸が苦しい。誰ぞ水など飲ませてくれぬか。エヽ、水が飲みたい〳〵。

ト方々見廻して、やう〳〵立ち上がり、手水鉢の側へ行き、柄杓を取つて水を汲んで飲まうとする。ドロドロにて、燒酎の火燃える。キッと思ひ入れあり

嫉妬の念の募りては、ひさげの水も沸きかへり、胸の炎の焰には、瞋恚を焦がすと聞くからは、恥かしや、淺ましや、この辰姫嫉妬深く、この身は焰になつたるか。思へば〳〵政子の前、エヽ、怨めしいなア。

ト思ひ入れして

人に思ひがあるものか、ないものか、思ひ知らせん。さうぢや。

ト奥を目掛け行かうとする。韮山次郎武足、ツカ〳〵と出て、立廻りにて引留め

武足　待て、辰姫、わりやア何處へ行く。

辰姫　いとしい夫を寢取られし、怨みを云ひに行くわいな

ア。
武足　そりやアならない。頼朝は平家の囚人、政子の前は某が主人、八牧判官兼隆が云ひ號け、凶事があつちやア家の瑕瑾。韮山次郎武足が、辰姫、わりやアやらないワ。
辰姫　イヤ〳〵、例へ留めても留まらうか。政子の前が戀の仇。怨み云はいで置かうかいなア。
武足　淺ましや、辰姫、嫉妬の念に心奪はれ、政子の前に仇なさば、その分にやア置かれぬ。爰一寸も動くまいぞ。
辰姫　愚かや武足、例へこの身はどのやうにならうとも、慕はしいは頼朝さま。怨めしいは政子の前。逢うて怨みが晴らしたい。そこ退け、武足。
ト立廻り。
武足　待つた。いよ〳〵積る妬みの心、政子の前に怨みを云ふか。
辰姫　くどい〳〵。辰姫がこの體、心の刃に身を果し、この世からなる未來の業苦。
武足　情の淚流れても
辰姫　焦熱の火は消えやらず。
武足　比翼の床を重ねても
辰姫　紅蓮の氷は解け難し。
武足　五百生々
辰姫　未來際
武足　附き纏ひ
辰姫　添はさぬ〳〵。
武足　ても、恐ろしき女の一念。
辰姫　思へば〳〵、怨めしいなア。
武足　さまで凝つたる辰姫に、時政が家の重寶、三つ鱗は渡されない。サア、この武足に渡すまいか。
辰姫　ナニ、三つ鱗を渡せとや。
武足　くどい〳〵。
辰姫　今のこの身の恐ろしき、神の咎めの三つ鱗、持つて居たとて詮ない事。其方へも渡さぬ。戀の敵の政子が父、時政に仇なす爲。
ト懐より三つ鱗を出して
この三つ鱗はあの池の底の水屑と。さうぢや。
ト花道の角の池へ打込まうとする。武足立廻りにて留める。
武足　待つた。
辰姫　放した〳〵。
トどろ〳〵にて、この三つ鱗、手より離れぬ思ひ入れ。

武足驚ろく。

ヤ、、、、。嫉妬に凝りし咎めにや、取れども／＼三つ鱗の、コレ／＼／＼、この手を離れぬは。オ、／＼／＼。ハア。

ト泣き落す。

武足　面倒な。辰姫來い。

ト辰姫を引ッ立て、行かうとする。後へ清左衞門の文覺出て、珠數を持つて九字を切る。大ドロ／＼にて、武足苦しむ思ひ入れあつて、「アッ」と倒れる。文覺、平舞臺へ下りて來る。此うちに二階の障子上がる。幸右衞門の頼朝この體を見て居る。辰姫、氣の附いたる思ひ入れにて、立ち上がり

辰姫　今の思ひも政子ゆゑ。さうぢや。

ト奥へ駈け出さうとする。文覺、珠數にて辰姫を打ち据ゑる。

清左　驕悋の根を斷ち、恨嫉の葉を斷ちて、本心に立返れ。南無大聖不動明王々々々々々々々々。

ト珠數にて辰姫を打つ。三つ鱗、手より離れる。ドロドロ／＼打上がる。合ひ方になる。辰姫、茫然となつて

辰姫　現ともなく、夢ともなく、御法を請けしと思うたれば、心も胸も清々となつたは、合點のゆかぬ事ぢやわいの。こりやコレ先刻の三つ鱗。恐ろしうも見えず。怖うもなし。

ト取上げ

コレ／＼、此やうに我が手に觸れても何ともないは、變つた事もあるものぢやなア。

清左　女、心が附いたか。

辰姫　エ、、お前は。

清左　今宵に極まる佐殿の御大事。おことは疾々その三つ鱗を持參なし、北條が館へ立越え、この由斯くと告げ召されい。

辰姫　お心有りげの御出家樣。仰せに任せて

清左　早うお行きやれ。

辰姫　エ、、有り難うござります。

ト此うち武足起き上がり

武足　その三つ鱗を。

トかゝる。立廻り。後より清瀧出て、手ばしかく武足を刎り殺す。

辰姫　それは。

清瀧　構はずとござんせ。
辰姫　おさらば。
ト早三重にて、辰姫、三つ鱗を持ち、向うへ走り入る。
頼朝　清瀧、尊き僧の御入りなるぞ。一間の不淨を掃うて
よからう。
清瀧　ハア。
ト死骸を隱し、血を拭く。
幸右　貴僧には、先づ／＼あれへ。
ト文覺を上座へ直す。
サア、この上は、御名を明かされ下されい。
清左　愚僧には名はごんせぬ。
頼朝　例へお隱し候ふとも、顯密修德の行者、博識碩才の
座主にも等しき大導師。とく／＼御名を名乗り召されい。
清左　十八にして出家を遂げ、一十三年の間、或る時は斷
食し、また或る時は持齋を保ち、座禪繩床の室に入り、
食ふや食はずの乞食坊主、地獄谷の清左衛門坊主と云ふ
より外に、名はごんせぬ／＼。
頼朝　すりや、如何やうに尋ねても。
清左　云はぬと云つちやア固意地者、時雨の下の晴れ曇り、
紅葉の色の濃き薄き、定まつた事はごんせぬ。

頼朝　イカサマ、心に背いて尋ぬる事もござるまい。時に、
改めて願ひがござる。なんと聞いては下さるまいか。
清左　坊主になりたい願ひでごんすか。
頼朝　釋門の徒となりたい願ひ。
清左　棄恩入無爲報恩者。くり／＼坊主になりたくば、愚
僧が弟子にしてやるべいか。
頼朝　早速の承知忝ない。清瀧、剃髮の調度を持て。
ト清瀧驚ろいて、頼朝が側へ寄り
清瀧　モシ／＼、そりやマア何を仰しやりまする。思ひも
依らぬ御出家のお願ひ、わたしや合點が參りませぬわい
なア。
頼朝　清瀧が不審さる事なれども、この身は勅勘を蒙むれ
ば、月日の光りに當るをだに畏れあり。池の尼公に助け
られ、今日まで命を存らへし、その大恩を謝せん爲、出
家となつて父母の菩提をも弔らひ、我が後の世を助かる
心サ。
清瀧　お情ない事仰しやります。あなたが御出家なされま
して、義朝公の仇敵、長田の太郎景宗は、どなたがお討
ちなされまするぞ。
頼朝　父が最期も皆宿縁。敵を討つべき所存はない。

清瀧　エ、、、、。

清左　佛にも降魔の利劔。そんな腰の抜けた奴を、愚僧が弟子には取られるものか。同席するも穢らはしい。さらばだ。

ト清左衛門の文覺立つて行かうとする。頼朝立ち塞がつて、引留め

頼朝　待つた。只管貴僧を導師に頼み、剃髪したきこの身の願ひ。

清瀧　お情ない御出家のお願ひ。この事ばかりはさらばお暇申さうか。

ト頼朝、清瀧と入れ替り

頼朝　客僧、待つた。

ト引留める。

清左　ハテ、アタしつこい男でござるわえ。腰抜けの側に居ると、おれが體が穢れるから、此やかばねを出て行くのだ。爰放しやれよ。

ト振り切らうとするを、頼朝留め

頼朝　イヤ、放さぬ〳〵。某に授戒なすべき德もなく、元より名もなき賣僧なら、浪人なしても幸右衛門、最前の如く打擲されて、その分に差措かうか。

清左　オヤ、かざッぴいた事を云ひ出したた。差措くまいといつて、どうせうと思ふのだ。

頼朝　云ふにや及ぶ。最前の仕返しは。

ト清左衛門にかゝる。

清瀧　コレ、申し。

ト支へる清瀧突き退け、立廻りにて、清左衛門の文覺な引据ゑ、踏みにかゝる。大ドロ〳〵になる。頼朝が五體竦む思ひ入れ。文覺すつくと立つ。また立ちかゝる。立廻りにて、清左衛門引抜き衣裳にて、姿變り、文覺になる。頼朝、清瀧キッと思ひ入れ。

兩人　この有樣は。

文覺　前の兵衛佐、源の頼朝やある。

頼朝　何がなんと。

文覺　今は何をか包むべき。我れこそ高雄神護寺の荒法師、文覺上人が左遷の形相。

頼朝　さてこそ、いま某が五體惱亂、碩德兼備の高僧と見た目は違はじ。

清瀧　文覺上人にてましますかや。

文覺　イヤ、今の動揺、全く愚僧が智德にあらず。この院宣の冥罰なるワ。

ト首に掛けたる錦の袋より院宣を出し、捧げて見せる。

頼朝　ナニ、アノ、それが

清瀧　院宣とや。

文覺　兼ねて都へ忍びに立越え、乞ひ請けたりし後白河の院宣。もしや頼朝、氏の恥辱を雪がんと義兵を企て、驕る平家を追討の、所存もあるやと持ち來りしに、面部に見えたる果報の相に事變り、出家をなさんず卑怯の心底。見下げ果てたる臆病者。父義朝を討つたる、長田の庄司が髑髏を見ながらも、無念と思はぬ腰拔け。この院宣の御罰を以て。

ト立ちかゝり、院宣にて頼朝を打たんとする。その手をヂツと取りて、思ひ入れ。

頼朝　さては文覺大上人。身不肖の頼朝に、再び源氏を起させんと、乞ひ請けられし後白河の院宣。漂泊なしたるこの年月、平家に漲る泥水の、醉ひも醒めたる今日只今。頼朝にその院宣、速かに御ほうしあらば

清瀧　義兵の旗を擧げさせ給ふか。

頼朝　院宣賜はるものならば

文覺　イヤ、腰拔けには渡されぬ。

頼朝　ヤア、情なき文覺の一言。朝敵追討は武門の譽れ、是非院宣を某に。

トかゝる。立廻り。

文覺　イヤ、小癪なり。所存決せぬ頼朝へ、この院宣は愚僧が渡さぬ。義兵を擧ぐるといふ本心は。

頼朝　サア、その本心は、

文覺　ヤア、面倒な、退け。

頼朝　待つた。

ト留める。立廻り。清瀧も心遣ひあるべし。この立廻りに幸右衞門の引拔きにて、頼朝になり、懷中の白旗手早く捧げてキッと見得。清瀧は上の方へ、文覺下へ下がり、下に居て、これを見て思ひ入れ。

清瀧　その御姿は。

頼朝　我れも清和の臺を出で、再び源氏を起さんと、累代の白旗は、肌身も離さず所持なして、心は盡せど情なや、平家の勢ひ盛んにして、力なし。さりながら、我れに組みする諸國の源氏、勢ひありと云ひながら、追討使となるならば、弱よく強を制すと云ふ、その本文を身方となし、姓の白旗押し立てゝ、平家を討たんは頼朝が、この掌に覺えあり。

文覺　シタリ、この文覺が兩眼は、明王佛陀の眼にして、

御身の相を見奉るに、末々めでたき果報人、武邊も由々しき威風骨柄。天晴れ武將の萠しあり。この院宣を頭に戴き、時日を移さず義兵を擧げ、源氏再興召されよや、右兵衛佐源の賴朝どの。

賴朝　ナニ、その院宣を賜はらんとや。

文覺　その本心を見る上は、

清瀧　平家追討のその院宣。

賴朝　この賴朝へ

文覺　下し賜はる。

賴朝　エヽ、忝ない。

文覺　イザ

賴朝　イザ

兩人　イザ〳〵〳〵。

ト賴朝、白旗を懐中して、文覺が手より院宣を受取り、この立廻りに、文覺、上へ、清瀧、下の方へ來る。賴朝、中に院宣を戴き

賴朝　ハヽア、時なるかな、日なるかな。右兵衛佐賴朝が、開運なすべき時節來つて、平家追討、源氏再興の院宣を、賜はる事の有り難さよ。この喜びに引替へて、父義朝の落命を、思ひ出すも口惜しや。

清瀧　父の鎌田が討死にも、命日變らぬ正月三日。

文覺　その元三の注連飾り、齢を祝ふ松竹も、冥途の旅の一里塚。追善供養に其あらまし

賴朝　語るにつけても口惜しや。イデ、その頃は

文覺　その頃は。

ト大小入り、三味線、笛入りの合ひ方になる。

賴朝　平治元年臘月中旬、待賢門の夜軍敗れ、我が父左馬頭義朝は、本國に落ち行き給ひ、尾張の國千田郡、野間の内海の住人、長田の庄司忠宗は、家人といひ、鎌田が由緣。彼れこれ遁がれぬ緣により、館に入つて賴まれしに、

文覺　長田喜び、有り難や、かゝる時節に候へば、物數ならねど、よきに御計らひ參らせんと、直ちに華麗の別家を設け

清瀧　善盡し、美を盡し、饗應あれば、我が君も御安堵遊ばすその時に

賴朝　長田心に思ふやう、當時盛んの平家に背き、世になき源氏の大將を、匿まひ置くは一大事、家の破滅と思案を極め

文覺　何卒たばかり討取らんと、數多の家來に云ひ含め、

明くれば正月三日の賀き。

清瀧　初湯を引かせ申さんとて、注連引きはへて恭しく、冷水熱湯を汲み並べ

頼朝　入湯の具を悉く、組み竹の衣桁に掛け、はや御入りと待ちかけたり。

文覺　その時、近習に附き添ひし、金王鎌田はあらざるや。

頼朝　それにもぬからぬ長田が手段。もし平家より油斷を窺ひ、不時に寄せんも圖られず、金王丸見て參れと、直ぐに濱手へ遠見の役。

清瀧　父の鎌田は情なや、日頃大酒を好むとて、一間へ招きひら強ひに、心もつかず、醉ひ伏したり。

頼朝　斯くとも知らず、父義朝、浴衣一つに廊下を過ぎ、何心なく入り給ふ。

文覺　風呂屋の廻りに組子ども、我れ討取らんと押ッ取卷く。

清瀧　その時にこそ義朝公、驚ろかせ給ひつゝ

頼朝　アラ、心得ぬ長田が振舞ひ、主に敵たふ人面獸心、騙られしか、口惜しやと、拳を握つて御憤り。

文覺　それにもひるまぬ忠宗が、カラ〳〵と打笑ひ、昔は昔、今は今、討取つて手柄にする。

清瀧　かゝれ〳〵の聲につれ、寄せ來る奴原事ともせず。

頼朝　左右へ摑んで人礫。

文覺　手痛く働らき給へども、

清瀧　多勢に無勢剰さへ、刃物一本あらざれば

頼朝　心に任せぬたるみを見て

文覺　折り重なりし組子の面々。

清瀧　義朝、暫しと聲を掛け、

頼朝　いま運盡きて死ぬるとも、

文覺　此まゝに討たれんは

清瀧　屍の恥辱嘆かはし

頼朝　生害させよとありければ、

文覺　長田も不便と思ひけん、首掻き刀を投げ出す。

清瀧　御痛はしや義朝公、

頼朝　弓手の肋へ突き立てゝ、馬手へキリ〳〵と引き廻し

文覺　切腹あれば忠宗が

清瀧　放埓邪慳の

頼朝　太刀風に

文覺　その時、御歳

清瀧　三十八、

頼朝　長田が爲に

清瀧　御首を
文覺　水もたまらず。
賴朝　思へば
清瀧　思へば
賴朝　清瀧。
清瀧　賴朝さま。
賴朝　エヽ口惜しい
兩人　御最期ぢやなア。
文覺　その御無念を知ろし召され、一擧に義兵の旗を擧げて、源氏に變かりし平家の奴原、只一戰に討取り給へ。
賴朝　斯く院宣の蒙むる上は、平家追討の手始めは、韮山の城主たる、八牧の判官兼隆を、夜討ちに討たん我が計略。
清瀧　その御軍令あるならば、北條どのを始めとして、三浦一黨、曾我岡崎、お身方あるは案の內。
賴朝　軍勢催促の着到なさば、佛法、王法の朝敵たる平家の一門、悉く梟木に掛けん事、この賴朝が方寸にあり。これとても文覺の諫めに依つて、この院宣の勅免なるか。アラ〳〵、有り難やなア。
ト院宣を戴く。

文覺　誠に天運循環して、源氏再興、今この時。
清瀧　おめでたう存じまする、賴朝公。
次郎　樣子は殘らず聞いた。注進すべい。
ト駈け出すを、文覺取つて引き戻す。また駈け出すを、取つて投げる。賴朝拔打ちに切り殺す。
清瀧　これは。
賴朝　軍神の血祭り。
文覺　お出かしなされた。
清瀧　賴朝公。
賴朝　兩人こなたへ。
清瀧　イザ、先づ奧へ。
文覺　入らせられませう。
ト靜かなる下がり葉になり、賴朝、院宣と旗を持ち、悠々と立つ。文覺、清瀧、附いて奧へ入る。バタ〳〵にて、政子出て來る。續いて六助出て來て、政子を捕へる。
六助　どつこい〳〵。樣子を聞けば、こなさんは、北條の四郎時政の娘、政子の前。八牧の判官どのを嫌つて、賴朝が後を慕ひうせたる橫道者。兼隆どのへこの通りを通達する。動かつしやるな。

政子　例へこの身はどのやうになるとても、八牧の判官が所へ行く事は、嫌ぢや／＼。賴朝さまのお身の仇となるべき下部、そんなら其方は

六助　この家の下人六助となつて居たは、聞きも及ばん、猿島の平太國景といふ者だ。斯う引上げた上なれば、口數云ふも面倒な。八牧の館へ駈け出して、賴朝が謀叛の手始めは、八牧を討つと云ふ事も、われが身の上も、兼隆へ內通する。そこ退け。

政子　イヽヤ、さう聞いては一寸もやられぬ。我が君の仇となる平太國景。女ながらも時政が娘、どこまでもやる事、ならぬ／＼。

六助　面倒な。退け。

政子　イヽヤ、ならぬ。

六助　そこ退け。

政子　ならぬ。

六助　どつこい。

ト賑やかなる鳴り物にて、政子、雪搔きを持ち、兩人見事なる立廻りあつて、六助、政子を當て、一散に向うへ入る。政子心附き

政子　さうぢや。

ト早三重にて、向うへ入る。奥より彌次兵衞出て來て、あたりを見て、差添へを拔き、寢刃を合せ、目釘を濡らし、奥を目掛けて行かうとする。以前より清瀧出て居て、これを支へ

清瀧　待つた。

彌次　妹、清瀧、爰放せ。

清瀧　兄さん、お前、寢刃を合せて奥へ行かしやんすが、アヽ、聞えた。そんならどうでも賴朝さまを。

彌次　知れた事だ。平家の仇たる兵衞佐をぶッ放し、おれが手柄にするのみならず、平家の寢覺めを安くするのだ。邪魔せずと、爰放せ。

清瀧　イヽヤ、さう聞いては猶ならぬ。御父義朝公は、父さん庄司忠宗どのの手にかゝつて御最期。その御子たる賴朝さまを、兄さんお前が討たうとは、天罰知らぬ惡人ぢやなア。

彌次　天罰といふ事を知つて、敵役の商賣がなるものか。面倒な。そこ退け。

清瀧　待つた。

ト留める。立廻り。この立廻りに清瀧、以前の軍令狀を取落す。彌次兵衞取つて





初演の繪番附

彌次　これや賴朝の軍令狀。
淸瀧　オヽ、それは。
彌次　寄りやァがるな。軍令狀まで認めたは、猶豫ならざる賴朝が企て。それに何ぞや。兄が心に背いて、源氏へ心を運ぶ女め。いつその事に、斯うしてくれべい。
ト有り合せたる雪搔きにて淸瀧を打つ。
淸瀧　サア、兄さん、この身は何となるとても、我が君樣の一大事となるべき軍令狀。この淸瀧へ渡したく〱。
彌次　女め、甘口な事を吐かしやがる。おれが斯う掴ッ摑んだからは、放す事ぢやない。そこ退け。
淸瀧　待つた。
ト行かうとするを留める。立廻りのうち、淸瀧、彌次兵衞が足に附くまゝにて、兩人二重舞臺へ上がる。この時淸瀧、白骨を落す。
彌次　面倒な。爰放せ。
淸瀧　ならぬ〱。
彌次　退け。
ト立廻り、此うち奧より賴朝出て來る。
賴朝　長田の太郎、動くな。
ト彌次兵衞を突き退ける。賴朝を見て
彌次　賴朝、觀念ひろげ。
ト直ぐに切りつける。その刀を取つて直ぐに立廻りにて、彌次兵衞が脇腹へ突ッ込む。
賴朝　父義朝が仇敵、長田の太郎。主殺しの天罰、思ひ知つたか。
太郎　エヽ、口惜しい。兵衞佐賴朝。敵の末は根を斷つて葉を枯らせと、八牧の判官と心を合せ、汝が首を取り、宗盛の見參に入らんと思ひしに、われが手にかゝつてくたばるか。エヽ、口惜しいなア。
賴朝　軍始めに怨敵の、長田を我が手に掛くれば、心地よし。重恩の賴朝を害せんとは、よくも企みし大惡人ぢやなア。
ト抉る。血汐流れて白骨へかゝる。煙硝火、パッと立つ。これをキッカケに、ドン〱、鉦、鐘を打ち交ぜたる遠寄せになる。淸瀧驚ろく。
淸瀧　合點のゆかぬ。いま兄さんのその血汐が、この父さんの白骨へ、かゝると等しく、炎となつて燒け失せしは、ハテ恐ろしき天罰ぢやなア。
ト思ひ入れ。此うちに賴朝、長田太郎を抉りながら、方々見て

頼朝　ハテ、心得ぬ寄せ太鼓。アレ〱、北は北條、大場村、東は河津、熱海の境、アレ〱、西は三浦、南は海岸、下田の港、人ならぬ所もなく、我れを攻め來る有樣は、ハテ、夥しき軍勢ぢやなア。

ト思ひ入れ。矢張り遠攻めにて、頼朝、清瀧、長田の太郎、乘りたる儘にて舞臺一杯に押し出し、直ぐにセり上げる。この下に、眞中は八枚の判官兼隆、烏帽子、素袍、龍神卷きの形にて、中啓を持ち、床几にかゝりゐる。左右に辰姫、政子、紅絹の鉢卷き、襷にて、長刀を構へ、詰め寄せて居る。花道より捕り手大勢、ふせん蝶の紋附いたる弓張り提灯を持ち、出て來て、バラバラと取卷く。捕り手五人出る。

皆々　頼朝動くな。

頼朝　なんと。

兼隆　右兵衛佐頼朝、隱謀の企て、平家を討ち亡ぼさんとの結構、早くも洩れ聞え、八枚の判官兼隆が向つたり。斯く大勢を以て取圍んだれば、最早叶はぬ。お腹召されい。

頼朝　小積なる兼隆が一言。院宣の申し請けたる兵衛佐頼朝、開運なすべき期に至つて、生害なぞとは慮外な奴の。

兼隆　者ども、取卷け〱。

皆々　動くな。

ト　ばら〱と舞臺一杯に取卷く。向うの幕内にて

時政　兵衛佐頼朝公へ、北條の四郎時政、見參〱。

トつッかけになり、北條四郎時政、烏帽子、大紋にて出て來る。これに軍兵大勢、三つ鱗の紋附きたる高提灯を持ち、附いて出る。時政、花道の角にて

伊豆の小島に御身を潜め給ひしが、開運の時來つて、いま、院宣を賜はりしとや。かゝりし上は四郎時政、佐殿へお身方仕るでござる。

頼朝　時政一人あるものなら、平家の大敵何ならず。返す返すも滿足なるぞ。

時政　ハア、これは有り難き御諚かな。これより直さま、某が館へ御供仕らん。

辰姫　これぞ誠に我が君の

政子　御運も開くる源の

清瀧　水上清き清瀧が、

政辰　わたしら二人を

清瀧　送るはわたしが女の役。

兼隆　二心ある時政をやるな。

皆々　やらぬワ。

「どつこい」と押取巻く。立廻り氣味よくあつて

時政　小癪な奴の。

ト先づ今日はこれぎり、カチ〳〵〳〵。

幕

大商蛭子島（終り）

紋盡比翼塚
小むらさきあはぬ
其夜はかきつばた
曾我後日祭禮榮
馴初連理香
うぐひすやまた
虚無僧が北すだれ

鬼王團三が越方の昔を今に忠義傳命かけたる郭公譽を爰に書記假名のいの字の縁迚丸に井の字の定紋は亀山染の二重形其絹賣も御存の趣向の古手張返簇の強御最屓の御江戸の水にかけ映す兄弟分の蝶衛名に大三浦の居續も和田妾に引替へてよ據なく新造一座

傾情吾嬬鑑

四季評林　四番續



初演の絵番附（眼目の箱根境木の場）

傾情吾嬬鑑

第一番目三建目　鴨八幡放生會の場

役名——佐々木太郎丸重綱。比企判官義員。菊地主水成清。岩井右内義清。同一子、源之丞義春。同娘、八重梅。錦郡大藏。下部、寛藏。本庄助太夫。赤堀源吾。白井權八。

本舞臺、三間の間、向う一面の黑幕。下座の方へ寄せて大いなる鳥居を見せ、これに鴨八幡宮と書いたる額を懸け、この裾通り羅漢の方まで玉垣、左右の大臣柱、小松紅葉の大樹、石燈籠數多並べある。爰に佐々木太郎丸重綱、長上下、衣裳、小さ刀ばかりにて床几にかゝり、岩井右内、丸に井の字の紋付き、麻上下、衣裳。錦郡大藏、麻上下、衣裳。源之丞義春、角前髮、丸に井の字の紋付き、麻上下、衣裳にて、佐々木太郎丸に引添ひ、太郎丸の刀を持ち、各各見得よく並ぶ。下部寛藏、奴の形にて奉納佐々木太郎丸重綱と書いたる額へ、木刀二本つけ持つて居る心、この木太刀後に遣ふ事あり、これを持つて下の方に扣へて居る。太鼓、謠にて幕明く

重綱　方々承はれ。當社鴨八幡宮は、代々近江源氏の氏神、例年八月中の五日、放生會の祭禮を取行ふ。今日斯く申す佐々木太郎丸重綱も、武運長久の祈りの爲、奉納いたす一つの額。岩井右内、祭禮の時刻を相待ち、神前へ懸けさせてよからう。

右内　畏まつてござりまする。誠に御諚の通り、當社はお家代々の御氏神。例年變らず放生會、鎌倉よりの上使お入りの今日、錦郡大藏どの、路次の掃除など、申しつけられてよからう。

大藏　路次の掃除の儀は、四五日以前より、申しつけましてござるが、人足繁き處ゆゑ、掃除も殊の外骨が折れましてござる。

寛藏　そのお掃除の事につきましては、拙者どもゝ、骨を折りましてござる。

源之　イカサマ、大藏どのゝ拔目無きお指圖ゆゑ、路次の

掃除など、叮嚀に相見えまする。

ト切り幕より「鎌倉よりの上使」と呼ぶ。皆々向うを見る。

右内　はや御上使のお入りでござりまする。お出迎ひ遊ばされませう。

トまた向うにて「鎌倉よりの御上使」と呼ぶ。大鼓諸になり、比企の判官義員、立烏帽子、素袍片袖脱ぎかけ、金の烏帽子を三方へ載せ、これを持つて出る。菊地主水成清、衣裳、上下。本庄助太夫、撫つけ、衣裳上下にて向うより出て來る。太郎丸、右内、大藏、源之丞、花道の角まで出迎ふ。

重綱　上使御迎ひの爲、當國の領主、佐々木太郎丸重綱。

右内　隨ひまして、老臣岩井右内。

源之　同苗源之丞。

大藏　錦郡大藏。

重綱　これまで發向

皆々　仕りましてござりまする。

ト比企の判官、主水、助太夫、花道中程にとまり

判官　近江の國、鴨八幡放生會の神事、例年相變らず、鎌倉の武將賴家公、御參詣あらんが爲、御形代として、御烏帽子、御狩衣守護し奉つて、上使に立つたる比企の判官義員。

主水　御供に隨ひしは、九州の探題、菊地次郎助成が弟、同苗主水成清。

助太　菊地が老臣、本庄助太夫。

重綱　長途の御上使。

右内　御苦勞千萬。

重綱　先づ〳〵あれへ。

皆々　お通り下されませう。

ト太鼓諸の切れにて、判官、主水、助太夫、本舞臺へ來り、判官は上の方の床几にかゝる。主水、助太夫、太郎丸、源之丞、大藏、各々程能く並ぶ。

右内　御上使には遠路のところ、恐れ入りました。つきましては主人重綱、何がな御もてなしの爲にと存じ、後刻若侍ひどもに、竹刀打ちの勝負を致させ、御覽に入れ奉りまする。御一覽遊ばされ下されませう。

判官　それはよろしき見物ごと、所望いたすでござらう。

主水　四海泰平に治まると雖も、治世に亂の忘れざる、鎌倉の御遺風。武道は益々盛んなる今この時、竹刀打ちの勝負とは、面白き御饗應。拙者もお相手に罷り出づるで

ございませう。

助太　主人菊地が一家中廣しと申せども、烏滸がましき申し分ながら、拙者が劍術の門弟でない者は一人もござらぬ。好き折柄の幸ひ、九州武士の手の內、相手を嫌はず、お目にかけ申さうか。

源之　本庄助太夫どのゝ武術御鍛練の事は、兼ねて承はり及びましてござります。親右內なども、一家中へ指南は致せども、その伜と致して、武道未熟なる源之丞、後學の爲、御太刀筋を拜見仕るでござりませう。

大藏　拙者は右內どのと同役にお居やる、赤堀源吾どのの門人でござるが、いや又、その源吾が劍術手練、餘國は知らず、この近江の國には、二人とござるまいかと存ずる。

判官　その赤堀源吾が、術の逞ましい事は、鎌倉までも隱れはない。追ッつけ、御直參に召出さるゝでござらう。

主水　岩井右內どのゝ劍術の事は、鎌倉は愚か、九州までも聞えてござれども、赤堀源吾とやらが事は、未だ名も知らぬて。

判官　源吾が事は、日本に隱れのない劍術の達人。それを知らぬとお云やる菊地主水、武道不鍛練と見え申すわえ。

主水　赤堀源吾を存ぜぬと申せば、なんで拙者が、武道が不鍛練でござるな。

判官　その道に達したる名人を知らないから、不鍛練と云つたがどうした。

主水　鍛練か不鍛練か、義員どの、主水が手の內、お目に懸けうか。

ト思ひ入れ、脇差に手を掛ける。

判官　御裝束を守護なせば、今日一日の賴家公。殊に上使の義員へ、反りを打つて、なんとするのだ。

主水　上使なればとて、餘りなる過言。是非お相手に。

ト詰め寄る。

判官　推參な。

主水　なにを。

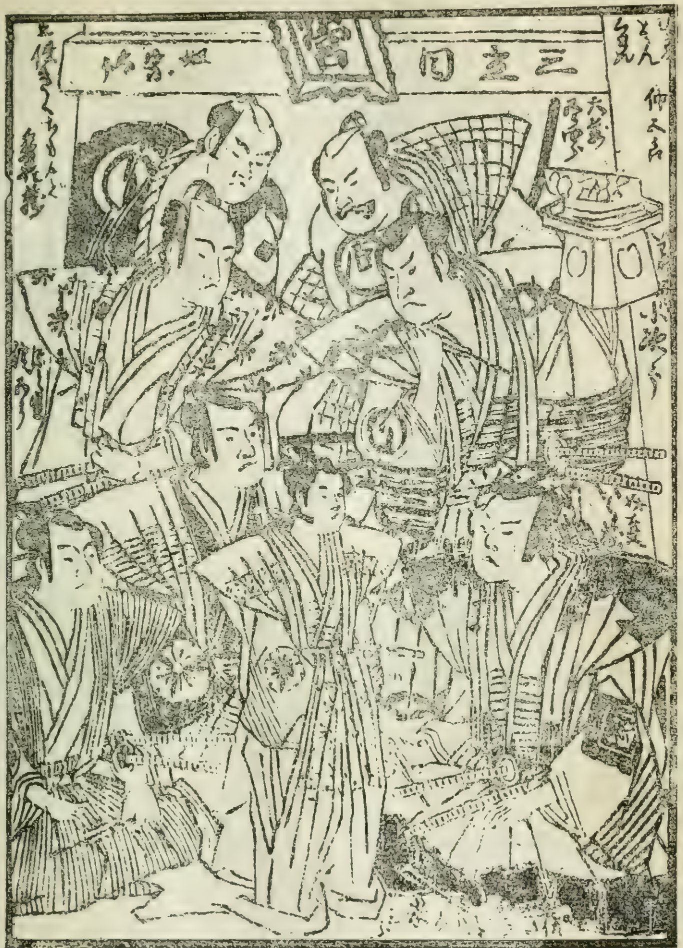
ト双方詰め寄らうとする。右內中を隔て

右內　神事の庭と申し、申さば由なきお爭ひ。恐れながら御兩所、先づ〱、お控へ遊ばされませう。

ト留める。

判官　イカサマ、右內が申す通り神事の場所。

主水　殊に生を放つ今日の祭禮、事を好みしは拙者が不調法。義員どの、必らずお心にさへられて下さりまするな。



初　演　の



繪番附

重綱　御上使へ申し上げまする。頼家公の御形代、八幡へ御參詣あつて、然るべう存じ奉りまする。

判官　方々、御案内。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト宮神樂になり、この一卷き殘らず奧へ入る。寛藏、額を持つて入ると、向う揚げ幕の内にて

源吾　コレサ〱、お娘、一緒に行かう。待ちなさい、待ちなさい。

八重　わしや一人行くわいなア。源吾さん、退いて下さんせ。

ト賑やかなる出の唄になり、八重梅、振り袖、衣裳、屋敷娘の拵らへにて出て來る。後より源吾、撥鬢奴の拵らへにて、ぶッ裂き羽織、衣裳、大小にて、八重梅が後に附き出て來る。その後より中間、諸願成就、岩井氏女と書いたる額へ、卷き物二つつけたるを持つて、供の拵らへにて出て來る。花道にて

源吾　コレサ、八重梅さん、なぜそんなに急ぎなされる。おれも一緒に行かうと云ふのに、マア、靜かに行きないな。

八重　わしや、お前のやうな男と、連れ立つて行く事は嫌でござんす。煩さい程に、構うて下さんすな。

ト云ひながら出て舞臺へ行く。

源吾　コレサ〱、待ちなさいよ〱。

ト云ひながら舞臺へ附いて來て、八重梅を捉へ

この頃は娘の子が流行と思つて、そんなにぴん〱する事はないわな。それはさうと、コリヤ、時内、てまへはちよつと煙草をそこらで、買つて來てくれろ。

時内　ハイ〱、爰らに煙草屋はござりませぬ。

源吾　ハテ、煙草屋が無い事があるものか。行つて買つて來い〱。

時内　ハイ〱。

ト奴、下座へ入る。

源吾　先づあたりに邪魔はなし。モシ、八重梅さん、この源吾が先度うちから、物に附け事に寄せて、あの堅い御親父、右内どのゝ目顏を忍んで掻き口說いた、返事はどうしてくれる氣だ。聞かまほしいワ。

八重　返事とは、なんの事ちやえ。

源吾　そんなに人を外らさないものだ。そも〱おれがお前の内へ、先生右内どのゝ内弟子に、ならうと入込んだその日から、ても綺麗な娘だ、ハテ、美しい女だと思ふ

が最後、古いやつだが、寝ても覺めても覺めても寐ても、忘れる隙と云つては、飯を食ふ間も忘れられないわな。それだからちよこ／＼と、人の目顏を忍んで口說いても、ひよつと先生にでも見附けられうかと思つて、腹一杯口說く事も口說かれない。時に今日は、この八幡へ上使が立つて、御馳走の爲に竹刀打ちがあると聞いたから、一番能り出で、何奴でもどなたでも叩きのめして、手練の程をお目に懸けうと出掛けた所へ、道で出逢つた八重梅さん。八幡樣は源吾が爲には、正眞の結ぶの神。ハテ、互ひに女無し夫無し、お前さへ應と云つてくれるなら、先生へ申し込んで、直ぐに我れらは花聟樣、花嫁の色よい御返事が承はりたい。どうでごんす／＼。

八重　サア、そのお前のお心ざしは、お嬉しう思ふけれど、物堅い父樣の手前を思うて。

源吾　それで返事をせないのか。そんならマア、相談は出來たと云ふものだ。幸ひあたりに、

　　トあたりを見廻し

つい爰でちよつと。

　　ト抱きつく。

八重　アレイナア、放さんせ。

　　ト振り切り逃げる。

源吾　これサ／＼。

　　ト追ひ駈けて廻る。この途端へ右内、初めの形にて下座より出て來る。源吾、右内に抱きつく。八重梅は奧へ逃げて入る。源吾、右内を捉へて口を吸はうとして顏を見合せ、悔りして手を離し、思ひ入れして

これは先生。

　　ト右内、睨みつけて

右内　赤堀源吾、理不盡に娘を捉へ、途中に於て尾籠の振舞ひ。如何に若いとて、座興にもせよ、嗜なみ召されい。

源吾　イヤ、座興でござらぬ。見附けられますからは、隱さうやうもない只今の仕儀。先生、モシ、御息女八重梅どのを、赤堀源吾に下さるまいか。

右内　そりや、どうで一度は嫁づけねばならぬ娘。應と云うて、其方へくれたいものなれども

源吾　氣に入りませぬか。

右内　如何にも、右内が心に染まぬ。

源吾　そりや又、どこが心に染みませぬな。

右内　未熟な所が。

源吾　何が未熟で。

右内　兵術手練が。
源吾　エヽ。
　ト思ひ入れ。
右内　おてまへ如き生兵法のごくに立たず、右内が弟子には存じも寄らぬ。罷りならぬ事ぢやぞ。
源吾　生兵法のごく立たずとお云やるが、幸ひ今日はこの處で、上使饗應の竹刀打ちがあるとの事。その席に於て誰れをがな相手に、
　ト思ひ入れして
オヽ、それ／＼、聞けば九州菊地の家來、本庄助太夫が參つて居るとの事。これこそ聞き及ぶ兵術の達人、これを相手に望んで出て、物の見事に打勝つてお目に掛けうが、それでも弟子になりませぬか。
右内　ムヽヽ、ハヽヽヽヽ、如何に娘が望みぢやとて、口から出次第な事を云はぬものぢや。本庄助太夫は影山一傳流の達人、お身達如きの太刀先で、あたりへも寄らるゝものかえ。鋸屑も云へば云はるるとやら、今のやうな大事、右内は聞いても大事ないが、人中で云ひ出して、必らず恥を掻きやるな。師弟のよしみに意見いたす。以後は愼しみ召されいサ。

源吾　御意見忝なう存じまするが、芋幹足をつくと申す事もござれば、一傳流の達人は愚か、一心を固めて立ち向はゞ、鞍馬山の僧正でも、赤堀源吾が木刀の下に、打つて打つて打ち据ゑまいものでもござらぬ。助太夫に打勝つたらば、その時こそは、嫌でも應でも娘御は申し請くる。先生、右内どの、キッと詞を番ひましたぞ。
　ト唄になり、源吾、思ひ入れして奥へ入る。右内、殘り、思案して居て
右内　ハテ、不敵なる源吾が詞。娘一人捨つればとて、おのれがやうな奴に添はさうかえ。あのやうなる惡黨を、同居いたさせ置くにつけても
　ト懷中より、紫の袱紗に包みたる卷き物を出して
これこそじき傳流の奥儀の秘書、眞妙劍の一卷。九州菊地の家臣、白井庄左衞門より讓り受けて所持なせども、この主も早先達て横死なす。聞けば悴白井權八と云ふ小人無事で居るよし。あの若者めにこの一卷を奪ひ取られぬ其うちに、權八に逢うて、父庄左衞門の形見にせよと渡したいものぢやが。オヽ、幸ひ本庄助太夫、右同朋輩の事なれば、彼れに逢うて權八が事を尋ねて見るがよい。さうぢや／＼。

　ト巻き物を懷中する。本庄助太夫、源之丞、錦部大藏、初めの形にて出て來る。

助太　右内どの、これにお出でござるか。

右内　これは／＼、助太夫どの、神事の刻限まではお待遠。御退屈でござらう。伜、お待遇の酒を差上げたか。

源之　如何にも、お酒を差上げましてござりまするが、拙者が不調法ゆゑか、あまり召上がらぬやうに存じ奉まりする。

助太　イヤモウ、取替へ引替へのお肴で、殊の外食べ醉ひました。

大藏　拙者などは、强ひまする事は口不調法で、私しばかりがぶり／＼と、お客人より先へ、行き着いてしまひまする。ハヽヽヽヽ。

右内　イヤ、ナニ、助太夫どの、お訪ね申したいは、先年菊地のお家にて、横死いたされたる、白井庄左衞門どのの御子息、同苗權八は堅固でお居やるか。御存じでござりまするか。

助太　その權八が儀は、親庄左衞門横死いたせしより、拙者方へ引取りまして、古朋輩の伜ゆゑ、世話いたして遣はし、今日も同道いたして、この門前に待せ置きましてござる。

右内　それは幸ひ。拙者も親庄左衞門とは、劍術の相弟子でござるて。しかも至つて昵懇に出合ひました。庄左衞門に對面いたす心で、權八に逢ひたうござる。苦しうなくば、これへ呼び出して貰はれませうか。

助太　なんの苦しうござらぬ。呼び出してお逢ひなされい。

右内　コリヤ／＼、伜、門前に控へたる白井權八を、これへと申せ。

源之　畏まりましてござります。

　ト花道の角まで來て

　門前にお控へなされたる白井權八どの、急いでこれへお出でなされい。

　ト揚げ幕の内にて

權八　畏まりましてござりまする。

　ト大小入りの弓八幡の曲になり、權八、丸額、若衆髷に、丸に井の字の紋つきの振り袖衣裳、茶字の袴、尋常なる拵らへの大小にて、結構なる仕立ての誂らへの鳥籠の中へ鳩を一羽入れ、これを持つて揚げ幕より出で來る。直ぐに舞臺へ來て

　お招ぎに從ひまして白井權八、これまで參上いたしまし

てござりまする。

ト右内、權八を見て

右内　これが彼の、白井氏の子息かな。

助太　左樣でござる。

右内　ドレ〳〵。

ト權八をつく〳〵と見て、少し愁ひの思ひ入れにて

誠に下世話に申す通り、親は無けれど子は育つとやらで、健やかに生え育ち召されたなア。其許を見るにつけても、過ぎ逝かれし庄左衞門どのを、思ひ出して落涙いたす。イヤナニ、權八どの、御自分は拙者を覺えてお居やるか。

ト權八、右内を見て

權八　あなたは、どなた樣でござります。

右内　至つて幼年の頃なれば、覺え召されぬも尤も。拙者は當國佐々木の家臣、岩井右内と申す者。御親父庄左衞門どのとは、當家の殿樣鎌倉御在番の折柄、誠に斷金の交りを致してござる。その頃其許は、やうやく三歲か四歲、其うちに庄左衞門どのは、上へ御諫言申し過して、存じ寄らざる御切腹。思ひ出すも早や一昔。拙者がお出合ひ申した時分、御親父のお物好きで、稻葉山と名けられたる、秘藏の提げ物がござつたが、如何いたしてござるな。

權八　その提げ物は、父が形見でござれば、明暮れ離しませず、提げまして罷りありまする。御覽に入れませう。

ト權八、腰より誂らへの印籠を出して

お覺えの印籠は、これでござりませう。

ト右内へ見せる。右内、印籠を手に取りて

右内　誠にこれ〳〵。表に稻葉山の松を畫き、裏には松とし聞かば今歸り來んと云ふ歌の下の句。物好きと云ひ、昔懷かしう存じまする。コリヤヤイ、倅、庄左衞門どのの思し召しつきの、この蒔繪の風流、拜見いたせ。

ト源之丞、印籠を取つて見て

源之　誠に風雅のお物好き、平日のお心もさぞかしと、奧床しう存じまする。

ト印籠を權八へ渡す。權八、受取つて腰へ提げる。

右内　まだ承はりたい儀がござる。御親父の御家來に、上州安中の者で、彌三右衞門と申す者の倅に、彌市と申して吃りの男がござつたが、その者は如何いたしましたな。

權八　その彌市が事は、御存じの通りの、言語分り兼ねまする片輪者ゆゑ、武士の奉公は叶ひませず、町人と成り下りまして、絹とやらを一頃商ひまするると承はりました

が、それも私しの幼少の時ゆゑに、彌市が顏さへ碌々に覺えませぬ。行くへとても相知れませぬ。

右内　さこそ〳〵。

助太　イヤナニ、權八どの、兼ね〴〵右内どのに逢つたら、願つて申し請けたいと思ふ一品があるとお云やつたが、好い幸ひ、所望召されぬか。

權八　誠に左樣でござりました。イヤ、申し右内さま、近頃粗忽な申しやうでござりますれども、親庄左衞門より其許へ、お讓り申しましたとやら、流義の秘書、眞妙劍の一巻、御所持なされてござりまするか。

右内　如何にも。御親父樣より讓り請けて、大切なる品ゆゑに、晝夜肌身離さす所持いたして罷り在る。其許樣は幼少の時であつたが、よく覺えてお居やるな。

助太　それは拙者が申し聞かせましてござりまする。先達てその眞妙劍の一巻は、拙者が讓り請けたいと、庄左衞門へ度々申し込みましたれど、何か氣に入りませぬやら、朋輩のこの助太夫へ讓りもせず、他家の右内どのへ讓られたは、よく〳〵、内證に面白い理窟でもあつたでござらう。

ト思ひ入れして

それはあつて過ぎた昔。小さい時から、小耳に聞き挟んだ秘書の一巻。どこへ參つたやらと、明暮れ歎きまするから、右内どのが讓り請けて、所持召されたと、申し聞かせたのでござるて。

權八　家に傳はりましたる秘書でござれども、行くへたうなりましたる上は、是非に及びませぬが、其許樣が御所持と承はれば、何卒申し請けまして、折もござらば、父の横死の汚名を清めて、再び白井の家を引興したき、存じ寄りにござりまするからは、一巻を權八へ、お讓りの儀は叶ひますまいかな。

右内　これは〳〵、年若なれども、驚ろき入つたる心ざし。左樣にござらいでも、こなたからお尋ね申して、お讓り申さうと存じて居つた眞妙劍の一巻。後刻神前にて互ひに身を清め、改めてお讓り申すでござらう。

權八　ナニ、一巻をお讓り下されんとや。この年月の願ひ成就。これと申すも助太夫さまのお知らせゆゑと、偏へに有り難う存じまする。然らば後刻神前にて、身を清めましてから、しかとお渡し下されませうかな。

右内　如何にも。當社八幡を誓ひに立てゝ、僞はりはござらぬ。キツと一巻お讓り申すぞ。



初演の



繪番附

ト權八、嬉しき思ひ入れにて

權八　八幡宮を誓ひに立つて下さるからは、相違なき思し召し。助太夫さま、お喜び下されませい。權八が身に取りまして、斯やうなる有り難い、嬉ばしい儀はござりませぬ。これも偏へにあなたのお庇、有り難う存じまする。

ト權八、助太夫へ向ひ、三拜して思ひ入れ

助太　權八、嬉しうござるか。

權八　これが嬉しうござらいで、なんと致しませう。白井の家を引興しまする、手がゝりでござれば、先祖へ對しましての奉公、この上も無い仕合せでござります。

助太　さう聞いては嬉しい筈。その喜びも助太夫が情と、身に沁みて拙者が恩、忝ないと思ひ召さるゝか。そこが人間の誠、必らずともに、今の詞を忘れまいぞ。

權八　どう致して、あなたの御恩を忘れませう。

助太　しかと忘れまいぞ。

權八　承知いたしてござりまする。イヤ、右内さま、私しはこれより、八幡へ參詣仕りたう存じますれば、自由ながら、これでお別れ申しまする。

右内　然らば後刻。

皆々　御意得ませう。

ト唄になり、權八、鳥籠を持つて奥へ入る。右内、助太夫、源之丞、大藏殘る。奥にて「上使のお入り」と呼ぶ。宮神樂になると、判官、主水、重綱、以前の形にて出る。源吾も附いて奥より出て來る。判官、上の方の床几にかゝる、いづれも下へ退る。源吾は遙か下の方に、少し後へ寄つて扣へて居る。

判官　お待遇の竹刀打ち、早々拜見仕りたい。

右内　畏まりましてござりまする。下部寛藏、最前の額を持て。

ト奥にて

寛藏　畏まつてござります。

ト宮神樂になり、寛藏、以前の形にて、幕明きの額を持つて出て、思ひ入れにてつくばひ

仰せに從ひ、御奉納の御額、持參仕つてござります。

重綱　源之丞、その額の木刀をこれへ。

ト源之丞、額に附けたる木刀を取つて、舞臺先へ直す。

初太刀は源之丞、大藏、立合つてよからう。

源大　畏まりましてござります。

ト兩人支度をして、判官の方へ辭儀をして、竹刀にかゝる。

源之　大藏どの。

大藏　源之丞どの。

源之　上使の御前でござれば、朋輩の御容赦は、御無用でございまするぞ。

大藏　そりや、お互ひの事でござる、容赦は致さぬ。イザお出でなされ。

源大　イザ〳〵。

ト白囃子になり、竹刀打ちにかゝる。源吾、右内心遣ひの思ひ入れあるべし。トヾ大藏負ける。源之丞、大藏の手を取つて引立て、したり顔にて傍へに居る。

判官　錦郡大藏、流石は日本に聞えたる、赤堀源吾が門人程あつて、手の内驚ろき入つた。出かした〳〵。

ト源吾、それへ出て

源吾　ちと、お願ひがござります。

判官　其方は赤堀源吾ではないか。願ひとは何事だ。

源吾　九州に聞えましたる、淺山一傳流の達人と承はる、本庄助太夫どのゝ、御太刀筋が拜見仕りたうござる。御不承ながら赤堀源吾と、お立合ひなされては下されまいか。

助太　兼ねて名高い赤堀源吾どのと立合ひまして、打ち据ゑられたら老後の思ひ出。如何にもお望みに任せ、立合ひませう。

源吾　お立合ひ下されうとは、これは〳〵有り難い。

ト思ひ入れして

先生右内どの、助太夫どのと赤堀源吾が立合ひまする。とくと檢分さつしやつて、萬一源吾が運が叶つて、勝ちましたらば、約束の通りナ、彼の事。

ト思ひ入れあつて

よもや違變はござるまい。キッと詞を番ひましたぞ。

ト此うち、助太夫、源吾、支度をして、助太夫が油斷を見て、急に木刀を取つて打つてかゝる。助太夫、木刀にてしやんと受け留める。

助太　さう、巧くは行きますまい。

源吾　中々、味だわえ。

トちよつと立廻り、また解れて、よいキッカケに

助源　ヤア。

ト構へると白囃子になる。いろ〳〵思ひ入れあつて、源吾、助太夫に打つて打ち据ゑらるゝ。助太夫、手を取つて源吾を引起し、辭儀をして思ひ入れ。源吾、不承々々に下の方へ直る。

助太　源吾どのゝ太刀筋、なか〳〵達してござりますれども、まだ〳〵助太夫から見ますれば、正真の赤子も同然の赤堀どの。右内どのゝお弟子さうにござるが、今の有様では、お師匠のお手の内も、さぞと推量いたしてござる。

ト右内、思ひ入れして

右内　源吾、それへ出い。おのれは悪い奴ぢや。最前右内が申し聞かせた通り、どうしておのれら分際で、一傳流の奥儀をも極めさつしやれた、本庄助太夫どのに歯が立つものか。留めたるをも用ひず、願うて出居つて、今の負け態はなんぢや。おのれが不働らきを致せば、同居いたさせ置く右内までが面穢しぢやわえ。以來人中へ面を出し居るまい。すッ込んで居らう。見下げ果てたる大腰抜けめが。

ト恥しめる。源吾、歯嚙みをして口惜しき思ひ入れ。

主水　判官どのゝお物語りとは、甚だ相違の源吾が手の内。氣の毒千萬な儀でござる。

判官　拙者も今まであのやうにあらうとは存ぜなんだ。今の負けやうを見ましては、ちと算用が違ひますわえ。

大藏　この大藏も今までは、師匠と崇め奉つたが、煤掃きの疊のやうに、叩かれたを見れば、愛想もこそも盡き果て、弟子の方から師匠を破門するのだ。エヽ、業曝しでござるわえ。

寛藏　ドレ、源吾さま、顔を見せさつせい。イカサマ、大きな角額、親船のかし木を見るやうな形で、今の態はなんでござる。正月の十草のやうに、滿座の中で打つて打つて打ち据ゑられて、なんと恥ぢやござらぬか。日頃から屋敷に居ても、憎まれ口ばつかり、居候ふの態で居て、無性に人を叱り散らし、いゝかと思つて、重ねて味噌をあげる事は、よしにさつせい。あのマヂ〳〵として居る顔わいの。

トこれにて源吾、いよ〳〵口惜しき思ひ入れ。

重綱　御上使には神職方へお入りあつて、今一獻召上がられて下さりませう。

判官　また、御馳走にあづかりませうか。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト宮神樂になり、判官、主水、重綱、助太夫、右内、源之丞、大藏、寛藏、思ひ入れして奥へ入る。直ぐに合ひ方になる。源吾一人殘り、口惜しき思ひ入れあつて

源吾　おのれやれ、助太夫に打勝つて、往生づくめに八重梅を、貰はんと思ひし事も水の泡。滿座の中にて後れを取り、口々に恥しめられ、その上、下郎にまで悪口されしは何事だえ。これ皆遺恨の元は、娘をくれぬ右内めゆゑと思へど、差當る敵と云ふは本庄助太夫、彼奴ぶッ放して今の恥辱を、雪ぐより外の思案もない。歸りを待ち請けてと思へども、大勢の供廻り、仕損じては恥の上塗り。右内とは前以て、兵術などで出合うたる話しなれば、近いうちに出合ふべき時節もあらう。騙し寄せて本庄助太夫めを、只一刀に。

ト思ひ入れする。奥にて足音するゆゑ、源吾小隠れして直ぐに奥へ入る。ト權八、以前の形にて、鳥籠を持つて奥より出て來り、合ひ方になる。

權八　さても〳〵、今日のやうな嬉しい事はない。久し振りで右内どのに逢うて、この年月願ひに願うた家の秘書、貞妙劍の一巻を、譲り受けるやうになつたも、誠に當社八幡宮の加護。再び家を引興す、武運を祈るその爲に、神へ捧ぐる放生會。生けるを放つ如くにて、大願成就なさしめ給へ。歸命頂禮々々々々。

ト籠の戸を明けると、トヒヨ〳〵にて、吹替への鳩、日覆へ舞うて上がる。此うち後へ八重梅、以前の拵らへにて出て、權八を見て思ひ入れして、懐中の鼻紙袋より紅筆を出し、懐中鏡にて顔を直し、口紅をし、いろいろ思ひ入れあつて、權八これを知らずに居る。

アレ〳〵、嬉しさうに、鳩が舞うて行くワ〳〵。

ト八重梅、默つて思ひ入れあつて、權八が後から抱きつく。權八、恟りして

誰れぢや。

ト振り放す。八重梅、モヂ〳〵して居る。權八、衣紋を直し行かうとする。

八重　モシ。

ト權八が振り袖を捉へて留める。

權八　お前はどなたでござります。

八重　アイ、わたしはな。

權八　アノ、わたしはな。

ト思ひ入れして

八重　アノ、お前さんは、わたしを知らしやんせんかい。

權八　どうも、覺えはござりませぬわいの。

八重　お前さんは、わたしを覺えては居やしやんすまいが、わたしやお前さんを、よう覺えて居やんすわいな。

ト八重梅、思ひ入れして片袖を脱ぐ。下に派手なる振り袖衣裳、金絲にて笹龍膽の縫ひ紋をつけ、これを着て居る。

八重　これを見て下さんせいな。

權八　ドレ。

ト見る。

八重　この紋所は、覺えて居やしやんせうがの。

權八　如何にも。この笹龍膽はわしが替へ紋、これをどうして

八重　知つて居ると云はしやんすのかえ。

權八　アイ。

八重　去年七月なかばの頃、父さんに連れられて、都上りの大內詣で。逗留のうちに、あたり近所の娘御さん達に、近づきが出來やんして、盆踊に行たと思うて下さんせ。所はどこやら、

ト少し思ひ入れあつて

オヽ、それ〳〵、慥かにあそこは四條繩手、曲り角に立つて、踊りを見て居やしやんした、可愛らしいお若衆さんと、見惚れたるものゝ、踊り子衆に引立てられ、名殘りのお顏、夜目でも忘れぬ。コレこの笹龍膽の紋所、人目を包んで肌着の袖へ、縫はせて着るのは、お前さんを忘れぬ、私しが心の心中。よう顏見せて下さんせいなア。

ト恥かしき思ひ入れ。權八、思ひ入れあつて

權八　如何にも、さう云はつしやれば、わしも忍びの京參り、四條繩手の角の所で、大勢の盆踊りの中に、目立つ派手な振り袖。その時こなたの紋所は、丸に井の字ではなかつたかいの。

八重　アイ、そりや父さんの定紋、よう覺えて居て下さんしたなア。

權八　その紋所はわしも定紋。此方の紋所ゆゑ、ハテ、あでやかな女中の、變つた紋所と思ふうち、往來に紛れて見失なうた。さてはその夜の娘御は、其方であつたか。

八重　そんなら、わたしが覺えに違はぬ、その時のお若衆さん。

權八　その折柄の娘御どの。

八重　御緣も盡きず

權八　機緣も變らず

八重　不思議に廻り、

兩人　逢ひましたなア。

權八　丸に井の字を、親御の定紋ぢやとあるからは、そん

ならこなたは、もしや岩井
八重　アイ、右内が娘でござんすわいなア。
權八　右内どのゝ娘御ならば、餘所外ならぬ、一家も同然
のこの權八。
八重　權八さんと仰つしやるは、常々父さんの噂さしやん
す、そんならお前は白井
權八　權八でござりますわいなう。
八重　權八さんなら、此方の父さんと懇ろにさしやんすさ
かい、此方の內へも定中來て下さんすぢやあらうな。わ
しやモウ、此やうな嬉しい事はないわいなア。
　ト思ひ入れして、權八の手を取り
權八さん、ちよつと來て下さんせいなア。
　ト恥かしき思ひ入れ。
權八　來いとは、どこへ參るのでござりまする。
八重　どこであらうと、わたしが行く處へ。
　ト思ひ入れ
權八　エ、。
八重　嫌かえ。
權八　アイ、嫌ではござらねども、大切な願ひのあるこの
身の上。ひよつと不義がましい事が、右内どのへ知れて
は、不埒者ぢやと思はれては、差當つて一卷を譲り請け
る妨げ。どうもこの緣は結び惜い。
　ト思案して、懷中より香包みを取出して
これはコレ、連理香と名付けて、家に傳はる大切なる品な
れども、重ねて廻り逢ふまでの印に進せる一包み。女中、
受取つて下さい。
八重　なんと云はしやんす。そんなら身に大切なお願ひが
あるゆゑに、この香包みを下さんして、別れいと云ふ事
かいな。胴慾な權八さん、わしやそんな事は嫌ぢや／＼。
嫌でござんすわいな／＼。
　ト取りつき泣く。
權八　ハテ、惡い料簡。わしとても、こなたの心ざし、嬉
しいけれども、大事の願ひの妨げなれば、願ひ成就する
までの形見の一品。願ひ叶はゞその時は、天下晴れての
妹脊を結ぶ連理香。末の契りを樂しみに、受取つて下さ
れい。
　ト八重梅へ香包みを渡す。助太夫、最前より出かゝり、
後にて樣子を窺ひ居る。
八重　事を分けて仰しやるからは、よもや逢ひはござんす
まい。そんならお願ひが叶うてから、必らず女夫でござ

んすぞえ。それまでは、この焚き物を、お前さんぢやと思うて、大切に致しまする。違へてばし下さんすなえ。

權八　刀に掛けて、

八重　オヽ、嬉し。

　ト抱きついて居ると、助太夫、この二人が上から、手を廻して抱きしめさせる。兩人、恟りして立ち退く。

兩人　ヤア、お前は、

權八　助太夫どの、面目次第もござりませぬ。

助太　なんの面目ない事はちつともない。年若なうちは二度とは無い。お娘も恥かしがるまい。互ひに年も合ひ性の似合ひの夫婦。御親父右内どのとは、昔からの馴染みなれば、この助太夫が申し込んで、三々九度の杯事をさせるワ、嬉しいか〳〵。

　ト八重梅の脊中を叩く。

八重　嬉しい段ぢやござんせぬ。ほんにお前は、お顏に似合はぬ、粹なお方さんぢやなア。

助太　ハテ、嬉しがる奴サ。その婚禮の前祝ひに、今日爰で、

　ト權八に指をさし

しつぼりと寐かしてやるワ。

　ト八重梅、嬉しき思ひ入れにて

八重　そりや、お前さん、ほんぼんの事かえ。

　ト源吾出て來て、後にてこれを窺ひて居る。

助太　ハテ、てまへは、權八が脊へ紋の笹龍膽を、此やうに縫はせて、下着に着て居る程の眞實だものを。おれだと云つて、見捨てゝ置かれるものか。

　ト源吾、これをしつかりと見屆けて、思ひ入れして奥へ入る。

二人連れで遣ると目に立つから、そもじ、マア、先へ、神前の後へ行つて待つて居やれ。後から彼奴を遣るワ。

八重　結ぶの神の助太夫さま、そんならわたしや、先へ行て待つて居るぞえ。權八さんを、早うおこして下さんせえ。

助太　オヽサ、今に違ひなく連れて行から。待つて居ろよ。

八重　アイ〳〵。

　ト行かうとする、助太夫は最早居ないと思ふ心にて

助太　時に權八。

　ト八重梅戻りて

八重　どうぞ、間違はぬやうにして下さんせえ。

　ト助太夫、恟りして

助太　まだ行かぬかえ。
八重　必らず待つて居りますぞえ。
助太　オヽサ、今に遣るから待つて居れよ。
八重　そんなら、間違はぬやうにえ。
　ト行く思ひ入れ。
助太　オヽサ、合點だ／＼。
　トまた、八重梅出て來る。時に權八。
八重　モシ、あの神前の後に、待つて居りますぞえ。
助太　まだ行かぬかやい。今に直に遣るから、早う行つて寢て居れと云ふに。
八重　そんなら、早うおこしておくれいなア。キッと待つて居りますぞえ。
助太　オヽサ、合點だよ。
　トこの事幾度かあつて、八重梅、下座へ入る。權八、助太夫は殘る。
權八　助太夫さま、親庄左衛門相果てまして後は、親兄弟とも申し盡し難き程、お世話にあづかつたこの權八。只今の仕儀、不埒者ぢやと、必らずお愛想をお盡かしなされて下さりまするな。
助太　コレサ、野暮な男でござるわいなう。不埒なと叱る存じ寄りなれば、今のやうに取持ちはせぬわいの。
　ト思ひ入れして
　それはそれと權八、おてまへは今日右内より、眞妙劍の一卷を譲り請ける事は、誠に喜ばしいか。
權八　これは又、知れた事のお尋ねでござりまする。家に傳はりましたる寶の、再び手へ戻りまする事でござるを、喜ばしうござらいで、なんと致しませう。
助太　そんなら、先刻お云やつた通り、助太夫が恩忘れぬな。
權八　父母の恩に比べますれば、須彌山低く、蒼海淺しと申せども、幼少よりの御養育、また今日のお情、御恩の廣大なる事は、准へまするものもござりませぬ。
助太　そりや、ハヤ、さうでありさうなもの。イヤナニ、權八、おてまへの爲に、この助太夫は、なんのやうに思うてお居やる。
權八　親とも兄とも、申し盡し難き心に存じまする。
助太　世の譬へにも、一つ増さば兄とせよと云ふ事がある。誠に助太夫が恩を思はゞ、親と云ふ字を取り退けて、權八、この助太夫を、おてまへの兄にしてもらひたい。
權八　エヽ。

ト驚ろく思ひ入れ。

助太　兄弟分の、縁を結んでおくりやるまいか。

権八　助太夫さま、この権八と懇ろの契約をしてくれいとは、また座興を仰しやりますな。

助太　座興でない眞實。慈悲と云つては、蚤の食つた程も知らない助太夫が、親に離れたこの年月、匿まつて置いて世話をしたのは、おてまへの若衆振りに惚れたから。それでなくつて、なんで世話をするものだ。権八、返事はどうしてくれる。

権八　助太夫さま、顔色を變へて仰しやるからは、さては眞實。

助太　迷つた、惚れた。

権八　今までは朋輩の悴ゆゑ、武士の情でお世話下さるゝと、思ひの外の思し召し。本庄助市どのと申す、拙者より年嵩な御子息さまをお貰ひなされて、この権八に御執心とは、恥を御存じござりませぬか。よう左様な事が申し出されましたな。白井権八は武士でござるぞ。御自分様のお慰み者には、罷りなりませぬぞ。

助太　ハテ、さつぱりとした御返事だ。白井権八は武士だと立派さうに云ふが、大恩を請けた助太夫に、恥を掻せても武士か。侍ひか、茲な恩知らずの畜生め。

ト口惜しさうに云ふ。権八默つて居る。

もう、これからは世話はならない。叩き出すのがせめての腹癒せ。犬も三日飼へば、主の恩を忘れないと云ふ。大恩忘れた人畜。今まで身に引請けて、世話をしたのが口惜しいわえ〳〵。モウ、おれが内には置かれない。これからは天竺へでも、唐へでも、勝手な處へうしやアがれ。

ト権八を蹴倒し

さらばだ。

ト宮神樂になり、助太夫、下座へ入る。権八殘り、思ひ入れして、下座の方へ駈け込まうとする。源吾、出て來て留めて

源吾　待つた〳〵〳〵。

権八　離した〳〵。

源吾　イヤ、離さぬ。マア〳〵待つた〳〵。待たつしやい。

ト無理に押へ

こな様は、聞き及んだ白井権八どの、出合ひ頭に今の様子、見ました。聞きました。さぞ腹が立たう、尤もだが、

権八　わしが一番、云つて聞かせたい事があるから、留めるなら、わし次第にして、マア、待たつしやりませ。

ト権八、源吾を見て

権八　拙者が名まで御存じの上、云ひ聞かす一言あると、仰つしやる其許様は。

源吾　岩井右内が方に同居いたす、赤堀源吾でござります。

権八　先達て御高名は承はり及びましてござる。して、拙者へ源吾どのが、仰せ聞けられたいとは、何事でござるな。

源吾　貴殿が親御の敵がござるが、御存じでござるかな。

権八　これは變つた事を仰せらるゝが、親庄左衛門は、上へ諫言を申し過しまして、切腹いたしたげにござります。拙者は幼少の砌りで存ぜねども、乳母が物語りで承はつてござる。然らば親の敵と申す者はござりませぬ。

源吾　それは大きな御料簡違ひ。親御庄左衛門どのは、殺し手がござる。

権八　切腹いたしたと申す庄左衛門を、殺し手があると仰しやるが、して、その敵を御存じかな。

源吾　存ぜいで、粗忽なる事が申されませうか。権八どのの親の敵と申すは。

権八　何者で、名は何と申しまするな。

源吾　岩井右内。

ト思ひ入れにて、ヂッと云ふ。

権八　エヽ。

ト恟りする思ひ入れ。

源吾　驚の潰れるは尤も。右内が敵だと申す仔細は、白井家の重寶、質妙剣の一巻、心を掛けし岩井右内。密かに忍び入つて庄左衛門を殺し、切腹の體に拵らへ、秘書の一巻を奪ひ取つて、立退きたる無道の右内。眼前に親の敵を置きながら、當座の遺恨に身を果さうとおしやるゆゑ、武士の情にお留め申してござる。

権八　それはハヤ、左様な事のあるまいとも申されませねども、現在右内どのと、御同居の其許様が。

源吾　訴人いたすは、道が違つて居るに依つて、偽はりを申すと思し召すか。誠に其許には、なんの由縁もござらねば、お疑ひは御尤も。例へ世話になりませうが、非道な奴を庇ひますれば、矢ッ張りその身も非義非道。又どうしてこの事を、拙者が存じて居ると思し召しませうが、拙者が親、赤堀源太夫と申す者、その頃菊地家に奉公仕

つて、僅かの間でござつたれども、親庄左衛門どのに、兵術の指南を受けて居つたれば、親御樣の討たれさつしやれた事を殘念に存じ、病氣いたす際まで、拙者へくれぐれ申し置いて相果てました。親源太夫が爲にも、師匠の敵でござれば、まんざら由緣かゝりのないと申すものでもござらぬ。とくと御思案なされて、親の敵を討たつしやれずば、武士道が立ちますまい。權八どの、御合點が參つたか。

權八　御深切の思し召し、千萬忝なう存じます。先刻右內どのに對面いたして、貞妙劍の秘書を、拙者へ讓り下さるゝとのお約束を致してござれば、一卷を受取りましたる上、とくと事を質して、見まするでござりませう。源吾どの、これにゆるりとお出でなされませい。

ト唄になり、權八思ひ入れして奧へ入る。源吾殘る。

源吾　どの道にも、助太夫は源吾が手に掛けねば、意趣も晴れず、打ちのめされた恥辱も雪がれない。今のやうに權八を、しやくり散らして、彼奴に右內を締めさせれば、濡れ手で意趣晴らし。右內も手者なれば、權八を生けては置くまい。爰で色事の遺恨を晴らして、古い奴だが、色めは此方へせしめ、滓の離れぬ仲とお目にかけるのだ。これから又、右內を一しやくりしやくりかけて、番狂はせをやらかすべい。どうやら段々と、理窟が面白くなつて來るやうだわえ。

ト奧にて神事の刻限と呼ぶ。宮神樂になり、判官、以前の形にて、烏帽子、長劍を載せたる三方を持ち出て來る。主水、重綱、助太夫、源之丞、右內、大藏、各各以前の形にて出て來る。宮奴一人、綺麗なる誂らへの鳥籠へ鳥を入れて、てんでにそれを持つて出て來て、鳥籠をてんでに前へ置いて、舞臺の正面へ並ぶ。源吾は片脇へ寄つて居る。神主、御幣を持ち、舞臺の眞中に構へて居る。

重綱　當社八幡宮、放生會の神事、急いで取行うてよからう。

皆々　ハア。

源吾　御神事、暫らく待ちませう。

トそこへ出る。右內これを見て

右內　赤堀源吾の腰拔けめ、神事暫らくとは、何ゆゑ留めたのぢや。すッ込んで居らう。

ト叱りつけて

彼れにお構ひなう、神事を取行ひ召されい。

源吾　イヽヤ、ならない〳〵。今日の神事を行つたらば、八幡の祟りで、この席に並んだ者は、一人も殘なくたばり態はせまい。どこまでも、神事を始めさせる事はならねえ。

判官　待て、赤堀源吾。神事を取行へば、これへ並んだ者に祟ると聞いては、その分には捨て置かれぬ。そして又、なんで神事はならぬのだ。

源吾　神前が穢れましてござる。

主水　神前が穢れたとは。

源吾　神の御前で、色事をおッ始めて穢したに依つて、神事はならぬと留めたのだ。

右内　待て赤堀源吾。して、その神前を穢せしは何奴ぢや。其方しかと見屆けたるか。

源吾　見屆けねえものを滅法界に、云ひ出すものでござるか。その神前を穢した奴は外でもない。

ト奧より、八重梅を引摺つて來て

女め、そこへ出やアがれ。

ト舞臺の眞中へ引据ゑる。

八重　源吾さん、どうさしやんす〳〵。

右内　源吾め、理不盡に娘を捉へて、なんとするのぢや。

源吾　なんともしないが、此奴が色事で神前を穢した科人だから、爰へ引摺り出したのサ。

右内　なんと云ふ。源吾、娘が不義をひろいで神を穢したとか。して、その相手は、なんと云ふ男、何者ぢや。

源吾　白井權八と八重梅が色事をして、神前を穢したのだ。

源之　お待ちやれ源吾。妹と白井權八、不義いたしたとは、なんぞ慥かな證據を捉へてお云やるか。

源吾　證據を引摺出して見せべい。サア、女め、肌を脱でアがれ。

ト八重梅、嫌がり、いろ〳〵するを、上の小袖を片袖脱がせ、俱利伽羅の紋の附いたる、以前の下着になる。

右内どの、この紋所を見知りがござらう。こりや、白井權八が替へ紋だ。こんな派手な事をしてけつかるから、そこで神前を穢したものサ。

大藏　道理でおいらが、ちよつと觸つても、ぴん〳〵すると思つたわえ。

判官　不義をひろいで神前を穢し、神事を延せば、其奴は大きな科人だ。

主水　イヤ、判官どの、左樣にも仰せらるゝな。如何に源吾が不義なりと申せども、神前を穢したりと、女の口か

ら白狀も致さず、また不義の男もこれへ出ませねば、神前を穢せし科人と、一概にも申されまい。罪の疑はしきを輕うすと申せば、こりや其まゝに差置かれ、放生會の神事、取行はるゝがようござりませう。

助太　成淸公、畏れながら、御吟味が行き屆きませぬやうに存じ奉ります。

主水　過言なる助太夫。何ゆゑ以つて政道が行き屆かぬと申すのぢや。

源吾　不義の女は打悄れて、一言もござらねば、これその罪に落入りましたる證據。相手の男もこの邊に、うろついて居るでござらう。引ッ捉へて兩人とも、神事を延しましたるゆゑ、刑に行なひませずば、御政道とは申されますまい。

主水　イヤ、政道は立つ。

判官　罪ある奴を寛がせにして、政道が立つとは、

ト主水、舞臺先へ來て

主水　その政道の立てやうは、

ト刀の鐺にて鳥籠を打返すと、トヒヨ〳〵にて吹替への鳥、舞うて上がる。

皆々　これは、

主水　放生會の神事相濟む上は、不義者の咎めもなく、これで政道は立たうがな。

ト右内、八重梅が襟髮を捉へ

右内　うせう。

ト引寄せて、扇を持つて散々に叩く。

おのれはなア。いつの間に天魔が入れ替つて、親の面へ泥を塗る不義徒ら。母の無い奴と甘う育てたが、却つて毒となつたかえ。いづれも樣の手前とても、どうも其まゝに捨て置かれぬ。いつその事

ト刀へ手をかける。源之丞、慌てゝ留めて

源之　親人、マア〳〵、お待ちなされて下されませい。

八重　思ひも依らぬ父さんに、恥を與へし不孝者。兄さん、留めずに父さんの、お手にかけて下さんせいなア。

ト泣く。

右内　よい覺悟だ。觀念せい。

トまた刀へ手をかける。重綱、右内が刀の鐺を摑んで

重綱　待て右内、そちや何ゆゑ娘を手にかけるのぢや。

右内　不義者でござるゆゑに、

重綱　放生會の神事は、事無く相濟むからは、例へ不義者でも咎むるに及ぶまい。生けるを放つ庭に於て、命を斷

たば、それこそ却つて法を破るの罪人ならん。控へて居
らうぞ。

右内　誤まり奉りましてござります。

源之　寛仁大度の御計らひにて、父が怒りを慰めさせられ、妹が命お助け遊ばされまする段、冥加もない御前のお計らひ。

ト八重梅、源之丞、思ひ入れあつて

源八　有り難う存じ奉ります。

主水　神事相濟みまする上は、上使にも御歸館あつて、然るべう存じまする。

判官　イカサマ、神事濟んだら歸りませう。

重綱　御旅館までお見送り奉りませう。右内親子は相殘つて、掃除など申しつけてよからう。

右源　畏まり奉つてござりまする。

重綱　重綱が供には錦郡大藏、八重梅の兩人。

主水　助太夫、供いたせ。

助太　ハア。

主水　判官どの、お立ちあられませう。

判官　いづれも、お來やれ。

主水　御上使の

皆々　お立ち。

ト下がり葉にて、判官、烏帽子、長劍の三方を持ち先きに立ち、主水、重綱、助太夫、大藏、八重梅附いて花道へ入る。源吾、右内、源之丞殘る。權八奧よりバタバタにて出て來て、右内が側へ來て思ひ入れあつて

權八　右内さま、これにお出でなされまするか。先刻の約束の眞妙劍の一卷、お讓り下されませぬかな。

ト右内、睨みつけて居る。

イヤサ、右内さま、先刻お讓り下されませうと、仰せられた秘書の一卷、お渡し下されませぬか。

ト右内、默つて居る。權八、手持ち無沙汰になる思ひ入れ。

如何やうに申しても、有無の御返答のござらぬは、お心持ちでも惡うござりまするかな。それは格別、若年なれども白井權八、武士と武士とが白刃を合せまして、お讓り下されいとお願ひ申しましたれば、如何にも讓りくれうと、お心よい御挨拶でござつたゆゑ、家に傳はる秘書の一卷、再び權八が手に戻りまするは、白井の家を引興すべき印と、人にも吹聽いたし、誠に天にも上る心地いたして、只今一卷の儀申し出しましたれば、先刻の御挨

拶と、打つて變へたる、お顏まで權八を睨みつけ、一言の御返答ござらぬは、如何の儀でござる。

ト思ひ入れして

聞えました。俄かにこりやお心變りで、一卷が惜しうなりましたな。左樣かな。もしも左樣のお心入れでは、お互ひに武士道が立ちませぬ。右内さま、右内どの、善とも惡とも、有無の返答が承はりたい。

ト思ひ入れして

これは〳〵不調法、一卷をお讓り下されば、親人も同然のおてまへ樣へ、詞を荒らしましたは、若さゆゑとお聞き流しになし下されて、何卒その一卷、お讓り下されうならば、この上もござらぬ御高恩。手を突いてお願ひ申しまする。申し〳〵。

ト思ひ入れして、源之丞が前へ來て

源之丞どの、先刻よりお聞きの通りの仕儀でござりまする。御親父樣より一卷お讓り下さるゝやうに、慮外ながらお願ひなされて下されまいか。お顏持ちと申し、此方に覺えはござらねども、もし不調法な儀でもござつて、お腹立ちでもござらば、幾重にもお詫び仕りませう。いづれ一卷をお讓りの儀、偏へにお願ひ申しまする。

ト源之丞、默つて居る。權八、手持ちなき思ひ入れにて、源吾の側へ來て

先刻御意得ましたる赤堀源吾どの、昨今ながら其許樣を、お侍ひとお見かけましてお願ひ申しまする。右内どのより一卷お讓り下さるゝやうに、お願ひなされて下されませい。誠に武士の情と申すはこの節、偏へにお頼み申しまする。

ト此せりふのうち、源吾、後向きになりて居る。

いづれも同じ無言の事は、左樣なら、どのやうに願ひましても、一卷は下されぬぢやまで。ホイ。

ト思ひ入れする。

右内　悴、最早日も晩景に及ぶ。今宵は又月見の祝ひ、遲なはらぬうち、歸宅いたさうではないか。

源之　お供仕りませう。

ト源吾が方を見て

源吾どの、親人は如何やらに存ずるとも、今宵はめでたき良夜なれば、拙者が部屋へ同道いたし申さん。一緒にお來やれ。

源吾　お心ざし、忝なう存じまする。

ト思ひ入れ。



初演の繪番附

右内　悴参れ。

ト行かうとする。

權八　コレ、モシ。

ト留める。

右内　見下げ果てたる不屆き者。

ト思ひ入れにて、留める手を振り拂ひて

悴来い。

ト唄にて右内先に、源之丞、源吾附いて花道へ入る。權八残り、思ひ入れあつて見送り

權八　最前、あの赤堀源吾が申すには、父庄左衛門どのは右内が手にかゝり、お果てなされたとの事。今の今まで偽はりであらうと存じて居たが、約を變する心では、大方それも誠であらうか。いづれの道にも岩井右内を、打ち果さねば立たぬ身の上。今宵のうちは過されまい。どこのいづくに待ち合はすると云ふ、書通を送りたいものぢやが。

トそこにある以前の八重梅が落したる、紅筆を取上げ

幸ひの處にこの紅筆。

トあたりを見て、石燈籠を見附け、思ひつきたる思ひ入れにて、石燈籠の側へ来て、燈籠の笠を取つて、懐中の鼻紙へ紅筆にて油煙を取り、狀を認め

誰れぞにこれを、遣りたいものぢや。

ト寛藏、以前の形にて、下座より出て来て花道へ行く。權八これを見附けて

コリヤ〳〵〳〵。

ト寛藏を呼ぶ。

寛藏　このお若衆は、わしになんぞ用でもあるのか。

權八　貴樣は、右内どのへ行く人ではないか。

寛藏　成る程、おらア、右内さまの奴だが、それがどうした。

權八　それは幸ひ。そんならこの狀を、右内どのへ屆けてくりやれ。

ト出す。

寛藏　面倒な。屆ける事は嫌だ。

權八　武士の頼む事を、推參千萬な奴。

ト反りを打つ。

寛藏　ナニ〳〵、コレサ、持つて行くよ。さりとは親方、氣が短かい。

ト怖々そこにある狀を取上げて

ドリヤ、行つて、月見の團子でも食ひませう。

ト ごん〳〵になり、寛藏、狀を持つて向う花道へ入る。權八獨り殘り、刀を拔いて見て、思ひ入れして、懷の一枚をスツパリと切り、直ぐに袴にて刀を拭くと、これをキツカケに

カチ〳〵〳〵〳〵〳〵と　　ひやうし幕

第一番目四建目　岩井右內屋敷の場

役名——岩井右內。同一子、源之丞。同娘、八重梅。同下部、寛藏。本庄助太夫。同一子、助市。同下部、三五平。赤堀源吾。白井權八。

本舞臺、三間の間、正面二重舞臺、奧深に飾りつけ、向う貼つけ綺麗なる襖。前通り塗り骨障子を立て、欄間、蹴込み綺麗にして見附け柱、前通り綸麗なる葭垣に、萩の植込みに花、見事に咲き亂れ、この側に手水鉢、風流なる枝折り戸をつけ、爰に右內、三建目の形にて刀を持ち、助太夫、羽織袴にて、刀を押つ取つて兩人爭ひて居る。八重梅、振り袖着流し、源之丞、三建目の形にて、助太夫右內を、八重梅、源之丞取支へて居る。蔀の內より、ちよん〳〵打ち續け、唄にて幕明く。

八源　お靜まりなされませい〳〵。

ト留める。

助太　どうあつても、眞妙劍の一卷、見せる事はなりませぬかな。

右內　眞妙劍の一卷の儀は、白井庄左衞門存生の砌りより、御自分が讓り請けたいと望まれたれども、許さぬ程の秘書。右內が手に入り、助太夫どのへお目にかけ、庄左衞門の心ざしが無足致されぬゆゑ、見せる事は罷りならん。殊に親子ともに只今歸つて、未だ上下さへ取らぬ所へ來て、わつぱさつぱと尾籠至極。とつとゝ歸り召されい。

助太　助太夫も武士だ。見ようと云ひ出しては、嫌でも應でも秘書の卷き物、押ッ披いて見ねばならぬ。體に手足のついて居るうち、右內、一卷を見せまいか。

右內　ならぬと云ふに、是非見ようと云へば、手は見せぬぞ。

助太　ナニ、推參千萬。

ト また詰め寄る、八重梅留めるを聞かず、双方拔き合

せ、源之丞、八重梅あちこちと留め、トゞ、そこに有り合せたろ二枚屏風にて双方の刀を押へ、源之丞、屏風の上に乗り

源之　御兩所とも、マア／＼、お待ちなされませ／＼。

助右　イヤ、放せ／＼。

源之　お二人ともに、年來の御懇意でありながら、これしきの事にお命を果されましては、祿を賜はる御主人へ、不忠と申す處へお氣が附きませぬか。先づ／＼お鎭まりなされませい／＼。

八重　兄さんの仰しやる通り、殊に今日は、めでたい月見。どうぞ料簡して下さりませい／＼。

右内　イカサマ、三つ子に習うて淺瀨を渡ると、倅が詞で思ひ廻せば、不忠と云ふ所へ心附かぬは老人の短慮。御自分は兎も角も、右内は刀を納め申さう。

助太　おてまへがその心なれば、助太夫も、最早納める料簡でござる。

右内　然らば引き召されい。

助太　御自分から。

助源　イザ。

ト源之丞、屏風を退ける。双方刀を納める。源之丞思ひ入れして

源之　若輩者の詞をお用ひ下され、お鎭まり下されまして有り難う存じまする。

八重　ほんにわたしは、どうなる事かと、思うて案じたよりは、早うお心も打解けて、此やうな嬉しい事は、ござんせぬわいなア。

助太　誠は、月見の祝儀をも申す所を、理不盡に詞を荒うして、今さら面目次第もござらぬ。

右内　拙者とてもその通り、解けて見れば、ナニ、聲高に申さいでもよい事を。これと申すも四十年來のお出合ひゆゑ、我まゝから起る事でござる。

助太　斯う心が解け合へば、矢ツ張り替らぬ昔馴染み。今宵の月を見ながら、お邪魔でも、夜とともにお物語り申さうか。

八重　父さんもお一人で、お淋しうござんせう。見苦しくともお泊りなさんして、お話しなされて下さりませ。

源之　助太夫どのゝ御逗留ならば、源之丞も後學の爲、お二人のお話しを承はるでござりませう。

右内　雨降つて地固まるとやら。宵の口論で、好い話し相手を儲けた。イヤナニ、娘、芋や團子では酒は呑めまい、

なんぞ一種申し附け、助太夫どの、奥の廣緣で、月見にあれへお出でなされい。

助太　どこへなりともお供いたして、月を肴に一獻おねだり申さうか。

八重　左様なら、斯うお出でなされませい。

助太　然らば右内どの。

右内　御案内いたすでござらう。

助太　サア、ござりませ。

ト唄になり、右内先に助太夫、八重梅、奥へ入る。源之丞殘り、思ひ入れして

源之　眞妙劍の一卷を見せよと、拔き放したる刀を、源之丞が詞一つで、意趣なく鞘へ納めて、打寛ろいだあの助太夫。名月を幸ひに逗留せんと云ふも心得ぬ。彼れこれ心の許されぬ今宵の仕儀ぢやな。

ト思ひ入れする。寛藏、前の形にて、權八が渡したる狀を持つて、向うより出て來る。直ぐに本舞臺へ來て、枝折戸を明け、内へ入る。

寛藏　若旦那、これにお出でなされましたか。

源之　寛藏、今歸つたか。今日は終日大儀であつたな。

寛藏　イヤモウ、何も大儀なと申す程の、御奉公でもござりませぬ。

源之　其方が持つて居るは、手紙ではないか。

寛藏　左様でござりまする。この手紙について、危ない目に遭ひました。

源之　どう云ふ目に遭うた〳〵。

寛藏　八幡様から歸りがけに、鳥居先へ參りますると、美しい前髪がこの狀を、親旦那へ屆けてくれいと申しますから、面倒だ嫌だと申したれば、刀へ反りを打つて、既に危ない目に遭ひました。

源之　それはハヤ、稀有な目に遭つた。ドレ、その狀これへ見せい。

寛藏　ハイ。

ト狀を出す。源之丞取上げ、上書を見て

源之　ムウ、岩井右内どのへ、白井權八。

ト開いて見て

ナニ〳〵、今日の仕儀默し難く候ふ間、今宵

ト讀み掛け、驚ろく思ひ入れ。寛藏怪しむ。

書狀は源之丞が受取つて置く。行て休め。

寛藏　ネイ。

ト行かうとする。

源之　コリヤ〳〵待て。親仁樣へはこの樣子を、必らずとも沙汰いたすな。
寛藏　ネイ。
源之　行け。
ト合ひ方になり、寛藏、奥へ入る。源之丞また、狀を出して
今宵子の刻まで、城外に待ちかけて、打ち果さんと云ふ權八がこの書狀。おのれ人非人の白井權八、妹八重梅と不義を致し、その事に就いて親人も源之丞も、滿座の中で面皮をかいたるゆゑ、放埒者と見限つて、お讓りなされぬその一卷。それを遺恨に申さば、此方から打ち果すべき白井權八、今宵九ツの鐘を待つて城下に行き、權八を打ち果さうか……ア、イヤ〳〵、もし仕損じては親人の嘆き、岩井の家の恥辱。また運に叶うて權八を討取らば、不義とは云へど妹が嘆き。又一つには、岩井右内こそ讓るべき秘書の一卷を惜み、權八を討つたりと、世上の沙汰にかゝる時は、親仁樣のお名の恥。所詮今宵は其まゝに捨て置かれぬ。親人にさへお知らせ申さねば事は濟む。其うちには手段もあらう。果し狀よりは、差當つたる今宵の客人。助太夫が心元ない。
ト思ひ入れして
ドリヤ、奥へ行つて話さうか。
ト唄になり、源之丞、奥へ入る。直ぐに合ひ方。八重梅、行燈を提げ出て來る。源吾、寢道具の包みを擔ぎ、八重梅に附いて出る。
源吾　八重梅さま、この寢所はどこへ取るのだえ。
八重　アイ、その床は、この一間へ敷くのでござんす。わたしが敷く程に、お慮外ながら手傳うて下さんせ。
源吾　寢所は愚か、飯炊きでも水汲みでも、お前のしなさる事なら、手傳はないでどうするものだ。それはさうと、こりやアマア、誰れが寢る所でござんすえ。
八重　これはな、今宵本庄助太夫さまが、奥へ來て話して居やしやんすが、泊ると云ふてぢやさかい、助太夫さまの寢やしやんす床ぢやわいな。
源吾　そんならアノ、本庄助太夫の寢るのかえ。
八重　アイ、助太夫さまの床は爰ぢやが、お前はマア、けうとい物の聞きやうをさしやんすの。
源吾　お客があると使はれるから、つい今のやうに仰山に聞くものサ。どこぞぢやアかいまがりに、居候ふの正體を顯はす。ハヽヽヽヽ。



初演の繪番附

ト此うち八重梅、二重舞臺の障子を明け、行燈を内へ入れて

八重　サア、敷いて下さんせ。

源吾　オツと合點だ。

ト夜着包みを解いて、二重舞臺へ蒲團を敷き、枕を出して

枕と云ふ奴も、仁王樣と同じ事で、一つあつては淋しいやつだ。

ト云ひながら、八重梅が手を捉へる。

八重　おかしやんせいなア。

源吾　なんのこつた〳〵。そんなにぴん〳〵する事はないわいな。エヽ、聞えた。その振りやうでは、今日晝、八幡での事が腹が立つのか。野暮め。あの敵役も、つゝまる所は、そもじが可愛いゝからだわな。どうしてくれるくれる。

ト側へ寄らうとする。八重梅、夜着を取つて

八重　知らぬわいなア。

ト夜着にて煽りつけ、直ぐに夜着を床の上へ載せる。傍らの屏風を枕元へ立てる。

源吾　斯う床を取つた處を見ては、どうも堪らない。

ト八重梅に抱きつく。

八重　おかしやんせいなア。

ト源吾を突き倒し、奥へ入る。源吾殘り、寢所を見て、思ひ入れ。

源吾　おのれ本庄助太夫、今宵泊るは百年目、晝の恨みを晴すは今の間。

ト一腰を拔き、手水鉢にて寢刃を合せ

月見酒のほろ醉ひ加減、前後も知らぬ高鼾を合圖に、縁の下から只一刀。ソレ。

ト思ひ入れして、蹴込みを切り破りにかゝると、バタバタになる。ちやつと拔身を鞘へ納めると、寛藏、肴籠へ錢を入れて、提げて奥より出て來て、源吾を見て

寛藏　源吾さま、爰にござりまするか。旦那が鰹をお前に買つて來てもらへと云ひつけなさつたが、奥にござらなんだから、おれが忙がしい手を明けて、買ひに行からと思つたが、よい所であつた。ちよつと鰹を一本買つて來てくんなさい。コレ、錢も籠の中へ入れてあるよ。

ト源吾へ提げ籠を渡す。

源吾　てまへ又、買ひに行けばよいに。

寛藏　おらアそんな事ぢやアない。臺所が忙がしくて、轉

躊躇ひをするわな。早く行つて來てくんなさい。

ト源吾を無理に、枝折り戸の外へ突き出す。

源吾　仕方もない。ドリヤ、行つて來ようか。

ト合ひ方になり、寝所へ心を殘す思ひ入れあつて、籠を提げ向うへ入る。寛蔵は奥へ入る。と、助太夫、袱紗に包みし一卷を持ち、奥より出て來て

助太　若井右内が酒が廻つて、少しトロ／＼やつた所で、肌身も離さぬこの眞妙劍の秘書を、まんまと奪ひ取つた。これからは此企の判官と心を合せ、菊地の家を横領すれば、助太夫が念願成就、忝ない。

ト一卷を戴き懐へ入れる。

これさへ手に入れば、泊つても居られまい。ソツと逃げて。

トそろ／＼表へ出かゝる。右内、源之丞、八重梅、奥より出て來て

右内　助太夫どの、どこへ行かれた。助太夫どの／＼。

ト少し醉ひたる思ひ入れにて、助太夫を見附け

イヤア、助太夫どの、手の惡い。座敷を拔けて、これへ逃げてお出でとは。

助太　イヤ、全く逃げは致さぬが、少々宿の用事を思ひ出しましたから、歸らうと存じて

右内　それでこれへお出でか。

助太　左樣でござる。

八重　お前樣も、あれ程泊らうと仰しやつたに依つて、この座敷へ此やうに、お床ものべて置きましてござります。月も曇つて、どうやら降りさうな空合ひぢや程に、少々の御用なら、今宵は泊つてお出でなさるゝが、ようござんせうぞえ。

源之　イヤ／＼、妹、さうでない、御仕官のお身の上、御用とあらば、何時でもお歸し申すがよいて。

八重　それでも、あんまりお愛想が無いやうで、氣の毒なものぢやわいな。

源之　ハテサテ、惡留めはせぬものぢやて。

右内　御用があると聞いて、泊めまいと云ふ兄も尤も。あんまり愛想が無いから、泊めうと云ふ妹も道理。そこでこの右内は、どちらつかずの中を取つて、歸らしやるとも、泊らしやるとも、お客人のお心次第。ナニ、助太夫どの、好い料簡でござらうがの。

助太　拙者も泊りたいは山々なれども、公用なれば、どうも泊つては居られませぬ。

八重　それ程に仰しやるなら、叶はぬ御用でござんせう。今も降りさうな雲行き。提灯、傘を持たせて、寛藏を送らせ申さうではござんせぬか。

源之　これは好い所へ氣が附いた。寛藏參れ。

ト呼ぶ。奥より寛藏出る。

寛藏　御用でござりまするか。

右内　大儀ながら、提灯と傘を持つて、あなたのお屋敷まで、送り申し上げて參れ。

寛藏　畏まりました。提灯と傘を取つて參りませう。

ト奥へ入る。

助太　降りさうでも月夜でござれば、提灯にも及びませぬ。

ト寛藏、丸に井の字の紋附きの提灯、同じ紋のついたる蛇の目の傘を持つて出て來る。

存じ寄らぬ今宵は、御馳走にあづかり、忝なう存じまする。これでお暇仕りませう。

右内　靜かにお出でなされませい。

助太　然らば近日。

右内　必らず、又お話しにお出でなされませ。

助太　皆様、お休みなされい。

右内　ようお出でなされました。

ト靜かなる三重になり、助太夫、寛藏を連れて向うへ入る。

源之　親仁様、御酒機嫌か、いかうお疲れのやうにお見えなされまする。

八重　もう、お休みなされませぬか。

源之　それがよからう〳〵。

八重　そんなら私しは、奥の間へお床をのべて。

ト行かうとする。右内留めて

右内　イヤ〳〵、モウ、奥へ床をのべるまで待つて居られぬ。幸ひ〳〵この床、爰に寐よう〳〵。

ト二重舞臺へ上がり、床の上に上がる。

源之　兎も角もお心任せがよからう。

右内　そんなら、爰にお休みなされませ。

ト右内支度をして寢る。八重梅、夜着を掛け、枕元の屏風を引寄せる。舞臺へ下りて障子をさして

兄さんもマア、お休みなされませ。

ト源之丞、二重舞臺の方へ手を突いて

源之　御機嫌ようお休みなされませ。サア、妹おちや。

ト捨て鐘になる。源之丞、八重梅奥へ入る。矢張捨て鐘にて源吾、以前の形、尻を端折り、急ぐこなしにて

向うより出て來て、直ぐに本舞臺へ來て、枝折戸の外より内を窺ひ、ツッと内へ入り、障子を覗き、手水鉢の水を敷居へ流し、障子を明け、入らうとして少し思ひ入れあり。此うち始終誂らへの合ひ方。庭の飛石を取上げ二重へ持つて上がり、この飛石を右内に打ちつける。右内、苦しむ思ひ入れあり、源吾、一腰を拔き、右内を刺し殺し、舞臺へ下りる。この物音に驚ろき、源之丞、奥より雪洞を持ち出て來て、源吾に行き合ふ。源吾、雪洞を打ち落し、兩人暗闇のこなしにて二重舞臺へ上がり、キッと思ひ入れする。捨て鐘になり、ちよん／＼のキッカケにて、下座の方より欄干の際まで高塀を引き出す。時の鐘、雨車の音。權八、振り袖衣裳、袴を少し挾み、急いたる思ひ入れにて、向う花道より出て來て、直ぐに本舞臺へ來て、鐘の音に指を折つて見る思ひ入れ。

權八　九ツの鐘。

ト思ひ入れして、刀の下げ緒を取つて襷にかけ支度をする。矢張り、ごん／＼にて、寛藏、以前の提灯を提げて出る。後より助太夫、以前の形にて舞臺へ來る。權八、この提灯の紋所を見て領づき、ツカ／＼と寄つて寛藏と顏合せ

其方は右内が下部か。

ト拔き打ちに提灯を切り落す。寛藏、驚ろいて提灯を捨て下座へ逃げて入る。直ぐに助太夫へ切つてかゝる。助太夫拔き合はせ、見事なる立廻りあつて、ト、助太夫を大袈裟に切り倒す。助太夫、アッと倒れる。權八、方々へ心を附けて居るうち、助太夫起き上がつて、手を負ひし思ひ入れあつて

助太　詞もかけず途中の狼藉。何者なるぞ。

ト尋ねるうち、權八見て驚ろき

權八　ヤ、、、左樣仰せらるゝは本庄助太夫どのでござらぬか。

助太　其方は白井權八か。

權八　提灯の印を見れば、丸に井の字。打ち果さんと思ひ詰めたる岩井右内と思ひの外、助太夫どのを手にかけしか。ホ、、ホイ。

ト思ひ入れ。

助太　おのれ權八、憎くい奴の。人違ひとは云はさぬ／＼。何意趣あつて、斯やうに卑怯な働らきを致す。手は負うたれど助太夫。サア、尋常に勝負いたせ。

權八　イヤ、全く以て其許樣を、手にかけまする所存はござらぬ。鴫八幡の境内にて、打ち果さんと存じたる岩井右内と思ひの外、粗忽の段は幾重にも、御免なされて下りませ。

助太　人でなしの權八、恩義を忘れたるおのれが振舞ひ。察するところ高恩請けたる身共を疎んじ、仇で報ずる人畜生。此まゝで置くべきか。おのれ、助太夫が。

ト立ち上がつて詰め寄る、權八、手を突いて

權八　如何やうに仰せらるゝとも、申し譯なきこの權八。御免なされて下さりませ。

助太　安穩で置くべきか。身が手にかゝつてくたばり居らう。

ト權八に切りかける。この立廻りのうち、助太夫が懷中より、以前の一卷を取落す。權八、手ばしかく取上げ

權八　ヤ、ヽ、ヽ、こりやコレ、眞妙劍の傳授の一卷。

ト驚ろく。助太夫、直ぐに引ツたくり、懷中して

助太　寄るな。この一卷がなんとした。

權八　その一卷は親どもより。

助太　右内が所持して居つたれども、この助太夫が手に入つた。おのれが欲しがる傳授の一卷、今引ッ裂いて腹癒せん。權八、それにて見物せい。

ト引裂かんとする。權八その手に縋り

權八　お待ちなされい助太夫どの。この一卷ゆゑにこそ、岩井右内を打ち果さんと、存じましたるこの權八。身にも命にも更へ難き、親庄左衞門が自筆の形見。凶事ござつては不孝の一つ。この儀ばかりはお情に、拙者へ下し置かれませう。

助太　それ程に申す事なら、願ひの通り其方へくれう。

權八　これはハヤ、早速有り難うござります。

助太　遣りは遣るが、身共が心に從はぬ、戀の敵の權八へ、寸々に引裂いて、それからくれて遣らう。

ト引裂かうとする。權八その手に取りつきて

權八　お情ない助太夫どの、是非引裂かんとお云やれば、お手向ひ致してなりとも、この場に於て申し請けねばなりませぬ。

助太　小癪な奴の。たつた今、ドレ、引裂いて。

ト破らうとする。權八ブル／＼慄へて

權八　例へ人非人とも云はゞ云へ。是非に及ばぬ助太夫。

ト持ちたる一卷を引ッたくりにかゝる。助太夫、直ぐ

に抜き放すと打ち落し、その刀にて物の見事に切り下げる。これより時の鐘、忍び三重になりて、助太夫立ち上がり、おのれ權八と切り結ぶ。トヾ權八、助太夫を仕留める。これより權八、心を落ちつけて、血刀を拭き、鞘へ納めて形を直し、助太夫が刀も納め、鼻紙、扇を取揃へ、死骸の側へ置き、立退かうとして思案の思ひ入れにて

親助太夫どのを討つたれば、子息助市どの御兄弟にも、敵が知れずば、さぞ殘念ならん。この權八も庄左衛門が悴、此まゝにて立退かんも卑怯至極。何がな證據に……

それ〳〵、この印籠こそ、人も知つたる稻葉山の印籠。裏の蒔繪に、まつとし聞ば今歸り來ん。この印籠を、この死骸の側に置かば、敵は權八。この身の願ひ叶ひなば、兄弟の御子息に、名乘つて勝負を仕らん。

ト腰に下げたる印籠を取つて、助太夫が側に置き、以前の巻き物を出して戴き、朧月に透してよく改め、懷中して叮嚀に包み、内懷へ納め行かうとして居る。後より寛藏、ツカ〳〵と寄つて

寛藏　權八見付けた。

トかゝる。これを見事に藪垣へ投げ込み、有り合はせたる傘をさして思ひ入れ。大拍子の神樂になり、權八、花道へ静かに入る。と東の棧敷下より下部三五平、やつし奴の形にて、助太夫が紋の付いたる箱提灯を提け、紙合羽竹笠を着て出て來る。本庄助市、袴ばかり着流し、大小にて傘をさし、足駄を穿き出て來る。

三五　大旦那も、遲いお歸りでござります。

助市　定めて御酒が過ぎたであらう。

ト云ひながら本舞臺へ來て、三五平、助太夫が死骸に突き當り、提灯を出して見て

助市　ヤア〳〵、それに何者やら、寢て居るさうな。

三五　面妖、月見の晩には、生醉ひが多うござります。

助市　その提灯、これへ〳〵。

三五　ネイ〳〵。

ト提灯にて助太夫の死骸を見る。

助市　ヤ、、、こりや親人、助太夫さまこ

三五　ナニ、親旦那樣が。

トこれより兩人驚ろき、助太夫を引起し、いろいろ介抱する思ひ入れあつて

助市　親人さま〳〵。

三五　旦那さま〳〵。

助市　助太夫さま〳〵。
三五　大旦那さま〳〵。
助市　こりや、モウ、絆は切れたか。
三五　お心が附きませぬか。
助市　三五平。
三五　助市さま。
兩人　ハア、、、。
　ト死骸に取りつき泣き落す。
助市　斯う云ふ事もあらうかと、お迎ひに參りしが、その甲斐も無く、かゝる御最期。弟助三郎もこの樣子を聞くならば、さぞや殘念であらうわやい。三五平、敢へなき父の有樣ぢやなア。
　ト泣き落す。
三五　夢を見たやうな、親旦那樣の御最期。樣子を見まして、呆れて物も申されませぬ。
　ト死骸に取りつき泣く。此うち助市、身拵らへして花道の方へ駈け出す。三五平驚ろき
若旦那、助市さまには、いづれへお出でなされまする。
　ト助市とまり
助市　うろたへたるか三五平。橫死をお遂げなされたる、助太夫さまの敵を詮議に、この助市は參るのぢや。
三五　サア、それは御尤もではござれども、この場に於て何者とも、相手の知れませぬに、雲を當途のあなたの御詮議。お急きなさるゝ所でない。先づ〳〵お待ちあられませう。
助市　でも、その敵は遠くは行くまい。
三五　して、何者でござりまするぞ。
助市　サ、それは。
三五　先づ〳〵、これへお歸りなされませ。
助市　親を討たれしこの助市、只急くまゝに追ひかけんと駈け出せしは近頃粗忽。其方の手前も面目ない。ソレ。
　ト花道より取つて返し、方々心を附けて
三五平、何者の仕業なるか。先づこのあたりを。
三五　畏まりました。盜賊の業か、但し又、意趣ある者の仕業なるか。合點が參りませぬ。
　ト提灯にて方々を尋ね、死骸の側の印籠を見附け、取つて
モシ〳〵、この御印籠は、親旦那樣の御印籠でござりまするか。
助市　ドレ、この印籠こそ覺えあり。表の模樣は稻葉の松



初演の繪番附

裏の蒔繪は歌の下の句、まつとし聞かば今かへり來ん。コレ、この印籠は白井權八が所持の印籠。さては敵は白井權八。

三五　この印籠を、死骸の側に殘し置きしは後日の證據。親旦那助太夫さまを討つたる敵、まつとし聞かば今歸り來んとの、すりや、勝負を決する權八が心ざしか。敵ながらも流石は武士。コレ申し旦那樣、權八と敵の名の知れまする上は、念なう討つて手向けませう。お喜びなされませい。恩を仇にて返せし權八、お主の敵……助市さま。

助市　ここへ、三五平。

三五　安穩で置からうか。

ト思ひ入れ。この途端に下の方の樋口より、源吾、以前の形にて頰冠りをして出て來る。助市、三五平、左右へ別れて窺うて居る。源吾、ツカ〳〵と舞臺の眞中へ來て、着物を搾つて東の方へ行かうとする。助市、詰め寄せる。ト、三五平、源吾が頰冠りを引ッたくり、この折から月を雲間より引出す。三人顏を見合せ、恟りする。ト舞臺、拍子の神樂にて、キッとなり、拍子ありて

カチ〳〵〳〵〳〵と　幕

第一番五建目　箱根境木の場

役名――白井權八。岩井源之丞。錦郡大藏。本庄下部、三五平。雲助、牛窪坊の庄六。同、跳上がりの岩。同、がり〳〵の權。同、打越しの三。同、大猿の八。男達、幡隨長兵衞。

本舞臺、三間の間、箱根山中の道。正面に辻堂、後ろ山幕、上の柱に松の木の飾りつけ、下の方へ寄せ六尺許りの境木、これに豆州相州の境と書きつけたる道具、これにどつさりと一面に雪の降り積りし體。爰にはね上りの岩、がりがりの權、雲助の形にて野火を焚いて居ると、てんつゝにて幕明く。

ト花道より錦郡大藏、三建目の役にて、ぶッ裂き羽織、股引大小の形にて、袖合羽を着、笠を冠り、後より打越しの三、雲助の形、竹笠を冠り、柳行李と紙に包みし物を擔ぎ出て來て、花道のよき所にとまり

大藏　なんと雲助、ちつとは雪が小止みになつたの。
三　左樣でござります。
大藏　どうぞこれで、降り止ませたい。
三　イエ／＼、この雪はまだ降ります。滅多に止む雪ぢやアござりませんわえ。
大藏　そりや又、なぜ／＼。
三　ハテ、マア、この寒い事を御覽じまし。まだ雲に雪を持つて居るから、寒いのでござります。
大藏　イカサマ、われが云ふ通りだわえ。なんぼ箱根の山道だと云つても、斯う寒い事もないものだ。
三　イヤモウ、私しどもは御覽の通り、糸立一枚の吹拔きでござりますゆゑ、寒くてたちきられませぬ。
大藏　さうであらう／＼。待ちやれ、峠へ登つて婆アへ行つたら、焚火をして溫まりませうぞ。
三　イヤ／＼、なか／＼峠まで參るに及ばず、アレ、向うを御覽じまし、私しどもが仲間の奴等が、野火を焚いて居りまする。あそこへ參つて、一あたりあたつて參りませう。
大藏　イカサマナア、そんならお主が婆アで、あの火に當つて行かうわえ。

三　サア／＼、お出でなされませ。
ト矢張りてんつゝにて、本舞臺へ來て
コレ／＼、皆の者、よい所で火を焚いて居る。ちつとあたらせてくりやれ。
岩　サア／＼、來やれ／＼。
三　オイ／＼。申し旦那、お前もこれへお出でなされませ。
ト大藏、打越しの三、火の側へ行き、割込んであたる。
三　ア、いゝ火だ。今日はこの火が千兩だ。
大藏　イカサマ、今朝からの寒さを取返したわえ。
岩　時に旦那、今日は大方、峠泊りでござりませう。
大藏　イヤ／＼、畑まで追ッつかねばならぬ。畑では上州屋が定宿さ。
權　上州屋が定宿でござりまするか。あすこの亭主は畑右衛門と申して、生れついた吃り、また女房はお町と申して、いゝ女でござります。
大藏　ハテ、よく知つて居るな。
權　知つて居ります段か、元は上州の絹賣りで、あの内へ夫婦養子に入つた男でござります。
三　ハテ、そんなら、われが同國者だな。

權　オ、サ。おれが同國の者サ。

岩　時に相棒。

權　なんだ〳〵。

岩　イヤサ、なんぼ雪降りだと云つて、火にばかりあたつて居ちやア咽喉が干上がる。これから三島へ下つて、下りの荷でも取らうぢやないか。

權　それがいゝ〳〵。サア、歩びやれ。

岩　合點だ〳〵、そんなら三は、旦那のお供して後から來やれ。

三　合點だ〳〵。

岩　そんなら、立場で逢ふべい。

ト兩人入る。

三　サア、旦那、もう今日は七ツ下がり、冬の日は釣瓶落し、暮れませぬうち、ソロ〳〵參りませう。

大藏　イヤ〳〵、われには爰で、ちよつと頼みたい事がある。

三　なんと仰しやります。私しに頼みたい御用とはな。

大藏　サア、その用は。

トあたりへ氣を附けて

その用事とは別儀でない。今これへ來る道すがら、三島の宿で見屆けたる、角前髪の若侍ひめ、彼奴の名は岩井源之丞と云つて、江州佐々木家の家中なるが、先達て赤堀某と云ふ同家中の侍ひに、現在の親を討たれ、その欝憤を晴らさんと、敵討ちの願ひを差上げ、鎌倉より申し請けし、免許の狀を持參なし・敵の在所を尋ねん爲、關東へ下る樣子ゆゑ、早くもその事、敵赤堀源吾が耳へ入り、何卒その免許狀を人知れず、奪ひ取りくれよと朋友のよしみに、竊かに頼まれたる某が、目にかゝりしこそ百年目。追ッつけこれへ來るは必定。何とぞ其方、この處に待伏せして、いづれにも好き手段を持つて、その免許狀を奪ひ取つてくれまいか。

三　何事かと存しましたれば、思ひも依らぬお頼み。併し、其やうな事には、度々頼まれつけた私しなれば、憚りながら、飽くまで不敵のこの三が、この處に待伏せして・その免許狀を、

大藏　コリヤ。

ト囁き

合點か。

三　心得ました。

大藏　箱根の畑で、待つて居るぞよ。

三　して、このお荷物は、

大藏　これから身共が、自身小揚げとの二役サ。

三　出來ました。

大藏　ぬかるな。

ト互ひに思ひ入れあつて、てんつゝになり、大藏、荷物をかたげ、東の方へ入る。打越しの三は小隱れする。ト花道より權八、半合羽股引、大小、三尺手拭の形にて、垂れを下ろしたる四つ手駕籠に乘つて出て來る。東の棧敷の下より、幡隨長兵衛、半合羽ばつち、鮫鞘の脇差、大猿の八と若い者、雲助の形にて擔ぎ出る。手拭を襟に卷きたる町人の形にて、同じく垂れを下ろしたる、四つ手駕籠に乘りて出て來る。これを庄六と若い者、雲助の拵らへにて擔ぎ出て來る。長兵衛が駕籠、直ぐに舞臺へ來て本花道へ行き、權八が駕籠も東の花道へ行きて、よき所にて兩方一度に、息杖を下ろして駕籠を据ゑる。

八　なんと庄六、替へて行かぬか。

庄六　いくでも替へる氣だ。

八　やみでだ。

庄六　やみなら替へよう。

八　替へるか。

庄六　棒組み、替へて遣らうぢやないか。

若者　オヽ、日を暮らして峠に泊つちやア、明日の荷が取られまい。替へてやれ／＼。

八　サア／＼、替へよう。

庄六　合點だ。申し／＼、旦那、駕籠を替へましてござりまするが、ようござりまするか。

ト駕籠の中にて

長兵　よくなくつてわサ。勝手にしやれ／＼。

八　モシ、旦那、駕籠を替へましたが、お召替へなされて下さりませ。

ト駕籠の中にて

權八　オヽ、心得た／＼。乘り替へておまさう。

庄六　ハイ／＼、お駕籠を持つて來い／＼。

若者　合點だ／＼。

ト兩方ながら、駕籠を本舞臺へ擔ぎ返し

庄六　左樣ならば旦那、御不肖ながら。

八　お召替へ下されませう。

ト駕籠の垂れを上げて、八、履物を直す。權八、刀を提げて駕籠より出る。と庄六も同じく垂れを上げて草

履を直す。長兵衛、腰の物を持ち、駕籠の内より出て、乘物へながら長兵衛は權八へ氣を附ける思ひ入れ。權八は長兵衛へ氣を附け、互ひに思ひ入れあつて駕籠に乘り移る。

八　モシ、旦那、殘りの駕籠賃は、この者どもに、三百遣はされて下さりませ。

權八　心得た〳〵。

庄六　サア、棒組み、急いでやらうぞよ。

若者　合點だ〳〵。サア、やりかけよう。

ト てんつゝになり、長兵衛が駕籠は花道へ入り、權八が駕籠は東へ入る。花道より若い者、馬士の形にて馬を引いて出る。この上に下部三五平、四建目の形にて脚絆、草鞋がけ、菅笠を冠り、居眠りをしながら出て來る。花道にて

馬士　申し〳〵、奴どの〳〵。モシ、奴どの。

ト 三五平、目を覺ます、

三五　オイ、なんだ〳〵。

馬士　なんだぢやアござりませぬ。其やうに馬の上で居眠りをしたら、落ちさつしやりませうぞえ。目を覺まさつしやりませう。

三五　オイ、合點だ〳〵。面妖、馬に乘ると眠くなるものだ。もう、目が覺めた。追つて下さい。

馬士　サア、參りませう。

ト 馬を叱りながら本舞臺へ來る時、三五平また居眠る。

コレサ、また眠らつしやります。危なうござります。モシ〳〵、奴どの。

三五　オイ〳〵。

ト 目を覺まして

ハテ、面妖な。眠るまい〳〵と思ふ程、眠くなつてならぬ。貴樣の云ふ通り、轉げ落ちゝやアならない。いつそ、これから馬へ暇をやつて、歩いて行くべい。馬士どの、下ろして下さい。

馬士　なんだ、下ろしてくれろえ。

三五　オ、サ、下ろしてもらはう。

馬士　サア〳〵、下りるなら下りさつしやりませ。

ト 手綱を扣へる、三五平、馬より下りて

三五　ア、眠かつた。道中と思つて、日頃乘りつけもせぬ馬に乘るから、今のやうに眠くなるのであんべい。これからおれが膝栗毛でやらかさう。

馬士　そりやお勝手だが、峠まで極めた駄賃の極め、駄賃

はどうする氣でごんす。

三五　ハテサテ、そんな事に、いちやつきのある奴さんぢやアごんせぬ、駄賃の極めはやみげこんだが、酒手諸ともソレ一本。

ト四文錢を一本出してやる。

馬士　こりや有り難い。

ト受取り

ハテ、見掛けに寄らぬ旦那があるものだ。左樣ならば、これからお暇を貰ひまする。

三五　オヽサ、山坂を大儀々々。

馬士　箱根八里はナ、馬でも越すが、

ト唄を唄ひながら、馬を追つて入る。

三五　もう、これから峠までは一里餘り。さらば一服のんで行かう。

ト辻堂に腰を掛け、腰より摺火打ち、煙管を取出し、煙草をのんで居る。てんつゝになり、花道より、源之丞、角前髮、半合羽、股引、三尺手拭、大小の形にて、菅笠を持ち出て來る。革籠と錢財布を割掛けにして擔ぎ出る。直ぐに本舞臺へ來て

源之　やう〳〵、雪も止んださうな。さらば吸ひつけて參らう。御無心ながら、煙草の火を借りませう。

三五　サア、お貸し申しませう。

ト煙管を出して吸ひつけにかゝる。三五平が顏を見て

源之　ヤ、其方は。

三五　お前樣は、源之丞さまではござりませぬか。

源之　其方は三五平。

三五　左樣でござります。

源之　これは思ひも依らぬ處で

三五　お目にかゝりましたなア。

源之　先づ何は兎もあれ、本庄助太夫どのゝ事。近江の國加茂の堤にて、横死を遂げられし砌り、御子息助市どの、助三郎どのにも、さぞ〳〵驚きなされたでござらうの。

三五　左樣でござります。意趣は何かは存じませぬが、若年の白井權八、主人助太夫を討ち果し、立退きましたるその後へ、若旦那助市どのをお供いたしまして、泊り合せましたる、その時の事を存じますれば、殘念で只今までも、胸が一杯になりまして、御家來の私しでさへ、口惜しいと存じますれば、御兄弟樣のお心の内を、憚りながら源之丞さまにも、御推量下さりませい。

源之　さて〳〵、親を討たれし身には、身共とても同じ事。

過ぎつる月見の夜、同苗右内が寢所の勝手を覺えたる赤堀源吾、おのれが刀にもかけずして、敵へなき最期も石の火の、果敢なき別れの口惜しさ。三五平にも推量しておくりやれ。

三五 憚りながら、御推量申して居りまする。手前の主人も、中の五日の御命日。

源之 身共が父もその夜の命日。

三五 月日も變らぬ

源之 最期にて

三五 主從

源之 親子の

三五 別れとは

源之 思へば

三五 思へば

源之 果敢ない縁で

三五 ござりましたなア。

ト兩人ホロリとして

只今までも殘念なるは、主人の御最期。あなた樣には、いづくへお越しなされます。

源之 サア、身共は主君佐々木四郎高綱さまへ、敵討のお願ひを上げしところ、殿にも神妙に思し召し、早速敵討の免許の御狀を賜はりしゆゑ、本國近江を發足なし、敵源吾が在所を尋ねんと、鎌倉表へ參るのぢや。

ト此せりふの中より打越しの三、そろ〳〵出て立ち聞して居る。二人ともこれを知らず

三五 左樣ござれば高綱さまへ、お願ひをお上げなされ、源之丞さまには、敵討の御免許狀を、御所持なされてござりまするか。

源之 如何にも。大切なる敵討、何國いづ方にても本意を遂げ、立歸れとのお墨附。主君より賜はりしを、持參なしたるこの源之丞。なんと有り難い事ではないか。

三五 左樣でござりまする。私しとても、主人の敵を尋ねまする身の上、なんと、相成りませうでござらば、そのお大切なるお墨附を、内見は叶ひますまいか。

源之 大切なる敵討の免狀なれども、忠義に凝つたる三五平が願ひ。然らば見せませう。

三五 有り難うござりまする。

源之 ドレ〳〵。

ト藤行李の中より、錦の袱紗に包みし一通を出して三五平に見せる。三五平取つて戴き

三五　これが高綱さまのお墨附、御免許狀でござりまする
か。
源之　如何にも。敵討の往來自由のお墨附。さうして其方
主人本庄助市どのは、斯樣な品は持參召されぬか。
三五　左樣でござります、先づ〳〵お大切なるお墨附は、
あなたへ上げまする。
ト戴いて源之丞へ返す。源之丞取つて戴き、旅行李の
中へ袱紗に包みしまふ。
お聞きなされて下されませい。私しの御主人助市さまに
も、そのお墨附を殿樣、菊地兵庫亮さまへ、お願ひなさ
れましたれば、御別腹の御舍弟、菊地太郎有次さまの、
お心入りが惡うござりまして、今に敵討の儀、殿樣より
御免ござらねば、御兄弟にはもどかしく思し召し、やむ
事を得ずお家をお立退き……申さば私しの敵討同然。只
今お見せなされましたる、御免狀を拜見いたして、憚り
ながら奴めも、お羨やましう存じまする。
ト此せりふのうち、三、源之丞が革籠を明け、錦の袋
にある墨附を盗み出し、戴いて懐へ入れ、元のやうに
しまひ、源之丞が側へ直し置き、そろ〳〵下座へ入る。
兩人これを知らずにせりふを云ひ續けて居る。

源之　何時知れぬ敵討、御免なきに出國とは、助市どのに
も御短慮と存じらるゝ。
三五　左樣でござります。それゆゑ拙者も鎌倉へ立越え、
助市さまの弟御さま、助三郎さまにもお目にかゝり、御
内縁もござれば、和田の平太さまにお願ひ申して、敵古
非權八が在所、尋ねませうと存じまする。
源之　成る程〳〵。時に其方は、今宵はどれへ止宿いたす
のぢや。
三五　拙者儀は、峠の近所に泊りまして、所の風說をも承
はり、明晩の頃和田へ參りまして、上州屋畑右衛門と申
しまする者の所へ、手がゝりもござりますれば、立寄り
まするでござります。
源之　然らば身共も峠へ泊り、敵赤堀源吾が風說も、承は
るでござらう。
三五　左樣ならば、あなたも峠で。
源之　同宿いたさう。
三五　そんならお供いたしませう。
源之　不思議な事で
三五　源之丞さま。
源之　三五平。

三五　また雪の降りませぬうち。
源之　お來やれ。
三五　サア、お越しありませう。
ト合ひ方になり、源之丞は荷をかたげ先に立ち、三五平續いて、東の棧敷下へ入る。これより段々雪降つて來る。合ひ方になり、東の棧敷の下より、庄六、以前の形にて菅笠を冠り、小田原提灯を提げて出て來る。
後より權八、以前の形にて出て來る。歩みの中程にて
權八　折惡しう雪が降るさうな。少しも早う行かずばなるまい。
庄六　斯う降り出しちやア、どつさりと積るでごんせう。ざつと歸りは明日の事サ。
權八　それにしても先程の駕籠に、早う追ひつきたいものぢや。
庄六　マア、急ぐにしても、斯う寒くつちや一足も行かれるものぢやアごんせぬ。アレ、あの境木で、一服のんで行きますべい。
權八　そんならあれで、一服のんで行くのか。
庄六　ハテ、夜はまだ／＼長うごんす。マア／＼、あの辻堂で休まつしやりませ。

權八　その間に最前の駕籠、三島の宿まで行かねばよいが。
庄六　マア、ござりませ。
ト庄六、權八、舞臺へ行き、直ぐに提灯の灯にて煙草をのむ。權八あたりへ心をつけ
權八　コレ／＼、此やうに雪が降り積つたれば、行く道も難儀であらう程に、サア／＼、一服のんで行つてもらひたい。
庄六　マア／＼、斯うお神輿が据つちやア、今夜九ツに行かうやら、八ツ七つに行くべいやら、わしが心次第。お若衆もマアさう思うて、煙草でものまつしやい。
權八　コレ／＼、さう落ちつかれては此方の迷惑。向う坂とやらでも申す通り、最前この處にて乘り替へた折柄、三島の駕籠へ取落したる小包みの中には、大切なる品を入れ置きしゆゑ、如何やうに詮議いたしても、取戻さねばならぬ。この處にて乘替へたる此方の駕籠にも、小包一つ殘つてありしが、慥かに先にも取落しの品であらうと思ひ、これまで持參せし程に、大儀ながら餘り更けぬうちに、なんと最前の駕籠に、早う追ひついてもらひたい。
庄六　そりやア合點だ。箱根のうちでも追ひ隠れの庄と云つちやア、五十三次に隠れのないこの駕籠舁き、面が看

板でござんす。外の奴等が舁いた駕籠とは違ひます。こなさんの小包みとやらが、先刻の駕籠にあれば、此方から行かずとも、此方から尋ねて、持つて來るでごんせう程に、マア〳〵、この辻堂に夜の明けるまでゝも、雪を眺めて居さつしやい。

權八　コレ〳〵、其やうに落ちつかれては難儀至極。雪の小止みを幸ひ、どうぞ大儀ながら、早う連れて行つてもらひたい。

庄六　サア、寒くなつて着くるんで居ても、雪の降る時は炬燵にでも入つて居たり、酒でも參る者もあらうに、この箱根の山中に居て、今宵の大雪に裸身になつて、紙合羽を着て、鹿の切賣りか鮪のすき身を見るやうな態で、溜まる事はさて措き、斯うして居るうちも、この辻堂の縁側へ體が凍て消いて、マア、どうであんべい。ハア、嚏か。久しい奴だが風の神が、噂をするさうだ。

權八　これは又情ない。どうぞ行かれぬ事かいの。

庄六　マア、儘にもしやせう。

權八　これは又、迷惑な事ではある。

トあたりへ氣をつけるうち、時の鐘鳴る。

雪風につれて鐘が聞える。もう、何時であらう。

庄六　ありやア、向う坂の立春院の四ッサ。

權八　あの鐘が最早四ッ。

トこの時の鐘鳴るうちに、方々よりはね上りの岩、大猿の八、かり〳〵の權、以前の形にて出て來る。皆々權八をヂロ〳〵見て、顏を見合せ思ひ入れ。權八、始終合點のゆかぬ思ひ入れ。

三人　わりやア庄ぢやないか。

庄　三人ともによく來たな。

八　こんな事もあらうかと、駈け出した大猿の八が得て物。寒さは寒し寐られはせず、マア、云ひ合せて來たものサ。

庄六　どうで仕事にかゝらずばなるまいから、焚く物があるならば焚きつけて、あたりてえものだな。

岩　斯う雪が降るし、日暮れに大分寒かつたに依つて、爰に大分粗朶や杉の葉を集めて置いた。ドレ〳〵、燒しつけてあたるべい。

權　サア〳〵、爰へ來やれ〳〵。

ト提灯の火にて、いろ〳〵取集め、火を焚きつける。皆々押取卷いてこの火にあたる。

八　なんと又、斯う火にあたつた處は、心持ちがいゝち

やアねえか。

庄六　コレ〳〵、お若衆、貴樣も爰へ來てあたらつしやい。

岩　ドレ〳〵、ちつと大事な所を炙るべい。

ト股火をする。

權　ちつと疝氣を溫めてやるべい。

ト思ひ〳〵に火にあたる。

權八　今の鐘が四ツならば、斯うしては居られまい。サアサア、大儀ながら、なんと行かうではあるまいか。

庄六　行きませうとも〳〵。行くは行きませうが、爰で酒手を極めて行かう。コレ、若衆さん、三島の駕籠に追ひついたら、酒手は幾ら出す氣だえ。

權八　夜道と云ひ、この大雪、最前の駕籠に追ひつかば、酒手の事は如何程でも遣はさう。サア〳〵、早う〳〵。

庄六　その如何程がわしやア嫌だ。一兩なら一兩、十兩なら十兩と、たんと辭儀をするやうな駕籠舁きぢやアないよ。二十兩でも三十兩でもたつた今、爰で渡してもらひたい。

權八　大金の酒手を望むは、さては。

庄六　知れた事だ。云はずと知れた追ひ落しよ。

ト權八、思ひ入れする。

八　晝は駕籠舁き、夜はばつたり。金があるならば置いて行きやれ。

岩　金ばかりぢやアないよ。その大小も褞袍も、眞裸になつて置いて行きやれ。

權　切つ刃を廻せば取捕まへて、代り〳〵に若衆にするぞよ。

庄六　サア〳〵、キリ〳〵と置いて行け。

權八　ハヽヽヽ、東海道とは申せども、案內知らぬ一人旅。兼ねて聞いたる事もあれば、斯やうな事にも出合はんかと、此方にも覺えがある。若衆と見侮り、理不盡なる事をなさば、却つて其方どもが爲になるまい程に、左樣な事を申さずとも、これより三島宿まで一人案內いたせ。酒手を望まば、なんぼうにても遣はさう。それも其方達が勝手次第、ならぬと申せば是非に及ばず、身共一人參るであらう。夜の更けぬうち、さうぢや。

ト提灯を提げて行かうとする。庄六權八が向うへ廻りて、揉み手して

庄六　御免なされませ、お若衆樣、お見外れ申しました。成る程、仰しやります通り、この海道を一人、鎌倉までお出でなされまする程なお心では、お相手になり兼ねませぬ、御器量と見えまする。流石はお武家方程あつて、

イヤハヤ、驚ろき入りました。ようござります。直ぐに三島までお供いたしませう。サア〳〵、御機嫌ようお出でなされませ。

權八　すりや、身共が申す事を聞き分けて、三島の宿まで參らうと申すのか。

庄六　氣無しにかゝつて御覽じませ、私しどもはとんだ目に遭ひませうでござります。兎角命が物種。サア〳〵、お供いたしませう。

權八　然らば、案内いたしてよからう。

庄六　お提灯、これへ遣はされませう。

ト提灯を取る振りにて、權八が大小を引ッたくらうとする。權八、庄六が手をもぎ放すうち、岩、八、權、てんでんに息杖を持つて權八を打ちにかゝる。此うち、庄六を突き退け、直ぐに刀を拔き放し、手ばしかく渡り合ひ、岩に一太刀浴せ、返す刀にて權の眉間を切る。兩人アッと倒れる。直ぐに下座へ入る。隙間もあらせず八、息杖にて打つてかゝる。立廻りよろしく、此うち雪頽りに降つて來ると、花道より長兵衞、以前の形にて、小提灯を提げて出て來る。この體を見て直ぐに舞臺へ來て、庄六を後より襟を取つて投げ退ける。長兵衞手ばしかく庄六の息杖を切り落し、直ぐに乘りにかかり刺し殺す。此うちに權八、八が息杖を切り落し、手ばしかく取つて押へ刺し殺す。これより忍び三重になり、トゞ、兩方途端に死骸を蹴返し、直ぐに長兵衞を權八は庄六と心得、長兵衞は權八を相手と思ひ、兩方より一度に切りつけて、雪明りに互ひによく〳〵顏を見て、思ひ入れあるべし。

長兵　こなさんは。

權八　其許は。

長兵　最前駕籠を

權八　乘り替へた。

長兵　お若衆樣。

權八　お旅人か。

長兵　サ、引きませう。

ト互ひに思ひ入れあつて、一度に刃物を引いて鞘へ納め、合ひ方になると、長兵衞、提灯を持つて來る。權八が體を方々見て

マア、見たところが傷は見えませぬが、どこぞ痛みはしませぬか。

權八　忝ない。時に合點の參らぬは、何ゆゑにこの處へ

立歸り、身共をさほどまでにいたはり下さる、其許のお心は。

長兵　わしが爰へ來ましたは、最前爰で乘り替へた、駕籠の中にこの小包みが。

ト腰に卷いたる風呂敷包みを、權八が前に置き

こりやア、こなさんのぢやごんせぬか。

權八　成る程、この包みは身共が包み。

ト提灯の明りにて見せる。

長兵　さうであらうと、持つて來ました。

權八　忝ない。此方にも、コレこの包み、最前乘り替へた駕籠に置き忘れたゆゑ、定めて其許の包みであらうと存じて、わざ〳〵これまで持つて參つた。

ト腰に卷いたる包みを　長兵衞が前に置き

サア〳〵、改めて、相違なくばお持ちなさい。

長兵　ナニサ、改めて見ずとも、この中には綿入羽織が一つ、平石の彌陀へ奉納の、吊り鐘講中の帳が一册ばかりだ。こなさんの方の包みを、マア、受取つて貰ひませう。

權八　成る程、此方の小包みの中には、大切なる品が入れてござれば、改めて見ませう。

ト風呂敷包みを解いて、中を改め見て

こりや其許は、この中を

長兵　聊爾ながら

權八　お見やつたか。

長兵　なんぞ一種でも無くなつたかね。

權八　サア、紛失物はなけれども、直心流の一卷、眞妙劍の傳授の卷き物、所持なしたる手前の身の上。白井權八と露顯なしては、其まゝに捨て置かれぬ。

ト拔きかける。立廻りあつて

長兵　コレ、逸まらしやるな。人が違つた。

權八　なんと。

長兵　わしや江戸の淺草で、意氣地を立てる花川戸の、幡隨長兵衞と云ふ男でごんす。人の大事を他人へ申すやうな男ぢやごんせぬ。

ト胸を叩き、思ひ入れして

例へこなさんが、白井權八どのと云ふ、科のある身の上でも、呑み込んだ日にやア男づく。匿まひ兼ねる長兵衞ぢやアごんせぬ程に、その小包みに相違なくば、受取つて置かつせい。

權八　さすれば兼ねて聞き及びし、江戸淺草に隱れなき、幡隨長兵衞どのとは。

長兵　慮外ながら、わしが事サ。
權八　さてこそ、奥床しいお方と見請けしが、長兵衞どのでござつたか。
長兵　サア、わしも其許の樣子、合點のゆかぬ一人旅と思ひしが、見ず知らずのわしが方から、迂濶にも聞かれはせず、慥かに今宵途中に於て、難儀してござらうと思ひしが案の定、來て見た所が今の體。一人なりともやッつけたはわしが醉興。あれで見さつしやいませ。
權八　人の中に違ひのない、賴もしい長兵衞どの　もしも自然の事ござつて、江戸表へ立越えなば、身に願ひある權八が儀、お世話なされて下さりませ。
長兵　賴まれて引かぬが男達。及ばずながら長兵衞は、これは嫌とは云はぬ生れつき。藪鶯は京育ち、吉原雀を羽搔につけ、男の中の男と云はるゝ男一疋、いつ何時でも尋ねてござい。
權八　その一言を聞きますれば、安堵いたして鎌倉へ立越え、折もござらばお尋ね申すとも人心、もしやその節。
長兵　わしが心が變らうかと。
權八　夢々左樣は存ぜねども。
長兵　その身に引請ける、これが證據サ。

ト沒義道に襦袢の袖を切つて、權八が前へ投げ出す。
權八　アノ、この袖が。
長兵　割符の片袖。
權八　忝ない。然らば拙者も其許へ、その賴もしい心にめでて、また巡り逢ふ印の片袖。
ト權八も襦袢の袖を引切つて、長兵衞へ渡す。
長兵　すりや、この片袖が。
權八　誓ひの片袖。
長兵　そんなら互ひに。
ト兩方一度に袖を取上げ
必らず江戸にて
權八　この袖を
長兵　この身にかける
權八　花川戸。
長兵　初雪忘れぬ
權八　花の兄
長兵　濡れていとはぬ
權八　弟草。
長兵　末の契りを
權八　長兵衞どの。

長兵　權八どの。

兩人　待ちませう。

ト互ひに顔見合せ思ひ入れ。この途端に雪颪の落しで、松ヶ枝に降り積つたる左右の雪、提灯の上へ落ちる。仕掛けにてこの火消ゆる。權八、長兵衞、方々へ氣を附ける。トヾ我れ知らず側へ寄り、權八、長兵衞が手を取り泣く。長兵衞、權八を引寄せ、互ひに心附いて兩方へ別れ、顔見合せてにつこりと笑ふ。これをキッカケに、

カチ〳〵〳〵〳〵と　　拍子幕

第一番目大詰　　箱根畑村の場

役名＝＝上州屋畑右衞門實ハ絹賣り彌市。同、母。同女房、お町。大場左仲太。雲助、打越しの三。出女、お玉。上州安中の唐犬十右衞門。三浦屋亭主、傳五。岩井源之丞。同妹、八重梅。奴、三五平。白井權八。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、向う三尺暖簾口、下座の方へ寄せて佛壇を取りつけ、大臣柱の際に据風呂桶据ゑてあり、下の方門口に上州屋と書きつけ、藁葺きの庇を見せ、尤も門口を藁葺きにして、雪大分降り積つてある景色。一體箱根山中畑宿の體。在鄕唄にて幕明く。

ト爰に畑右衞門女房お町、やつし前垂れ、置き手拭にて俎板にかゝり、大根を割つて居る。女中お玉、前垂れ襷がけにて据風呂の火を焚いて居る。お八重、これも同じくやつし前垂れにて、門口に立つて居ると、花道より仕出し若い衆二三人、旅人の拵らへにて出て來る。直ぐに本舞臺へ行く。

八重　モシ〳〵、お泊りならば、風呂もよう沸いて居ります。お泊りなさんせいなア。

ト恟々捉へる。

若者　まだこの日のあるに、どう泊られるものか。

ト振り切り行かうとする。お玉、風呂を焚きさし走り出て

たま　なんぼ日が高いと云つて、皁莢坂に槍辷り、この雪道では、行かるゝ事ぢやアござりませぬ。猪でも狼でも

辷りやす。爰へ泊つてお出でなさんせ。

八重　モシ／＼、これからは山坂ばつかり。きつう術ない所でござりますぞえ。

八玉　それ／＼、明日の打越しになされませ。

若者　雪は降るし泊りたいが、連れが脇へ行つて待つて居る。マア、爰を放せ。

ト捨ぜりふにて行く。お玉、お八重引留めるを無理に振り切つて下座へ入る。てんつゝになり向うより、三浦屋の亭主傳五、着流し、木綿合羽下駄傘にて、簀包み、挽物の煙草入れを大分提げ、出て來ると、直ぐに舞臺へ來る。

八重　モシ、お客さん、お前は奥にぢやと思うたに、どこへお出でなさんしたえ。

傳五　この内へ來て昨日から長逗留。餘り退屈したに依つて、土産物を買ひに出ました。

八重　ほんに、たんとお召しなされました。さぞお寒うござりませう。サア、お入りなされまし。

トお八重、傘を受取り、雪を拂ひ窄める。傳五、内へ入る。

まち　今お歸りでござりまするか。風呂もよう沸いて居ります。直ぐにお召しなされませ。

傳五　ア、イヤ／＼、この冷えた處を湯に入つては、體へ沁みて悪うござる。

まち　そんなら、奥の火鉢へ、火を入れて上げませう。マア、そのお土産物を、此方へ遣はされませ。お荷物と一つに致して置きませう。

傳五　これはお世話でござります。駕籠の者はどこへ行きましたな。

八重　最前風呂へ入らしやんして、納戸に寐て居やうと、云はんしたわいなア。

傳五　そんなら内儀さん、この土産物を、押入れへやつて置いてくんなさい。

まち　アイ／＼。

ト挽物を受取り

ドリヤ、炬燵へ火を入れて上げませう。

トお町、土産物を持つて奥へ入る。

たま　モシ、お客さん、お前は、江戸は何處でござりますえ。

八重　あなたは江戸の吉原ぢやと、駕籠の衆の話しぢやわいなう。

たま　エ、、江戸の吉原でござんすかえなア。さぞかし面白い所でござりませうの。

傳五　面白い段か、春は仲の町の花見、夏は田植の見物、秋は燈籠で人群集、てまへ達に見せたいわい。

八重　成る程、話しに聞いた吉原の、俄とやらは又、權現さまの、お祭りのやうな事ぢやアないかいなア。

傳五　事ぢやないどころか、新造禿が女藝者、我れ劣らずと着飾つて、花車萬燈は色塗りに金銀の金物、その結構と云ふものは堪つたものではない。それより又、太夫衆の道中を見せたいものサ。瑇瑁の櫛笄、伽羅の駒下駄、さや縮緬を寐卷にするわサ。お娘、行つて見る氣はないか。

八重　そりや本當に、結構な所でござんすな。モシ、お客さんえ。わしらがやうな者でも、その太夫とやら傾城とやらに、なられませうかいなア。

傳五　なられる段か、いま行けば直ぐに突出し、瀬川も花扇もそこのけだ。

八重　お客さんえ、そんならわたしを、その吉原とやらへ、勤めにやつて下さんせいなア。

傳五　何を云やる。

八重　マ、、ほんにお前は御時分でござりませう。奥へお出でなされて、上がりませいなア。

傳五　成る程、腹の加減も北山時雨、ちよつと一杯茶漬と出かけよう。コレ〳〵姐え、先刻買ひ物に行く時、持つて行つたこの路銀、又てまへに預けて置かう。

ト懷より財布を出し、お八重に渡す。

八重　なんぼ程ござんすえ。

傳五　昨夜改めた通り五十兩、必らず落すまいぞよ。

八重　しつかりと預かりました。サア、お出でなされませ。

ト合ひ方になり、お八重、金財布を預かり、傳五に附いて奥へ入る。此うち向うより錦郡大藏、三度笠、手甲脚絆にて、旅の侍ひの拵らへにて出て、直ぐに舞臺へ行くと、お玉、門へ出て

たま　モシ、お泊りなら風呂も沸いて居ります。夜具も綺麗で御飯は焚立て。夜のお伽も御相談次第でござります。

ト引留める。大藏、笠を脱ぎ

大藏　泊らないでどうするものだ。おれだわえ。

たま　ほんに、この頃お泊りなされたお侍ひ樣、もう、お上りでござんすかえ。

大藏　この度、思ひがけなく用が早く辨じたゆゑ、直ぐに

國元へ歸るのだ。爰の内を定宿にして泊る者を、見違へるとは、餘ッぽどてまへも間違つて居るぞ。
たま　アイ、お前に似てサ。
大藏　おきやアがれ。
　ト奥よりお町出て來て
まち　これは〳〵、お早うお歸りなされました。この雪でさぞ御難儀でござりませう。ソレ、玉、お御足の湯を取つて上げ申しやいの。
たま　アイ〳〵。
　トお玉、盥に湯を汲んで來る。
サア、お足を洗うて上げませう。
大藏　オッとマア、よい〳〵。なんぼ据ゑ膳でも、納豆汁は嫌ひだ。
　トお玉、思ひ入れして
たま　お前もマア、酷い事を云はしやんす。姫御前を捉へて、なんぢや、納豆汁ぢやえ。わたしも畑のお玉と云はれて、この宿の内で、お杉の上手でござんす。外の替へ玉とは違うてな、騙されたと思つて、たま〳〵物ぢや、二百はずんで御覽じやし。堪つたものぢやアござんせぬわいなう。

まち　コレ、其方は最前から、その態が云ひたうてならんだぢやらう。
たま　先刻から、モウ、云はうか〳〵と、心がわさ〳〵したわいなう。
大藏　おきやがれ。そんな無駄を云はずとも、飯の支度をしておくりやれ。
たま　いつに變らぬ床急ぎぢやなア。
大藏　辷り道のせいか、殊の外空腹ぢや。
まち　そんならマア、奥へお出でなされませ。
大藏　そんならさうしませう。小座敷で飯の出來るまで待ちませう。イヤ、内儀さん、まだおれが連れが來る筈だ。畑の上州屋とは云つて置いたが、まごつかないやうに、この笠を表へ吊して置いて下さい。
まち　ハイ〳〵、畏まりました。
大藏　ドリヤ、ちつと横にならうか。
たま　サア、お出でなされませ。
　トお玉先に大藏、奥へ入る。お町、門口へ菅笠を吊して
まち　あのお侍ひさんは、いつも〳〵我まゝばかり。ヤレ唐辛子を寄越せの、お汁が微いのと、喧ましう云うてな

るこつちやない。それはさうと、父さんの日ぢやと云つて、この雪もいとはず、お寺へ行つてゞあつたが、なぜ此やうに隙取らしやんすやら。畑右衞門どのは、もう、戻られさうなもの。ハテ、遲い事ではあるぞ。

ト てんつゝになり、向うより上州安中の唐犬十右衞門、手甲脚絆、三尺手拭、三度笠、丸合羽にて出て來るをお町引留め

お上りさん、泊つてお出でなさんせ。これから先が山道ばかり、旅籠屋はござんせぬ。風呂もよう沸いて居ります。

ト 引留める。十右衞門、振り離して

十右　インニヤ、おらアこの宿で、ちつと尋ねたいものがある。是非そこへ行かねばならぬ用がある。離さつしやい離さつしやい。

まち　ハテ、どこぢやと云うて、同じ事でござんすわいな。

十右　成る程、同じ事であらうが、おらアこの宿の、畑右衞門が處へ行く者ぢや。

まち　モシ、畑右衞門と申しまするは、此方でござりますわいなア。

十右　ナニ、畑右衞門が所は爰だと云ふか。

まち　アイ、畑の上州屋畑右衞門と申しまするわいなア。

十右　畑右衞門と聞いちやア、泊らにやアならぬ。

まち　サア、此方へお入りなされませ。

ト 十右衞門、笠を脱いで内へ入る。

十右　お町、變る事も無いか。

まち　ヤア、十右衞門どのか。

ト 表へ逃げ出しさうにするを、十右衞門引ッ捉へ

十右　十右衞門どのか、十右衞門も十右衞門、上州安中の十右衞門さまだワ。

まち　ハイ、ようお泊りなされました。

ト もぢ〳〵するを、内へ引摺り込み、思ひ入れして

十右　コレヤイ〳〵、何も知らない顏で、居る事はないわい。いゝ子の振りをして、なんのこつたえ。上州に居やがつた時は、その日暮らしの食物に饑ゑて、切ない時の神頼みと、手を合せやアがつて、この十右衞門さまを、拜みやアがつたのを忘れたのか。

まち　モシ〳〵、なんのそれを忘れませう。上州に居りました節は、尾羽打枯らした浪人、その日〳〵の煙りさへ、活計も知らぬかせ世帶。例へ一合取りましても、侍ひの果なれば、商ひの道は知らず、と申してから人樣の前へ

出ましては、浪々者の憂き奉公、稼ぎもなりませず、どうしたらよからうと、存じ暮らしたその折に、お前のお世話で絹商賣、それからやう／＼取りついて、絹賣りの彌市、只今はこの箱根へ參りましては、私しが親の名跡を繼ぎまして、上州屋の畑右衞門、名前は變れども昔の御恩、忘れましてよいものでござりまするか。夫畑右衞門どのも、朝夕お前の噂ばかり。

ト十右衞門、最前より、草鞋脚絆を取り

十右　尤もだ、道理だよ、もういゝよ。喧ましいわい。成る程、口と云ふものは重寶な物だ。そのちよ／＼らを久しく聞かなんだ。上州に居る時より、大分ちよ／＼らが上がつた。てまへがさう口を利くのと、畑右衞門が吃るのと搗き交ぜると、眞面目な人間が二人出來る。その時の御恩は忘れませぬも、氣が凄まじい。忘れ果てゝ居るだらう。その恩を知らないけりやアこそ、上州を夜逃げして、この箱根へ來やがつて居るぢやアないか。なぜ沙汰なしに駈落ちしやアがつた。この山中にぬら／＼としてけつかつたら、知れまいと思ふか。そこが蛇の道は蛇、上州の安中では、人も知つた唐犬の十右衞門、この箱根まで遠吠えに來た。それはさうと、畑右衞門はどこへ行つたのだ。

まち　アイ、畑右衞門どのは、石割まで買ひ物に參りました。なんぞ御用なら私しに。

十右　用と云つて、何もむづかしい用でもない。貸した金を取りに來たのだ。

まち　エ、。

ト悄りする思ひ入れ。

十右　エ、とはなんの事だえ。金の貸しがあるから、わざわざ路銀を遣つて取りに來たのだ。留守でも大事ない。絹商賣をする時、仕込みの金五十兩、耳を揃へて今返しやれ。

まち　お前もマア、五十兩と云ふ大枚の金が、どうして爰に

十右　無いのも承知サ。……これを讀んでお見やれ。

ト紙入れより證文を出してお町に見せる。お町、逆さまに見る。

コレ、それぢやア逆さまだワ。

まち　逆さまやら、かひさまやら、こちや知らぬわいなア。

ト投げ出す。

十右　オ、、わりや無筆だつけの。こりやア惡かつた。無

筆に證文を見せたところが、猫に小判だ。讀んで聞かせべい。よく聞けや。借用申す一札の事、一つ金五十兩、右は據ろなき入用につき、借用申すところ實正なり、もしこの金子相濟み申さず候はゞ、千壽院の刀一腰相渡し申すべく候。後は讀むに及ばず。金が濟まざア家に傳はる、千壽院の刀を渡せ、受取らう。

まち　成る程、御尤もでござります。折惡しう夫の留守、今にも戻りまして、この譯を承はりましたら、なんの粗略に致しませう。どうぞ畑右衛門歸りますまで、お待ちなされて下さりませ。

十右　インニヤア待たれない。留守だ〳〵と吐かしても、內に居て留守を使ふやら、長崎に使ひに行つたやら、知れもしない者をサ、ウロ〳〵待つて居られるものか。大方千壽院の刀も、內にありやアすまい。刀が無けりやア屋財家財、目當り次第に馱荷にして、上州へ持つて行くワ。マア、この押入れから探すべい。

　ト立ちかゝるを、お町、留めて

まち　マア、待たしやんせ。例へ證文があらうが、主の留守に家探ししやうとは、そりやお前、無法でござんせうぞえ。

十右　無法であらうが、牛蒡であらうが、それに頓着は無いぞ。放しやがれ。

　ト振り離す。

まち　待たしやんせ。

　ト留める。

十右　エヽ、邪魔しやアがるな。

　ト支へるお町を振り切り、押入れへかゝる。また取りつくキッカケにてんつゝになり、花道より畑右衛門、やつし袖なし羽織の上に帶を締め、下駄を穿き、竹の子笠を冠り、藁にて束ねし豆腐を提げ、持つて來て、この體を見て、直ぐに內へ入りて、爭ふ十右衛門を見事に投げる。また起き上がる十右衛門が頰先へ豆腐を當てる。十右衛門、膽を潰し

冷てえ〳〵。

まち　こちの人、よい所へ、よう歸らしやんしたの。

　ト畑右衛門頷づく。十右衛門、起き上がり

十右　誰れかと思つたら、吃りの畑右衛門。なぜこの安中の十右衛門を、眞中へホイと投げ出したのだ。物を吐かせ。

　ト畑右衛門、吃りのこなしにて、云ひ兼ねる思ひ入れ。



初演の繪番附

畑右　オ、コ、これは〳〵、ア、安中の、ジ、十右衞門どの、ヒ、久し振りで、ア、逢ひましたの。
十右　久し振りどころか、百三十年目で逢つたこの十右衞門を、なぜ投げた〳〵。これぢやァ濟まない〳〵。
畑右　モ、モシ〳〵、十右衞門どの、ナ、なんでこなさんを、投げるものでごんす。
十右　たつた今、わりやァ投げたぢやァないか。
畑右　イエ〳〵そりやア、ソ、その、草盆に蹴躓いて、コ、コ轉ばしやつたのぢや。ケ、怪我だ〳〵。
十右　ナニ、煙草盆に、蹴躓いて轉んだとは、とつけもない怪我も、あればあるものだなア。
畑右　オ、阿母は。
まち　寺詣りに行かしやんしたが、今に歸らんせぬわいなア。
畑右　ソ、、その茶、イ、一杯くりやれ。
まち　アイ。
ト茶を酌んで來る。畑右衞門取つて茶を呑む。
畑右　サ、、さて十右衞門どの、オ、大きに無沙汰をシ、しました。マ、マア、達者でめでたうごんす。
十右　達者どころか、上州から箱根まで、こなたの行くへを尋ねて來た達者ものサ。先づ早速云はうには、いつぞやこなたが絹商賣をする時、元手に貸した五十兩の金、お主が腹からの町人なら、五十兩や三十兩の端下金、只くれても遣らうが、殊にお主の親の彌三右衞門は、侍ひ上がりの偏屈者、その二本棒の子だに依つて、如才の無い事はあるまいと、貸してやつた五十兩、その恩を知らない人でなし。なぜこの十右衞門を馬鹿にしたのだ。
畑右　ソ、さう一通り聞かしやつては、オ、恩知らず義理知らず、人で無しとも思はつしやらうが、コ、この内は、女房の町が親里、わしが爲には舅の畑右衞門、ピヨ〳〵病死されて、ア、後は阿母一人ゆゑ、ジヨ〳〵上州屋のア、後を立つるモ、者が無いゆゑ、ソ、そこでわしら夫婦を妾の内へ引取り、イ、今では絹商賣をやめて、上州屋畑右衞門と……わしが内でワ、わしが自由にもならぬに依つて、ソ、それでつい無沙汰しました。リヨ〳〵料簡さつしやりませ。
十右　料簡するにもせないにも、何を云ふやらさつぱり譯が知れない。コレ、よくマア、物を合點して見たがよい。緣も由緣も無い赤の他人、五十兩と云ふ大金を貸したはよく〳〵の信實でなくては、貸し憎いものだ。その貸し

憎い金を借りた上に、一言も挨拶も無く、安中を随徳寺、この十右衛門さまに、よく鼻を明かしやアがつた。それでも、よくこそ證文を取つて置いた。お町に見せたけれど、可哀や彼奴は明盲目で、手前は吃り、揃ひも揃つた片輪者だ。

畑右　エ、。

　ト思ひ入れ。十右衛門もこなしあつて

十右　その面はなんだよ、片輪者だから片輪者と云つたがどうした。坊主を捕まへて若衆ぢやと云やアしまいし、何も飛び違つた出入りは無い。なんの事だえ。人相を見てもらやアしまいし、ヂロ〳〵と、人の面を見る事はないぞ。コレ、五十兩の金を受取るべい。金が無けりやア證文の通り、千壽院の刀を受取るべい。金を寄越すか、刀を受取らうか。返事をしやれ、物を云やれ、物を吐かせ。この盗人野郎め。

　ト畑右衛門ムツとして

畑右　コ、、コレ、十右衛門、カ、金を借りて返さないはワ、悪いが、ヌ、盗人とは、ナ、なんの事だ。

　トお町も思ひ入れして

まち　十右衛門さん、イヤ十右衛門どの、人には物の云ひやうがござんすものぢやわいなア。金催促は尤もなれども、身貧に暮しても畑右衛門は、一軒の家の主、その主を捕へて、そりやアあんまりぢやわいなア。

　ト口惜しきこなし。

十右　コレ、あんまりとは其方の事だ。爰まで尋ねて來たればこそ、云ひ譯もするぢやアないか。おれが來ずばそれなりに、踏んでしまふ料簡だらう。證文に刀を書き入れて、その刀も寄越さず、金も返さないけりやア、手もない騙りだ。手を出して人の物を盗むばかりが盗人ぢやアないワ。盗人と云はれたが口惜しくば、金を返せな。

畑右　ソ、その金は。

十右　金が無けりやア騙りだよ、盗人だよ。刀を寄越すか。

まち　ぢやと云うて。

　ト思ひ入れ。

十右　寄越されざアいゝワ。

　ト畑右衛門が襟髪を捉へ、うしやがれと引立てる。お町留めて

まち　どこへ連れて行かしやんす。

十右　知れた事だ。この野郎といくら怒鳴つても、馬の耳へ風だ。息精引ツ張る程損がゆかア。もう、諄くは云は

ない。代官所へ連れて行つて、砂利の上で方を附けてもらふワ。

まち　マ、、待つて下さんせ。成る程、金子を返しませうわいな。

十右　なんだ、金を返すか。

畑右　コレ、ニヨ〱女房ども。ソ、ソ、その金がどうして。

まち　ハテ、わしが返しまするが今は無い。どうぞ明日まで待つて下さんせ。

十右　イ、ヤ、その云ひ譯も聞き飽きた。明日の事はさて措き、晩までも待つ事はならない。サア、立ちアがれ。

ト畑右衛門を引立てる。ヂツとして居る。十右衛門、急くこなしにて

十右　立ちやアがらないか。

ト畑右衛門が額を打つ。畑右衛門、急くこなし。お町、取りつき支へる。

邪魔になる。退きやアがれ。

ト お町を突き退ける。畑右衛門を門口へ蹴飛ばす。畑右衛門急いて思ひ入れ。

畑右　コ、、、ド、、、土足を持つて、ケ、、

ト大きに急き入り、吃り、物が云はれぬゆゑ、胸を搔いて、いろ〱無念のこなしあるべし。十右衛門も思ひ入れして

十右　コレ、ド、とはなんの事だ。此方まで吃りになるわえ。コレ、暑くなく寒くなく、今まで暮らしたは、みんなおれがお庇だぞ。踏まれても蹴られても、なんにも腹を立つ事は無いわな。この位な事ぢやア腹は立つまい。

ト畑右衛門が額を指で突く。

この位ぢやアどうだ。

ト額を叩き

斯うしたらどうする〱。

ト無性に畑右衛門を叩く。お町支へるを突き退ける。畑右衛門ヂツと堪へて居る。よいキツカケに奥よりお八重出て、これを見て、幕明きの金を畑右衛門が前へ投げ出す。三人この金を見て惘りする。畑右衛門、この金を取上げ

畑右　コ、この金は。

八重　サア、その金はこの年月、上り下りの客衆より、貰ひ溜めたるほまち金。まさかの時の用心にと、肌身離さぬ金なれど、今の難儀にや替へられぬ。兄さん、十右衛

門さんとやらに戻さんせいなア。
畑右　アヽカヽ忝ないが、ナヽなんぼ貧苦に迫ればとて。
まち　あなたのお金が。
　ト思ひ入れ。
十右　コレヽあなた。
まち　エ。
十右　こりやア、われが妹ぢやアないか。妹をつかまへ、あなたとは。
まち　あなたでは無い數多の金を、女子の身で、よう貯へたと云ふ事ぢやわいなア。
畑右　ハヽマヽヽヽドヽどうしてこの金が、ツヽ遣はりよ。
　トお八重の前へ置く。
八重　ハテ、なんであらうと、その金の、樣子は後で知れる程に、心措きなう戻さんせいなア。
　ト畑右衞門、思案をして居る。
畑右　ナヽ成る程、サヽ差當るはコヽこの場のナヽ難儀。チヽちつとのうちだ。イヽ妹、カヽ借りたぞよ。
　ト畑右衞門、金を十右衞門の側へ持つて行き
サヽ十右衞門、カヽ借りたゴヽ五十兩、アヽ改めてウヽ受取りやれ。
十右　受取らないでどうするものだ。貸した金を取るに、恩も平も入るものか。改めて受取るべい。
　ト金を取上げ改めて
ハア〳〵、物は苦にせまいものだ。打つてもはたいても、三文も出來まいと思つたら、瑕もつかず五十兩、ちつと肩が直つて來たわえ。これからはこの金で、四三四六の胴でも取つて、五百兩にもせにやアならない。
畑右　ハヽソヽそんな負け惜み、イヽ云はずとも、カヽ金を受取つて、證文を返して、トヽとつとゝ出て行きやれ。
　ト證文を引ツたくる
十右　出て行かないでどうするものだ。こんな家かばねに居ると、男が廢くなる。コレ、お町、そこに草鞋があんべい。
　トお町、知らぬ顏して居る。
コレサ、そちらの女、紙合羽を出せ。
　トお八重、知らぬ顏をして居る。
返す物を返したとて、突き出し者にしやアがる事はない。
　ト云ひながら、草鞋を穿き、門口へ出る。

畑右　ジヤ十右衛門、マヽ待て。
十右　まだ用があるか。
畑右　ヨ、用があるから留めたのだ。マヽ待ちやいの〱。
　ト十右衛門が前へ畑右衛門出る。
十右　畑右衛門、何の用だ。
畑右　ハヽソ、その用と云ふは。
　ト縫ひぐるみの棒で、十右衛門を強かに打ちのめす。
十右　コレ、なんでこの十右衛門を叩きのめしたのだ。
　ト思ひ入れ。
畑右　モヽ物覺えのワヽ惡い男だ。ワヽわりやア、サヽ先刻、コヽこの畑右衛門を、ドヾ泥坊と云つたぞよ。
十右　ナニ、そんな事を云ひもしないものを。
まち　男のやうにもない、今さら其やうな事は云はぬとは、卑怯な人ではあるわいなア。
八重　アレマア、あのキヨロ〱とした顔わいなう。
八町　オホヽヽ。
　ト笑ふ。十右衛門、思ひ入れして
十右　わしやア、根ッからをかしくも無い事を、けら〱といふ御機嫌だ。斯う打たれては男が立たないけりやア、腰も立たない。
　ト畑右衛門、立ちかゝる。十右衛門立つて、門口へ駈け出し
もう、立つたぞ。立ち過ぎる程立つたよ。その筈だ、兩國の帆柱丸を二廻り飲んだものを。
　ト云ひながら、花道の角まで來て思ひ入れして
唐犬十右衛門さまのお歸りだ、地犬めら、何も用は無いか。云ひ分があらば何時でも來い。畑右衛門、この禮は重ねて云はう。さらばだ。
　ト時の鐘になり、思ひ入れして向うへ入る。あと合ひ方になる。三人顔見合せ、思ひ入れあつて
まち　ほんに、あのやうに、口に惡を持つた者も無いもの、憎うて〱ならなんだわいなア。
畑右　オヽおれがコヽ爰にイヽ居たと云ふ事を、ドヽどうしてキヽ聞き出したやら。併し、アヽあの金をカヽ返したので、コヽ心がさつぱりとした。トヽとは云ふものゝ、イヽ妹にあらぬ八重梅さま。
　トあたりを見て門口を閉める。合ひ方になり、お八重を上座に直し
サ、早速ながら、ウヽ承はりませうは、タヽ只今の金子は、如何なされて、御所持なされましたか。

まち　ソレイナア、五十兩と云ふ金子は、どうして持つてお出で遊ばしましたえ。
畑右　ア、あの金のいきさつに、コ、この畑右衛門も、ドドどうも合點がゆきませぬ。
八重　サア、あの金はな。
ト思ひ入れ。
畑右　ア、あの金は。
八重　あの金は。
トお八重つかへて居ると、若い者一人、向うより走つて來り
若者　畑右衛門どのは内にござるか。
まち　アイ〳〵、どなたでござんすえ。
若者　イヤ、庄屋どのから、御代官大場の左仲太さまが、何やら御詮議があると云うて、村中殘らずお呼び出しでござる。サア〳〵、早く新家の役所へ歩ばつしやい〳〵。
畑右　ナ、何が御詮議。ハ、ハテ、なんでア、あらうな。
若者　イヤ、昨夜境木で人殺しがあつたゆゑ、大方そんな事であらうわいの。
畑右　テ、てつきりそんな事。ソ、それぢや〳〵ナ、なんでも行かずばなるまい。ア、後でイ、今の事を聞いて置きやれ。
まち　お前、その形で寒うはないかえ。
畑右　イ、ヤ、コ、これでよい〳〵。
八重　兄さん、傘上げうかえ。
若者　イヤ〳〵、雪は今小止みで居る。
畑右　ツ、ついと行つて來る程に、キ、氣を附けや。
八重　アイ。
ト唄になり、畑右衛門に駒下駄を穿かせ、若い衆先に立つて向うへ入ると、合ひ方になり、お町、お八重を上座へ直し、手を突いて思ひ入れして
まち　八重梅さま、何から申し上げませうやら。この程のお心遣ひ、誰れござりませう、岩井右内さまの御息女樣、殊に大殿樣のお慈しみありし御身を、如何に浮世なればとて、私し風情の妹に仕立て、往來の人の袂に縋り、老若貴賤の分ちなく、草鞋の紐を取らしまして、仕馴れもしませぬ水仕事、見るに目も暮れ心も暮れ、お痛はしう存じますわいなア。
ト泣く思ひ入れ。
八重　又其やうな事云うて、泣かしやんすかいなう。常々も云ふ通り、わしが身の事は、必らず案じてたもんなや。

去年の八月月見の夜、赤堀源吾が爲に、父さんは果敢ない御最期。敵源吾は鎌倉にと、聞いたばかり女の身、兄さん源之丞さまは、敵討御免を請け、どこを當途に行かしやんしたやら、それから便りも音信も、泣かぬ日とてはないわいの。外に便りないわしが身、其方夫婦が甲斐甲斐しく、朝な夕なの慈しみ。其方とは主從の緣あれど、畑右衞門どのは見ず知らず。さぞ甲斐性無いもの、世話甲斐なしと思うて居やしやんせうかと、それが氣の毒。よう禮云うてたもや。

まち　これは〳〵、冥加に餘る今の仰せ。私しが爲にはお主樣なれば、夫畑右衞門が爲にも御主人同然。お前樣をなんの粗略に致しませう。夫も昔は武士なれば、義理も情も、よう辨まへて居りまする。なれども、思ふ事、心に任せぬ身の貧窮、目立つ程のお世話もならず、御不自由勝ちの山家の住居。せめてものお氣晴らし、權現樣へ、お連れ申しませうと、存じました所がこの大雪。それはさうと八重梅さま、先程のあのお金は、どうして御所持なされましたな。

八重　あの金は。

ト困る思ひ入れ。

まち　あの金は。

八重　サ、敵持つ身は、いつ何時、どのやうな事があらうも知れぬと、まさかの時の用意とて、兄さん源之丞さまより、送り下さんした五十兩、夫婦の衆の氣休めに、今の難儀を救うたのぢやわいなう。

まち　ナニ、源之丞さまより、お送り遊ばしたお金とや。さうとは存ぜず勿體ない、最前から大抵や大方、お案じ申して居りました。

ト兩人思ひ入れして

八重　イヤ、お町、其方にちよつと願ひがあるが、聞いてたもらぬか。

まち　これは又、改まりましたお詞。身に叶ひました事ならば、何なりと

八重　叶へてたもるか。

まち　そのお望みは。

八重　イヤ、外の事でもないが。どうぞわしを鎌倉のお屋敷へ、御奉公に遣つてたもらぬか。

まち　その事もこの間、畑右衞門と談合いたしましたれば、鎌倉のお大名、三浦の平太胤長さまのお屋敷へ、賴んで置かうと申されました。

八重　何から何までいかい世話。嬉しうござるぞや。
まち　なんのお禮に及びませう。それはさうと、この母さんは、たんで遲い事ぢややら。もう戻らしやんす筈ぢやが。
ト下出の唄になり、花道より畑右衛門の母、やつし比丘尼の拵らへ、頭巾を冠り、傘を擔ぎ、下駄にて杖を突き出て來て、直ぐに本舞臺へ來り、内に入る。
母　いま戻りましたわいの。
まち　母さん、お歸りでござりますか。
八重　きつうお戻りが遲いゆゑ、いかうお案じ申したわいなア。
母　イヤモウ、疾に戻ります所であつたが、すくも川の、佐五右衛門どのゝ處へ寄つたれば、阿母の長話し、澁茶を入れて麥香煎、その上に宗恩寺の隱居がわせられ、有り難いお談義で、ほんにこなた衆に、聞かせたかつたわいなう。この畑右衛門は、どつちへぞ行かれたかの。
まち　アイ、新屋のお役所から呼びに來ました。
母　オヽ、さうであらう。佐五右衛門どのゝ處へも、歩きがわせて、何か詮議があると云うて來ましたが、其やうな惡者に、お談義を聞かせたら、忽ち發起するであらう。儘ならぬ浮世の中、罪障の深い人も絶えぬもの。それにつけても、お念佛が肝心。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。
八重　ほんにお前は、飯はどうでござんすえ。
母　イヤ〳〵、晝からの馳走で、お腹は十分でござる。
まち　お前はそこは、冷えませうぞえ。
母　成る程、雪風の所爲か、大分冷えますわいなう。
まち　幸ひ、炬燵に火がたんと入れてあるさかい、お出でなされませ、お腰を擦りませう。
八重　成る程、それがようござります。そして又、今宵お聞きなされた、なんぞ面白いお話しがござりませう。ちつとお聞かせなさんせいなア。
母　イヤモウ、年寄りといふ者は、聞いて居るうちは、面白い〳〵と思へども、内へ戻ると皆忘れてしまひまする。覺えた所を搔摘んで話しましよ。二人ながら奥へござれ。
八町　サア、お出でなされませ。
ト唄になり、お町、お八重、母を介抱して奥へ入る。
花道より打越しの三、前幕の馬士の形にて走り出て來て、

三　大藏さまは、この畑の定宿、何屋とやら云はしやつたが、大方爰であんべい。

ト門口へ來る。以前の笠を見付けて

目標の笠が出て居るから、爰に違ひはない〳〵。

ト思ひ入れして

イヤ〳〵、この品を渡すまでは、人目にかゝらば一大事。どうぞ人知れず呼び出したいものだが。オヽ、それ〳〵、爰でこそ約束の笛のところだ。

ト呼子を吹くと、奥より大藏、以前の形にて出て來る。

大藏　合圖の呼子を吹いたのは、馬方の三、首尾よく仕負ほせたか。

三　まんまと、お頼みの免許狀を。

大藏　コリヤ。

ト兩人あたりへ思ひ入れして

出かした〳〵、その品これへ。

ト三、大藏へ免許狀を渡す。

三　眞の物か、改めて見さつしやい。

ト大藏改め

大藏　疑ひもなき敵討の免許狀。これさへ此方の手へ入れば、源之丞が敵討の手段は、上がつたりと云ふもの。一刻も早く赤堀源吾が方へ、手渡しするであらう。

三　それ〳〵、免許狀を御所持なされては、滅多に油斷はなりませぬ。

大藏　これから直ぐに出立たんと思へども、何か怪しいこの家の素振り。迚もの事に見屆けて、明朝未明に出立せん。汝もこの屋に足を留め、怪しい事もあるならば、早速告げ知らせよ。

三　そんならわしやア、この軒下に蹲踞んで。

大藏　隨分ぬかるな。

三　心得ました。

大藏　忍べ。

三　ハツ。

ト時の鐘になり、大藏、奥へ入る。三は臆病口へ忍ぶ。合ひ方になり、お八重先に立ち、お町、傳五を伴ひ出て來る。

まち　サア〳〵、これで一服お上がりなされませ。奥でこの娘と、ちよつとお話しを承りましたが、ナニ、あなた様は、鎌倉のお屋敷から、お使ひにお出でなされたげな。どなた様のお使ひでござります。

ト傳五、思ひ入れして

傳五　身は鎌倉の大名、三浦どのゝ。

ト お八重、仕方にて傳五頷づき

三浦の。

ト お八重、お町へ見えぬやうに、疊へ書いて見せ

平太閤長さまへ、お出入りの呉服屋ぢや。ひしやく屋藤右衞門と申す者でござります。この春、大殿、この箱根へ湯治にお出でなされし時、この家の妹御、そこに居るお八重どのとやらを御覽じて、あれを奥が妹めに。

ト お八重思ひ入れ、傳五も思ひ入れして

妹分に貰ひたいと、常々仰せられたところに、幸ひ、この家の御亭主、鎌倉へ見えられ、妹を奉公に出したいと、三浦の家中、なんでも與三郎どのに話された所に、幸ひの事なれば、早々迎ひに參るやうにと、申しつけやりたけれど、屋敷内より侍ひ分の者を遣つては目立つに依つて、どうぞ其方迎ひに參るやうにとあつて、わざわざこれまで參つてござる。

ト 思ひ入れ、切り口上にて云ふ。お町も思ひ入れあつて

まち　これはマア、ようこそお出でなされました。

ト 茶を酌んで來て

マア、お茶一つお上がりなされませ。

傳五　イヤ〳〵、お心遣ひは御無用でござります。

まち　なんぞ上げませうと存じますが、何を申しても山家の事ゆゑ、不自由勝ちで、御馳走の申すやうもござりませぬ。さう云ふ事なら、なぜ最前左樣仰しやりませぬ。夫にも話しまして、喜ばせませうに、ほんにお愛想もござりませぬ。

傳五　イヤ、忍びで迎ひに參つた事でござれば、相宿の手前を憚り、只今まで申しませなんだ。

八重　モシ、姉さん、日頃から御奉公に行きたいと思うて居たに、幸ひ今日のお迎ひ。最前兄さんが云うてゞあつた、三浦の平太さまのお屋敷へ、御奉公に行くと云ふは、此やうに嬉しい事はないわいな。どうぞ兄さんの戻らんせぬうちに、行きたいわいの。

まち　そりや、あまり忙しない。今に戻らんすであらう程に、暇乞ひの杯でも。

八重　それが、わたしや嫌ぢやわいな。兄さんに逢うて、ひよつと悲しうなつたら、悪いに依つて。

傳五　それ〳〵、お屋敷へ上がれば出世の身、門出に涙を零すは不吉でござる。サア、ちつとも早う出立いたさう。

まち　おやと云うて、此やうな形では。

傳五　支度の事は、この呉服屋へ仰せつけられましたゆゑ、着替へ手道具まで出來る約束でござります。念の爲、ちよつとこの證文へ印形を据ゑてもらひませう。ソレ、お屋敷の證文を讀んで見さつしやい。

ト お町へ證文を渡す。お町、無筆ゆゑ困るこなし。

ドレ／＼、讀んで聞かせませう。ドレ／＼。

ト取つて擴げて

其方妹八重梅こと、此方の妹分に貰ひ、名を小紫と名つけ申し候ふ、以上。めでたくかしく。なんとおつな證文でござらう。サア、印形をさつしやい。

まち　印形は。

傳五　イヤ、印形が無くば、其許の爪判でようござる。

ト矢立を出し、お町に爪判を捺させ、お八重は泣きたい所をヂッと堪え居るこなし。

サア、コレ、よいかえ／＼。迎ひの駕籠。

ト呼ぶ。下座より四つ手駕籠を門口へ据ゑる。お町見て、合點のゆかぬ思ひ入れにて

まち　モシ、これがお迎ひのお駕籠でござりますかえ。

傳五　成る程、不思議に思はつしやるは尤も。乘り物やあんぽつでは、名にし負うたる箱根の難所、結句危ならござるゆゑに、わざ／＼頼んだ四つ手駕籠。この難所を出離れるうちばかりでござる。サア／＼、行きます／＼。

八重　そんなら姉さん、わたしやモウ行く程に、まめで居て下さんせ。母さんは今、すや／＼と寐入り端。起し申しては悪い程に、わざと逢はずに行きますぞや。これまで段々のお世話、お禮は詞に述べられませぬ。最前奥で認めたこの文、兄さんが歸らしやんしたら、上げて下さんせ。この文を見やしやんしたら、

ト思ひ入れあつて

大抵嬉しがらしやんす事ぢやあるまい。常々物喜びな兄さん、喜ばしやんすを見るやうな／＼。オホ、ホ、ヽ。

ト涙を隱して、笑ひにて紛らす。

まち　迚もの事に、畑右衛門どのが歸らしやんしてから、行たらよささうなもの。早う去にたがるこの場の素振り。わしやアどうも氣にかゝる程に、もちつと待たんせ。おしつけ戻られますわいな。

傳五　イヤ／＼、お屋敷では殊の外お急ぎ。途までお迎ひに……イヤ、氣遣ひさつしやるな。これから鎌倉の屋敷へござれば、直ぐに逢はれます。今日から妹御は出世の

小口。善は急げぢや。サア、駕籠に乗つたり〱。
まち　それぢやと云うて、こりやマア、あんまり急な事。
そんなら随分煩らはぬやうに、めでたい知らせを待ちますぞえ。
八重　アイ〱、モウ、わたしは、此やうな嬉しい事はないわいなア。
ト泣きたい所を辛抱して、いそ〱としながら駕籠に乗る。傳五、したり顔して門口へ出る。
まち　これはお前、何かとお世話さまでござります。この上ともにお見捨てなう、お頼み申しまする。
傳五　なんの〱、必らず案じさつしやるな。
まち　左様ならば、又この間にお禮に上がりませう。
傳五　鎌倉で尋ねさつしやれば、直ぐに知れます。必らずわしが内へござれ。
まち　ハイ、お粗相でござります。
ト駕籠を舁き上げる。
八重　姉さん、くどう云ふやうなれど、必らず案じて下さんすな。日頃の願ひ成就して、お屋敷へ行くからは、おしつけ敵と。
トお町、お八重思ひ入れして
サ、堅き屋敷の御奉公、夜毎に變る苦界の。
まち　ヤ。
ト思ひ入れ。
八重　苦界を出て御前勤め。姉さん、めでたいな。
ト思ひ入れする。
まち　マア〱、めでたい〱。
傳五　行きませう。
ト唄になり、傳五、駕籠に付いて逸散に花道へ入る。お町残る。
まち　何か、ソワ〱とした八重梅さまの素振り。畑右衛門どのゝ歸りもお待ちなされず、いそ〱として行かしやんしたが、どうも合點がゆかぬわいの〱。
ト思案して
詳しい事はこの文にと、仰しやつたれど、物書かぬ身は讀む事もならず、なんの因果で、幼ない時、手習ひはせなんだやら。今さら悔やんで歸らぬ事。早う畑右衛門どのに、讀んでもらひたいものぢやなア。
ト思ひ入れあると、唄になり、畑右衛門、以前の形にて、花道より出て來て、直ぐに内へ入る。お町これを見て

畑右衛門どの、歸らしやんしたか。さぞ寒うござんしたらう。お代官樣からの御用は、なんぞ氣遣ひな事ぢやないかえ。

畑右　何も氣遣ひな事ではない。コ、これを見やれ〳〵。

ト權八が繪姿を出して見せる。お町見て

まち　エ、こりや、誰れが繪姿でござんすえ。

畑右　コ、こりやな、キ、九州のタ、探題、菊地の家來、シ、白井權八と云ふ者。ドゞ同家中の本庄助太夫を討つて立退き、コ、この者を搦め捕るにオ、於ては、ソ、その功として、キ、金子百兩、下さるゝとのお觸れだ。

まち　ほんにこの頃、お觸れのあつた人殺しの、白井權八が繪姿かえ。逞ましい好い若衆でござんすの。御褒美として百兩下されんとの事でも、なんぞ人の難儀を喜ぶも同じ事。ほんに喜びと云へば、八重梅どのは、鎌倉の三浦の平太さまのお屋敷へ、御奉公に行かしやんしたわいなア。

畑右　ヤ、、、ナ、なんだと。

ト驚ろくこなし。

まち　詳しい事は、この文にある程に、お前に見せいと仰しやつたわいなア。

ト文を出す。

畑右　ナ、ナニ、コ、この文を、オ、おれに見せよとオ、仰しやつたか。ド、ドレ〳〵。

ト文を取り、開き讀む。畑右衛門、恟りして

ヤ、、八重梅さまのイ、、行かれたは、カ、鎌倉ではない、エ、江戸の。

ト大きに急き入り云ひ兼ねるこなし。お町驚ろき

まち　エ、そりや、お前、なんの事ぢやいなア。

ト畑右衛門、文を又讀む。

畑右　コ、コレ〳〵、コ、この年月、夫婦の衆の心遣ひ、ドゞどうも二人の氣休めと思ふにサ、幸ひ、昨日より泊り合せしは、エ、江戸の吉原のお判方、コ、これ幸ひとタ、頼みて、借り請けたゴゞ五十兩。サ、最前、ジュジュ十右衛門とやらに渡した金にて、ソ、その代りにコこの身を苦界に沈め、フ、二人がナ、難儀ス、救ひ候ふは、イ、今までセ、世話になり候ふオ、恩を送り候はんと、ウ、嬉しくゾゞ存じマ、參らせ候ふ。

ト恟りて讀む。お町、大きに驚ろき、急き入りて

まち　エ、その後はえ〳〵。

畑右　シ、併し、ク、廓の人をチ、力に、カ、鎌倉のツ、

使ひとイ、詐はり候ふゆゑ、サ、定めてオ、お町が怨み候はんと、ソ、それのみカ、悲しくゾゞ存じ候ふ。かしく。

　トお町、駈け出しながら

まち　さう聞くからは、一寸も遣らるゝ事ぢやない。

　ト行くを畑右衛門留めて

畑右　マ、待て。

　トお町、振返る。

畑右　ハ、わりや、ドゞゞどこへ行くのだ。

まち　如何ほど、身貧に迫ればとて、大恩ある御主人へ、なんと憂目がさせられう。あなたをやみ〳〵渡したは、この町が無筆から。少しも文字が分るなら、證文の時知れやうに、思へば〳〵恥かしい今日の體裁。海川へなりと身を沈め、未來の御主人への申し譯。

畑右　タ、たわけ者。カ、金さへあればヤ、八重梅さま、

　ト、取戻されうが。

まち　ぢやと云うて、どうして金が。

　トお町、立戻る。

畑右　イヤ、デゞ出來る。

まち　なんと云はんす。金の工面が出來ると云はしやんすか。

畑右　デゞ出來る段か、コ、今宵中に、キ、きつと、コ、拵らへて見せう。

まち　そりや嬉しうござんすが、今宵のうちに金が出來ると云はんす譯は。

　ト畑右衛門、權八が繪姿を壁に貼り

畑右　デゞ出來ると云ふは、コ、この繪姿。サ、最前もイイ云ふ通り、シ、白井權八をカ、搦め捕り、出すに於ては、金子ヒ、百兩と引換へとの事。サ、境木の人殺しも、マ、正しくゴゞ權八。コ、今宵はこの畑へ、ク、、來るは知れた事。この所へさへ來るならば、情をかけてウ、內へ入れ、直さまソ、訴人する心。

まち　そんならわたしは、八重梅さまの後追ひ駈けて。

畑右　ア、明日までマ、待つてもらやれ。

まち　合點でござんす。ぬからんすな、こちの人。

畑右　ア、後構はずに、早く行け。

まち　つい行て來やんせう。

　ト三重になり、褄からげして逸散に花道へ入る。合ひ方になり、畑右衛門、お町を見送りて居る。奥よりお玉、硯箱を持つて出て來る。うろ〳〵して畑右衛門に

突き當る。畑右衛門、驚ろき

畑右　ナ、何をシ、しやアがる。

ト　お玉、ウロ〳〵して、思ひ入れあつて

たま　ハイ、お硯箱を持つて參りました。ほんにわたしとした事が、奥へ泊つてお出でなさるゝ、お客樣の所へ持つて行く硯箱を、旦那樣の後へ持つて來るとは、初めて粗相また致しやした。

畑右　べゞべら坊め。ハ、早くモ、持つてうせう。

たま　ハイアイ。

ト　奥へ行かうとする。

畑右　ア、コ、コレ〳〵。

ト　留める。

たま　なんの御用でござります。

畑右　ヨ、よい所へキ、來た。寒いのでカ、肩が張つて來た。チ、ちつと、タ、叩いてくれろ。

たま　アイ。

ト　二重舞臺へ來て、畑右衛門が肩を揉む。

畑右　ナ、なか〳〵わりやア、ア、味をやるわえ。

たま　按摩を取るも、旅籠のかすりでござんすわいな。

畑右　エ、、ヨ、慾の深い奴だ。

ト　肩を揉ませる間、雪頻りに降つて來る。てんつゝになり、花道より、源之丞、五建目の形にて、ぶら提灯をともし、直ぐに舞臺へ來り、門口へ寄りて

源之　なんと、一人旅でござるが、爰へ泊めては下されまいか。

たま　イエ〳〵、一人旅は所の法度。お馴染でなければなりませぬ。

源之　この大雪に、殊の外難儀いたす程に、なんと泊めては下さるまいか。

畑右　ヨ、ようござる。ト、泊めませう。

源之　泊めやうとは忝ない。

畑右　湯を汲んで進ぜろ〳〵。

たま　アイ〳〵。

ト　盥に湯を汲んで持つて來る。此うち源之丞、笠を脱いで内へ入る。

源之　なんとマア、きつい雪ではござらぬか。

畑右　サ、さぞ、寒かつたでござりませう。

源之　さて〳〵、今日は難儀を致した。

ト　云ひながら草鞋を脱ぎ、腰を掛け、盥にて洗ふ。此うち畑右衛門、煙草をのんで居る。

たま　モシ、据風呂へお入りなされませ。沸いて居ります。
直ぐにお入りなされませ。

源之　据風呂はようござらう。

たま　ドレ、お荷物を座敷へ持つて參りませう。

源之　この雪で濡れたれは、合羽ば一緒に、どこぞそこらへ掛けて干してもらひたい。

たま　勝手の竿へ掛けて、よう干して上げませう。

源之　そんなら、世話ながら。
ト合羽を脱いでお玉に渡す。

たま　ドレ〳〵、ちよつと干して參りませう。
トお玉、奥へ入る。合ひ方になり、源之丞、荷物を提げ、上の方へ通る。畑右衛門、煙草盆を持つて來て

畑右　サヽ、さぞ、難儀ナ、なされたでござらう。マヽ、オヽ、お煙草をお上がりなされませ。

源之　これは〳〵、何かにつけて一人旅と云ふものは、不自由なものでござる。

畑右　左樣でござります。
ト畑右衛門、源之丞が恰好をよく見て、フツと丸に井の字の紋所を見附け、惘りして、これより俄かにウロウロする事あるべし。壁に貼つたる人型と見競べるこなー。

源之　時に御亭主、鎌倉の三代將軍、實朝公のお歌に、箱根路を今日越えくれば伊豆の海や、沖の小島に波の寄る見ゆ。と遊ばされたる歌とは違ひ、いづくを見ても雪の中。快晴の時分は、さぞかし好い景色な所があるでござらうな。

畑右　ゴヽ、ござりますとも。カヽ、恰好と云ひ、紋所の樣子。ようござりましたなア。ゆるりとお泊りなされませ。
ト畑右衛門思ひ入れ。源之丞、氣の附かぬこなし。

源之　今宵一宿は、誠に其許の御芳志ゆゑ、忝ない。定めて相宿がござらう。

畑右　ゴヽ、ござりまする。アヽ、相宿がござりまするが、コヨようござります。お氣の詰まらぬ所にオヽ、置きませう。恰好と云ひ、スヽ、角前髪、慥かな事はモヽ、紋所。アヽ、コレ申し、お前樣は、小座敷へお炬燵も出來ました程に、サア〳〵、お出でなされませ。
ト畑右衛門、いろ〳〵思ひ入れあり、お玉出て來て、源之丞を見て思ひ入れ。

たま　モウ、見れば見る程好い器量に、お生れつきのお若衆樣。なんぞ御用がござりまするならば、私しが聞いて

お上げ申しませうわいなア。
ト此せりふのうち、畑右衞門、硯箱を引寄せ、鼻紙へサラ〳〵と書きて、お玉を連れて來て
畑右　コ、コレ、ワ、わりやアこの手紙を、シ、新家の源兵衞が方へ持つて行け。
たま　アノ、この手紙を。
畑右　ヘ、早くモ、持つて行け。
たま　アイ、そんなら新家まで行くと云うても、こりや下駄では行かれぬわいの。晝ではなし、思ひ切つて、ドリヤ、男端折りをお目にかけやう。
ト尻を端折り、手拭を冠り、傘をさして花道へ入る。此うち源之丞、壁に貼つけたる人型をフッと見て
源之　御亭主、あの壁にござる繪姿は。
ト聞く。畑右衞門驚ろき、立ち塞がり
畑右　ア、あれは、エ、江戸土產にモ、貰ひました、ヤ、役者繪。ミ、見さつしやるものぢやござらぬ。
源之　ドレ、奥へ參つて休足いたさう。
ト奥へ行かうとする。源之丞が肩を無理矢理押へつけて
畑右　ワ、わしが、按摩をト、取つてやりませう。
源之　これは迷惑千萬な。
畑右　チ、ちつとのうち、マ、コ、爰に斯うしてござりませ。
源之　これは迷惑な事の。
ト立たうとする源之丞を、無理に押へて居るうち、花道より大場の左仲太、野袴大小、ぶッ裂き羽織の形にて草鞋穿き、十手を持ち出て來る。これに續いて捕り手四人、十手を持ち出て來る。左仲太、內を窺ひ
左仲　ソレ、踏ん込め。
皆々　捕つた〳〵。
ト源之丞にかゝる。源之丞、この四人を見事に投げ、キッと思ひ入れ。畑右衞門、此うち鉢卷をして尻を端折つて、六尺棒を振り廻して居る。
皆々　動くな。
源之　思ひ依らざる捕り手の人數。身に覺えなきこの旅人。何ゆゑ手籠めになさるゝぞ。必らず聊爾おしやるな。
左仲　覺えないとは卑怯な一言。九州の探題、菊地兵庫之助成景が家來、白井庄左衞門が伜、同苗權八であらうがな。
畑右　カ、必らずア、爭ふな。タ、慥かな證據はコ、この

人相。恰好と云ひ角前髪、マ、丸に井の字の紋所まで、チ、ちつとも違はぬ一人旅。サ、權八どの、ナ、名乘れ名乘れ。

源之 すりや、姿恰好この前髮、丸に井の字の紋所まで、その人型に違はぬは、權八ぢやと申すのか。

畑右 遁がれぬ所。カ、覺悟さつしやい。

源 我が紋とても井の字の紋が、この身の難儀となつたるか。ホ、、ホイ。

ト當惑する。

左仲 其方ことは、父庄左衞門切腹の後は孤兒となり、本庄助太夫の養育にて人となりしところ、先つ頃江州鴨八幡造營につき、鎌倉より比企の義員、菊地主水之助、この兩所を賴家公の御名代として差上されし折柄、同家中とは申しながら、その恩義ある本庄助太夫を殺害なした非道の振舞ひ。鎌倉に對し奉りては重々不屆き奴。比企の判官の言上に依つて、津々浦々は云ふに及ばず、鬼界ケ島まで人型を持つて詮議嚴しく、白井權八、遁がれぬ所ぢや。繩かゝれ。

源之 恐れ入つたる儀でござれども、全く拙者權八ではござりませぬ。推してお尋ねなさるれば、名も明かしますするでござりませうが、願ひござつて世を忍びまする浪人者の身の上。その儀は何卒、御容赦下されませ。

トきつと思ひ入れ。

左仲 默らう。露顯なしたる其方の身の上。よし陳じても陳じさせぬ。この如く手の者引具し、罷り越したる大場の左仲太。身が手を下して繩掛けうか。

源之 然らば拙者に。

左仲 腕廻せ。

源之 ヘイ、この上は是非に及ばぬ。名乘り申するも如何しけれども、拙者儀は佐々木家の家中、岩井右内が伜、同苗源之丞と申す者でござりまする。

ト左仲太、思ひ入れして

左仲 ナニ、其方が右内の伜源之丞か。

ト畑右衞門驚ろく。

源之 先つ頃、本國近江の國、拙者が屋敷に於きまして、赤堀源吾と申しまする者に、親を討たれましてござりまする。その敵源吾の行くへを尋ねん爲、この度の旅行。面目も無く、名を名乘り申してござる。

左仲 ハ、、、、敵討と云へば云ひ譯立つと、敵を尋ぬる旅行とは、身を僞はる不屆き者。さりながら、佐々木ど

の丶家中とあらば、相違はあるまい程に、その敵討の免許狀、高綱どの丶墨附があらう。その墨附を內見いたさう。

源之　御尤もなるお尋ね。近江の國を出立の砌り、申し請けましたる殿のお墨附。敵討の免許狀を、只今お目にかけませう。

ト革籠の蓋を明ける。畑右衞門、いよ〳〵源之丞と思ひて、ウロ〳〵する事あるべし。源之丞、革籠の內をいろ〳〵尋ねて着類を取出し、探して見ても無きゆゑ驚ろき

源之　ヤ、、昨日三五平に逢ひし時まで、慥かに入れ置きし敵討の免許狀。大切なる殿のお墨附、如何やらに探しても紛失なせしか。オ、、、。

ト呆れて革籠を取落す。

左仲　ソレ、縛れ。

皆々　動くな。

ト十手を振上げる。源之丞、思ひ入れあつて

源之　必らず聊爾なさるゝな。源之丞に相違ござらぬぞ。

左仲　吐かすまい。まこと其方が佐々木の家中、岩井源之丞とやらなれば、免許狀が無くては叶はぬ。お尋ね者の白井權八と名乘るまいと思ひ、墨附を今になつて、紛失せしと僞はり申す憎い奴。遁がれぬ所だ。權八と名乘れ。

源之　サ、その儀は。

左仲　但し、源之丞と云ふ證據があるか。

源之　サ、それは。

左源　サア〳〵〳〵。

左仲　腕廻せ。

源之　是非に及ばぬ我が身の上。親を討たれしのみならず、主君より賜はるお墨附まで、紛失せしは皆時節……旣に文宣王も陽虎となり、捕はれ給ふ。身に覺え無きこの繩目。いづ方までも召連れられ、申し譯はその節いたさう。イザ、寄つて繩かけ召されい。

ト尋常に手を廻す。

左仲　横道者の白井權八、定めて云ひ譯は立つであらう。召捕りに來た身が役目。捕つた。

ト源之丞を縛り上げる。畑右衞門、ツカ〳〵と寄つて

畑右　モ、モシ、そのお若衆さまが、ゲ、源之丞とやらなら。

左仲　たわけ面め、繪姿に相違なき白井權八、訴へ出たる其方、お上へ對しては好き奉公。約束の通り褒美の金は

役所に於て渡してくれろ。ソレ、權八を引ッ立てい。
　ト源之丞を引ッ立て、皆々花道へかゝると、バタ／＼にてお町、走り出て來る。入れ替り行かうとする。源之丞と顏見合せ、驚ろいて
まち　ヤヽ、あなたは。
　ト寄らうとするお町を、門口より内へ突き倒し
左仲　引ッ立てい。
皆々　ハア。
　ト三重になり、源之丞を引ッ立て、花道へ入る。お町、帶を締め直し、追ひ駈けて行かうとする。畑右衛門、門口をしやんと閉めて
畑右　ヤヽヤイ、ニヨ／＼女房。ワ、わりやド、どこへ行く。
まち　コレイナア、こちの人、今この内から繩にかゝつてござんしたは、わたしが母さんの御主人、岩井右内の若旦那、源之丞さまでござんすわいなア。
畑右　バ、馬鹿づらめ。ナ、なんのあれが、ゲ、源之丞さまでア、あらう。
まち　イエ／＼、こなさんは、ついに一度も、お目にかゝらしやしんせぬに依つて、知らしやんすまいが、源之丞さまぢやわいな／＼。
　ト急くこなし。
畑右　マ、まだ吐かしやアがるか。コ、コレ、エ、、あの人型に、寸分違はぬ白井權八だ。
まち　イ、エナア、源之丞さまぢやわいなア。
畑右　エ、、情の強い。ソ、その紋所が丸にいの字。
まち　コレイナア、源之丞さまの御紋所も、岩井のいの字とやらでござんすわいなア。
畑右　ソ、そんなら源之丞さまの紋所も、岩井のいの字か。
まち　アイ、いの字とやらぢやわいなア。
畑右　モ、紋も變らず、ゴ、權八と同じ事とは。
　ト畑右衛門バッタリ坐る。お町、急いたる思ひ入れにて畑右衛門が側へ詰め寄り、疊を叩いて
まち　こちの人、畑右衛門どの、どう云ふ事で、お大切なる、御主人様の、アノ源之丞さまに繩かけて、どうして渡して遣らしやんした。
畑右　ヤ、八重梅をト、取返す身の代金のカ、金が欲しさに、シ、白井權八をソ、訴人して、ホ、褒美の金をシ、してやる心。シ、知らぬ事ゆゑ渡し申した。
まち　そんなら、知らずに源之丞さまを。

畑右　コレ、ホ、褒美の金を、モ、もらうわえ。

まち　金が出來ても、どうせうぞいな〳〵。

　ト畑右衛門に取りつき泣く。奥より畑右衛門母、以前の形にて、奥より錦の袋に入りし刀を提げて走り出て來て、畑右衛門が前に置き、直ぐに畑右衛門を引寄せて思ひ入れして、こなしあつて

母　コレ、聟どの、畑右衛門どの、様子は殘らず聞きましたが、こなたは〳〵は、ようマア、あの大事の〳〵お主の源之丞さまを訴人して、外の内でもある事か、御家來の畑右衛門が内で、お縛り申して渡すとは、邪慳とも不忠とも云ふに云はれぬ、ほんに聞えぬ心ぢやの。なんぼ今までお噂ばかりで、お目にかゝらぬ源之丞さまぢやと云うても、訴人して金取つては、天道さまがお許しなされぬわいなう。此やうに云うてからが、わしは年寄り。娘のお町はこなたの女房‥‥相手にもならぬに依つて、こなたに云ひませう。

　ト刀を出して、畑右衛門が前へ置き

コレ〳〵、こなたから預かつたこの刀の、實の親御とやらは、彌三右衛門と云うて、立派な武士であつたと聞く。小さい時からこなさんは、絹商人の彌市でも、親御が武士なりや武士も同然。サア、この姑もこなたの手に掛け、殺して下され。わしや連合ひの位牌へ、お主様を訴人させては、立たぬわいなう。

　ト泣く。お町、有り合せたる袋の中より刀を出して

まち　さうぢや。

　ト自害をしやうとする。畑右衛門留めて

畑右　ニヨ〳〵女房、ナ、なんでシ、死ぬ。

まち　なんで死ぬとはこちの人、世に悲しいはこの身の上。讀み書きならぬばつかりにて、アノお匿まひ申したる、八重梅さまが、吉原の三浦屋へ、勤め奉公にお出でなされしお書置とは露知らず、畑右衛門どのへ屆けしゆゑ、事起つたるこの難儀。あの源之丞さまの事も、夫に科はござんせぬ。母さんへの云ひ譯に自害するのぢや。こちの人、話して殺して下さんせ〳〵。

畑右　モ、尤ぢや〳〵。ヤ、八重梅さまをッ、勤め奉公させましては、シ、姑どのへも女房も、コ、この畑右衛門猶立たぬ。ゲ、源之丞さまを訴人した、イ、云ひ譯がある程に、セ、急かずともオ、おれが云ふ事、女房、キ、聞いてくれろ。オ、阿母もキ、聞いて下さい。

母　その云ひ譯を聞きませう。せめて云ひ譯なりとも聞

いて、娘と一緒に自害をしませう。コレ〳〵、娘も逸まる事はない程に、マ、一通り聟どのゝ、その云ひ譯を聞きませう。

まち　ぢやと云うても、八重梅さまばかりか、源之丞さままでも、御難儀を掛けましたは、みんなわたしが爲す業ゆゑ、どうも

ト刀を拔き放し、死なうとする。畑右衛門、お町が刀をもぎ取り、お町を取つて投げ退け、手ばしかく刀を手に取り直して、我が脇腹へがばと突ッ込み、ウンと打返る。お町、母、大きに驚ろき介抱するうちに、時の鐘になると、花道より權八、深編笠大小にて、浪人の形にて出て來て、直ぐに本舞臺へ來て、この門口に佇み、内の樣子を窺ひ居る。

コレイナウ、こちの人、心を慥かに持つて下さんせ。氣を附けて下さんせ。

ト畑右衛門、苦しきこなし。母も取縋り

母　コレ、聟どの、畑右衛門どの、なんでこなたは腹切るのぢや。サア、その譯を云うて下さい〳〵。

まち　こちの人、畑右衛門どの。

母　なんでこなたは、死ぬるのぢや。

ト兩方より詰めかくる。畑右衛門、キッとなつて刀を引き廻すと、誂らへの合ひ方になり、畑右衛門、苦しきこなしあつて

畑右　鳥の將に死ぬるに、その聲悲しく、人の死ぬる時云ふ事善しと、畑右衛門が身の云ひ譯を、姑どのも女房も、一通り聞いておくりやれ。

まち　こちの人、其やうによう物を云はしやんす、お前は心附かぬかえ。

畑右　ヤ、ナニ物が云はれるか。

まち　ソレ、其やうに

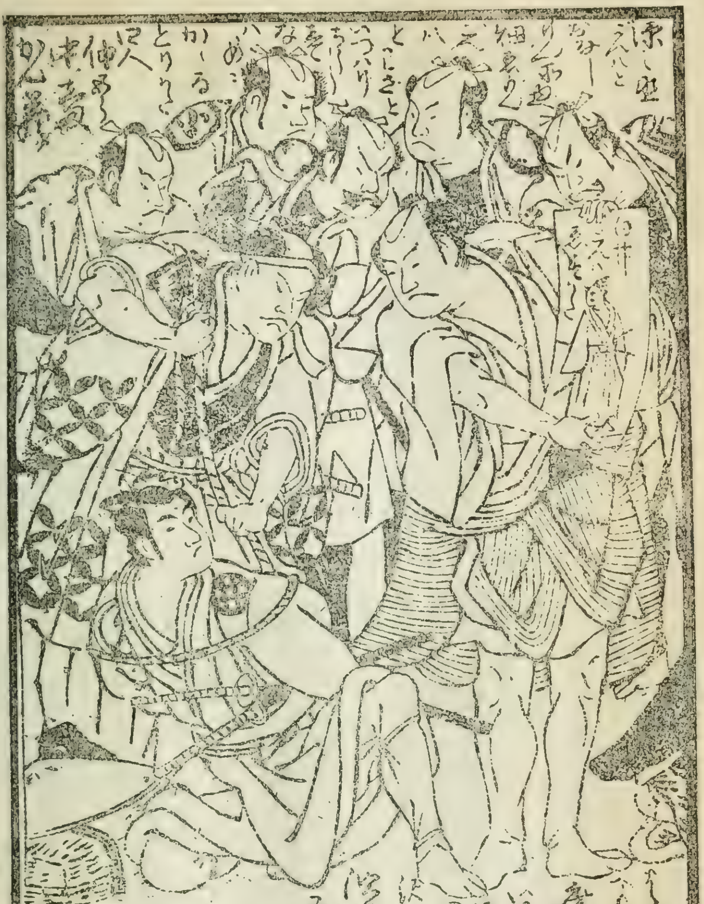
母町　吃らず物が

母町　云はれるわいなう。

畑右　言舌明らかならざる者は、しゝかゝとの根を切る時は、速やかに云はるゝと、常々聞き込みしが、コレこの刀を深く臓腑へ突ッ込みしが、さては吃りの根を切りしか。差當つたる今際の喜び。始めて明かす我が身の上。この畑右衛門が御主人と申すは、お尋ね者とおなりなされし、白井權八どの。

まち　エヽ。

ト驚ろく。



初演の



繪 番 附

畑右　元より親の彌三右衛門は、白井の家に譜代の御家來。一人の伜のこの畑右衛門、生れ附いたる吃りゆゑ、御奉公叶はず、上州に縁あつて、絹商人の彌市と云ひしが、サア、情なや親の重病、今際の時に云ひ置かれしは、コレ、この一腰は千壽院の刀、笹龍膽の拵らへは、假初めならぬ頼朝公の御血筋。大友の一法師頼國公の御形見。この一腰を何卒して、權八どのへ差上げよと、詞も重き親の遺言。コレ、あの白井權八どのは、誠は庄左衛門どのゝ御實子に非ず、頼國公の落し胤。

ト苦しき思ひ入れ。

何卒一度お目にかゝり、御身の上は隱すとも、思ひも依らぬ天下の囚人、白井權八を搦め捕つて渡せとの、あの人相を見ると早、お命が助けたく、願ふに幸ひ、恰好面差し、丸に井の字の紋所までも、寸分違はぬ今宵の旅人。道ならぬ事とは思ひながら、訴人なせしは權八さまの身替りと、思ひ附いたは親の主人へ、忠なりと思ひしが、そのお身替りはこの家の主、過ぎ行かれたる畑右衛門どのや、女房お町が御主人の、源之丞さまにてありしとは、廻り〳〵てこの身の因果。この刀にて腹切りしも、舅どのへの申し譯。せめては聟のこの彌市を、武士の伜と思し召し、御免なされて下さりませ。

母　さうとは今まで露知らず、只上州の絹商人、彌市どのとばかり、今日が日までも思うて居たが、これが恥かしうござります。

まち　すりや、こなさんが、權八さまの御家來とは、わたしや夢にも知らないで、なぜに今までこちの人、お前は隱して下さんした。聞えぬわいな〳〵。

畑右　言舌廻らぬ片輪者、主人の御名を明かさぬ所存。我れ亡き後にてこの刀、權八さまへ差上げてくれい。申し置く事これぱかり。サヽ、母者人、介錯。

母　どうしてマア、あられもない。聟は子と云ふその人に、その介錯がなるものかいなう。コレ、どうぞして彌市どの、助かつて下され。殺しともないわいなう。

ト泣き入るこなし。

畑右　そんなら女房、其方の主人を訴人した、不忠の彌市が首を打て。

まち　情ない事云はしやんす。我が夫の太刀取りが、なるものかいなア。これぱつかりは、どうぞ免して下さんせ。

ト泣き入るこなし。畑右衛門思ひ入れありて

畑右　是非に及ばぬ、この上は。

ト淺義道に刀を引廻す。お町、母、畑右衞門が側へ寄らうとする。畑右衞門、若しきこなしあつて、母、お町を兩方へ突き退けて、臓腑を掴み出し思ひ入しあるべし。誂らへの鳴り物。これまでにて、權八、門口よりツカ〳〵と内へ入つて上の方へ通る。畑右衞門が側へ立寄り、編笠を取つて

權八　我れこそおことが尋ぬる白井權八。彌三右衞門が伜其方も喜びであらう。

ト畑右衞門、苦しきうちにて思ひ入れして

畑右　さてはあなたが。

權八　白井權八。

まち　そんならあなたが。

權八　世になき我れを主人と思ひ、忠義を立てる志し、忘れは措かぬ、忝ない。せめて主從のよしみに、介錯してくれう。臨終正念いたせ。

畑右　然らば、安中彌三右衞門が伜を。

權八　イヽや、忠義の家來は手にかけぬ。身が手にかけるは上州の絹商人、彌市を手にかけるワ。

畑右　すりや、上州の絹賣りを。

權八　この權八が、まツこの通り。

ト畑右衞門が持つたる刀を取りて、見事に畑右衞門が首を打ち落す。

町母　ハアヽヽ。

ト泣き落す。此うち死骸を吹き替へる。權八、畑右衞門が首を取つて、つく〴〵見て

權八　今まで知らぬ我が身の上。誠は庄左衞門が伜にあらで、額國が落し胤なりとは、知らで月日を送りしが、この拵への從龍膽、千壽院の一腰にて、相違あらざる我が身の系圖。いよ〳〵身を引起し、武名を擧ぐるが父への孝行。返す〴〵も昔を忘れぬ、彌市親子が志し、嬉しいぞよ。

ト持つたる首を有り合せたる革籠へ入れて、佛壇の前へ直し、血刀を拭き、手桶の水にて洗ひ鞘へ納め、箱の中へ入れて、押戴き思ひ入れ。この後より大藏、ツカツカと出て來て

大藏　權八、捕つた。

トかゝる。立廻りにて權八、大藏を締め殺す。大藏苦しきこなし。此うち内懐より以前の墨附を落す。權八、大藏が死骸を片附け、直ぐに一通を拾ひ開き見て驚ろき

權八　これこそ、源之丞が敵討の免許状。
町母　エヽ。
ト驚ろく。
權八　無にならざるこの墨附。彌市へは好き手向け物。ソレ
ト墨附を出して
これを新家へ持ち行き、虜となつたる源之丞が、人違ひの云ひ譯召されい。
トお町へ渡す。
町母　エヽ、忝ない。
ト受取つて戴く。此うち三五平、奴の形にて、菅笠を持ち走り出て來る。門口にて内の樣子を窺ふ。
權八　我れはこれより武藏へ立越え、暫らく江戸に身を隱さん。
町母　そんなら、隨分御機嫌よう。
まち　緣盡きずば。
權八　重ねて逢はう。
町母　權八さま。
權八　兩人、さらば。
ト權八、門口へ出て、明けようとする。三五平、權八を見附け、脇差へ反りを打つて詰め寄る。權八、門口をシヤンと閉める。途端に三五平、後向きに尻をからげる。
カチ〳〵〳〵〳〵。　ひやうし幕

第二番目序幕　眞崎川口屋の場

淨瑠璃「一節草齋宮が船」富本連中

役名……白井權八。寺西閑心實ハ赤堀源吾。男達、唐犬十右衛門。多々羅覺之進。石崎江内。西岡平馬。川口屋娘分、お花。料理人、淸助。眞崎の藝者、おすみ。淨瑠璃語り、豐竹京太夫。三浦屋傾城、花紫。同新造、小紫實ハ右内娘八重梅。同遣り手、お傳。禿、菫。同、筑波。船頭、次郎吉。花川戸の男達、幡隨長兵衛。

本舞臺、三間の間、眞崎川口屋座敷のかゝり。高さ四尺ばかりの二重舞臺、これに姫簾を掛け、正面繪張りつけ、軒に團子提灯三張り下げ、上の方に常夜

燈の柱、下の方、櫻の立ち木、水引一杯に咲き居り、山吹の生籬、橋がゝりに浪板、葭の茂みを餝りつけ、これへ後に屋根船を引出す事あり、幕の内より長床几に毛氈を掛け、多々羅覺之進、西岡平馬、石崎江内、いづれも神祇組の男達の形にて、大小を帶し、日和下駄を穿き、煙草盆を扣へ、煙草をのんで居る。下の方の床几に川口屋の娘お花、振り袖やつし、娘の形にて酌をして居る。川口屋料理人清助、若い者の形にて肩へ手拭を掛け、俎板に向ひ、鯉を拵らへて居る。爰に大杯、硯蓋、肴盤臺に烏賊を二三杯、蛸、青物を入れて手桶柄杓取散らし、四季評林春の部と云ふ掛け札をかけ、曲發にて幕明けて、直ぐに通り神樂になる。

はな　モシ〳〵、どなたも今日は、一つお過しなされませ。お上げ申さにやならぬわいなア。

覺之　昨日のやうに醉はせても、また今日も無理酒か。外の手合ひは格別、この覺之進は生得客下戸、一雫もたらぬ所を、寺西閑心どのと云ふ、酒の師匠が出來て、つい呑み習ひ今では大酒。その代りにやア、腹が通しになつて、飯と云ふ物は人間も食ふ物かと、思ふやうになつたが、なんと、きついものぢやないか。

江内　サア、そこが酒の一得。この江内は阿母の腹を、ギヤッと生れて出るが最期之助、産湯から酒を浴びて、まくりの代りに燒酎を呑んだ男だ。酒で育つた男だに依つて、今まで醉つたと思つた事がないが、寺西閑心どのと云ふ、酒呑みの親方が出來てから、今日も昨日も二日醉ひ。大きな物ぢやアあやまる程に、小さい物で始めたがよい。

平馬　弱い音を出したワ。日頃は格別、今日は親方の寺西閑心どのが、江戸に隱れない花川戸の男達、幡隨長兵衞と云ふ者に、この眞崎の川口屋で、近附きになられるとの事で、取持ちに來たのぢやねえか。酒の相手が幡隨長兵衞なれば、おいらが腹はないものだと思つて、皿でも鉢でも大平でも、煽つて〳〵煽りつけてやるがいゝぢやアないか。

はな　ほんに平馬さんの酒は、氣味のよい事ぢやわいなア。コレ〳〵、清助や。今日は閑心さまのお約束で、お出でなさんす筈。誠にあの三浦屋から、花紫さんや新造衆の錦戸さんや、小紫さんがござんす程に、出し物にも氣を附けたがよいぞや。

清助　お氣遣ひなされますな。そこは奴長兵衛が子分の淸助、出し物と來ちやア、やるものぢやアござりませぬ。コレ、覺之進さま、御覽じませ。今朝新場から、鰹と蛸を取つて參りやした。次手に閑心さまのお好きの烏賊、こいつを摺り身にして上げますが、この烏賊の摺り身と云ふ物は、料理人の方ぢやア、大抵面倒な事ぢやアござりませぬ。

覺之　コレ、淸すや、烏賊を見ろと云ふはよいが、その覺之進さま〳〵がおれが氣になる。斯う云ふ所に女郎や藝者が居ぬからよいが、おれも吉原や品川では、圖外れに洒落る男だが、片名でさへ野暮な者に聞えるに、おれが名を覺之進さまと、眞の名を云はれちやア、通な顏がのろく見えるから、一分位なら、俳名の仲町と云つてくりやれ。

平馬　コレ〳〵、それが野暮の本性を顯はすと云ふものだ。いつもと違つて、今日の出合ひは、幡隨長兵衛ぢやアないか。世間で知つた幡隨長兵衛へ、男づくで達引でも、女郎買ひも拔け目のない、その長兵衛に出逢ふ日に、人も知らない仲町と云ふ、俳名でもあるまいぞよ。

江内　そりやア、ちつとも大事ない。相手が幡隨長兵衛でも、此方の體も寺西閑心、將棊に負ければ碁に勝ち、大酒を呑ませて〳〵、足腰の立たぬ程に、醉はしてやるべいと、閑心どのゝ思ひ附き、それを野暮がれば、鎌倉組が云ひ合せて、あの長兵衛をおッ片づける分の事よ。

はな　モシ〳〵、江内さんも又そんな、怖い事云はしやんすわいな。それにつけても今日の趣向、どう云ふ事で閑心さんが、長兵衛さんにお近附きにならしやんすのでござんすぞいな。

平馬　今日寺西閑心どのと、幡隨長兵衛の出合ひは、根岸屋である筈だが、吉原が近さに、この眞崎の川口屋になつたが、出合ひの譯は、たゞ斯うサ。閑心どのゝ首たけ惚れてござる、三浦屋の花紫、揚詰めとは云へば持てるやうだが、百日ばかりの揚詰めに、まだ肝心のきまつた事が無いに依つて、合點ゆかないと太鼓持ちや、茶屋の息子に内密で聞いて見たところが、あの花紫は幡隨長兵衛が色事だとの事。そこで今日長兵衛に出合つて、その花紫を閑心どのが貰ふのサ。

はな　そりやよいやうな事でござんすが、花紫さんも長兵衛さんも、世間で知つた色事。氣の毒なものでござんすぞえ。ほんに氣の毒と云へば、淸助や、長兵衛さんが

齋宮さんを連れ申してござんすとの事。齋宮さんの所へ、ちよつと知らさうと思うたが、人も遣らいで、氣の毒な事ではないかいなう。

清助　成る程、齋宮さんのござるに依つて、齋宮さんの所へ知らさんも惡うござりますから、この鯉を仕掛けて置いて、ちよつと藤兵衛さんの處へ、行つて參りませう。

はな　そんなら大儀ながら、わが身、行つておぢやいなう。

清助　ハイ〳〵。ドレ、行つて參りませう。

ト肩へ手拭を掛け、行かうとして向うを見て

モシ〳〵、齋宮さんの所へ參らうと存じましたが、アレ、アレ、埼玉屋の方から、閑心さまや花魁に新造衆が、大勢連れでお出でなされますが、マア、お吸ひ物の支度でも致しませう。

はな　そんなら其方は、早う出し物にかゝつたがよいわいなう。

清助　畏まりました。

はな　モシ〳〵、あれ御覽じまし。大勢連れで閑心さまが、これへお出でなされますわいな。

覺之　ドレ〳〵。ほんにとつと押かゝつて來るさうな。

江内　サア〳〵、座敷をぶん抜いて置かう。大方洒落の幕だらう。

覺之　あれを肴に、一杯底を入れよう。

はな　サア〳〵、お一つお上がりなされませ。

ト誂らへの賑やかな鳴り物になり、清助は鯉を持つて下座へ入ると、花道より寺西閑心、廣袖、羽織衣裳の形にて、紹の覆面頭巾を冠り、路次下駄を穿き、華、筑波、紫の振り袖衣裳にて、對の禿の形にて草履を穿き、閑心が左右の袂に取りつきて出て來る。後より花紫、女郎の拵らへ、抱へ帶の姿、他所行きの體にて、扇子を持つて出て來る。これに續いて小紫、振り袖新造の形にて草履を穿き、花紫が煙管、煙草入れを持ち出る。後より三浦屋の遣り手お傳、義太夫語り豊竹京太夫、扇子を持ち出る。後より唐犬十右衛門、紺やつし裏襟の形にて、一本差し、日和下駄を穿き、煙草をのみながら附き出て、いづれも花道の中よき所にとまる。

京太　モシ〳〵、花魁え、吉原と違うて、斯う見た所が又、どうも云へぬぢやござりませぬか。隅田川の土手から三圍までの景色、けうといものでござりまする。

花紫　ほんにさうぢやわいな。取分け今が櫻の盛り、仲の

町の花よりも、また氣が變つてよいわいなア。

十右　また氣が變るとは有り難い。揚詰めの客人を振りつけて、どこやらに色事のある花紫どの、どうぞ氣が變つて、おいらが座敷も、ちと面白うしてもらひたい。

ト花紫、知らぬ顏して居る。

董　アレ、又をかしい事を云はしやんすわいなア。どうして花魁に、色事があるものかいなア。

筑波　その色事に氣を附けるが禿の役。其やうな事はござんせぬわいなア。

でん　さうぢやわいなア。殊にわしらが內は、女郎さん方の躾も嚴しうて、ちよつとも出し申しませぬわいなア。

オホヽヽヽ。

トこなしあるべし。

花紫　モシ〳〵、あの鳥はなんぢやいなア。

閑心　あの鳥は都鳥。我が思ふ人はありやなしやと詠んだる鳥。鳥すらも人を思ふが戀。如何なれば花紫、つれない心に猶惚れて、夜も日も分かず通ふ閑心。今日の趣向は眞崎の曲水、花を眺めて酒にしよう。ドレ、手を引いて參らうか。

ト鳴り物になり、本舞臺へ來て床几に列ぶ。

京太　サア〳〵、旦那のお出でだぞ。お花さん、出やんせいなう。

はな　アイ〳〵。閑心さん、花魁、皆さん、ようお出でなされましたな。

小紫　モシ〳〵、覺之進さま、江內さま、平馬さまも來てでござんすわいな。

覺之　相變らずツンとしたものだ。閑心どの、最前から三人とも、お待ち申して居りました。

江內　いよ〳〵幡隨長兵衞、この處へ參る筈でござる。定めておしつけ參るでござらう。

平馬　コレ、花紫さん、閑心どの、長兵衞と初めての一座、なんと面白い趣向はごんせぬか。

花紫　そりや、面白い事でござりませうわいな。例へ心にどう思うても、明けて云はぬが廓の花。わたしが心は主一人と、心に定めて居るわいなア。

閑心　そりや、花紫、そもじが心は、長兵衞と定めて居るのか。

花紫　イヽエ。

閑心　但し、この閑心と心は定めて居るか。

花紫　アイ。

閑心　アノ、閑心に。
　ト思ひ入れ。
花紫　定めて居るわいなア。
閑心　知るまいと思ふか。
花紫　何をいなア。
閑心　長兵衛が事を。
花紫　誰れがえ。
閑心　寺西閑心が。
花紫　そりや又、何を知つてぢやえ。
閑心　三浦屋の花紫、幡随長兵衛に深いと云ふ事は、この五丁町に隠れはない。それを知りつゝ惚れたが因果、思ひ切つて抱かれて寝やれ。
花紫　嫌ぢやわいな。
閑心　ナニ、嫌だ。
　ト思ひ入れ。
花紫　好かぬわいな。
十右　なんだ、閑心さまを好かないと云ふか。この女郎めは、イケ図太い事を吐かしたな。そんなたわ言を誰が云はせる。定めて花川戸の長兵衛であらう。コレヤイ、怖くないぞ。閑心どのゝ突ッかへ棒にやア、唐犬の十右衛門と云ふ大黒柱が控へて居る、商賣は金貸し、慰みが男達。腕づくでも金づくでも、後へ寄るのぢやアない。なぜ嫌だ。挨拶に依つて花紫、一番聞かにやアならないぞ。
花紫　その譯を云はうわいな。
十右　聞くべいか。
花紫　甲斐性の無いわたしらが口から、主を好かぬの嫌ぢやのと、云うたは慮外であらうけれど、好かぬと云うてあの頭巾、百日餘りの居續けに、床の内でもあのやうにして居やしやんす閑心さん、様子があらうと思ふゆゑ、譯を聞いても打明けて、云はしやんせぬには、まだわたしに、心を措いて居やしやんすと思うたれば、氣が面白うないわいなア。
十右　なんだ、閑心どのゝ、あの頭巾が氣になるかえ。人目を忍ぶは廓の習ひ、頭巾の事はさて措いて、編笠を冠つても二階に上がるが女郎買ひ。何がな詞の節にして、閑心どのを嫌ふのか。
花紫　そりや云はしやんすな、十右衛門さん。あの寺西閑心さまは、今こそ閑心さんと云はしやんすが、まだ外に、以前のお名があらうがの。
十右　サア、そりやア。

花紫　その名をわたしや聞きたいわいなア。

十右　そんな事は、十右衛門さまは御存じないワ。

花紫　コレイナア、閑心さんが爰へござんして、矢ッ張り頭巾を着てかいなア。マア、暑苦しい程に、取つたがよいわいなう。

小紫　アイ〳〵。モシ、閑心さん、花魁のあのやうに云はしやんす程に、頭巾を取つたがようござんすわいなア。

ト閑心が着て居る頭巾を取らうとする。閑心、思ひ入れして小紫を突き退け

閑心　指でも附けると、許さぬぞ。

小紫　アレ〳〵、あの顏が寸分違はぬ赤堀源吾。

ト詰め寄する。小紫を閑心引寄せ

閑心　赤堀源吾とはそりや何者。身が事は寺西閑心と申して、當時鎌倉に於て、頼家公へ、劍術の御指南を申し上ぐるやうにと、より〳〵時政どのよりも內定。歸國の後は、御指南も申し上ぐべき身の上。當地へ罷り越したるは、假初めならぬ天下の囚人、數多の人を手にかけたる、菊地兵庫之助が家來、白井權八が在所詮議の爲なれば、斯やうに遊里を徘徊なす。やゝともすれば身が頭巾へ、手をかくる慮外者。その分には捨て置かれぬ。遊びは遊び、役目は役目、暫らくのうちなりと、過怠を申しつけてくれう。

ト閑心、懷中より一通を取出して、小紫が手へ紙手錠をかける。花紫、氣の毒なる思ひ入れ。

小紫　エヽ、わたしや斯うして居るのかえ。

閑心　それを解くと、爲にならぬぞ。

十右　小紫、爰へ來い。

ト小紫を引寄せ

ても、よい氣味。ソレ、見やアがれ、この十右衛門が云ふ事を聞かないばかりで、罰が當つて紙手錠。こんな態で爰にやア置かれぬ。コレ、お傳、この新造めを下げてくりやれ。

でん　アイ〳〵。閑心さまや十右衛門さんの、お氣に入らぬ新造なら、どうなりと致しませう。モシ〳〵、花魁え。ちよつと主を仲の町まで、連れて參りますぞえ。太夫さん、其うち座敷を頼んだぞえ。

京太　それは氣の毒な事ぢやアないか。

でん　サア〳〵、小紫さん、わたしと一緒にござんせいなア。

小紫　ぢやと云うて、此やうな形で、どうして行かれるも

のぢやぞいなア。

でん　それでも十右衞門さんの、仰しやる事ぢやに依つておやわいなア。サア〳〵、仲の町の松本屋までござんせいなア。

小紫　それでもひよつと其うちに、長兵衞さんがござんしては。

でん　ハテ、大事ござんせぬ。サア〳〵、早うござんせいなア。

ト嫌がる小紫を無理に引き立て向うへ行く。神樂になり、花道より長兵衞、やつし着流し、鮫鞘の一腰差し、日和下駄を穿き、肩へ羽織を掛け出て來る。花道にて小紫と顏見合せ

でん　ヤア、長兵衞さんか。

長兵　小紫、お傳を連れて、どこへ行くぢや。

小紫　長兵衞さん、これを見て下さんせ。

ト見せる。

長兵　こりやなんだ。

小紫　わたしや此やうに、紙で手を縛られたわいなア。

長兵　誰れに。

小紫　あの閑心さんに。

長兵　眞崎へ來て居るか。

でん　アイ、花紫さんと一緒に。

長兵　野暮な奴サ。

小紫　わたしや仲の町へ行くわいなア。

長兵　おれが來たから、行かずともよい。

小紫　そんなら、行かずともようござんすかえ。

長兵　よしサ。

でん　モシ〳〵、長兵衞さん、主をば仲の町へ遣り申されば、惡うござんすわいなア。

長兵　この長兵衞が揚げて置かう。

でん　そんならお前さんが。

長兵　なんでもよしサ。

小紫　此やうな嬉しい事は、ござんせぬわいなア。

長兵　マア、此方へ來やれ。

ト また宮神樂になり、長兵衞、小紫、お傳、舞臺へ來る。

はな　長兵衞さんかいな。ようお出でなさんしたな。

長兵　今日この間からのお約束で、閑心さまに、お近附きになりに來たのよ。

はな　ようお出でなさんした。モシ〳〵、閑心さん、長兵

衛さんがお出でなさんしたわいなア。
閑心　ナニ、長兵衛が來た。
はな　アイ、お出でなさんしたわいな。
閑心　幸ひなこの床几。長兵衛をこれへ〳〵。
はな　アイ〳〵。長兵衛さん、サア〳〵、あれへお出でなさんせいな。
長兵　お花ぼう、なんぼ遊びのお座敷でも、お武家方の前へ袴も着ずに、こんな形で出るもをかしいものだ。大事あるまいか。
閑心　さて間違つて、知る人にもなり申さぬ。身共が事は寺西閑心と云ふ者。當時主用にて鎌倉より、この江戸へ先つ頃より逗留いたして居れば、折り〳〵は青樓へも參れば、噂に聞いた幡隨長兵衛。近附きにならぬも殘念。重ねて一座も致すまいものでもないゆゑ、知る人にならうと存じて、申し入れたるところ、早速承知とある事。それゆゑに先刻より、もう、見えるか〳〵と、待つて居つたに、ようこそ〳〵。
ト長兵衛、思ひ入れして
長兵　先づ以て今日は、有り難うございます。私し事は、定めてお聞なされた事もございませう、世間の交際も存じませず、生れた儘のぶつきら棒。碌々に口もききます事もなりませぬ、不調法者でございます。
閑心　イヤ〳〵、聞き及んだる幡隨長兵衛。
長兵　承はり及びし閑心どの。
閑心　この上は心安う
長兵　お附合ひ申しまするでございませう。
覺之　ドレ〳〵、我れらも近附きになりませう。お身樣がアノ女郎子供の嬉しがる、幡隨長兵衛か。成る程、折節仲の町で見た顏だ。身共が事は、多々羅覺之進といふ者だ。見知つておくりやれ。
江内　身共が事は、石崎江内と申す者。長者ケ丸に居る程に、兼ねて知つても居やらうが、尋ねてお來やれ。
平馬　おてまへは幡隨長兵衛か。身共が事は西岡平馬と申す者。少しばかり取りかける程に、折もあらば聞かせたいわえ。
長兵　お揃ひなされまして、有り難い御挨拶でございまする。
十右　さて、これからが唐犬十右衛門。幡隨長兵衛、近附きになるべい。
ト長兵衛が腰を掛けて居る床几へ、尻を捲つて腰を掛

けろ。長兵衛ちよつと見て、煙草をのんで居る。
お身様が長兵衛か。成る程い丶男だ。氣は利かないか知
らないが、斯う見たところが、如才がない男と見える。
唐犬十右衛門、見知つてくりやれ。

長兵　こなさんが十右衛門どのか。

十右　唐犬十右衛門よ。

長兵　怖い名だの。

十右　ちつとさうもござるまい。

長兵　時に唐犬には、何がお樂しみだえ。

十右　この十右衛門がお樂しみは、錢金を湯水のやうに遣ふ事と、女郎に惚れられる事が樂しみサ。

長兵　ひどいものだね。

十右　して、長兵衛、おぬしやア、何が樂しみだ。

長兵　わしやアさして、樂しみと云ふ事はごんせぬが、若芝やまだ陽炎の二三寸頃に、杉田の濵でも見たり、鮎でも食ひに玉川へ行かば、四人部屋にでも泊り、今年は月見に行德の驛濱、今度はひねつて伊香保の湯治、下戸交際にはかまもかけ、吞む友達には夜かつらでも見せにやつたり、折り〳〵は助次が處で朝飯も食へば、丹次が處も新物で呼びに來るし、深い奴だが、吉原でも新造買ひサ。

十右　ハ、、、、新造買ひとは淋しいやつサ。

長兵　そこが看板にも書いてある、據ろなく新造一座サ。時に閑心さま、早速ながらこの長兵衛が、あなたへ、お願ひがござります。なんとお聞きなされて下されますまいか。

閑心　此方からも、頼みたい事もあれば、なんなりとも。

長兵　外の事でもござりませぬが、この小紫の事でござりまするが、どう云ふお腹立ちかは存じませぬが、この紙手錠、下地から新造は手の無いものに、こりや私しに、おくれなされませ。

閑心　そりや閑心もその小紫に、封に懸けた紙手錠。幡隨長兵衛に解かせる心サ。

長兵　この紙手錠を私しに。

閑心　花を持たせて解かせる心サ。

長兵　そりや有り難うござります。左樣ならば解いて遣はしませう。小紫、爰へ來やれ。

小紫　アイ〳〵。

ト云ふを引寄せ、紙手錠を取つて見て、長兵衛、合點のゆかぬ思ひ入れあつて、開き見て

長兵　こりやコレ、白井權八が人相書。
小紫　エ、。
　ト驚ろく。
関心　數多の人を手にかけたる天下の囚人、搦め捕つて出すに於ては、例へ重惡の者にもせよ、その罪を免して、そくたくの下されんとの仰せ渡され。長兵衛、其方も心がけて、その權八が在所を求め、詮議し出すやうにしやれ。
長兵　思ひも依らぬ權八とやらが御詮議。話しに聞いた事もござりませぬ。
十右　そんなら話して聞かすべい。その權八と云ふ奴は、大それた奴。去年の冬、相州箱根境木にて、多くの人を殺した上に、上州の絹賣り彌市と云ふ者を手にかけ、千壽院の刀を取つて、箱根の宿を立退いたとの話しもあるが、なんと、膽の束ねの、野太い若衆も、あるものだやアないかの。
小紫　其やうな詳しい事が。
　ト思ひ入れ。
十右　何がどうした。
　ト小紫へかゝらうとする。長兵衛留めて

長兵　コレ／＼、十右どの、大人氣ない、どうしたものだ。
十右　長兵衛、いま新造買ひと云つたは、そんなら、この小紫が事か。
長兵　恥かしい事だが、この長兵衛が色事サ。
十右　色ぢやアあんまい。なぜと云つて見ろ。慾であんまいか。あの花紫が新造の此奴を、表向きの相方にして、そんぞそれと樂しむのか。なぜ客なら客のやうにして、金を出して女郎を買はない。シタガ、お身樣は誰れでも女郎が惚れる筈だ。マア、見掛けより氣が強い。強ければこそ、長兵衛が内には、居候ふがあるとの事。その居候ふも何者か知らないが、尻尾のある者を、引ッ込んで置くやうな、氣の強い所に、大方女郎も惚れるであらう。
長兵　人を引ッかけて世話をするのが、わしが好きサ。
十右　それにやア、大方かすりがあんべい。
長兵　錢金づくで置くやうな男は、花川戸にやア無いでごんす。
十右　金に轉ばぬ者が、なぜぢゞむさい色事をする。新造彈初め盆正月、二度の月見を一度でも、長兵衛がすると云へばきついが、新造買ひで、中三と色事ぢやア、面白からうが下卑て惡い。金が無いか、御定づくか。長兵

衞、お主も氣の知れた男だなア。小紫、わりや爰には置き憎い。どこへなりとも早く行け。

ト花紫、思ひ入れして、十右衞門に向ひ

花紫　十右衞門さん、先刻から默つて聞いて居れば、人の心に障るやうに、味に物を云はしやんすが、お前も唐犬の十右衞門さん、なぜ男らしうしつかりと、名を指して云はしやんせん。そりや慮外ながら長兵衞さんの事は、間夫でも色でもござんせぬ。この花紫が客人も客人、アイ、立派な客人でござんすわいなア。

十右　そんなら、長兵衞ばかりが花紫の客で、閑心どのは、花紫の客ぢやアないか。

花紫　アイ、閑心さんは、客人ではないわいな。

十右　何がどうした。

花紫　色ぢやわいな。

十右　閑心どのは色事か。

花紫　アイ、主の心さへ知れゝば、わたしや世話にも、なる氣ぢやわいなア。

十右　それぢやア、長兵衞に立つまいがな。

花紫　立つも立たぬも、わたしが心にあるわいなア。

閑心　幡隨長兵衞、この寺西閑心が、近附きになつた印に無心がある。なんと聞いちやアくれまいか。

長兵　お歷々の閑心さまの御無心、身に叶ひました事ならば。

閑心　聞いてくれうか。

長兵　マア、仰しやつて御覽じませ。

閑心　貰つたぞ。

長兵　エ、。

閑心　花紫は貰つたぞ。

長兵　花紫が事は

閑心　ならないか。

長兵　お氣の毒ながら。

閑心　イヤサ、花紫が事は。

長兵　ならぬ事サ。

閑心　しかとくれぬか。

ト刀を引寄せる。長兵衞、煙草を吸ひつける。

十右　落ちつくなえ。是非くれまいと云へば、この唐犬十右衞門が腕づくで見せべい。長兵衞、どうでも、わりやアくれないか。

ト立ちかゝりて、長兵衞が胸づくしを持つて、十右衞門引立てる。長兵衞、煙管をはたいて、十右衞門が顏



初演の



繪番附

　を見て
長兵　すばけた野郎ぢやアないか。見つともない。この手
　を放しやアがれ。
　ト煙草にて十右衛門が手を叩き落す。直ぐに十右衛門
　立ちかゝるを、長兵衛見事に投げる。覺之進、江内、
　平馬、反りを打つてかゝる。十右衛門起き上がり、脇
　差へ手をかけて
十右　もう免されぬ。
　ト抜かうとする。閑心留めて
閑心　コリヤ〳〵、十右衛門、急く處ぢやない。逸まるな。
　この閑心が長兵衛には、差向ひで云ふ事がある程に、花
　紫始め、みんなを連れて奥へ行きやれ。
十右　でも、此まゝぢやア。
　ト思ひ入れする。
閑心　大事ない。この閑心に任せて置け。花紫も十右衛
　門も座敷へ行つて、酒でも呑んで居るがいゝ。
花紫　どうやら縺れたこの場の様子。長兵衛さん、どうし
　ような。
長兵　客人の云はるゝ通り、大事ない程に、座敷へ行きや
　れ。

小紫　わたしは爰に居やうかいな。
長兵　一緒に行きやれ。
花紫　それでも、どうやら。
長兵　ハテサテ、行きやれ。
覺江　長兵衛、われを。
　ト反りを打つ。十右衛門留めて
十右　コレサ、この分ぢやア、この唐犬も済まぬ程に、マ
　ア、わしと一緒に、ござりませ。
　ト唄になり、十右衛門始め皆々下座へ入る。直ぐに合
　ひ方になり、閑心、長兵衛が腰掛けて居る腰掛へ腰を
　掛けて
閑心　なんと幡隨長兵衛、この寺西閑心に、達て花紫を
　くれまいか。
長兵　慮外ながら、花川戸の長兵衛は、女にやア弱うごん
　すが、男にやア強い男サ。始めての御無心だが、花紫
　に於ては
閑心　ならぬのか。
長兵　其許様が、練馬の大盡か、材木屋の息子と云ふやう
　な人ならば、進ぜまいものでもごんせぬが、寺西閑心さ
　まと云つちやア、人も知つた大盡株、鎌倉組と云ふ大勢

の悴子があるに依つて、情ない事に、刀に恐れて、あの花紫を進ぜますやうで、友達の前へ、おつとどうも長兵衛の男が、立たぬではござりませぬか。

閑心　イカサマ、さう云ふ事もあらう。さりながら、戀なればこそ斯程までに、詞を盡して所望する。花紫をくれまいと云ふを、達てとも云はれまい。そんならよいワ、貰ふまい。その代りに今の繪姿を、返してくれろ。

長兵　エ。

閑心　イヤサ、白井權八と云ふ天下の凶人、お尋ね者の今の繪姿、人相書を受取らう。

長兵　イヤ、外なら格別、爰は亘崎の川口屋、太鼓末社を引連れて、遊樂にござつた駄々羅大盡の閑心さまが、尋ね出せば褒美の金を貰ふと云ひ、權八が人相を、返せ戻せと仰しやるは、なんと御人體ぢやござりませぬか。こりやわしに下さりませ。下さるゝ紙も元より吉野紙、花に緣ある便りと思へば、紙花だと思つて、ざつとはずんで下さりませ。

閑心　望みならくれもしやうが、その權八を尋ね出すか。

長兵　サ、そりやア。

閑心　よもや尋ねちやア出されまい。

長兵　尋ね出しませう。

閑心　權八をか。

長兵　イヽエ。

閑心　そして誰れを。

長兵　江州佐々木の家來、岩井右內とやらを殺して立退いた、赤堀源吾を、この長兵衛は尋ねる心サ。

閑心　その源吾が詮議はするに及ばぬ、捨てゝ置け。

長兵　なぜな。

閑心　この閑心は知らないが、大罪人の權八さへ尋ね出せば、例へ善惡の者にもせよ、その罪を赦さんとの仰せ渡され。陪臣者の右內づれを、赤堀源吾とやらが殺して立退いても、權八さへ詮議仕出せば、敵と狙ふ奴等があつても、そりやア滅多に齒は立たぬ。

長兵　ハイ、町人の長兵衛でさへ、意氣地に依つて殺さるる事もいとはぬに、歷とした武士でありながら、人の訴人をして、我が身の罪を遁がれやうとは、イカサマ、赤堀源吾と云ふ奴は、さりとは卑怯な奴ではござりませぬか。

閑心　イヽヤ、源吾は卑怯でない。今にも右內が忰めらが、名乘つて出りやア勝負をする。卑怯と云ふは白井權

八、武士の作でありながら、筋目なき町人に匿まはれ、日陰者になつてけつかるは、悉皆人間の鼬鼠、面を出しやア命がない。その匿まつて置く奴も、どこぞの果ぢやアらぬが身の上、まさかの時にはとこ吠えて、定めて哀れな音を出すであらうと思へば、男達の長兵衞、この閑心は不便に思ふ。

長兵　そりやア氣遣ひさつしやりますな。お尋ね者の權八を、匿まつて置くものなれば、骨を拉がれうが釜煎りにならうが、滅多に云ふやうな男達ではごんすまい。

閑心　そんなら、われが匿まつたか。

長兵　そりやア。

閑心　イヤサ、お尋ね者の權八を、長兵衞、われが匿まつて置くか。

長兵　なんの、由縁も無いその權八とやらを、わしが處に置くものでごんす。そんな事は知りやんせぬ。

閑心　ハア、、、誠の男達なら、匿まつて置くと云つて見ろ。命が惜しさに云はれまい。

長兵　命が惜しさに名を變へて、頭巾で面を隱すやつサ。

閑心　そりやア誰れだ。

長兵　誰れでもサ。

閑心　刀が怖いか。

長兵　うろたへ武士のがら〱丸、その竹光で切れるものか。

閑心　武士を嘲る慮外者。場所が違つた。下にけつかれ。

ト長兵衞を床几より蹴落す。直ぐに閑心、刀を拔かうとして、思案するこなしあつて、行かうとする。長兵衞、刀の鐺を引きとめ

長兵　待ちやれ。人の慮外を咎めた、お身樣の頭巾が慮外ぢやないか。この長兵衞を相手にするなら、マア、その頭巾を、閑心、脫ぎやれ。

閑心　町人風情に頭巾は脫がない。

長兵　脫がない頭巾を、脫がせにやア置かない。

閑心　面倒な。爰離せ。

ト長兵衞が手を鐺にて突き退けて、正面の二重舞臺へ上がる。長兵衞、鮫鞘をきめて、續いて二重舞臺へ上がり、閑心が襟へ手をかけて引返す。見事なる立廻り少しあつて、ちやんとキッカケになり、簾下りる。この時、深川の騷ぎを彈く。と橋がゝりの際まで、簾を掛けたる屋根船を引出す。この船に清水屋の船頭次郎吉、廣袖やつし、丸絎を締めて、船頭の形にて晒しの

手拭を頬冠りして、翳ざしに竿をさして船を乗り出す。見附け好き所にて川岸へ着ける。

次郎　齋宮さん、なんぞお頼み申しやす。

ト これをキッカケに、淨瑠璃の前彈きになり、次郎吉は枕箱より火繩を出し、煙草をのんで居ると、よいキッカケに屋根船の簾を巻き上げる。この屋根船の内に齋宮太夫、伊達な形にて肩へ手拭を掛け、三味線箱の上へ本を置き、煙管を持つて居ると、藝者おすみ、やつし振り袖の形にて、三味線を彈く。これより淨瑠璃になる。

〽通ひ初めしも昨日今日、忘れぬ花の里燕、妻戀ふ雉やほろ／＼の、姿を春の眺めぞと、夕紫の筑波山。

ト 此句切れると、戀慕の合ひ方になり、花道より權八、虚無僧の形にて、尺八を吹きながら出て來る。後より捕り手三人、十手を持ち、附いて出る。權八これに構はず、花道よき所にとまる。捕り手三人、身を潛めて窺ひ居る。

〽葉山茂山日闕笠、深く餘所目を忍び音は、一節の竹を吹きすさむ、派手な修行の戀慕流し。

ト 合ひ方になり、この淨瑠璃のうち、三人、權八にちよつとかゝる立廻り。

〽主床しとて覗かるゝ、水にも影のかをよ花、實に鴛鴦は水鏡を愛すとかや、我れは無漏路の高聖、月を杜に宿蕊の、身となり澤の川淀や、さら／＼さつと風に流るゝ柳影、暫しは爰に休らひぬ。

ト この淨瑠璃のうち、捕り手三人は花道へ忍びやかに入る。屋根船の簾を下ろす。權八、尺八を吹いて居ると、跣足にて小紫、走り出て來て、權八を見て

小紫　ヤア、お前は權八さんかいなア。よう來て下さんしたなア。奥に長兵衞さんが來てござんすわいなア。早う此方へござんせいなア。

ト 權八が手を取り、連れて行かうとする。權八、思ひ入れあつて

權八　鐵嬬城を破るとは聖賢の誡め。女に絆され、この身を忘るゝ權八に非ず。とても無い縁と諦らめ、其方も親右衞門が敵、赤堀源吾を討つて、孝養に手向けるがよい。さらば。

ト 振り切り行く。小紫留めて

小紫　マア／＼、待つて下さんせ。側へどのやうな事があるとても、わたしやお前に、別るゝ事は嫌でござんすわ

いなア。云はねばならぬ事がある程に、マア〱、待つて下さんせ。と云うたとて、わたしが云ふ事を、お前は聞いても下さんすまい。ア、コレ、どうぞわたしが心に思ふ事を、どうして云うたがよからう。オ、それ〱、幸ひあの船に齋宮さんが。

ト屋根船の傍へ行きて

モ、齋宮さんえ、日頃からお話し申したわたしが心、よいやうに、お頼み申しやんすわいなア。

トこれをキッカケに、船にて淨瑠璃になる。

〽袂を顏に小紫、ほんにしみ〲打ち明けて、云はねば濟まず云へば又、屋敷育ちのこの野暮に、まだ八重梅の香が殘り、すかんらしいと神がられ、秋が來よとは氣も附かず、色に絡まる蔦かつら、かべと見られて焦らされて、歎く煙管の消え次第、ひぞるに甲斐も情なや、お前の身にもこの身にも、苦になる事の數々が、積れば庭の雪見草、消えぬばかりぞ恨みなる。

ト此うちよろしく振りあるべし。

〽よしそれとても歎くまじ、前世の緣の宿業か、敵の爲にこの命、捨つるは何か惜しからん、さはさりながら身の曇り、暗き若葉に時鳥、名乘らで出でぬ恥かしさ。また顏隱す編笠の、目にや浮名を流すらん。

ト段切れ打ち上げる。下座、合ひ方になり、長兵衞、煙草盆を提げて出て來り

長兵　コレ、小紫、權八が事は、おれが呑み込んだと云ふのに、どうした事だ。あの十右衞門めが目にかゝつちやア惡い程に、おれが爰に權八と話して居るうち、てまへは先へ行つて居や。

小紫　そんなら權八さんの事を、よいやうに頼んだぞえ。

長兵　おしつけ連れて行く程に、小座敷を明けて待つて居やれ。

小紫　アイ〱。そんなら權八さん、どつちへも必らず行つて下さんすなえ。

ト小紫、奥へ入る。

長兵　權八か。

權八　長兵衞どの。

長兵　待つて居た。

權八　わしも其許に逢ひたうて。

長兵　來たと云ふのか。

權八　遠慮もないが、天蓋を取つても大事ござるまいか。

長兵　この長兵衞が居るうちは氣遣ひない。編笠取つて爰、

へ來やれ。

權八　然らば暫しのうち。

ト天蓋を取つて通る。合ひ方になる。

長兵　不思議の縁で、あの箱根の境木で、初めて逢うてから、この長兵衞が所へ來て、外ならず思ふゆゑ、内に置いても心遣ひだが、また離して外へ出しても、只氣にかかるお主が身の上。さぞ氣苦勞であらうなア。

權八　親族も及ばぬ其許のお世話。段々これまで權八を、匿まひ置いて下された、長兵衞どのゝ心ざし、忘れは置かぬ。併しながら、いつまでも、斯やうに致して御家内に、もし凶事ござつて、其許へ苦勞を掛けては、この權八も本意にござらぬ。依つて、身の罪障をも滅する爲、直ぐにこれより、廻國行脚いたしたき身共が願ひ。命ござらば又逢ひまして、御厚情にあづかりし、一禮も申すでござらう。

長兵　そんなら身に惡事ある、お身樣の身の上ゆゑ、廻國に出たいと云ふのか。

權八　この姿を幸ひ、諸國修行が致したい。

長兵　そりや聞えない權八。昨夜までも今朝までも、一つに居たこの長兵衞。始終お身樣を匿まひ兼ねる男だと、なんぞ見附けた事でもあるか。匿まつたせうがには、男づくなり命づく、お主が骨を拾ひ兼ねるおれでもねえが、權八、この長兵衞に飽きたのか。

權八　全く左樣な事ではござりませぬ。

ト俯つて居る。長兵衞、權八が手を取つて、ぐツと引寄せると、權八は長兵衞の膝へ靠れる。

長兵　さう云ふ事でないならば、なぜ兄分のこの長兵衞が、氣の惡くなるやうな事を云ふのだ。それにやア譯のあらう程に、云つて見や。

ト云ひながら、權八が手の平を撫で見て、フツと手の筋を見て

權八、お主の手の筋は、慥かにこりやア、天下筋ぢやアないか。

ト何心なく云ふ。權八ギヨツとして手を引く。

權八　長兵衞どのとした事が、どうしてこの權八が、この手の筋が、天下筋でござらう。

長兵　それでも眞直に通つて。

權八　ナニこれが其やうな筋でござらう。こりやこの權八が身を果す、きうせん筋かも知れませぬものを、思ひも附かぬ天下筋とは、長兵衞どの、筋ない事を云はつしや

るな。
長兵　その手の筋とやらは知らないが、話しに聞いたきうせん筋は、劍難に遭ふと云ふ筋だ。お身樣が劍難に遭つては、先づ差當つてこの長兵衞が難儀だから、そんなら權八、お身樣に、よい守を遣らう程に、これを大事に、どつちへも行かずに、內に信心して居やれ。
ト以前の繪姿を出して、權八へ遣る。
權八　長兵衞どのゝお志ざしではござれども、例へ劍難除けの守でも、なか／＼權八が身の上は、逃げられますまい。身の禍ひを守位で、除けらるゝやうな人の運なら、この權八が身の願ひ、成就は心元ないに依つて、この守とやらは。
長兵　さう云はずと、先づ見やれ。
ト權八、擴げて見て、恟りして
權八　こりや權八が人相書。
長兵　なんと、劍難除けの守ではあるまいか。
ト權八、無念の思ひ入れ、淚をこぼす思ひ入れあつて
權八　早この所まで人型渡り、草を分けても在所を求めんと、詮議嚴しき我が身の上。如何なれば斯くまでに、天下にかゝる囚人とはなりたるぞ。我れも淸和の臺を出て、源家の血筋を請け繼ぎし、賴國の
ト思ひ入れあり、長兵衞も思ひ入れあつて
より所なき我が身の上。長兵衞どの、どうござつても、立退きませうと存ずる。
長兵　そんなら留めても、留まらぬ心か。
權八　殘念ながら。
ト權八、天蓋を取りて花道の方へ行かうとする。長兵衞、有り合せたる杯を取りて
長兵　權八、捕つた。
ト杯を舞臺へ打ちつける。二つになる。權八、立ちとまり、天蓋を取つてキッと思ひ入れ。
その身の上を知りながら、塒を出づるむら雀、捕り手のはごにかゝらぬやうに、長兵衞が內に巣をかけて、とまつて居るがよささうなものサ。
權八　黃雀人を恐れず、身に翼ある白井權八。我れ九萬里に羽を伸さんと、思ひ詰めたる修行の門出。立越えんと思ひしが。
長兵　ソレ。
ト杯を投げて
二つに割れしその杯。今別れちやア物がない。

権八　心と心が合ふならば
長兵　水も洩らさぬ
権八　固めの杯。
長兵　誓ひの神文。
権八　然らば奥へ。
長兵　通らつしやい。
ト唄になり、権八、あたりへ気を附け、長兵衛に附いて下座へ入る。直ぐに宮神楽になり、十右衛門、平馬出て来て、あたりを見廻し
平馬　十右衛門。
十右　平馬さま。
平馬　幡随長兵衛と閑心どのと、花紫が貰ひ論、こりやア、どうで血を見ざア納まるまい。どうしたらよからうな。
十右　それにやア、この唐犬十右衛門が、好い思ひつきがごんすわえ。長兵衛も閑心どのも、モウ、おぢやるまいと云ふから、むづかしいに依つて、閑心どのもマア、一旦花紫と切れた分にして、長兵衛が方へも、切れさせるがよいぢやアごんせぬか。
平馬　サア、その思ひつきがよからうが、口でばかり閑心どのが、切れたと云つちやア、なか／＼あの長兵衛が、その手ぢやア行くまい。
十右　成る程、口ばかりで云つちやア、ほんに切れたとも思ふまいに依つて、なんぞ彼奴が一杯食ふやうな。
トあたりを見て手を打つて
コレ／＼、好い思ひつきが出来ました。コレこの烏賊の墨で切れ文を書いて、ソレ、花紫に遣りますならば、これぢやアあの長兵衛めも、ほんに切れたと思ひさうなものサ。
ト平馬、感心の思ひ入れにて、横手を打つて
平馬　出来た。
十右　此方の文は、烏賊の墨で書くに依つて、白紙になれば、長兵衛が切れ文は證文も同然。なんと、この智慧は文殊でごんせう。
平馬　妙計々々。
十右　こんな事にかゝつちやア、やるものぢやアごんせぬ。
平馬　そんなら、あの烏賊の墨で切れ文を書くか。
十右　硯箱を。
平馬　合点だ。
ト宮神楽になり、平馬、硯箱を持つて来る。十右衛門、

烏賊の墨を茶碗へ取つて入れる。平馬、硯箱を明けて、
その墨を入れて置く。

十右　斯うして置きやア、書く時にな。

平馬　出來た。

十右　ござい。

ト十右衛門、思ひ入れして、平馬と一緒に下座へ入る。
と長兵衛、ソロ〳〵と出て來て、硯の烏賊の墨を明け、
水を入れて、墨を濃く磨り、硯箱を元の處へ置いて、
茶碗の烏賊の墨を持つて入る。此うち矢張り宮神樂に
て、お花、奥より、廣蓋に肴鉢、銚子を載せてズッと
出て來て、屋根船の側へ行きて

はな　淸水屋さん〳〵。

ト船の中にて

次郎　オイ〳〵、誰れだ〳〵。齋宮さんの淨瑠璃を聽きながら、グッと一寐入りやるやつサ。淸水屋と呼ぶは誰れだ。

はな　わたしぢやわいな。

次郎　お花さんか。

はな　今日はようござんしたなア。マア、これを取つて下さんせ。

次郎　オイ〳〵。

ト屋根船の中より、次郎吉出て來て

はな　そして齋宮さんやおすみさんを、船から上げて下さんせ。

次郎　合點だ〳〵。モシ〳〵、齋宮さん、おすみさん、川口屋へお上がりなさいとサ。

すみ　アイ〳〵。サア〳〵、齋宮さん、お前も上がらしやんせいなア。

ト船より齋宮太夫、おすみ、舞臺へ出て來る。

はな　おすみさん、お前、早う齋宮さんを連れて、座敷へお出でいなア。

すみ　アイ〳〵。合點ぢやわいなア。

はな　サア〳〵、齋宮さんもござんせいなア。

ト齋宮太夫、お澄、次郎吉、下座へ入る。

次郎　いつ來て見ても、この眞崎は賑やかな事だ。先刻から一杯呑みたいと思つた所へ酒肴。ドレ〳〵、さらば一人で樂しむべいか。

ト茶碗で酒を呑んで居る。バタ〳〵にて十右衛門、奥
より出て來て次郎吉を見附け

十右　淸水屋の兄イ。

次郎　十右衛門さんでござりますか。
十右　コレ〱、お身様に頼みたい事があるが、なんと聞いちやアくれまいか。
次郎　頼みたい事とはえ。
十右　その頼みたい事は、斯うだ。
ト囁く。次郎吉、思ひ入れあつて
次郎　アノ、花紫さんの新造の
十右　小紫を
次郎　アノ舟で
十右　連れて逃げてくれろ。
次郎　そりやア頼まれたせうがにやア、乘せて行くまいものでもござりまぬが、肝心の玉は承知かえ。
十右　久しいものだが、おれが方ばかり出來て居て、まだあの小紫が
次郎　不承知かえ。
十右　だらうと思ふ。
次郎　それぢやア始まらない。
十右　何にもしろ、小紫がお主の舟へ乘つたら、委細構はずに乘り出してくれろ……ソレ、船賃正金一兩。
ト次郎吉へ遣ろ。

次郎　アノ、この金は。
十右　頼んだぞ。
次郎　久し振りで御對面、有り難い。
十右　お主も來て呑みやれ。
次郎　參りませう。
十右　サア、來やれ。
ト宮神樂になり、兩人入る。正面の襖を引明けると、この内に閑心、花紫、おすみ、覺之進、江内、平馬、お傳、京太夫、居並ぶ。お花、吸ひ物椀を並べて居る。菫、筑波、袖を帶へ挾み、酌をして居る。
花紫　京太夫さん、お蘭もちつと、淨瑠璃を語らしやんすがよい。
京太　ハイ〱、語りまするでござりませう。ちと旦那は花魁をお連れなされて、肥前へお出でなされぬか。文藏が鏡山の七ツ目、ひどいものでござります。
江内　コレ〱、文藏どのと申すは誰れが事だ。
京太　ハイ、文藏どのと申しまするは、住太夫どのゝ事でござりまする。
覺之　コレ〱、それを今爰で聞く事があるものか。紋太夫が此村や、村太夫が源右衛門と云ふを知らないとは、

先生、どうでえす。

京太　覺之進さまには、えらいものでござります。

覺之　煙草が長けい、酒がぶんずい、女郎がやんま、三味線が三四郎。やるものぢやない。身共が碁太平記の紋太夫場を聞かせたいわえ。

京太　承りたうござります。

江内　モシ〳〵、碁太平記の七ツ目は、何やらであつたな。

京太　あの七ツ目は、吉原の大福屋で、宮城野信夫が親の敵、志賀大七を尋ねまする所でござりまする。しかも、涙は落ちて白粉の。

トこの淨瑠璃を語る。

はな　太夫さん、有り難い。

ト褒める。

花紫　ほんに思へばその敵、親の敵を女郎になつても、討ちたいとは、ほんに可愛い心ぢやわいなア。それに引替へ、志賀大七とやらは、閑心さん、なんと憎いぢやアござんせぬかいなア。

閑心　さしてその臺七が、憎い事もない。

花紫　なぜだえ。

閑心　誰れしも武士の身の上にはある事。意趣に依つたら誰が親でも、打ち果すまいものでもない。

花紫　そんならお前も、覺えがござんすかえ。

閑心　サ、そりやア。

はな　モシ〳〵、お一つお上がりなされませ。

平馬　酒がしゆんで來た。さらば我れらがこの杯を、拾ひ山にして一つ注いだり。

ト杯を出す。

菫　アイ。

ト酌をする。

平馬　とんだ強い燗だ。

トぐつと呑み

おすみ坊へ揚羽の蝶と致さう。

すみ　江内さん、上げようかえ。

江内　先づ〳〵。

すみ　そんなら、わたしが一つ請けて、旦那へお上げ申さう。

ト杯を取上ぐる。菫注ぐ。おすみ、一つ呑んで閑心へさす。

閑心　ドレ〳〵。

すみ　お一つお上がりなされませ。

閑心　イヤ〳〵、身共は、幡随長兵衛に吞ませぬうちは、一杯も吞むまいと思つたが、今日の樣子が癇癪に觸つた。火鉢を爰へ持つて來い。沸燗にして一杯吞まう。
でん　ハイ〳〵。ドレ、火鉢を持つて參らうわいな。
　ト　お傳、奧へ入る。
江内　サア〳〵、これから、沸燗の天狗酒が始まるぞ。
平馬　沸燗でも冷燗でも、酒と聞きやア面白い。
覺之　冷燗と云へば、この幡随長兵衛は、なぜこの座敷へ見えぬのだ。
すみ　ほんに肝心の、長兵衛さんがござんせぬわいなア。わたしがちよつと、呼び申さうかいなア。
　ト　合ひ方になり、おすみ奧へ入ると、お傳、はんどう火鉢を持つて來る。
でん　サア〳〵、此やうに火をおこして、火鉢を持つて參りました。これではようお燗も出來ませう。
　ト　閑心が前へ火鉢を置くと、長兵衛出て來る。
はな　サア〳〵、長兵衛さん、先刻から閑心さんも皆さんも、お待ちなされてござんすわいな。
長兵　さうであらう。失禮の段は御免なされませ。
覺之　これへ〳〵。
江内　爰へお來やれ。
平馬　先生が今日の上客。ズッとこれへ。
　ト　入れ替つて、長兵衛を眞中に置く。
閑心　早速ながら長兵衛、持ち合せたこの杯、其方へ慮外ながら獻じませうか。
長兵　これは〳〵。慮外と仰せ下されましては、先刻の儀がお氣に觸りましたやうに存じられまして、何とも〳〵恐れ入りまする。
閑心　なんの〳〵。
　ト　云ひながら、火鉢へ燗を掛ける。
平馬　時に先生、貴公は酒はどうでござる。今日始めての參會ゆゑ、我れ〳〵も一つ過す氣で、昨夜から腹を拵へて待つて居つた。
長兵　有り難うござりまする。酒の儀は御免なされて下さりませい。
閑心　御免下されとは、吞むまいと思つてか。
平馬　そりやア長兵衛、男に似合ぬ卑怯と云ふものだ。幡随長兵衛なればこそ、我れ〳〵も取持つではないか。酒が怖いか、座敷が怖いか。さりとはけちな根性だな。
　ト　扇子にて長兵衛をくらはせる。長兵衛ムッとしたる

思ひ入れ。花紫、心遣ひあろべし。長兵衞、思ひ入れして

長兵　どうでござります。あなた方のお杯、戴くまいとは申すまいし、其やうにお腹をお立てなされまして。こりや斯う致しませう。後は御免なされませ。あの閑心さまのお杯を、一つ下されませう。

江内　よしやれ長兵衞。

長兵　あのお杯で一獻。

江内　措きやれ。面白くもないぞ。今日は鎌倉組の面々と、幡隨長兵衞の出會ひ。据風呂桶で一つ吞むべいと思つたか、閑心どのゝ杯ばかりで一つ吞んで、おいらが杯では吞まないのか。イヤサ、我れ〳〵が杯は汚れて居るか。穢ないか。人を見やがつて、忌々しいしやツ面だ。

ト持つたる扇にて長兵衞が額を打つ。長兵衞ムツとする。花紫、心遣ひの思ひ入れ。長兵衞また思ひ直し

長兵　モシ〳〵、お前はどうでござります。覺之進さまも御存じでござりやせう。私しが酒に醉ひまして、棒鱈になりますワ。ソレ、顔見世にも御覽じたでござりませう。先づ覺之進さまから戴きまして、ザッと一つ下さりませう。また下さりますまいとは申すものゝ、この座敷から向嶋、白鬚の方を見渡しましては、一つ食べねばなりませぬ。いつそ、これから大酒に致しませう。

覺之　コレ〳〵、その上手は措いてくれ。幡隨長兵衞も男だ。花紫が座敷で、扇子で面を叩かれて、その分にやア置かれまい。定めてはねがあんべいな。

長兵　どう致しまして、例へ如何やうになされましても、御酒宴の上の事。殊に私しを私しと思し召しての今日の御馳走。心持ちまして

覺之　腹は立たぬか。

長兵　どう致して。

覺之　なか〳〵お身は氣の好い男だ。この覺之進も、その心ざしが面白いに依つて、杯は獻すまいが、長兵衞、おれが足を揉んでくりやれ。

ト長兵衞が膝の上へ足を載せる。長兵衞ムツとして思ひ入れ。皆々顔見合せ、思ひ入れあるべし。

長兵　モシ〳〵、私しは按摩を取りまするが、上手でござります。ドレ〳〵、揉んで上げませう。これも味なもので、折節人を揉みませぬと、どうか致して揉みたい時がござります。今日は隙で、足を誰れぞ揉ませてくれ手はないかと存じて居りました處へ、覺之進さまのお御足を

揉みまして、此やうな有り難い事はござりませぬ。
覺之　また重ねてはならぬ程に、よく揉んで置け。大べら坊めが。
ト長兵衞を蹴倒す。皆々思ひ入れ。長兵衞ムッとして思ひ入れ。
長兵　蹴られまするも、なか〳〵よいものでござりまする。
閑心　イカサマ、花川戸の幡随長兵衞程あつて、男の中の男と立てられる程あつて、堪忍のならぬ所を、料簡する。身共も甚だ感心いたした。
長兵　なんの、これしきの儀を、お褒めにあづかりまして、面目次第もござりませぬ。
閑心　とても男の一分を捨て、料簡する心ならば、なんと花紫が事を料簡して、身共を立てゝくれまいか。
長兵　斯やうに、お心安う相成りまする上からは、花紫が事も思し召しに任せませう。如何やうにも致しませう。
閑心　身が料簡に任さうとは忝ない。そんなら相方の花紫幡随長兵衞と閑心と、三つ金輪で貰うたぞ。
長兵　サア、その儀は。
閑心　ならぬと云へば、ぶッ放すぞ。
ト刀を持つて立ちかゝる。十右衞門出て來て留めて
十右　こりやどうしたものでござります。マア〳〵、お下にお出でなされませ。最前からの樣子、殘らず承はりました。この男も幡随長兵衞なり、叩かれたり、蹴られたりされた上に、花紫まで貰はれたと云はれちやア、立ちさうもないもので。こりやこの中へ、この十右衞門が入りまして、閑心さまも長兵衞も、双方の立ちますやうに致しませう程に、この十右衞門にお任せなされい。
閑心　この閑心も立ち
長兵　この長兵衞も立つやうに
十右　十右衞門が料簡がごんす。
閑長　そりや、どうするのだ。
十右　切れるがようごんす。
閑長　そりやア、どうして。
十右　閑心さまも長兵衞も、切れてしまへば意趣遺恨ないと云ふもの。爰は互ひに男の意氣地。なんと長兵衞、花紫を切れてしまふ心はないか。
長兵　ナニサマ、十右衞門さまの御挨拶。例へ閑心さまには、花紫が所へござつても、こなさんの料簡が面白い。この長兵衞は男づくで切れる心。
花紫　モシ〳〵、長兵衞さん、そりやア誠の事かいなア。

義理詰めになつたればとて、わたしやお前に切れる心は。

長兵　コレ〳〵、切れまいと云うて、切れねばならぬが男づく。さつぱり切れる氣サ。

花紫　そんなら、アノ閑心さんも。

閑心　さつぱりと切れるのサ。

花紫　そりやアノ、ほんの事かいなア。

十右　ほんにも嘘にも、斯うばかり云つちやア證據が無い……なんと長兵衞・花紫が所へ、切れ文を書いて遣つちやアくれまいか。

長兵　そりや十右衞門どのゝ云はるゝまでもごんせぬ。どうで花紫が事、今日中に切れてもしまはうと思つて、これに書いて來たこの切れ文。

ト鼻紙袋より文を出して、十右衞門に渡す。十右衞門、仕濟ましたりと云ふ思ひ入れ。

十右　男だ長兵衞、この切れ文を見るからは、サア、閑心さまにも、ちよつと一筆、さつぱりと切れたと云ふ、御未練を殘さずお書きなさい。

閑心　然らば、長兵衞を立てゝ

十右　切れ文をお書きなさい。

閑心　成る程、ナニ平馬、硯箱を持て。

平馬　心得ました。

ト平馬、以前の硯箱を持つて來て、閑心が側へ置くと、閑心、紙を出してサラ〳〵と書き、十右衞門に渡す。

閑心　この閑心が、ソレ切れ文。

ト十右衞門、取つて

十右　双方一度に切れてしまへば　浪風も無く濟むに云ふもの。この切れ文を花紫が所へやるところを、この十右衞門が料簡で長兵衞が切れ文は閑心さまへ、また閑心さまの切れ文は長兵衞へ、斯う取替へて預けますべい。

ト閑心が切れ文を長兵衞へ渡し、長兵衞が切れ文を閑心に渡す。長兵衞これを取つて、疊んで懷中へ入れる。

長兵　十右衞門どのゝ譯の附けやう、また違つたものでごんす。

十右　ざつとした處が、先づこの位なものサ。

閑心　十右衞門が働らきにて、長兵衞がこの切れ文、この閑心が手にあれば、今日から花紫に於ては、長兵衞、云ひ分はあるまいがな。

長兵　ナニサ、申し分はござりませぬ。

閑心　よい〳〵。サア、花紫、この長兵衞が切れ文を見たか。

ト開いて花紫が前へ置く。

花紫　長兵衛さん、よう心強う、この切れ文を書かしやんしたなア。

長兵　男づくの達引なら、切れ文の事はさて措いて、首證文でも書く氣サ。

閑心　書かざアなるまい。相手を誰れだと思ふ。鎌倉組の筆頭、寺西閑心さまだワ。この切れ文を書くまいと云へば、ぶッ放してしまふ心。これからが天下晴れての女郎買ひ、三浦屋の花紫を身が相手にして見せう。コレヤイ長兵衛、お身は男が立たぬぞよ。この切れ文がありやア閑心が心任せ。花紫も花紫だ。此やうなしッこしもない長兵衛を、間夫だの色だのと思つて居たか。こんな野郎にやア、持ち合せた閑心がこの杯を、花紫が切れ杯だと思つて、僞はりならずと一杯喰へ。

ト火鉢に掛けてある沸燗徳利を、長兵衛に打ちつける。長兵衛ムッとして立つて、脇差の柄へ手を掛け抜かうとする。

花紫　コレ、長兵衛さん、大事の所でござんすぞ。

ト思ひ入れにて留めるこなし。これにて

長兵　一度ならず二度三度、いかいたわけの、

ト長兵衛、思ひ直して下に居る。花紫、長兵衛が着物に掛つた酒を拭く。此うち十右衛門、有り合せたる文に酒のかゝりしを見附け

十右　コレ／＼、證據になるべきこの切れ文に、酒がかゝつて臺無しになつた。こりやア飛んだ事だ／＼。ドレドて炙つて遣るべい。

ト火鉢を下の方へ持つて來て、この文を炙つて居る。此うち花紫が手を取つて、閑心、連れて行かうとする。

長兵　待たつしやい。

閑心　なぜ留める。

長兵　閑心どの、この花紫を、こなたはどこへ連れて行くのだ。

閑心　どこへ連れて行くものだ。三浦屋へ連れて行つて、帶紐解いて抱いて寐るワ。

長兵　そりやアならぬ。爰に花紫が主の、幡隨長兵衛が居ちやア、遣る事はならない。マア、下に居やれサ。

ト閑心を突き据ゑる。閑心、思ひ入れして

閑心　ヤイ、素町人め。この花紫が身の上に附いて、云ひ分は無いと云ふ、切れ文を書いて、身が前へ渡したで

はないか。まだその上に彼れこれ吐かせば、この場に於て手は見せぬぞ。

長兵　この長兵衛は、切れ文書いた覺えがない。

閑心　ナニ、切れ文書いた覺えはないと。

長兵　覺えはない。

閑心　唐犬十右衛門、その切れ文を讀んで聞かせろ。

十右　心得てござる。コレャイ、幡随長兵衛、この十右衛門が挨拶で、さつぱりと切れたと云ふ、この文はなんだ。

　ト十右衛門、文を炙るうちに白紙になる。十右衛門、持つて居て膽を潰し

オヤ〱、酒がかゝつたこの文を、この十右衛門が炙るうち、コレ〱、酒が落ちてしまつた。白紙になつたワ。こりやどうだ。

皆々　ヤア。

　ト膽を潰す思ひ入れ。長兵衛も思ひ入れあつて

長兵　ヤイ、のたまく者め、この幡随長兵衛が書いて遣つた切れ文は、うぬが仕込んだ烏賊の墨だワ。手盛を喰つた大べら坊め。

十右　そんならおれが思ひ附いた、烏賊の墨で書いた文であつたか。オヽ、これがほんの、いかさまにかゝつたのだ。

長兵　おきやアがれ。コレャイ、これを見ろ。これがほんの閑心が切れ文だ。斯う云ふ切れ文を書いてあつても、なんと閑心どの、花紫を抱いて寐るか。

閑心　その切れ文は。

　ト取りにかゝる。

長兵　儘にもしやせう。

　ト懐中に入れる。閑心、口惜しきこなしあつて

閑心　男だと吐かすが、長兵衛、わりやア泥坊騙りも同然だぞ。身を僞はつて花紫を手に入れる。溺使は國靈を盗むと列仙傳の項にある如く、殊に依つたらこんな奴は、枕探しをひろぐも知れない。花紫を存分に、我が物にして本望であらう。その代りにやア、あの小紫を詮議して、お尋ね者の權八を匿まつた奴を云はせる程に、男達の長兵衛、逃げずと爰に待つてけつかれ。

　ト唄になり、閑心、十右衛門その外皆々こなしあつて、奥へ入ると、直ぐに花紫、あたりを見て、長兵衛に取りつき

花紫　長兵衛さん、よう堪忍して下さんした。わたしやお前の短氣な心でも出やうかと、大抵や大方、案じた事で

はないわいなア。
長兵　この長兵衛が、料簡ならぬ所であつたが、われさへ閑心へ渡さにやア、男が立つと云ふもの。それゆゑにこそ、堪え憎い所を、ヂッと堪えて居ただけに、マア、一分は立つたと云ふものだ。
花紫　それはさうと、いま閑心が云うた事は、小紫を詮議して、お尋ね者の權八を、匿まうて置いた者を、云はせうと云うたぞえ。
長兵　成る程、この長兵衛が匿まつて置いた事を、嗅ぎつけて居るこそ幸ひ、それと云はずに爰から直ぐに、九州の方へ落してやる程に、爰へ呼んで來て、飯でも食はせてくれろ。
花紫　合點ぢやわいな。そんなら權八さんを、爰へ呼んで來るぞえ。
長兵　早く／＼。
花紫　合點ぢやわいなア。
　ト合ひ方になり、奥へ入る。長兵衛殘り、思ひ入れあつて
長兵　この長兵衛が思ふには、あの權八が立退けばよいが、飽くまで氣強い生れつき。おいと云つて落ちはせまい。もし立退かぬその時は、マア、どうしたものであらうなア。
　ト手を組んで思案して居ると、唄になり、奥より權八、天蓋を持ち出て來る。
權八　長兵衛どの、そこへ參つてもようござるか。
長兵　ちつとも大事ない。爰へ來やれ。
權八　其許がござればこそ、安堵いたしてこの處に居つたれば、なか／＼欝散いたした。
長兵　その筈／＼。とても事に爰へ打寛ろいで、なんと話す氣はないか。
權八　そりやアようござらう。存じ寄りがござれば、一先づ立退きませうと存じたが、其許の料簡に附きまして、暫らく花川戸に隱れて居らうと存ずれば、最早心は大丈夫。度々この處へも參られまいに依つて、そんなら緩りと、これに居りませう。
長兵　それがよい／＼。時に、物は相談だが、なんとこの長兵衛が講頭になつて、釣鐘を建立して納めるが、伊豆の國、手石の彌陀へ參る心は無いか。
權八　イエ／＼、斯うした今の身の上、もしもの事があつては、先づ其許のお世話になつた甲斐も無し、殊に船は

生得嫌ひでござれば。
長兵　行く氣は無いか。それなれば有る〳〵。なんと、少し遠いが伊勢參宮する心は無いか。
權八　これは長兵衞どのとした事が、神は非禮を受け給はず、この權八が身の上で、日本の宗廟、伊勢參宮はなりますまい。
長兵　それなればいつその事、西國を打つ氣はないか。此やうに長閑にはなる、日は長し、重罪をも滅する爲、なんと西國はよいぢやアないか。
權八　近江の國から立退きましたれば、石山の觀音へも、三井寺へも參れますまい。
長兵　そんならこれがよい。よく世間で人の參りたがる、豐後の國の五百羅漢、なんと豐後の國へ行く事は、どうであらう。
權八　豐後の國は我が本國、立歸りたうはござりますれども、父の家名を穢しましたる權八、存命のうちは歸られますまい。
長兵　豐後の國にさしがあらば、甲斐の身延はどうであらう。
權八　宗旨でござらぬ。
長兵　秩父はどうだ。
權八　絹賣り彌市が在所。
長兵　仙臺は。
權八　知るべがござらぬ。
長兵　鎌倉は。
權八　敵の中。
長兵　それぢやア。
權八　露の命の一枝に、置き所なき憂き世界、夕に消ゆる陽炎の、あるに甲斐なき身の上とは、成り果つるものぢやなア。
長兵　それだに依つて、おれ次第になつて、マア、どつちへなりとも、足をはかりに立退きやれ。
權八　左樣ではござれども、最早在所も知れたる權八、匿まひ置かれし權八ゆゑ、後で難儀がかゝりましては、立退きましても本望にござらぬ。願ひ成就いたさぬうち、如何やうな儀がござつても、この權八は立退きませぬ。
ト長兵衞、最前の繪姿を出し
長兵　コレ、この通りの人相書。助かるだけは助けたいと、この長兵衞は思ふゆゑ、これ程までに勸めるを、聞分けなく落ちまいと云へば、よいワ、男づくで匿まつた權八

なれば、目の黒いうちに詮議仕出されては、どうも男が立たない。立退かずばよいワ、お身様よりは先へ、この長兵衛が死ぬべい。

ト鮫鞘の脇差を抜かうとする。權八その手を留めて

權八　待たつしやい。

長兵　退きやれよ。

ト突き退ける。

權八　逸まるまいぞ。

ト無理に留める。長兵衛、突き退けて、死なうとする事よろしくあるべし。

長兵　死なにやア、おれが男が立たない。

權八　サア／＼／＼、その心ざしが忝ないに依つて、立退きませう。

長兵　そんならいよ／＼。

權八　立退きませう、權八ゆゑに義理ある人は殺されぬ。立退きまする程に、必らず逸まるまいぞ。

長兵　おれが云ふ事を聞き分けて、そんなら妾を立退くか。

權八　直ぐにこれより立退きませう。

長兵　さう云ふ事なら頼もしい。

權八　韓雲孟龍の、そのかね事はいざ知らず、それ程までにこの權八を、思つて下さる長兵衛どの。

長兵　一旦思ひ込んだる長兵衛が、魂ひ怯まぬ處が兄弟分。

權八　袖と袖とを取交せし

長兵　身に引請ける心底づく。

權八　いま別れなばいつか又

長兵　花咲く春に逢ひませう。

權八　雪とこの身は消え果てん。

長兵　世は定めなき

權八　有爲轉變。

長兵　生死不定の

權八　門出の

長兵　杯。

ト誂らへのめりやすになる。この時に時の鐘鳴ると、櫻の花散る事あるべし。長兵衛、杯と銚子を持つて來て、權八が前に置く。權八、杯を取上ぐると、長兵衛、酌をしながら顔見合せ、ホロリとする思ひ入れ。權八呑んで長兵衛に献す。長兵衛、杯を取上げる。權八、酌をして顔見合せ、思ひ入れあり、これまでにて唄切れる。

長兵　エヽ、コレ、氣にかゝる事は何も肴がない。なんと

そこらに、生臭い物はないか知らぬ。
ト方々尋ねて、山吹の垣にかゝつて居る、蛙の乾したのを山吹の枝とも取つて來て
コレ〳〵、なんと變つた物があつたぢやないか。アレ、山吹の生垣にかゝつて、蛙が乾物になつて居る。生臭物があるぢやアないか。

權八　成る程、見れば珍らしいこの蛙。それ〳〵、これが噂に聞き及んだ、百舌鳥の草莖と云ふ物でござらう。

長兵　それ〳〵、百舌鳥の草莖、珍らしい物を見るものぢやないか。

權八　長兵衞どの、この百舌鳥の草莖を、百舌鳥磔刑と云ふではござらぬか。

長兵　成る程。

權八　斯く成り果つる權八が、門出の肴に草莖の、百舌鳥磔刑とは。

ト山吹の枝を池の中へ叩き込むと、途端に蛙數多鳴き出す。竹笛入りの合ひ方になり、この池より數多の蛙出て食ひ合ふ事あるべし。權八フッと見附けてキッと思ひ入れ。長兵衞、權八が顏に目を附けて居る。この後へ閑心出て、刀を杖に突いて窺つて居る。

權八　ハテ、面白い蛙の有樣。自然と別れし周の戰ひ。我が身に取つては眼前の蝦蟇陵、いま門出の杯に、求めし精靈、自ら屈して婦人となる。我れを剋する水面の有樣。思へば奇なる蛙合戰ぢやなア。

トきつと思ひ入れ。

長兵　思ひを詞に顯はしたる、權八が胸中は、察するところ、賴國の落し胤。

權八　コレ、滅多な事を云ふまいぞ。

ト双方思ひ入れする。閑心ズッと出て

閑心　權八、動くな。

ト權八にかゝる。長兵衞、突き廻し、立廻りあつて

長兵　赤堀源吾。

三人　どつこい。

ト三人思ひ入れよろしくあつて、よいキッカケに

カチ〳〵〳〵〳〵

拍子幕

第二番目大切

吉原仲之町の場
天満屋の場
大雲寺仇討の場

役名――助市下部、三五平。男達、唐犬十右衛門。面影大盡實ハ赤堀源吾。天満屋遣り手、お吉。仲居、おしま。捕手頭、志賀幸七。男藝者、東雲やみ子。若い者、喜助。岩井源之丞。天満屋小紫實ハ源之丞妹八重梅。仲居、お濱實ハ長兵衛女房お濱。白井権八。男達、幡随長兵衛。

本舞臺、正面女郎屋の大格子、上の方に天満屋と染めたる長暖簾。下の方に誰哉行燈、天水桶、舞臺先に長床几三脚置き、これに毛氈を掛け、爰に三五平、羽織衣裳大小にて、酒盛りをして居る。おしま、仲居の拵らへ、赤前垂れにて酌をして居る。東雲のやみ子、男藝者の拵らへにて、若い者喜助と拳を打つて居る。おきち、遣り手の拵らへ。若い者立ちかゝつて見て居る。幕の内よりワヤ／＼云うて賑やかに、清搔にて幕明く。

きち　やみ子さんの勝ちぢや／＼。
若者　イヤ／＼、喜助どんの勝ちだ／＼。
やみ　まだ／＼勝負はつかない／＼。もう一拳だ／＼。
喜助　そんなら今一拳で、嫌應なしに一升入りで、上からにやアなりませぬぞ。
やみ　お主に呑ませにやならない。
しま　サア／＼、早く勝負が見たいわいなア／＼。
きち　わたしが行司に立たうわいなア。

トおしま、酌をする。三五平、酒を呑みながら、これを見て居る。これより錣の合ひ方となり

やみ　りうさい。
喜助　くわい。
やみ　さんな。うま。いつこう。
喜助　りやん。とうらい。くわい／＼で、拂ひ／＼。
しま　また喜助どんが勝ちぢやわいなア。
きち　やみ子さん、どうしたものぢやぞいなア。
しま　先刻から、負けてばつかりござるから、見物するに張合ひがない。
やみ　なにサ、今のは喜ス公を少し眼下に見下ろして、山

の一手で足を突くやつサ。ハヽヽヽ。
きち　その口が憎いわいなア。
喜助　そんなら、どなたでも相手は嫌はぬ。お出でなさいお出でなさい。
きち　わつちが一拳、行かうわいなア。
やみ　そんなら拜見いたさう。こりやア好い立合ひだ。
しま　サア〳〵、早く勝負が見たい〳〵。
　ト拳になる。
三五　ヤイ〳〵、もう、拳は取指かぬか。なんの變哲もない、負勝ちに、そんなに精腹揉まずとも、喜助とやら、早く小紫を迎へに行かぬかやい。
喜助　イヱ、モウ、先刻にから仲の町へ、人橋を懸けまするが、引く手數多の太夫樣、今日と云うて、さう直ぐに、お逢ひなさるゝ事はなりませぬ。
若者　それ〳〵、達てと思し召すなら、今からお約束なされて、來月の三日四日の頃でなけりやア、お逢ひなさるゝ事はなりませぬ。
きち　さうぢやわいなア。あの唐犬十右衞門さんがお供なさんす、面影大盡さん、毎晩々々お通ひなされて、上から下への惣花。金ぜきになされてさへ、儘にならぬ小紫さん、いくら迎へに行たとても、
　ト三五平が形恰好を見て
なんのまア、あのやうな者と。
三五　あのやうな者とは。
　トむつとする思ひ入れ。おきち、氣の毒の思ひ入れ。
きち　オヽ、笑止。ホヽヽヽ。
喜助　イヤ、お客樣、御退屈にござりませう。いつそ今宵はわつさりと、新造衆をお上げなされたら、どうでござりませうな。
三五　イヤ〳〵、その新造とやら、新助とやら望みにおりない。國元より遙々と、聞き及んで參つた天滿屋の小紫太夫、是非今宵求めたい。少々他々より値段は高値でも苦しうない。早う呼んで參れ〳〵。
喜助　イエ、モウ、いくらお迎へに參りましても、仲の町へお出でなされるのは、まだ今の事ではござりませぬ。
三五　ハテ、他々より値段は、よう求めようと申すに、慾を知らぬ者どもぢやわいの。但し、現金に價を遣はさぬゆゑに、埒が明かぬのか。よい〳〵。
　ト懷中より、小倉の紙入れを出し
コリヤ、若い者、小紫が揚げ代はなんぼぢや。サア、拂

うて遣はさう。掛値なしに早う申せ。
トこれを見て皆々呆れて笑ふ。

きち　ほんになア、あんまりぢやわいなア。あれでマア、廓一番の全盛、小紫さんを揚げようとは、これも話しの種ぢやわいなア。

しま　コレイナア、お吉どん、なんぢやぞいなア。廓初めてのお方なら、勝手を御存じない筈ぢやわいなア。

三五　成る程、其方は餘程解つた者ぢや。如何にも身共は遠國者。今日初めてこの廓へ參つたゆゑ、どちらへ參つてよい事やら、途方に暮れて居つた所が、仲居のお濱とやらに逢うたゆゑ、小紫太夫が事を尋ね、詳しう頼んだれば、氣遣ひ致すな、今宵首尾して逢はしてやらうと、心易く請合うたゆゑ、つい逢はるゝ事と思うて、只今まで待つて居つたが、其方達が今の詞とは、きつい相違ぢや。

きち　そんなら、お濱さんにお逢ひなさんしたかえ。

三五　如何にも對面いたした。

しま　あの太夫さんと、仲のよいお濱さんが請合うてなら……ナウ喜助どん、今に歸らしやんすであらうなア。

喜助　さればな。十右衞門さまを始め、面影さまが揚詰めになされてさへ、儘にならぬ太夫さまを、お濱さんが請合ふとは、ほんに旦那はお仕合せでござります。

きち　ほんに、イケ好かないあのお濱さん、以前が幇間長兵衞さんのお內儀さんぢやと云うて、今では追ひ出されて行き場がなさに、此方の太夫さんの世話になつて居ながら、嘗め過ぎた二階の切盛り。どこぞでわしが云はにやならぬわいなア。

しま　イカサマナア、男を立てた幇間長兵衞さま、毎晩毎晩廓へござるのに、小紫さまがお濱さんを、世話をして置きなさるのは、どうやら長兵衞さんの面を踏むやうなものだ。

きち　そしてマア、長兵衞さんに逢うても、イケ圖々とマア、恥を知らんと云ふものぢやわいの。

三五　ハテ、いかうわいらは、お濱の事を惡う云ふな。

きち　ほんにお前さんは、どうやらお濱さんと、お近附きのやうな御様子。下地からお馴染みでござんすかえ。

三五　如何にもサ。イヤ／＼、今日初めて逢うた。して、その長兵衞と云ふは、毎日々々この廓へ參る者か。

しま　アイ、今までは、權八さんの腰押しで、毎夜々々お出でなさんしたが、この頃は其やうに、お出でなさんせ

んわいなア。
三五　その權八とやらは、小紫太夫が深間とやら、間夫とやら申す客ではないか。
きち　その權八さんも、今ではお尋ね者とやらにならしやんして、今ではフツツリと、廓へお出でなさんせぬわいなア。
三五　そんならその權八は、今では小紫の所へは參らぬか。
ト血相變へて云ふ。
きち　このお客さんは、きついお嫉ぢやわいな。まだ逢ひも見もなさんせぬうちから、權八さんと聞いて、あの血相な。
三五　して、今では小紫が客と云ふは。
きち　引く手數多ぢやわいなア。
三五　して、その權八を除けて、小紫の客と云ふは。
ト向う花道、東の花道より
十長　わしでござんす。
ト兩方一緒に聲を掛ける。
三五　なんと。
十長　それへ參つて、お近附きになりませう。
ト賑やかになる、男達の出の唄になり、本花道より、長兵衞、着流し、一本差し、下駄がけにて出る。後より岩井源之丞、羽織衣裳、大小深編笠にて出る。東の花道より十右衞門、男達の形、一本差し、下駄がけにて出る。後より面影大盡、羽織衣裳大小にて、目ばかり頭巾にて出る。よいキツカケの所にて、兩方花道中程にとまる。
きち　幡隨長兵衞さん。
しま　唐犬十右衞門さん。
皆々　お出でなされましたか。
長兵　戀に心も朧夜も、月の夕や闇の夜も、通ひ廓の厄介者。五輪五體を突き出しの、喧嘩買ふなら買つてやろ。賣るなら買はう正札附き。幡隨長兵衞と云ふ、五分でも引かぬ男でごんす。
十右　一犬吠ゆれば萬犬も、喰ひ筑波や富士山の、そのひやわひに育つたる、江戸の生粹交りなし、我まゝ者の惣本寺、唐犬十右衞門と云ふ男でごんす。
長兵　噂に聞いた十右衞門どの。
十右　話しに聞いた長兵衞どの。
長兵　いつぞは逢はうと思つたに
十右　思ひ懸けない今日の出合ひ。

しま　マア、爰へござんして。
十長　ドレ、近附きにならうか。
ト鳴り物にて兩方ともに舞臺へ來り、十右衞門、面影大盡は上の床几に腰を掛ける。長兵衞、源之丞は下の床几に腰をかける。三五平は眞中に居て、兩方見廻し、キヨロ／＼して居る。
三五　小紫と客人の、名乘つて出たる二人の衆。どちらを見ても立派な男振り。して、今宵の客と云ふは。
十右　わしでごんす。この十右衞門がお供した、面影大盡さま、十日こなたの揚詰め、ちよつと借引きはさて措き、小紫が身の上、貧乏搖ぎもさせる事ぢやないのサ。
面影　さうだ／＼。今にも小紫が返事次第、直ぐに身請けして國元へ同道すりや、身が奥も同然。これからはちよつとの貸借りもならないぞ。
十右　アレあの通りだ。みんなさう思つて居ろ／＼。
皆々　畏まりました。
十右　これからは小紫が側へ、男切れはさて措き、男猫でも側へ寄せる事はならないぞ。
きち　お聞きなさんしたか。あの通りぢやから、小紫さんの事は、さつぱりと思ひ切つて、新造衆になさるがよいわいなう。
三五　遙々尋ねて參つた甲斐もなく、小紫太夫の身の上、根曳きとあれば致し方はなけれども、なんと其方達が執成しで、ちよつとの對面ばかりは。
長兵　わしが執持つて、逢はせて進ぜませう。
三五　すりや、小紫太夫へ。
長兵　氣遣ひさつしやりますな。わしがお供して來たこのお方も、小紫に御執心で、逢はしてくれいとのお頼み。請合つて來たからは、例へ揚詰めであらうが、身請けの相談があらうが、廓に居るうちは、わしがしがくで、小紫の身の上、マア／＼、どうなりとする程に、大船に乘つたと思つて、落ちついてござりませせ。
面影　十右衞門、いゝかよ／＼。
ト思ひ入れ。
十右　ハテ、ようござりますワ。誰れがどう云はうと、打ッちやつて置かしやりませせ。
ト煙草をのんで居る。
面影　お主がさう呑み込んで居る事なら、大事はないが、相手が相手だぞえ。
十右　例へきまん國の王樣が皮羽織にかく繋ぎの股引きで

來やうが、角の八百本生えた奴が、向う面へ直らうが、此方の揚詰めのうちは、太夫が身の上、煮て食はうと燒いて食はうと、大盡さまのお心任せサ。

面影　成る程、こりやアさうありさうなものだ。

長兵　イカサマ、音に聞えた唐犬の十右衞門どんとやら。五割貸しのむさい穢ない男と思ひの外、立派な男だが、惜しい事には廓の事は不通だの。

十右　なんと。

ト思ひ入れ。

長兵　玉に瑕だ。これから信心して、この幡隨が加持水でも呑んで、ちつと通り者になるがよい。どうやらこなさんは、よい〳〵がかつて居るわえ。

十右　エ。

長兵　ハテ、女郎の貰ひ引きに、瓜や茄子を見切りに買ひはしまいし、さう手籠めに自由になるものか。こなさんは知るまいが、女郎の理窟ひくつと云ふものは、また世界は別だ。其方にござる面影とやら、大盡さまとやら、折々廓で見掛けるが、大黒の申し子を見るやうに、ついぞ頭巾を取つた事のない大盡さま。金ぜきにして面を撲つても、女郎の誠は錢金ぢやア買はれない。

十右　イヽヤ、買はれるの。この十右衞門が馬喰すりやア、どんな邪魔でも金銀の、轡を塡めて、乘り鎭めて見せるワ。

長兵　苦界十年體は賣れど、心は賣らない身請けの事も、小紫が踏ん反りやア、高が鞍替へに出る分の事サ。嫌だと思へばどこまでも、振つて〳〵振り通す女郎の意氣地、あんまり身請け〳〵と騷ぎ廻る事はない。コレ、若い人、今夜は其方での揚げでも、この長兵衞が貰ひました程に、さう思つてもらひませう。

十右　イヽヤ、そりやアならない。

長兵　なぜな。

十右　ハテ、外の者なら格別、見ぬ顏をする事もあらうが、幡隨長兵衞が腰押しと聞いちやア、小紫が身の上、遣る事はならない。さう思つてくりやれ。

長兵　成る程、こりやアさうありさうなものだ。シタガ、これまでこの長兵衞が、口を出した出入りに、そんならいゝワと、指を啣へて引込んだ事がない。

ト身拵らへをして

不肖ながら十右衞門とやら、ちよつと爰へ出てくりやれ。

ト十右衞門こなしあつて、身拵らへして舞臺先へ出る。

十右 源之丞、面影大盡、心遣ひの思ひ入れ。
出ろとあるから爰へ出たが、なんの用だ。

長兵 大儀ながら、下に居てくりやれ。

ト十右衛門、下に居て

十右 下に居たが、して、お主が用と云ふは。

長兵 イヤ、外の事でもない。幡隨長兵衛と唐犬十右衛門とが、斯う顏を合して置けば、出入りはいつでもなる。差當つてお主への無心と云ふは、小紫が身の上。

十右 貰ひたいと云ふ事か。

長兵 不肖ながら。

十右 嫌だ。遣る事はならない。

長兵 嫌だとありやア是非がない。これから長兵衛が腕づくで、貰つて見せう。

十右 面白い。おぬしやア又、腕づくと云ふが、どうして貰ふ氣だ。

長兵 斯うして貰はう。

トかゝる。立廻り。皆々心遣ひのこなし。

十右 さうすれば、斯うして遣るまい。

トはれる。立廻り。

長兵 處を斯うして。

ト突き退ける。立廻り。

十長 どつこい。

ト兩人よろしく見得になると、向う花道にて揚げ幕の内より

小紫 待つた。

十長 待てとは。

トまた揚げ幕の内にて

小紫 天滿屋の小紫が留めんした。お二人さん、マア〱、待つて下さんせいなア。

トこれにて兩人解れると、揚り鉦入りの賑やかなる出の鳴り物になり、若い者、小紫が紋の附いたる箱提灯を持つて出る。後より小紫、傾城の形、駒下駄にて、出て來る。その後に禿二人、仲居お濱、前垂れ駒下駄にて、團扇を持ち出て來る。後より若い者一人附き出る。よき處の花道に止まる。

長兵 こりやア誰れだと思つたら、天滿屋の小紫。お主が事から起つてのこの出入り。

十右 留めて出たのは手短かに、二人へ返事をする心か。

長兵 太夫、返事は

十長 どうだ。

小紫　オヽ、けうと。譯は何かは白露の、返りまをしの格子先、見れば縺れたこの場の入り譯。なんぢやあらうと、わたしに預けて下さんせいなア。
はま　大方、又いつもの唐犬のわんちやんから、起つた事でござんせう。マア、なんであらうと、早うあそこへ、ござんせいなア。
小紫　こりや、きつうお急ぎぢやね。
　ト向うを見て
　ほんにこりや、わしが氣が附かなんだわいの。長兵衛さんが來てぢやに依つて、お濱さんが。
はま　オヽ、云うて下さんすな。退き去りにすれば赤の他人。さう未練の殘るのぢやないわいなア。
小紫　それでも、昔馴染みの長兵衛さん。
はま　エヽ、なんぢやいなア。人を嫌がらすやうな事ばかり。マア／＼、あそこへお出でなさんせいなア。
小紫　そんなら、子供來や。
禿　アイ／＼。
　ト矢張り唄の切れにて皆舞臺へ來る。
皆々　きつうお隙がいりましたなア。
　ト源之丞、小紫を見て

源之　ヤア、其方は。
　ト寄らうとする。長兵衛留めて
長兵　アヽ、コレ、わしが指圖するまでは、マア、なんにも云ひますまいぞ。
三五　ほんに其方は、最前逢うた仲居どの。ヤレ／＼、待ち兼ねた／＼。何をどう云うてよいやら、當所不案内の事。このお人のいかいお世話になつた程に、よう禮を云うておくれやれ。
はま　それはマア、ほんに。
　ト云はうとして、長兵衛と顔見合せ、ツンとして
　ようマア、待つて居て下さんしたなア。先刻に逢うた時は、わたしもお前に……サア、お前の樂ましやんした事、太夫さんにも話して置いたわいなア。
小紫　お濱さん、先刻の話は主かいなア。
十右　小紫、大盡さまもこれにお出でなさるゝに、なぜ花魁には挨拶をしない。それぢやアこの十右衛門が、男が立たない。
はま　十右衛門さん、そりやなんぢやぞいなア。大盡さまの揚げのうちは、外のお方に物云はぬ筈かいなア。全盛の太夫さんなりや、どなたへも。

十右　フウ、勤める心なら、なぜ十日この方、揚詰めにしてござる大盡さまを、袖にして振りつけるのだ。

はま　そりや知れた事いなう。大盡さんのお心が知れぬゆゑ。ナ、太夫さん、なんでござんせうなア。

小紫　さうぢやわいなア。さうぢややら暑苦しい、いつでも頭巾をすつぽり着て居やしやんして、どんなお方やら心も知れぬ面影さん。

面影　然らば、身共が心の知れた上は。

十右　帶紐解いて抱かれて寢るか。

小紫　オヽ、くど。

長兵　して、この長兵衛の返事はどうだ。

小紫　現在お濱さんが、爰に居やしやんすのに。

長兵　ハテ、去つてしまへば赤の他人。そりやア兎もあれこの長兵衛を、男と見掛けて頼まれたに依つて、お供したこのお方。是非今夜はこの長兵衛が方へ、來てもらはにやアならない。

ト小紫、源之丞を見て

小紫　滅相な。お前は。

ト寄らうとして、あたりへ思ひ入れして

お濱さんもお濱さんぢやわいなア。あれ程わたしが頼んで、氣を附けて下さんせと云うたに、あんまりぢやわいな。

はま　ほんにお小袖の紋所と云ひ

ト笠の内を覗かうとする。源之丞、扇にて隔てる。

長兵　なんと太夫さん、この客人に、逢うてやつては下さるまいか。

小紫　いつにない、長兵衛さんまでが眞顔になつて、もう、大概にして置いて下さんせいなア。

ト此うち十右衛門、源之丞へ目を附け

十右　最前から見るところに、人目を忍ぶ夜の編笠。丸に井筒の紋どころ。さちやアお尋ぬ者の權八だな。

三五　ナニ、權八とな。

ト源之丞へ詰め寄る。

小紫　モシ。

ト隔てる。

十右　何にもせよ、その蓮ツ葉を。

ト十右衛門、源之丞にかゝる。立廻り。後へ面影大盡、ちよつと拔きかける。長兵衛これをちよつと留める。十右衛門、源之丞が編笠へ手を掛ける。立廻りにて源之丞、十右衛門を見事に投げる。これをキツカケに、

源之丞、編笠を取つて、しやんと見得になる。
濱小　ヤア、お前さんは。
三五　岩井
ト云はうとするを
源之　コレ。
ト思ひ入れにて押へる。面影大盡、源之丞を見てギヨツとすることなし。
小紫　でも、思ひがけない。
ト思ひ入れ。十右衞門起き上がり、思ひ入れあつて
十右　思ひがけないとはおれが事だ。お尋ね者の權八と思ひの外、こりやどうだ。
源之　じだばたひろぐと、手は見せぬぞ。
ト反りを打つ。十右衞門、一縮みになる。長兵衞留めて
長兵　モシ、短慮功をなさずとやら。場所が惡い。ナ、マア、わしに任せて置かつしやりませ。
源之　何から何までお世話下さる、長兵衞のお詞……とは云ふものゝ。
長兵　モシ。
ト留めて

マア、捨てゝ置かつしやりませ。
源之　エヽ、命冥加な。
ト思ひ入れ。面影大盡は、始終薄氣味惡き思ひ入れ。
十右　命冥加も凄まじい。この十右衞門をば河岸上げの、西瓜のやうに惜し氣もなく、ヒヨイとやりやがつたな。
面影　ハテ、よいわい。些細の事に構はずと、奥でわつさり酒にしよう。皆も一緒に。
十右　でも、此まゝにしては。
ト源之丞思ひ入れ。
長兵　どうしたと。
皆々　サア、お出でなされませ。
ト騷ぎになり、面影大盡先に、十右衞門よろしく引張り合つて奥へ入る。長兵衞、源之丞、小紫、お濱、三五平殘る。合ひ方。
小紫　思ひがけない兄上樣、ようマア、尋ねて來て下さんした。
源之　其方も無事で滿足々々。
三五　フウ、すりや、小紫どのと云ふは、源之丞さまの、お妹御さまでござりまするか。
小紫　して、こなさんは。

はま　先刻にお話し申しましたる、私しが兄、三五平どのでござんすわいなア。

長兵　すりや、權八どのゝ噂に聞いた、お濱が兄の三五平どの。

三五　ついにお目にかゝらねど、書狀では度々のお出合ひ。承はれば權八どのに、由縁ある長兵衞どの、それゆゑに妹濱をも、御離縁なされしとな。

長兵　如何にも左樣。權八どのに由縁かゝりは無けれども、どうした事やら、わしはきつい心意氣サ。フトした事から懇意になつて、互ひに明かす身の上話し。一旦男が頼まれちやア、どこがどこまでも贔屓するのサ。

源之　現在二世と連れ添ふ女房を、離別なしても男の詞を、立て通す長兵衞どの、その頼もしいお心ゆゑ、今日これへ某を、御同道下されし樣子。妹八重梅、一通り聞いてたも。義理ゆゑ迫つて其方の身の上、この廓へおちやつた樣子、聞くと等しく、何卒對面なさんと、この間中より、度々この廓へ尋ね參れども、取次ぎくれる人もなく、悄々旅宿へ戻りしところ、花川戸の長兵衞どのと、承はつたる御高名、事の樣子を打明けて、お頼み申せしところに、早速これに御同道下され、絶えて久しき妹に、不思議の對面。これと云ふも長兵衞どのゝお世話ゆゑ、よくよくお禮申し上げてたも。

小紫　成る程、權八さんの事と云ひ、兄さんの事まで、其やうに、身に引請けて、お世話なされて下さんすと云ひ、一方ならぬわたしがお禮。せめての事にお濱さんの身の上、甲斐性のない私しが引請けたも、以前の通り變らぬ夫婦に……サア、わたしが改めて、お世話する心ぢやわいなア。

三五　成る程、それは耳寄りな事を承はりまして、この三五平も安堵しまする。元より男を立つる幡隨長兵衞、女房の由縁で使つても、なか／＼權八どのゝ行くへ、明かしは致されまい。さすれば足手纏ひの妹お濱、勘當すりやこの三五平に、由縁もかゝりもないとは云ひながら、はし折り鏡の兄弟二人、女の身ではさぞ力なう存じませう。八重梅さま、あなたのお側使ひになりとどうなりと、お目かけられて遣はされませい。

はま　そんならわたしを。

　　ト思ひ入れ。

三五　勘當すりや赤の他人。ナ、勘當ぢやぞ。

はま　エヽ、嬉しうござんす。

　ト思ひ入れ。三五平こなしあつて

三五　斯やうな事とは露知らず、助市さまのお供して、主従二人爰彼所、權八どのゝ行くへを尋ね、この鎌倉と心ざし、遙々下る折柄に、富士の根方の曾我の兩社、敵討つ身の祈るべき御神と、丹誠擢んで禮拜なし、よく〳〵見れば神前に、掛け奉る願主の名は、白井權八範秀と、墨黒々と書き記るしあれば、あら有り難や忝なや、曾我の兩社の我れ〳〵を、憐れみ給ひて敵の在所、導き給ふと猶も丹誠擢んで、それより所々の神社佛閣、心を附けて見るところに、そこにも茲にも白井權八と、奉納繪馬に記しあるは、この江戸の內に隱れ忍ぶは必定と、樣子を聞けば、長兵衞どのゝお世話にて、この江戸に足を暫らく留むる由。その長兵衞どのと云ふは妹の連合ひ、便る所も多からうに、妹の所とは、エ、忝なや有り難やと、袋の鼠を押へし心地。夜を日に繼いで來て見れば、飽かぬ別れの夫婦の離別。途方に暮れて小磯の宿、僅かな知るべを尋ね求めて止宿をなし、樣子を聞けば、この吉原の小紫、權八どのと深く馴染を重ねし由、聞いたるゆゑに他所ながら、とくと樣子を窺はんと、思ひ附いたる損料借り。侍ひ姿と出立ちし、下郎が念願屆いて、お目にかゝりし小紫どのは、源之丞さまのお妹御。さすれば、同じ思ひの願ひの身の上。モシ、小紫さま、八重梅さま、この下郎めが心の內、思し召し合はされて、權八さまのお行くへを、お明かしなされて下さりませ。

　ト此せりふのうち、よき所にて大小上着を取ると奴の姿となる。

小紫　成る程、權八さんも常々云はしやんすは、何卒して助市さまに、お目にかゝりたい〳〵と、云うてぢやに依つて

　ト思ひ入れありて

サア、權八さんのお行くへも知つて居る事なら、なんの隱しませう。何を云ふにも浮名の立つた二人が仲。內外の者に迫き迫かれ、顏見る事もならぬ今の身の上。どこにどうして居やしやんす事やら。

三五　すりや、これ程に事を分けて、お願ひ申しても、御存じは。

小紫　アイ、知らぬわいなア。

三五　知らぬとあれば、是非がない。

　トこなしあつてスッと立つ。

はま　モシ、お前はどこへ行かしやんすえ。

三五　ハテ、知れた事だ。この三五平も男の端くれ、この吉原へ足を踏ん込んで、此まゝに素手の孫三で歸られもせまい。これから二階座敷でわつさりと、藝者を集めて酒にするつもりだ。

長兵　こりやア面白い。田舍のお人には好い氣合ひだ。今までなら女房の縁で、差合ひでもあらうが、赤の他人の三五平どのとやらと、乙な一座だ。わしも一杯呑みませうか。

三五　そりやアようござらう。斯う落合ふも、一方ならぬ他生の縁。

長兵　一樹の蔭の奥庭で、涼みながらの拍子酒。

はま　底の冷たいお二人さん、わたしがお酌に立たうわいな。

長兵　そんなら三五平どの。

三五　長兵衞どの。

長兵　お客人。

源之　先づ〳〵お先へ。

はま　左樣ならば、太夫さんと御一緒に。

小紫　マア、ござんせいなア。

ト唄になり、こなしあつて、お濱、長兵衞、三五平奥へ入る。小紫、源之丞殘る。

源之　合點のゆかぬ三五平の今の詞。妹そちや、あの白井權八と、深う云ひ交して居るか。

小紫　サイナア、お前の前では云ひ憎けれど、逢ひ初めし權八さん、器量なら氣立てなら、どこに一つの云ひ分の無い、立派な權八さん。わたしが力と思ふに甲斐ない、今にも敵に巡り合はゞ、潔よう名乘つて敵が討たれたい、助市さんの行くへが知りたいと、方々尋ねて居やしやんしたわいなア。

源之　フウ、すりや、權八には、助市が行くへを尋ね出し、潔よう敵を討たれんとな。

ト思ひ入れあつて

ハア、羨やましき助市の身の上。月も日も、同じ時刻に討たれたる、父の敵をこれ程までに、尋ね明かせど今日が日まで、これぞと云ふ手がゝりもなく、仇に月日を送ると云ふは、よく〳〵、武運に盡き果てたか。チエ、殘念なア。

トこなしある。

コリヤ妹、廓は諸方の人の入込む所、定めし其方も心を附けて居やらうが、これぞと云ふ敵の手がゝりにも、な

りさうな事はなかつたか。

小紫　サイナア、わたしも如才なく、心を附けて居ますれど、これぞと云ふ事もござんせぬが、最前お前も見やしやんした、あの面影と云ふ客。この頃わたしを揚詰めにて、毎夜さ通ふ形恰好、頭巾眼深に面を隠し、人に逢はぬが一つの不思議。

ト此せりふのうち、後へ若い者出かゝり窺うて居る。

源之　フウ、すりや、揚詰めの其方にまで、一度も顔を合はさぬか。

小紫　サイナア、在所訛りを云ひ替へて、詞の様子は變れども、姿形も慥かに赤堀源吾。よう似たぢやござんせぬか。

源之　イカサマ、いづれ先刻の取なり。さうぢや。

ト行かうとする。

小紫　待たしやんせ。お前が奥へ行かしやんして、荒立てては、結句願ひの妨げ。騙すに手なし、わたしに、任かせて置かしやんせいなア。

源之　そんなら其方が試した上、もしも源吾に極まらば。

小紫　今宵のうちに日頃の本望。

源之　ぬかるまいぞや。

小紫　心得ました。

若者　ヤア、大盡さまを敵と云ふは、さては太夫さんは。

小紫　ア、コレ〳〵、滅多な事を云ふまいぞ。

ト源之丞、心遣ひの思ひ入れ。

若者　イエ〳〵、滅多な事ぢやない。敵討だ〳〵。

ト聲を立てる。

源之　もう、是非に及ばぬ。

ト一太刀浴せる。奥は騒ぎになり、これより源之丞、若い者をあちこち追ひ廻して刺し殺す。小紫、いろ〳〵心遣ひのこなし。トヾ若い者を切ると、源之丞の左の袖を引ッ切り、これを持つて倒れる。源之丞、上に乗りかゝり留めを刺す。奥にてバタ〳〵の人音するゆゑ、刀を納める。

小紫　兄さん。

源之　八重梅。

小紫　ござんせ。

ト時の鐘にて奥へ入る。下の方より面影大盡、十右衛門窺ひ出で

十右　源吾さま、今のを聞いては、爰にござるは危ないものでござりまする、一刻も早くお歸りなされませぬか。

面影　イヤ、氣遣ひ致すな。源之丞めは人を害めしこそ幸ひ。
ト死骸の片袖を取つて
丸に井筒のこの片袖、これを證據に、人殺しの訴人をすれば、源之丞めは下手人。高が生き殘つても　小紫は女の事なり、今夜からはこの源吾、枕を高く寐られると云ふものだ。
十右　成る程、こりやア出來ました。手も濡らさず源之丞を、おッ片附けるは今の片袖。
面影　必らずぬかるな。
十右　心得ました。
ト袖を口に啣へ、尻を紮げる。
面影　急げ。
ト十右衛門、思ひ入れして
十右　まつかしよとな。
ト時の鐘にて十右衛門、逸散に向う花道へ走り入る。面影こなしあつて、暖簾の口へ入る。とチョン／＼チヨン／＼のキッカケにて、この道具を引いて取ると、道具替る。

本舞臺、正面、小紫が部屋のかゝり。上の方、一間の床の間、違ひ棚、掛け物、花活けに夏草を活けてあり、黑塗りの箪笥。下の方、黑塗りの半長持、上に結構なる夜具、眞中に三尺の暖簾口。縁側先き、青竹の手摺り。花道の末に二階の上がり口、これより人の出入り。すべて綺麗なる仕立ての部屋のかゝり、これにて道具止まると、時の鐘打ち上ぐる。獨吟になる。爰に權八、着流し前帶の形にて、鏡臺に向ひ、髪を梳いてもらうて居る。小紫、投帶の形にて、櫛を持つて髪梳きの見得。トゞ獨吟一くさりあつて
權八　たらちねの、かゝれとてしも烏羽玉の、我が黑髪を撫でずやありけん……斯くなるべき身とは知り給はず、この權八がその髪を、千代もと撫でし親の恩、忘れし罰か今目前、世に便り無き菜にも、愛想も盡きず、以前に變らぬこの介抱。小紫、其方の心ざし、忘れは置かぬ、忝ないぞや。
小紫　エヽ、なんぢやいなア。他所々々しいそのお詞。お前まだわたしを、傾城と思うて居やしやんすか。幸い勤めのその中にも、二世と誓ひし二人の仲。此やうな僕か

な部屋の内、さぞかし氣詰まりにござんせうな。

權八　其やうに、云うてくれる其方の心ざし、ア、、思へば果敢ない事ぢやなア。

小紫　味氣なの憂き世の

二人　惡緣ぢやなア。

ト又めりやすになり、兩人ホロリとして

權八　小紫。

小紫　エ。

權八　其方は泣きやるか。

小紫　イ、エ。

權八　それでも淚が。

小紫　そりや櫛笥の、露ぢやわいなア。

權八　フウ、露であつたかなう。

小紫　權八さん、お前が常々云はしやんすには、本庄助市さんに、早う逢ひたい〳〵と云はしやんすが、ほんまに名乘り合うて、討たるゝお心でござんすかえ。

ト後へ三五平、出かゝり見て居る。

權八　ハテ、知れた事を問ふ人ぢやわいの。一度恩義にあづかつたる、助太夫どの。間違ひとは云ひながら、某が手にかけし上は、何卒助市どのに巡り合ひ、名乘り合はして尋常に、勝負をなさんと思へども、これとても某が行くへ詮議の爲、遠國なして行くへ知れず。さるに依つて、我が在所を知らさん爲、この江戸の神社佛閣へ、我が姓名を書き記したる奉納の繪馬。これとても今では、天下の網にかゝりし權八が身の上。もしも搦め捕られて梟木に晒されなば、助市どのゝ心底は、どのやうにあらうと思ふゆゑ、惜しからぬ命を斯くまで忍んで、サア、其方の世話になつて、卑怯未練に逃げ隱れ居るも、助市どのゝ手に、かゝりたいばつかりぢやわいの。

三五　敵ながらも、驚ろき入つたる御心底。すりや、そのお詞に相違ござらぬか。

權八　なんと。

ト思ひ入れ。三五平、これにてツカ〳〵と出て

三五　お見忘れ候ふか、白井權八どの。某こそは本庄助市が下部の、三五平めでござります。

權八　思ひがけなき下部の三五平。不思議にも只今この處で巡り合うたも、某が念願屆きしところ。して、助市どのには、いづれにお居やる。

三五　樣子承はつて、驚ろき入つたる御心底。當地へ供いたし、所々方々とお行くへを、探し求むるところに、爰

にもかしこにも、願主白井權八と、姓名記せし奉納繪馬、敵討つ身のよもや、あり／＼と姓名記し置くべきやうはなし、これ正しく同姓同名の人、あるまじきにも非ずとは思へども、もしやと思ふ心ゆゑ、二月餘りもこの江戸に、遍歴して探し求めし甲斐あつて、いま優曇華の、花まさりたる今日の對面。只今のお詞、逐一に、主人に申し聞かさば、さぞや喜びまするでござりませう。

小紫　ほんにマア、權八さん、お前の念願屆いて、助市さんのお行くへが知れ、さぞ嬉しうござんせう。三五平どの、最前のやうに隱したも、權八さんのお命を、一日なりとお助け申したいと、女子の未練な心。堪忍して下さんせえ。

權八　知れぬ昔は是非もなし、斯く助市どのゝお在所、知れたる上は、倶に天を戴かざる本文あれば、三五平、この由、一刻も早う／＼。

三五　ハツ、義を見てせざるは勇みなし、とは申せども折惡しき主人の瘧病。殊に今日が起り日、近頃甘へし事ながら、權八さまの只今のお詞、申し聞かさば主人の心の勵みとなつて、瘧病落ちるは目のあたり。とても の事に、斯くお目にかゝりしと云ふ慥かな證據を。

權八　成る程、尤も……夏の日に日蔭の清水を汲む時は、瘧の病ひを生ずと聞く。これ元より陰に閉ぢられ、瘧となる。いま權八が在所も知れ、日頃の怨み晴らさんと、心を陽に開く時は、本復もあらん。ソレ。

ト脇差を拔き、我が片袖を切り

紋は體を顯はす。白井の紋の切り非常。今日まで命を存らへしも、助市どのゝ身の上を、袖には思はぬ誓ひの片袖。

ト三五平に投げて遣る。

三五　チエヽ、有り難うござりまする。

ト戴き、思ひ入れあり、奥にて

面影　小紫々々。

小紫　あの聲は面影大盡。

面影　太夫々々。小紫。

ト面影出て來るゆゑ、小紫、手ばしかく行燈を吹き消す。此うち權八は長持の内へ忍ぶ。三五平は下座へソツと入ると合ひ方。

小紫　お主はなぜ灯を消しやつた。

小紫　サア、これはな。オヽ、それ／＼、面影さん、見やしやんせ。田甫の方からチラ／＼と、螢が、なんと可愛

らしいぢやござんせぬか。

面影　フウ、お主は、螢を見ようと思つて、それで灯を消して、暗闇で居るのか。

小紫　アイ、灯の消えて尊き螢かな。とは面白い句ぢやないかえ。

面影　成る程、燈火の消えて尊き螢かな。自體暗闇と云ふものはよいものよ。

ト長持より權八、ちよつと顏を出す。

小紫　ア、、出まいぞ〳〵。

トこれにて權八引込む。

面影　小紫、何が出まいぞ。

小紫　サア、斯うして居ては、螢が出まい〳〵と、云ふ事いなア。

面影　ハテ、おぬしやア、きつい螢が好きだの。

小紫　アイ、好きぢやわいなア。

面影　螢が好きなら、仲の町へ取りに遣らう。

ト手を打つ。仲居お濱出て來る。

はま　オヽ、暗、なぜに小紫さんのお部屋へは、灯をともさぬぞいの。

面影　イヤ、暗いのが小紫が趣向サ。

はま　ホウ、こりやアお珍らしい、大盡さまとお二人でしつぽりと、こりや、お樂しみでござんすな。

小紫　アイ、大抵樂しみな事ぢや、ござんせんわいなア。

はま　お呼びなさんしたは、何の用ぢやえ。

面影　お主は大儀ながら、仲の町へ行つて、蟲賣りの螢を總仕舞ひにして來てくりやれ。

はま　アイ〳〵、畏まりましたわいなア。

トお濱入る。

面影　コレ、小紫、お主が好きだとある事ゆゑ、いま螢も取りにやつたが、今宵はなんと灯無しに、蚊帳の内へ、螢を放して樂しまうではないか。

小紫　そりや、どうなりとお前一人で、樂しんだがよいわいなア。

トつんとして屈托の思ひ入れ。

面影　コレサ、お主が螢が好きだと云ふから、今取りにやつたに、何か又爵いだの……エヽ、聞えた。おぬしやア、また權八が事を思ひ出したのか。コレ、小紫、おぬしやア、あの權八を大事にするが、彼奴はお尋ね者だよ。なんぼお主が戀しがつても、もう、爰へ來る事はならぬ。人中へ面出しをすると、直ぐに踏ん縛られるワ。

ト權八、長持の蓋を明け、ズッと出ようとする。

小紫　アヽ、コレ〳〵、出ては惡い〳〵。惡い程にな。

ト思ひ入れ。

面影　小紫、何が出て惡いよ。

小紫　サア、それはな。オヽ、それ〳〵、斯う暗うして居ては鼠が出やう。出ては惡い〳〵と云うたのぢやわいなア。

面影　イヤ、鼠が出りやア、おれが叩き殺すから、怖がらずとマア、此方へ寄つて居や〳〵。

小紫　イエ、モウ、これがようござんすわいなア。

面影　エヽ、コレ、さうツン〳〵せずと、おれが云ふ事さへ聞けば、直ぐに身請けして、斯うして置かぬがなア。

ト小紫こなしあつて

小紫　お前、身請け〳〵と云はしやんすが、わたしを身請けして、マア、どこへ連れて行かしやんすえ。

面影　知れた事だ、おれが在所へ。

小紫　お前のお國は、遠うござんせうの。

面影　よく知つて居るの。

ト後へ源之丞、以前の形、雪洞を袖に隱し出かゝりて、樣子を聞いて居る。向うより十右衞門先に、野袴の捕り手その外、侍ひ四人附いて出、ソッと窺つて居る。

小紫　わたしや、なんぼお前に請け出されても、寂しい所は嫌ぢやわいなア。

面影　それにやア、打つてつけた所だ。城下續きの町半分、自由の足りる事は、この江戸も同じ事よ。

小紫　そして、わたしや普請が好きぢやに依つて、住居はわたしが注文するぞえ。

面影　そりやアモウ、どうなりと御入用次第サ。

小紫　一體數寄屋造りに、こんもりと。

面影　それ〳〵、お主と二人居るにやア、こんもりとした所がいゝのサ。

ト餘念なく嬉しき思ひ入れ。

小紫　前通りは磨き葭の一重垣。わたしや萩が好きぢやに依つて、萩一種の庭にして。

面影　萩一種もよからうが、見つきの所は、皂莢のずんぎり。

小紫　その脇には雪見形の燈籠から、段々傳ふ飛石傳ひ、敷居へかける手水の水。

ト四建目の名月屋敷の普請の通りに云ふ。面影ギョッとする思ひ入れにて

面影　ヤ。
ト思ひ入れ。
小紫　手頃の飛石。
面影　何がどうした。
小紫　なんと、面白い住居でござんせうがな。
面影　先刻にから、普請の注文すりやア、某が身の上を。
源之　赤堀源吾であらうがな。
ト雪洞を差つける。
源吾　さてこそ敵の。
ト云はうとする。面影、雪洞を打ち落す。暗闇となると、手探りにて面影、奥へ入る。
源之　妹、續け。
小紫　合點でござんす。
ト両人、面影が後を追ひ駈けて入る。この物音にて捕り手頭志賀幸七、ツカ／＼と來て
幸七　ソレ。
ト捕り手、バタ／＼と内へ入る。
捕手　ヤア、風を喰つて逃げ失せました。
十右　怪しいはあの長持。
皆々　ソレ。

ト皆々長持へかゝる。奥より長兵衛、以前の形にて飛んで出て、皆々を投げ退け、長持の上にしやんと乘る。
長兵　こりやア、なんとなされまする。
幸七　人殺しの詮議をするのだ。
長兵　人殺しの詮議なさるに、なんでこの長持へ手を掛けるのだ。
十右　小紫に由縁のある奴、その長持の内に隠れたに違ひない。邪魔せずと、長兵衛、そこ退くまいか。
長兵　イヽヤ、退かない。小紫が今宵の客は、この長兵衛だ。さすればこの部屋は長兵衛が城郭も同然。聊爾ありや、どなた様でも、何奴でも相手嫌はぬ。お相手になりませうか。
幸七　ヤア、慮外の一言。これなる十右衛門が人殺しの訴へ。即ち證據はこの片袖。
ト以前源之丞が切りし片袖を出す。
長兵　ヤア、その紋所は。
十右　なんと、慥かな證據であらうが。
長兵　サア、そりやア。
志賀　面倒な。ソレ。
ト下知する。皆々かゝる。立廻りあり、奥にて

三五　お騷ぎあるな方々。丸に非箭の紋所、人殺しの科人、討取りましてござりまする。

ト三五平、首を以前の袖に包み、役人の前へ持つて出る。

長兵　ヤア、こなさんは。

三五　只今奥座敷にありし所に、理不盡に座敷を乘り越す狼藉者。引ツ捕へ樣子を見るに、片袖ちぎれし衣服を荒し、白井權八と名乘り、手詰めの詮議。見遁がしくれよと只管申せど、一方ならぬ天下の科人、繩掛けんと存ぜしところ、手に餘りしゆゑ是非に及ばず、首に致してござりまする。イザ御實檢下されませう。

長兵　ナニ、權八を手に懸けしとな。エヽ。

ト思ひ入れ。

十右　お役人樣のお目通りだぞ。

トこれにて長兵衞、チツと控へる。

幸七　お尋ね者の權八を、討取りしとは、出かした〳〵。

ト人相書と引合せ

三五　生顏と死顏と、相好も變ると申せば、とくとお見屆け下されませう。

幸七　如何にも、人相書と引合せ見るところに、額のかゝり、面差まで、寸分違はぬ。殊に人殺しの證據となつたる、この片袖とこの片袖。

ト二つの袖を取つて

こりや、人を害めし科人も、白井權八に相違はない。

十右　イヤ、その人殺しは外にござる。違ひました。

幸七　人殺しが違つたとは。

十右　外にござりまする。

ト三五平飛んで出て詰め寄り

三五　待て、十右衞門とやら。こりやア人の手柄を羨やんで、妨げするのか。慥かな證據の片袖。符合なしたる上からは、外に人殺しがあるとは、サア、それを聞かう。返答次第手は見せぬぞ。

十右　でも、人殺しは。

三五　なんと。

幸七　例へ外に人殺しあるにもせよ、其方が慥かな證據と持參なしたるこの袖と、兩袖揃ふ首級の片袖。穩便に濟ますのも公の政道。天下の尋ねとなつたる不敵の權八。人を害めしに違ひない。兩人ともに褒美は追つて。

三五　すりや、お役人樣には。

幸七　この首級を役所へ持參する。家來參れ。

四人　ハツ。
　ト時の鐘にて、役人、向うへ入る。十右衛門、うつとりとして
十右　權八が首で、人殺しの科人が濟んでは、源吾さまの。
三五　なんと。
十右　こりや斯うしては居られない。
　ト逸散に奥へ入ると、時の鐘にて、長兵衛、直ぐに三五平に切りつける。立廻りにて煙草盆にて受け留める。
三五　待て。逸まるまいぞ。
長兵　ヤア、臆れしか三五平。飽かぬ夫婦の縁さへ切つたこの長兵衛が、性根玉を見違へたか。助市どのに逢ふまでは、この長兵衛が身に替へても、世話せにやならぬ權八どのを、よう首にして渡したな。
三五　待て。それには段々様子があるぞ。
長兵　イヤモウ、様子も譯も絲瓜も、聞く耳持たぬ。
　トまた切りつける。權八、長持から出る。
權八　ヤレ、待たれよ、長兵衛どの。
　ト長兵衛、これを見て膽を潰し
長兵　ヤ、ヽヽ、すりや、いま渡した首は
三五　妹お濱が首でござるわいの。
　ト思ひ入れ。
長兵　ヤア。
三五　權八さまの手詰めの御難儀、もしも御身に過ちあらば、助市さまと云ひ、權八さまのお心ざしも無足になる。如何はせんと思ふに幸ひ、面差似たる妹お濱、先ツ斯く斯くと仔細を話し聞かせたれば、去られて居ても長兵衛どのゝ、身に替へてお世話をなさる權八さまの、お爲になる事ならと
　ト思ひ入れ。
長兵　覺悟いたして潔よう、お身替りに立ちましたか。
三五　如何にも。これを功に長兵衛どのへ詫び致して、未來の縁をと申したれば、につこりと笑ひまして。
長兵　出かした女房。半坐を分けて待つて居ろよ。
三五　その一言が、千部萬部の經よりも、遙かにまさる追善供養。
權八　我れに代つてくれたるばつかりに、この權八が念願屆き、これより直ぐに助市どのゝ旅宿へ行くとも、敢へて咎める者も無く
三五　主人の本望遂するも、妹が覺悟の最期ゆゑ。
權八　おしつけ未來で逢ひませう。

三人　南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト思ひ入れ。夜中の鐘を打つ。
權八　あの鐘は。
長兵　最早、眞夜中。
權八　これより直ぐに助市どのへ、旅宿へ立越え潔よく。
長兵　武士の本意を。
ト互ひの別れ、ホロリとする思ひ入れ。
權八　云ふにや及ぶ。三五平、案内。
三五　ハツ。
ト後より十右衛門出て
十右　權八、動くな。斯うあらうと思つて、お役人樣へお願ひ申して、裏二階から窺ふところ、推量に違はぬ、お尋ね者の權八。臍廻せ。
トかゝる。長兵衛、十右衛門を引廻す。
三五　ソレ。
長兵　爰構はずと、ござれ。
三五　おさらば。
ト三重になり、權八、三五平、向うへ走つて入る。舞臺は解れて、兩人立廻りあつて、よろしく見得になる。鐘ゴン／＼の拍子にて、この道具をぶん廻しで廻す。

本舞臺、正面卒塔婆垣、上の方枝垂れ柳。すべて大雲寺の後のかゝり。眞中に赤堀源吾、白無垢の白股引、白鉢巻、白襷の形にて、刀を横に構へて立つて居る。左右より源之丞、八重梅、刀を差しつけて抑へて居る。この見得、蛙の聲、時の鐘にて道具とまる。
源之　近江の國佐々木の執權、岩井右内義清が倅、同苗源之丞義春。
八重　同じく妹八重梅。
源之　年來狙ひし親の敵、赤堀源吾。
八重　尋常に
兩人　勝負々々。
源吾　うぬら、返り討だ。觀念なせ。
兩人　覺悟。
源吾　返り討だ。
三人　どつこい。
トこれより禪のツトメになり、三人、華々しきタテよろしくあり、仕組み危ふき事どもいろ／＼あつて、ト源吾を仕留め、止めを刺して

兩人　怨みの刃、思ひ知つたか〳〵。

トばた〳〵にて長兵衛走り出て

長兵　御兄弟様。

兩人　年來の本望、今日只今。

長兵　オヽ、めでたい〳〵。

ト三人、見得よく並び。

日もばんじますれば、先づ今日はこれぎり。

トどん〳〵〳〵〳〵と打出し。

幕

傾情吾嬬鑑（終り）

祐經鬼王時代蒔繪對面盞　鎌倉風宴榮
祐成時致往昔模樣馴染盞

袖ひちて結びし水のこほれには春立つ風や德兵衞がお房と深き筒井筒桐の一葉に秋の雛二度の嫁入を駿河なる三國一の開帳參りお染が供に久松は古い趣向の瓦町替らぬ名のみ鴈金の天路と聞けばなつかしき迦陵頻伽の馴なれし孔雀絞の御仕着に跡着の錦こき雜て日本が花土手の曙

江戸富士陽曾我

五節句
五日替
二十五番續



再演當時の錦繪

江戸富士陽曾我

油屋の場

淨瑠璃「花頃替十七夜待」常磐津連中

役名　油屋娘、お染。同、丁稚久松。同母、おつや。同手代、善六。同、源右衛門。女藝者、お桑。辻山郡司。仲人、合羽屋六郎兵衛。女髮結ひ、お政。久松親、久作。稻荷九藏實ハお染兄多三郎。山家屋佐四郎。

本舞臺、三間の間、上の方に押入れ、正面暖簾口に、油屋と書いたる半暖簾を掛け、向ひの壁に質札帳面を掛けてあり、門口据ゑ物。爰に油屋娘つや、鰹節をかいて居る。善六、手代の形にて、膾を切つて居る。源右衛門、手代の拵らへにて行燈を貼つて居る。九助、同じく手代にて、白木の臺に鯣を載せ持つて居る。通り神樂にて幕明く。

九助　申し阿母さん、これはお仲人の、合羽屋六郎右衛門さまから參りました。

つや　オヽ、ノヽ、後程お目にかゝりませうと、禮云うて置かんせい。コレ源右衛門、行燈を貼つて仕舞うたら、奥の障子も切貼りしてたも。善六、蛤は買うて置いたか。

ト九助、臺を片付け奥へ入る。

善六　蛤もさゞえ熨斗も、みんな揃つて膳棚へ置きましてございますが、こんな叉、ぐりはまな事もないものだ。今夜此方のお染さんへ、聟か入るとは思はなんだ。

源右　ソレサ、大旦那は伊勢參りのお留守といひ、何もこんなに婚禮を急ぐ事は、ありそむないものだ。

つや　成る程、其方衆はさう思やるは尤もなれど、あの山家屋の佐四郎どのは、男氣な人ゆゑ、旦那どのが見立てて、聟に貰ふ約束は去年の事。この春は早々に、此方の内へ呼び寄せる筈なれど、惣領の多三郎が事に付いての揉め合ひゆゑ、今まで婚禮も延び／＼になつたが、知りやる通り、年はゆかねど小緻なお染、もしひよんな噂でもあつては、佐四郎どのへどうも立たず、親仁どのは留守なり、多三郎は勘當する。内の世話にホッとしたゆゑ、早う聟どのを内へ呼んで、ちつとは樂せにやならぬわい

の。

善六　源右衞門、聞いたか。何處の親でも子には目のないもの。悪い噂のないうちに、聟どのを入れるとサ。この油屋の手代が、生優しい事で廻されるものぢやアない。心も知れぬ聟を取らうより、子供のうちから勤めて居る、發明な者がいくらもあるに、それを省いて佐四郎に添はせるとは、こんな腹の立つ事はない。

ト大根を無性に刻む。

つや　コレ／＼善六、今宵聟どのを呼ぶのが、なぜ其方は其やうに腹が立つのぢや。

善六　ナニ、聟どのが入る事を、腹が立つものでござります。

つや　それでも今、腹が立つと云うたぢやないか。

善六　腹が立つと云うたはこの大根、心があつて鱠が、ろくに打てぬゆゑ、腹が立つと云つたのだ。

源右　この又行燈も行燈だ。紙に無駄ばつかり出て、貼れるものぢやアない。こんな事は丁稚の役だ。お染さんのお供に、久松を遣らずとも、内で煙草盆の掃除でもさせたがよい。

善六　久松と云へば、あのお染さんは、今日は十七夜待ちだから、觀音さまへちよつと參つて來ると云つて、早朝飯で行かしつたが、如何な事でも、もう歸らつしやりさうなものだ。今夜聟様がござると云ふに、あの久松と二人連れで、何處を歩いて居る事だか。イケ馬鹿々々しい。

つや　成る程、其方がさう云やれば、今朝疾に出て、觀音さまへ參るばかりに、其やうに暇の取れる事はあるまいが、この頃聞けば、きつう悪い犬が多いとの話し。戻らぬうちは、これが又案じられるわいの。

善六　それ／＼、この頃はその悪い犬が、大抵流行る事ぢやアござりませぬ。しかも前髪のある九郎犬サ。大方今頃は、じやらくら／＼と、道草をして居るでござりませう。

トおつや、聞かぬ振りをして居る。

つや　イヤモウ、おしつけ戻るであらう。其方衆は晩の支度を早うしや。

源右　先づ行燈はこれでよしと。鰹節は私しが掻きませう。

ト鰹節箱を引寄せ、鰹節を掻く。善六、提げ籠を持つて出て來り

善六　ドリヤ、おれが芋の皮でも剝かうか。

ト賑やかな出の唄になり、花道よりお政、髪結ひの拵

らへにて、小さな櫛疊を抱へ出て來る。後よりお粂、
女藝者の形にて出て來り、花道にて

くめ　コレイナアお政さん、其處まで一緒に行かうわいなア。

まさ　オヽこりや、誰れかと思うたればお粂さん。お前はマア、何處へ行かしやんすぞいなア。

くめ　サア、お前も知つて居やしやんす通り、あの油屋の久松さんに逢はねばならぬ用があれど、遂に一度逢うて下さんせぬゆゑ、佐四郎さんに頼んだれば、それと明かしては悪いに依つて、なんであらうとわしが相方分になつて、油屋へ行けと云うてゞあつたさかい、油屋へ行くわいなア。

まさ　それは幸ひな事。わたしも油屋から呼びに來たに依つて、今行くわいな。

くめ　お前もアノ、油屋へ行かんすかえ。

まさ　お染さんの髪揚げに行くわいな。お前の髪は誰れぢやえ。

くめ　中通りのお民さんぢやわいなア。

まさ　お前にはその髷が、いつち好う似合うてあるぞえ。

くめ　昨日結うたのぢやに依つて、いつそ、損ねてしまうたわいな。

まさ　そりや足元が悪いゆゑ。

くめ　どうしたえ。

まさ　轉ばぬやうに、靜かにござんせ。

くめ　なんのこつちやいなア。

ト舞臺へ來り

まさ　今朝程はお人でござりました。

トお政、内へ入る。

つや　お政どのか。早う來て下さつたの。

くめ　叔母さん、この間はお世話になりました。

つや　オヽ、こりやお粂さんか。ほんに一昨日は碑文谷で、大きにお前のお世話になりました。

くめ　ナンノイナア。わたしこそお前と一緒に戻つたゆゑ、大抵内の首尾も好かつたわいなア。

善六　ヤア、お政どんにお粂坊、つん〳〵連れ立つてお出でたの。いつも〳〵二人ながら、すんがりとしたものだぞ。

源右　ソレサ、この中へ、お染さんを一枚入れると、そこらあたりが光り輝くワ。

まさ　ほんにお前方は、いつも〳〵御せうらくな事ではあ

るぞ。お染さんはお内かえ。

善六　聞きなさい。お染さんは觀音さまへ、早朝飯で出掛けさつたが、まだ歸りなさらない。そのお供はあの久松よ。

くめ　エ。あの久松どんと、たつた二人連れでかえ。

善六　たつた二人連れで、さぞ今頃は手に手を取つて、奥山の貸座敷で

くめ　どうしたえ。

善六　田樂でも食つて居るであらうと云ふ事サ。

まさ　そんならお染さんは、淺草へお出掛けなされたとかえ。

つや　ア、イ、今朝出て行きましたわいの。

まさ　それなら、今朝疾に來るものを。

つや　イヤ、髪は遲い程好いわいの。晩には取分け美しうせにやアならぬわいの。

まさ　ほんに、見ればさつうお賑やかな事。お客でもござんすかえ。

善六　客の段か、今夜はあのお染さんの所へ、聟がござるゆゑ、番頭さまとも云はれるものが、料理番やら板前やら、大抵忙がしい。

源右　ほんにお政どんも、ちつと手傳つてもらはずばなるまい。

まさ　そりやほんに、おめでたい事でござんすな。その聟さんは、何處からお出でなさんすえ。

善六　聟さんと云ふは知れた事、山家屋佐四郎さまサ。

まさ　エヽ、アノ佐四郎さんが。そりやほんの事かえ。

善六　お政どん、なぜ佐四郎さんと聞いて、そんなに膽を潰す。

まさ　エ。

善六　怪しいぞえ。

まさ　こりや何ぢやわいな。餘り急な事ぢやに依つて。

くめ　それ〳〵、一昨日碑文谷で逢うた時には、其やうな話しもなかつたが、佐四郎さんに限つては、よもや其やうな心では、ありそもないものぢやが。

善六　お染坊、さう云ふは、ほんの人前、心の内ぢやア、さぞ嬉しからうな。

くめ　そりや、なぜにえ。

善六　佐四郎どのはつけたりで、誠はあの久松に、逢ひたい心であらうがの。

くめ　又しても其やうな事。措いておくれ。

善六　如才のないものだぞ。
くめ　知つたか。
まさ　ほんに、あの佐四郎さんが、お粂さんの聟さんにならんせうとは、夢にも知らなんだ。男と云ふものは、ちつとも心は許されぬものぢやわいな。アタ腹の立つ。
トおつやを見て
ほんにお前は、さぞ嬉しうござりませうな。
くめ　叔母さん、おめでたうござんすわいな。
つや　イヤモウ、ちつとも早う祝言させ、夫婦仲よう暮らすのを見やうと思へば、此やうな嬉しい事はござんせぬ。ほんにお粂さん、好い處へ來て下さんした。幸ひ今宵の酌人が無うて困つて居た。お政どのと一緒に、どうぞ酌して下さんせいな。
くめ　エ、アノわたしら二人に。
まさ　祝言の酌せいとかえ。
つや　アイ、頼んだぞえ。
くめ　客人の取持ちなら、どうなと仕樣はいくらもあれど、祝言の座敷と來ては、一向なものぢやわいなア。
まさ　ソレイナア、わたしらとても同じ事、其やうな晴れの座敷へ、ついに出つけぬゆゑ、恥かしながら。
つや　ハテ、其やうなむづかしい事はいらぬわいな。ほんの内祝言ぢやに依つて、杯さへすりやよいわいな。
善六　これ／＼、杯が面倒なら、あほつきりで始めるがいい。マア、ちよつとおれが聟にならうから、お前、嫁になつて、あの子に酌をさせて、皆床入りの段まで教へてやるワ。幸ひ爰に銚子杯。サア、阿母樣、あの子に教へておやりなされませぬ。
つや　イヤ、わしが嫁入りしてからは、四十年程になるゆゑ、杯の仕樣も忘れた。思ひ出して、後方教へて進ぜう程に、二人ながら奥へ行て、膳椀でも出して置いて下さんせ。
まさ　それ／＼、勝手向きの事ならば、やつたものではござんせぬ。源右衛門さんも奥へ來て、手傳うて下さんせ。
つや　それ／＼、源右衛門、奥藏の膳椀を出して進ぜい。
源右　畏まりました。
くめ　そんなら叔母さん。
兩人　後程、お目にかゝりませう。
ト唄になり、お政、お粂、源右衛門、奥へ入る。花道より辻山郡司、侍ひの形にて出て來り
郡司　油屋太郎兵衛宅は、これかの。

善六　左樣でござります。

郡司　許しやれ。

ト内へ入る。善六、思ひ入れあつて

善六　あなた樣は、どなたでござります。

郡司　身共は梶原が家來、辻山郡司と申す者ぢや。

善六　兼ね〴〵太郎兵衞お噂を致しました、郡司さまとな。

郡司　左樣。

善六　モシ、阿母樣、郡司さまがお出でなされました。

つや　これは、ようこそお出でなされました。太郎兵衞事は、お心安いと承はりましたが、私しは間違ひまして、まだお目にかゝりませぬ。

郡司　さては其許は、太郎兵衞どのゝお內儀か。

つや　左樣でござります。

ト善六、茶を酌んで來り

善六　一つお上がりなされませ。

郡司　イヤ、構はつしやるな。

善六　早速ながら承はりませうは、あなた樣には、油屋太郎兵衞には、如何やうなる御用の筋で、お出でなされましたな。

郡司　イヤ、身共が今日これまで參つたは、一昨日太郎兵衞どの、久松を以て餘儀ない賴みゆゑ、用立てました金子百兩。身共、急に入用の儀ござるゆゑ、氣の毒ながら只今此方へ、返濟いたしては下さるまいか。

つや　エヽ。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

郡司　イヤサ、一昨日、久松を以て太郎兵衞どのに、金子百兩貸して遣はした辻山郡司。その金子を返しておくりやれと云ふ事サ。

つや　ハイ、何とも合點の行かぬあなたのお詞。勿論太郎兵衞、伊勢參宮いたした留守うちは、女主の身代ゆゑ、費えがあつては濟まぬと存じまして、隨分始末いたしまして、人樣の物借りぬやうに致しまするが、今あなたの仰しやるには、百兩と云ふ大枚な金、貸したとの事なれど、此方には一向覺えがござりませぬ。

善六　左樣でござります。阿母樣は兎も角も、番頭役の私しが、存じませぬ事。と申して、形のない事を仰しやりやうはなし、使ひは久松と仰しやるからは、あれに承はりましたならば、分りますでござりませう。どうぞ久松が歸りまするまで、お待ちなされて下さりませ。

郡司　そりやハヤ、事と品とに依つたなら、待つまいもの

でもないが、久松が歸るまでにも及ばない。その爲に證文を取つて置いたれば、阿母、其許に掛合ひませう。

つや　只今その證文を見ましたところが、肝心の使ひに參つた久松は留守。これとてもおしつけは戻りませう程に、どうぞそれまで。

郡司　待つて遣はさう。

善六　それは有り難う存じまする。歸り次第に承はり合せ、この善六、御返事申しませう。先づそれまでは奥の一間で、何はなくとも御酒一つ。

郡司　心遣ひは御無用でござる。阿母、御案内。

つや　斯うお出でなされませう。

ト おつや、先に善六、煙草盆を提げて奥へ入る。直ぐに前彈にかゝる。この道具を後へ引いて取る。下座より常磐津連中を引出す。舞臺一面、櫻山吹なり。

〽可愛らしいと云うたが無理か、可愛らし、今を盛りの瀧櫻、咲きも殘らず散りもせず、しかも根〆めは山吹の、花色衣ぬしや誰れ、一人娘の二人連れ。

ト この文句切れると、花道よりお染、振り袖着流し、抱へ帶の形にて、扇を持ち出て來る。後より久松、着流しい形にて、甲斐絹の風呂敷包みを肩に掛け、突袖なして出て來る。

〽お染〳〵とあいたてなきの、しどけなりふりほう〳〵と、わやくな風に誘はれて、着つゝ馴れにし久松が、思ひを包む風呂敷も、心も解けた抱へ帶、締めつ緩めつ緩めつ締めつ、手管白齒の生娘も、誰が敎へねどいろ〳〵に、取なり顏き葉々の、袖や袂にひら〳〵と、とまるは菜種か山吹の、露が嫌なら手にとまれ、せめて暫しは道草の、近い所もくる〳〵と、廻らば廻れ小車の、いとうら若き青柳の、結ぶ緣は淺けれど、淺草よりの戻り道。

久松　これはしたり、お染さま、ちつと離れてお歩きなされませ。淺草の地内から爰まで來る道すがら、大勢人が氣を付ける事ぢやアござりませぬ。それに又、今日は十七夜待、觀音さまへ參詣の群集、ひよつと近所の衆にでも逢ひましては、惡うござりますわいの。

そめ　サ、そりやさうぢやけれども。

久松　けれどもなら、ちつとも早うお出でなされませ。今も申す通り、近所の衆の目はしにかゝりましては、云ふに云はれぬお前が身の上。世間へパッとせぬうちに、この久松を思ひ切り、佐四郎どのと、隨分仲よくお添ひなさるが親御へ孝行。私しとても同じ事。小さい時からお

世話になり、御恩は重い
〽石原の、石より堅い親方の、内外の衆の目を掠め、忍び忍びの不義の科、さぞや憎しと世の人の、唄ふ我が身は數ならず、返す〴〵も我が事は、思ひ切つてと口籠る。
そりや聞えぬぞや胴慾な。そもや二人が仲々は、ほんに歌舞妓や淨瑠璃の、せりふ文句に作られぬ、その馴染めは飯事の、二枚屏風の蝶番ひ、つい轉び寢は風長閑、外に殿御は持つまいと、觀音さんへ幾度か、無理な願ひも女子の操、此方の心は思はいで、思ひ切れとはこちやいやいや、二人の夫に見えなと、女今川庭訓にも。
〽書いてあるではないかいな。なんぼ殿御の癖ぢやとて、酷いつれない心やと、空に知られぬ花曇り、拗ねても見せる戀の癖。
〽オツと泣くまい。今云つたのはみんな嘘。お前は定めし佐四郎さまを、思ひなされるお心と、疑うたのもいとしさから。
そめ　そんなら疑ひ晴れたかや。
久松　晴れた段か、御覽じませ、日本晴れが致しました。また遲うなりましたなら、阿母樣のお案じ。サア、道々お話し致しませう。

そめ　サア、早う内へ去ぬ程に、必らず變つてたもんなや。
久松　どうして變るものでござります。サア〳〵、お立ちなされませ。
〽つい立ちながらこの程の、憂さを語らんこなたへと、手に手を取り〴〵急ぐにも、吾妻の橋も緣の端、斯うなる中の鄕ぢやとて、やがて小梅の土手傳ひ、いつ身二つに業平を、後に見なして。
ト合ひ方になり、お染、久松東の歩みへかゝる。太夫を西へ引き、元の油屋の道具になる。
〽思はずも、我が家の軒の瓦町、見付けられては身の上と、互ひに目顏で戀の智慧、暫しは門に休らひぬ。
ト此うち兩人、門口へ來り
久松　兎やかう云ふ間に、もう内へ參りました。サア、お入りなされませ。
そめ　モシ、爰は内かや。なぜ此やうに近いぞいの。まだ日は高い。もう一度向う河岸を廻らうぢやないかいの。
久松　何を仰しやります。さぞ阿母樣がお待ち兼ねでござりませう。サア〳〵内へ。
ト兩人、内へ入り
そめ　オヽ、辛度やの。

久松　ちつと擦つて上げませうか。
ト足を擦りにかゝる。
そめ　オヽ、勿體ない、わが身に足を擦らせては。
久松　どう致しまするえ。
そめ　罰が當るわいの。
久松　また其やうな事を仰しやりまするか。
トじやらついて居る。
〽子は戀に、親は子ゆゑに胸の闇、久松が親久作は。
ト久作、淺黄の脚絆草鞋にて、風呂敷包みと藥苞とを竹に付け、これを擔げ杖を突いて出て來る。
〽心に思ひ八重櫻、一荷に擔ふ藥苞は、肩にかすげの堅親仁、心ばかりのよはひ草、とぼ〳〵杖を突くも髮、片瀨村より花の浪、爰も寄るべと來りける。
ト久作、舞臺へ來て
久作　ちと御免なされませ。先づはお變りもござりませぬか。
ト互ひに顏を見合せ
久松　ヤア、お前は親仁樣。
久作　其方は久松か。
兩人　これはしたり。

久松　思ひがけもない處へ、どうしてお出でなされました。
久作　餘り旦那へ御無沙汰になるゆゑ、來て見れば、其方もまめで、嬉しい〳〵。
久松　親仁樣にもお達者で、おめでたう存じます。
久作　時に、早速ながら、阿母樣には。
久松　隨分御機嫌よう、お出でなされまする。
久作　して、お娘御のお染さまは。
久松　ハイ、お染さまは。
久作　お染さまは。
久松　つい其處に。
ト久作、よく〳〵見て
久作　ほんに、お染さまであつた。
そめ　久作どのかいの。
久作　ヤレ〳〵、大きうおなりなされたの。先づ〳〵御機嫌ようお出でなされて、おめでたうござりまする。
そめ　アイ、ようござんしたの。
久作　ハイ、餘りようも參りませぬ。私しは阿母樣へ、久松がお暇を貰ひに參りました。
そめ　エヽ、アノ久松が。
久松　お暇を貰ひに。

久作　遥々在所から來たのぢやわいの。
久松　モシ、親仁樣、なぜこの久松をお暇貰ひ、在所へ連れて行かうと仰しやりまするぞ。
久作　何ゆゑとは久松、おのれが心柄ぢやわやい。
久松　モシ〳〵、變つた事を仰しやりまするが、私しが、どう致しましてござりまする。
久作　合點ゆかずば合點のゆくやうに、この久作が云うて聞かさう。其方はお主の恩が重いか、親の恩が重いか、それを知つて居やるか。
久松　親仁樣とした事が、改まつた事のお尋ね。親の恩は深けれど、分けて主人の御恩は重いではござりませぬか。
久作　成る程、さうぢや〳〵。モシ〳〵お染さま、あの久松が只今申しました事、お聞きなされて下さりましたか。兩親の恩より、お主樣の御恩が重いと申しまするが、奇特な者でござりませぬか。
そめ　それ〳〵、モウ常から優しいあの久松。母さんの事も大抵や大方、大事にしてたもる事ではないわいな。それぢやに依つて親達の事も、ほんに大事に思やらうわいな。
久作　左樣でござりまする。そんならお染さまも、久松が事は。
そめ　優しい者ぢやと思うて居るわいな。
久作　コリヤ久松、あのお娘御樣にも其方の事を、優しい者ぢやと仰しやるが、定めて其方もお染さまの事は
久松　ハイ、結構なお方でござりまする。
久作　さうであろ〳〵。お染さまには、あの久松が、お氣に入つて居りまするか。
そめ　氣に入つた段かいの。
久作　そんなら久松も、お染さまが。
久松　有り難うござりまする。
久作　お染さまにも。
そめ　可愛いわいの。
久作　そんなら其方も。
久松　おいとしう存じまする。
久作　そんなら互ひに
そめ　思ひ
久松　思うて。
久作　憎い奴の。
ト膝を立て直して、久松へ詰め寄る。
久染　エヽ。

久作　知るまいと思ふか。この頃の世間の噂。鎌倉までも隱れない、油屋の一人娘のお染と、内の丁稚の久松と、忍び／＼の寢油と、歌祭文に作つて、世間で唄ふを、この久作が聞くまいと思うか。

久松　モシ／＼親仁樣。其やうな事は、この久松が身に取つて、覺えがござりませぬわいの。それは定めて

久作　云ふな／＼。コレ／＼、慥かな事は阿母樣のこの御狀。

ト懷中より狀を一通取出して

コレ／＼、この阿母樣の御狀に、久松に意見してくれいと。おのれゆゑに、大事の／＼のお娘御樣を、疵物にされても、お慈悲深い阿母樣、この久作をお頼みなされて、内證でこの御狀。何の事かと思うて、封を切つて讀んで見た時は、ほんに呆れて、後の文言が何を書いてあつたやら、讀まれぬ程であつたわいやい。お大切な娘御樣をちよろまかして、もう今月が四月とやら、五月とやら、大外れた事を、おのれは仕出し居つたな。コレヤイ。

〽明日をも知れぬ老の身の、何樂しみに存らへて、未來の罪を作らうぞ、せめておのれを成人させ、人間らしくなり居らば。

草葉の蔭に居る母や。

〽この久作が亡き後の、命日忌日の。

〽とひ弔ひ、香花取つて貞實の、我が子の回向受けんぞと、思ひし甲斐も情なや。

恩を仇にて阿母樣へ、よう御苦勞をかけ居つたな。おのれがやうな者を、子ぢやと思うて育て上げ、奉公に出したかと思へば、腹が立つて／＼、なんと阿母樣へ申し譯せうぞ。ようも／＼お染さまを、疵物にしたな。エヽ、おのれはな／＼。

〽思へば口惜しい腹が立つ、これこの胸に鑪をかけ、瞋を猛火で燒くやうな。

天命を知れ。久松やい。

〽不孝な奴とは思へども、血の筋は捨てられぬ、親の心を思ひやれ、おのれも一生子で居ろか、一度は親にもなり居らう、えゝ、憎い奴とは思へども、可愛らござるとばかりにて、先立つ涙はら／＼と、袂を絞るばかりなり。久松も今更に、親の嘆きを思ひやり、膝をも上げず忍び泣き、聞いてお染は顏打赤め、どう云うてよからうやら、心で心が愚痴になり、出雲とやらで神さんが、結

ぼしやんした縁ならば、世間を晴れて久松を、なぜ添はさせて下さんせぬ。生中縁を結ばれて、今更云ふに岩田帶、お主樣ぢやと云はるゝが、ほんにこの身の憂さ辛さ。なんの因果でお主に生れ、樣と云ひたい殿御をば、常に斯うしやどうしやと、口では云へど心では、明暮れ拜んで居るものを、あた鈍な、女夫にならにやこちや嫌と、娘心のあどなさは、若紫の色見えて、涙に戀や増るらん。

ト善六、奧より出て

善六　ナ、これはお染さん、歸りなさつたか。阿母さんも善六も、長くなり煖かくなり。大抵待つた事ではない。久松、さぞ樂しみであつたらう。

ト久松、思ひ入れ。

今まで何處へ入つて居た。何處の國にか早朝飯で出掛けて、觀音さまに、何をして居た。

トお染、云ふなと云ふ思ひ入れ。

云ふなとあれば云ふまい程に、お染さん、コレ〳〵。

ト文を出す。お染、顏を背ける。久松、見えぬ振りをして上の方へ行く。お染は門口の方へ段々寄る。善六は久松の方へばかり目を付けて、思はず久作が前へ文を出す。

久作　これは番頭樣でござりますか。

ト善六、恟りして文を隱し

善六　オヽ、久作どの、ようござつたの。

久作　何かと久松が事、お世話樣でござりませう。

善六　イヤモ、世話の段ではござらぬ。每度々々この善六に、世話ばつかり燒かせます。

久作　惡い事があるならば、隨分お叱りなされて下さりませ。

善六　イヤモ、惡い事だらけでござる。いろ〳〵話しもござるが、今夜郞どのがござるゆゑ、きつう取込んで居ますから、後に緩りと逢ひませう。

久作　今宵御祝言でござりますか。

善六　それで内は亂騷ぎだ。

久松　そんなら、いよ〳〵。

善六　サア、お染さん、早く奧へ行きなさい。

そめ　久作どの、後にや。

善六　ハテ、早う步びなさい〳〵。

〽後に〳〵を目で知らせ、お染は奧へ

ト心を殘すお染を、善六、無理に連れて入る。

〽久松は、變らぬ色の常磐草、契りを代々に語りける。

ト淨瑠璃切れると、直ぐに久松、腰に提げて居る手拭を取つて首に卷く。

久松　南無阿彌陀佛。

ト手拭にて首を締めようとする。久作驚ろき

久作　待つた〳〵。こりや、なんとするのぢや。

久松　イヤ〳〵、放して殺して下さりませ。

久作　殺さぬ〳〵。なんで首締めて死ぬるのぢや。久松。

久松　親仁樣。

久作　なんぢや〳〵。

久松　御主人の目を掠め、あのお染さまと、この久松が、忍び〳〵の徒ら事。よもや〳〵と存じましたところに、阿母樣より遣はされましたるその御狀、私しへ內々にて、意見を賴むとの御文體。私しが身に取りましては、有り難いとも面目ないとも、詞には申し盡されませぬ。先立つ不孝は親仁樣、お免されて下さりませ。

ト久作、久松を引据ゑ

久作　おのれはな〳〵。

久松　お免されませ〳〵。

久作　八つの年から爰へ來て、御夫婦のお世話になり、西より東も辨まへぬおのれを、晝は手習ひ夜は算盤、これまでの御丹誠は、船にも車にも積まれぬわやい。その大恩を打忘れ、あらう事かあるまい事か、御主人の娘御をそゝなかし、四つ竹節に唄はれて、主人のお名を穢すのみか、爰で死んでは後の難儀、まだこの上に御主人に、御苦勞を掛けやうと思ふのか。コリヤ、ヤイ、ちつとは親の身にもなつて見居れ。阿母樣の御狀が來ると、其まま在所を出、爰まで來る道すがらも、若い者ぢやに依つて、もしや短氣な事などしやせぬかと、そればかりを案じて來た。親の前で死なうとは、あんまりぢやわやいあんまりぢやわい。

久松　成る程、御尤もではござりますれど、阿母樣へ、どうも顏が合されませぬ。

久作　賢いやうでもまだ子供ぢや。われを憎いと思し召さば、どうなりと仕樣があれど、われを不便と思し召すゆゑこの御狀、內證で意見してくれとは、娘御に惡名附けまい爲ぢやわやい。今おのれが死んで見い。猶々お前さまに浮名が立ち、聟どのゝ佐四郞さまとやらまでに、疵の付くと云ふ所へ心が付かぬか。其やうな阿房ではなかつたが、魂ひが入れ替つたか。おのれはなア〳〵。

久松　誤りました〳〵。

久作　なんぢや、誤まつた。

久松　親仁様、みんな私しが不料簡でござります。お免されて下さりませ。

久作　そんなら首縊めて死に居らぬか。

久松　只今仰しやりました事、この久松が身に當りましてござりますれば、この上は、どのやうな事がござりましても、死にます心はござりませぬ。親仁様、マア〳〵、爰をお放しなされて下さりませ。

久作　不所存な伜なれども、斯うなつてはせう事がない。必らず短氣な心出すまいぞ。おりや奥へ行て、ちよつと阿母様にお目にかゝつて來よう。

ト行きさうにして立戻り

われ一人を爰へは置かれぬ。おれと一緒に奥へ來やれ。

久松　イヤ、私しはちよつと爰に用がござりまする。お前お先へ。

久作　われが用と云ふは、コレ、これではないか。

ト咽喉を締める眞似をする。

久松　どう致しまして、其やうな不料簡な事を致す事ではござりませぬ。お心措きなうお出でなされませ。

久作　どうしてこれが、心措きなう去なれうぞ。

ト以前の文を出し

こりや、コレ、阿母様より遣はされたこの文、幸ひ〳〵。

ト久松が手へ卷きつけ

時に取つての假手錠。この文は破れまい。

久松　これは。

久作　必らず反古ぢやと思ひ居るな。お主様のそのお文、大切にし居れ。

久松　畏まりました。

久作　これからお染さまにもとつくりと、御意見申さにやならぬ。

久松　アノ、お染さまに。

久作　おのれは爰に待つて居れ。

ト唄になり、思ひ入れして奥へ入る。

久松　よしない我が身の徒ら、お主様へは云ひ譯立たず、親仁様へは不孝になり、死んでも濟まぬ久松が身の上。こりやマア、どうしたものであらうぞ。

ト奥よりお政、お染出て來り、お染は久松を見て、恥しきこなしにて、お政が後に隠れ居る。

まさ　久松どの、戻らしやんしたか。

久松　オヽ、こりやお政さん、今朝お前を呼びに行つたところが、暗いうちから出たと、隣りで云うてゞあつたが、昨日から此方の内へはお遠々しいの。

まさ　全體昨夜來る約束でござんしたが、この頃は宿入りで、大抵忙がしいこつちやないわいな。今日は淺草ちやさうなの。

久松　アイ、十七夜待ちやに依つて、觀音さまへ參りました。

まさ　さぞ、お樂しみであらうの。

久松　久しいものサ。

　　トお政、久松が手を見付け

まさ　久松さん、お前はどうさんしたえ。

久松　ほんに、これをちよつと解いてもらひたいわいの。

まさ　また痴話をさんしたか。

　　ト云ひながら文を解き

「久作どのへ、つやより。」そんなら久作さんの所へ、お染さんの譯を。

久松　それぢやに依つて、滅多な事は云はれませぬわいの。それに又、今夜は、鄰さんがお出でぢやげな。この久松は在所へ歸ります。

まさ　ほんに、佐四郎さんがござんすげなの。

久松　ソレサ、さぞお前も氣が揉めませう。

まさ　イヤモ、お前と對な女子になつたわいの。久松どの、いつそ氣を替へて、外の者と樂しましやんせぬか。

久松　お前も好い加減な事を。誰れがわしに構ふもので。

まさ　隨分あるぞえ。

久松　そりや、何處に。

まさ　つい爰に。

　　トお染を突き遣る。久松見て、恟りして

久松　こりやお染さん、お出でか。ゆるりとお話しなされませ。

　　ト久松、奥へ行かうとする。お染、控へて

くめ　餘所々々しい久松さん、お政さんを頼んで、度々届ける文の數々、ついに一度の返事さへして下さんせぬは胴慾ぢや。朋輩衆に嫌てられ、嫌ひな酒も好きになり、お前の事が苦になつて、ついに客衆の座敷でも、三味線さへ手に取らぬ。手に取らぬわいなア。

久松　そりやモウ、仰しやらいでも知れた事、三味線箱へ枕を入れて歩く世の中。藝者と云ふは名ばかりで、三味線は出さずとも濟むものぢやと、若い衆の話し。殊にお

前は佐四郎さまと、譯のあると云ふ事は、誰れ知らぬ者もない身の上。
くめ　申し久松さん。その譯は、この頃も、文に詳しく書いて上げたが、所詮讀んでは下さんすまい。お前に晴れては逢はれぬゆゑ、佐四郎さんへ打明けて頼んだれば、隨分承知ぢや、わしが相方分になつて居い、逢はせてやらうと云はしやんしたゆゑ、表向きは佐四郎さん。
久松　サ、さうではあらうけれど、朋輩衆に見咎められては、この身の上、早う歸つてもらひませう。
くめ　そりや情ないぞえ久松さん、内方のお染さんと譯のある事を知つてゐて、わたしが口から斯う云ふは、よくよくな事ぢやと、推してくれたがよいわいなア。
久松　それを爰で云ふ事かいの。
くめ　云ふまい程に、叶へて下さんせ。なんぼしがない藝者でも、わしもお粂でござんす。お染さんと、譯のある事、大きな聲して告げるぞえ。
久松　それを云はれて堪るものか。
くめ　そんなら叶へて下さんすか。
久松　サアそれは。
くめ　どうぢやぞいなア。

ト最前より、お政思ひ入れあつて
まさ　イヨ御兩人樣、有り難い。
久松　お前までが同じやうに、なんの事でござるぞいの。
まさ　久松さん、お前もほんに惡堅い。据ゑ膳を食はぬは男の内ぢやないぞえ。あれ程に云うてぢやもの、つい叶へて上げさんせ。
久松　ぢやと云うて。
くめ　お染さんに立たぬかえ。
久松　サ、どうも。
くめ　嫌かいなア。
久松　嫌ではなけれど。
ト奥より
源右　久松々々。
久松　アイ〳〵。ソレ〳〵。
トお粂を突きのける。奥より源右衞門、出て來り
源右　久松、先刻から呼ぶのに何をして居る。
ト久松、煙草盆を取上げ
久松　煙草盆の掃除をして。
源右　コレ、煙草盆の掃除は、朝飯前にするものだ。總體この頃は浮か〳〵と、われにやア狐でも居るさうだ。

まさ　源右衛門さんの久しいもの、なんぞと云ふと、この子をめどに。あんまり叱らぬものぢやわいなア。

ト此うち源右衛門、印形を久松が袂へ入れる。

源右　お政どん、久しいものとは、どなたの事だ。なんぞと云ふと久松が贔屓をするやつサ。奉公人は上立つ者が云はにやアならないものだ。

まさ　成る程お前は、愛嬌持つたお方ぢやわいなア。

源右　この愛嬌は産神からだ。久松、用がある。來やれ。

久松　今行きます。

源右　今ぢやアない。もう日暮れだ。行燈でも付けやれ。

まさ　ハテ、お前、先へ行かしやんせ。

ト通り神樂になり、源右衛門、久松を無理に連れて入る。花道より若い者、提灯を點し、合羽屋六兵衛、やつしの上へ上下を着て出る。後より山家屋佐四郎、麻上下にて出て來り、門口へ來り

六郎　頼みませう。

まさ　ハイ、どなたでござります。

六郎　仲人の合羽屋六郎兵衛、聟どのを同道しました。

まさ　エヽ、聟さんがお出でかえ。

ト兩人、思ひ入れ。

六郎　サア、入らつしやりませ。

佐四　ヘイ／＼。

ト兩人、内へ入り座に就く。お政、煙草盆を出し

まさ　聟樣、ようお出でなされましたの。

佐四　ヤ。てまへはお政か。

まさ　お前の目からも、お政と見えるかえ。

佐四　目があるもの。見えないでサ。

まさ　聟入りも厚かましい。

ト六郎兵衛、思ひ入れ。お粂、茶を酌んで出す。

佐四　オヽ、こりやアお粂坊か。

くめ　今晩おめでたう存じます。

まさ　わしや根ッから、めでたうないわいな。

六郎　これは又、怪しからぬ事だ。

まさ　供の衆は、聟さんを置いたら、早う歸らんせ。

六郎　モシ女中、祝言の夜に歸れと云ふは、忌み詞でござる。

まさ　そんな事は私しは存じませぬ。お前も早う用を仕舞うて歸らんせ。

佐四　コレお政坊、てまへも、さりとは解らぬものだ。今夜は一生に一度の、めでたい晩だぜえ。

まさ　根ツからめでたうないわいな。
くめ　コレイナア、お政さん、仲人の六郎兵衞さんとやらも聞いてぢやわいなア。靜かに云はしやんせ。
　ト お政、拗ねる。
わしも云ひたい事があれど、辛抱して云はずに居るわいなア。
佐四　お粂、てまへは何も云ふ事は、ありそもないものだ。
くめ　ありそむないものぢやえ。さう云はしやんすりや云ひ分があるぞえ。久松に逢はせてやらう程に、云ふなりになれと云はしやんして、よう人をなぐさましやんしたな。
佐四　てまへもてまへだ。それを爰で云ふ事か。
くめ　云ひたかなけれど、云はれるやうな事を、お前が云はしやんすぢやないかいな。
まさ　さうぢや／＼。此やうな性無しは以後の爲ぢや。此やうな時云ふがよいわいな。
六郎　コレ／＼、こな樣達は何の事だ。佐四郎さまに恨みがあるなら、いつでも云はれる事だ。今夜は大事の花聟でござる。もしもの事があつては、仲人の合羽屋六郎兵衞が立ちませぬワ。
まさ　お前が立たうが立つまいが、そんな事に頓着はござんせぬ。今まで思ふさまになぐさまれて。
佐四　シイ。
　ト 氣の毒なる思ひ入れ。
まさ　腹が立たいで、どうせうぞいな。
くめ　佐四郎さん、久松さんの事はどうさんす。
佐四　どうさんすも斯うさんすも、今出來立ての聟樣だ。今と云つて、これがどうなるものだ。六郎兵衞、いつそ今夜は祝言を延さうぢやアないかえ。
六郎　コレ／＼、佐四郎どの、あれ程に云ひ約束して、どう今夜が延ばされるものだ。
佐四　大分けだしがない。この頃の事にしようぢやアないか。
六郎　こなさんにも似合ない。とつけもない事云ふ人ではあるぞ。
まさ　イエ／＼、歸らうと云はしやんすなら歸し申すがよいわいなア。サア／＼、歸らんせ／＼。
　ト お政、佐四郎を引立てる。六郎兵衞、これサ／＼と支へる。佐四郎、迷惑なる思ひ入れ。この仕組みよろしくあつて、奥よりおつや、善六出て來り、この中へ

入る。お政、おつやを突き出す。六郎兵衛、善六を支へる。お粂、佐四郎を引ッ張る。皆々顔見合せ、悄りして、この時善六、以前の文を落す。佐四郎取上げ、懐中する。

つや　聟どのか。

善六　六郎兵衛どのか。

ト佐四郎、六郎兵衛、下に居て

つや善　今晩は、おめでたう存じます。

政粂　ようお出でなされました。

善六　これは又、怪しからぬ賑かな聟入りでござりまするな。

六郎　イヤモウ、斯樣な時は、兎角賑やかな事がようござります。

つや　さて佐四郎どの、緣と云ふものは變つたものでござんす。太郎兵衛どのは舅なれど、急に思ひ立つて今宵の祝言。まだ年端もゆかぬ者でござる。賴みまするぞえ。

佐四　イヤモ、そのお詞で痛み入ります。

つや　お染や／＼。

ト呼ぶ。

そめ　アイ／＼。

ト奥より出て來り

なんの御用でござんすえ。

つや　この子とした事が、用どころかいの。聟さんが見えたわいの。

そめ　わたしや嫌ぢやわいなア。

トぴんしやんして奥へ行かうとする。おつや、引留め

つや　コレお染、そりやなんの事ぢや。最前から、よう云ひ聞かせたぢやないか。ホヽヽヽ、御覽じませ。いつもいつも子供のやうに、育て方が悪いと、笑うて下さりますな。

六郎　イヤモ、この位が丁度よくなります。併し、悋氣と間男ばかりは、女子の嗜なみでござるぞ。コレお染どの、この仲人の名の出ぬやうにして下されよ。

トお染、ひぞる。

善六　申し、六郎兵衛さま、お前も餘ッぽど薄のろいものだ。あのお染さんは、お前の顏を踏んで居ますぞえ。

つや　善六、杯はどうぢや。

善六　イヤ、杯より前に佐四郎さんに、ちつとお話しがござります。家來の身で主の事を告げ口するは、勿體ないが、理は理、非は非と立つるが番頭の役目。お前も妾の

内の模樣なら、わしが爲には主人。サア、お主に隔てはございませぬが、此やうな事は、得て間違ひが出來るもの。お染さんには蟲が附いて居ますぞえ。

つや　エ、善六、そりやなんの事。滅多な事を。

善六　なんでもようございます。佐四郎さんのお爲でございます。

佐四　善六、例へ今宵お染と祝言せずとも、賴みの印を取交せば、おれが女房。不義徒らがあつて濟むものか。

善六　お前も山家屋佐四郎と、人に云はれる程にもない。世間の噂を御存じございませぬか。

ト皆々氣の毒なる思ひ入れ。

佐四　噂とは。

ト善六、薄本を出して

善六　世間で流行る四つ竹節、お聞きなされませ。

ト煙管で拍子を取つて

さても名に負ふ瓦町の油屋、一人娘にお染と云うて、年も二八のヤレ色盛り、内の子飼ひとしんとろとろり。ウウテン／＼。

ト佐四郎、本を引ッたくり

佐四　これがなんで不義の證據だ。ない事もあるやうに、面白をかしく作りなし、盛り場で讀賣りするも商賣づく。斯う云ふ本が百冊出やうが構はない。いらぬ世話を燒きやるな。

善六　ても結構なお聟入りの。

つや　成る程、一事が萬事、賴もしい聟どの。お染、隨分大事にかけや。サア／＼、お粂さん、お政どん、早く銚子を持つてござれいの。

粂政　アイ／＼。

ト兩人、銚子杯を出す。

つや　ほんの祝言の學びばかり。サア、飮んで聟どのへ。

ト嫌がるお染に、おつや無理に杯を持たせる。お政、お粂、銚子の口を合せ、つぐ。お染、杯を投げ出す。おつや氣の毒なる思ひ入れ。

サア／＼、聟どの

佐四　これは／＼。

ト杯を取上げる。善六、謠を謠ふ。お政、そつぶりとつぐ。佐四郎、酒を浴びたる思ひ入れ。皆々、これはしたりと立騷ぐ。

六郎　イヤ／＼、これは濡れると申して、めでたい事でござる。

ト佐四郎、飲んで
佐四　どう致しませうな。
六郎　阿母樣へ。
ト佐四郎、おつやに獻す。これより杯事よろしくあつて、
つや　サア〳〵、固苦しい。その上下を取らしやれ。
佐四　ハイ、左樣なら御免なされませ。
ト佐四郎、上下を取る。
六郎　イヤモ、此やうなめでたい事がござらぬ。善六は急ぎ、先づ床を納めるがようござる。
つや　ソレ善六、床を取りやいの。
善六　ナニ床。とつけもない。まだ表は明るうござります。馬鹿々々しい。
つや　ハテ、こればかりは祝儀ぢやわいの。
善六　おつな祝儀があるものだの。
まさ　なんのこれが祝儀の事があるものぞ。善六さん、捨てゝ置かんせ。
善六　主人の云ひつけなれば是非に及ばぬ。
ト床を敷き、枕を抛り出す。お政、佐四郎が上下を投げつける。
つや　どれも〳〵、なんの事ぢやぞいの。まつと靜かにして下され。
ト佐四郎を蒲團の上へ直し、嫌がるお染を無理に連れて來て佐四郎が前へ直す事度々あり、この時お染、文を落す。
六郎　千秋萬歲、おめでたう存じます。仲人は宵の内。さらば開きませうか。
佐四　六郎兵衞さま、お世話でござりました。
つや　ようござりました。
ト合ひ方になり、六郎兵衞、向うへ入る。おつや屛風を引廻す。善六、お染に抱きつく。お染、突き倒し奧へ入る。またお政に抱きつく、お政、振り放し、びんしやんして奧へ入る。善六、思ひ入れあつておつやに抱きつく。おつや恟りして突き倒し、この時、お染が落した文を拾ひ、思ひ入れ。
主を捉へて何をするのぢや。
善六　これは婚禮の色直し。
つや　早く奧へ行かぬか。
善六　開きませう。
ト合ひ方にておつや、善六、奧へ入る。佐四郎、床の

内より出て來り、あたりを見廻し、暖簾の内より久松
を連れて來て、蒲團の上へ乘せる。お染、悄りして

そめ　ヤア、其方は久松かいの。

久松　お染さまでござりますか。

佐四　コレ。

ト唄になり、佐四郎、屏風を引廻し、奥へ入る。引違
へて善六出て來り、いろ〳〵あつて

善六　なんぼ婚禮なればとて、宵の口から床入りとは、あ
んまり人を踏み付けにした仕方。エヽ、忌々しい。お染
さんもお染さんだ。嫌だ〳〵と云ひながら、あの睦まし
い話し聲。聞くも胸が惡い。ちよつと鐘撞堂をそゝつて
來ようか。イヤ〳〵、今お染さんの袂から落した文。

ト出し

松さま參る、染より。忌々しい奴だ。お染さんと云ひ、
お粂と云ひ、久松にばつかりじなつく。おれとあんまり
逢ひはしまいが、封を切つて見ようか。見たなら修羅の
種とならう。これを證據に久松を。

ト思ひ入れ。奥より源右衛門、窺ひながら出て來り、
思はず善六に行き當る。

源右　善六か。

善六　源右衛門か。悄りしたわえ。

源右　おれも悄りした。

善六　何をそんなにウロ〳〵するのだ。

ト源右衛門、善六を門口へ連れて來て

源右　コレ、喜ばつせい。一昨日頼んだ親方の印形を、人
知れず久松が懷中へ。

善六　出來た〳〵。あの證文を久松に塗りつけて、それを
跡に追ひ出すワ。

源右　まだこなたに喜ばせる事がある。あの金戸棚の鍵袋
を、ちよつと攫つて持つて來たが、御堂樣の奉加金、捲
上げる算段は。

善六　あるとも〳〵。

源右　して〳〵、どうぢや。

善六　そのからくりは、この封じ文。

源右　ドレ、松さま參る、染より。これをどうする。

善六　金簞笥の抽出しへ。

源右　孔明々々。

善六　源右衛門どん。

源右　オイ、善六、拔かるな。オイ。

トまた呼ぶ。

善六　早く行きやれ。

源右　山分けを忘れまいぞ。

ト無性に呼ぶ。源右衛門、奥へ入る。善六、金簞笥の錠を明け、百兩包みを出して、以前の文を抽出しへ入れ、錠を卸ろして、百兩包みを袂へ入れ、重き思ひ入れ。また出して懷へ入れる。いろ／＼あつて、トヾ、久作が持つて來た藁苞の中へ隱し、鍵を持つて思ひ入れして下座へ入る。奥よりお政出て來り

まさ　今宵のやうに、腹の立つ晩もないものぢや。日頃から思ひ思うて居る佐四郎さん、人もあらうに、あのお染さんと、祝言すると云ふ事があるものか。それに又、宵からの寢る事わいの。

ト屛風の側へ來り

佐四郎さん、お前も好い加減に起きさんせぬか。

そめ　コレ久松、堪忍してたもいなう。

ト　お政、恟りして

まさ　佐四郎さんと思ひの外、こりやどうぢや。

久松　お政どの、これも矢ッ張り佐四郎さまのお情。

そめ　その佐四郎さんを嫌ふのは、誰れがする事ぢやぞいの。

久松　ぢやに依つて久松は在所へ行かねば、お前のお爲になりませぬ。私しが事はフッツリと思ひ切り、佐四郎さまと隨分仲よう、お添ひなされて下さりませ。

そめ　成る程、在所へ去にやるも尤もなれど、わしが云ふ事も、ちつとは聞いてたもいの。

まさ　それ／＼、どうで在所へ行かしやんすなら、お染さんの仰しやる事も、聞かしやんしたがよささうなものぢやわいなア。

久松　ぢやと申しまして。

まさ　そんならこなさんは、お主樣の仰しやる事を、聞かしやんせいでもよいかえ。

久松　全くお主樣の御意を背く心はござりませねど、お政さん、お前もちつと嗜なんだがよいわいの。

まさ　わしに嗜なめとは、そりや何をえ。

久松　何をではござらぬ。先刻も先刻であのお染。

そめ　お染とはや。

久松　エ、お染、アノお染。それ／＼、油を汲めと云ひつかつて居る久松を、用ありさうに呼び立てるとは、あんまりぢやと申す事。

まさ　用ありさうどころかいの。お主樣のお染さんが、御

用があると御しやるゆゑ、待たんせと云ふ事ぢやが、なんとしたえ。
久松　なんともせねど。
まさ　そんなら、お染さんの云はしやんすやうにならしやんすか。
久松　そりや又、どう致しますればようござります。
まさ　其處へ行て、直々に聞いたがよいわいの。
久松　左様なら、お側へ參りましても
まさ　大事ないわいな。早う其處へ行かしやんせ。
ト突きやる。
久松　お側へ參りましてござりますが、なんの御用でござります。
そめ　サ、その用と云ふは。
まさ　それ〳〵、癪が發つてゞあらうがの。
そめ　そりや誰れが。
まさ　エヽ、つんと。お前が癪が發つて、久松どのに押へてくれいと云ふのではないかいな。
そめ　そんならこちや、癪が發つたさうなわいの。
まさ　それ〳〵、お染さんが癪が發つたと云はしやんす程に、早う押へて上げるがよいわいな。

久松　そんなら癪が。
そめ　それ〳〵、押へてたもいなう。
久松　ドレ〳〵、押へて上げませうか。
ト側へ寄り添ふ。奥より
善六　イザ〳〵、お越しなされませう。
トこれにてほぐれる。奥より善六、辻山郡司、源右衛門、出て來り
コレ久松、辻山郡司さまが、先刻からお待ちなされてお出でになさる。われは爰に何をして居た。
久松　サ、これは。
まさ　善六さん、こりや何ぢやわいな。今お染さんが癪が發つて、愕りしたわいなア。
善六　オヽ、癪も發りさうなものだ。久松は契約のお糸に入り上げて、今ぢやア首を縊らうも知れない。
久松　善六どの、こなさんもいゝ加減な事を云はつしやる。
善六　隱しやんな。てまへはあのお糸に打込んで、郡司さまから、金を百兩受取つて、どうした。
久松　コレ善六どの、そりやア何の事。金とは。
善六　惚けるな。もう顯はれてしまつたワ。
トお政、お染、思ひ入れ。

源右　久松、わりやア面に似合はない、おつかない事を仕出したな。主の名を騙つて、百兩と云ふ金は何にした。サア、それを吐かせ。

久松　源右衞門も同じやうに、この身に覺えぬその難題。郡司さまも爰にお出でなされば、あなたに委細お聞き申せば解る事。郡司さま、あなたにもお覺えはござりますまいがな。

郡司　そりやア久松、詞が違ふ。一昨日の詞に、明後日は直に持つて參りますと、證文の上で百兩貸し、金が出來ずば、お染を遣らうと、證文へ書き入れたぢやアないか。

三人　エヽ。

久松　モシ〳〵、郡司さま、それはあなたのお覺え違ひでござりませう。

まさ　ソレイナア、久松どのが、何しにお染さんまで證文に書き入れ、大枚の百兩を。

郡司　知れた事だ。此奴が名前で、誰れが三文でも貸すものだ。太郎兵衞が判なればこそ百兩貸したワ。サア、その金はどうするのだ。金が出來ずば、お染を連れて行く分の事だ。ソレ。

ト お染を引立てにかゝる。お政、久松支へる。おつや出て來り

つや　アヽ、お待ちなされて下さりませ。最前も申します通り、太郎兵衞どのは留守なれど、後を預かるこの妻。印形は用箪笥へ、大事にかけてしまつて置きましたが、二三日以前より皆暮れ見えず、それとはなしに詮議最中。マア、内をとつくりと吟味いたしまして。

郡司　コレ阿母、判の吟味は後の事。内にあらうがあるまいが、この證文にべつたりと、捺してあるのが慥かな證據。

ト 證文を見せる。久松、取つて見て

久松　油屋太郎兵衞使ひ久松。成る程、紛ひもない旦那の御判。こりやどうぢや。

善六　もう叶はない。久松、有やうに云つてしまへ。

久松　モシ、この久松は其やうな、覺えは曾てござりませぬぞ。

善六　覺えないとは、この丁稚め、云はせて置けば、さまざまな事を吐かす。有やうに云はないと痛い目に遭はせるぞ。いつその事に、斯うして云はせうか。

ト 久松を引寄せる。お政、お染支へて

政染　マア〳〵待つて〳〵。

善六　久松が事と云ふと、なんでも四文と出たものだ。エヽ邪魔な。退かつせい。源右衞門、詮議をしろ。

源右　サア、久松。これでも云はないか。

ト引倒す。お政、支へる。この時、久松が袂より印形を落す。善六、取上げ

善六　動きやがるな。大泥坊め。モシ、阿母様、この印形が久松が袂から落ちました。改めて御覧じませ。

三人　ヤ、なんと。

ト恟りして、おつや判を取上げ

つや　こりや、コレ、この頃見えなんだ旦那どのゝ印形。さては久松が。

久松　モシ〳〵阿母様、この久松は心以て、覚えない印形。とは云へ、どうしてこの袂に。ホヽホイ。

善六　印形を盗み出し、百両と云ふ大枚の金を、騙つたは盗人。ぶちのめせ。

源右　合點だ。

ト立ちかゝる。お政隔てゝ

まさ　マア〳〵待つた。

善六　われが知つた事ぢやアない。すッ込んで居ろ。

まさ　イヽエ、すッこんで居りますまい。その判は久松が落した判ぢやアござんせぬ。

善六　なんだ。久松が落さない。さうして、この判は、天井からでも落ちたのか。

まさ　この政が落しやんした。

久松　コレ〳〵お政どの、それでは。

まさ　ハテ、わたしが落したに違ひはない。お染さんの髪結ふ時、奥で拾うたその印形。今まで持つて居やんしたは、この政が粗相。それゆゑにこそ久松どのゝ難儀。それを知りつゝ、知らぬ顔して居る政ぢやござんせぬ。番頭さん、源右衞門さん、この科人は、わたしでござんすわいなア。

郡司　なんぼ、うぬが久松を庇つても、この證文の借り主は太郎兵衞。金が濟まにやア、お染を遣らうとある文言。

つや　マア〳〵、待つて下さりませ。

郡司　待てと云はつしやるは、こなたが金を返す氣か。

つや　成る程、その金は、この婆がお戻し申しませう。

政久　それではどうも。

つや　イヤ〳〵、なんぼ久松が業にもせよ。お政どのゝ科にもせよ、太郎兵衞どのゝ印形が捺してあるからは、退

引きならぬこの場の仕儀。御堂様の御普請の施主にと、思うて退けて置いた百兩。お戻し申しませう。
まさ　そんならあなたがアノ百兩。
つや　借り請けたに違ひもないあの證文。この婆が返しませう。
　ト立ち上がり、押入れの金箪笥を明けて見て悔りする。
善六　なんと致しました。
つや　こりやどうぢや。
善六　その抽出しにある金を、誰れも取る筈はないが、これは又怪しからぬ。
　ト善六立ち上がり、抽出しを見て
モシ／＼、この中に何か手紙が。
　ト以前の手紙を出して
なんだ。松さま參る、染より。
皆々　エヽ。
　ト皆々悔りする。お政、久松、それと寄らうとする。
源右　動きやアがるな。
　ト源右衛門、引据ゑる。お染、おつや、心遣ひ。
善六　松さま參る、染より。
　ト皆々思ひ入れ。

ハテ、飛んだ文が金箪笥に落ちてあつたな。源右衛門、こりやア誰れが文であらうな。
源右　それで大概盗人も、捕へて見れば阿母様、お娘御か久松か、これはつかりは、打ッちやつちやア置かれますまい。
つや　そんなら、その文は。
善六　松さま參る、染より。久松、あの金も、われが取つたな。
久松　どう致しまして勿體ない。
善六　そんならお染さん、お前が取んなさつたか。
そめ　どうしてわしが。
善六　そんなら久松、われか。
久松　この身に覺えは。
善六　ないでは濟まない。なぜこの文が、あの抽出しに入つてゐた。
久松　サ、それはな。
まさ　コレ申し、善六さん。染と云ふ名も松と云ふ名も、世間にいくらもござんす。あながち主達ばかりに限つた事でもあるまい。何は兎もあれ、その文をちよつと。
善六　あかんべい。お染さまと久松が、仲を取持つ髪結ひ

のお政。人の大事の箱入り娘、よく久松に嘗めさせたな。われにもキッと云ひ分がある。先づ差當る金の盜人。久松、百兩の金を、わりやア何處へ隱して置いた。判を盜んで百兩借り、それで足りずに又、百兩捲上げるとは、丈の知れない大泥坊め。

久松　ナニ、この久松を泥坊とは。

善六　泥坊なり間男なり、どの道うぬが首はない。この文が、なぜあの抽出しに入つてあつた。

久松　サア、それは。

善六　云ひ譯がなけりやア斯うするワ。

ト ぶつ。

源右　この源右衞門も斯うする。

ト ぶつ。お政、お染、寄らうとするを、郡司支へる。善六、源右衞門、久松を打ち据ゑる。奧より佐四郎出て、兩人を投げのけ、どつかと居る。おつや心遣ひ。

つや　聟どの。

久松　佐四郎さま、面目次第もござりませぬ。

善六　なんだ佐四郎。

ト起き上がり、佐四郎を見て

ほんに佐四郎さまだ。

郡司　エヽ、佐四郎とやら。わりや何しに爰へ出た。詮議の邪魔になる。引込め〳〵。

佐四　お侍ひ樣、たつた今出た佐四郎を、引込めとはお情ない。先刻お染と祝言したれば、今日からこの油屋は、わしが自由にするワ。

郡司　そんならこなたが、お染の聟か。

佐四　小鬢ながら花聟サ。

善六　イヤ、聟樣、佐四郎さま、なんぼこなさんが自由にしたくつても、見世の事は番頭任せ。盜人の詮議をするおいら二人を、紙屑を打ッちやるやうに、なぜ緣先へ

善源　抛り出さしつた。

佐四　片瀨村の久作と、一つ二つすうち、ついトロ〳〵と一寢入り。寢耳にフッと百兩の、金の詮議に目が覺めて、爰へ出づらによく聞けば、證文の上で久松が、金を借りたとあるからは、使ひは久松、借り主は太郎兵衞。假にも女房のお染が、出入りであると聞いては、入り聟の不肖、默つても居られない。可哀さうにナニ久松が知るものだ。その借り主はそんじよそれと、知れてあれど、荒立てゝは面倒だ。なんでも金さへ返さばいゝぢやアござりましないか。

郡司　知れた事。金さへ取れば云ひ分はない。
善六　彼方になくつても、此方に云ひ分がござる。あの戸棚の百兩は、久松が取つたに違ひない。
佐四　久松が取つたと云ふ、なんぞキッとした證據があるか。
善六　證據のない事を云ふものか、證據と云ふはこの文。
つや　アヽ、その文を佐四郎どのには。
佐四　ハテ、ようごんす。打ッちやつて置かつしやりませ。
　コレ善六、その文が、どうしたと云ふのだ。
善六　この文が、金簞笥の中にあつたが、慥かな證據。佐四郎さま、お前の男が廢りましたぞえ。
佐四　なぜ又、この佐四郎の男が廢つたのだ。
善六　ハテ、祝言の杯が濟むからは、もう女房のお染さま。不義しられても大事ないかえ。間男されては久松を、並べて置いて四つにせにやア、お前の男が立つまいがの。
佐四　又してもお染の久松のと、可哀さうに、なんぼ悧巧發明でも、まだ子供同然のあいら二人。遊びに惚れて緣結び、雛の鍋釜竈ひで、女夫事する惡さ遊ひも、後先のあづまへないお染が相手。それを不義だの間男のと、いらざる世話は措きやれサ。

善六　成る程子供だ。二人ながら頑是なしよ子供々々と、今時の子供には油斷がならない。蚤食ひそらして鼻毛を讀まれ、いゝ男だと褒めるであらう。子供の癖にこてこてと、書いた事わいの。佐四郎さま、なんであらうとこの文を、慰みに讀んで御覽じませぬか。
　ト善六、佐四郎に渡す。
久染　それは。
　ト寄らうとする。善六、隔てる。
佐四　なんだ、松さま參る、染より。
　ト皆々思ひ入れ。佐四郎、封を切る。善六の文と入れ替へて、源右衞門が前へ投げ出し
源右衞門、何か面白さうなこの文。そこで讀んで聞かしやれ。
源右　ナニ、この文を讀めかえ。讀みやせう／＼。
　ト押開き
なんだ。いつも變らぬ繰り言ながら、又々文して申し上げ候ふ。
善六　調子が低い。もつと張り上げて／＼。
源右　最早來月は、佐四郎さまへお越しあらば、我が思ひ仇事となり、思ふに甲斐もなくばかりに候ふ。

善六　ても嫌な奴の。

ト善六茶を汲んで源右衛門が前へ出す。源右衛門、茶を呑んで

源右　我れら心の内、少しは不便と思し召し、色よき御返事を松の風、言傳にてもよろしく候ふゆゑ、源右衛門になりとお申し下されかし。

善六　・。

ト善六、悄りする。

源右　例へ顯はれ候ふとも、我れら番頭の役なれば、久松には難を着せ、後の締りは諸事萬事、思ひの儘にて御座候ふ。

善六　ア、コレ、それは違つた。

源右　それでも、さう書いてあるもの。

善六　その後を讀んでは悪い。讀むまいぞ〳〵。

佐四　コレ善六、慰みに讀めと云つたに依つて、讀ませるが、なぜ留める。

善六　イヤモウ、讀まいでも、大概知れた事でござります。

佐四　源右衛門、後を讀め。

源右　エ。

佐四　讀みやうが悪いと、腕首をひんもぐぞ。

源右　ア、讀みます〳〵……この縁叶へて下さるならば、生葱あさつき、わけぎも食べまい。鰯を斷ちます。小言も云ふまい。朝湯に行くまい。切見世なんどは見向きもしませぬ。これ程口說くに、さりとは〳〵情ないお心、拜む〳〵〳〵。めでたくかしこ。お染大明神さまお染大明神さま〳〵。善六より……こりやアどうだ。

善六　これは又情ない。その文を。

ト取りにかゝる。佐四郎、源右衛門が持つて居る文を引ッたくり

佐四　ヤイ善六、わりやア主のあるお染に、不義を仕掛けたな。

善六　サ、それは。

佐四　玆な、イケ泥坊めが。あの證文も、われが目算であらうが。

善六　ア、コレ〳〵、證文を、ナニおれが知るものだ。使ひ久松と書いてあつては、久松に違ひない。

佐四　そんならあの戸棚の金は、善六、われが取つたな。

善六　佐四郎さま、この善六が取つたと云ふには、なんぞ慥かな

佐四　證據と云ふは、この文だワ。

善六　これは又怪しからぬ、災難に遭ふものだ。

郡司　コレサ佐四郎どの、役にも立たぬ金の詮議をせうよりも、此方の金は、どう方を付けるのだ。

佐四　その百兩は、佐四郎が返濟しませう。

郡司　アノおてまへが。

佐四　如何にも。

　ト奥より久作出て來り

久作　先づ／＼佐四郎さま、お待ちなされて下さりませ。

佐四　オヽ、これは先刻奥で逢うた、久松が親御久作どの。そんならこの場の樣子を。

久作　殘らず奥で承はりました。憎くい忰が不行跡、云ふに云はれぬ人でなし。ほんの穴へ明けても飽きのない奴ではござりますれど、親となり子となつた、前世の約束とは申すものゝ、大切な御主人の目を掠め、百兩と申す大枚の金を、例へ遣はいでも肝心の判があるゆゑ、退引きならぬ手詰めとなるも、お主の罰、親の罰、今思ひ當り居つたか。おのれがやうな不所存者を、お庇ひなされて下さる佐四郎さまへ、面目なうて最前から、出たい所を辛抱して、口惜し涙で手拭を、幾度絞つたと思ふぞいやい。あの證文の百兩の金を、佐四郎さまの御苦勞にかけては、なんぼ土百姓でも浮世の義理。僅かの田地賣り代なしても、この久作が立替へねば、どうも濟まぬ。モシ佐四郎さま、その百兩の金は、私しがお返し申しませう。

久松　この身に覺えはなけれども、差當るこの場の難儀。なんぼ親子の仲ぢやとて、どうマアお前に。

久作　出させられぬと云ふのか。その心が、もちつと早う付けば、斯う云ふ事にはならぬわやい。今さら其やうな口悧巧な事云はうより、默つて居い。

まさ　それ／＼久松どの、久作さんが思いやうにはナ、さんすまい程に、必らず口を出さんすな。却つて爲にならぬぞえ。

そめ　ほんに久松、其方の知らぬと云ふ事は、天道樣がよう御存じ。何にも云うてたもんなや。

久作　申し阿母樣、定めしお腹が立ちませうが、この久作めにお免じなされ、お免されて下され。別しては佐四郎さま、憎くい忰の徒らから、あなたの大事なお嫁御へ。

佐四　コリヤ。

　ト佐四郎、思ひ入れ。

久作　サ、嫁菜を摘んでお土産に、持つて參つたこの藁苞。

ト以前の苞を出す。

善六　ア、、その藁苞は。

久作　この藁苞が、何と致しました。

善六　その苞は、おれがのだ。

久作　途方もない事を仰しやります。こりや阿母樣に上げうと思うて、丹誠して摘んで置いたこの嫁菜。片瀬村からわざ／＼と、爰まで脊負うて參りました。

善六　折角持つて來さつしやれたであらうが、此方の內では、みんな嫁菜がきつい嫌ひだ。こんな物があそこへ出されるものではない。門へ捨てゝしまはつせい。

久作　なんぼお嫌ひであらうとも、志しは松の葉とやら。何は兎もあれ、ちよつとお目にかけて。

善六　ハテ、田舍者と云ふものは片意地なものだ。この苞は、あそこへは出されぬと云ふに。

久作　ハテ、そこをマア、放さつしやれ。

善六　コレ、ひよんなものへ。

久作　どう致しました。

善六　おれが貰うた。

ト引ッたくつて駈け出さうとする。久作引留め、藁苞を佐四郎が前へ投げ出す。佐四郎、苞の中より百兩金を取出す。それをとかゝる。善六、源右衛門を煙草盆で打ち据ゑ

佐四　ソレ百兩。阿母、改めて見さつしやりませ。

つや　てもマア憎くい奴。女子の主ぢやと思うて、いろいろな惡企み。それでもお庇で疵付かず、元へ戾つたこの百兩。藁苞へ入れてあつたは、久作どの、天からこなたへ下されたのぢや。こりやこなたのにさつしやれ。

久作　ナニ、左樣ならこの百兩は。

つや　此方に覺えはないわいの。

久作　何から何まで有り難う存じまする。お詞に甘へまして、このお金は私しが、お借り申しまする。佐四郎さま、この百兩であの證文、お貰ひなされて下さりませ。

佐四　成る程、こりやありさうな事。サア、郡司どの、改め立てをしたならば、てつきりそれと知れては居れど、物數云はずに百兩は、耳を揃へて返します。受取らつしやい。

ト投げ出して遣る。

郡司　斯うした金を返すに、投げ出す事はない。ヤレ／＼、危ない事であつた。ソレ、證文は返してやるぞ。

ト佐四郎、證文を受取り、寸々に引裂き

佐四　阿母、この證文戻るからは、金のいきさつが片付いても、片付かないは不義の科。此まゝおやァ濟まされますまい。

ト おつや立つて押入れより、田舍染の子供の着物を持つて來り、善六を引起し

つや　コレ善六、われが此方の內へ奉公に來た時は、十二の春。この着物を着て、青洟垂らして、白雲頭を振り廻し、起臥しの世話までもさせたを、忘れさせまいと思うて、大事にかけてしまうて置いた。恩を仇なるおのれが不所存。郡どの、これを着せて、追ひ出して下されぇ。

佐四　うぬ、首にする奴だが、太郎兵衞どのゝ留守と云ひ、そこらあたりの障りになるゆゑ、命は助けた。サア、着物を脫ぎやアがれ。

善六　これは又、あまりに情ない。

佐四　喧ましいわえ。

ト 善六に着物を着せ替へ、

命冥加なイケ盗人めら。源右衞門、うぬにも暇をくれた。どつちへなりともうしやアがれ。

ト 兩人を表へ投げ出す。うぬなとかゝる郡司も門へ投げ出し、門口しやんと締める。

久作　何にも申しませぬ。

久松　有り難う存じまする。

ト 郡司、善六、源右衞門起き上がり

三人　なんの事だ。

善六　人を呪はゞ穴二つ。遂々もうせんになつた。

源右　今更悔んでも歸らぬ事。これから當分、郡司さまの居候ふサ。

郡司　それは近頃迷惑な事だが、せう事がない。サア〱エヽ、歩びやれ。

善六　本當なら、斯うもあらうと云ふ所を、云はすに行くが當世であらう。

郡司　さはさりながら、佐四郎め。

善源　ハテ、ようごんすわな。

ト 時の鐘になり、三人、向うへ入る。

つや　云ひやうもない憎い者ども。これに付けても心がゝりは、總領の多三郎。お染とは腹替りの兄弟なれど、箸にも棒にもかゝらぬ惡黨者、何處にどうして居るやら、憎い〱は脇になり、可愛うござるわいの。

まさ　お道理でござりますわいの。

佐四　まだ近付きにはならねども、わしが爲には小舅の多

三郎どの、ちつとは心も直つたら、仕様もやうもござりませう。それはさうと今の奴等、この場の事を恨みに持つて、どのやうな悪企みをしやうも知れない。阿母様、お染はわしが内へ。

つや　オ、、それ〳〵、内へ置いたら危ないもの。こなさんの内へ。

そめ　そんなら今宵は、

久松　佐四郎さまの所へ。

まさ　お供するのはこのお政。その代りには佐四郎さん、矢ッ張りお前の。

ト久松へ思ひ入れ。

佐四　コリヤ……おれが女房。

久作　久松めは私しが、在所へ連れて歸りませう。

つや　イヤ〳〵、久松めにはとつくりと、云はねばならぬ事がある程に、この子はわしに預けて下されい。

久作　左様ならばこの間に、また迎ひに參じませう。

ト立ちかゝる。

佐四　コレ〳〵久作どの、歸らつしやるなら、大儀ながらお染もお政も、とも〳〵にわしが内へ。

久作　そんなら送つて行きませう。サア、お染さま。

久政　一緒にお出でなされませ。

そめ　母さん、わしや行くぞえ。

つや　久作どの、頼みましたぞ。

佐四　阿母には、マア奥へ。

久政　佐四郎さま。

そめ　久松。

まさ　コレ。

久作　サア、ござりませ。

ト唄になり、佐四郎おつやは奥へ、お染、お政、久作、花道へ入る。久松、一人殘り

久松　この久松が心から、御恩を請けし御主人へは苦勞かけ、剰さへ親人まで、いろ〳〵との憂艱難。面目ないは佐四郎さま、お染さまとの譯合ひを御存じでありながら、庇うて下さるお志し。有り難いとも勿體ないとも、詞に禮は盡されぬ今日の仕儀。所詮生き存らへては義理立たず。善六を手にかけて。さうぢや。

ト行かうとする。最前よりお粂出かゝり居て、この時、久松を引留め

くめ　待たしやんせ。

久松　エ、邪魔な。其處退いた。

くめ　イヤ〳〵、なんぼうでも殺しはせぬ。あわてゝか久松さん。

久松　なんと。

くめ　サ、腹が立たうが、善六を手に掛け、お前は死ぬる心かえ。

久松　知れた事、生き存らへては御恩ある、佐四郎さまへどうも立たぬ。

くめ　成る程、尤もぢや、道理でござんすが、お前が死なしやんしたなら、可哀さうに、お染さんも、生きては居やしやんすまい。

久松　エ。

くめ　最前からこの場の樣子、聞くに付け、お染さんがいとしうなり、お前の事はフッツリ思ひ切りました。それに又、あれ程までお二人さんを、世話なさんす佐四郎さん、よもやお染さんと女夫にならんす心はあるまい。いま死なしやんしては主人へ不忠、親御へ不孝。お染さんの爲にもなるまい。マア〳〵、待つて下さんせ。

久松　それ程までに久松を、思うて下さるお粂どの。何にも云はぬ、忝ないぞや。

ト思ひ入れ。花道より稲荷の九藏出て來り、直ぐに內へ入り。久松に行き當り脾腹を抱へ

九藏　アイタ、、。どうするのだ〳〵。肋骨が折れたぞ折れたぞ。

ト苦しき思ひ入れ。久松、立ちかゝり

久松　これは〳〵、お飛脚なさうなが、どうさつしやりました。どうさつしやりました。

九藏　肋骨が三枚半折れたぞ。

久松　これは又迷惑千萬。出合ひ頭に行き當りましたは、此方の粗相とは申すものゝ、マアあらう事か、あるまい事か、人の內へ案內もなく、何の御用で。

九藏　コレ、わりやア知るまいが、おれはこの油屋の惣領息子、多三郎さまだワ。

久松　さてはあなたが、

くめ　ほんに多三郎さんかいな。

ト　お粂、門口へ逃げて出る。九藏引留め

九藏　待て。わりやア藝者のお粂だな。いゝ處で逢つた。梶原さまが、われに首ッたけ惚れてござつて、どうぞ引ッさらつて呉れろ、褒美はいくらでも遣らうと云はれたゆゑ請合うた。其うちにさゝれて、昨日までお扶持人になつて居たが、久し振りで娑婆へ出て、氣の晴れたと云

ふばかりで、錢が三文もない所だ。これからわれを連れて行つて、金にしにやアならない。おれと一緒に歩びやアがれ。

くめ　お前も無法な事を云はしやんす。得心もせぬものを、郷右衛門さんの處へ連れて行かうとは、そりやマア、なんの事でござんすぞいなア。

九藏　なんの事だ。こんな事だ。

ト　お粂を連れて行かうとする。久松、引留め

久松　多三郎さま、マア〳〵、お待ちなされませ。

九藏　ヤイ、このべら坊めは、大きな聲をする奴ぢやないか。おれは今ぢやア勘當の身の上だ。阿母が聞きつけるとむづかしい。ハア、見りやア丁稚の久松だな。

久松　成る程、久松でござります。

九藏　そんならわりやア工面が出來る筈だ。おれが妹のお染と、乳繰り合つて、内を一杯にすると云ふ噂だ。コレ、この女を連れて行くまいから、金を貸しや。金がなけりや職物でもいゝ。コレ見や。この形が油屋の惣領の形か。へちやアない田舍者だ。稻荷九藏ぢやなくつて田舍九藏だ。

久松　そんならお前が、お尋ね者の。

九藏　昔の名は多三郎。鳥居を越して出世したところが稻荷九藏。

ト　久松、恟りする。

なんと膽が潰れるか。牢扶持を食ひ飽きて、碑文谷から帆を上げて、世間をブラ〳〵歩いたが、おらが生れ付いて巾着やどんぶりにやア目はかけない。ちよつとした所が、この女位な代物から、お取付けになされるワ。邪魔をひろぐと、うぬも一緒に、引摺つて行つて、葭町に賣つてやるぞ。サア、お粂、うしやアがれ。

ト引立てる。久松、引留める。此うち花道より善六、源右衛門出て來り、互ひに囁き、善六は臆病口に忍ぶ。源右衛門は門口に窺つて居る。

久松　多三郎さま、マア〳〵、お待ちなされませ。

九藏　エ、面倒な。

ト　久松を蹴飛ばし、お粂を門口へ突き出し

ソレ、連れて行け。

源右　合點だ。

ト　源右衛門、お粂を引搟ぎ、花道へ入る。續いて行く久松を引留める。奥より佐四郎出て來り、九藏を投げのける。



文政三年七月河原崎座再演錦繪

三世市川門之助の稻荷九藏（碑文谷の場）

久松　ヤア、佐四郎さまか。
佐四　爰に構はず、お粂が後を。
久松　心得ました。
　ト三重になり、久松、花道へ入る。九藏起き上がり
九藏　痛いぞ／＼。久松。久松め。うぬ、飛んだ目に遭はしやア
がつたな。
　ト佐四郎を見て
うなア誰れだ。
佐四　おれか。おれは山家屋の佐四郎だが、わりやア誰れ
だ。
九藏　泥坊だ。
佐四　ナニ。
九藏　强請りだ。お騙り樣だワ。
佐四　そんならこの質見世を見掛けて。
九藏　無心に來た。貸してくりやれ。
佐四　この猿めは、大層な事を吐かしやアがる。この佐四
郎を見損なつたか。事と術に依つたら、貸してやるまい
ものでもないが、藝者のお粂を引ッ攫つて、人手に渡し
た四谷鳶。云はずと知れた善六や、源右衞門が合摺りだ
な。うぬはマア、なんと云ふざくさいだ。

九藏　こいつは／＼、鳶の、ざくさいのと、イケ勿體ない
事を吐かしやアがるな。おらアそんな安い野郎ぢやアな
いよ。京鎌倉は云ふに及ばず、日本國を飛び歩く、稻荷
九藏さまと云ふお泥坊樣だ。
佐四　さちやアこの頃碑文谷で、飛脚を剝いた面の皮、厚
かましくもよく失せたな。
九藏　その時見請けた提灯は。
佐四　この山家屋の佐四郎だ。
　ト九藏、恟りして門口へ行かうとする。
九藏待ちやれ。
九藏　何ぞ用か。
佐四　用がなくつて留めるものか。行く氣なら置いて行け。
九藏　そりや、何を。
佐四　懷中の色紙を。
九藏　ナニ色紙。おらアそんな物は知らない。と云ふやう
な泥坊ぢやアない。なる程、われが尋ねるその色紙は、
おれが持つて居るが、端下金ぢやア賣れない。耳を揃へ
て千兩さへ持つて來れば、内田の御用にでも賣つてやる。
金があるか。
佐四　さうきつく出りやア、此方からも受取りやうがある

が、渡すまいか。

九藏　そりや又、どうして。

佐四　斯うして。

トちよつとかゝる。立廻り。トゞ九藏、佐四郎が脇差を拔いて切りかける。佐四郎、引ツたくり、九藏を一太刀切る。ウンと倒れる。九藏を疊みかけて切りつける。九藏有り合せたる煙草盆にて受け留め

九藏　待つてくれ佐四郎どの。たつた一言、云ひたい事がある。逸まるまいぞ。

佐四　なんと。

九藏　鎌倉の盜賊、稻荷の九藏と云ふは、お染が兄の多三郎。

佐四　ヤア、この期に及んで卑怯な僞はり。まこと兄の多三郎なら、なぜこの家へ騙りに來たのだ。

九藏　譯を開かねば尤もの疑ひ。この多三郎とあのお染、兄弟なれど腹變り。何卒後を譲らんと、思ひ付いたる小なぐさみ、酒と博奕に身を入れて、願ひの通り勘當請け、内を出る事は出たなれど、退ッ引きならぬ惡黨づき合ひ、惡い事には馴れ易く、日每日增しの小盜みも、鳥居の數が重なつて、稻荷九藏と異名をされ、鎌倉中の重寶を、盜み取つたるその中にも、畠山の屋敷へ忍び、奪ひ取つたる菅家の色紙、梶原どのに手渡しなし、褒美の金を思ふうち、仲間にさゝれて天下の科人。ほのかに聞けば佐四郎どのには、この色紙ゆゑ浪人と、聞くと等しく[illegible]谷より、辛き命を存らへて、これまで色紙を持つて來ましたわいの。

佐四　初手より斯くと明かしなば、かゝる憂目は見まいもの。何ゆゑ以前は包みしぞ。

九藏　所詮遁がれぬ天下の科人。とゞのしまひは獄門臺、恥を晒さば親人や、妹の名まで汚さうかと、わざといはざる腕立ては、妹に繋がる佐四郎どのゝ手にかゝり、死骸を隱してもらひたさ。サア、色紙は其許へお返し申します。母人が聞かれなば何かの妨げ。云ひ置く事はこれ限り。イザ、介錯々々。

佐四　さてはこれまで惡黨に身を持ちなせしは、あのお染に後を譲らん手段とな。武士も及ばぬ心の健氣。あつたら若者殺すかと、思へば／＼是非もないこの場の仕儀。この色紙こそ菅原の道眞公、河内の國にて遊ばされたる、啼けばこそ別れを惜しめの御神詠、今我が手に入る上は、重忠さまへ歸參の願ひ叶ひなば、お染久松夫婦になし、

後悪ろに弔らはせん。これを冥途の思ひ出に、潔よう成佛おしやれ。

ト最前より、善六、窺ひ寄り

善六　様子は聞いた。佐四郎、動くな。

トかゝる。ちよつと立廻りあつて

兩人　どつこい。

先づ今日はこれぎり。

江戸富士陽曾我（終り）

長袖能舞　大磯和田宴
美濃と近江の加賀見山尾上の松に
岩藤が御代參の思ひ〳〵下女のお
初に平野屋德兵衛道行の曾根崎模
樣

祐成替紋の千鳥は
傘に塒かそうよぬれ燕
小夜の寐語
虎少將が袂が浦の閨の文

祐經　初花楓葉雜君裾野の色重　曲輪榮
高尾　紋日　鬼王團三昏待甲斐有

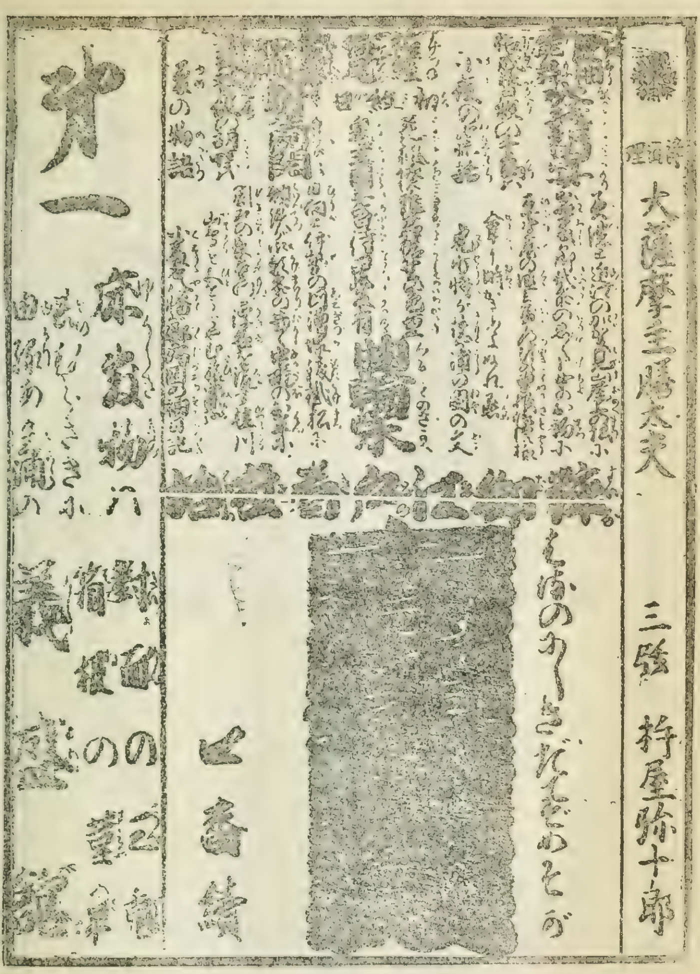
巨魚能踊　中町生洲鬧
日向と伊勢の阿漕塚錢掛松に願鐵
がお蔭參りの昔し〳〵中田市のお
半に關取の長右衛門が浮名を流す
桂川

時宗替紋の胡蝶は
山鳥も人を羨む旅寐哉
夢の物語
近江八幡が躑躅岡の袖日記

粹御江戸着衣始

春錦伊達染曾我

四番續



初演の紋番附

春錦伊達染曾我

序幕　鶴ヶ岡の場

大薩摩連中

役名——頼朝息女、大姫君。清水冠者義高。海野太郎行氏。井上次郎。根の井次郎直行。堀の藤内。宇佐美三郎祐安。横雲大膳。小動求女之介。片岡幸之進。腰元、滿汐。同、縹機。同、若柴。同、琴路。同、眞弓。お端下、常夏。同、小櫻。同、菖蒲。同、初音。足輕、曾根崎德兵衛 實ハ齋藤五郎國武。同、九平次 實ハ手塚太郎光盛。中老、尾上。局、岩藤。

本舞臺、三間の間、下座へ懸けて一面の板松、平舞臺、所々に松の立ち木、据ゑ物にしてあり、上の方に海野の太郎行氏、白鉢卷、手甲脛當、陣羽織、毛脊にて突ッ立つて居る。眞中に根の井次郎直行、白股引にて半合羽、旅侍ひの拵らへにて立ち居る。侍ひ四人、胴丸陣羽織の形、突棒刺叉にて根の井次郎に突きかけて居る見得。浪の音、ウケリにて幕明く。

ト直ぐにコイヤイになつて、ちよつと立廻りあり

行氏　待て／＼。いま頼朝公の仰せを請け、笹目ケ谷に入牢ある、義仲が公達、清水の冠者義高を、由比が濱邊へ引出だし、刑罪になさんと出立つ折柄、支ゆる男子、形は昔に變らねど、見覺えのある木曾の殘黨。義高諸とも首にする。姓名を名乘つて腕。

皆々　廻せエ、。

直行　腕廻せとは烏滸がましい。汝も昔は木曾に屬し、粟津ヶ原の亂れより、義高公を囮になし、命惜しさの犬つく這ひ。牛蒡程な尾を振つて、いま鎌倉の幕下に屬すとは云ひながら、恩を忘れて義高公を誅し奉らんとは、運の盡きたる海野の太郎。妨げせずと通すまいか。

行氏　さては、この行氏が推量に違はず、義高公を奪ひ取らんと窺ふ曲者。昔のよしみに見遁がさうと思ひの外、飛んで火に入る蟲侍ひ。首差延べて覺悟しろ。

直行　蟲侍ひとは存外なり。名乘るまじとは思へども、死

後の面目、卑怯未練と謳はれんも口惜しく、今こそ名乘る、よつく聞け。朝日將軍の四天王のその一人、根の井大彌太が弟、同苗次郎直行なるわえ。

皆々　さてこそなア。

直行　お痛はしや義高公、同じ淸和の流を出で、朝敵謀叛の汚名を受け、文治三年より建久まで、星霜積つて七ケ年、楚胡國に囚はれし、その悲しみに百倍せし、笹目ケ谷の土の牢……今日は御赦免、明日は出牢。今は形を變へらるか……待つに甲斐なき由比ケ濱、何ゆゑお首召さるゝか。

行氏　何ゆゑとは知れた事、五月下旬は賴朝公、富士の裾野の御狩場へ、惣奉行たる祐經どのを始め、牧狩の御遊覽。お留守は政子の御方に、まだ頑是なき實朝公、油斷のならざる平家の餘類。木曾や義經の討ち洩らされ、お留守を幸ひ鎌倉を、窺ふまいものでもないと、殘黨餘類或ひは流罪、又は死罪、中にも冠者義高は、朝敵の胤なれば、首討つ役は堀の藤內。斯く云ふ海野は檢視の爲の出立ち。根の井と聞きやア其まゝにや捨て置かぬ。者ども、やるな。

直行　事々しき愚人ばら。義高公の御先途を、見屆けぬ其うちは、搦めらるゝ根の井でない。行氏諸とも覺悟なせ。

ト拔打ちに切りつける。行氏搔い潜り

行氏　ソレ、やるな。

ト云ひ捨て行氏下座へ入る。續いて行く次郎直行を侍ひ支へて、どつこいと見得になり、大小三味線、浪の音を交ぜたる鳴り物になり、花々しきタテ。トヾ四人突棒刺叉にて根の井次郎を取卷き、浪の音ばかり、詰め寄せながら下座へ入る。と行列になり、東の半疊場より侍ひ二人、對の羽織看板にて、緋紋羽の油單、笹龍膽の紋つき、挾み箱を擔ぎ出て來る。後より侍ひ一人、同じ形にて薙刀を擔ぎ出て來る。陸尺四人、對の看板、柿の手拭にて頭を包み、鋲打ちの結構なる乘り物を舁き、小動求馬之介、片岡幸之進、麻上下股立ちにて附いて出る。後より局岩藤、割髱、片はづし、帽子を掛け、局の拵らへにて日傘をさし、中老尾上、同じ拵らへにて日傘をさし出て來る。後より腰元、滿汐琴路、腰機、眞弓、出る。後より腰元若柴、定家文庫を持ち出て、同じく常夏、菖蒲、初音、小櫻、いづれも割髱、端下の拵らへにて、銀の煙草盆、袱紗包みを

持つて出て來る。後より侍ひ、羽織看板の形にて、片片油單を掛け、茶瓶を擔ぎ後より茶道一人附いて出る。後より黒羽織の侍ひ二人、鷹揚に出る、後より横雲大膳、熨斗目麻上下にて、黒の裝束の馬に乘り、鎗・挾み箱、草履取り、合羽箱附いて出る。後より足輕曾根崎德兵衞、同じく九平次、同じく押へのあしらへにて付き添ひ、中の間の歩みより花道へ直よく本舞臺へ通る。

岩藤　お乘り物立てい。

皆々　ハア。

ト皆々扣へる。横雲大膳馬より下りる。德兵衞、九平次、花道より扣へる。九平次、乘り物の側へ寄り

九平　姫君樣へ申し上げまする。今日鶴ケ岡八幡へ御社參の御仰せ出され。定めしお氣晴らしがてらと存じますれば、これよりおひろひ遊ばしましたなら、お慰みにもなりませうと存じまする。ナウ、尾上どの。

尾上　左樣でござりまする。いつぞや左衞門祐經どのゝ館にて、六代御前が成行きを御身に比べ、御慈傷の餘りに、御髮を切り拂ひ、剃髮姿におなりなされても、流石は右大將の御娘君、お儘にならぬ所爲か、お心の結ぼれ。おしつらひでも出やうかと、執權片岡幸之進どのゝ計らひにて、今日のお催ほし、少しおひろひ遊ばすもよろしうござりませう。

滿汐　成る程、お二人の仰しやる通り、朝夕に見ればこそあれどと、詠じましたる住吉にも、劣らぬ岸の小松原。

琴路　千代八千代に萬代かけて、姿うつせし鶴龜石。

賤機　まだ若宮の姫君を、祝して龍神影向の、石より堅いお屋敷の、御前勤めも今日は又、打てや囃せや神樂堂。

眞弓　石の舞臺で思ひ出す、高麗藏ならぬ護摩堂に、あひせんとうに打ちならせ。

滿汐　いたみやそこへたれかつら、繻子鬢男が、おき道の中の鳥居へ雪の下。

若柴　道理で日元が辨天さん、お前は引く氣が引き始め、袖振合ふも緣の松。

常夏　數なりませぬわたしらまで。

四人　ほんにお庇で日の正月。

眞弓　眞弓を始め、

賤機　賤機。

滿汐　滿汐。

若柴　若柴。
琴路　琴路。
常夏　常夏。
菖蒲　菖蒲。
小櫻　小櫻まで
賤機　晴れのお供の鶴ケ岡、眺めに飽かぬ
女皆　景色でござりますわいなア。
大膳　なんと兩人、お聞きやつたか。女中と云ふ者は、騷騷しいものではござらぬか。
求馬　表勤めと違ひまして、きつう心遣ひな事でござります。女中方の申さるゝ通り、おひろひ遊ばしますも、お氣晴らしでござりませう。
幸之　成る程、女中方ばかりお附き申し、供の者は門前に控へさせるがよろしうござらうが、大膳どの、如何計らひませう。
大膳　イカサマ、それがようござらう。姫君にはイザ先づこれへ、お入りあつて
尾上　四方の景色を
皆々　御覽あられませう。
ト駕籠の内にて
大姫　限りなき君が爲にと折る花は、時しも分かぬものぞありける。
ト唄になり、乘り物の戸を明けて求馬、草履を出す。岩藤、尾上、兩方より大姫君が手を取る。大姫君、廣振り袖、珠數を持ち、駕籠より出て、上へ通る。
岩藤　なんと大姫君さま、御覽なされましたか。又お屋敷の庭とは違ひ、青海原まで限りなき小松原、暫しが程には、御遊覽遊ばせませいなア。
大姫　まだ色薄き梢の若葉、いづれの諸より調べかと、琴に擬へし松風に誘はれて、八幡詣を幸ひに、御母君へお願ひ申す事あれば、隙取らう。供の者は遠ざけや。
岩藤　求馬どの、御意でござんす。供侍ひを云ひつけさんせ。
求馬　ハア。お乘り物諸とも、いづれもは、門前に控へ召されい。
皆々　ハア。
ト滿汐、賤機、乘り物より香爐、硯を出す。侍ひ衆、馬、乘り物、殘らず下座へ入る。
大膳　イヤ、姫君樣、只今仰せられました、御母公樣へお願ひ申すは、何でござりまするな。

岩藤　姫君樣のお願ひは、御剃髮のお願ひでござりませう。

尾上　憚りながらこの尾上が存じまするには、姫君のお願ひは、お問ひ申すまでもなく、御幼少の砌り、お云ひ號けばかりにて、御運拙なう一戰に、打負け給ふ義仲公の御公達、清水の冠者義高公。今日この由比ケ濱邊に於て堀の藤内仰せを受けられ、お首を賜はるゆゑに、そのお命乞ひでがなござりませう。

求馬　イカサマ、尾上どのゝ云はるゝ通り、その罪を憎んでその人を憎まずとの本文の通り。例へ朝敵謀叛にもせよ、一旦お云ひ號けあるからは、義高公は御婿君、剃髮染衣か但し又、遠流とあればまだしもと、思ひの外なるお身の上。大姫君のお命乞ひと思し召し、これ順當かと、この求馬之介は存じまする。

幸之　默り召されい求馬之介。義仲の猪武者、壽永の亂れに平家を落し、その身は都に止まつて、山家育ちの猿の人眞似。手前極めの朝日將軍。平家に劣らぬ我まゝ氣まま、遂に朝敵謀叛と落ちて、粟津の原で果敢ない最期も、石田の三郎爲久が、前代未聞の高名手柄。その子伜たる冠者義高、助け置いては正眞の、狼を飼つて置くも同然、殺す方が君のお爲サ。

求馬　イヤ、お助け申すが公の御政道。お命乞ひがよろしうござりまする。

幸之　敵の末は根を斷つて、葉を枯らすのが不易の法。

求馬　イヽヤ、お助け申すが、天下の爲。

幸之　イヽヤ、首にするのがこれ順當。

求馬　イヽヤ、お助け申すが。

幸之　イヽヤ、首にするが。

兩人　天下の爲。サア〱〱。

大姫　兩人ともに、爭ひ無用。

兩人　でも。

皆々　姫君樣の御意でござんすぞえ。

大膳　汝、兩人、控へ召されい。下として、いらざる上の取沙汰。この大膳を差措きて、役にも立たぬ詞戰ひ。殊に姫君の御前と云ひ、無禮の振舞ひ。兩人とも下がり召されい。

大姫　いやとよ、今兩人が爭ひも、上を大切に思ふゆゑ。叱りやんな。自ら事は義高君と、云ひ號けとは云ひながら、添ふ事ならぬ敵の血筋。殊に妻たる心も無く、身は菩提の道に入りながら、窃かに君へお願ひ申し、義高君

は法華堂の、專光坊のお弟子とし、お命を助け申さん爲、わざ〳〵爰まで來たわいの。

尾上　流石は右大將の姫君。よくもお心附かせられたるお命乞ひ。義高君にも、さぞお喜びでござりませう。ナア、岩藤さま。

岩藤　どうでござんせうか。マア、この岩藤は、姫君の佛いぢり、一つも合點がゆかぬわいなア。なぜと云うて見やしやんせ。老い朽ちたお身ではあるまいし、花の盛りの御髮をば、惜し氣もなくお摘みなされた、その時のお供は尾上どの。主人に刃物三昧、側でうぢ〳〵見てござる、町人の心と武士の心とは、マア、爰からして違ふわいな。その時この岩藤ならば、此やうなお身の上にさせまいものと、云うて返らぬ事。常々お勸め申す通り、佛道の事は打捨て、思ふ男と添ひ寐して

卜求馬之介に思ひ入れして

嬰兒でも生むが親孝行。子として親に不孝なるは、君に仕へて忠あらじと云ふぢやござんせんか。忠と云へば尾上どのゝ召仕ひは、きつうこなさんを大切にしやるげな。名はなんと云ひましたの。

尾上　ハイ、初と申します。

岩藤　オヽ、それ〳〵、お初であつた。好い女中を置きやしやんした。

尾上　イヤモウ、左樣でもござりませぬ。まだ一向にお館馴れませぬゆゑ、不束勝ちでござります。

滿汐　イヽエ、結句久しく勤めた者よりも、機轉が聞いてお館の口、送り迎へも部屋中の女中を誘ひ、芝居話しもほんの附會ひ、只一心に尾上さまを、大切に思うて居ります。

賤機　その上器量はお館一番、とりなりまひが濱村屋、お里の使ひに小間物屋、買ひ物なぞに行く時は、あれがお初ぢや路考ぢやと、お錠口には人の山

琴路　ほんにあやかり者で、ござりますわいなア。

若柴　成る程、奧にも噂のあるお初が貞心。尾上さま、きつい御評判で

皆々　ござんすわいなア。

滿汐　そして心立てなら

若柴　器量なら

賤機　あんな女子は

皆々　ござんせぬわいの。

常夏　其やうに、初ばつかり褒めてもらひますまい。

菖蒲　わたしぢやとて、あんまり

小櫻　違ひはござんすまい。

常夏　ちつと、色の黒いと白いと云ふばかりぢやわいなア。

初音　なんぢや知らぬが、わたしらを差措いて、お初の評判ばかりぢやの。

大膳　その評判のお初ゆゑ、この大膳が後妻に貰はんと、岩藤どのを頼み置くところ、今に以て返事の無いは、尾上どのゝ不得心か。

尾上　イヤ、その儀は。

大膳　この大膳が不足でござるか。

尾上　全く持ちまして。

岩藤　イヤ、大膳さま、こりやなんでござりまする。あの初には、定まつたる夫があるさうにござります。

大膳　アノ、初には。

菖蒲　ある段ぢやござりませぬ。しかも同じ邸に、夫婦勤めで居りますわいな。

大膳　夫は何と申しますな。

常夏　今日もお供に來やんした。江戸組の新參の足輕、沓根崎德兵衞とやら云うて、門之助によう似た男でござります。

初音　夫婦と云うても表と奧、離れ〳〵の一人寐は、さぞ氣の揉めたものでござんせう。

小櫻　それがな、町方ならば、夜の忍び合ひもなろけれど、お使ひのその外は、出る事ならぬ御奉公。

菖蒲　鵜の色事するやうに、お臺所で顏と顏を、見合はすばかりで、肝心の所を合せいでは、辛氣なものでござりますわいなア。

大膳　尾上どの、初は暇を遣はされい。

尾上　とは、なぜでござりまする。

大膳　知れた事。姫君附きの女中のうち、中老役も勤めらるゝ、おてまへの召仕と、江戸組の足輕と夫婦勤め。一犬吠ゆれば萬犬吠ゆる。外の女中も噂になり、今まで無事に勤めた者も、不義をする心になり、館の亂れ。さう云ふ事なら、なぜそれと疾にも屆け召されぬか。

尾上　二人が事は目見得の折柄、これにお出でなさる岩藤さま……まつた幸之進さままで、お屆け申してござります。

岩藤　イヤ、この岩藤は今聞いたが始めて。いつ屆けさんしたぞ。

尾上　岩藤さまとした事が、桃の節句の御祝儀の折柄、お廣間でお目にかゝり、申し上げましたを、お忘れなされましたか。

岩藤　默らんせ、尾上どの。多くの女中の示しする、局役の岩藤。屆けさんした事忘れて、役目が立ちませうか。成る程、話しのやうには聞いたが、屆ける事なら屆けるやうに、なぜわしが部屋へ來て、斯やう〳〵と、なぜ改めて云はしやんせぬ。御前のよいを鼻に掛け、この岩藤を蔑ろになし、大方これに限らず、つべこべ〳〵と差出口に、餘り阿房にしてもらひますまいぞや。姫君樣へ申し上げます。義高公の御最期までは、餘程間もござりませう程に、八幡へ御參詣遊ばせられ、然るべう存じます。

大姫　自らも、これより直ぐに專光坊に對面なし、義高公のお身の上、直ぐに賴まん。申しつけた品、これへ持ちや。

滿汐　ハア。

　ト滿汐、乘り物より出せし香爐を香盆に載せ、大姫が前へ直し、下座へ下がる。

大姫　この淺絹の香爐は、木曾に擬へしこの一品。母君樣よりこの大姫へ賜はりし品、朝夕手馴れしこの香爐、義高公へ剃髮をお勸め申すに、幸ひのこの一炷き。各々この香爐を持ておぢや。

尾上　ハア。

大姫　又この袈裟衣、義高公への今日の賜物。岩藤、持參してよからう。

岩藤　ハツ。

求馬　世にも有り難き淺絹の香爐。尾上どの、大切に守護召されい。

尾上　畏まりました。

　ト尾上取つて、香爐を取上げ、下座へ下がらうとする。岩藤、後から尾上を突き倒す拍子に、香爐を落し、微塵に碎ける。ト驚ろき恟りする。尾上に詰め寄せ

皆々　これは。

大膳　これは尾上どの、こりやアどう致した儀でござる。粗相も程があるものぢや。世に類無き淺絹の香爐、微塵となつては土くれ同然。こりや、この分では濟みますまい。

岩藤　濟む濟まぬと云ふは常體の事。これ程大切な品をも持ちながら、何に浮かれて其やうに、手に持つた物、落

さんした。

尾上　こりや、後からこなさんが。

岩藤　なんと云はつしやる。

ト賤機、中へ入る。

賤機　この香爐を割りましたは、この賤機、尾上さまの粗相ではござんせぬ。

尾上　イヤ、それでは。

賤機　コレイナ、日頃から兄弟同然にするこの賤機が、怪我をお前に負はせ、なんとするものでござんす。わたしが裾を踏へたゆゑ、取落さんした香爐の形は箇非箇、振分け髮の頃よりも、朝夕手馴れし淺絹の、碎けて見れば意地惡う、曲りくねつた藤の幹、云ふに岩……云はれぬこの場の仕儀。大膳さま、岩藤さま、淺絹の香爐を割りしはこの賤機。如何やうとも仰せつけられて下さりませ。

尾上　コレイナア、賤機さん、お前の心ざしは嬉しいけれども、その身に覺えぬ無實の科。どうマア、側で見て居られう。香爐を割りしは、どこまでもこの尾上。

賤機　イ、エ、私しが粗相で。

尾上　イ、エ、わたしが。

大膳　誰れ彼れと罪を爭ふまでもなし、御前より香爐をお預けなされたは尾上どの、科人に違ひない。誰れかある。館へ引立て召されい。

次郎　最前よりその事を待つて居ました。大切な香爐を、五つに割つた尾上どの。この井上が連れ歸り、割つた數ほど割らにやならぬ。ドレ、引立てようか。

ト立ち上がる。求馬之介、次郎を留めて

求馬　待ち召されい井上次郎。名器を割りしは科なれども、土くれのその爲に、萬物の長たる人に代へる寶がござらうか。今その罪を爭ひし、賤機どのこそお家の寶、外に寶はござらぬぞよ。

次郎　功あつて賞せず、罪あつて誅せずんば、思ふとも化する事能はずと、罪を糺すがお家の掟。そこ退き召されい求馬之介。

ト求馬之介を突き退けて、かゝらうとする。

大姫　井上控へい。

皆々　次郎どの、御意でござんす。

次郎　ハア。

ト次郎扣へる。

大姫　尾上が罪は、この姫が云ひつけう。誰ぞ硯を持ち

や。

賤機　ハツ。

ト賤機、結構なる硯箱に、短册を添へ差出す。大姫、思ひ入れあつて短册を認める

大姫　尾上を罪なす三十一文字。それで讀みや。

尾上　筒井筒五つにかけしまろがたけ、科をばわれが負ひにけらしな。

大姫　香爐を割りしはこの大姫。横雲、井上、自らを兎も角、計らうてよからう。

大膳　サア、それは。

大姫　皆の者、おおや。

尾上　有り難う存じます。

求馬　姫君樣のお入り。

ト唄になり、大姫君先に、賤機始め皆々岩藤に默禮して入る。岩藤、それ〴〵會釋する、尾上、岩藤に默禮する。岩藤、知らぬ顏して居る。尾上、手持ち無き思ひ入れにて、皆々に附き添ひ、大膳、次郎諸とも下座へ入る。求馬之介續いて入らうとする。岩藤、目配せする。常夏、初音、小櫻、菖蒲、求馬之介が行く先へ立ち塞がり

皆々　求馬さん、待たんせいな。

求馬　なんぞ、御用でござりまするな。

岩藤　何事とは餘所々々しい。お前をフツと見染めしより、寐ても覺めても現なく、物や思ふと人白浪、後なき方に行く舟も、風の便りに返り事。深うも賴む玉章を、五月雨ほど送つても、ついに一度のいなせさへ、泣いて暮らして居るわいなア。ちつとは推量してくれても、よいわいな。

常夏　ソレイナア、いつまで其やうに堅苦しい。ちつとは親御を見習うて、色事師にならしやんせ。

菖蒲　返事の無いは、わたしらに遠慮して居やんすか。

小櫻　今日のお供を幸ひに、こちら四人が幕を切つて、岩藤どのゝ日頃の願ひ。

初音　お晴らしなされたおすべりを、松かけてお裾分け。

常夏　嫌應なしのおッ冠せ。

皆々　堪能させにや、なりやんせんわいなア。

求馬　これは又、如何いたした儀でござる。堅い館に勤めながら淫ら千萬。これと申すも岩藤どのゝ躾が惡さ。多くの女中の長をもなさる、おてまへの御名の出る事。最

前も最前で、尾上どのゝ召仕、初とやらんが夫婦勤めさへ、顔を赧めて云ひ募り、理非を分けたるお局の、これが身持ちでござらうか。と申せば物に角が立つ。これまで段々の思し召し、數なりませぬ某を、さほどまでに思うて下さるお心を、何しに仇に存じませう。

岩藤　そのお詞が直ぐに御返事。逢うて怨みが云ひたけれど、まさか顔を見れば面伏せ、コレ、心の丈を書きつくしたこの文、ついそこで讀んで、可愛い事ぢやと思うて下さんせいなア。

ト文を出す。

求馬　イヤ、文は落ち散る物なれば、人目にかゝつては互ひの身の上。

ト逃げかゝるを引留め

岩藤　それぢやに依つてつい爰で、讀んで見て下さんせい。

ト求馬之介が懐へ無理に入れる。求馬之介、逃げかゝるを四人して取巻く。尾上、出かゝりてこの時中へ入り、落ちたる文を取上げる。岩藤と顔を見合せ悄りする。求馬之介、思ひ入れ。

岩藤　姫君様にもお待ち兼ね。わしと一緒に、皆ござんせ。

皆々　サア、お出でなされませ。

ト岩藤先へ、常夏、小櫻、菖蒲附いて下座へ入る。

求馬　尾上どの、その文は。

尾上　サア、ござんせ。

ト尾上、文を懐中して下座へ入る。求馬之介も思ひ入れあつて、下座へ入る。

神樂になりて、浪の音險しく、この松原を斜に引き、破風より大鳥居を引き出す。鶴ヶ岡と云ふ額掛けて舞臺先は浪板になり、後ろの羽目板、立ち木の書き落し、所々に石燈籠を附け、物凄き道具になり、大薩摩、主膳太夫淨瑠璃。

〽御痛しや義高君、朝日と輝く大將も、御運の末は故郷の、波も哀れと由比ヶ濱、居所の羊の刻限り、見るもいぶせき牢輿を、事嚴重に舁き据ゆる。

ト時の太鼓になり、花道より軍兵四人、胴丸の股引、袖無し羽織、陣笠、牢輿を吊つて出て來る。後より堀の藤内、白鉢卷、手甲脛當、陣羽織。宇佐美の三郎祐安、龍神卷の形、海野の太郎行氏。以前の形にて附い

て出て來る。直ぐに本舞臺へ來て牢輿を下ろす。軍兵突棒刺又を後に並べる。

祐安　堀の藤内どの、海野の太郎どの、今日のお役目、御苦勞千萬でござります。

藤內　先年海野の太郎と諸ともに、鎌倉へ下られし清水の冠者義高、姬君の御聟君とは云ひながら、朝敵謀叛の片割れなれば、固く笹目ヶ谷の土牢を設らへ、守護の役目同然、工藤左衞門祐經どの、文治三年より今年まで、七ヶ年の入牢。お心遣ひの段察し入つてござる。

祐安　主君祐經、預かり奉りし清水の冠者義高君、何卒御助命奉らんと、皆と心を痛めますれど、朝敵の汚名、殊更五月下旬富士の裾野に於て、夏狩りの御催ほし、彼れこれ打捨て置かれぬ殘黨餘類。由比ヶ濱邊に出だし、御刑罪と仰せ出されてござるゆゑ、斯く申す宇佐美の三郎、守護仕つてござります。

行氏　今日まで命生き延びたは、まだしも、義高どの、仕合せと申すもの。根が極まつた上からは、一時も早く首にするがましでござる。最前も木曾の郎黨、根の井の次郎に途中にて出合ひ、搦め捕らんと存じたところに、なかなか者で手剛い奴、たうとう取逃がしてござる。又ぞろこれへ參らぬうち、刑罪いたすがようござらう。

藤內　成る程、一刻も早く、この世の暇を取らするでござらう。宇佐美の三郎、義高を引出し召されい。

祐安　心得てござる。

ト　また淨瑠璃になる。

〽窶れ果てたる御身にも、忘れ給はぬ普門品、大慈大悲の力無く、辿り出でさせ給ひける、御有樣ぞ果敢なけれ。

ト　波の音になり、祐安、牢輿の戸を明けて、内より清水の冠者義高、おどろの髮、窶れ果てたる姿にて、經文を持ち出て來る。軍兵、岩臺の上に敷皮を敷き、皆皆立ち寄り、義高を敷皮の上に直す。

〽良將勇士も、運の盡きたる壽永の頃は、義仲公諸ともにさしも名高き平家の一門、只一戰に都を落し、勢ひ海內を覆うて、武名天下に遍く輝き、空飛ぶ鳥も恐れし御身も、今はいぶせき土の牢。今日は濱邊の波の泡。さぞ御無念に思されんと存ずれば、思ひながら、お痛しう存じまする。

藤內　宇佐美の三郎、措かつしやい。此やうな態になると云ふも、親の因果が子に報ふ、子孫を絶やす朝敵謀叛。

頼朝公と心を合せ、平家を落せば今頃は、二ヶ國や三ヶ國の、主になるは知れた事。馬鹿々々しい事ぢやないか。まだ討死でもしてしまへば、今の恥はござらぬサ。

行氏　義高どの、こなたと一緒に鎌倉へ下つた時、海野は直參に列なり、今日は存じの役目を受けた。こなたの最期を見屆くると云ふは、變つたものぢやござらぬか。

祐安　義高君、御最期も近附きたれば、仰せ置かれる事あらば、この三郎に仰せ置かれませう。

義高　この年、木曾に窓しく、須彌山碎けて磐石に花開く、我れも清和の流れにして、地下の科人同然に、由比ヶ濱邊の打ち首を、嘆くにてはなけれども、一旦大姫と縁を組み、紫金の印とて贈られし、譽の觀世音。

ト懷中より出し

義高死後に、然るべき靈地へ納め得させよ、三郎祐安。

祐安　委細承知仕つてござります。

藤内　時刻は移る。堀の藤内、お首賜はれ義高君、覺悟しやれ。

義高　南無大慈大悲の觀世音、願はくば無縁の慈悲を垂れ導きなさせたび給へ。

ト厨子入りの觀音を戴く。藤内、後へ廻り、刀を拔いて

藤内　今が最期だ、觀念。

ト刀を振り上げる。

大姫　待つた〳〵。

ト下座より大姫君先に、尾上、以前の袈裟衣を持つて走り出て來る。尾上、藤内が刀を留めて

尾上　姫君の御意ぢや。待つた〳〵。

藤内　時刻が移れば役目の妨げ、姫君であらうと、どなたであらうと、疾々そこを退き召されい。

大姫　清水の冠者義高君を赦免の御書。

祐安　ナニ、義高を御赦免とや。

兩人　こりや、どうだ。

尾上　義高君へ申し上げます。お云ひ號けばかりにて、御對面もなけれども、今日御最期と承はり、大姫君のお命乞ひ。出家を勸め申さんと、これまで參りましたわいなア。

義高　ナニ、大姫とや。

ト義高、思ひ入れ。

大姫　義高さま、お目にかゝるは今が初めて。自らこそ、云ひ號けの大姫でござんすわいなア。この鎌倉へお下り

なされしは七年以前、嬉しや殿御のお顏も見ようと、樂しむ甲斐もなく、情なや朝敵謀叛の片割れと、笹日ケ谷の土の牢。所詮無い縁と諦らめて、あなたに先立ち、髻を切つて佛の御弟子となり、義仲公より賜はりし、朝日の彌陀をあなたと思ひ、明暮れ肌身を離さずに、祈りし印は今日のお命乞ひ、首尾よう濟ます彌陀の利益。あなたも今日から釋門にお入りなされ、未來で添うて下さんせいなア。

義高　數へて見れば七年の、今日は都を立出でゝ、兼ねて結びし縁なれば、鎌倉どのを賴みにて、名乘りも遠く思ひたる、勢田の長橋打越して、立寄る影は鏡山、我が身ながらも恥かしく、さのみ年經ぬ身なれども、老蘇の森は今身の上、たま／＼事問ふものとては、岸の松風、谷の猿、日の目も微かな土の牢。勢ひも無き冠者義高、命存らへ人々に、面を合すは恥の恥。天晴れ首を刎ねられて、先立ち給ふ父義仲公、乳人の今井を始めとして、義を鐵石に討死せし、忠義の家の子郎黨に、對面なさんと死を樂しみ、觀念なせし太刀の下。我が妻ながら逢ふが初めて。さてはおことが云ひ號けの、大姫にてありしよなア。

大姫　兼ねては君をお懷がね。同じ清和の末廣く、結びし縁の印とて、君より自らへ賜はりし、朝日の彌陀。

ト大姫、厨子の彌陀を出す。

尼上　賴朝公より義高君へ贈られしは、御開運の髻の觀世音。いま御最期の場に臨んで、御助命あるも觀音力。菩薩の誓ひ空しからず、これぞ利益疑ひなく、剃髮染衣の身とならせ、せめてはお命恙なう、兼ね／＼賴みし法華堂へ入らせられ、專光坊を導師となされ、大姫君のお心を籠められし袈裟衣、御身に纏はせ參らせんと、これまで持參いたしてござります。

義高　いやとよ姫が心ざし、無足にするにあらねども、形を變へて生き殘り、あの坊主こそ義仲が、同苗冠者義高、斯程に命は惜しきものかと、指さし誇られ笑はれんより來世こそ賴もしけれ。疾く首打てよ、堀の藤内。

藤内　流石は冠者義高君。いゝ覺悟だ。坊主になつて生恥を搔かうより、首になつて大地を渡して、諸人に面を曝すのが、まだしもまし。今打ち落す、覺悟しやれ。

行氏　それ／＼、朝敵の片割れを生け置いちやア、先づ第一、君の寢覺めも惡い。藤內、早く首におしやれ。

藤内　心得でござる。

祐安　御所待つた。今聞かゝる通り、義高君のお命は、大姫君申し出され、御助命あるからは、我れ〳〵が役目はこれまで。御成敗には及びますまい。

藤内　イヽヤ、世の常の科人とは違ふ。假にも禁庭を騷がし、推して將軍職の官を奪ひ、朝敵叛は一門の面汚し。生け置いては都の聞え。上を學ぶ下なれば、此まゝ濟ましちやア鎌倉の政道は暗闇。堀の藤内、お首を賜はる。

ト立ちかゝる。尾上支へて

尾上　イヽヤ、お待ちなされい藤内どの、例へ謀叛朝敵にもせよ、君は正しく御聟君。政子御前のおいつくしみ深く、姫君諸とも御助命のお願ひ。我が君にもその昔、池の禪尼に助けられ、伊豆の伊東へ配流の事も思し召し出され、願ひの通り御出家させよと、御自筆の御書下し置かるゝ上は、憚る事なき御身の上。達て刑罪なさんすりや、君の御諚を背くも同然。それでもお首打たしやんすか。

藤内　サア、それは。

尾上　御書を反古になさんすりや、檢視は勿論、太刀取りまで、その分には濟みますまいがな。サア、御返答承はりたい。

兩人　サア、その儀は。

三人　サア〳〵〳〵。

尾上　早う館へお歸りなさんせ。

藤内　然らばこの儀を言上いたさう。

行氏　さゝさりながら。

尾上　お役目御苦勞。

行氏　者ども參れ。

ト時の太鼓になり、藤内、行氏、軍兵附いて、祐安も花道へ入る。

尾上　イザ、この上は義高君、一刻も早う法華寺へ入らせられ、然るべう存じ奉ります。

大姫　この大姫とてもその通り、例へ髮は下さずとも、朝日の彌陀を我が念佛。君にも御出家まし〳〵て、佛道修行の道德の師となり給はゞ、我れらが喜び、この上やござりませうかいなア。

義高　云ひ號けばかりにて、祝言さへせぬこの義高を、さほどまで思ふは、矢張り會者定離、哀別離苦の迷ひを晴らし、平等大慧の船を泛べ、今こそ入りし沙門の道、迷うたり〳〵。緣あり仇あり報いあり、柳は翠、花は紅ゐ、浮世の中は露の夢。悟れば我れも佛なり、有漏路より無

漏路へ歸る一休み。雨降らば降れ、風吹かば吹け。

大姫　そんなら姫が願ひの通り

尾上　御出家お遂げ遊ばしますか。

義高　目前の境界に迷ひ、來世を知らざれば禽獸に同じ。これより直ぐに法華三昧に入り、專光坊に道を求めん。

ト立ちかゝる。

尾上　左樣なら、お供申しつけませう。

義高　イヤ〱、それも迷ひのうち。出家とは家を出づる。家を出づれば親も無し。一切衆生悉くこれ我が子。この袈裟衣が卽ち眷屬。

ト袱紗のまゝ腰へ附ける。

尾上　幸ひ姿にしべ草履、乾ける人に水を與へ、跣にて行く人に、草履を與ふも法の道。

ト尾上、見物へ見せて草履を穿かせる。

義高　法の門出にたゞ頼め、しめじが原のさしも草。

ト觀音の厨子を懐中する。

大姫　さしも名高き御大將、義仲公の御公達。

尾上　御運も今はつきゞの、入狹の闇にとぼとぼと、友無し千鳥。

大姫　やもめ鳥。

義高　恩愛捨てゝ無爲に入る。

尾上　變り果てたる御姿。

大姫　これが見納め、隨分御無事。

義高　姫も堅固で。

尾上　佛法修行に事替へて。

大姫　未來は必らず。

義高　一蓮托生。

大姫　エヽ、忝ない。

ト下座より井上次郎走り出で

次郎　姫君樣へ申し上げます。御母公政子さま、お尋ねござりますれば、尾上どの諸ともに、お館へ御歸館あつて御尤もに存じます。

大姫　そんなら、冠者義高君。

義高　姫は猶更、尾上とやら、心遣ひ過分なるぞ。

大姫　最早これにて、お別れ申さん。

尾上　姫君樣。

義高　兩人、さらば。

次郎　イザ、入らせられませう。

ト唄になる。心を殘す大姫を、井上次郎制して下座へ入る。義高、後を見送り、思ひ入れあつて花道へかゝ

る。下座より足輕九平次出て來り

九平　清水の冠者義高君、待つた。

義高　なんと。

九平　申し上げたき一條あり、暫らくお待ち下さりませう。

義高　昨日まで妻里に捕はれ、今日は死刑を遁がれて沙門に入る冠者義高、又ぞろ止むる其方は。

九平　君にも七年土の牢、窶れ果てたる御有樣、昔の姿どこへやら。平家を追討の御勵しに引替へて、見紛ふばかりの破れ衣に、召しも習はぬしべ草履。これが源氏の御大將、木曾の義仲の御公達、清水の冠者義高君と、思へば涙が零れますわえ。

義高　して、其方は。

九平　斯く下樣と成り下り、お見忘れもござりませう。斯く云ふ某は、お家の御家人、手塚の太郎光盛でござります。

ト義高見て、惆りする。

義高　如何にも形は變れども、變らぬ金刺光盛なるか。其方とてもその如く、奴僕とまで成り下り、姿もそぼろの有樣を、見るにつけても、我れと我が身に愛憎も盡き、直ぐに出家が急がるゝ。

九平　御出家とは情ない。王孫を出で遠からぬ、六孫王經基公より、連綿たる源氏の棟梁、八幡太郎義家公の後胤、朝日將軍とその名を一天四海に輝かせ、鬼神と云はれたる御勵も御運の末、粟津ヶ原の御最期を、無念には思されずや。口惜しいとは思はつしやりませぬか。君には賴朝公のお舅金、五月下旬の富士の御狩を幸ひに、鎌倉へ討入り、大姬君を娶られて、賴家、實朝を失なはば、濡れ手で粟の六十餘州、後閙めるが父君への御孝行。物の數にはあらねども、斯く云ふ手塚太郎光盛も、忍び忍びに殘黨を集め置きしは、何卒君に廻り合せ、大義を勸め申さん爲、出家の事は思し召し切りあつて、家名を起す御企てが、專一と存じ奉ります。

義高　其方が申す條、一理あるに似たれども、父にて候ふ義仲公、推して都へ亂入して、召しもなき將軍職の官位を奪ひ、自ら朝日將軍と、權威に誇りし罪、おのれを責むる有爲轉變。何しに人を怨むべきやうやある。かゝる叛逆を思ひ立たんより、禪林に入つて父上の、菩提吊らふがまだしも順當。

九平　世にならぶれゝば心まで、卑怯未練になるものか。

若君樣、さほどお命惜しうござりまするか。さう云ふ腑甲斐ないお心なら、所詮お目にかけたとて、口惜しうもござりますまい。

ト懐中より鍬形を出し

これこそ御父義仲公、御最期まで召されたる龍頭の前立て物。

ト義高キッと見て

義高　ナニ、父上の召されたる、龍頭の鍬形とや。

ト思ひ入れあつて

父上樣、お懐かしや〳〵。

九平　この鍬形の形見となりしも、誰が庇、皆頼朝の仕業ならずや。現在仇敵を見ぬ顔は、命が惜しいか、敵が怖いか。さう云ふ腑甲斐ない心なら、義仲公になり代り、義高どのへ強意見。

ト九平次、義高を引寄せ

こなたは父上樣の、弔ひ合戰をしようとは思はつしやりませぬか。思へば果敢ない御最期を、あなたは御存じござりませぬか。御存じなくば光盛が、語り申さん、腰拔けどの、よつく聞かれい。

ト義高、九平次思ひ入れあつて、合ひ方になり

義高　コレ。

九平　誠や槿花は一日の夢。都は義經に追ひ立てられ、主從七騎に打ちなされ、近江路さして落ち給ふ。見返り見れば付き添ふものは兼平ばかり。流石に猛き大將も、呆れて今はこれまでと、腹切らんと身繕ろひなす、その所へ、又も追ひ來る敵の大勢。兼平防ぎ矢仕らんと、駒の頭を引返す。大殿御諚ありけるは、多くの敵を遁がれしも、汝と一緒にならんず所存と、同じく駒を引返し給へば、兼平制して、こは口惜しき御諚かな、雜兵端武者の手にかゝらんより、疾く〳〵御自害あられよと、勸めに是非なく粟津ケ原、松原さして落ち給ふ。頃は睦月の末なれば、まだ解けやらぬ薄氷、馬を深田へ乘入れば、引けども上がらず打てども行かぬ、望月の駒頭も見えざれば、鎧脫ぐ間も無念やと、旣に自害と見る所に、いづくよりかは來りけん、運の盡き弓流れ矢に、敢へなくおなりなされたり。田の面に落ちるこの鍬形。

ト義高思ひ入れ。

無念にはござりませぬか。口惜しくは思し召されませぬか、若君樣。

義高　いま父上の御最期を聞くにつけ、思ひ立つたる我が

大望。

九平　若君の大望なら、大塔伽藍か但し又、一山開く願望か。

義高　坊主嫌ひだ。づく入嫌だ。

九平　なんと。

義高　我が願ひは頼朝の素頭取つて、父尊靈の供養に供へる。

九平　然らば光盛が御意見お用ひあつて、お心を飜へし

義高　五月下旬の留守を幸ひ。

九平　大姫君を囮になし

義高　鎌倉御所へ忍び入り

九平　不意に打つて三大將。

義高　コリヤ。

ト兩人思ひ入れ。義高、思ひ入れあつて、以前の袈裟衣を寸々に引裂く。

九平　お出かしなされた。

義高　我が本心を明かすは端近。あの松蔭。光盛來れ。

九平　入られせられませう。

ト立たうとする。根井の次郎直行、前へ出て窺ひ、よろしく出て留めて

直行　我が君様、その御企てはお止まり下さりませう。

ト九平次、愕りする。

九平　何者と思ひしに、絶えて久しき根の井の次郎。君御謀叛の思し召しあらば、とも〲お勸め申すべき身を以て、止め召された所存は如何に。

直行　直行のお止め申すは君のお爲。及ばぬ企てあらんより、御謀叛はお止まり下さりませう。

ト義高、直行を引寄せ

義高　燕雀なんぞ大鵬の心を知らんや。動き廻ると踏み殺すぞ。

直行　三度諫めて身退く。伯夷叔齊は取るに足らず、比干は諫めて胸を裂く。我れは諫めてお手討ち合點。我が君様、何卒お聞濟みあつて、お止まり下さりませう。

義高　光盛。

ト兩人、顏を見合せ、義高、直行を突き飛ばす。九平次拔討ちに直行が首を切り、思ひ入れ。

兩人　ム、、ハ、、、、。

ト時の鐘鳴る。奥にて「大姫君さまの御歸館」と呼ぶ。

九平　あれは。

ト九平次、義高、囁き、ちよつと小隠れする。九平次、下座なして居る。奥より以前の行列、幕明きの通り順よく出て來る。直ぐに花道へかゝる。九平次やり過し、合羽箱持ちを引留める。中間、何心なく合羽箱を下ろすと、九平次、側へ立寄り、手ばしかく締め殺し、合羽箱の蓋を明け、義高を連れて來り、中へ入れ、擔いで見て、片荷するゆゑ、片方へ直行の死骸を入れ、持つて見て、思ひ入れあつて、中間の死骸を抱へ、前の波間へ打込む。以前より徳兵衛、出かゝり居て、この間に合羽箱を擔ぎ、花道へかゝる。九平次合羽箱がないゆゑ、思ひ入れあつて徳兵衛を見て恟りする。徳兵衛笑ふ。これをキッカケに

拍子幕

ト幕の外、徳兵衛、合羽箱を擔ぎ、九平次、合點のゆかぬ思ひ入れにて、矢張り行列を振り、向うへ入る。

二幕目　御殿の場

役名――頼朝息女、大姫。清水冠者義高。若黨、曾根崎徳兵衛。同、九平次 實ハ手塚太郎光盛。横雲大膳。片岡幸之進。局、岩藤。腰元、常夏。同、初音。同、菖蒲。同、小櫻。同、賤機。同、滿汐。同、琴路。求女之介。下女、お初。

本舞臺、三間の間、御殿のかゝり、正面、金張りつけ襖張りの障子。平舞臺に徳兵衛、前幕の形にて合羽箱を擔いで居る。九平次、前幕の形にて徳兵衛を引留めて居る。琴唄にて幕明く。

ト直ぐに徳兵衛、振り切つて行かうとする。九平次、留めて

九平　マア、待ちやれ。

徳兵　放さつしやれ。

九平　お主も人ぢらしな。その合羽箱をどうするのだ。

徳兵　どうするものだ。片岡幸之進さまへ、斯やう／＼でござりますと申し上げるのサ。

九平　コレ／＼、申し上げて堪るものか。その合羽箱には大きに曰くがある程に、返してくれ。

徳兵　なんぼ仲の好いお主の事でも、昨日からお長屋内を擔ぎ廻つて、人々も隠して居たこの合羽箱。サアと云つて渡されるものか。

九平　コレ、そこがお身と兄弟同然にする、この九平次が事ぢやないか。おれがこれ程に、お主を賴む事。よくよくの事だと思つて、渡してくれ〳〵。

德兵　おれも渡してはやりたいが、ひよつと後日に、なんぞ事が起つた時には、この德兵衞が身にかゝる事ぢやに依つて。

九平　コレサ、九平次が難儀となる事なら、お主もかぶつてくりやれな。

德兵　それも事に依つたら、かぶるまいものでもないが、この合羽箱ばかりは、

九平　おきやアがれ。そんならよいワ。その合羽箱を幸之進さまへなりと、大膳さまへなりと持つて行け。それがならざア、われも百年目だ。

德兵　なぜ〳〵。

九平　この九平次も默つては居ない。お局の岩藤さまへ、足輕の德兵衞と申す者が、尾上さまの召仕、お初と申す者と、斯やう〳〵と申し上ぐれば、只さへ意地の惡い岩藤さま、主人尾上さまから先へ、お咎めだ。われも待つて居れよ。

德兵　コレ〳〵、お主も男のやうにもない。この德兵衞とお初と譯がある事を、云はれて堪るものか。待つてくりやれ〳〵。

九平　イヤ〳〵、お主は構はず、合羽箱を持つて行きやれ。

德兵　コレ〳〵、お主の方に譯のある合羽箱なら、返さう程に、待ちやれ。

九平　留める事はない。放せ〳〵。

德兵　そんなら、どうでも、申し上げる氣か。

九平　尾上どのから先へ、とんだ目に遭はして見せべい。

德兵　さう云へば九平次、もう、愛想盡かしだた。

九平　われとおれは緣切りよ。

德兵　待て。あのお初とおれは、どうなつてもよいが、尾上さまのお名を出しては、おれより先づ可哀さうに、お初が立たぬ。これ程に云ふ事を、振りもぎつて岩藤さまへ申し上げうと、イヤ、お主は只はやらぬ。

九平　喧嘩越しになつて云へば、一番云つて見せうワ。

德兵　此方も合羽箱は遣らねえワ。

九平　退きやアがれ。

德兵　ならない〳〵。

九平　退きやアがれ。

德兵　待ちやアがれ。

トてんつゝになり、花道よりお初、部屋方の拵らへ、油白粉の袋を提げ、直ぐに本舞臺へ來て二人を引分け

はつ　德兵衞どの、待つた〳〵。

德兵　お初、退きやれ〳〵。

はつ　サア、退けなら退かうが、マア、どう云ふ事でござんすぞえ。

九平　譯を聞きたくば聞かせうが、あんまり德兵衞が、男のやうにもない。今どうするか見やアがれ。

はつ　サア、お前の腹の立つ事なら、どのやうにもならう。マア、料簡して下さんせ。

九平　外の者でもなし、こなたの云ふ事なら、料簡もしやうが、あんまり忌々しい。

はつ　德兵衞どの、合點がゆきませぬ。どう云ふ事で九平次どのと喧嘩口論。御門外でもある事か、このお庭先で、何事が起つた事ぢやえ。

德兵　サア、九平次とおれとは、部屋が違つても兄弟同然なれど、おれが蟲に觸つたは、お主が旦那の尾上さまの、お身の上にかゝはる事を、意地惡の岩藤どのへ云はうと云ふゆゑ、この出入りサ。

はつ　すりや、旦那尾上さまのお身の上にかゝはる事を、岩藤さまへ申し上げうと云うたかえ。

德兵　サア、それからの事よ。

はつ　さう聞いてはわたしが、それぎりにはなりませぬ。九平次どの、いま聞けば尾上さまのお身の上に、かゝはる事を申し上げうと云うたのかえ。

九平　この九平次が云つたのサ。

はつ　そりや又、なんで云つたのぢや。

九平　お身樣の事で。

はつ　お初が事でかえ。

九平　あの德兵衞とは在所からの夫婦でござると申しましたは僞はり事、パッと致した色事でござりますと、岩藤さまへ申し上げりや、尾上どのゝ不吟味になつて、どうならうかは知れない。この九平次には、尾上さまには頓着がないが、德兵衞が身の上の、六段目だと思つて居やれサ。

はつ　なんの事かと思うたが、德兵衞どのとわたしが、色がましい事を申し上げうと云ふのかえ。

九平　そんなものよ。

はつ　随分申し上げたがよいわいな。二人が仲は尾上さまも御存じの上で、お使ひなさるゝ事なれば大事ない。徳兵衛の事を、意地悪う云ふ氣なら、わしも九平次どのゝ事を、幸之進さまへ、斯やう／＼でござりますと、日頃の事を、たんと申し上げるわいな。

九平　コレ、野暮め。それを云つてくれては、お堪りはない。そんなら徳兵衛の事は云はぬ程に、おれの事は云ふまいぞよ。

はつ　イエ／＼、此やうな折が幸ひぢやに依つて、ざつと申し上げう。

九平　コレ／＼どうしたものだ。あの徳兵衛とは兄弟のやうにするこの九平次が事。敵同士ぢやあんまいし、云つてくれろとは云はないぢやないか。

はつ　イエ／＼、それではわたしや、徳兵衛どのゝ前へ立たぬわいなア。

九平　サア、あの徳兵衛が所は、どのやうにもおれが挨拶をして、浪風なしにする程に、マア／＼、なんにも知らぬ振りで居てもらひたい。

はつ　それ程に云はんす事なら、わたしが方はよい程に、徳兵衛どのへ挨拶したがよいわいなア。

九平　合點だ／＼。コレ、徳兵衛。

ト徳兵衛が側へ行く。

徳兵　云ひ分があるなら聞くべい。

九平　どうして、お身様に云ひ分があるものだ。今のはおれが悪かつたに依つて、堪忍しやれ／＼。

徳兵　お身が堪忍しろと云ふに、料簡ならぬと云ふも野暮だ。この徳兵衛が云つた事も、氣に觸るなら堪忍しやれ。

兩人　水サ／＼。

九平　サア、お初どん、これでよしか。

はつ　其やうに挨拶して下さんすりや、何も云ふ氣はござんせぬわいなア。

九平　徳兵衛、こんなむき真面目な女房を持つて、さぞ樂しみであらうな。

徳兵　ナニサ、又あのお初は、三浦育ちの土氣が取れぬから、野暮の癖に固苦しくつて、なるものぢやない。

九平　成る程。さう聞けば三浦の生れさうなが、親は漁師か百姓か。

徳兵　聞いてくりやれ。松井田竹八と云ふ、キツとした浪人の

はつ　コレ〳〵、何を其やうに、親元の話しする事があるかいな。九平次どのも、根掘り葉掘り聞かいでも、よいわいなア。
徳兵　アレ〳〵、この屋敷に御奉公して居て、侍ひの子と云ふを、兎角嫌がつたものサ。
はつ　そりやモウ、隱しても隱さいでもよい事ぢや。それも尾上さまへ、氣の毒でござんすわいなア。
九平　それ〳〵、さうであらう。あの尾上さまは、慥か雪の下の町人、岡本屋佐五右衞門と云ふ者の娘だと云ふ事。町人の娘にも、あんな女中もあるものかいな。
はつ　サア、わたしが口から、旦那樣の事をお褒め申すは、どうやらをかしいものぢやが、それは〳〵結構なお方樣、御奉公は御大切に勤め遊ばし、御朋輩方のお附合ひが好うて、親御樣へはお孝行。人使ひと云うてはお慈悲深い。去年の春からあなたへお附き申して居りまする。わたしのやうな者まで、ほんに有り難い旦那樣。あなたなら一生お側に居たいと、思ふやうぢやわいな。
九平　さうであらう〳〵。
徳兵　その物堅い尾上さまに、生野暮のこのお初が、お側に居る事だに依つて、サア冗談も云はれる事か、この頃ぢやアこのお屋敷に、夫婦ながら勤めて居ると云ふ名ばかり。見ず知らずの他人より、きついものよ。なんと九平次、女の堅いにも、困つたものではないか。
九平　マア、見かけから甲斐々々しく見えるに依つて、定めて爰に
ト胸を叩いて
ぴんと錠が下りて居るであらう。時に今日は、どこへお使ひに行くのぢや。
はつ　旦那樣の御用で、白銀町の觀音さまへ、お詣り申し、それから住吉町の松本や、人形町の菊井で、買ひ物をして參りました。
徳兵　さう廻つては、餘ッぽどの道だが、ひだるからう。そして、定めし尾上さまのお宿へ寄つて、何ぞしめて來たのか。
はつ　イエ〳〵、旦那樣が御不自由であらうと思ふゆゑ、急いで歸りました。
九平　ひだるからうと云へば、それ〳〵徳兵衞、後に逢はう。
ト合羽箱を擔ぎ、沒義道に下座へ入る。合ひ方。
はつ　あの九平次どのゝ思ひ出したやうに、ありやマア、

なんぢやあらうな。

德兵　あれには譯のある事よ。

はつ　さうではあらうけれど、挨拶もなしに、合點のゆかぬ事ぢやわいなア。

德兵　合點のゆかぬと云ふは、お初、お主が合點がゆかぬ。此やうに逢はずに居ても氣が濟むか。

はつ　なんの、わたしぢやとて、氣が濟むものでござんすぞいなア。

德兵　濟まざア濟むやうに、淺草の奧山、切り通しの水茶屋で、その位な首尾の出來ぬ事はあるまいに、大方今ではこの德兵衞が事は、忘れて居るであらう。お初、あんまり久し振りぢやないか。

トお初を引寄せる。

はつ　これはしたり、爰をどこぢやと思はしやんす。大姬君さまのお庭先、其やうな事がなくてさへお法度。德兵衞は淫らな事もあらうかと、蔭では人が云ふぢやないかえ。女夫は女夫、御奉公は御奉公。二人ながら首尾ようお暇の出た上では、どうしてもようござんすが、互ひに今の身の上では、御奉公が大切ぢやないかいな。女のわたしでさへ嗜なんで居るものを、お前もちつと嗜なんだがよいわいな。

德兵　サア、眞面目になつたワ。

はつ　サア、わたしぢやと云うて、お前を手離して置いては氣が濟まぬけれども、淫らな事あつては、御法度を背くと思へばこそ、九平次どのが兎やかう……それさへキツと嗜なんで、お前に云はぬ程の事ぢやもの。よく／＼な事ぢやと思うて、重ねてから座興にも、嫌らしい事云うて下さんすな。

德兵　割り膝にならにやなるまい。

はつ　旦那のお名が出るわいなア。

德兵　石部金吉金兜。

はつ　御奉公が大切ぢやわいな。

德兵　左樣々々。

ト德兵衞眞面目になり、手を突き居る。屋體の内にて

幸之　誰れぢや。何者ぢや。

はつ　ヤア、あのお聲は。

德兵　慥か片岡幸之進さま。

ト合ひ方になる。簾上がると德兵衞、お初、逃げようとする。幸之進、舞臺へ來て

幸之　それに居るは何者ぢや。
德兵　ハイ、私しは足輕役を勤めまする、曾根崎德兵衞と申す者でござりまする。
幸之　それなる女は何者ぢや。
はつ　ハイ、私しは尾上さまの召仕、初と申す者でござりまする。
幸之　それ〳〵、部屋方を勤むる者の中に、初と申す者があると申す事であつた。其方、尾上どのゝ召仕か。
はつ　左樣でござりまする。
幸之　足輕德兵衞と云ひ、部屋方者の法度と云ひ、參るまじき所へ、何用あつて參つたのぢや。
德兵　サア、それは何やらで、御用があつて參りました。オ、、それ〳〵、慥か合羽箱を姬君樣が、御覽なされたいと申す事で、ハイ拙者は合羽箱に擔がれて參りました。
幸之　何を申す。
德兵　闇雲でござります。
幸之　初は何しに參つたのぢや。
はつ　ハイ、私しは尾上の使ひに參りましてござりまするが、今朝程より部屋に居りませぬゆゑ、なんぞ尾上が用事もござりませうかと存じまして、心の急きます儘に、これまで上がりましてござります。不調法は御免なされて下さりませ。
幸之　今朝より使ひに參り、部屋に居らぬに依つて、尾上どのゝ用事もあつたかと、取りあへずこの所へ參るからは、不調法とは云へども、主を大切に思うての事、この幸之進咎めはせぬ。その通り尾上どのへ申して、貞節な者と申して遣はさう。この所に控へて居れ。
はつ　有り難うござりまする。
幸之　コリヤ〳〵德兵衞、よい所で逢うた。其方達が組なそでは、この度姬君樣のお命乞ありし、淸水冠者義高公の儀を、お助け申すがよいか、又は首級を賜はりしがよいか。何れがよいと申して居るぞ。
德兵　早速申すも異なものでござりますが、義高公のお命乞ひをなされましたる、姬君樣の、餘り佛道にお入りなされまするゆゑ、却つて禍ひの種にもなりませうかと、お噂を申し上げ居りまする。
幸之　其方はなか〳〵正直ぢや。然らば御助命の儀は
德兵　さりとは惡い料簡でござります。
幸之　義高公をお助け申せし事は、全く姬君樣の思し召し

でもない事ぢや。斯く申す幸之進も、お勸め申し上げたれば、過ちもあれば身共が越度になる事。義高公のお命をお助け申せしは、例しのある事ぢや。

徳兵　そりや又、何者を鑑となされましたぞ。

幸之　平家の侍ひ、齋藤別當實盛を手本にしたのぢや。

徳兵　アノ實盛を……鑑になされましたか。

幸之　如何にも。頃は久壽二年春、惡源太義平が爲に、義賢討たれ給ひて、幼名は駒王どのと申して、やうやく二歳にて在しませし義仲どのをば、助け參らせしは實盛なる由。成長の後は平家の御敵ならんとは心も附かず、駒王どのを權の頭兼遠へ渡したるは、仁に似て仁に非ず、その實盛が不忠に例ひ、義高公をお助け申したのぢや。

徳兵　御意でござりまするが、實盛は不忠の武士ではござりません。飽くまで平家へ心ざしを盡し、篠原にて討死仕りましたからは、平家へは無二の忠臣でござりませぬか。

幸之　成る程、こりや、其方が申す通り、一旦義仲どのをお助け申せしは、二心もあるやうなれども、宗盛公より石打ちの征矢を負ひ、赤地の錦の直衣を申し請けて、討死なしたるは、誠に無二の忠臣。この實盛は木曾の身内に於て、誰れやらに討たれたな。

徳兵　手塚太郎……とやらに討たれましてござりまする。

幸之　其方は、よう覺えて居る。實盛を討つたるは光盛であつたか。

徳兵　左樣でござりまする。

幸之　その實盛に、慥か齋藤五國武とか申す、伜があつたと聞いたが、知らぬか。

徳兵　その齋藤五は、どうやら致しましたか、存じませぬ。

幸之　さうであらう。義仲どのを助け參らせても、二君に仕へぬは武士の誠。義高公をお助け申したるも、幸之進が再び二君に仕へぬ心ゆゑ、不忠にもなるまいかえ。

徳兵　左樣でござりまする。

幸之　イヤ、時に徳兵衛、これは物の例へぢやが、先づ其方が光盛に討たれたる、實盛が伜國武ならば、父の敵と附け狙ひ、手塚の太郎を討つ心か。

徳兵　どう致しまして、拙者が齋藤五でござりましても、只今の身の上は、姫君樣の御家來、私しの敵討は思ひ斷つて居ります。

幸之　すりや、當時の御奉公が大切ゆゑ。

徳兵　矢張り足輕を、勤めまする心でござりまする。
幸之　左様なら其方はそれにして、コリヤ〳〵、初、それへ。なんと初、つかぬ事ぢやが、其方は尾上どのには、いつ頃より勤めて居るぞ。
はつ　ハイ、去年の三月より、今年の春も首尾よう重年いたしまして、まだ丸二年居りませぬやうにござりまする。
幸之　すりや、年季奉公と云ふでもないか。
はつ　僅か一年半季の、身の上でござりまする。
幸之　然らば只今、親許より縁談の事を申して參りしならば、無事に暇を取る心であらうな。
はつ　勿體ない事仰しやりまする。例へ如何やうな儀がござりましても、なか〳〵私しの勝手に、お暇を取りまする事はござりませぬ。
幸之　すりや忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えず、再び主取りをせぬ心か。
はつ　左様でござりまする。
幸之　その心なら、定まる夫より外に、仇し心もあるまいな。
はつ　左様でござります。
幸之　然らば其方、尾上どのゝ身の上に、もしもの事があつて、横死でも召されたら、死後の無念を晴らす心か。
はつ　そりや、お尋ねに及ばぬ事。私しの旦那尾上さまでござりませうならば、サ、餘年の命は、露塵惜しみませうやうはござりませぬ。憚りながらあなた樣でも、お怨み申さいで何と致しませう。
幸之　主人の事なら、幸之進も。
はつ　ハイ。
幸之　存念を立つる心か。
はつ　ハイ、部屋方ものゝ女でも、御奉公に二つはござりませぬ。
幸之　シタリ、健氣なる其方が心底。其方を育てた兩親、ハア、奧床しい。
はつ　お恥かしうござりまする。
幸之　足輕の徳兵衞、親の敵に代へても、御奉公を大切に思ひ、下女のお初は、一命に代へても主人を思ひ、夫婦別ある二人が身の上、心が合うて嬉しい。
兩人　ハイ。
幸之　添はせてやりたい。
徳兵　この徳兵衞と。

はつ　この初と。

幸之　奥で徳兵衞。こなたへ來れ。

ト唄になり、幸之進下座へ入り、徳兵衞、お初へ心殘して入る。奥にて「姫君樣のお入り」と呼ぶ。

はつ　アノ、この所へ、姫君樣のお入り。

ト橋がゝりへ影を隱す。又「姫君のお入り」と呼ぶ。管絃になる。屋體の内へ大姫君、賤機、滿汐、琴路出る。下座より岩藤、尾上、常夏、初音、菖蒲出て並よく列ぶ。

皆々　岩藤さま、尾上さま、御前へお詰めなされましたか。

岩藤　ハア、只今罷り越しましてござります。

尾上　大姫君さまには、淸水の冠者義高さまの、お命乞ひのお願ひなされて、さぞお嬉しうござりませうがな。

岩藤　今宵から男禁制の仰せ出され。片岡幸之進さま、横雲大膳どのばかり、御用をお勤めなさるゝとの事。お堅い事にてはござりませぬか。

賤機　今宵の宿直は尾上どの、御苦勞に存じまする……姫君樣へ申し上げまする。あなた樣のお願ひの通り、義高さま御出家お遂げなさるゝお心に、おなりなされましたる上からは、姫君樣の御所持遊ばしましたる、朝日の彌陀の尊像を、近江の國義仲寺へ、お納め遊ばされまして御尤もに存じ上げます。

大姫　成る程、義仲公より自らへ、送られしところの彌陀の尊像、妾がこの身離さず、今日の日まで守り奉りし尊像を、由緣のお寺へ納めなば、菩提の爲ともならん。

ト懷中の錦の袋より、彌陀を取出し

尾上、それへ。

尾上　ハア、御用でござりまするか。

大姫　この尊像こそ、義仲公より自らへ、下し置かれし朝日の彌陀、其方へ預け置く程に、大切に守り奉り、折もやあらば母君政子御前さまへお願ひ申し、御菩提所義仲寺へ、納めてたもや。

尾上　假初めならぬこの尊像、この尾上にお預け下さりまするとは、有り難う存じまする。

大姫　母君樣へも、よしなに申し上げてたも。

尾上　畏まり奉りましてござりまする……岩藤さま、只今お聞きなされましたるこの尊像、いよ〳〵義仲寺へ納めまするやうにとの事。政子御前さまへも、よろしう申し上げられて下さりませい。

岩藤　そりや、そもじの御念には及ばぬ事。大切なるその錄像、姫君樣にはお預けなさるゝとも、先づ一旦は、この岩藤へ仰せつけられませと、申し上げられさうなものぢやぞえ。お首尾の好いを笠に着て、お局役の岩藤を差措き、何ぢやら云ひたさうに、あの由比ヶ濱に於ても、御大切なる淺絹の香爐を、粉微塵に打割るやうな粗忽では、イヤ／＼、心元ない尾上どの。姫君樣の御用筋を、間違はないやうに、お勤めなさるゝがようございまする。

尾上　不調法なる私し、何事に依らず、お指圖なされて下さりませ。

岩藤　なんの、其許のやうな御發明で、この岩藤が指圖を受けられさうなものかいな。この次手ぢやに依つて云ひますする。其許の親御は、それ／＼、雪の下で名高い町人、岡本屋佐五右衞門どのとやら云うて、この度富士の御狩、お買ひ物方御用を勤めらるゝとの事。その金持ち顏が鼻の先へ、ぶら／＼ぶらついて、その顏に見ゆるわいの。なんぼ其方の親御は、町人の金持ちの娘でも、お役向きは御中老。この岩藤は局役。お表ならば御用人格ぢやぞえ。女一通りの事は勿論、萬一、狼藉者が奥向きへ切り入るか、又は盜賊なぞが、御寢所近う忍び入るまいものでもない。その時は役柄ぢやに依つて、女子ながらも御前を固め、討取る器量がなければ、勤められぬ御奉公ぢやが、尾上どのには、武家の御奉公を、大切ぢやと思うてなら、薙刀の一手も心得てかえ。

尾上　ハイ、その儀は。

岩藤　誰れに稽古召された。どなたのお弟子でございまするぞ。

尾上　サア、御指南を受けましたは。

岩藤　コレ／＼、爰なお人は、人にばかり口を利かして、誰れに習うたとも挨拶ないは、聞えた、武藝に覺えはござらぬの。ヤレ、おとましや。重い役目を勤めながら、役向きの知行盜人と云ふものぢや。ハテ、勤め方を知らぬと云ふは、そりや、ほんの祿盜人ぢや／＼。サア斯う云はれて口惜しくば、この岩藤が相手になつて立合つて見や。どうぢや／＼。

小櫻　モシ、尾上さま、私しどもは岩藤さまの弟子、お堅いお屋敷の事なれば、男は相手になりますまい。女同士の一番勝負。サア、立合ひやんせう。

菖蒲　そりや、よからうわいな。わたしも相手になりたう

て、毛鑓素鑓の早業早速。ほんに突かれて見たうござんす。

初音　また薙刀ならこの初音、初音といへどまだ味知らず、思へば竹刀も細工物。眞劍勝負がして見たいと、朝夕思うて居りました。

常夏　わたしは柔術が申し立て。太く逞ましき男を相手に引ッ組んで、やつて見たいと氣は張り弓。仕事上手でござんすぞえ。尾上さま、サア、ござんせ。

皆々　サア、尾上さま、立合うて御覽じませ〳〵。

岩藤　コレ、皆あの衆も、この岩藤が弟子ぢや。わしと立合ふ事がならずば、お端下衆がそもじの相手に相應ぢや。サア、御前に於て小太刀でなりと、薙刀でなりと、ドレ〳〵、拜見いたさうか。斯う云うても、まだ挨拶が無いのか。サアどうぢや。皆寄つて引摺り出さんせ。

皆々　サア、尾上さま、早う御前へ。

尾上　サア、それは。

皆々　サア〳〵〳〵、どうぢやいな〳〵〳〵。

ト皆寄つて、いろ〳〵に虐める。尾上、困る思ひ入れ。お初、下の方へ出て

はつ　憚りながら、先づ〳〵お待ち下さりませう。

尾上　ヤア、初ではないか。

はつ　左樣でござりまする。

尾上　姫君樣の御前ぢや。下がらぬか〳〵。

トお初、怖々して居る。

岩藤　コリヤ待て。其方は尾上が召仕、初ぢやないか。

はつ　左樣でござりまする。

岩藤　部屋方の身を以て、大姫君さまのお目通りへ、何しに出た。その用事に依つて、わしが御前へよろしう申し上げう程に、なんなりと云や。

はつ　サア、その儀は。

岩藤　つかへるからは、何も云ふ事は無いのか。コリヤ、其方達がやうな賤しい身を以て、苟めならぬ姫君のお目通りへは、誰れが許して出たのぢや。有やうに云や。其方が主人尾上が許したのか。慮外者めが、下がらぬか。

はつ　ハイ。

岩藤　まだかいの。何しに出たのぢや。云ひ居らぬか。

はつ　憚りながら、お願ひがござりまして。

岩藤　そりや、誰れに。

はつ　岩藤さまに。

岩藤　願ひとは。

はつ　外の事でもございませぬが、只今承はりますれば、主人尾上を、あなたのお相手になされまして、太刀筋とやらを、御覽なされたいとの御所望。成る程、尾上儀は町人の娘でござりまするゆゑ、何一つ覺えました事はござりませねど、姬君樣へ御仕官を致しますれば、少しはその眞似事も存じて居りまする。朝夕わたしへ話しまして、もしもの時には、役にも立ちます事と、小太刀の一手も敎へくれましてござりまするゆゑ、主人尾上が名代に、賤しい下女の初を、相手なされて下さりませうならば、有り難う存じ上げまする。

岩藤　すりや、部屋方者の其方へ、尾上どのが。

はつ　薙刀の一手も、敎へましてござりまする。

岩藤　流石は中老尾上どの、召仕の其方にまで、武藝の稽古まで心がくるやうとは恐れ入つた。その心なれば、さぞかし尾上どのには御手練な事。シタガ、心許ない町人の娘連れが、稽古したればとて、役にも立たぬ事ぢや。この岩藤が相手になるとは奇特な事ぢや程に、其方が願ひの通り聞き屆けてやらう。

はつ　エヽ、有り難う存じまする。

岩藤　この岩藤は相手にならぬ。

はつ　して、お相手は。

岩藤　あの、お端下の常夏。

常夏　そんなら相手は私しかえ。

岩藤　姬君樣のお慰みの爲、御前に於てなりと、木太刀でなりと云ふものぢや。

常夏　この常夏が相手になつたら、ヤツと云うてかゝるが早いか、其方の足腰の立たぬ程に、滅多打ちに遭はうでの。

はつ　どなたかと存じましましたれば常夏さま。私しがお相手なされて下さりまするとは、有り難うござりまする。

常夏　たつた今片輪になる身で、有り難いとは、オヽ、氣の毒。

岩藤　お小姓衆、竹刀をこれへ。

ト奧にて

若柴　畏まりました。

ト竹刀を持つて出て

仰せつけられました竹刀、持參いたしましてござりまする。

岩藤　それへ直しや。

ト若紫、畏まりましたと前へ置く。

サア、初、姫君樣へは岩藤が、よいやうに申し上げう程に、立合へ。

はつ　左樣なら、御免なされて下さりませ。

岩藤　双方ともに支度しや。

兩人　畏まりました。

ト白囃子になり、常夏、襷を掛け、支度をする。

岩藤　コレ〳〵、隨分ともに急かずに、お初を打つて〳〵打ち殺してやりなされ。

常夏　合點ぢやわいな。

菖蒲　よいかと思うて、姫君樣の御前で、立合つて見たいとは厚かましい。

小櫻　それ〳〵、お師匠樣は岩藤さま。この常夏どのに勝たうとは、ほんに呆れる。

岩藤　サア、女郎も、支度をするがよいわいの。

はつ　ハイ〳〵、有り難うはござりまするが、畏れ多い姫君樣の御前へ。矢張り此まゝお相手に、なりまするでござりませう。

岩藤　支度がよくば、早う〳〵。

常初　畏まりました。

ト白囃子になり、いろ〳〵あつて、常夏を打ち据ゑる。

女皆　出來た〳〵。

ト喜ぶ。初音、小櫻、岩藤、苦々しく思ひ入れ。お初、常夏を起し、塵を拂ふ。

常夏　よう酷い目に遭はしやつたの。

はつ　御免なされて下さりませ。

トお初、下の方へ行かうとする。

岩藤　お初、待ちや。

はつ　御用でござりまするか。

岩藤　其方の今の手の內、餘り見事ぢやに依つて、この岩藤が相手にならう。

はつ　勿體ない。なんと致して、あなたのお相手になられませう。御免なされて下さりませ。

岩藤　イヤ〳〵、相手になるまいと云うても、相手にせねばならぬ。但し局上を相手にしようか。

はつ　それ程に仰しやりまする事ならば。

岩藤　相手になるか。

はつ　憚りながらお相手に。

岩藤　なんの、武藝の稽古に差別は無い。皆の衆をよう酷

い目に遭はしたな。その返禮に、この場を去らず。

ト騙し打ちに打つ。お初、手早く受け留める。

はつ　これではお相手に、なられませうかな。

岩藤　なか〳〵味をやるわえ。

ト立廻り。よきキッカケにて三味線入りの合ひ方になり、トヾ岩藤を打つ。

はつ　主人尾上が稽古の太刀筋、斯やうなものでござりまする。

ト岩藤、口惜しき思ひ入れ。尾上、ツカ〳〵と寄つてお初を扇にて打ち

尾上　慮外者めが〳〵。コリヤヤイ、この尾上が指圖をも待たず、御前に於て今の立合ひして、物の見事に。サア、見事其方がお相手にならうと思ふか。粗相者めが。あなたをどなたと思ふ。お局の岩藤さま。殊に出頭第一の、あなたに向うて今の振舞ひ。けれう、あなたが其方衆風情と思うて、御容赦なされたと云ふ所へ、心も附かいで、御前に於ての今の立合ひ。アノ、茲な慮外者めが。

はつ　御免なされて下さりませ。

大姫　下部に似合はぬ、初とやらが今の手の内。尾上、目を掛けてやりやいの。

尾上　エヽ、有り難うござりまする。岩藤さまには、定めしお腹もお立ちなされませうが、何を申すも、存じませぬ不調法者。お赦しなされて下さりませ。

岩藤　ナンノイナア。皆の衆と云ひ、この岩藤まで、御前に於て、其許樣の召仕に、えらい目に遭ひました。みんな此方の未熟ゆゑ、不調法な事があればこそ、朝日の尊像も其許へお預けなされたではないかえ。叩かれやうが恥を掻かうが、大事ござりませぬ。殊にお詞のかゝつたもあの初。随分大事に遣うておやりなされませい。

尾上　有り難う存じまする。

ト奥にて五ツの時計鳴る。

賤機　あの時計は最早五ツ。今宵の宿直は尾上どの。もしもの事がある時には、そもじの越度になりますぞえ。

尾上　随分ともに大切に、勤めまするでござりまする、

岩藤　目附けの役はこの岩藤、よく覺えて居やしやんせ。

若柴　姫君樣はお佛間へ入らせられ、御經御讀誦遊ばされませ。

大姫　それ〳〵、明日はこの身を墨染の、姿と變るこの身の上。剃るとても何か怨みん梓弓、引きとゞむべき心ならねば。皆の者、こなたへ。

皆々　先づ、お入りなされませう。

ト唄になり皆々入る。本神樂になり、床下を切り破り、義高、以前の形、拔き身を提げ、以前の草履を穿き出で、刃物を納め行かうとする。腰元眞弓、下座より雪洞を差出し、附け廻り、立廻りにて留める。

眞弓　待ちや。何者なれば、姬君樣の御寢所間近う、忍び入りしは、正しく曲者。女子ながらも仁田の四郞が妹眞弓。留めいで置かうか。

義高　斯くまで姿が變るものか。それと知らぬも咎むるは尤も。我れこそは大姬と緣を組みたる、義高なるワ。

眞弓　エヽ、左樣ならば、義高さまでござりまするか。

義高　如何にも。

眞弓　見ればお髮もおどろと亂れ、異なるあなたのお顏ばせ。それとお名乘りなされても、どうも合點が參りませぬ。

義高　案內いたせ。

眞弓　そりや、いづこへ。

義高　姬が寢所へ。

眞弓　アノ、お寢間へ。

義高　伴なひ參れ。

眞弓　何ゆゑ、お入りなされまするぞ。

義高　答ふに及ばぬ。早う〳〵。

眞弓　待つた。お待ちなされませい。

義高　なぜ留める。

眞弓　こりや、聞えた。義高さまと僞はつて、この所へ入込みしは、木曾の餘類か。但しは平家に從ふ者なるか。名を名乘りや。

義高　義高なるワ。

眞弓　合點がゆかぬ。

義高　案內いたせ。

眞弓　ならぬ。

義高　姬に對面せん。そこ退け。

ト立廻り。早舞ひになり、眞弓を切る。

眞弓　剃髮あるべき御身にて、手にかけ給ふは情ない。思へば思へば口惜しいなア。

ト眞弓を抉り殺し、死骸を片寄せ、草履にて血を拭き思案して草履を簾へ打ちつける。

大姬　何者ぢや〳〵。

ト管絃になり、大姬出る。義高忍ぶ、本舞臺へ下りて義高を見附け

義高　ヤア、あなたは。
義高　清水の冠者義高。
大姫　どうしてこの所へは。
義高　姫が顔ばせ見まほしく、懐かしさに來たわいの。
大姫　モシ／＼、あなたは、御出家とならるゝお心ではござりませぬか。
義高　世を捨て兼ねしは戀慕の闇。現在未來と結んだる、妹脊の契りは忘られず、これまで來りし其方の夫、帶紐解いて寐ようか。
大姫　お情ない事仰しやりまする。自らがお命乞ひ致しましたは、この世ばかりの契りなれば、只後の世の緣こそ半座を分けん心ゆゑ、直ぐにあなたは御出家と、思ひし事は害になり、この世で枕を交さうとは、お情ないお心でござりまするなア。
義高　嫌でも應でも抱いて寐る。寢所へ來やれ。
ト行かうとする。求馬之介出て留める。
求馬　義高公でござりまするか。
義高　其方は。
求馬　求馬之介でござりまする。なんとも合點が參りませぬ。御出家得度なされまして、姫君を寢所へ伴なひ戀慕とは、還俗なさるゝ御所存よな。
義高　知れた事、坊主嫌ひだ。づく入嫌だ。木曾義仲が忘れ形見、義高こそ賴朝が聟なるぞ。
大姫　エヽ、お情ない。
求馬　求馬之介付き添ひ奉れば、義高公のお心の儘にはなりますまい。速かに剃髮あられますればその通り。御承引なくば料簡がござる。なんと。
義高　ハヽヽヽ、云はれざる靑侍ひの分として、慮外者めが。立ち寄つて、これを見ろ。
求馬　この尊像は。
ト懐中より、尊像を出して見せる。
義高　賴朝未だ佐殿たりし時、祈願を籠められたる髻の觀世音、この尊像が聟がねの印ならずや。この義高が所持なすからは、大姫と緣は切れぬ。氏も系圖も源氏の嫡嫡、手向ひ致すと打ち殺すぞ。
求馬　すりや、その尊像が手にあるうちは、御緣が切れぬとや。
義高　知れた事だ。
求馬　すりや、その尊像があるうちは、手出しもならぬか。エヽ、口惜しいなア。

義高　なんと好い聟引出か。尊像のあるうちは、義高へ刃物は立たぬ。馬鹿な野郎だ。大姫、來やれ。

ト大姫へかゝる。求馬之介を當て、屋體の内へ連れ上がる。管絃になり、御簾下ろす。求馬之介、心附き起き、行かうとする。下座より幸之進出る。

幸之　求馬待つた。

求馬　氣遣はしきは姫君のお身の上。何ゆゑお留めなさるるな。

幸之　殘らず聞いた。髻の觀世音、義高公のお手にあつては。

求馬　姫君の御緣は切れませぬか。

幸之　手段を以て今宵のうちに。

求馬　奪ひ取らるゝ、御所存か。

幸之　コリヤ……萬事は後程。

ト管絃になり、求馬之介、奥へ入る。幸之進煙草のみ居る。下座より足輕九平次、手桶に樒の花を入れ、持ち出で、

九平　これは、幸之進さまでござりまするか。

幸之　足輕の九平次。見れば樒を持つて、何處へ行くのぢや。

九平　姫君樣の仰せつけにて、法華堂の御廟所へ、參りまするやうにござりまする。

幸之　夜分の御用大儀々々。苦しうない程にこれへ置いて、其方は部屋へ行て休め。

九平　私しへ仰せつけたる儀を、左樣仰しやるは、なぜでござりまする。

幸之　定めし姫君の思し召しには、御剃髪なさるゝお心ゆゑ、御廟所へお手向けなさるゝ、思し召しもあらうが、この幸之進はお勸め申して、義高公とは御婚禮の儀をお取持ち申し上ぐる。佛いぢりはお留め申す心ぢや。

九平　エヽ、すりや、義高さまと姫君樣とは。あなたとした事が、姫君樣には御緣邊の儀を、御得心遊ばしましても、義高公には御承引ござりませぬ。

幸之　サア、御承引はあるまいが、姫君樣お添ひなされば、直ぐに賴朝公の聟。範賴公には御病身。賴家公にも實朝公にも未だ幼少。義高公には鎌倉の武將も同然。さすれば義仲公、思し召しも立つではないか。

九平　左樣でござりませうが、朝敵たる義高さまを、總追捕使の賴朝公の、お聟君とは申されますまい。

幸之　義仲公は源氏の正流、八幡太郎義家公より四代の孫、

その公達の義高公、斯く申す幸之進を始め、幕下に屬しても恥かしからず。

九平　すりや、幸之進さまには。

幸之　お味方なす心サ。

九平　斯やうな所に居ては、無禮な事も出來ませう。ドリヤ、お使ひに參らうか。

幸之　待て。

九平　まだ御用でござりますか。

幸之　置いて參れ。

九平　何を置いて參りまする。

幸之　其方が一命を置いて參れ。

九平　エヽ。

幸之　いま幸之進が、口外なしたるは天下の大事。其方承はつたれば、下部なりとも助け置かれぬ。これまでの命と諦らめ、それへ直れ。

九平　モシ〳〵、これは又御難題。拙者達てと申し承はりました儀でもなし、畢竟あなたから仰せられましたゆゑ、私しが承はりましたと申すもの。すりや仰しやりましたあなたが御粗相。如何やうな事承はりましても、他言いたすやうな九平次ぢやござりませぬ。命はお助けなされて下さりませ。

幸之　流石は下部、命が惜しいか。

九平　なくなつたら、なんと致しませう。命さへあれば、人間の仕合せ次第で、足輕ばかりで朽ち果ても致しますまい。ひよつと目と轉びますれば、よい身ともなりませう。お助けなされて下さりませう。

幸之　役にも立たぬ世迷ひ言。觀念してそれへ直れ。

九平　左樣ござれば。

幸之　座に直らう。

ト　これより九平次、肌脱ぎ、幸之進の前へ直り、首を叩いて合掌する。

よい覺悟だ。不便なれども手にかける。其方が持參なしたるこの樒、後懇ろに弔らうて得させん。有り難い事ぢやと思ふであらう。

九平　成る程、お手にかけられるとは、是非もござりませぬが、忌々しいこの樒。回向は受けますまい。

幸之　すりや、某が回向なす、樒は落ちぬと云ふ心か。

九平　緣も無いあなたの、回向の樒は受けますまい。

幸之　謀り事は密なるを以てよしとす。樒と云ふ字は木扁に密なると云ふ文字。義高公へ御謀叛を勸め、その計略

も要なる樒。

九平　何がなんと。

幸之　手塚の太郎。

九平　エ。

幸之　名はない足輕の九平次、いよ〳〵受けぬか。

九平　嫌だワ。

ト樒を柄杓にて打つ。樒散る。

幸之　慮外な奴。

九平　ヘイ。

幸之　いよ〳〵首を、刎ねずばなるまい。

九平　ヘイ。

幸之　いよ〳〵首を刎ねる。覺悟いたせ。

トわざと九平次、身繕ろひしてどつかと坐り

九平　すつぱりと、おやりなされませい。

ト管絃になり、幸之進、刀を拔き、九平次が目先へ突きつける。につこりと笑ふ。試す事ありて手桶の手を切つて落す。

これは。

幸之　九平次が死骸は、手塚の太郎光盛へくれた。

九平　何がなんと。

幸之　死人は物を云はぬものぢやぞ。

ト唄になり、幸之進、奧へ入る。

九平　我が本名を、手塚の太郎と知つた幸之進。いよ〳〵義高公へお味方の心か。ハテナア。

ト侍ひ一人出て

侍ひ　手塚の太郎動くな。

ト立廻り、締め殺す。時の鐘鳴る。九平次死骸を突き倒し、向うへ悠々と入る。花道より横雲大膳、上下衣裳にて、手提灯を持ち、奧より岩藤雪洞持ち出る。互ひに顏見合せ

大膳　岩藤どのか。

岩藤　大膳どのか。

大膳　夜中に及んでその姿は。

岩藤　この座敷の形は、法華堂へ配膳給仕に事寄せ、奧の樣子を窺ひ知らんその爲に。

大膳　今宵の宿直は。

岩藤　尾上が當番。

大膳　それこそ幸ひ。

岩藤　高うは云はれぬ、コレ、爰へ……あの足輕の九平次こそ、義高の身内の者。この岩藤と心を合せ、義高どの

へ謀叛を勸め、富士の御狩の折に、妨げとなる祐經どのを、曾我の兄弟に討たせ、秩父どのが詰め腹切りや、後に殘りし義盛は、義仲公に巴御前の緣あれば、仇となるべきやうはなし。さすれは北條どのばかり。その手始めに討ち取つて、義高公を鎌倉の武將と仰ぎ奉れば、その時妾が願ひの通り、求馬之介を夫となし、國の主となるならば、これに上越す望みがあらうか。喜んで下さんせ。

ト此うち尾上、上へ出て聞いて居る。

大膳　兼ねて與みせし某。義高公の幕下に屬し、後の榮を思へども、心がゝりは幸之進。一味に加へる手段はありさうなもの。

岩藤　それも拔からぬあの九平次。

大膳　すりや、お味方に勸むるや。

岩藤　必らず氣遣ひし給ふな。

大膳　して又、朝日の尊像は。

岩藤　尾上が方に所持なせば、折を見合せ

大膳　奪ひ取り

岩藤　義高公へ差上げん。

大膳　只この上は

岩藤　姫君ばかり。

大膳　義高公のお手に入れん。

トこれにて尾上驚ろく。三人顏見合せ恟りして

尾上　大膳どのか。

大膳　尾上どのか。

尾上　ハイ〳〵。

大膳　そんなら今のを。

尾上　エヽ。

兩人　聞いたのぢやの。

尾上　なんにも承はりませぬ。例へ承はりましても、人樣へ申すやうな、私しでもござりませぬ。必らずお案じなされて下さりまするな。

岩藤　そんなら他言は。

尾上　左樣でござりまする。

岩藤　例へ其方が云うてからが、證據のない事、跡方もない事ぢやと、云うてしまへば濟む事ぢやわいなう。

大膳　オヽ、さうとも〳〵。

尾上　でもマア、お疑ひの深い事わいなう。

大膳　どう思つても、惡い處へお來やつた尾上どの、この大膳が繩を相かくる。

尾上　そりや、何ゆゑ。
大膳　縄をかけるは御定法。先達て某が貰ひかけたお初、くれまいと云つたも道理、足輕の德兵衞と思はれやつて居る淫らの事を、その分に置いては尾上も同罪。縄を打つ、覺悟おしやれ。
尾上　待つた。德兵衞と初が事は、先達て夫婦勤めと、岩藤どのへも、お屆け申して置きました。
岩藤　コレ〳〵、この岩藤、其やうな事は、聞いた事はないぞえ。
尾上　私しが、あなた樣へ。
岩藤　いつ云うたのぢや。
尾上　昨日、由比ヶ濱にて。
岩藤　エヽ、あの、白々しい顔わいの。
大膳　恥を掻いたはこの大膳、その腹癒せ、サア、尾上どの、縄にかゝらつせい。
岩藤　サア、尾上どの、奥向きの束ねはこの岩藤。淫らな事あつては濟まぬ。縄かゝりや。
尾上　左樣に仰しやりますれば、是非に及びませぬ。成る程、不義はお家の御法度なりや、あなた樣へお目にかけます物がござりまする。これを御存じでござりませうな。

ト文を出す。

岩藤　エヽ、その文は。
尾上　なんと、お覺えがござりませうがな。
岩藤　イヽエ、存じませぬ。覺えませぬ。
尾上　成る程、お覺えはござりますまい。物忘れをなされまする岩藤さま。先達て、初と德兵衞は夫婦勤めと申す事は、あなたへお話し申し置きましたなれども、お覺えなされぬとあれば、致し方もござりませぬ。成る程。さすれば、御法度背きし兩人は不義者。すりや、この文も捨ては置かれませぬ。御前に於て申し上げませう。
岩藤　イエサ、その文は。
尾上　但し、兩人が夫婦勤めの事は、先達て御承知でござりましたか。
岩藤　イヽヤ、知りませぬ。
尾上　すりや、讀み上げませう。
岩藤　イエサ、その文は。
尾上　兩人の事は御承知かな。
岩藤　サア、その儀は。
尾上　サア〳〵〳〵。なんとでござりまする。

岩藤　エヽ、サア、兩人が事は聞いたでござりませう。
尾上　夫婦勤めと申す事は。
岩藤　オヽくど。
尾上　ハヽヽヽヽ。左樣ならば、この文も反古に致してしまひませう。
ト捨てる。岩藤拾ふ。思ひ入れ。
岩藤　時に大膳どの、夜も更けましたれば、お夜詰めを退きませうか。
大膳　イカサマ、御機嫌を伺ひ召された上。
岩藤　然らば左樣に致しませう。
ト立つて屋體の内へ上がり。
大膳　コレ／＼、姫君樣には、御寢所には居らせられませぬ。
ト草履を見て
合點のゆかぬ。御寢所に男の草履。殊に夥しう血汐がついて。これはマア、只事ならぬ。合點が參りませぬ。
尾上　ドレ／＼。お見せなされませ。誠に男の土草履。アヽ、慥かにこれは。
ト昨日、義高公へ穿かせしと心附き
合點のゆかぬこの血汐。コレ／＼、大膳どの、爰に凄じく血がしたうて。

大膳　誠に／＼。これは心得ぬ。
ト賤機、死骸を見附ける。
岩藤　コレ／＼、仁田の四郎が妹、眞弓が切られて居りまする。
尾上　ナニ、眞弓どのが切られて。
ト皆々驚ろく體。
岩藤　ドレ／＼、マア、何者が仕業。皆の衆、早う／＼。
ト女形、その外お端下出る。
皆々　なんの御用でござりまする。
岩藤　眞弓どのが切られて、死んでぢやわいなう。
ト皆々驚ろく。
こなさん達は、なんぞ覺えがないか。
皆々　イエ／＼、なんにも覺えござりませぬ。
ト一人づゝ、岩藤詮議する事あり、皆々知らぬと云ふ。
岩藤　サア、尾上どの、ちよつと逢はう。爰へござれ。
尾上　ハイ、私しへの御用はな。
岩藤　隱しても隱されぬ。人殺しと、有やうに云うてしまへ。
尾上　モシ／＼、この身に覺えは無い事。滅多な事仰しや

りますな。

岩藤　イヤ、この眞弓は、尾上どのが手にかけたに違ひはない。

尾上　エヽ、全く以て。

岩藤　サア、そんなら誰れが殺したのぢや。

尾上　サア、その儀は。

岩藤　其方が手にかけたのであらうがな。

尾上　モシ〳〵、岩藤さま、大切なる御奉公を袖に致して、この眞弓どのを、手にかけましてよいものでござりまするか。

岩藤　そんなら、この草履は、誰れが爰へ置いたのぢや。

尾上　その草履の事も、一向私しは存じませぬ。

岩藤　成る程、覺えがあるまい。お中老をお勤めなさるゝ尾上どの、覺えのあらう筈がない。それはさうと、今宵の宿直の役は、誰れやらでござんすの。

尾上　宿直の役は、この尾上でござります。

岩藤　ほんにさうであつた。わしとした事が、物覺えの惡い。そんなら尾上どの、聞きませうは、よもや大切なる御寢所の、宿直の役を勤めながら、御寢所にあつたこの草履、知らぬとは云はれまい。いつ何時にこの草履、御寢所には通してあつたえ。

尾上　サア、その儀は。

岩藤　宿直の役を勤めながら、其お役はなんの爲。此やうな怪しい事もあらうと、心を附けるが、お泊り番の役ぢやないか。大それた土草履が、御寢所にあつても、宿直の役は濟むか。それでも其方は知らぬか。

尾上　サア、それは。

岩藤　問へるからは、身に覺えがあらう。

尾上　イエ、この身に。

岩藤　知らぬで濟むか。

尾上　サア、それは。

岩藤　サア〳〵〳〵。

ト草履にて打つ。尾上、留める。振り放し、また思ひ入れ。ほんとに草履にて打つ。その手をしつかと尾上捉へて

尾上　こりや、草履を以てこの尾上を。

岩藤　オヽ、打つた。御奉公を粗末にすることなさんぢやに依つて、カウ〳〵〳〵、打つたがこの岩藤が誤まりか。ハアヽ、こりや、姫君の御寢所へ、隱し男を引き入れたのか。イヤ、さうであらうな。さうなうて、なぜこの草



三世坂東三津五郎の岩藤



中村大吉の尼上

履が落ちてあつた。

尾上　おやと申しても私しは。

岩藤　知らぬで濟むか。有やうに云はぬか。

尾上　一向左樣な事は。

岩藤　死太い女。云はずば、カウ〳〵〳〵。

ト打つ。思ひ入れあつてキツとして

尾上　如何に身に越度があればと云うて、この大勢のその中に、草履を以ての打ち打擲。餘りと云へば……申し譯なきこの場の仕儀。エヽ、姫君樣、御免なされて下さりませ。

ト泣く、岩藤、草履にて尾上が顏を上げ

岩藤　コレ、一體こなさん、日頃から發明が顏に顯はれて胸が惡い。アイ、コレ、この顏に出て、サア、口惜しくば、この草履がどうして爰にあつた。それを云うてしまへ。さうして眞弓を殺した事も白狀しや。どうぢや、云はぬかいなう。エヽ、玆な不屆き者めが〳〵。

トぶつ。賤機、思ひ入れ。

賤機　岩藤さま、そりや又あんまり。

ト寄らうとする。

尾上　コレ〳〵、賤機、滅多に側へ寄らんすな。身に越度あるこの尾上、例へ草履で打ち打擲に遭へばとて、申し譯なきこの身の上。必らず構うて下さんすな。サア、岩藤さま、御存分に遊ばせませ。

岩藤　オヽ、遊ばさいでは。ようも〳〵この岩藤を差置いて、義高公へ御出家をお勸め申し、姫君樣へ手柄顏。又その上に朝日の彌陀、こなさんの方へ受取り、わしに鼻明かさせ、さぞ嬉しからうの。さう云ふ曲つた心入れの、こなさんぢやに依つて、此やうな越度が出來るのぢや。エエ、この顏わいの。

大膳　ハヽヽヽ、よい態〳〵、この申し譯は立つまい立つまい。サア、たつた今自害をするか。但しはこの大膳が手にかけうか。

岩藤　イヤ〳〵、大膳どの、刀の穢れ。此やうな死太い者には、幾度もカウ〳〵〳〵。なんと骨身に應へたか。

ト草履にて打つ。草履を直ぐに舞臺へ捨てる。

此まゝにて濟むと思ふな。どうならうも知れぬぞえ。

大膳　どうで絶體絶命。覺悟して居ろ。

岩藤　大膳どの、姫君の御前で。

大膳　この段早速申し上げん。さはさりながら。

ト拔きかける。

岩藤　コレマア、ござりませ。

ト唄になり、岩藤、大膳、皆々入る。賤機、殘り尾上が前へ行く。

賤機　尾上さま、さぞ口惜しうござりませう。あの意地惡の岩藤どの、日頃の事を根に持つての打ち打擲。モシ、尾上さま、定めし御用もござんせう。お初を爰へおこしませう。尾上さま、後程お目にかゝりませう。

ト唄になり、下座へ入る。尾上、思ひ入れ。草履を見ていろ／＼口惜しき思ひ入れありて泣き伏す。奥よりお初出る。

はつ　モシ／＼、旦那樣、どうぞ遊ばしましたかえ。

ト尾上見て、よう來たと云ふ思ひ入れ、心を取り直し

尾上　オヽ、初か。

ト草履を隱す。

はつ　ハイ、初が參りましてござりまする。

尾上　オヽ、ようおぢやつたなう。

はつ　あなたは、どうぞなされましたか。

尾上　イヽヤ。初、其方はなんぞ聞きやつたか。

はつ　イヽエ、なんにも承はりませぬ。

尾上　賤機どのに、なんぞ聞いたであらうがの。

はつ　ハイ、賤機さまの仰しやりまするは、あなた樣の御用もあらう程に、早う行たがよいと仰しやりましたに依つて、參りましたでござりまする。

尾上　事に馴れた賤機、すりや、何も聞いた事はないの。

はつ　左樣でござりまする。

尾上　オヽ、落ちついたわいなう。

はつ　イヽエ、落ちつきませぬ。見ますれば、どうやらお顏の御樣子、お髮もいから亂れましたり、あなたはどうぞなされましたか。

尾上　イヽヤ、どこもなんともない。

はつ　イエ／＼、お隱しなされまするな。お顏の色が惡うござりまする。

尾上　そりや、さう云ふ事もあらう。毎日々々御前へ出て、御大切なる御奉公を勤むる者は、朝夕口惜しい。サア、苦勞辛勞の絕えぬものぢやに依つて、顏色の惡い事も無うてわいの。

はつ　色でもお惡いと、お案じ申しまする。

尾上　それ程までに思うてたもる其方……いつそ有やうに……サ。有やうは積が發つて居るわいなう。

はつ　エヽ、お閊へが差込みましてござりまするか。

尾上　其方に案じさせまいと隱して居たが、どうも癪が。初、少しばかり脊中を擦つてたも。

はつ　ハイ〳〵。エヽ、お早う仰しやればようござりまするに、黑丸子をお上げ申しませう。

尾上　イヤ、藥より、マア、擦つてたも。

はつ　ハイ〳〵、左樣いたしませう。

トお初、尾上の脊中を擦る。合ひ方。

お癪の起るもお道理でござりまする。私しなどが御奉公は氣散じ。旦那樣やら、御家來やら、お心安う遊ばして下さりまするゆゑ、病ひ氣はござりませぬ。

尾上　云やれば其やうなもの。併し、其方の親御は歷とした浪人の、世が世でもあらうならば、此やうな奉公もしやるまいに、町人の娘のわしに使はれて居やるは、浮世と云ふものは、をかしなものぢや。

はつ　なんのマア。よく〳〵深い御緣でがなござりませう。なんの、あなたの御恩は忘れは致しませぬ、と申すうちにも、兎角人は命ほど大切なものはござりませぬ。あなたも隨分お心をお晴らしなされまして、お煩らひなされぬがようござりまする。

尾上　成る程、物に屈託さへせねば、煩らふ事もあるまいかいの。

はつ　兎角、氣を晴らすがよいと、巧者のお醫者樣が、申されましたが、旦那樣には、なんぞお好きな事がござりますか。

尾上　わしが好きと云ふは、四季折々の野山の眺め。花や紅葉の盛りほど、よい樂しみはないわいの。

はつ　それでお部屋に鉢植が、たんとござりまするな。

尾上　オヽ、わしは鉢植が好きぢやわいの。

はつ　その中にも、何がお好きでござりますかえ。

尾上　取分け好きな梅の花。降り積む雪のその中に、魁け見する冬至梅。勝色見する花の意地、知る人ぞ知る尾上が心、思ふ念力。ア、岩……藤も咲きかゝりたる眺めより、梅がよいわいの。

はつ　モシ、旦那樣、そりや、梅もようござりまする。鉢植と申しまするものは、冬より春を待ち兼ねて、人目を包む室の内、無理に心の枝々を、絲で釣つたりまた針金で矯めますれば、長うは持たぬ花の盛り。私しは梅よりも、柳がよいと存じます。柳と申しまするものは、荒い風が吹きましても、枝の痛まぬは柳の如く、雨にも雪に

も身を任せ、短氣な心がないゆゑに、枝折れもせず朽ち果てず、ハテ、命さへござりますれば、花咲く春にも逢はれまするぢやござりませぬか。ほんにわたしとした事が、柳に花は無いもせぬもの。粗相申しまして、御免なされて下さりませ。

尾上　ナンノイノ。其方の話しに紛れて、オヽ、癪がようなつたわいの。

はつ　お心ようござりますかえ。

尾上　オヽ、もうよい〳〵。初、何か其方に用が。オヽ、それ〳〵。お次に革文箱がある程に、ちよつと持つて來てたも。

はつ　ハイ〳〵、畏まりました。

　ト　お初、下座へ入る。

尾上　下方の奉公するに似合はぬ、身も無いこのわしを今も今とて、患らひでも出やうか、もしもひよつとした事もあらうかと、案じてたもる心ざし、もしや、今日の仕儀を聞いたか聞かぬか知らねども、初、わしや今日この場に於て岩藤に、草履を以て。エヽ、立たぬわいの。おのれやれ岩藤と、心は逸れど、姫君の深き御恩を顧みて、我が身に迫るこの身の上。所詮生きては居られぬ今日の仕儀。せめてこの由親達へ、申し送るが今際の御孝行。さうぢや。

　ト　唄になり、長く書く。下座よりお初、文箱を持つて出て

はつ　ハイ、お文箱持つて參りました。

尾上　オヽ、初か。

　ト　恟り、文を隠し

はつ　ハイ、初でござりまする。

　ト　お初も恟り。

尾上　コレ、まだ何か用があつた。オヽ、それ〳〵、ちよつと剃刀を持つて來てたも。

はつ　ハイ〳〵、畏まりました。

　ト　下座へ入る。

尾上　初が來ぬうち、ソレ。

　ト　唄になり、文を書き、草履を出し見、文箱へ入れ、封をする。お初出る。

オヽ、初か。

　ト　恟り。

はつ　初でござりまする。

　ト　恟り。

尾上　初、其方、大儀ながら、この文箱を雪の下まで持つて行つてたも。
はつ　あなたのお宿へ參りまするのかえ。
尾上　云うて上げねばならぬ大事の用。どうぞ大儀であらうが、賴むぞや。
はつ　アノ、お使ひに參りまするのでござりまするかえ。
尾上　行てたもらずばなるまい。
はつ　イエ〳〵、この使ひばかりは參りますまい。
尾上　なぜに行くまいと云ふぞ。
はつ　イヽエ、參りませぬぢやござりませぬ。いつそ、明日の事になされませ。
尾上　コレイナウ、初、如何に心安立てが過ればとて、わしが云ふ事を聞きやらぬか。
はつ　左樣ぢやござりませぬが、もう日も暮れますが、でも參りますけれど。
尾上　サア、そんなら早う行きや。
はつ　ハイ、ぢやと申しまして。
尾上　其方、主の云ひつけを背くのか。
はつ　なんのマア。
尾上　そんなら早う行きや。
はつ　ハイ。
尾上　主の云ひつけるのに、早う行きやらぬか。
はつ　ハイ、參りまする。
トいろ〳〵の事を云ひながら、腰帶を締める。尾上、いろ〳〵云ひながら互ひに顏見合せ、悄りして
尾上　早う行きやいなう。
はつ　ハイ、參りまするわいな。
ト云ひながら表へ出る。尾上、お初を呼び戻す。
尾上　アヽ、初、コレ。
はつ　御用でござりまするか。
ト後へ戻る。顏見合せ
尾上　隨分まめで。
はつ　エヽ。
尾上　怪我せぬやうに行ておぢや。
ト思ひ入れにて云ふ。
はつ　ハイ、參ります。
トそろ〳〵と外へ出て少し行く。思案して居る。尾上思ひ入れあつて、もう行たであらうと、枝折戸を明けて見る。お初、立つて居るゆゑ、悄りして
尾上　まだ、行きやらぬか。

はつ　行て參りませう。

ト お初、悃りして

ト 尾上、枝折り戸へ取りつき泣く。途端に　拍子幕

ト お初、向うへ入る。引返し。

切　幕　尾上部屋の場

奥庭の場

役名――局、岩藤。中老、尾上。若黨、曾根崎德兵衞　同、九平次。槙雲大膳。下女、お初。

本舞臺、三間の間、草の土手の上に練塀を飾り、上の方に掛る行燈を出し、時の太鼓にて幕明く。

ト 花道の方にて、バタ／＼の音して、九平次以前の形にて頰冠りして出て、本舞臺へ來り

九平　今お裏門で聞けば、お初めは夜夜中、尾上どのゝ親里、雪の下へ行くとの事。この道筋へ來るは知れた事。引ッ攫つて女房にせねばならぬ。あの提灯は慥かにお初。

ト 小隠れする。時の鐘になり、お初、文箱を持つて出る。中間、箱提灯提げて出て、花道へとまる。

はつ　もう、何時ぢやの。

中間　もう、九ッ過ぎ。八ツでもござりませう。

ト 本舞臺へ來る。兎角案じらるゝ思ひ入れ。

はつ　どう思うても、この胸騒ぎと云ひ、尾上さまのお顏つきの惡さ。こりや、これから、歸る方がよからうわいな。アイヤ／＼、もし又、急な御用であつた時には惡い。ハテ、どうしたものぢやなア。

ト 中間へ向ひ

其方は大儀ながら、爰から歸つて、旦那樣の事を隱居さまへ、よう頼んで置いてたも。

中間　ハイ／＼、氣を附けてお出でなされませ。

ト 中間、引返して入る。九平次出て

九平　お初／＼。

はつ　誰れぢや／＼。

九平　おれぢやよ。

はつ　九平次どのか。お前は今時分、何しに爰へござんした。

九平　お主が尾上さまのお使ひに出ると聞いて、引ッ攫つ

て、女房にしようと思つて待つて居たのだ。眞實の男であんべいがな。
はつ　又してもアタ嫌らしい。措いて下さんせ。
九平　そりやア、あんまりだ。得心してくれろ。
はつ　措かしやんせいなア。
九平　斯うなつては、嫌でも應でも連れて行く。
はつ　嫌でござんす。
九平　さつぱりと云つてしまつたな。
はつ　アイ。
トいろ〳〵抱きつき立廻り。向うより徳兵衞出て、お初と顏を見合せ、忍び三重になり
徳兵　お初ぢやないか。
はつ　オヽ、よい所へ來て下さんした。
徳兵　九平次か。
九平　なめら三方。
徳兵　して又、何の用で夜更けに出たのぢや。
はつ　尾上さまのお宿へ、お使ひに出たけれど、どうやら胸騒ぎがして案じらるゝ。お前はこの文箱を雪の下へ持つて行て下さんせ。私しはお屋敷へ歸ります。
徳兵　そんなら屆けてやらう程に、早くお屋敷へ歸るがよからう。
はつ　わたしは行く程に、賴むぞえ。
ト行かうとする。
九平　お初をやつては。
徳兵　どつこい。
ト立廻り。文箱を叩き落す。内より書置と草履出る。お初取上げ
はつ　なんぢややら、合點のゆかぬ物。こりや、尾上さまのお身の上。
徳兵　捨てては置かれぬ一大事。
はつ　斯うしては居られぬわい。
九平　それをやつては。
トかゝる。九平次を徳兵衞隔てる。
徳兵　爰構はずと行け。
はつ　合點でござんす。
トお初逸散に花道へ入る。兩人立廻り。大手へ上がると、この道具ぶん廻し。
本舞臺、三間の間、長局の部屋の體。奧の方に一間二枚障子、この屋體の上に尾上、白無垢ばかりの形

蒲團の上へ乘り、珠數を繰つて居る。前に机、香爐、花活、線香立てあり。

ト直ぐに合ひ方。文庫より糊入れの紙取出し、靜かに辭世を書き、尤も金襴行燈の側にて書きしまひて

尾上　藤の花長き短かき世の中に、散り行く今日の思ひ知らるゝ」これでも辭世になる事か。今宵に限るこの身の上。二十五年は夢現。思へば果敢ないものぢやなア。

トこれより身の上の事、岩藤へ怨みの詞、いろ〳〵長きセリフあり、別に書拔この正本へ入れ置く。トヾ尊像を出し、袋を側へ置く。劍を拔き兩手に持ち添へ、向うを見て

名殘り惜しいは父上、母樣……隨分御無事で。

ト泣き落し、一二度咽喉へ當て、南無阿彌と机の上に柄を据ゑ、グッと突き込む。時の鐘。奥より岩藤出て、尾上が懷中の彌陀を取らんと手を差し込む。その手を持ち

尾上　何者ぢや。

ト岩藤を見てキッと思ひ入れ。

岩藤どのか。

トきつと云ふ。

岩藤　喧ましい。この尊像を渡して、早うくたばれ。

尾上　エヽ、こなさんはなう。大切たる尊像を、やはかこなさんに渡さうか。

岩藤　默つてくたばれ。

ト引ッ奪り、尾上、それをとかゝる。蹴倒し、仰のけに倒るゝ。岩藤、花道眞中程へ引く。向うより人來るゆゑ、切落しへ隱れる。此うち尾上起き上がり。

尾上　おのれ岩藤、いづくまでも。

ト花道の角手前まで行きて倒れる。バタ〳〵にてお初出る。直ぐに本舞臺へ來る。岩藤此うち向うへ入る。お初、尾上の死骸を見て、いろ〳〵思ひ入れあつて

はつ　ヤ、、、、もう遲かつたか。旦那樣、尾上さま。

ト呼び立てる。尾上、心附き、岩藤と思ひ、お初の胸を取りて

尾上　おのれ岩藤。

はつ　旦那樣、お心が附きましたか。初でござりまする。

トしつかりと云ふ。尾上、氣の附く思ひ入れ。

尾上　初か〳〵。

はつ　初でござります。

ト尾上、お初をキッと捕へて

尾上　遲かつた〳〵。

ト云ひ捨て廻る。お初、尾上をキッと捉へて

お初　遲かつたか。モシ、お心を慥かにお持ちなされませ。マア、なんと致した事でござります。斯うなる事なら最前の時、なぜに仰しやつては下さりませぬ。なんぼ數ならぬ私しでも、あなたの御家來、お主樣の御身の爲なら、なんのこの身を惜しみませう。お前さまのお心の濟まぬ事でも、どうなりと仕樣もやうもござりませうものを、今となつてはこれがマア、どうなるものでござりますぞいの。あなたにお別れ申して、この初はなんとなりませうぞいなァ。第一あなたのお里へ申し譯がござりませぬ。逸まつた事をなされて下さりましたなア。

尾上　モヽ、そ、、、尤も〳〵。がこの樣子は。

はつ　サア〳〵、よう存じて居りまする。日頃からお情深いあなた樣の心で、合點のゆかぬ今宵のお使ひ。是非なうお屋敷を出ながらも、途中の胸騷ぎ、行くに行かれず後ろ髮、蟲が知らせて不思議にも、取つて落せし文箱の中に、思はぬこの草履とこの文。見ればあなたの書置、ハッと思うて氣もそゞろ。どうして戻りましたやら、取つて歸りし甲斐も無う、思ひ切つた事なされて下さりましたなア。なぜ私しに仰しやつては下さりませぬ。お情ない旦那樣。今となつて、いくら申し上げたとて、モウモウ仕樣もやうもござりませぬが、日頃の御氣性では、御尤もでござりまする。なんぼあなたがお隱しなされても、今日御殿の御樣子、よう存じて居りまする。元の起りは、これでござりまするか。

ト草履を見せる。尾上、手に取り

尾上　局岩藤、無念な。

はつ　御尤もでござります。

尾上　口惜しい。

はつ　御道理でござります。

尾上　殘念な。

トきつと云ひながら反り返る。お初、抱きとめ

はつ　モシ、旦那さま〳〵。

尾上　まだ〳〵大切な。

はつ　どうなされましたえ。

尾上　朝日の彌陀を。

はつ　朝日の彌陀とはえ

尾上　岩藤が。

はつ　どうぞ致しましたかえ。

尾上　奪ひ取つた。
　トきつと云ふ。反り返る。お初今迄
はつ　すりや、朝日の彌陀を、岩藤が取つたとは、重々憎いあの岩藤。おのれ、岩藤を。
　ト行かうとする。尾上、反り返るゆゑ抱き締めて
モシ〳〵、お氣違ひなされまするな。その尊像も取戻し、キッとあなたのお恨みも晴らしませう程に、必らず案じなされまするな。
　ト尾上、嬉しき思ひ入れ。心落ちつきたるゆゑ、がつくりとなりさうになる。お初、抱き締める。尾上チッと目を明く。
所詮叶はぬこのお命、御最期淸う遂はせや。
尾上　嬉しい〳〵。初か〳〵。
　ト目の見えぬ思ひ入れ。
はつ　ハイ〳〵。これに、これに居りまする〳〵。
　トお初、顏を尾上が手の方へ出す。尾上、お初が顏を撫で、いろ〳〵あつて
尾上　さらば〳〵。
　ト落入る思ひ入れ。
はつ　モシ〳〵、旦那樣、今一度初と仰しやつて下さりませ。モシ〳〵、旦那さま〳〵。
　トこのせりふのうち、段々辷りながら骸つけに伏し、泣入る。
果敢ない御最期でござりましたなア。
　ト死骸に取りつき大泣き。やう〳〵、心を取り直し、死骸を二重舞臺の蒲團の上へ直し、血を拭き、始末して書置を懷中して草履をしまひ、懷劍を取り、血を拭ひ腰に差し、帶締め直し、尾上が方を見て思ひ入れあつて
おのれ岩藤、尾上さまの御無念、晴らさいで置かうか。
　ト身拵らへ、花道に行かうとする。後より侍女初音出で、動くなと立廻り。初音を投げ、逸散に向うへ入る。このキッカケに二重舞臺廻る。
　奥庭の體。植込み石燈籠柴垣あり、蛙の聲雨頻く下座より大膳、路次笠を翳し出る。向うより岩藤、傘をさして出て來る。
大膳　朝日の彌陀は。
岩藤　まんまと手に入れました。
大膳　出來た〳〵。して尾上は。

岩藤　自害しましたわいの。

大膳　尾上がくたばつたはよいが、初めはどうしましたな。

岩藤　あの女が來てはいけぬと思うて、留守を幸ひ、この尊像を奪ひ取つたれば、知れる事ではござりませぬ。

大膳　よし〳〵。然らば身共は義高公へ、この由申し上げませう。

岩藤　それ〳〵、早う〳〵。

ト大膳、下座へ入る。蛙の聲止む。岩藤、合點のゆかぬ思ひ入れあつて、尊像をしつかりと懷中して

合點のゆかぬ。今まで喧しく鳴いた蛙が、さつぱりと鳴き止みしは、誰れか外に來たものはないか。

ト抱へ帶結び方々見廻し、上の方の柴垣を見る。お初柴垣を押分け出る。岩藤見咎め

誰れぢや、何者ぢや。

はつ　ハイ、私しは尾上が召仕、初でござります。

岩藤　成る程、聞いたやうな聲ぢやと思うた。不屆き奴の。りその初が、この奥庭へは、何の用で入り込んだのぢや。

はつ　ハイ、私しがこれまで參りましたは。

岩藤　きり〳〵云へ、云ひ譯がないと身の上であらうぞ。

ト合ひ方。

はつ　ハイ、お局樣、ひよんな悲しい事が出來ましたわいなア。

岩藤　そりや、何事ぢや。

はつ　私しが主人尾上が御病氣、お閊へが差込みまして、一向に氣が附きませぬ。もしもの事があつては、私し一人で心細うござりまするゆゑ、あなたへお願ひに參りました。憚りながら、あなた樣が、部屋までお成りなされまして、病氣の樣子御覽じて下されうなら、有り難うござります。

岩藤　ハア、、尾上どのには持病が發つて、氣が附かぬと云ふのか。さう云ふ事なら早う藥でも服まして、介抱したがよいわいやい。

はつ　それに如才はござりませぬが、一向お心が附きませぬ。なりませうならあなた樣に、なんぞ好い藥かお守がござりませう。それを水に映して、お上げ申したうござります。どうぞお貸しなされて下さりませ。

岩藤　ハテ、それは氣の毒な事ぢやが、差當つて好い守と云ふは無い。

はつ　何を仰しやるやら。あなた樣には結構なお守をお持



三世瀬川路考のお初

ちなさる丶事は、私しがよう存じて居りまする。

岩藤　ハテ、初とした事が、なんの如才があるものか。人の爲になる事なら、貸さいでよいものかいなう。

はつ　サア、人の爲になる、お慈悲深いお局樣、どうぞ、お貸しなされて下さりませ。

岩藤　ハテサテしつこい。無いと申すに。

はつ　イヤ、お前樣には、結構なお守が、キッとある筈でござります。

岩藤　そりや、何がいの。

はつ　しかも朝日の彌陀が。

岩藤　ヤア。

ト岩藤キッとして

はつ　それを此方へ、お借り申しに參りましたわいな。

岩藤　ムウ、すりや、この岩藤が、その朝日の彌陀を持つて居ると推量して。

はつ　お庭傳ひに參りました。あなたのお側へ近寄つて、尾上が病氣のいろ〳〵をキッとお話し申した上、御検分を賴まん爲、夜夜中もいとひませず、參りましてござります。

岩藤　さう云やれば、此方に覺えはないけれど、曇らぬ心が女の守とも、朋輩の病氣とあるを、見舞ひせぬも後日の不念。如何にも樣子を見屆けに行かう。

はつ　サア、御一緒に、お供いたして參りませう。

ト身構へする。岩藤、これを見て

岩藤　イヤ、今は行かれぬ。

はつ　そりや、なぜな。

岩藤　おれも持病の頭痛が發つた。其方、先へ行きや。

はつ　すりや、あなたには、御頭痛が發りましたか。

岩藤　持病の頭痛で心地惡い。

はつ　ホ、、、。ハテナア。左樣なら、それには、好い守がござります。

岩藤　して、その守とは。

はつ　幸ひ爰に持ち合せて居ります。

ト以前の草履を出す。

岩藤　そりや草履ぢやないか。

はつ　その頭痛の守には、この草履が相應でござります。

岩藤　默れ。最前より慮外も顧みず、相手になれば、附け上がりのした不屆き者。例へ尾上が病氣であらうが、よしや目鼻が開いてくたばつてしまはうが、なんでおれが構ふものか。ヤイ、下司め、自體おのれは下樣の分とし

て、イケ圖々と伸し上がり、詞を返す茲な女め。ヤイ、最前も最前、場所をも辨まへず、おれが前へ出て、いらざる差出た劍術立て。ようおれを叩いたな。

ト髻を捉へ

その上、朝日の彌陀をおれが持つて居るとは、いつ實正を見た。おのれが主の尾上が、姬君よりお預かり申したぞよ。ハア、、又それを失つたか。大切な淺絹の香爐さへ打割るやうな粗相者。なんの尊像を大切に掛けやう筈がない。大方盜まれて云ひ譯の仕樣がないに依つて、病氣と云ひ立て、首でも縊つたと云ふやうな事であらう。それをこの岩藤に執成して、御前を美しく濟まさうと云ふ事か。そりやならぬ。コリヤ、それではうぬもどうか、その分では濟まぬぞよ。

はつ　滅多な事を仰しやりまするな。

岩藤　おのれが爰へ來て、草履を出したからは、何もかも尾上に聞いたに違ひない。その顋骨を留めねば後日の妨げ。

トいろ〱あつて、お初を向うへ突き倒す時、彌陀を取落す。

はつ　こりや、正しく朝日の彌陀。

ト岩藤、それをとかゝるを突きのけ

嬉しや、この尊像を取返さうばつかり、其方の自由になつたのぢやわいたう。

岩藤　何がなんと。

はつ　もう。これからは容赦はない。主人尾上が最期の怨み、今こそ晴らす。覺悟極めてそれへ出や。

岩藤　さう云や、われから覺悟しや。

はつ　こなさんから。

岩藤　われから。

はつ　覺悟。

岩藤　小癪な。

ト兩人立廻り、よきキツカケに誂らへの合ひ方になる。草履と懷劍にてよろしきタテあり、尊像のせり合ひ。トヾ岩藤を見事に抉り殺す。この後へ大膳出て見て居る。德兵衛も同じく窺ひ居る。お初、岩藤に止めを刺して

はつ　お主の仇、思ひ知つたか。これこそ朝日の彌陀。

大膳　それを。

トかゝり立廻りあつて

德兵　動くな。

大膳　兩人、覺悟。

トちよつと立廻り。三人よろしき見得。

三人　どこつい。

先づ今日はこれぎり

ひやうし幕

春錦伊達染曾我（終り）

赤松蟾兎見島臺







この狂言に現はれる三名優

市川高麗藏　　尾上松助　　中山富三郎

赤松蟾兎見島臺

序幕

東山別館の場

役名――足利將軍義教。足利右源太義剛。梶田民部。近習、藤馬。同、玄蕃。同、平馬。茶道、入齋。腰元、萩原。同、賴母。飛鳥井中將雅時實ハ五郎太夫。安積大膳久國。濱名息女、胡蝶姬。田舍娘、おゆき。今川伊豫之助仲秋。

本舞臺、三間の間、正面、緞子張り障子たてたる高足の二重舞臺。向う結構なる金銀付きの御殿。平舞臺、上の方に網代垣。下の方、誂らへの通り、菊の花壇を取りつけ、これに升組みの障子を掛け、この側に櫓時計の臺を置き、綺麗なる蒲團を敷き重ね、この上に黒斑の猫乘つて居る。幕の内より、上の方に、梶田民部、麻上下の形にて扣へ居る。近習藤馬、同じく麻上下にて、錫の鉢に猫の飯拵らへして居る。茶道入齋、十德、茶道の形にて、鰹節を掻いて居る。この側に、飯櫃、鰹節箱あり、すべて嵐山別莊の道具、綺麗に仕立て、所作の切れにて、幕明く。

藤馬　サア〱、今日のお膳は怪しからぬ好い鹽梅。時に入齋どの、削り方の方はようござるかな。

入齋　サア、隨分と急ぎますれども、町家の猫節と違ひまして、しかも上々の土佐節。どう致しても手間が取れまして。

民部　最前よりこれに居て拜見いたすが、何か早急な體でござるが、藤馬どの、そりや如何樣な儀でござるな。

藤馬　これは〱、手前にかまけまして御挨拶も申さず、失禮の段、御容赦下されませう。只今我れ〱ども混雜いたすは、この猫へ食物を遣はすのでござりまする。

民部　ハ、ア、然らばその猫へ。

藤馬　左樣でござる。お聞き下されい。その仔細は、この嵐山の御別莊には、殿義教公、時を打ちまするを堅く禁ぜられ、それゆゑ玉の如く殿の御秘藏遊ばさるゝ猫、これは山吹猫と申して、この眼中を以て時を定むる義教公の思ひ付き。それ程にこそお時計臺へ、あの如く只今所

所にて流行いたす、撫牛の樣な事を致して、殊の外御秘藏。それゆゑ三度〳〵の食物も、イヤハヤ、心遣ひでござりまする。

入齋　又この山吹猫と申しまするは、生得山吹を怪しからず好みまするゆゑ、即ち山吹猫と申しますれども、只今は秋の最中、山吹はござらぬゆゑ、黄菊の側に差置き、キッと番を仕ります。それゆゑ拙者はお時計番、お猫役兼帶を仕りまする。入齋が鰹節の上削りを賜ひまして、節の正味はこの山吹猫へ下されまするは、なんと冥加に叶ひました猫ではござりませぬか。

民部　イカサマ、承れば當家の殿には、殊の外猫をば秘藏なさるゝとは承つたが、これ程の事とも存じ申さぬが、拙者なども今日、重陽の賀に參つたゆゑ、具に承り、以後の心得、忝なう存じまする。

藤馬　物の譬へに申す如く、猫に小判とは申せども、この猫程に小判を遣ふ、猫もないものでござるて。

三人　ハヽヽ。

ト笑ふ。「義教公御歸館」と呼ぶ。民部、下へ扣へる。藤馬、入齋、猫の側に付き添ふ。釣り狐の合ひ方になり、花道より、萩原、顯母、腰元の形にて、紅絹の紐を繩にして持つて出て來る。後より、義教公、烏帽子、長絹、指貫の形にて、狐の身振りをしながら出て來る。後より、玄蕃、麻上下の形にて、中啓と附け太刀を持つて出て來る。後より、平馬、同じく麻上下の形にて、大銚子と杯とを持つて出て來て、皆々狐を釣らうなと云ひながら出て、直ぐに舞臺へ來て、義教公、手を出して罠にかゝる。

萩原　サア〳〵、殿さんがおかゝりなさんしたわいなア。

義教　サア〳〵、銚子持て〳〵。

玄蕃　畏まつてござりまする。ハッ、殿へ申し上げまする。これまでウカ〳〵參りましたが、最早御別莊でござりまする。

平馬　お心をお付け下されませう。

ト義教、あたりを見て

義教　オヽ、成る程〳〵、別莊ぢや〳〵。ヤレ、嬉しや嬉しや。

藤馬　殿には只今御歸館あられましたか。

義教　これがどうしてあられませいで居られるものか。今日は重陽の事なれば、是非なう室町御所へ行きは行たが、イヤモウ、堅さ〳〵と云ふものは、牛鐘の丸漬を食ふや

うな心持ちで、そこ〳〵にして歸つたが、別莊と聞いて
がつかりと疲れが出て、それに又この裝束。今日は館へ
勅使の入來とあれば、これも取れず、ア丶、武士には何
がなる。サア〳〵、少と足を揉め〳〵。

賴母　ハイ〳〵、畏まりましてござりまする。

ト揉みにかゝる。

民部　ハツ、殿へ申し上げまする。今日は重陽の祝賀、今
川仲秋申し付けまして、家來梶原民部、御機嫌伺ひの爲、
差越しましてござります。殿にも御機嫌の體を拜し、如
何ばかりか大慶至極に存じ奉ります。

義教　また堅藏が一人出居つたな。云はずと知れた九月の
節句、めでたうなうて濟むか。兎角おれが堅い事がきつ
い嫌ひ。それぢやに依つて、この通り契情の別れを惜し
むも、憎いは鷄鉦。その時々を聞くが嫌さに、アレあの
山吹が眼色で覺る秘藏の時計。ドレ〳〵、歸つてからま
だ逢はぬ。連れて來い〳〵。

萩原　畏まりました。

ト猫を抱へて義敎が前へ來て

いつそあなたのお膝へ、參りたがりましてござります。

義教　さうであらう〳〵。ヤレ〳〵、よう待つて居たな。

コリヤ〳〵藤馬、入齋、食事はよいか。

入齋　ハツ、只今お濟みましてござりまする。

義教　それでも足らぬさうな。ねだり居るワ。ソレ、たん
ぞ取らせい〳〵。

藤馬　畏まりましてござりまする。

ト民部猫を見て

民部　成る程、殿の御秘藏遊ばさるゝ程ござつて、毛色と
申し、何所と申して、申し分なき猫。アレ〳〵、殿を好
く存じて甘へまする。イヤ、どうも云へませぬ猫君でご
ざりまする。

義教　ナニ、猫君と申すか。

民部　左樣でござりまする。

義教　オヽ、出かした〳〵。君と云ふは、おれを重んじ、
この山吹を思うて、猫君と申した梶原民部。嬉しい〳〵。
サア〳〵、杯を取らさう〳〵。

民部　それは有り難う存じ奉りまする。

義教　サア〳〵、注げ〳〵。

ト義教公、杯を取上げ、平馬、酌をする。義教呑んで
民部へさす。民部、なみ〳〵と受けて、グッと呑む。

イヤ、なか〳〵話せるわえ。ア、コレ、何んぞ肴を遣は

したいが、オヽ、それ〳〵、その肴には、おれが踊りを見せて遣はさう。亂舞の代りに踊ぢや。なんと、いつその事に、其方も踊れ〳〵。

民部　それは有り難う存じ奉りまする。どう仕りまして一向その儀は不調法でござりまする。

義教　サア〳〵、その不調法がいけぬ。サア〳〵、某が手を取らう〳〵。

ト嫌がる民部が手を取つて

先づは松坂、越えたヱヽ。

ト唄ふ。下座へ取り、踊り地になり、義教公、浮かれて

サア〳〵、皆も踊れ〳〵。

皆々　ハア、。

ト皆々是非なく踊り地に合せて踊る。民部、迷惑なるこなしあるべし。好いキッカケにて、向うより、勅使と呼ぶ。これにて、皆々恟りする。民部、ツッと下座へ入る。萩原、賴母、義教が衣紋を直す。藤馬、附け太刀を佩かせる。皆々うろたへて居る。下がり葉になり、義教、藤馬、玄蕃、平馬、入齋、出迎ふ。花道より、飛鳥井中將雅時、冠り裝束、公卿の形にて出て來る。後より、仕丁、烏帽子、白丁の形にて、參內傘をさしかけ出て來る。後より、同じく仕丁、沓臺を持ち、出て來る。後より、安積大膳久國、衣裳上下にて、三方に錫の神酒德利を載せ、持つて出て來る。菖蒲革の侍ひ二人附いて出て來て、雅時、上の方へ通る。久國、下の方に扣へる。下がり葉打ち上げる。

久國　今日足利義教へ、お勅使お出迎ひの爲、斯く申す安積大膳久國、案內の爲に途中まで罷りしところ、折り好く出會せられし儘、これまでお供仕り、如何ばかり恐悅至極に存じ奉りまする。この上はイザ、我が君、お勅使の趣き、謹んでお聞きあられませう。

ト義教、いろ〳〵困つた思ひ入れ。

義教　オヽ、それ〳〵、折角お勅使の、御入城に依つて、御酒も上げたり、先づ御馳走には、奧庭より四方の山々。その上には拙なくとも、拙者が踊りの一手をも。

ト此せりふを久國打消し

久國　これは〳〵、如何いたした儀でござりまする。御馳走は後の事。サ、御覽の如くの病症ゆゑ、失禮の段、御宥免あつて、御遣勅の趣き、仰せ聞けられ下し置かれませうならば、有り難う存じ奉りまする。

雅時　成る程、聞きしにまさる義教の病症。各々の心遣ひ

察し入る。何は兎もあれ、大内よりの勅使。

皆々　ハヽヽ。

　ト管絃になる。雅時、思ひ入れあつて

雅時　先達て足利義教、富士遊覽の儀、勅願ありしところ、武將たる身にあるべき事。その上、足利の家に武將と備はるもの、富士遊覽の儀は古格と定めたき願ひ聞し召され、卽ち飛鳥井中將雅時、これを承る。右富士遊覽、お許しこれある間、有り難く勅答あれ。

義教　ハヽヽ。然らば先達てお願ひましたる、富士遊覽、お許し下さるゝとや。アヽ、有り難い〳〵。サア〳〵大膳、皆も喜べ〳〵。

久國　誠に富士遊覽、お聞き濟みあれば、卽ち當家の古格とも相成り、二つには家の面目、他の聞え。この上の大慶。猶萬事天奏よろしく

皆々　願ひ上げ奉りまする。

雅時　さこそ〳〵。早速ながら義教へ、下し置かるゝ一品あり。

　ト懷中より、袱紗に包みし短冊を出して

この一首は忝なくも、關白の御歌。足利の武將義教は、和歌にも心を寄せしとお聞きに達し、この歌を判斷いたせよとの仰せ。有り難く拜受あられよ。

　ト短冊を渡す。義教、迷惑さうに取つて頂き

義教　ハツ、先づ何は兎もあれ、關白殿下の御歌、有り難いではないか。

　ト袱紗を開き、短冊の歌を見て

これは見事な御手蹟。ハア、なんぢや「秋の菊包ふ限りはかざしてん、花より先に知らぬ我が身を」ムウ。

　トいろ〳〵考へる。この途端に、花道にて「濱名の後室參上」と呼ぶ。また東の花道にて「今川仲秋出仕」と呼ぶ。訛らへ三味線入り太鼓謠にて、東の桟敷下より、仲秋、衣裳上下にて、三方に系圖の箱を載せて出て來る。西の花道より、胡蝶姫、襠裲襠振り袖、姫の形にて、三方に名香の入りたる箱を載せ持て出て來て、兩花道より直ぐに舞臺へ來て、下の方に、仲秋、胡蝶姫、居並ぶ。鳴り物打ち上げる。義教、仲秋を見て

ヤレ〳〵、誰れぞと思うた所へ、今川仲秋、よう參つたなア。そちらは濱名の後室と思ひの外、胡蝶か。ヤレヤレ、皆揃つて大甍々々。イヤ、時に忘れたが、勅使のお入りおやぞ。

仲秋　ハツ、こは有り難き御諚。今日は重陽の宴、殊に天

氣も快晴、恐悦至極に存じ奉りまする。

胡蝶　見上げますれば、いつにない御機嫌の體を拜しまして、如何ばかりお嬉しう存じまする。誠に今日の御祝儀、母の名代、憚りをも顧みず、これまで上がりましてござりまする。

久國　これは〳〵、今川仲秋どの、並びに濱名の後室の名代として胡蝶どの、お互ひにめでたう存じまする。サアサア、我が君へ御口上もあるならば、御遠慮なう、ズッとこれへ出られい。

胡蝶　これは〳〵、有り難い御挨拶。我が君様へ今日の御祝儀。それは格別、今日のお勅使様へ、御臺様よりのお使ひでござりまする。

義敎　なんぢや。母上よりお勅使へ使ひとな。なんぞ又、氣遣ひな事ではないか。ほんに氣遣ひと云へば、今川仲秋。

仲秋　ハツ〳〵。

義敎　今日この義敎へ、關白殿下より御歌を下し置かれ、この歌を判斷せいとの仰せ。おれも判斷して見たが、どうも濟まぬ。なんと其方、この判斷をして。

ト云ふを打消し

仲秋　ハア、イヤ〳〵、その儀は假初めならぬ關白殿下の御歌。我れ〳〵しきの判斷、なか〳〵及びませうやうはござりませぬ。兎角今日のお勅使へ願ひ上げたく、仲秋めが出仕。いづれ御判斷は後方までにナ……遊ばされたがようござりませう。

義敎　ハア。そんなら仲秋も、お勅使へ願ひあると申すか。

仲秋　左樣でござりまする。

義敎　して又、母上よりお勅使へのお使ひは、なんぞ進らるゝと云ふやうな事か。胡蝶、どうぢや。

胡蝶　ハイ。御臺様よりお使ひと申しまするは。

ト胡蝶、三方を持つて、雅時が前へ直し、遙か下がりて

お勅使様へ申し上げまする。足利の御臺より申し上げまするは、それなる名香、代々當家に傳はるところの蘭奢待。只今はいつの頃よりやら、柴船と名付けござりますれども、誠に蘭奢待に極まりまするや、お勅使設けの次手こそ幸ひ、見覽に入れ參らせよとの事。何卒御一覽遊ばし下されませうならば、有り難う存じまする。

雅時　然らばこれが蘭奢待とな。

ト三方を引寄せ、思ひ入れあつて

誠に稀代の一品。傳へ聞く聖武帝、蘭奢待と改められしと聞く。尤もこの三方に、東大寺の文字籠れりとかや。いま柴船と名付けあるとても、蘭奢待に疑ひなし。かゝる名木を一覽なすは、雅時へ對し、この上の馳走はなし。滿足々々。

胡蝶　有り難う存じまする。

ト胡蝶、三方を持つて、仲秋に思ひ入れあつて下へ下がる。

雅時　して、今川左衞門とやらんが願ひと申すは、何事ぢや。

仲秋　ハッ、拙者事は只今まで、後見仕り居りまする、今川左衞門貞世が兄、今川義氏の悴にござりまするところ、卽ち幼年の砌りより、今川左衞門後見仕りまするところ、この度お勅使入らせらるゝこそ幸ひ、今日卽ち家の系圖、見覽に供へ、何卒今川の家督、相違なく仲秋へ仰せつけられ下し置かるゝやう、偏へに願ひ上げ奉りまする。

雅時　成る程、さもあるべきは實に尤も。然らばその系圖、改め得させん。

ト三方を引寄せ、改め見て

成る程、今川の系圖に相違ない。この上は、如何樣とも願ひの趣き、勝手次第に致してよからう。

仲秋　すりや、仲秋へ家督相續仰せつけられ下されんとは、ハヽヽヽ、有り難う存じ奉りまする。

義教　先づ仲秋、家督の願ひは叶うて、めでたい〳〵。富士遊覽の事もお許しとの勅諚ぢや。祝へ〳〵。

仲秋　それは猶以て、重疊な儀でござりまする。

久國　誠に今日の儀、首尾よく相濟むやうにと存じ、卽ち氏神八幡宮へ、神酒を差上げしも忠臣の心。後刻御賞翫あられませう。

義教　オヽ、何から何まで、其方の心遣ひ。過分々々。

久國　お勅使にも最前より、お氣鬱にも思し召されませう。殿諸とも設けの殿にて、御酒一獻召上がられ、然るべう存じまする。

雅時　イカサマ、歌の判斷相濟むまで。

義教　饗應いたすでござりませう。

雅時　然らば案内。

皆々　先づ入らせられませう。

ト下がり葉になり、雅時、先に義教、久國、萩原、賴

母、藤馬、玄蕃、平馬、入齋、猫を抱へ奥へ入る。あと合ひ方。仲秋、短册を三方に載せ、持ち行かうとする。胡蝶、裾を扣へ

胡蝶　仲秋さま、先づ〳〵お待ちなされいなア。

仲秋　なんぞ御用でもござるかな。

ト胡蝶、手持ちなき思ひ入れあつて、莨盆を持つて來て

胡蝶　ハイ、お莨をお上がりなされませ。

仲秋　これは〳〵、構ひ召さるな。

胡蝶　今日はおめでたう存じまする。

仲秋　左やう〳〵。菊の節句、重陽の宴、めでたう存じまするな。

ト胡蝶、花壇の菊を持つて來て

胡蝶　ほんに菊と云へば、コレ、御覽じませ。見事に咲いたこの黄菊。誰れやらが發句に、世の花に譬へを取ると今日の菊。この菊と云ふ物は、思ふ殿御を戀ひ慕ひ、心の遣る瀨のない時は、菊を見て心を慰むと云ふ事もござりましたが、なんとやら。オヽ、それ〳〵、契り草。ほんに契り草とも云ふぢやござりませぬかいな。

仲秋　慥か左樣な事も承はつた。

トこの時、久國、出て窺つて居る。

胡蝶　サア、契り草とは、好い名ぢやアござりませぬかいなア。

仲秋　コレ〳〵胡蝶どの。拙者は左樣な事は、きつい嫌ひでござるで、人が見ましては見苦しうござる。早う奥へござれサ。

胡蝶　そりや、お情なうござります。誰れ憚らぬ云ひ號け。ちつとは優しいお詞を、お聞かせなされて下さりませいなア。

仲秋　云ひ號けは兎も角も、杯いたさぬ其うちは、武士の金鐵。

ト持つて居る扇を胡蝶へ見せ

御覽なされい。この扇面に、家の誓詞、今川狀を認め置くからは、仲秋猥らは致しませぬぞ。

胡蝶　オヽ、辛氣。

ト仲秋が側へ寄らうとする。久國、咳拂ひして

久國　イヨ〳〵、睦ましい云ひ號けめ。

トこれにて、兩人悄りする。

これサ〳〵、何も其やうに驚き召さる事はない。某も少とこれから、和らかな話しのお相手いたさう。

ト胡蝶、思ひ入れあつて、三方を取上げ

胡蝶　ゆるりとお話しなされませ。

ト行かうとする。久國、裾を抑へて

久國　これはどうだ。それでは花が散りますワ。もそつとお話しなされませい。

胡蝶　まだ私が君様へ申し上げねばならぬ事がござりまする。

久國　さう云はずと。

胡蝶　お放しなされませ。

ト合ひ方になり、胡蝶、ツイと下座へ走り入る。久國、思ひ入れあつて

久國　成る程、美しいものだ。仲秋どの、お羨やましう存ずる。

仲秋　これは〳〵、最前もあの胡蝶へ申す如く、云ひ號けとは申しながら、杯いたさぬ其うちは、即ち心を守ることの仲秋。なか〳〵不義がましい儀は仕りませぬ。

久國　驚き入つた其許の御心底。併しながら、あれ程焦る胡蝶の前。これからは何所までも、御前を取繕ろひ、お取持ち仕る。

仲秋　すりや、其許様が。

久國　刀にかけまして、お取持ち仕るが、仲秋どの、折入つて頼みたき儀がござる、なんと承知下されうや。

仲秋　これは〳〵、改めましたる仰せ。身に叶ひました儀でござらば。

久國　先づ以て忝ない。貴殿の制心を守らるゝ、義心を見込み、頼みたき一儀と申すは。

ト囁く。仲秋、思ひ入れ。

仲秋　アノ某を。

久國　荷擔いたせば、一箇國や二箇國は……ナ、この胸中にござる。

ト仲秋、思ひ入れあつて

仲秋　成る程、何所までも一旦御荷擔いたす上は、拙者に二心はござらねども、慥かな證跡あらねば。

久國　實に尤も。

ト有り合せたる硯箱を取つて、一書を認め

それをお見やれ。

ト出す。仲秋、取つて披き見て

仲秋　成る程、成就の上は、宛て行はんとある誓詞の趣き。この一札を見る上は、萬事手番ひよろしく計らひ召されい。兎角壁に耳。萬事は後刻。

ト管絃になり、仲秋、思ひ入れあつて、三方の系圖を持ち、下座へ入る。

久國　先づこれで一安堵。仲秋から味方になれば、斯波細川は案の內。急いては事を破るの譬へ。段々手引きは……巧い〳〵。

ト思ひ入れ。バッタリと音して、上の方網代垣より白刃出る。久國、窺つて居る。本神樂になる。この網代垣より、足利右源太義嗣、黑の忍び頭巾にて、袱紗包みの名香を口に啣へ、窺ひ〳〵出て來て、あたりを見廻し

義嗣　まんまと兄義敎が居間へ忍び、胡蝶姫が持參なしたる、蘭麝待のこの名香、盜み取つたも、仲秋めと緣を裂き、得心させて戀の盜み。段々と思ふ壺へ。忝ない。

ト刀を納め行かうとする。久國、寄つて

久國　曲者待て。

ト切つてかゝる。義嗣、拔き合せ立廻りあつて、久國、義嗣が刀を請けとめる。

義嗣　ヤア、其方は安積大膳。何ゆゑ某へ手向ひなす。

久國　全くお手向ひは致さぬ。君の武術を試さん爲。

義嗣　なんと。

久國　天晴れなるお手の內、感心仕る。無禮の段、御高免下し置かれませう。

義嗣　すりや、曲者と切りかけしは、僞はりであつたか。

久國　何がさて、兼ねて同腹中の拙者。御意に背く心底はござらぬ。早速ながら、只今承りますれば、彼の柴船の名香は、お手に入りましたかな。

義嗣　如何にも、我れ足利の血筋と生れながら、別腹の次男とあつて、細川今川なんど申し合せ、出家させんと幼少より、相國寺にて生立てど、生得嫌ひな坊主ずく人。精進料理は飽き果てゝ、還俗なさん我が心腹の、折に幸ひ、心利きたる其方。いよ〳〵兼ねて申し合せし通り、足利の家を繼ぐべき腰押してくれうや。

久國　二言ともなき拙者も武士。義敎公の愚かしき心に付け込み、御意見申す奴輩は、殘らず遠ざけ、內々あなたを御還俗の儀も、取繕ろひ置きましたれば、今日中にも。

義嗣　イヤ〳〵、兄義敎は大たわけゆゑ、心任せにはならうが、日頃から某を疎む、斯波細川の古老の奴輩。頭を振つたその時は。

久國　その儀もお氣遣ひはござりませぬ。所詮大馬鹿な義敎公の詞は、古老の奴輩も用ひまいと存ずる。今日富士

遊覽御免許のお勅使、飛鳥井どのゝお入り。勅使ごかしに歸伏させる工風を、致してござるて。

義嗣　すりやアノ、兼ねて話しの奴を、飛鳥井どのに。

久國　仕立て連れしも一大事、心得ある五郎太夫。一味の印。人質がはりのその名香。

義嗣　成る程、蘭麝待を渡し置くは、心措きなき同腹中。久國、人知れず五郎太夫へ遣はしてよからう。

ト渡す。久國、受取り

久國　この一品を渡し置けば、まだ／＼彼奴を主に胡蝶姫も。

義嗣　引ッぱらつて、おれに渡すか。

久國　モシ、何事も隱密々々。

ト奧にて執着の「牡丹に戯むれ獅子の曲」と謡ふ。

義嗣　ヤア、あれは。

久國　たわけを盡す殿のお遊び。

ト囁く。義嗣、呑み込んで下の花壇へ小隱れする。執着の狂ひになり、奧より、義教、廣振り袖、着流しの形にて、扇獅子をかむり、牡丹の花を持ち、踊りながら出る。後より、萩原、賴母、藤馬、玄蕃、入齋、平馬、民部、付いて出て來る。義教、獅子の狂ひを當振りに踊りながら、其所へ倒れる。

義教　ヤレ／＼、草臥れた／＼。息が切れた。湯を持て湯を持て。

賴母　ハイ／＼、畏まりました。

ト蒔繪の茶臺に錦出の茶碗を載せ、湯を呑ませる。萩原、賴母、介抱して二疊臺へ乘せる。

義教　どうぢや、身が踊り。面白い事であらうがな。面白うないと云つて見をれ。免さぬぞ。

女皆　アヽ、モシ／＼、面白い事でござりましたわいなア。

義教　上手か／＼。よう褒めた。うい奴／＼。執着を見て、わいらも執着いたしたであらう。ハヽヽヽ、時に近習の者ども、わいらも褒めぬか。

藤馬　イヤモウ、根太は檜の八寸角。どう踊り跳ねても拔ける氣遣ひはなし。

玄蕃　疵は目鼻の危ないばかり。

兩人　マア、お上手でござりまする。

義教　そのマアとは、どうぢや。

藤馬　マアと申しましたは、それ／＼、マア一度見たいと申す儀で

兩人　ござりまする。

義教　ウム。そのマアが、もう一度見たくば、ドレ、今度は道成寺を。

ト中啓を持つて、立ち上がる。久國、思ひ入れあつて

久國　イヤ、我が君、御諫言は御不興と存じながら、臣下の役目、兎角上を學ぶ下の道理をお聞き屆けあつて、お心をお改め下されませう。

民部　シタリ、流石は御出頭の久國さま。君は船、臣は水と、その御所存にて、君へ御諫言あらば、自然とお心も御發明にならんは必定。兎に角、諫めをお用ひあつて、然るべう存じ奉りまする。

義教　ヤレ喧ましい。併し、大膽は忠臣者。いつぞやよりウツトりと云ふ病ひに閉ぢられ、兎角氣抜けが病氣であつたが、養生の爲、踊り囃子に氣を引立てろ〳〵と、今では氣が引立ち過ぎて、無性に噪ぎたくなつて居る所へ、また堅くせいと云ふ。堅くしたくば、鐵砲玉の座禪豆、竹篦のよごしでも喰はせて、石屋の内へ聟にでもやつてくれう。

民部　すりや、どのやうに申しても。

義教　一寸先は闇の夜も、兎角戯むれ遊べ。サア〳〵、踊れ〳〵。

ト立ち上がる。この時、下の方より、義嗣、ツカ〳〵と出て

義嗣　國家の政事も構はず、さほど遊興がしたくば、何ゆゑ身共に還俗させ、家國を讓らつしやらぬぞ。

義教　また一人悧口を云ひ出た。マア、さう云ふ貴公は誰れだえ。

義嗣　別腹なれども現在の弟、右源太義嗣だワ。見忘れさしつたか。

義教　オヽ、成る程、さう云はれて見れば弟が、一人あつたやうにも覺えたが。

義嗣　すりや、現在の弟を。

義教　さつぱりと見忘れた。

義嗣　措かつせい。兄ながらも、呆れ果てた大たわけ。大膽久國、これでも武將と云はれるか。

久國　愚かしいと云ふも餘り、健忘とやら云ふ御病症に等しき有様。お家の恥辱、御苗字の疵と、嘆かはしう存じまする。

ト義嗣、思ひ入れあつて、義教を二疊臺より蹴落し、直ぐに二疊臺へ上がる。皆々驚ろき

賴母　モシ〳〵、現在弟の身を以て、兄君と云ひ、殊に武

將のお位も恐れず

萩原　理不盡なる事を遊ばすと、女子でこそあれ、斯波が妹萩原。

頼母　山名が妹頼母、義嗣公とて御容赦は

兩人　致しませぬぞ。

義嗣　小ざかしい女輩。兄とてうつけな義敎に、足利の家名を穢されんより、文武に秀でしこの義嗣、家を治むるものならば、國家の喜び、汝等が氣休め。わいらが兄も共々に、身が跡目に直るやうに、氏神でも拜めと云へよ。

兩人　でも、その儀は。

義嗣　ならぬと云つて、主人は同じ義嗣に刃向ふか。

兩人　サア。

義嗣　サア／＼、どうだ。

ト最前より、後に仲秋、三方に短册を載せて、持つて出て居る。

仲秋　イヤ、憚りながら義嗣さまには、そりや御難題かと存じまする。

義嗣　其方は今川仲秋。我が家に疵を付けまいと、この義嗣が申し條。無理か難題か。何を以てさは申すぞ。

仲秋　憚りながら、愚かしいとて現在の兄上、義敎公を足下にかけたが、無法でござるまいか。御難題であるまいか。その上、御得心もない御家督を望むは、俗に申す氣狂ひの沙汰とやら。先づとつくりと御勘辨なされ、然るべう存じまする。

義嗣　默れ仲秋。義嗣に向つて氣狂ひとは。

仲秋　氣狂ひであるまいか。親兄の禮を思し召さぬお心ゆゑ、斯波細川の面々、御相談の上、御幼少より相國寺へ遣り奉り、御出家遊ばす御身を以て、只今のやうに我意あつて、御家督望むは氣狂ひでなく、本性で御意なさるれば、御謀叛人でござりまするぞ。

義嗣　エヽ。

トぎよつとして、久國と顏見合せ、久國、思ひ入れ。

仲秋　サア、其所を存じて氣狂ひ、ナ……それとも達てと仰しやれば、謀叛人と申し立てませうか。

義嗣　サア。

仲秋　氣狂ひでござらば、氣狂ひのやうに、早う正氣にならせられたがようござらう。

義敎　ハヽヽヽ、そんなら弟めは、いよ／＼氣狂ひぢやな。氣狂ひならば。

ト義嗣を二疊臺より蹴落し、直ぐに二疊臺へ上がる。

皆々思ひ入れ。

藤馬　こりや、義嗣公を

皆々　なんとなされまする。

義教　ハ、、、小ざかしき男輩。弟とて氣狂ひの義嗣、足利の家名を穢されうより、文武に秀でしこの義教。家を治むるものならば、國家の喜び、わいらも共に氏神でも拜め。

仲秋　ハ、ア、それでこそ誠の義教公、お出かしなされましたな。

義教　これも今、あの弟めが、おれを蹴落して云つたせりふ。おれが智惠から、どうしてこれが出るものかえ。そんならこれから、今のやうに云へば、皆が褒めるか。

仲秋　左やう／＼。何事に依らず、御意を背きまする者はござりませぬ。

義教　そんならこの末、今のやうにさへ云へばよいな。合點ぢや／＼。

仲秋　サ、この上は右源太義嗣公、我が君のお心は、あの通り。あなた樣には一刻も早う、相國寺へお歸りあつて、然るべう存じまする。

義嗣　イ、ヤ歸るまい。阿房の云ふ事、當にはならぬ。大切な家國を預けて置いちやァ、夜も寝られぬ。この上は古老の面々呼び集め、兄義教を隱居させ、武將の跡目はこの義嗣。

仲秋　イ、ヤ、そりや御相談までもなく、古老の面々不得心。但しその我まゝ御得心の、家國をお望みなされゝば、謀叛と諸大名へ達しませうか。

義嗣　サア、それは。

仲秋　サア／＼、なんとでござりまするな。

義嗣　エ、、忌々しい。

ト奥にて「勅使の御歸館」と呼ぶ。下がり葉になり、障子の内より、雅時、出て來る。下座より、以前の仕丁、長柄の傘、沓を持つて來て、直ぐに雅時、これを穿いて、舞臺へ下りる。仲秋、久國、平伏する。

久國　これは／＼雅時公には、最早御歸館あられまするか。武將義教事、御見覽の異病ゆゑ、粗末の警衞、御高免下し置かれませう。

雅時　なにサ／＼、勅を重んじ、種々の饗應、滿足いたす。それは格別、最前渡せし關白殿下の短冊、義教には判斷召されたかな。

久國　ハア、御覽の通り、主人義教、未だ判斷の儀は。

義嗣　どうして／＼、かかるたわけで、歌の判斷が出來るものか。それで武將と云はれうか。サア義教、其所へ出て、お歌の返答、早く申し上げさつしやい。

ト義教をそこへ突き出す。

雅時　それ／＼、如何やうともお歌の判斷、義教どの、返答をしやれ。

ト義教、思ひ入れあつて、雅時を突き退け、其所へ出て

義教　ハヽヽ、小ざかしき男輩。弟とて氣狂ひの義嗣に、足利の家名を穢されうより、文武に秀でしこの義教、家を納むるものならば、國家の喜び、勅使も共々、氏神でも拜め。

ト仲秋、思ひ入れあつて

仲秋　こりや、お勅使へ、何を仰せられまするぞ。

義教　それでも先刻、なんぞの時に斯う云へと云うたではないか。

仲秋　ハツ、お勅使へ申し上げまする。義教かゝる病症の儀、お免しあつて、御返答の名代、安積大膳、並びに仲秋へ仰せつけられ下されませうならば、有り難う存じ

兩人　奉りまする。

雅時　イカサマ、義教病氣とあらば、名代の儀、兎も角も。

ト合ひ方になり、仲秋、短册を取上げ、久國が前へ出し

仲秋　秋の菊匂ふ限りはかざしてん。

久國　花より先に知らぬ我が身を。

ト兩人、考へるこなし。

このお歌の心は、兎角無常の浮世ゆゑ、花より先に散ると知りて

仲秋　盛りのうちは、菊も人も僅かなれば、呑めや唄へや樂しめと申す、歌の心でござらうかな。

雅時　イヽヤ、その心は、生得愚かしき上に多病の義教、未だ世を繼ぐべき子とてもなければ、幸ひ相國寺にて出家さすべき、弟右源太義嗣、武將の養子となし、もしもの事ある時は、家督にせよとのお歌の心。

仲秋　ナ、なんと。

ト思ひ入れ。

雅時　菊は花の弟草、匂ふ限りは盛りの義嗣。

仲秋　花より先とは義教公、もしもの時の御扣へ。

雅時　お歌の趣き、とくと承知仕されたか。

ト仲秋、思ひ入れあつて

仲秋　ハツ、お歌の返答、即ちこの品。
ト合ひ方になり、仲秋、舞臺にある以前の扇獅子を取つて、雅時が前へ差出す。
雅時　この品が返事とは。
仲秋　サア、獅子は我が子を谷へ落し、その勢ひを見るとかや承はる。獣物さへその通り。まして大切なる武將の御身へ、斯樣申すは異なものながら、子を見る事親に如かずと、先將軍義滿公、御存生の砌り、出家させよと仰せありたる右源太さま、今さら御養子と申しては。
氏部　サア、明らさまには申されぬこの場の仕儀。いづれ古老の面々へ、とくと相談いたしますまでは、御返答の儀は。
雅時　イヤ、そりやならぬ。
仲秋　すりや、どうござつても。
雅時　違背の者は違勅同然。こりや申さずともであらう。
仲秋　ヘイ。
ト思ひ入れ。
義嗣　なんと、それ見たか。この義嗣が家督は順道。さればこそ關白殿下も、左樣思し召したでないか。大膳仲秋、この旨諸家へ申達せよ。

久國　ハツ、どうして違背ござりませうや。未は東方にて陽の刻限。幸ひ重陽、氏神の神酒を以て、御養君の杯事、久國取賄ひまするでござりませう。
雅時　然らば方々。
久國　勅使のお立ち。
ト下がり葉になり、雅時、皆々へ目禮して、花道へかかる。仕丁、傘をさしかける。此うち、義教、委細構はず奥へ入る。義嗣、久國、思ひ入れあつて、ごされと入る。好い程にチンツ、にて、花道より、田舍娘おゆき、振り袖木綿やつし、ひらり帽子、脚絆、草鞋、菅笠を持ち、藁苞を脊負ひ、田舍娘の形にて出て來る。これを菖蒲革の侍ひ二人、六尺棒を持ち、下がれ〱と付いて來て、雅時と花道にて行き逢ふ。
侍ひ　下がれ〱。
ゆき　ハイ〱、どうぞお通しなされて下さりませいなア。
侍ひ　ソレ、お勅使だ。
同　下がれ〱〱。
ト此うちにおゆき、雅時とフト顔を見合せ
ゆき　ヤア。
ト恟りして云はうとするゆゑ、雅時、睨みつける。お

ゆき、合點のゆかぬ思ひ入れ。

二人　下がれ〳〵。

ト これにて、雅時、構はずに仕丁付いて花道へ入る。侍ひ、おゆきを「お勅使だ〳〵」と六尺棒にて舞臺へ追つて來る。

ゆき　モシ〳〵、今の内裏雛のやうなお方に、聞きたい事がござんす程に、どうぞ其所退いて通して下されませ。

侍ひ　此奴が〳〵。お勅使樣へ對して聞く事があるとは

二人　慮外な奴。扣へて居らう。

ト 棒を振り上げ立ちかゝる。仲秋、これを見て

仲秋　コリヤ〳〵、見れば卑しい賤の女子。どう云ふ譯か知らねども、荒氣に致すな。

侍ひ　ヘイ〳〵、荒氣には致しませぬが、お勅使へ無禮を致しまするゆゑ。

仲秋　イヤ〳〵、あながち無禮も致すまい。コリヤ〳〵、其方どもは次へ立て。

侍ひ　でも、その女を。

仲秋　ハテサテ、行けと云ふに。

二人　ハア。

ト 下の方へ入る。仲秋、こなしあつて

仲秋　時に女子、其方は何者ぢや。

ゆき　ハイ〳〵、有り難うござりまする。なんぢややら、怖い侍ひ衆が叱らしやんすゆゑに、なることぢやアござりませぬ。アノ私しは、父さんと一緒に、都見物に參りまして、あの六角通り、東の洞院とやら申す所に、餅屋惣右衞門と申しまする、人を泊めまする家に逗留いたして居りまするが、昨夜から父さんが、何所へ行かしやんしたやら見えませぬゆゑ、探しに出まして、お寺ぢやと存じまして、うか〳〵と御門を入りました者。ハイハイ、どうぞ御免なされて下さりませいなア。

仲秋　ハア、すれば其方は親と一緒に、都見物に參つたが、昨夜から親が居ぬゆゑ、尋ねに出たと申すか。さうかさうか。

ゆき　ハイ、左樣でござりまする。どうぞ御免なされて下されませい。

仲秋　隨分、大事ない〳〵。併し、心當りでもあつての事か。

ゆき　ハイ、心當りもござんすけれど、慥かに今逢うた内裏雛さま、どうやらあのお方が。

仲秋　なんと。

ト思ひ入れ。

ゆき　どうも合點が參りませぬ。

ト　おゆき、不思議な思ひ入れ。此うち、下座より、入齋、猫を抱いて出て來る。以前の臺へ直す。仲秋、思ひ入れあつて

仲秋　コリヤ、入齋どの、その硯箱をこれへ。

ト手紙をさら／＼と書いて

この手紙を、民部へ屆けておくりやれ。

入齋　ハツ、畏まりました。お猫樣を賴み申しまする。

仲秋　某キツと預かり申した。

ト入齋、手紙を持つて下座へ入る。

ゆき　どうぞ早う尋ねたいものぢやがな。

仲秋　コリヤ／＼女、何時でも歸りたい時は歸してやらうが、願うてもならぬこの嵐山の御別莊。次手にお座敷でも拜見して行きやれ。

ゆき　有り難うござりまする。

ト民部、系圖の箱を持つて出て來る。

民部　仲秋さま。これに入らつしやりましたかな。お手紙ゆゑ、卽ちお系圖、持參仕りましてござりまする。

仲秋　大儀々々。家の系圖、勅使見覽濟む上は大切の品。旅宿へ其方、キツと守護いたせ。

民部　ハツ。すりやお系圖は御旅館へ。

仲秋　左衞門貞世にも、今日の赴き相話し、喜ばせい。隨分ともに心を付けて參れ。

民部　民部が守護いたせば、鐵石のうちに納めあるも同然。ちつともお氣遣ひ下さりますな。

仲秋　出かした。急げ。

民部　ハツ。

ト三重になり、民部、系圖の箱を持ち、一散に向うへ入る。この時、おゆき、仲秋を見て、いろ／＼思ひ入れあつて、入齋が持つて來た猫、おゆきが振り袖へちやれるゆゑ、おゆき、懷中をいろ／＼探し、フツと手紙を出して、猫をじやらす。仲秋、これを見て

仲秋　サア／＼、これからはモウ叱る者も心遣ひもない。これへ參れ／＼。

ゆき　ハイ／＼、御免なされて下されまし。

仲秋　すりや、寺と思うて、うか／＼これへ參つたかの。

ト云ひながら、猫の啣へた手紙の端を見て

ナニ、五郎太夫どのへ久國。

トおゆき、手ばしかくこの手紙を取りて

ゆき　こりや、私しが、大事の物でござりまする。

ト懐中へ入れ、猫を抱いて仲秋を見て、恥しき思ひ入れ。

仲秋　コレ〳〵、その猫は大切な猫、此方へ寄越しや。

ゆき　イエ〳〵、此やうによう馴染みましたもの。まちつと抱かせて下さりませ。

仲秋　サア、随分抱いて居るはよいが、その猫は。

ゆき　この猫が、なんとぞ致しますかえ。

仲秋　サア、なんともせぬが、オヽ、それ〳〵、その猫は物を云ふわいの。

ゆき　エヽ、そんならこの猫が、物を申しますかいなア。

仲秋　云ふとも〳〵。化け猫ぢやわいの。

ゆき　エヽ、氣味の悪い。

ト猫を放す。仲秋、取つて抱き上げ

仲秋　コレ化け猫、貴様は最前から、あの娘にしなだれて居たが怪しいわえ。コレ、遠慮な事はない。おれに云うたがよいぞや。

ト猫の口へ耳を寄せる。

ゆき　モシ〳〵、そんならほんまに物を申しますかえ。

仲秋　默つて居たり。いま話し最中ぢや。

ト一人頷き

ムウ、そんならあの娘に……呑み込んだ〳〵。コレ〳〵、この猫が其方に惚れたといの。

ゆき　エヽ。

ト恟りする。

仲秋　さう恟りする事はない。そこが化け猫ぢやわいの。

ト又猫の口へ耳を添へ頷き

なんぼ畜生でも、さう打ちつけには云ひ憎いは、尤もだ尤もだ。おれが好いやうに云うてやらう。

ト猫に汗手拭をかぶせ、手を持つて遣ひながら

コレ、お前は何所のお方ぢや。わしや其方に惚れたわいにやア。どうぞ抱いて寐てくれる心はにやいかいにやア。

トおゆきに猫を突きつける。

ゆき　オヽ、怖。

トおゆき、飛び退く拍子に仲秋に抱きつく。その手を取つて

仲秋　ドッコイ、もう斯うなつては、猫よりおれが放さぬぢや。

ゆき　アレイナア、人が見まするわいなア。

仲秋　人が見やうが、猫が見やうが、もう放さぬ。先づ都

見物にしては、上々の掘出し物。もうお屋敷を願はして、
さつきやくながら。
ト懐中へ手を入れる。
ゆき　エヽ、何なさんすぞいな。
仲秋　ヂツとして居や〳〵。
ト手を入れる。おゆき、アレ〳〵とこなし。此うち、
仲秋、以前の手紙を引出し
この手紙は。
トおゆきを抱きしめ居て
ナニ〳〵「兼ねて頼み入れ候ふ儀、今日に限り候ふ間、
此方にて用意いたし、手筈よろしく候ふ間、申し置き候
ふ方まで、人目にかゝらぬ御用心にて、御入來待ち入り
候ふ、五郎太夫どの、大膳久國。」
ト讀み、思ひ入れあつて
さては久國めが。
ゆき　エヽ……お心當りでもござんすかえ。
ト仲秋、思ひ入れあつて
仲秋　あるとも〳〵。わしが尋ぬれば早速知れるぢや。こ
の手紙、わしが預つて置かう。
ゆき　イエ〳〵、そりや私しが大事の品で、お前様へは。

ト取つて
仲秋　オツと、よし〳〵。そんなら其方へ返さうが、コレ
娘……惚れた。
ゆき　なんのマア、田舍育ちの荒くれない者を。さうして
マア、お前様が。
仲秋　嘘でない。眞實心から。
ゆき　あんまり嬲つて下さんすないなア。
仲秋　嬲らぬ證據。
トあたりを見て
幸ひの菊畑。
トおゆきを引立てる。
ゆき　恥かしいわいなア。
仲秋　サア、おぢや。
ゆき　それぢやと云うて。
仲秋　ちやつとおぢやいの。
ト唄になり、恥かしきこなし。おゆきを無理に菊畑へ
連れて入る。と管絃になる。奧より、久國、以前の形
にて、幕明きの三方に徳利を載せ、持つて出て來る。
續いて、平馬、藤馬、玄蕃、入齋、出て、あたりを窺
ひ

四人　大膽どの。

久國　これサ、謀り事は密にと云へば、而體知らぬを幸ひに、勅使と僞はり、義教を押込めんと我が手段。まだまだ、てつきはつき片付けるはこの一品。

ト懷中より、藥包みを出す。皆々見て

四人　して、その品は。

久國　南蠻流の大毒藥、手段を以て所持なす。斯う云ふ事もあらんかと、遠き慮りは我が胸中。未の刻には間もなければ、神酒の中へ入れ置いて、義教めに喰はせる細工の仕上げ。事成就のその上は、各々方も一廉の立身。

藤馬　大名風で某は、鷄子狂ひと致さう。

玄蕃　貴殿の御推擧、島原通ひも心の儘。

平馬　イヤ又、てんや物より、水氣のある地物を樂しむ姿狂ひ。

入齋　この入齋も出世すりや、女三の宮でも金盡くめで、得心させる心でござる。

藤馬　イヤ、女三の宮と云へば、其許の預かる山吹猫は如何いたした。

入齋　それ〳〵、猫の番も有頂天。ドレ〳〵。

ト猫を取つて見て撫でゝ

ヤレ〳〵、ひよつと逃げでもすりやア、扶持の喰上げ。にやんと、そんなものぢやアござらぬか。

ト此うち、おゆき、下の方へ出て、窺つて居る。

久國　各々方の働らき次第で、出世はこの上望み次第。方方、あたりへ心を。

四人　心得ました。

ト久國、覆面して、徳利の口を取り、藥を出し、南方へ入れる。おゆき、思ひ入れ。

久國　サア、斯うして置けば、この上は入齋の大役。神酒頂戴のその折、色香を見せずに、合點か。

入齋　やつたやうぢやござりませぬ。

久國　併しながら、なんぞ試みに。

ト猫を見て

藤馬　して、この猫を幸ひ、その猫これへ。

四人　如何召さるゝ。

久國　南蠻流の毒藥は、相違なけれど、未だ用ひぬその試み。幸ひ猫に喰はせ、藥の利き目、試すは屈竟。

四人　イカサマ。

久國　早う。

入齋　心得ました。

ト入齋、猫を取り抱き上げる。この時、おゆき、猫を引ッたくり

ゆき　先刻から聞いて居れば、科もない物を可哀さうに。最前もようわしに馴染んだ猫。殺さす事はならぬわいな。

ト皆々思ひ入れ。

久國　女待て。すりや、最前からの樣子を。

ゆき　知らいでわいなア。

久國　アノ、殘らず後で聞いて居たか。

ゆき　知れた事、聞かいでわいなア。可哀さうに、この猫を殺さうと云はしやんすと、みんなわしが云うてしまふぞえ。

ト久國、四人へ切れと云ふ思ひ入れ。四人皆々呑み込み

四人　覺悟。

ト立廻りにて四人かゝる。拔けつ潜りつ、トヾ久國拔きかけるを笠にて押へる。

久國　大事を聞いた女ゆゑに、身が手にかける。觀念。

ト立廻り。奥にて「神酒頂戴の刻限」と呼ぶ。すりや、最早未の刻。

四人　生けちやア置かれぬ。覺悟。

ト皆々立廻り。好いキッカケに又呼び。義敎、先に仲秋、義嗣、萩原、賴母、出て來る。これより久國、皆皆平伏する。義敎、上の二疊臺の上へ上がる。奥より、以前の侍ひ出て來て、おゆきを見て

侍ひ　先刻の女め、まだ爰にうしやアがつた。

同　下司女め、下がれ／＼。

ト棒を突いて思ひ入れ。

ゆき　アノ、それでもわたしやア杯の殿樣に。

侍ひ　なにが、杯の殿樣ぢや。

ゆき　ちよと逢はして下さんせいなア。

ト此うち、久國始め皆々、おゆきを爰に置いては惡いと云ふ思ひ入れにて、早く／＼と侍ひに云ひつける。侍ひ二人、下がれ／＼と無性におゆきを花道へ連れて行く。おゆき、仲秋に心を殘して

それでも、ちよつとあなたに。

四人　早う／＼。

侍ひ　下がれ／＼。

ト無性に追ひ立てるゆゑ、おゆき、思ひ入れにて、猫をソッと抱き上げ、笠の内へ抱き、是非なきこなしに

て、向うへ入る。あと管絃。

藤馬　義教公へ申し上げまする。最早未の刻限。氏神八幡宮の御神酒、頂戴あつて然るべう存じ奉りまする。

久國　先刻より安積大膳久國、御神酒頂戴の用意仕つてござりまする。

ト久國、義教の前へ、三方に土器、神酒徳利を置く。義教、見て

義教　そんなら、この酒をおれに呑めか。土器で酒と云ふ奴も呑めぬものぢや。とてもの事に、茶碗でやらせてはくれまいか。

仲秋　こは、情なき御諚。お戯むれの御酒宴とは事替り、誠に御先祖尊氏公より、氏神と敬ひ給ふ御神酒なれば、聊かでも矢張り其まゝ、お頂戴あられませう。

久國　然らば直さまお土器へ。

ト思ひ入れあつて

茶道の入齋、早う〳〵。

入齋　ハツ。

ト入齋、徳利を持ち、仲秋、思ひ入れあつて平伏する。久國、義教が方を見て居る。義教、杯を取上げる。入齋、注がうとする。

義教　ア、コレ〳〵仲秋、諸士の勸め、嫌ながら呑ますばなるまいか……イヤ〳〵、呑まれぬ〳〵。それ〳〵、兎角おれが物を喰ふ時は、先へ人が喰つて、それからおれが喰ふ。この神酒も久國、サア、其方先へ呑んで、其方から呑んで、おれへ寄越せ〳〵。

ト久國にやらうとする。皆々思ひ入れ。久國、こなしあつて

久國　こに思ひ依らざる仰せ。お毒味仕るは朝暮の御膳。時ならざる物を召上がる節は、お毒味をも仕るが臣下の習ひ。これはそれには引替へて、氏神八幡宮の御神酒は、御先祖尊氏公へ差上げしも同然。臣下の身として君より先へ、頂戴いたすは甚だ畏れ。君御頂戴あつて、その後のお流れ、頂戴仕るでござりませう。

義教　成る程、氏神八幡のお告げにて、久國が忠心顯はるは、今この時ぢや。

ト久國、思ひ入れ。義教、土器を出す。入齋、注ぐ。義教、その手を取つて

先ツこの通り。

ト引寄せ、入齋が口へ土器を當て、酒を呑ませる。久國四人皆々、思ひ入れ。入齋、跪き苦しみ、血を吐き

死ぬ。

久國　すりや、八幡宮の御神酒は毒であつたか。何者の仕業ならん。

義嗣　方々、詮議々々。

藤馬　私しは曲者の詮議。

四人　ござれ。

ト四人、奥へ行かうとする。仲秋、留めて

仲秋　方々待つた。

義嗣　コレサ仲秋、大事の場所、猶豫なすは武門の恥辱。何ゆゑ留める。

仲秋　ハヽヽ、何時仕込みしやら知れざる毒藥、何所を當途に詮議召さるゝ。騒ぎ召さるな各々方。忠臣第一の久國どの、義嗣公とて御舍弟とは申させぬ。一人も妄動き召さるな。

藤馬　すりや、我れ〳〵にも疑ひを

四人　かけ召さるか。

仲秋　急かずと、マア〳〵、お扣へなされい。

ト皆々思ひ入れ。

女中方には君のお側、心を付けて。

萩瀬　心得ました。

ト義敎が側へ立寄る。義敎、思ひ入れあつて

義敎　先祖尊氏公より、武將替る〴〵と云へど、我れこの程より館の樣子見聞なすところ、佞人家に蔓つて、やゝともすれば國を窺ふの輩あり。されば某、病と僞はり、計り知つたる今日只今、國家を治むる司として、これしきの事辨まへぬやうあらんや。うつけ者めが。

仲秋　すりや、これまで君の御病症は、僞はりにて御座ありしや。

義敎　斯く佞人讒者を見出さん爲。仲秋、心を付けい。

仲秋　ハツ、有り難き君のお心。足利家の萬代不易。臣が喜び、これに過ぎんや。エヽ、忝ない。

義嗣　そんなら、兄貴は空病氣であつたか。

義敎　この上は右源太義嗣、速かに出家を遂げよ。違背に及べば、父の詞を背くの罪。返答いたすか。

義嗣　サア、そりやア。

義敎　どうぢや。

義嗣　エヽ、忌々しい。

ト義嗣、思ひ入れ。バタ〳〵にて、向うより、民部、大童に數ヶ所の疵を負ひ、高股立ちにて、走り出て來て、直ぐに舞臺へ來て

民部　仲秋さまには何れにぞ。お取次ぎ。
ト急いたることなし。仲秋驚ろき
仲秋　家來民部、仲秋これにある。仔細は如何に。
ト仲秋を見て
民部　ハツ、最前仲秋さまより、大切なるお家の系圖、御旅館へ持參なす道すがら、松尾の邊まで參りしところ、面を隱せし屈強の侍ひ拾人餘り、拔きつれて出で、暫らく戰ひ候ふところ、何所よりかは又、一人の侍ひ來り、大切なる今川の系圖、奪ひ取つて行くへ知れず。殘りの者ども、三人までは仕留めましたれども、守り奉る系圖紛失なせしは我が越度。この事申し上げんその爲に、面押拭ひ又ぞろ歸り、云ひ譯立たざる拙者が身の上。申し譯には御前にて。南無阿彌陀佛。
ト腹へ突ツ込む。仲秋、仰天して
仲秋　ヤ、、、すりや大切なる家の系圖。
民部　一刻も早く、御詮議々々々。
ト民部、刀を引き廻し、苦しみ倒れ死ぬ。
仲秋　大切なる家の系圖を失ひしは、民部が越度とは云へ、不便の最期ぢやなア。
トばた〳〵にて、下座より、胡蝶、以前の姫にて、出る。
あわたゞしい胡蝶どの、何事でござる。
胡蝶　ハツ、最前御臺樣より、大切なる名香預かり申せしに、何者とも知れず、奪ひ取つて立退きましてござりまする。申し譯には、南無阿彌陀佛。
ト仲秋が刀にて死なうとする。義教、留めて
義教　ヤレ待て胡蝶。仲秋とてもその如く、大切なる系圖。まつた名香諸とも、盜賊の爲に紛失なせばとて、死んで寶の出る事にもならず、兩人とも短氣を出さず、五十日が其うちに、尋ね出してよからう。
義嗣　イヤ、それぢやア濟むまい。仲秋が系圖は兎も角も、武將家に預かる名香、失くしたは胡蝶が科。詮議仕出すそれまでは、胡蝶姫は人質。この義嗣が預からう。
仲秋　ハ、、御出家の身とならせらるゝ右源太さま、法へ對して女は、預け申されまい。
義嗣　イヤ、もし名香の出ぬ時は、何所までも科人はこの胡蝶。緣に連なる今川仲秋、姫が首打つて持參いたせ。
仲秋　すりや、某に胡蝶が首を。
義嗣　古い手事の身替り首、玉を逃がせばわれも同罪。キツと申し渡したぞ。

仲秋　畏まつてござりまする。この上は久國どの、仲秋が別段に、御意得たう存ずる。
久國　アノ某に。
仲秋　左様。
久國　して、その用は。
ト久國、思ひ入れ。仲秋、以前のおゆきが手より取つたる手紙を出し
仲秋　久國どのには、この手紙、御存じかな。
ト久國見て
久國　その手紙が、どうして貴殿の
仲秋　六角通りの旅籠屋に、お由緣ござるか存ぜねども、何かの賴みのこの一通。久國どの、なんと覺えがござらうがな。
久國　サア、そりやア。
仲秋　今日勅使の御入來も、お目立ちもなき不審と云ひ、神酒の毒藥、彼れこれ何とやら、仲秋會得仕らぬ。サア、返答あれ、大膳久國。
ト詰め寄る。久國、思ひ入れあつて
久國　知りませぬ。
仲秋　なんと。

久國　久國毛頭存じませぬ。最前より見ますれば、その手蹟は拙者でござらぬ。例へ某が自筆に致せ、武士が町人と文通いたすまいものでござるかな。なんの賴みでやつたやら知れもせぬその手紙、持參召されて難題を云ひ召さる、其許が心元ない。久國、曾て知らぬ事でござるぞ。
仲秋　成る程、知つたとは云はれまい……如何程辯を以て申すとも、慥かな證據のこの手紙、知らぬとは卑怯至極。其斯く申し出せば、一言一句の返答はござるまい。企みの一々白狀おしやれ。
ト久國、思ひ入れ。義嗣、引取つて
義嗣　默れ仲秋。忠臣第一の久國、なんの證據、なんの目當で、企みの一々、白狀とは申すのだ。
トきつと云ふ。仲秋、思ひ入れ。
仲秋　紫の朱を奪ふ、佞臣に紛ふ。御幼少より御出家遂げらるべき義嗣公が、久國が肩持つて、こりやあなた様にも、半口ばかりお乘りなされたと存ぜらるゝわえ。
義嗣　して、惡事を企んだ證據でもあるか。
仲秋　證據があらうがあるまいが、某これに罷りあれば、大概内から引く、からくりの樣子も、一々胸中にござる。最前久國、我れへの賴み。惡事に荷擔いたせよとの、そ

の一言に取入つて、事を計りし今川仲秋。その場で直さま面縛とは存せしかど、荷擔人餘類の計り難く、わざと與みせし體にもてなし、後日の證と取り置いたるこの一書。

ト以前久國より取つたる一札を出す。義嗣、思ひ入れ。久國、ソレと取りにかゝる。仲秋、久國が襟を掻いて引寄せ、髻を取つて、扇にて打ち据ゑ

餘りザワ／＼お騒ぎあるな。サア、大膳久國、木より生まする蟲、その木を喰ふと、不忠不義の久國を打つて、萬事の企み、御前に於て速やかに白狀いたせ。ド、どうぢや。

久國　ハ、、、誤まつたり／＼。唐土の張良、我が朝の今川仲秋が明智にさゝれ、一言一句の答へもなし。某不才にして、貴所を荷擔と思ひしが、我が大望の妨げ。今さら悔む久國ならず。數代の面々差措いて、お取立てにあづかりし、大恩をも辨まへず、一旦思ひ立つたる大望も、後悔先に立たざる云ひ譯。これより心を改めんとても、よもやこの罪赦免はあるまじ。最前も仲秋どの、書面を以て諫議の折柄、鷺を烏と爭ひしが、斯くなり果つる上からは、武門の恥、心見らるゝ卑怯未練。只この上の情には、介錯頼む仲秋どの。

ト久國、双肌脱ぎ、腹へ突ッ込む。仲秋、押へて

仲秋　ヤレ待て久國、諫議の殘る上からは、切腹は叶はぬぞ。

久國　さあらんと思ひしゆゑこの切腹。穢い汚ない腸は、割つて我が手で摑み出す、惡人の某は自業自得。死して再び我が君へ、忠義を立てる。放し召されい。

義教　仲秋留めい。

仲秋　ハツ。

久國　ハツ。

ト苦しみながら平伏する。

義教　不忠不義の身を以て、自害の儀は叶はぬ事。息あるうちに餘類の者を、白狀いたせ。

久國　ハア、斯くなり果つる某、荷擔人餘類、演說はせまじと思へども、臨終の忠義。我れ善心に翻へり、閻魔の帳の消える白狀、速やかに申し上げん。

ト義嗣、皆々も思ひ入れ。

義教　ホヽオ、出かした。白狀なさば罪を免じ、不忠却つて大忠臣。

久國　そのお詞が末期の思ひ出。忝ない。

義嗣　すりや、この場に於て荷擔の者を
四人　白狀召さるか。
久國　不忠却つて忠臣となる、末期の思ひ出、申さいでは。併しながら、一旦荷擔の人々も、斯くあらんとは思はれまじ。爰を以て義教公へ一つの願ひ。
義教　死ぬる臨終に願ひとは。
久國　某、惡事に荷擔の者、數多とは申せども、外へ洩らさぬ武士の義理。何卒君の御憐愍を以て、この座の人々を席を分けられ、君御一人へ申し上げたき我が存念。久國、末期の願ひ、お聞き屆け下されうや。
義教　イカサマ、これまでの荷擔の輩を、この場で云はぬも武士の義理、聞き屆けた。
久國　こは有り難き君の御諚。時刻移れば疵口より風入りて、言舌も解るまじ。何卒早く席を遠避けられ
義教　聞き屆けた。如何に義嗣、古老の面々出家せよと申せしに、この別莊へ密かに忍び來る事、兄を輕んじ、甚だ不屆き。急ぎ仲秋義嗣諸とも、三人の者どもを、久國詮議濟むまでは、連れ參り、糺明させい。
仲秋　畏まつてござりまする。
義教　胡蝶は直さま、名香の詮議いたせ。合點がいたか。

胡蝶　畏まりましてござりまする。
義嗣　そんなら矢ツ張り
三人　我れ／＼も。
仲秋　君の上意、立ち召されい。
義教　方々、次へ。
仲秋　でも、我が君ばかり爰に。
義教　仲秋、氣遣ひ無用。斯く手を負うたる久國が、臨終の願ひ。詮議のその間、隨分と心を付けて、ナ。
ト思ひ入れ。仲秋、呑み込んで
仲秋　畏まりましてござりまする。
ト義嗣に向ひ
義嗣公にも、イザ、お立ちあられませう。
義嗣　仲秋參れ。
ト管絃になり、義嗣、先に藤馬、玄蕃、平馬、萩原、賴母、胡蝶、仲秋付いて、奥へ入る。あと合ひ方。義教、思ひ入れあつて
義教　願ひの通り人を遠ざけ、我れ一人にて餘類の詮議。サヽ、申せ。聞かん。
久國　ハア、臣が臨終のお願ひ、お聞き濟みの上からは、御前に於て。

ト　いざりながら寄らうとして、寄られぬ思ひ入れ。

エヽ口惜しや、急所の疵に堪え難く、お側近く立寄らんとは思へども、心に任せず。恐れながら君、爰へ入らせられ、餘類の一々、御承知下されませう。

義教　オヽ尤も。

ト義教、二疊臺より下りて、久國が側へ來る。

して、その餘類は。

久國　抑々惡事の起りは、君の御恩を請けながら、奢りに長じ、何卒國の主ともならんと思ふより、斯波細川を誘き寄せ

ト云ふを、義教、聞いて摺り寄り

義教　すりや、斯波細川とな。

久國　如何にも。まだその上に我が君まで。

ト苦しき思ひ入れにて云ふ。義教、聞き取れぬ思ひ入れあつて

義教　ナ、なんと。

ト義教、摺り寄る所を、久國、腹の刀を拔いて、義教が腹へ突ッ込む。義教、タヂ〳〵とよろめき、驚ろいて

義教　さては久國、この義教を謀かつて、斯くなさんず計略よな。天命知らずの極惡人。エヽ、殘念なア。

久國　ハヽヽヽ、大べら坊の義教め。切腹なして苦しき體にもてなして、人を除けたも我が計略。誠は急所を除けし我が切腹。それ〳〵。

ト襦袢にて、腹を卷き、肌を入れ、大小を差す。義教、思ひ入れあつて

義教　エヽ口惜しや。今川はなきか。仲秋は居ぬか。

ト聲を立てる。久國、これにて、義教が腹へ突ッ込みたる刀を拔き、直ぐに首をポンと切る。時の鐘鳴る。

久國　仲秋始め、一杯喰はせた馬鹿大將は、たんの手もなくころりぼつたり。一旦思ひ立つたる大望、これしきの事で、止まらうか。

ト仲秋が落したる扇を取つて

この扇は仲秋めが、今川狀を書いたる扇。ソレ。

ト死骸の側へ置いて

斯うして置けば、仲秋に疑ひ有。この上は、どうぞ人目にかゝらぬやうに、逃げたいものだが。表門は人の往來。山傳ひに法輪寺。それがいゝ〳〵。

ト尻を引ッ絡げ、頬冠りをして、ボン〳〵にて、向うへ走り入る。下座より、仲秋、手燭を持つて出て來る。

義教が死骸を見て驚ろき

仲秋 ヤ、、、こりや義教公の死骸。すりや、久國めに誑かられしか。エ、、殘念なア。

トふつと扇を見て

これこそ某が持つ扇。この扇を殘し置き、某を罪に取つて落さん久國が計略。淺ましとは云へ、君の果敢なき御最期。これより直ぐに室町御所へ。

ト身拵らへする。後へ義嗣出て居て

義嗣 仲秋觀念。

ト切りかゝる。立廻りあつて、ドッコイと留め、この見得にて、ゴン／＼になり、この道具ぶん廻す。

ト本舞臺、正面、千本通り松原の道具に納まる。

ト向うより、玄蕃、尻を絡げたる形にて、子持ち筋の弓張り提灯を灯し、出て來る。後より五郎太夫、百姓旅形、一本差しにて、冠り裝束を抱へ出て來て、舞臺へかゝり

五郎 ヤレ／＼、大きに御造作でござりました。

玄蕃 なにサ、今日の貴樣の働らき、何もかも功くやつた。ところが、少と此方にもやくやが出來て、おいらまで飛ッ沫を喰つたが、そのどさくさ紛れに、ツン逃げて歸つたのだ。もうこれから人目にかゝるまい。靜かに行かつしやい。

五郎 これは忝なうござる。して、この冠りや裝束はお前、どうぞ大膳さまへ、お返しなされて下さるまいか。

玄蕃 成る程、返してやりたいが、斯うだて。これから又一仕事は、あの胡蝶姫を引ッ攫つて、義嗣公へ連れて行く。得心せにやア首にする手筈。マア、貴樣はソロ／＼行かつしやい。

五郎 モシ／＼、そんなら胡蝶姫が嫌だと云へば。

玄蕃 殺してしまふのだ。

ト五郎太夫、思ひ入れあつて

五郎 それは騷動な事でござりまする。そんならこの冠り裝束、お預かり置きませうよ。

玄蕃 どうでもさつしやれ。ドレ、行くべい。

トごん／＼になり、玄蕃、走り入る。五郎太夫、向うを見て

五郎 モシ、どなたにも、好う申して下さりませ。賴みますぞや／＼。

トあたりを見廻す。蟲の聲、捨て鐘。思ひ入れ。

今日計らずも足利家へ、勅使と僞はり、事の樣子を窺ひ見るに、次男義尚、胡蝶の前を慕ふ由。得心せねば命取らん底企み。いま玄蕃が、この道筋を行くからは、爰へ來るは知れた事。ソレ。

ト思ひ入れ。この時、キッカケにて、月を出す。矢張り捨て鐘にて、向うより、藤馬、玄蕃、平馬、乘り物を舁き出て來る。後より、仲秋、袴ばかり、股立ちを取つて、頰冠りなして、少し後より樣子を窺ひながら付いて出て來る。五郎太夫、上の方へ小隱れする。駕籠は構はず、舞臺へ來て、仲秋、下の方に窺ふ。

三人　サア／＼、少つと休め／＼。

藤馬　どさくさ紛れに胡蝶姫を、たうとうこの駕籠にぶち乘せて、爰までは來たが、もう人の氣の付く事おやアない。

平馬　シタガ、これから連れて行つて、口説くが山なり、二世の固め。

玄蕃　併しハヤ、諸侍ひが駕籠舁きのこの態。

藤馬　早くやらかせ／＼。

三人　合點だ。

ト駕籠を舁き上げる。この時、五郎太夫、頰冠り、一腰を拔き、駕籠に立ち塞がり、ヒラリと見せる。これにて、三人、駕籠を下ろし、三人拔き連れて烈しき立廻りあつて、トヾ五郎太夫、三人を切り散らす。これにて、三人逃げて向うへ入る。五郎太夫、駕籠の戸を明け、内より、胡蝶姫、猿轡、縛られて出る。この時、仲秋、窺つて居る。五郎太夫、胡蝶姫を其まゝ負はうとする。仲秋、後より、引き下ろす。五郎太夫、胡蝶姫を下へ退けて、互ひに顏を見ようとして、ちよつと立廻りあつて、トヾ仲秋、五郎太夫が頰冠りを取る。五郎太夫、顏を背け、この途端に、キッカケにて、月を後へ引いて取る。兩人、闇の思ひ入れ。窺ふ途端よろしくあつて

拍子幕。直ぐにシャギリ。

二幕目

今泉村五郎太夫内の場

役名……大道寺新兵衞。下女、お才實ハ新兵衞姉沖波。馬方、猿辷りの又。百姓、五郎太夫。同娘、おゆき實ハ胡蝶姫。濱名息女、胡蝶の前。安積大膳久國。百姓、五郎作實ハ青砥五郎。今川伊豫之助仲

秋。

本舞臺、三間の間、藁葺きの軒口。正面、見附け暖簾口。下の方、赤壁。上の方に押入れ、佛壇の書割りよろしく、上の太柱外に小さき田舍藏の裏手。これに二尺程の小窓、誂らへの通りよろしく、下の方に門口。すべて、駿州今泉村百姓家のかゝりよろしく、幕の內より、おゆき、木綿やつし、娘の形にて、三建目の猫をじやらして居る。五郎太夫、同じく木綿やつし、頑丈なる親仁の拵らへにて、棒を振上げ、おゆきに立ちかゝつて居る。お才、前垂れ襷、下女の形にて、これを取支へて居る。下の方に、猿辷りの又、破れ布子の上へ麻上下着て、腰に馬の沓を提げ、鉢卷を締め、塗り樽と鯣の臺を前に置き、大胡坐にて、强請つて居る。在鄕唄にて、幕明く。

又　濟まない〳〵。そんなこつて合點するのではないぞ。

五郎　オ、サ、尤もだ。たつた今叩き直して、その樽肴も取納める。親の光りで邪でも非でも得心させる。待つて居やれ。

ゆき　イエ〳〵、父さん、どこにマア、あのやうな者を、わたしや嫌でござんすわいなア。

五郎　また吐かしやアがるか。コレ、よく聞けよ。われが兄の五郞作は、おれが血を分けたと云ふでもないが、それは〳〵孝行に、律義一遍の正直者。うぬは現在血を分けた、五郞太夫が娘でありながら、詞を背く不孝者。コレヤイ、今の世の中は、直ぐぢやア立たぬ屛風暮らし、なんぼ兄めは孝行でも、行く〳〵はおれが片腕にと、思ひ思つて貰つた聟、耳こそちつと不自由なれ、東海道で通りのよい、猿辷りの又を聟に取るは。

さい　こりやをかしいわいな。ほてツぱらどのが樽肴、しやちこ張つた形でおぢやつたは、問屋場の使ひで、わたしや又、おゆきさんの可愛がりなさる、この猫を貰ひに來たのかと思つた。

ゆき　ソレイナア。如何にマアわたしがやうな、不束な生れぢやと云うて、あんな者とマア女夫にとは、父さん、あんまりでござりまするぞえ。

トお才二人、又へ指さしして誹りながら腹立てる。又、おゆきのせりふのうち、衣紋を直す事なぞ、一々得心したかと問ふ思ひ入れにて

又　ヤレ〳〵、嬉しや。さう云つてくれれば、おれも友

達への外聞だ。なんぼ爰の父さんが世話でも、この風體のおれを聟に取らうとは、此奴なんでも何所ぞ見込みな所があつて、てつきり娘の戀聟だ、肖り者め、酒を買へと、仲間の奴等に責められて、親方の馬を二分に賣つて、阿部川の酒屋で二貫五百おごつた、殘りが樽肴。コレ、上下こそ問屋場のお爺を騙して借りて來たが、聟入り土産はこの通り。なんと、歷とした者であらうがな。

さい　何をマア。庄屋どのゝ葬禮ぢやアあるまいし、上下を着て聟入りとは、こりやをかしいぢやないかいな。

又　娘が待ち兼ねて居ると云ふか。

さい　オイナウ、猫めが鰑のかざ嗅いて、鼻をヒコ〳〵して居るぞや。

又　その筈だア。阿部川切つて浮名の立つた、今夜の聟入り。

ゆき　オヽ、嫌いなう。コレ駒よ、あの見ともない顔掻いてやりや。

ト猫を打ちつける。又、悔りして

又　ヤイ畜生め。悔りさしやアがつた。エヽ、こりやア猫程可愛いと云ふ事か。

五郎　イヽヤ、投打ちは親への面當。娘、そんならどうあつても、猿辷りと夫婦になるが嫌か。

ゆき　エヽ、くどい事を。知りやせぬわいなア。

五郎　知らぬと吐かしやア、濟まうと思ふかや。百姓こそして居れ、近郷近在お代官でも庄屋でも、ちりの毛一つ上げさせない、異名も猫又五郎太夫。わりやその心で投打ちの猫か。

ゆき　イエ〳〵、なんの勿體ない、此方に思ひもせぬ事を。

五郎　吐かしやアがるな。どうで親の詞に背く根性から、さま〳〵の我まゝ。それがよいか、これがよいか。ぶんのめしたら腰ないら、宿なし猫になりやアがれ。

ト また棒を取つて、立ちかゝるをお才留めて

さい　アヽモシ、猫めはわしが鼻こすつて、鰑引かせるこつちやない。

五郎　おぬくめ、邪魔しやアがるな。

ト突き退けて、おゆきを引寄せる。又、キヨロ〳〵して

又　ハア、又こりやア聟入りの撒き直しか。それぢやア濟まない、濟まないぞ。

ゆき　濟まぬと云うて、どうしやる。

五郎　どうするか、うぬ、見やアがれ。

ト　おゆきを追ひ廻す。お才、取支へる。又もウロ〳〵付いて廻る。好き所にて、テンツヽになり、花道より、五郎作、木綿どてら、手甲、脚絆、百姓の形にて、鍬をかたげ、輪珠數を下げて、繰りながら出て來て、この中へ入り、おゆきを圍つて、五郎太夫を留め

五作　親仁様、こりやァ何事でござりまする。

五郎　オヽ、五郎作か。その女め、ぶッ殺して大事ないぞ。

五作　これは又、きついお腹立ちな。マア妹、常からも云うて置くではないか。どのやうな事でも、親の詞背かぬが孝行。人様へ障らぬが人間。腹の立つ時もこの珠數、悲しい時もこの珠數、嬉しい時もこの珠數で、今日を送る今泉の五郎作。その妹のお主が、何をマア親に逆らふと云ふ事があるものか。悪いも好いもおれ次第。モシ、親仁様、もう料簡しておやりなされませ。

ト宥める。

さい　オヽ、嬉しや。好い所へ五郎作さんの戻りなさつたで、わたしが助かり。モシ、最前から聟入りの振賣りが來てな、やつさもつさ騒いだ擧句に、腹が減つて、また夕飯の二度炊きをさせるのでがなあらうわいな。

ゆき　何をマア、お才のせうどもない。兄さん、わたしや何所までも、男持つ事は嫌ぢやわいなア。

五作　なんだ妹、合點のゆかない。男を持つの聟入りのと……エヽ、讀めた。猿辷りの又に上下を着せて、明神祭りの練り物を、直ぐに煽てゝ寄越したのだな。

ゆき　イエ〳〵、さうぢやアござんせぬ。ありや父さんの云ひ約束、わたしと女夫にするてゝな。

五作　ハテサテ、そんならなんぞ又、親仁様の料簡な事。木折りに嫌と云はずとも、お腹の立たぬ云ひ譯があらう。マア〳〵、奥でとつくりと思案して見やれ。おれも又、小百姓でも今泉の五郎作、妹聟にあんな奴を。

ト又を睨みつけ

サア、云はぬが孝行。親仁様、後方まで、マアこの事は私しに預けて下さりませ。

五郎　成る程、親の氣に背いて、我まゝ吐かす妹に引替へ、日頃孝行なお主が詞、立てぬと思ひ兎も角も、親が得心で持たせる聟。重ねて氣隨を吐かさぬやうに、お主、意見をしてくりやれ。

ゆき　あれ聞かしやんせ。兄さん、わたしや死んでも、こればつかりは。

五作　ハテ、何事もおれが胸。後まで奥へ。お才どの、昨

日取入れた、さかひ畑の綿の桃でも剝いて置きやれ。

さい　ほんに、おゆきさん、江戸土產の三つ羽根突いて遊ばうぞえ。

ゆき　こちや父さんのお冷の綿。ドレ、摘みなして置きませうか。

五郎　極道め、碌な事はしをるまい。

ゆき　アレ兄さん、ちよつとにもあれぢや。見やしやんせ。

五作　これはしたり、他人親でもあるまいし、愚痴を云はずと、奥へ行きや。

ゆき　アイ。

ト合ひ方になり、おゆき、腹の立つこなしにて、びんしやんして、奥へ入る。五郎太夫、これを見て

五郎　なんだ。不孝者めが。

ト睨みつける。

さい　へ、、、へ、、、、。

ト口眞似をしながら、おゆきがやうに、びんしやんして、奥へ入る。又、ウロ〳〵合點のゆかぬこなし。五郎作が側へ來て

又　なんだ。おれにやア一つも合點がゆかない。コレ親方、此まゝ歸つちやア猿辷りも、友達へ面が向けられない。相談して下さい〳〵。

トぶツ坐る。

五作　此奴はなんだ。聾の癖に、相談々々と喧ましく云ふが、ア、なにか。馬の事か。

ト書いて見せる。

又　おきやアがれ。この男は、おれよりは耳が遠いさうだ。コレ、この又さんは友達の世話で、この今泉の五郎太夫さんの入り聟だ。

五作　モシ、親仁樣、このマア汗臭いすべた野郎を、アノ妹のおゆきが聟に。

五郎　さればサ、緣は味なもので、疾からおれが目に付けた。

五作　アノ、この裸蟲をかえ。

五郎　ハテサテ、其所が若いと年寄の料簡。なんぼ不孝なお轉婆でも、時分が來りやア獨りも置かれず、と云つて彼奴に物を入れて、嫁入りさせるは猶嫌なり。不孝の罪で此奴がやうな、風來者の片輪者、おゆきが聟には相應だと、人を賴んで今夜の聟入り。日頃なんでもおれが氣に背かぬお主が孝行。今日まで云はなんだは、おれが惡いにもしたがよい。これに限つて親の詞、五郎作、背き

はしやるまいの。
五作　ハイ、成る程、背きは致しませぬが、可愛や妹が、此奴と夫婦になる位なら、案山子と一緒に首を縊るか、土左衛門と心中するでがなござりませう。
五郎　サア、其所だて。その心中か首縊りか、いつそくたばつてしまへかしと、毒を充て行ふ聟穿索。憎い餓鬼でも親の手で、まさか非道は望みでない。どうぞ彼奴が自滅する、外に思案はあるまいかの。
又　コレ五郎作。親仁どのばかり、むた／＼口の動くは、聟入りの相談。こりやアお主が不承知で、手を組んで思案をするのだな。
五作　イ、ヤ、承知だ。猿辷りを如何にも聟に取つてやらう。
ト書いて見せる。
又　そりやア忝ない。なんの又、別に相談も絲瓜もない。親が承知で、現在の兄のこなたが得心なりやア、聟は娘に惚れて居る。なんの手もない話しだがな。
五作　それで出來にやア、此方が無理。惜しい男が圓通寺だ。
又　それサ。縁づくでこの六月、鞠子のおとろを切れたのもましかえ。
五作　業曝しめ。何を吐かしやアがる。
ト莨吸ひ付ける。
五郎　見たか五郎作。娘が爲にやア天晴れな花聟。兄のお主も得心とあれば、この上もない今夜の祝言。娘がなんと吐かさうとも、親の心を休めるが孝行。お主も如才はあるまいが。
五作　無理と知つても親の詞、背かぬより、しなは變ぜぬが男。キツと杯させませうが、心得ぬは、いつぞや親子連れにて京上り。遠州の殿様、濱名の姫君、胡蝶の前さまとやらは、妹おゆきが乳兄弟。その縁に連れて、御所奉公にでも出さつしやるのかと思へば、親子散り／＼に戻つて來て、それの學句が娘憎み。妹も又この猫を、遙々京から連れて來て、時折節には世迷言。親子が親子で、こりやアなんでも、只事とは思はれませぬわえ。
五郎　そりやア尤も。四五年以前は青砥村から、お主を連れて嫁入りして來た、あの女房。可哀や去年病死の後も、おれを誠の親同然、行合ひ兄弟の妹とて、如才なくしてくりやるお主が事。まだ折入つて話したい仔細もあるが、そりやア重ねて、とつくり明かす時節があらう。

五作　左樣存じて、氣に喰はない絲瓜野郎を、今夜の聟入り。

五郎　得心しやれば、おれも又、代官所からの呼び使ひ。心ならぬは彼の今の、胡蝶の前さまのお身の上。

五作　エ、、なんと云はつしやりまする。

五郎　イヤ、四五丁の所でも、呼び使ひ受けりやア面倒だ。ドリヤ、支度して行きませうか。

ト立ちかゝる。又、ヂロ／＼二人の顏を見廻し

又　支度がよくばわつさりと、床入り前に二三杯、祝言の杯はどうするのだ。

五作　忙しない野郎だ。コレ、よく聞け。われがガツ／＼あせつても、肝心のまだ本人の姊が、得心しないわやい。

ト書いて見せる。

又　ヤア、そんなら矢ツ張り小田原相談か。

五作　イヤ、首尾よく祝言取持つが、親人へ孝行。五郎作がキツト請合つた。

ト書いて見せる。

又　便々だらり。今夜夜半の鐘の鳴るまでに。

五郎　おれも氣の急く內祝言。

五作　キツと返事を聞かせませう。

ト頷く。

又　ウム、合點だな。そりやアさうと、夜半の鐘もかな聟。オ、、マア、きつかけに困るわえ。

トうろ／＼する。五郎作、其所に居る猫を抱き上げ

五作　時と變る此奴が眼の玉。幸ひ聟の時計猫。

ト渡す。又、合點のゆかぬこなしにて、暫く考へ

又　エ、讀めた。こりや秘藏の時計猫。されば人丸太夫が歌に

五作　六ツ丸く、五七は玉子、四ツ八ツは

五郎　柿のたね形、九ツは針。

五作　針になるまで、奥で待ちやれ。

五郎　ドリヤ、お代官の針、聞いて來やうか。

ト唄になり、又、獨り合點して猫を抱へ、イソ／＼奥へ入る。五郎太夫、羽織を引ツかけ、小脇差を差してこなしよろしく、向うへ入る。五郎作、殘つて

五作　ハテナア。世界はさま／＼に、親子兄弟夫婦の仲も、一通りでないが人間界。分けて合點のゆかないあの親仁樣の心の底。朝夕隨分孝行にと、深切にするおれへの義理か、現在の娘を死ねがしに、馬方風情の猿辷りを、聟に仕立てる今夜の手段。思ひ廻せば奥庭に、時ならず咲

いた山吹の返り咲き。妹が秘藏の時計猫も、それでこの頃近所でも、山吹猫と異名の付いた、氣の取り憎い親仁樣。イヤ、生きて居る親ばかりぢやない、過ぎ行かれた母の爲めに、毎日欠かさぬ念佛。ドレ、この間にちよつと、看經をしませうか。

ト二重舞臺の佛壇を明けて、鉦、撞木を取り出し、輪珠數を爪繰りながら

光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト鉦鼓を打つ。これをキッカケに、奥の藏の窓を明けて、胡蝶姫、五郎作と顏見合せ、悄りして、ちやつと戸を引立てる。五郎作、これを見て、ヂッと思ひ入れ。この時、奥より、お才、膳椀に飯つぎを持ち添へ出て來り

さい　なんの事ぢや。五郎太夫さんぢやアござんせぬか。わたしや又、今の鉦でわくせくと、膳を持つて來た程にの。

五作　フム、お才、すりや親仁樣が鉦を打たつしやれば、その膳爰へ持つて來る筈か。

さい　なんぢや知らぬが、この頃の出來事。わしもすつきり合點がゆかねど、五郎太夫さまの仰しやるには、われは賢い者ぢや程に、われを頼む、隨分人に知らせぬやうに、鉦鳴らすを合圖に、お膳を綺麗にお鉢を付けて、持つて來いと云はしやんした。

五作　ハテナウ、それで大方……イヤ、お才どの、さうして、こなたは、そのお客人の顏を見たか。

さい　イヤ知らぬ。どうしてマア、化かされたら怖い。わしや嫌いなア。

ト眉に唾を付ける。

五作　エヽ、隱すやつサ。コレ、こなたも親仁が見立て、何所かから連れて戻つた月雇ひ。內證はどんな譯か、かたましい親仁の氣に入つて。ナア、若いおれが前もあるに、ちと嗜なんだがようござんす。

さい　エヽ、阿房。何所にわしがそんな事。こちや年寄りは嫌ひぢやわいなア。

五作　滿更でもあるまい。そりやア嘘よ。ほんに年寄り嫌ひなら、若いのも嫌ひか知らないが、又よい相談があるまいものでもないぞえ。

ト手を取つて引寄せる。お才もこなしあつて

さい　嘘仰しやれ。こちや正直で、なんでも眞實にします

かなア。

五作　サヽ、その正直に打明けて……サア、口説くからは大眞實。

さい　嬉しがらせて置いてからに。

トもぢ〳〵側へ寄る。

五作　ナニ、置くものか。これからは親仁へ願つて、おれが女房。

さい　アノ、わたしをかえ。

五作　憎うはあるまい。

さい　ほんの事かえ。

五作　エヽ、可愛い奴の。

ト引付き抱きつかうとする。この時、おゆき、後へ猫を抱へて出て居て

ゆき　アイ、祝言の待女郎、わたしが心にならうわいなア。

ト眞中へ坐る。兩人、悔りして

五作　ヤア、妹か。萬歳樂々々々。

さい　ほんに世直し〳〵。桑原々々。

ト耳を塞いで術ながる。おゆき、こなしあつて

ゆき　コレ、お才どの、誰れやらが呼んでぢや、行かしやんせ。ニヽ、なんぢや、アタ見つともない。兄さんも又兄さんぢや。若い女子と二人。ほんに、あんまりで腹が立つわいなア。

ト涙ぐんで突ツかゝる。

五作　コレ〳〵、おゆき、こんな事を必らず親仁樣へ。

ゆき　イヽヤ、云ふ〳〵。云ひまする〳〵。

さい　エヽ、マア、ひよんな所へ、おゆきさん。

ゆき　來たがなんぢやえ。アタ鈍くさい顏をしてからに、おぬくの癖に、ようマア兄さんを誑しくさつた。家には置かぬ。サア〳〵、奥へ行きや。エヽ、行きやらぬかいなう。

ト胸づくしを取りにかゝる。五郎作、こちらへ引分けて

五作　これはしたり、妹、なんにもあれは知らぬ事ぢや。

ゆき　知らぬに依つて、敎へようとてな。

五作　エヽ、まだ恥辱を取らせ居るか。サア〳〵、構はずと貴樣は、奥へ行た〳〵。

さい　アイナア。そんなら五郎作さん、晩に必らずえ。

五作　エヽ、情ない。おれが締木にかけるかえ。

さい　オツと油の小出しせう。おゆきさん、さばえ。

トついと奥へ入る。

五作　ても、お息災な奴ではある。びつしより汗をかゝしやアがつた。イヤ、汗の次手に、ドレ、飯米でも搗いて置かうか。

ト行かうとする。

ゆき　兄さん、待つた。

五作　オイ、なんぞ用か。

ゆき　アイナア。下に居やしやんせ。

ト合ひ方になり、おゆき、チッと五郎作を引留める。五郎作も思ひ入れ。おゆき、うつとり五郎作が顔を見る。五郎作、モヂ〳〵して

五作　コレ、妹。面目ない今の體裁。猥らな者とも思やらうが、縁あればこそあのやうな、足らはぬ者でも、色戀に二種はない、これ人情。お主が嫌がる今夜の祝言、猿辷りの又を入り聟とは、おれも呆れて合點はゆかないが、其所が縁づく。親の詞。氣には入るまいが、料簡付けて、ならう事なら丸うなりやれ。

ゆき　兄さん、よう深切に意見云うて下さんす。親身の妹のわたしより、お前はあのお才どのが、いとしうござんせうな。

五作　ヤ。何をじやら〳〵、兄弟仲で、埒もない事を問やるわいの。

ゆき　イエ〳〵、心に思ふ事、外に顯はるゝは女子の常。わたしや腹が立ちまする。

五作　ハテナア。脊丈は延びても子供。おれが猥らな氣になつては、いけ〳〵三方。妹のお主も、袖にしやうかと先潜り。

ゆき　イヽエイナア、わたしやアノお才めに、腹が立つわいなア。

五作　お主もいかい苦勞性。彼奴が事なら捨てゝ置きやれ。

ゆき　捨てゝ置かれぬ事ぢやに依つて。

五作　なぜ又捨てゝ置かれない。

ゆき　サア、そりやア、アノナ。

トうぢ〳〵側へ寄つて

兄さん、エヽ、恥かしい。

ト顔を隠す。五郎作、ギョッとして、思ひ出し

五作　ハヽヽヽ、云ひ憎さうに、恥かしがるワ。おれが親身の今の意見、得心しても新枕、聟どのと寝るが恥かしいか。別に遠慮もない事を。妹、馬鹿な、嗜みやれ。

ゆき　イヤ、嗜まれぬ。兄さん、惚れた。

五作　ヤ、なんと。

ゆき　モシ、わしや猫ぢや、畜生ぢや。コレ、この猫はな、親子兄弟女夫となるといなア。兄さん、お前に、わしや迷うた。お前も因果と諦らめて、願ひを叶へて下さんせいなア。

ト取り縋つて泣くを突き退け、有り合ふ鍬にてしたゝかに打つ。

五作　情ない妹。義理ある仲の兄弟は、猶世の人口。假にも兄の五郎作へ、穢らはしい愛着。聞きたくない。わりやア狂氣か、血迷うたか。大膽不敵の根性には、いつの間に天魔が魅入つたかやい。

ト小突き廻す。おゆき、その手に縋り

ゆき　心こそ、心迷はす心とは、歌にも詠みぬる情の道。この道ばかりは我が心に、任せぬ身の因果。腹が立つなら手にかけて、いつそ殺して下さんせ。この戀叶はぬ浮世ならば、わたしや死にたい／＼わいなア。

五作　すりや、ぶたれても叩かれても、執着心はこの兄を。

ゆき　思ひ詰めては命でも、惜しまぬ證據は、この心中。

ト鍬の刃にて指を打ち切る。五郎作、悃り立ちかゝつて

五作　ヤ、、さほどまで因果にも、思ひかたむく一心悟道。わりや、その猫が羨やましいか。

ゆき　アイ。都から遥々と

五作　浮れ迷うてこの兄に、命をくれての執着心。

ゆき　死なば思ひもあるまいと、勿體ない、マア、兄さんに。

五作　指まで切つて好く惚れた。

ゆき　そんなら、わたしが身の願ひは。

五作　イヽヤ殺さぬ。時節があらう。

ゆき　エ、なんと。

五作　コリヤ、今泉の五郎作はな、正眞正銘の珠數三昧。人の上でも非義非道は、爪彈きして笑ふ身が、まして妹の不義徒ら。さほどにせずば手にかけて、殺す心も付くまいと、思ひ餘つて指まで切つて、畜生三界の仲間へ、おれまで入れるのか。われに憎みの親仁様へ、わりや面當に死ぬ心か。なぜ斯う／＼と打明けて、隔てた兄でも相談づく。死ぬるばかりが孝行に、ならうと思ふか、恨めしい。妹、聞えぬ。この兄を、なぜ隔てゝはくれたぞやい。

ト引寄せてヂツと思ひ入れ。おゆきもヂツと泣き入り、思ひ入れにて

ゆき　勿體ない。生みの父さんを恨んで死ぬではなけれども、とても叶はぬ浮世の願ひ。わたしや矢ッ張りこの猫に、心が引かれて居るわいなア。

ト猫を引寄せて抱きしめる。

五作　フウ、すりや思ひの綱手綱。

ゆき　切れて逢はれぬものならば

五作　それで一途の死の覺悟。

ゆき　殘る螢の火影より

五作　果敢ない願ひ。

ゆき　果敢ない思ひ。

五作　割つて云はねど、可愛や妹。

ゆき　わたしや、宙宇に迷うたわいの。

ト泣き落す。ごん／＼、捨て鐘鳴る。花道より、大導寺新兵衞、ぶッ裂き野袴、大小の形。捕り手大勢、これに付いて、ツカ／＼と門口へ來て

新兵　五郎太夫が住家。者ども、ソリヤ。

捕手　動くな。

ト直ぐに踏み込んで、立廻り。五郎作、よろしく一人一人取つて投げ、おゆきを圍つて、ヂッと思ひ入れ。

こりや、手向ひか。

五作　イ、ヤ、仔細を聞かぬ其うちは、手向ひ致す。お侍ひ、人違ひして必らずともに、後で後悔なされまするな。

新兵　イ、ヤ、當村五郎太夫へ、尋ね問ふべき仔細あつて、今川家の近臣、大導寺新兵衞、罷り向つた、腕廻せ。

五作　さればサ、それが人違ひ。御不審の樣子一通り、承つたその上では、品に依つたら親子の仲。

新兵　フム、すりや其方が悴五郎作。

五作　親五郎太夫へ御不審とは。

新兵　定めて音に聞きつらん。京都の武將義教公、不慮に薨去のその砌り、飛鳥井中將雅時と名乘り、紛れ込んだる不敵の曲者。その夜の騷動、後にて聞けば、行くへ知れざる濱名の息女、胡蝶姫へは内縁ある、今泉の百姓五郎太夫へ、疑ひかゝる武將の嚴命。尋ね糺さば紛失の、蘭麝待の名香、詮議の手筋。慥かにこの家の五郎太夫と、疑ひかゝつた。白狀なせ。

五作　御不審の上は、遁れなき五郎太夫が身の上。さりながら、現在親を訴人の不孝。憚りながらこの御詮議、拙者へお預け下さらば、密かに計つて胡蝶姫。

新兵　蘭麝待も諸ともに、手渡しなすか。

五作　その儀は暫らく。穢けれども奥の一間に、詮議の猶

豫。
新兵　相違もあるまい。聞き届けた。家來、直さま立歸つて、云ひつけ置いたる合圖を待て。
捕手　ハツ。畏まつてござりまする。
　ト捕り手、皆々門口へ出る。
新兵　忠臣は孝子の門よりと、猶豫なしたる大切の科人なから、詮議を免すは孝子の五郎作。よも僞はりは申すまい。
五作　お氣遣ひなされまするな。詮議をしぬくは國への忠、親への孝も拙者が胸。
ゆき　解けぬは日頃父さんの、娘のわしへ死ねがしの、無理我まゝも今日の今。
五作　思ひ廻せば年恰好。
ゆき　そんなら、いつぞや都にて。
五作　コリヤ、物數云ふな。あなたのお供。
新兵　五郎作、奥へ。
五作　イザ、御案内申しませう。
　ト唄になり、五郎作、おゆき、ヂツとこなしあつて、新兵衞、先に兩人これに付いて、奥へ入る。直ぐに戀慕になり、時の鐘、花道より、五郎太夫、以前の形にて、思案しながら戻つて來る。これに、仲秋、木綿やつし、草鞋がけ、脚絆、山田行李の上に藁苞を結ひ添へたるを脊負ひ、菅笠、柄杓、伊勢詣りの形。久國、鼠布子、股引、草鞋、旅虚無僧の形にて、付いて出て來る。花道にて、仲秋、先へ入れ替り
仲秋　伊勢詣りに御報謝。
久國　廻國修行へ一宿の所望。
　ト仲秋、柄杓を出す。五郎太夫、左右をヂツと見て
五郎　ホウ、どちらも殊勝な旅人達。進ぜたいものだが、持ち合せがごんせぬ。氣の毒ながら通らつしやい。
久國　通れとあれば何國までも。して、其許のお宅はな。
五郎　ハヽヽヽ、おれとした事が、妾は道中、その上に、虚無僧さまへ粗相な挨拶。イヤ、程もないわしが家。あれまで歩んで下さりませ。
久國　報謝とあれば兎も角も。
仲秋　お志しの草鞋錢。御人體を見かけて、身のお願ひ。
五郎　ハテマア、内まで歩みやれな。
　ト矢張り鳴り物にて、三人、本舞臺へ來て、久國、草鞋を脱ぎ、ツカ〳〵上へ通る。五郎太夫、思ひ入れ。仲秋も同じく草鞋を脱ぎ、上へ行かうとする。五郎太

五郎　なんだ此奴は。修行者は宗門の掟があつて、面を包むも詮議の笠。同じやうにノサ／＼と、身の程知らない高上がり。合點のゆかない餓鬼めだわえ。

仲秋　イヱ／＼、そんなにむしつこく叱らつしやりまするな。お伊勢様へ參宮がしたさ、國を出て長の路用も遣ひ果し、慈悲善根の報謝宿、出かけ參りでござります。

ト　また行かうとするを、五郎太夫、直ぐ引戻し

五郎　待ちやアがれ、丁稚め。さう吐かすが騙りの付け目。うぬア夜盗手引きだも知れない。重ねての爲に、これを喰へ。

ト　以前の鍬を振り上げる。この時、後へ五郎作、出て居て、五郎太夫を支へ、仲秋を門口へ突き出す。

五郎作、其奴は盗人だぞ。

五作　ようござります。お伊勢様は大神宮の名を騙つてもすぎはひしろとの御託宣。その神國に住みながら、草鞋錢位騙られても、此奴の科にはなりませぬ。

五郎　だと云つて、見す／＼生け盗人。

ト　寄るを

五作　ハテ、構ふ事はござりませぬ。

ト　引分けながら、五郎太夫が左の指を見て

ヤ、、モシ、お前の指はえ。

五郎　フゥ、この血か。お代官所の云ひ渡し。村中殘らず神文へ、血判取られた指の疵。汐時で血が走つたものであらう。

五作　そりやマア、むづかしいお觸れでござりましたな。

ト　以前のおゆきが指を包んだ紙を袂より出して、五郎太夫が血を拭いてやる。

五郎　ナニ仰山な。つい莨でも付けて置かう。

ト　莨入れを探し

南無三、眼鏡をお代官の臺所へ忘れて置いて來た。五郎作、ちよつと大儀ながら。

五作　ハイ、私しに代官所へ。

五郎　ハテ、片時も無けりやア不自由。世話を燒かせずと行て來やれ。

五作　ヘイ、只今でござりますか。

五郎　假初めな事でも親の詞。

五作　イヱ／＼、背きは致しませぬ。ドレ、左様なら一走り。

ト　草履を穿いて門口へ出る。

五郎　コレ〳〵、道が悪い。足駄で行け。
五作　足駄では埒が明きませぬ。
五郎　遅いが勝手だ。云ふ事を聞きやれ。
五作　急がつしやるかと思へば、遅いが勝手……イヤ〳〵親の仰しやる事。こりやア足駄で参りませう。
ト穿き替へる。仲秋、チロ〳〵見て
仲秋　モシ、旦那、結構なるお日和に高足駄。お草履の方になされませ。
五郎　差出やアがるな。足駄で行け。
仲秋　イエ〳〵、お草履を上げませう。
ト五郎作が脱ぎ捨てたを取つて前へ出す。五郎作、チッと見て
五作　こりやアお慮外。人様のお志しを破るも悪い。いつそ足駄と片足づゝ……好い穿き心だ。ドレ、行つて来よう。
ト合ひ方になり、五郎作、こなしあつて、草履と足駄を片足づゝ穿いて向うへ入る。五郎太夫、これを見て
五郎　若いに似合はぬ孝行者。あの正直ぢやア、今夜の手管、娘が祝言、代官所の云ひつけ。こりやア手延びにやアならぬわえ。

ト思案する。久國、天蓋を取つて
久國　御亭主、何かお取込みの中へ、心なき御無心。いよいよ今宵一宿を、許しくれられうか。
五郎　思はぬ粗末で、御宗門の詞咎め。是非なくもお供いたした百姓の茅屋、苦しうなくば一樹の宿り。
久國　それは千萬。とてもの事に一河の流れの抜け参り。彼れも一夜は簀の子の端に
仲秋　お泊めなされて下さらば、譬への節の世の情。
久國　道連れの旅人が挨拶だ。おづ〳〵せずと、もそつとこれへ。
仲秋　有り難うござりまする。左様ならお宿の旦那。
トこなしにて、内へ入る。五郎太夫、チロリと見て
五郎　フウ、すりや童もこなたの道行き。
仲秋　如何にも都を出たのは同日。
久國　心ざすのも、この家の主。
仲秋　所は駿州今川の、領地へ入込む不敵の久國。
久國　なんと。
仲秋　イヤサ、久しく國を出て、互ひに便り見知り越し。
五郎　物腰恰好最前より、心覚えの御修行者。
久國　覚えがあらば約束の、蘭麝待の名香、受取らう。

五郎　イヤ、そりやアわしは知りませぬ。

久國　まざ〳〵しき僞はり。五郎太夫、濱名の息女胡蝶姫も、われが匿まつて置かうがな。

五郎　イヤ、知りませぬ。例へ又、存じてからが、修行者の浮世の障り、由ない詮議。

仲秋　然らば唯一の伊勢詣り、正直の頭、受取らう。

五郎　アノ、姫君のお首をや。

久國　イヽヤ、今川伊豫之助仲秋が首、討つて渡せ。

仲秋　なんと。

久國　知るまいと思ふか。某、國遠なして後、今川の系圖紛失なし、出仕も止まる左衞門貞世、その悴の仲秋、まじまじと云ひ號けの姫を尋ねて來たか。

仲秋　イヽヤ、大膳久國を捕へて、無實の身の云ひ譯。

久國　イヽヤ、今川仲秋を引具して、歸參の身が手土産。

仲秋　アノ、修行者の其許が。

久國　お蔭參りが久國を

仲秋　今宵の報謝に

久國　互ひの手の內。

兩人　何を小癪な。

ト双方キッと立ちかゝる。五郎太夫、よろしく久國を突き廻し、仲秋をむごく門口へ突き出し

五郎　じたばたしやるな。五郎太夫が匿まふからは梁山泊。胡蝶でも修行者でも。

仲秋　イヤ、その人數に私しめも。

五郎　ハテ、相宿は所の法度。

久國　とは云へ手に入る籠中の鳥。

五郎　コレ、何かは奥の間で。

久國　緩りと面談。

五郎　マア、構はずと、ござりませ。

ト門口をシャンと締め、唄になる。久國、先に五郎太夫、こなしあつて、奥へ入る。仲秋、殘つて、すつくりと門口を眺め

仲秋　でもマア邪慳な人の心。文王の民は畔をも讓ると、唐の昔の人の正直。まして神國の日本に、三莊太夫と云ふがあれか。ア、又、今宵も軒の下に、罪なくて見る配所の月。氣散じなる身の境涯ぢやなア。

ト空を眺めて行き惱む思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり、暖簾口より以前の猫、羽子を啣へて走り出て來る。トおゆき、羽子板を持ち、お才、片肌脫ぎかけ、丸盆を持つて追はへて來て

さい　ヤイ〱、コリヤ畜生め。おゆきさんの機嫌も、やうやうで仲直りの追ひ羽根。面白う出た口で、遊んで居たものを、コリヤ放さぬか。シッ〱〱。

ト追ひ廻す。

ゆき　ア、、コレイナア。可哀さうに、叩かいでもよい。ドレ、わしが。

ト側へ來て、抱き上げ

駒々。オ、、賢い。よう放したなア。コレ、見やしやんせ。此やうにわたしの側へ、懷かしう喜ぶも道理、都から遙々と連れて戻つたは、これも由縁の形見ぢやもの。

トほろりとして

ア、、また思ひ出した程に。

ト涙を隱す。お才、取つて息を吹きかけ

さい　キチコウ〱……サア〱、ようなつた。おゆきさん、爰で突いて遊ばうかえ。

ゆき　アイ、マア、其所でお前獨り、突いたがよいわえ。

ト浮かぬこなし。

さい　オ、、この子わいなう。風がなうて、ようはずむがな……一世に二子、三わたし四め子。

ト余の裏にて羽子を突く。おゆき、これを見て、時々あひしらふこなしにて、追ひ羽子になる。此うち、始終合ひ方。ト、この羽子、外れて、門口へ飛ぶを、仲秋、其まゝ、柄杓の底にて突き、これより暫らく內外にて、追ひ羽子の模樣よろしく、お才、ツッと門口を覗き、合點のゆかぬ思ひ入れ。おゆきに覗けと袖を引く。おゆき、不思議さうに戶の間より覗き

ゆき　エ、モシ、あなたは。

ト憫り、こちらへ來る。

仲秋　女中さん、羽根戾しませうか。

ト內を覗く。

ゆき　ヤア、ありやア慥かに。

ト云はうとする。

仲秋　イヤ、モシ〱、慥かにお戾し申しまする。

さい　それ〱、おゆきさん、戾すといな〱。

トおゆき、うつかり思案しながら

ゆき　さうぢや〱。違ひはない……ほんに矢ッ張りさうぢやもの。

ト俄かに帶を締め直し、形を作る。

さい　知れた事いなア。ありや矢ッ張りお前の羽根ぢやわいなサ。

ゆき　サイナア。どうして思ひがけもなう。

　トいそ〳〵門口へ出て

　ほんに矢ッ張り、さうぢや〳〵わいなア。

　トぢつと見惚れる。仲秋、思ひ入れあつて

仲秋　これはしたり、マア、うつかりと、面白うはずむ追ひ羽根に、心ないわたしがお邪魔。モシ、この羽根は、お前のでござりますかな。

ゆき　アイナア。大事のわたしが羽根。モウ〳〵、どつこへもやりは致しませぬ。

　ト手を取つて内へ連れて來る。お才、ウロ〳〵二人を見て

さい　コレ、おゆきさん、知らぬ人とお前、追ひ羽根突かしやんすか。

ゆき　イヽエイナア、よう爰へ尋ねて見えた……サア、尋ねてもらうた羽根のお禮、たんと云はうと思うてな。

さい　ハア、そんならお前も、こりや近付きぢやな。

仲秋　サア、成る程、どうした縁やら、いつぞやフッとその時も、互ひに所も名も云はず、廻り〳〵て拾うた羽根。

　サア、この羽根がこの家にとは。

ゆき　わたしも不思議なあなたの姿。

仲秋　替つた態は世の盛衰。

ゆき　替らぬ誠は、わたしが心。

仲秋　結ぶは伊勢の神風か。

ゆき　よう誘はれて遙々と

仲秋　木賃泊りの抜け參り、報謝なされて下さりませ。

　ト兩人、ヂッとこなし。お才もさてはと思ひ入れあつて

さい　サア〳〵、忙しくなつて來たワ。お泊りならばおゆきさん、わたしや風呂を焚かうかえ。

ゆき　イエ〳〵、惡い。父さんへ、必らず知れては惡いぞえ。

さい　オッとそこらは合點ぢや。そんなら爰へ床敷かう。コレ、お前も洗足取つて上げなされや。

ゆき　ほんにさうぢやな。ドレ、足洗うて上げうかいなア。

　ト矢張り合ひ方にて、お才、二重舞臺へ蒲團を敷き、枕を並べる。屏風を立て、二人を寝かすのぢやと云ふ思ひ入れにて、鼻紙を枕元へソッと置く事などよろしく、此うち、おゆき、盥に湯を取つて來て、仲秋が脚絆を解き、足を洗つてやる。

仲秋　ア、モシ、慮外な。構はずと置いて下さりませ。

ゆき　イエ〳〵、わたしになんの慮外。

仲秋　でも、お前、穢い伊勢詣り。

ゆき　サア、お伊勢さんの事ぢやに依つて猶大事、わたしが祈禱になるわいなア。

さい　オヽ、祈禱とも〳〵、湯立てが済んだら天の岩戸、おゆきさん、夜は短かいぞえ。

ゆき　イエ〳〵、餘所の内ぢやアなし、二日も三日もこの日和で、川が明く事ぢやござんせぬ。

仲秋　それは大事ぢや。ア、儘よ。寐心の好い蒲團の夢。さらば報謝になりませうか。

ト二重舞臺の蒲團の上へ來る。

さい　モシ、お荷物も屏風の内へ。

仲秋　重々のお世話。ドリヤ一睡。

ゆき　緩りとお休みなさんせえ。

ト屏風を引き廻す。あと合ひ方にて、お才、おゆきに一緒に行て寝よと云ふ思ひ入れ。おゆき、恥かしきこなしにて、頭を振る。尤もおゆき下、お才は二重舞臺より、いろ〳〵勸めるこなし。おゆき、ウヂ〳〵果てぬゆゑ

さい　エヽ、儘よ。

ト膝を叩く。下座にて

〽十七八は花ざくろ、なるやうでならぬきのどく、しよんがえ。

トこの唄をかりて、お才、こなしよろしく、奥へ入る。矢張り合ひ方。おゆき、殘つて、奥を見たり屏風を見たり、いろ〳〵あつて、鏡を立て、櫛道具を取つて來て、身拵らへして居る。時の鐘鳴る。奥より、又、少し醉ひたるこなしにて、猫を抱へて出て來て

又　おゆきばう〳〵。コレ、針だぜえ〳〵。あの五郎作が嘘つきめ、大きにおれを騙しやアがつた。

ト又、猫の眼を覗いて見て

ハア、間違ひはない。此奴の目が針だ〳〵。

トおゆきが側へ來て

ハヽヽヽ、祝言のお支度だな〳〵。めでたいな〳〵。

ト寄り添ふ。

ゆき　エヽ、また聾め。アタ邪魔な。コレ、父さんが呼んでぢやわいなア。

ト書いて見せる。

又　嘘を云へ。今まで親仁とたつた二人、色氣のない酒で大きに醉つた。これからはお主と床杯。ヤア、氣の利

いた誰れかもう、しやんと寐所もしてあるな。
ト ひよろ〳〵行かうとする。おゆき、悄りして留め

ゆき　アヽ、コレイナウ、なんのおのれを、誰が寐かさう……と云うても聞えず。阿房めやい。
ト 抓る。

又　オイタヽヽ。もう痴話か。こちの人とは有り難い。
ト 抱きつく。

ゆき　エヽモウ、とつと聾めが。
ト 耳を引く。

又　オヽ痛い〳〵。コレ、そんなに耳の事なら苦にしやんな。おれは聞えないが、悴めは早い奴で。ちよつと爰で内祝言。サア〳〵、祝言だ〳〵。
ト いろ〳〵として、無理におゆきを引こかす。この時猫の尾を踏まへる。又の足に掻きつく。
フアイ、畜生め。アイタヽヽ。
ト うろたへるうち、おゆき逃げて奥へ入る。又、起きて
エヽ、忌々しいこの猫、にやんでもおゆきと、フウスウ……。
ト 猫のやうに云ひながら後を追つて入る。矢張り、時の捨て鐘、忍び三重になり、あたりを窺ひながら、久國、出て來て

久國　可哀や、まんまと伊豫之助、飛んで火に入る蟲よりは、危ない命の報謝宿。浮世の夢も只一討ち。
ト 行かうとして
イヤ〳〵、彼奴も強者。寐入り端。枕に音なく屏風越し。巧い時刻だ。仲秋覺悟。
ト 尺八の仕込みを引抜き、屏風越しに突ッ込んで、抉る。屏風の内、物音して、血汐流れ、小鳥の狼煙大分、この中より飛び去る。トどん〳〵、竹法螺の音になる。暖簾口より、お才、一腰搔込み、甲斐々々しき形にて出る。上の方より、新兵衞、松明を携へ、花道より以前の捕り手、この中へ五郎作、竹槍を引提げ出て、門口に窺ふ。久國、この狼煙をヂッと見て
ハテ、心得ぬ法螺貝太皷、只一刀に仲秋めを、ばらして立退く安積大膳。さてはこの家へ入込みしと、都の訴へ、小ざかしい。
ト きつと思ひ入れ。新兵衞、お才、ツカ〳〵と前へ出て

さい　愚かや久國。先つ頃花嵐山の別御所にて、義教公を弑し、立退いたる大敵。

新兵　今また不敵に忍び入り、今川伊豫之助仲秋さまを、害せしとな。

久國　云ふにや及ぶ。生け置いては後日の大望。久國が追ツつけ手に入る關八州。雇ひ女や下司下郎の、存ぜぬ事だ。うづ雖めら。

さい　イヽヤ、疾より態を替へ、この家へ入込む自らは、今川譜代の大導寺新左衛門が娘、沖波と云ふ者。

新兵　某とても姉諸とも、忍び〳〵にこの家の、樣子窺ひ知つたる大導寺。新兵衛これにあるからは、主人の敵、武將の仇。

兩人　最早遁がれぬ。大膳覺悟。

ト兩方より切つて詰め寄る。

久國　しや小ざかしい餓鬼めら。この程まで新參ながらも、武將の近臣、安積大膳、仔細あつて、成る程御所は立退いたが、義教どのを害せしとは、跡方もなき僞はり。覺えはない。

ト門口にて

五作　如何ばかり、雪の下にや竹の子の、親思ふ身の心知るらん。

久國　なんと。

ト五郎作、ツカ〳〵と來て、竹鎗を突きかゝる。久國ちよつと立廻りあつて

コリヤ五郎作、久國へ土民の手向ひ。叶はぬ事。

五作　イヽヤ、百姓相應だ。用意の竹鎗、合圖の法螺、主殺しの久國、覺悟なせ。

トまた突きかける。この立廻りよろしく、トヾ五郎作、久國が足を薙ぎ、タヂ〳〵となるを、踏み込んで突き留めうとする。この時、屏風の内より、エイと三建日の扇子を手裏劍に打つ。これにて、五郎作、鎗を取落す。

皆々　これは。

仲秋　早まるな五郎作。今川左衛門貞世が嫡子、伊豫之助仲秋、見參。

トよろしき鳴り物にて、屏風の眞中打抜きにて、仲秋黑の着流し、手甲、脛當、大小の凛々しき形、血汐に染まる猫の死骸を引提げて出る。久國、ギヨツとして

久國　ヤア、すりや屏風の手應へは。

仲秋　仲秋ならず、都にて、名に聞えたる時計猫。

さい　彼れも生ある因縁にや、いつぞやこの家の娘御が、助け歸りし恩義の最期。

仲秋　危ふき横難遁れしも、伊勢の神風直なる世を、計る不敵の大膳久國。

皆々　義教公を討つたと名乘れ。

久國　その叛逆は伊豫之助、巷の風聞、別御所に、殘し置いたる扇の證據。

仲秋　オヽ、それこそは今日前、五郎作が手練を見る、仲秋が潔白。久國へ打つて返せし誓詞の扇。

五作　實に心得ぬは仲秋さま。科極まつた久國を、仕留める竹槍、ナ、何ゆゑ。

仲秋　この場で討つは自餘の仇。義教公の怨敵、館へ引け、

久國　仲秋覺悟。

ト出しぬけに切りつけるを、仲秋、立廻りに久國が拔身を打ち落し、五郎作、見事に取つて引据ゑる。新兵衞、繩捌きして

新兵　久國捕つた。

ト締める。久國、無念の思ひ入れ。

久國　エヽ、忌々しい。仲秋めは科をかぶせて、馬鹿大將仕留めた企みもやみ〳〵と、かゝる繩目は今川の、館へ引込む身が本望。この上何をぶちまけて、しやべらうも知れない、用心して居ろ。

新兵　ヤア、事をかしき廣言。獄家の犬、引立て歸るは仲秋さま。直ぐに歸國のお手土産。

さい　イヤ、若君には今暫らくお家の系圖、蘭奢待の詮議も御不興お詫びの種。

仲秋　云ふにや及ぶ　胡蝶姫、名香詮議も、この家の內。

新兵　然らば囚人、此まゝに。

仲秋　道の警固は合圖の人數。

新兵　久國、立ちやれ。

ト立ちかゝる。久國、こなしにて、悠々と立ち上がり

久國　ドレ、不承ながら今川の館へ、罷り居り候お客人だぞ。我樂多めら、沖波兄弟、供をしろ。

ト時の太鼓になり、久國、先に捕り手殘らず、お才、五郎作は最前より默然と珠數をくつて居る。仲秋、落ちたる竹槍を取上げ、奥を目がけて行かうとする。五郎

作、鬮り、立廻りにて留め
五作　待たつしやりませ、仲秋さま。血相替へて、こりや何所へ。
仲秋　匹夫土民の五郎太夫、竹槍の成敗、宥放せ。
五作　サヽ、さうあらうと最前から、珠數に紛らせて、思案に落ちぬ儂の身を、八裂きになるとても、お願ひ申さにやなりませぬ。
仲秋　流石親子の恩愛は、願ふも理り、さりながら、飛鳥井中將雅時と、なき名を名乘つて、武將の御所を僞はる重罪。五郎太夫を助けんと思はゞ、今宵のうちに匿まひ置いたる胡蝶姫、疾首打つて仲秋へ渡せ。
五作　フム、濱名の御息女を。
仲秋　義政公の御舍弟義嗣公、姫へ戀慕の非義よこしま。生中仲秋嚴命にて、婦妻に定まる胡蝶の前。蘭麝待の紛失、越度となつて、首引提げて歸らねば、伊豫之助が汚名、家の瑕瑾。是非なく義理を辨まへて、在所を名乘るか首討つか。五郎作、とくと思案の致せ。
　　ト きつと云ふ。
五作　御意を背けば親の惡事。また背かねば姫君の、盛りの花を散らすも殺生。これを思へばこの年月、願つた後生も水の泡。五郎作が思案は斯くの通り。
　　ト珠數を切つて後へ投げる。
仲秋　すりや聞き分けて姫の首。
五作　討つも討たぬもそりや後程。
仲秋　手延びの返答、流石は士民。詞を背かば汝も共に。
　　ト竹槍を投いて突きつける。五郎作、後へ飛び、二疊臺へ逃げる。仲秋、直ぐに付いて來て
　　五郎作覺悟。
　　ト立廻り。五郎作、よろしくあしらひながら、懷中より以前の草履を出し
五作　お心破らぬ君の賜物。
仲秋　こりや最前の草履の片し。
五作　子房に習つて今日より
仲秋　主從三世の青砥五郎。
五作　モシ、囁きも壁に耳。
仲秋　ハテ、心ある男の子よな。
　　ト兩人、キッと思ひ入れ。時の鐘、合ひ方。道具ぶん廻す。
　　本舞臺、向う九尺の間に藁葺きの亭屋體。丸太柱、

竹縁など物古びたる田舍家の奥座敷。上の土藏打返しにて、戸前口に、この前より屋體際まで返り花の山吹、一面に咲き亂れ、舞臺先に浪板、誂らへの通りよろしく、亭屋體のうちに、胡蝶姫、着流しの形にて、懐劍を突ッかけて居る。五郎太夫、以前の形にて、その手を留めて居る。この見得よろしく、矢張り合ひ方にて、道具納まる。

五郎　ヤレ、早まるまいお姫樣。短氣な。そこ放さつしやい。

胡蝶　イヤ／＼、免さぬ五郎太夫。非道に與みせぬ自らに、何ゆゑ惡名謳はせるぞ。

五郎　ハテ、聞分けない。都から盜んで來たはこなたの爲。おれが女房は守り育てた乳母、その夫の五郎太夫、深い思案のある事と、溫なしく時節を待たつしやい。

胡蝶　イヽヤ、義理ある今の母上。仲秋さまへの云ひ約束。濱名の家の世續とも、思ふ甲斐なき身の越度。其方を手にかけ、せめてもの、身の云ひ譯にするわいやい。

五郎　ハテサテしつこい。都に居れば義嗣どのゝ寵ひ者。但しこなたは仲秋より、義嗣どのに添ふ心か。

胡蝶　なんの定まる夫より、二道かける心はない。

五郎　さう見たゆゑに行く末を、案じ過して惡企み。追ッつけ世間廣々と、世に出すまでは必らずとも、滅多な事をさつしやるな。

ト懐劍をもぎ取る。胡蝶、ギッとなつて

胡蝶　エヽ、其方はなう。恐ろしい姿で、御所へ勅使とやら。

五郎　コレ／＼ツカ／＼と人も聞く。老いての慾はこなたの爲。みんな忠義にした事だ。

胡蝶　その忠義顏より猶悲しい。自由にならば、おのれをなア。

ト寄らうとする。

五郎　これはしたり、思ふやうにもない。いつその事に、ちつとのうち。

ト突き廻し、胡蝶を手拭にて後ろ手に縛し

氣ぶさいな奴等が入込んで、思案の只中。お姫樣、聲立てさつしやりますと、命がない。

胡蝶　ぢやと云うて、こりやあんまり。

五郎　ハテ、辛抱をさつしやりませ。

ト奥にて

五作　おゆきは居ないか。おゆき／＼。

五郎　ソレ。
トこの聲に、五郎太夫、こなしあつて
ト無理に胡蝶を引立て、藏の内へ連れて入る。直ぐに奥より、五郎作、鍬をかたげ、行燈を提げながら、出て來て、あたりを見廻し
五作　時にもあらぬこの返り花。日頃怪しき親人の、心の底もこの山吹。この間に、さうだ。
ト行燈を庭へ下ろし、鍬を取つて掘りにかゝる。五郎太夫見て
五郎　五郎作、こりやア何をしやる。
ト突き退ける。
五作　イヤ、庄屋どのから頼んで來た、珍らしい山吹、活け花に一鍬進上と思ひまして。
五郎　それでわざ〳〵夜夜中。
五作　なにを。ツイ一鍬掘り起して。
トまた寄るを突き廻し
五郎　よしやれ。おれが大事の秘藏の花……そりやアさうと五郎作、今夜の祝言は、どうしやつた。
五作　エヽ、アノ猿辷りを聟にかえ。
五郎　おゆきは得心したと云ふか。
五作　可哀さうにお前。達てと云へば妹は、直ぐに死にますわえ。
五郎　殺すも忠義。ナニなか〳〵、胡蝶の前には替へられぬ。
五作　すりや、お身替りの心當て。
五郎　お主は今川仲秋へ、獨り褒美の手柄にするか。
五作　イヤサ、全くその姫君。
五郎　但し、妹を切る心か。
五作　イヤ、その儀は。
五郎　姫君を討つか。
五作　サ、それは。
五郎　妹を切るか。
五作　サア。
五郎　サア。
五作　サア〳〵。
五郎　かゝりや繋がるお主へ忠義。親の詞は背かれまい。
ト二重舞臺へドッサリと腰をかける。五郎作、キッと思案して
五作　これまで盡す孝行も、實は妹が不仕合せ。是非ない身替り討ちませう。

トちつとなる。
五郎　よく云つた。五郎作、たつた今。
　トあたりを見て、一腰を取つて、五郎作へ投げ出し
　娘は居るか。おゆき〳〵。
　ト呼び出す。奥より、おゆき、元の振り袖娘の形にて、
　出て
ゆき　父さん、呼ばしやんしたかえ。
五郎　イヤ、おれぢやアない。ソレ、五郎作、今の返事を
　待つ間、後まで爰に寐入る。寄る年で、しぼ〳〵眼が疲
　れた。ドレ、ぐつたりとやらかさうか。
　ト唄になり、五郎太夫、屋體の内へふんぞつて寝る。
　この時、簾下りる。五郎作、ヂッと思案の思ひ入れ。
　おゆき、ウヂ〳〵して
ゆき　何をマア、用ありさうに呼ばしやんすかと思へば、
　眠うなつたと、ツイころり。ほんに蒲團着せて上げうわ
　いなア。
　ト行かうとする。
五作　イヤ妹、いま呼んだは、親仁様ではない。おれだ。
ゆき　エヽ、お前かいなア。さうしてマア、けたたましう、
　なんぞ急な用かいなア。

五作　オヽサ、親仁様のござらぬうち、ちよつと其方に折
　入つて。
ゆき　エヽ、改まつた兄さん、折入つてとは、マア、どう
　した譯ぢや。云はしやんせいなア。
五作　サア、外でもない。猿辷りの又を折角呼び入れて、
　只も置かれないから、どうぞマア、ほんの祝言の杯ばか
　り。
ゆき　その事かいなア。云うても下さんすな。モウ〳〵、
　聞きやせぬ〳〵わいなア。
五作　サア、さう云やらうとは思うては居たが、おれも心
　に餘つて思案。
ゆき　アレ、まだ云はしやんすか。わしやモウ、外の男は
　持たぬ〳〵。
五作　フウ、すりやどうしても餘の男は。
ゆき　アイ、モウきつと持ちませぬ。
五作　そりや、この兄の心中でな。
ゆき　エ。
五作　イヤサ、最前切つた其方の指。よく〳〵に思へばこ
　そ、指まで切つての深切な。望みの通り、いつそのく
　され、親仁様へ願つて女房にしよう。

ゆき　エ……アイ。

ト五郎作、顔を見ながら濟まぬ思ひ入れ。

五作　不挨拶だの。コレ、最前泣きしみついて云やつた詞。兄弟夫婦になるからは、其方も死ぬ。おれも又、どうで生きては添はれない。覺悟は定めて。

ト一腰を取る。

ゆき　エ、、モシイナア、わしとお前と女夫とは。

五作　イ、ヤ、今さら卑怯云ふな。

ゆき　アイナア。卑怯ぢやないけれどな。

五作　指まで切つたが僞はりか。

ゆき　サイナア。成る程、その時は、いつそ死んでもと思うたれど、恥かしい、兄さん、わたしや殿御に逢ひました。

五作　なんと。

ゆき　それで命が惜しうなつた。腹は立たうが、コレ、拜みまする。最前云うたも眞實心。いつぞや都で可愛らしい、お若衆さんとの云ひ約束。互ひに別れて名も知らず、所も知らねば片便り、思ひ焦れて死なうよりと、思ふ矢先へ父さんの、世に情ないあの片輪を、わたしと夫婦にするてゝな、聞いた時の悲しさ口惜しさ、いつそお前に噓云うて、殺される心であつたわいなア。

五作　それに今さら未練な。覺悟。

ト立ちかゝらうとして

ア、、叱るもみんな此方の無理。切ない事の重らずば、名所知らず切られもしまい。死ならともよう云ふまいが、名所知らず別れたその人に、今日の今さら逢うたとは。

ゆき　最前お才とやり羽根の、それで思はず見合す顔。替りやつれて旅姿、お伊勢詣りのお若衆さん、わたしが焦れたお方ぢやわいなア。

五作　ヤア、すりや今川伊豫之助仲秋さまとも露知らず。

ゆき　嬉しいお顔見てからは、モウ／＼命は百萬年、女夫になりたい、わしや添ひたい、兄さん、どうぞ堪忍して、長う添はせて下さんせいな。

ト取縋つて泣く。五郎作、思ひ入れあつて

五作　最前死なうと云うた時は、おれも不便と助けたも、今さら未練に添ひたいと、歎くに甲斐なき浮世の義理。殺さにやアならぬ今となつて、なんの因果に仲秋さま、この家へ廻つてござつた事。コリヤヤイ、今まで仔細を包み、お身替りとは云はなんだが、われが戀しい懷かしい、添はうと思ふ仲秋さまへ、お云ひ號けの胡蝶姫、討

たねば便なや親人も、いつぞや都で犯せる科。お主が命一つで、忠孝全く五郎作が、義理ある妹へ切ない頼み。コレ、聞分けて死んでくれ。斯う云ふ兄が心の内、鐵を沸かして呑んだりとも、この苦しみはあるまいわいやい。

ト手を取つて泣き入る。

ゆき　アイ、アイ。

ト涙を隠しながら

そんならわたしや仲秋さまの、お云ひ號けのお姫さんとやらに。

五作　年恰好の合うたが因果。

ゆき　イヤ〳〵、嫌ぢや。餘の人でもあるか、戀しいお方が仲秋さまなら、お姫さんを殺しても添ひたいわいな。

五作　コリヤヤイ、それが下司の智惠。

ゆき　アイ、下司でも下女でもな、こちや殺される科はない。大方そのお姫さんとやらは、徒らをしなさつた者であらう。なんのわたしが構ひにもならぬ事を。

ト泣きながら、ツンとこちらへ來ようとするを、五郎作、引戻し

五作　未練は不覺。南無阿彌陀佛。

ト拔きかける。

ゆき　アレエ。

ト逃げるを追ひ廻す。立廻りに五郎作、袂より以前の小指を包みたる紙、前なる流れへ落ちて血したゝる。五郎作、これをキツと見て、氣を替へ、猶豫のうちに、おゆき、ちやつと上の藏の内へ逃げて入る。五郎作、追うて入る。この時、後の簾上がる。仲秋、見得よく立ち身。五郎太夫、拔身を差しつけながら出て

仲秋　五郎作は何處に。胡蝶の前の首、延引せば罪を糺して五郎太夫、仲秋が成敗。覺悟なせ。

ト詰める。藏の内にて、エイと太刀音して、五郎作、血刀を持ち、おゆきが切り首を抱へ出て來て

五作　是非なき儘に胡蝶姬、御首賜はり斯くの次第。

ト眞中へ直す。

仲秋　出かした五郎作。イデ實檢。

ト刀を納め、下へ下りる。五郎太夫もホツと思ひ入れあつて、おづ〳〵首の側へ立寄り、つく〴〵見て

五郎　ヤ、、、こりや誠の胡蝶姬。正直の姬を、ド、、、どうして。

仲秋　討つたが不思議か。五郎太夫。

五郎　でも、この筈では。ヤイ〳〵〳〵五郎作、こりやマ

ア、なんとした間違ひだ。

ト あちこちウロ／＼して

おゆきは何所に。娘やい。

ト 首を捻ぢ廻して泣き入る。

ゆき　アイ／＼、爰に居りまする。

ト 出る。五郎作、思ひ入れ。五郎太夫、これを見て

五郎　矢ツ張り娘だ。すりや、どうでも首討つたは胡蝶姫。オ、、ホイ。

仲秋　愚かや、今川仲秋が婦妻に定まる胡蝶姫。似せ首貫うて。たわけた事を。

五作　イ、ヤ、粗忽の申し譯。親人さらば。

ト 抜身を取り直す。おゆき、五郎太夫、慌てゝ留め

五郎　コリヤ待て五郎作。

ゆき　兄さん、なんで死なしやんすぞ。

五作　なんで死ぬとは、親人の、お詞背いた申し譯。

五郎　イ、ヤ、殺さぬ／＼。待て／＼／＼。その云ひ譯は、先ツこの通り。

ト 刀をもぎ取り、我が手に腹へ突き立てる。

五作　ヤ、、、親人。

ゆき　父さん、何ゆゑ。ハ、ア。

ト 泣き落す。

五郎　嘆くな娘、……ではない姫君。

皆々　なんと。

ト 竹笛入りの合ひ方になり、五郎太夫、キッと起き上がり

五郎　十八年來仕込んだ強慾、天道免し給はぬか、誠の娘はその死首。

仲秋　ヤア、血迷ひしか。汝は土民、胡蝶の前は濱名の姫、粗忽に死後の名を穢す、問はず語りはうろたへたか。

五郎　イ、ヤ、うろたへぬ身の懺悔。元來は濱名の住人にて、胡蝶姫誕生のその砌りに、女房も又產み落せし、娘の乳にて乳母奉公、右と左に大名と百姓の產子。世の中の果報を嫉む慾心より、藁の上より取替へて、娘が行く末玉の輿、我が後の世を樂しまんと、思ふ因果の廻り來て、いま首討つたは矢ツ張り娘。とても遁がれぬ因緣か、百姓の家で育つたら、こんな憂き目はあるまいもの。可哀や娘、親ゆゑに、非業の死をさせたかと思へば不便や。死出の山三途の川も、手を引いて今追ひついて、越えるぞよ。可哀い事をしましたわいなう。

五作　それを悔みの御生害。過つて改むるに憚りなしと、

俄かの思案。證據は最前水中へ、取落したる妹が、小指の血汐、分れて流るゝ不思議に、思ひ當りし日頃の振舞ひ。只姫君を大切に、血筋の娘は非業非道に、死ねかし討てよと涙もかけず、迫り〳〵もお身替り。例へ欺むき討つたりとも、仲秋公へ似せ首とは、存じも寄らぬ不覺の手段。お詞背いて斯く計らひ、切腹なすべき拙者の覺悟。

五郎　イヤ〳〵、餘人には恨みなし。下司の猿智惠强慾にも、我が子の代りに姫君を、殺せと勸むるは惡心の、一念發起は今この時。

ゆき　そんなら我が身の上は。

五郎　親でも子でもない姫君、胡蝶の前と名は云はずと、濱名の息女に相違ない。

五作　さればこそ神の結ぶ緣。仲秋さまに語らひしと、似合ひの緣を改めて、直ぐに妹脊の御契約。

仲秋　イヽヤ、胡蝶はこの首級。義嗣公のお心を、かけられたる姫と、名乘るは再會無用。

ゆき　ぢやに依つて、矢ッ張り父さんの

五郎　オヽ、五郎太夫が娘にして

五作　恐れながら宮仕へ。

仲秋　餘儀なき緣は靑砥が妹。我れはこの首義嗣公へ、送るが不興の申し譯。

ゆき　そんなら、どうでも此まゝに。

仲秋　重ねて迎ひの輿入れまで。

ト切り首を抱へ立ち上がる。

五郎　ヤレ、先づ暫く。契約違へぬ證據のお引出

ト鍬引寄せて、片手にて、山吹の根を掘り返す。猿辷りの又、窺ひ出て

又　ヤア、こりや慥かに蘭麝待。

ト取つて駈け出す。五郎作、引戻して、名香を取つて、又を上の方へ投げ

五作　返り咲く花山吹も、根に埋もれし名器の奇特。

ト仲秋へ渡す。五郎太夫、ニッコリとして

五郎　老木は朽ちて娘と共に。

ト引廻す。

ゆき　せめて名殘の死顏を。

ト仲秋、入れ替つて

仲秋　臨終正念、南無阿陀彌佛。

ト五郎太夫にこれを見せる。

又　さてはうぬらが。

ト寄るを、五郎作、引きつけ、五郎太夫、がつくりと思ひ入れ。

ゆき　ハアヽ。

ト泣き落す。五郎作、仲秋、こなしよろしく、

拍子幕

三　幕　目

清見寺門前の場

役名――奴、志津平實ハ荒川藏人重行。同女房、おりく實ハ梅津掃部娘國町。同一子、繁松。古鐵買ひ、太郎左衛門。奴、三保平實ハ赤松次郎則貞。

本舞臺、三間の間、葭簀、水茶屋の道具一式、誂らへの通り。後ろ松並木、上下に榎の大樹、床几二脚程直し、惣體、三保清見寺の門前、テンツヽにて、幕明く。

ト下座と向うより、旅人の侍ひ、その外思ひ〳〵の仕出し、此うちへ、若い者四人、交り出て來て、床几へ腰をかける。後の仕出しは下座と向うへ捨ぜりふにて入る。

若者　かみさん、茶を一つ下さい。

同　爰のかみさんの所で吞むのを、樂しみに來ましたよ。

同　ヤレ〳〵、江尻から一息に來たら、大きに草臥れた。

同　ドレ〳〵、一服やらかさうか。

同　爰で休んで興津まで、ぶら〳〵やらかさうか。

ト四人、下と上へ腰をかける。

若者　ホウ、かみさんは何所へ行かれたか。

同　てん手に茶を汲んで吞むがようごんす。

四人　それ〳〵。

ト てん手に煙草、茶などを汲み出て、せりふにて、休んで居る。向うより、今川の奴志津平、捻切り奴、鳥毛の鎗を持ら、一文奴の形にて、出て來る。花道に留り、誂らへの合ひ方、志津平、思ひ入れ。

志津　おなべが買ひ餅、練れたか持て來い……昨夜も三百張り込んだ。裸で道中がなるものか。奴が鎌髭三里の灸、摺剝くべい、とつかけべい。

ト鎗を振りながら、舞臺へ來る。仕出し、立ちかゝり

若者　こりや例の一文奴、清見寺のお詣りで、錢になるで今日もか。

志津　有り難い事サ。江尻から興津までの間を振つて歩き

まするが、一杯づゝにやアなります。

若者 ほんにさう云やゝ、先刻江尻で逢うた一文奴。爰で
やつて見せねえか。

同 こいつは面白からう。

四人 やらかせ〳〵。

志津 そりやア一杯にさへなりやア、やらかすのサ。

四人 錢だ〳〵。

ト皆々本の錢を投げてやる。志津平、錢を集め

志津 こいつは有り難い〳〵、剛氣に錢が降つた。どうぞ
しなければよいが……時に、鳥目が四分六十八文……よ
いワ。あやめで皆ゾロ半分やらかすべい。後でバラ〳〵
と投げさつしやい。

四人 早く見たい〳〵。

ト志津平、鎗を持つて

志津 宿入り下馬先、合點々々ぢや。振り込め〳〵、奴が
精はし揉んでは釘抜き、とつかけ〳〵そつかけべい、お
草履摑んで尻振るべい。

ト鎗を投げ

サア〳〵、惡魔拂ひの、後のバラ〳〵を貰ひますべい貰
ひますべい。

四人 ハヽヽ。

ト錢を投げてやる。

若者 ドレ、これから門前の、名代の蕎麥と出かけませう。

同 ドレ、倉澤の蛤の貝燒とやりませうか。

三人 サア〳〵、ござれ〳〵。

ト四人捨ぜりふにて、行かうとする。志津平、四人を
留めて

志津 オツと待つたり〳〵。この茶屋はわしが懇ろ、茶代
を置かずに隨徳寺とは、ならねえ〳〵。銘々に置いて行
つたり〳〵。

若者 成る程、すかねえ奴でござるわえ。

ト四人、錢を置いて、捨ぜりふにて、下座へ入る。志
津平、錢を取り集め、後を見送り

志津 横着者が。おれが氣を付けないと、ズイとやらうと
しやアがつた。ドリヤ、一勘定やらかすべいか。

ト錢を勘定して

有り難い〳〵。今日は餘ッぽどの仕事をしたわえ。これ
から又一稼ぎやらかさにやアならない……そりやアさう
と、おらが山の神は、なぜ店へ出ない知らん。ドリヤ、
門前の方をやッつけべい。

ト唄になり、志津平、下座へ入る。この唄をかりて、向うより、おりく、前垂れ、世話女房の形、襷を肩にかけ、下駄を穿き、手桶に水を汲み、重さうに提げて出て来て、花道好き程に休む思ひ入れ。後より、オ、イナ、イと云ひながら、奴三保平、旅奴の形、風呂敷包みと笠を割掛けに擔ぎ出て来て、おりくが側へ来て

三保　先刻から、こんたを呼ぶのが聞えませぬかい。こなさん、何に浮れて居さつしやるよ。

トおりくが脊中を叩く。三保平を見て

りく　アノ、いま後から聲をかけなさんしたは、お前かえ。

三保　なんだ、お前かえ……おらア後から見て居れば、こなさんがその手桶の水を、重さうに提げてござるから、ツイ提げて行て進ぜうと思つてよ。

りく　そりや、嬉しいわいな。シタガ、わしが行く先も知らしやんせいで、お前も餘ッぽどの間に合ひさんぢやわいな。

三保　それを知らないで堪るものか。こなさんは、アノ向うの榎の下の茶屋で、名代の内儀さんであらうがの。

りく　なんぢやぞいな。名代ぢやのなんのと。シタガ、よう知つてぢやな。

三保　サア〳〵、出さつしやい〳〵。

りく　そんなら提げて行て下さんすか。

三保　こなさんのやうに持つて行くと、みんな零してしまふわな。ドリヤ、提げて進ぜうか。

ト唄の切れにて、三保平、先に手桶を提げ、おりく、捨ぜりふ云ひながら、本舞臺へ手桶を置く。三保平、床几へ腰をかける。おりく、煙草盆を出し

りく　ほんに、好いお方にお目にかゝつて、わたしが仕合せ。サア、お前はしんどうござんせうな。

三保　ナニ、手桶に水の一杯や二杯、毎日わざ〳〵汲みに来て、こなさんならやりたい。

りく　ほんに冗談ばつかり云うてぢやわいな。ドレ、茶々一つ上げうかいな。

トおりく、茶を酌んで居る。三保平、莨のみながら、おりくが姿をいろ〳〵にして見て居る。おりく、茶臺に茶碗を載せ

三保　サア〳〵、茶々呑ましやんせいなア。

ト三保平、茶も取らずに、おりくが顔を見て居る。おりく、思ひ入れ。

エヽ、なんぢやぞいなア。わしが顔をヂッと見てからに、

氣が詰まるわいなア。サア〳〵、早う茶々を取らんせいなア、

ト差出す。三保平、その手をチッと捉へ、茶碗を脇へ置き、おりくを引寄せる。おりく、思ひ入れあつて

何しなさんすぞいなア。

ト振り切らうとする。

三保　ドッコイ〳〵。聞いたよりは見事々々。情盛りのたまり水。コレ、魚心あれば水も提げ、こなさんゆゑなら、なんでもやらかす心だが、ウムと云つてくれる氣は中山富三か。どうだ〳〵。

ト抱きつく。この時、志津平、以前の形にて、下座より出て、この體を見て、影を隱して居る。おりく、振り放し。

りく　なんぢやぞいなア。てんがうばつかり。好い加減に嬲らんせいなア。

三保　ナニ、嬲るとは曲がないぞえ。奴相應竹光冥利、嘘は云はない。拜む〳〵。

ト また三保平、取りつくを、おりく、飛び退き

りく　こりや、てんがうかと思うたら、眞面目になつて奴どの。わしには夫がある程に、あんまりじやらついて下さんすな。

三保　ナニ、夫がある。

りく　あるとも〳〵。歷とした夫があるわいなア。

三保　鬼があらうが亭主があらうが亭主ない。もう斯うなつちやア堪へられない。みんなならずば、おれが扶持方二合半分でも大事ない。ツイちよこ〳〵と、拜む〳〵。

ト嫌がるおりくを、三保平、無理に押しこかさうとする。立廻りのうち、志津平、出て、立廻りに三保平を突き退ける。おりく、志津平を見て

りく　こちの人、よう來て下さんしたなア。

ト三保平、恟りして

三保　見かけと顏に似合はない、劍術も達して居るか。

志津平を見て

今おれを突き倒したは、われか。

志津　オヽ、おれだ。見りやア人の女房に、はてさつかける寒晒し。二人寄つて取りつきひッ付き、此奴は胡散臭いわえ。

ト思ひ入れ。

三保　ハテ、そんならわれが、このかみさんの御亭どのか。

志津　亭主も亭主、ちとむづかしいのだぞ。うぬらはたつ

た今、四つにするぞ。動きやアがるな。
りく　エヽ、モウ、こちの人、四つにするの胡散臭いのと、わしを捉へててんがうするゆゑ、困つて居るのぢやわいなア。
志津　インニヤ／＼、その手ぢやいかない。なんでもたつた二人居りや間男だ。サア、奴め、其所へ出ろ。
ト脇差をひねくつて思ひ入れ。おりくも思ひ入れ。
三保　こりやアさう聞いちやア、男のある者に冗談したは、おれが悪いが、奴々と、あんまり安く云ふな。さう云ふわれも奴ぢやアねえか。武士はお互ひ。奴々を二つ合せて、遣ひ残りの銭がコレ五百。どうぞこれで、料簡してくれろ／＼。
ト四文銭を一本と小銭を百、志津平が前へ投げ出す。
志津　インニヤ、ならない。銭ならたつた五百ばかり、間男の相場は三つ子も知つた七両二分。これぢやアザッと七両一分二朱と三百四十文不足。こればかりぢやア、料簡しないぞ／＼。
三保　コレ、御亭主どの、そりやア酷いと云ふものだ。底を振つた銭五百、これより外にやアこの奴が、三里の灸の萬能膏薬、鐚一文も外にはない。それで料簡してくりやれ。
志津　イヤ／＼、一本や二本は肩へも背負はせる。くすねがあんべい。其所へ出せ。
三保　しつこい。一文もないと云ふに。
りく　コレイナア、もう大概にしなさんせいなア。
志津　インニヤ、料簡しちやアなみが悪い。そんなら貴様の懐を探して見べいか。
三保　どうとも／＼。
ト志津平、三保平が懐中へ手を入れ、いろ／＼探す思ひ入れ。おりく、気の毒なる思ひ入れ。テンツヽになり、向ふより、古鉄買ひ太郎左衛門、古鉄買ひの拵らへにて、秤を腰に差し、古鉄の荷を担ぎ、前の方の笊へ、志津平の忰笹葉松、木綿やつしの形にて入れ、後の笊へ錫その外いろ／＼、誂らへの通りに入れ、出て来て、荷を卸ろし、太郎左衛門、志津平が胸倉を取つて、連れて来る。おりく、太郎左衛門を見て
りく　オヽ、太郎左衛門さん。
ト太郎左衛門、おりくが裾を取つて
太郎　古道具屋の太郎左衛門、よう名を忘れさつしやらない。コレ、大騙りの志津平、おれが方は、どうするのだ

どうするのだ。
ト小突き廻す。三保平は下の方に腰をかけ、莨のんで居る。太郎左衛門をおりく留めて
りく　成る程、さう腹立てさんすは、尤もぢやが、どうぞもそつとのところ、料簡して下さんせいなア。
志津　イヤモウ、貴様に逢つちやア穴へも入りたい。腹も立たうが又、好い年もちつと當がある程に、料簡して下さい〳〵。
太郎　コレ、地藏の顔も三度とやら。どんな佛性な者でも腹が立つまいか。それ〳〵、今日はモウ堪忍袋の緒が切れた。コレ、この繁松も連れて來た。
ト繁松を笊より出し、二人が前に差出す。
受取つて下さい。イケ馬鹿々々しい。
ト繁松、志津平おりくを見て
繁松　母様いなう。
りく　ホヽ、繁松か。ようおぢやつたなう。
太郎　よくおぢやつた。よくはおぢやらない。忘れはさつしやるまい。青砥村から庵原村へ、夫婦連れにこの子を連れて引越して來た所が、貴様が着た儘よ。志津平が褞袍一つ。見た所が可哀さうに、惡くも育たない人だとチヤホヤ云へば乘りが來て、太郎左衛門さん、お前の所にある釜は、とんだ好い物だ、持つて行つて遣はしやい、モシその摺鉢と擂木は幾らだえ、貸しておくれ、ソレ遣ひねえ、味噌漉しを貸せ、持つて行かつしやい、越してくるから今日が日まで、疊建具に我樂多道具、屋臺一式おれが仕送り。その擧句が爰へ茶見世、莨簀の代から道具が一式、大工手間まで自腹を切つて出さした上で、この餓鬼を、晝はわしが内に居ないし、志津平は出商賣、ちつとのうち預かつてくれろと、預けたが最期の助、今日の今まで、うんだとも潰れたも、梨の礫もしないぢやアないか。サア、世帶一式の金が八兩二分。茶店を出した入用が三兩。この餓鬼が喰ひ雜用、貧乏人の餓鬼にしちやア、喰ひ物から贅澤ばつかり。此奴が體に遣つたが拾兩餘り。サア、その金、耳を揃へて今、寄越しやれ。
志津　イヤモウ、なんと貴様に禮を云はうやら、返したいにも工面は出來ず。このぼんちが事も、わしは一日出歩く。女房は茶見世の世話仕手がなさに、こなさんに預け今日は工面して禮に行かうか、明日はどうしてと、一日一日に延びる程、わしが目からは高い敷居。門までは行きましたが、空手でも行き憎く、今日まで人もやらずに

置いて、貴様に腹立たせたは、わしが悪い。どうか料簡して下されい。

りく　モウ、こちの人が云はるゝ通り、自由にならぬが金づく。青砥村から越すや否、どう云ふ縁やらお前のお世話、夫婦が仲の繁松まで、身勝手云うてお前に預けて苦勞をかけ、疎遠にする氣はさら／＼なけれど、都合が悪さの無沙汰ばつかり。いま此やうに繁松を戻して下さんしては、主もわたしも手一つで、どうも仕様がござんせぬ。わたしら二人を助けると思うて、長うは云ふまい、四五日のうち、この子も歸さす、借りた金も、どうぞ待つては下さんすまいかいなア。

志津　いま女房が云ふ通りだ。近頃無理と思はつしやらうが、どうぞ／＼四五日のところを。

太郎　ならないよ。

志津　そのならぬところを

兩人　どうぞ。

太郎　エヽ、嫌だア。たつた今その金を出せ。この餓鬼も返したぞ。返事しろ。どうだ。

りく　モシ、モウ／＼今度ばかりは、ほんまに間違ひませぬ程に、拜むわいなア。どうぞ四五日のところを。

トおりく、手を合せて詫びる。志津平は俯向いて居る。

太郎　コレ、おれが死んだら、この金はちやアふうにもならうが、まだ／＼、ぶち殺しても死ぬ事ぢやない。サア志津平、金はないか。なぜおれにばかり口を利かせて、默つて居るよ……イヽワ、斯うしよう。逆様に振つても鼻血も出まい。金の代りに女房を連れて行かう。それがよい。サア、歩ばつしやい。

トおりくを引立てにかゝる。志津平、留めて

志津　そりやアならねえ。金の代りに女房を遣つちやア。

太郎　そんなら、金があるか。

志津　サア／＼、そりやア。

太郎　面倒な。どきやアがれ。

ト志津平を突き退け、おりくを引立てにかゝる。

繁松　母様、怖いわいなう。

りく　オヽ、道理ぢや／＼。

太郎　サア、うせろ。

トおりくを引立てる。志津平、支へる。立廻りに三保平出て、太郎左衞門をポンと投げ出す。

オヽ、痛い／＼。

ト太郎左衞門、三保平を見て

なんだ、この奴めは、お上の御樣子も知りやアがらねえで、なぜ邪魔をしやアがる。うぬにやア構はないぞ。其所退いて居やアがれ。

　トまた太郎左衛門かゝらうとするを、三保平、利き腕を取る。太郎左衛門、痛む思ひ入れ。

三保　これサ、そんなに騷ぐものぢやアない。先刻から聞いて居りやア、この手合ひがお身樣に借りがある、それを返さねえから寄越せと云つてのせり合ひ。男と男の意氣づくを、默つて見ても居られねえ。あんなに云ふ事だア。料簡してやりやれよ。

太郎　なんの事だえ。おらア又、怜悧さうに口を利くから、金でも出して吐かすかと思やア、料簡しろ。それをわれに教はるものか。其所放しやアがれ。

　ト振り切らうとする。痛むこなし。

三保　動くと、痛い／＼……そんなら料簡はならないか。

太郎　知れた事だわえ。

三保　どうとも勝手にしやアがれ。

　トかゝるを、三保平、また投げ出し、起きる所を懷中より、金包みを出して、太郎左衛門が前へ投げ出す。太郎左衛門、これを見て

太郎　こりやア金。

三保　持ち合せた二十兩。屋體の我樂多、この子の里扶持。それで云ひ分はあるまいがな。

　ト太郎左衛門、此うち、金を改め

太郎　成る程、こりやア二十兩。これさへ取れば、云ひ分はないのサ。

三保　云ひ分がなくば、ちつとのうちだ。アヽ、その子もわれが世話次手に、もうちつと面倒見てやれ。

志津　縁もゆかりもない人から、大枚の貳拾兩、借り請けるも本意ならねど、差當りたる貴樣へ手詰め。この上ともに繁松め、もそつとの所、どうぞ世話してやつて下さりませ。

りく　太郎左衛門さん、夫婦が願ひはこればつかり。もそつとの所、好いやうに。

兩人　頼みますわいなう。

　ト太郎左衛門、金を納め、萎れたる思ひ入れあつて

太郎　そりやアハヤ、青砥村からござつた時、賤しくもねえ人だと、夫婦の衆に惚れてかゝり、貸した金代物、延びやアがつたが日に愛想づかし。男は當つて碎けろだ。ようごんす。繁松も預かつて進ぜませう。

りく　エヽ、そんなら聞き分けて下さんしたかいなア。
太郎　聞き分けました〳〵。
志津　太郎左衛門どの、なんとも申さぬ、忝なうござる。
三保　イヤ、さう物が丸く濟めば、わしも忝ない。そんなら樣子は知らないが、いつものやうに、心安うしてやりやれ。
太郎　こりやア奴さん、惡い所へ來さつしつて、お前の懷の明く事。これから世話も燒きよいと云ふもんでごんす。時に繁松、またお爺と行くのだよ。
繁松　母さん、また小父さんの所へ行くのかや。
りく　オヽ、後には母さんも父さんも行く程に、小父さんと先へ行つて待つて居や。好いお土産買うて行くぞや。
繁松　そんなら早う行かうわいの。
志津　オヽ、聞分けの好い。早う行け〳〵。
太郎　アレ、見さつしやい。こんなに馴染んで居ますわの。まんざら憎うはない　ドレ〳〵。
　ト また繁松を笊に入れて
そんなら必らず、二人ながらござれよ。奴さん、いかいお世話になりました。
志津　くれ〳〵も太郎左衛門どの、繁松が事頼みます。

太郎　氣遣ひさつしやるな。お内儀、必らずござれいよ。
りく　そんならお歸りなさんすか。坊よ、溫なしうしませうぞや。
　ト 繁松へ思ひ入れ。
太郎　必らず來さつしやいよ。ドレ、行くべいか。
　ト 合ひ方になり、太郎左衛門、繁松を連れ、向うへ入る。おりく、見送り
りく　大切のあの子を預けて置きながら、都合が惡さに無沙汰して腹の立つは、もつとも無理とは思ひませぬ。いつか願ひも叶うた上は、キッと禮を云ふ程に、坊を大事にして下さんせえ。
志津　これサ、女房、役に立たぬ事を。
　ト 三保平が方を見て
ハヽヽ、見さつしやる通り、退引ならぬ手詰めの場所。償はれた貴樣の金、忝ない嬉しいは、詞にも盡されませぬが、何ゆゑあつて大枚の、二十兩と云ふ金を
りく　わたしら夫婦に緣もなく、由緒のないお前の手から。
三保　渡してやつた二十兩、金の大事は我れ人とも。そこを償うたその譯は。
兩人　して、その譯は。

ト三保平、あたりを窺ひ

三保　何をか隠さん某は、今川貞世公の家來、三保平と云ふ者。主人今川左衞門さま、過ぎ去り給ふ奥方を、深く慕はれ、お忘れもなく、兎やせん角と心も空。思はせ給ふを見るにつけ、どうか斯うかと思ふ折から、幸ひ清見寺門前の、水茶屋の女こそ、彼の過ぎ去り給ふ奥方に、生寫しと聞くと等しく、これ屈竟と仰せを請け、折よう逢つて面體恰好、見れば見る程瓜を二つに割らずと其まま。褄外れから物腰まで、賤しからざる取り廻し。樣子ためらふその所へ、何やら金の出入りにて、難儀の場合、これ幸ひと、二十兩用立て申し、その後にて何かとつくと物語り、得心させて連れ行かんと、義理をかけたる二十兩。押付け業の我が思案。また最前お内儀に、じやらくる事もこの一儀、頼んで行かん下心。この理を篤と聞き分けられ、暫しの間貞世公の、閨のお伽の假枕。他生の縁にかけまくも、少しのうちと諦らめて、御亭主、聞き分けては下さるまいか。お内儀……合點がゆきましたか。

ト志津平、思案して居る。おりく、思ひ入れ。

志津　イカサマ、藪から棒の二十兩、仔細がなけりやア叶はぬ事と云ふものゝ、こりや一分別せにやアならぬわえ。

トおりく、思ひ入れあつて

りく　モシイナア、滅相な。廣い世界に女と名の付く上からは、何程尊い身となるとも、不義徒らの惡名うけ、假にも夫を重ねては、女子の道が立たぬわいなア。他の事ならどのやうな、憂き辛い目もいとひはせねど、現在恩を請けながら、聞分けない女子めと、思はんすも氣の毒ながら、こればつかりは、どうぞ免して下さんせいなア。

ト三保平、思ひ入れあつて

三保　成る程、理りかな。天晴れ貞女の操、感ずるに餘れども、爰をよう聞かつしやい。全く主人今川どのへ、操を捨てしと云ふではない。必らず惡く氣を廻し、誠の道を思ひやり、貞節盡す心は尤も。さりながら、わしとても、主人の爲。琴でも彈いたり、三味線でも枕元で、氣を慰めるばかりの事。コレ、御亭主、お内儀の得心のゆくやうに、云ひ含めて下されい。頼みまする。

志津　呑み込んだ／＼。コレ女房、此方へ來やれ。

ト志津平、おりくを下の方へ連れて來て

コレ、お主は何と心得て居る。日頃からこの志津平が、何卒今川家へ縁を求め、入込みたいと思ふ矢先、かゝる

頼みは天の與へさせ給ふかと、天を拜し地を拜し、有り難や忝なや、日頃の大願成就の時節到來。斯う云ふめでたい門出を、喜び勇んで行く筈を、それに愚圖々々世迷言。本望遂げるが悲しいか。何うろたへる事がある。ちつとも早く一緒に行け。

りく　成る程、日頃お前の思うて居さんす、願ひの叶ふあの頼み。それはさうと、わたし一人が行つたとて、お前の願ひが叶ふかえ。

志津　其所を奴に此方が願ひ。其方に付いて入込むは、日頃の願ひの叶ふ門出。おれが行く事、頼んで見やれ。

りく　夫婦諸とも、今川家へ入込むからは、日頃の願ひも心の儘。マア、頼んで見やうわいなア。

志津　早く／＼。

りく　合點でござんす。

　トおりく、三保平が側へ來て

サア、三保平どのとやら、一時も早う、連れて行て下さんせいなア。

三保　すりや、得心して行つて下さるか。

りく　行かいでわいなア。ちつとも早う連れて行て下さんせいなア。

三保　さう得心さつしやれば、直ぐに旦那へ手渡して、喜ばせて進ぜたい。サア／＼、直ぐに歩ばつしやい。

りく　待ちなさんせ。そんならお前が奴さんの形をして、直ぐに殿樣のお側へ行かしやんすかえ。

三保　行くとも／＼。斯う窶くれた奴だが、おらア大きな病持ちよ。刃物を見ると正氣を失ひ、夢現とも辨まへぬ生れ付き。それだから男らしく、キツとした御用筋は勤めず、女童同然、愚圖々々とした役目ばつかり。殿樣のお寢元で、なんでもかでもお氣に入る、お伽噺のお相手に、こなさんもその先、殿樣に代り、請けつ口說いつお枕元で、お伽噺が肝心だよ。

りく　それおやと云うて、知らぬお方のその話しが、どうなるものかいなア。

三保　其所は追々この奴が、魂膽の秘密を話しますワ。氣遣ひさつしやるなよ。

りく　サア、それはよけれどな、困つた事があるわいなア。

三保　困つた事とは、なんだ／＼。

りく　アノナ、こちの人も、一緒に去んでも大事あるまいなア。

三保　アノ、御亭主どのを。

りく　アイナア。どうぞ連れて去んで下さんせいなア。
　ト三保平、考へるこなしあつて
三保　御亭どのを連れて行くまいと云うたら、こなさんをやるまい〳〵。ハテ、好い思案が。
　トいろ〳〵考へ
あるぞ〳〵。貴様は、このかみさんの供にして、矢ッ張り奴で歩ばつしやい。
　ト志津平、喜ぶ思ひ入れ。
志津　こんな形でもよからうか。
三保　よいとも〳〵。この奴も着替位は貸してやるワ。時に、それはよいが、御亭どの、おかもじは、コレ、これもなるか。
　ト三保平、三味線を弾く眞似をする。
志津　なるとも〳〵。女房もわしも、腹からの百姓でもごんせぬ。その昔は琴も三味線もやつたものサ。琴でも望まつしやらうものならば、こればかりは請合ひます。
三保　それは重疊。そんなら、ちつとも早く行かうおやないか。
りく　それがよいわいなア。
三保　しがない襷前垂れも、いま出來立ての奧樣株。
志津　それ〳〵、直ぐにお供も水入らず。
　ト有り合せたる草履を直す。おりく、ちよつと頂き、その草履を穿いて、突き袖して、思ひ入れ。
三保　奧樣のお立ち。
りく　供せい。
兩人　ネイ。
　ト三人、顏見合せ
三人　ハヽヽヽハヽヽヽ。
　ト笑ふ。この途端、拍子、
幕

大詰

今川館の場

役名……今川左衞門貞世。奴、志津平實ハ荒川藏人重行。同女房、おりく實ハ梅津掃部娘園町。同一子、繁松實ハ足利義若。大道寺新兵衞。同姉、沖波。民部娘、楓。堅田兵藤。今村進八。三上百助。奴、富士藏後ニ片桐才藏。安積大膳久國實ハ赤松五郎則安。足利右源太義嗣。奴、三保平實ハ赤松次郎則貞。

本舞臺、正面、三間の間、結構なる高足、上げ障子の御殿。後ろ金襖。二重の兩袖、緞綢彩色の杉戸。上の大柱、誂らへの松の立ち木。下の方に、柴垣、枝折り門。すべて、今川館のかゝり。よろしく、幕の內より、上の方に、義嗣公、小さ刀、長上下の形にて、床几にかゝり、その側に、百助、麻上下、大小の形にて扣へる。眞中に、娘楓、裲襠衣裳。下の方に、堅田兵藤、今村進八、麻上下、大小の形にて、並好く居並び、時の太鼓、琴唄にて幕明く。

楓　義嗣さまには遠路の所、御苦勞の御下向。今川左衛門、今以て病中の怠り。取敢へずおもてなしの役は私し。卽ち梶田民部が娘楓と申しまする者。

進八　差添へまして今村進八。

兵藤　堅田兵藤、早速これへ

楓　義嗣さまのお迎ひに

三人　罷り出ましてござりまする。

百助　神妙の出迎ひ。義嗣公にも御滿足。お詞下し置かれませう。

義嗣　如何にも。さり難き仔細あつて、義嗣わざ／＼都より發足なすところ、今川左衛門病氣とあれば、何か心に任せぬ勝ち。何れの道にも義嗣、直ぐに直世へ面談いたしたい。病床へその由、案內いたせ。

ト奧にて

沖波　その御案內、憚りながら、お取次ぎ致すでござりませう。

ト合ひ方になり、奧より、沖波、裲襠衣裳にて、出て來て

これは／＼、存じがけない義嗣公の御入り。今日御上使とござりまするゆゑ、定めて斯波細川の兩管領のうち、御下向と存じ居りましたに、義嗣公のお入りとは、左衛門始めどれ／＼も、畏れ入りましてござりまする。

義嗣　古歌にも云はずや。思ひある人目せかれて我が文を、我が使ひにて我れぞ持て來る。

沖波　成る程、左樣に御意なされますれば、左衛門とても病中ながら、取繕ろひまして、お目見得は後刻、先づ一通り畏れながら私しへ、仰せ聞けられ下されませうならば、有り難うござりまする。

百助　して、おてまへは何人でござる。

敷波　家の執權、大道寺新左衛門娘沖波。親玄蕃の留守中は、何事に依らず私しへ。

義嗣　左樣申せば執權の娘、左衞門への執成し、一通り樣子物語らう。餘の儀でない。先つ頃、兄義教どの不慮の御最期、斯波細川の面々、京都の守護を預かると雖も、近しき一家は今川左衞門。武將の跡目は貞世の胸にあるべき事と、それゆゑわざ／＼内談せん爲。

沖波　成る程、その儀は朝暮とも心を勞し居りますれど、何を申すも系圖の紛失、京都へ出仕も致さぬ左衞門。

楓　左樣でござりまする。武將家と申し、義嗣公のお役目、今日までも打捨てござりませうやうはなけれども。

義嗣　病氣とあつて便々だらり、詮議のないは心得違ひ。ハテ、誰れ彼れと云はうより、現在の弟、斯く云ふ義嗣、天下を知るに誰れあつて、異議はなけれど、今川は強者。何卒左衞門得心召されて、兩管領へもその旨を、推擧いたしてもらひたさ。それゆゑわざ／＼下向いたした。

沖波　これは思ひ依りませぬ仰せ言。尤も弟君の義嗣公、左衞門異論もござりますまいなれど、一應でお請けも如何。兎も角も主人貞世へ申し聞け、お目にかゝつて御挨拶。

楓　暫らくの間、御猶豫なされて下されませうならば

二人　有り難う存じまする。

ト進八、前へ出て

進八　イヤ、沖波どの、連れござつたる大切な囚人。禁獄いたし置いてござるが、今日詮議いたさるゝかな。

兵藤　猶豫ならざる大事の囚人。計らひませうと存ずるうち、義嗣公火急のお入りでござれば、先づ取敢へずお出迎ひ。

進八　御前の畏れ、手延びの拷問。

二人　如何いたしたものでござらう。

義嗣　イヤ、苦しうない。公事裁許は武家の習ひ。見聞いたすも又一興。

百助　して、囚人は何者。盗人でござるか、騙りでござるか。

沖波　イヽエ、主殺しでござりまする。

義嗣　アノ、主人をや。

沖波　左樣でござりまする。御所望なれば、兄殺し國盗人も、澤山な事でござりまする。

義嗣　なんと。

沖波　イヤ、御所望の上からは、直さまこれへ。

進八　畏まりましてござりまする。

ト花道の角へ來て

囚人、これへ。

侍ひ　ハア。

ト時の太鼓になり。大膳久國、四建目の形にて、大繩にかゝり、侍ひ兩人付き添ひ、新兵衞、上下、股立の形にて、この繩を取り、出て來て、直ぐに本舞臺の眞中へ久國を引据ゑ

新兵　仰せに從ひ、引据ゑましてござりまする。

ト立ちかゝる。

サア、如何程問へど、答へざる不敵な奴。迚てこの上陳ぜずんば、酷い責苦に遭はせるぞよ。

ト久國、目を開きて

久國　どれ程責苦が辛いとて、知らないものが白狀されうか。其方の根の續くだけ、責め殺してくれろ。知らないワ。おらア知らない事だ。

ト義嗣と顏見合せ

義嗣　ヤ、其方は。

ト思ひ入れ。沖波、合點のゆかぬこなしにて

沖波　すりや、義嗣公には。

久國　イヽヤ、知らない〳〵、知らないぞ。

新兵　知らぬとは。

久國　知れた事だ。無くなつた系圖は仲秋が紛失。それを知らないと云ふのだワ。

新兵　イヽヤ、さうは云はせない。以前は足利出頭の安積大膳久國、嵐山の御所にて、義嗣公を見知りながら、事に準へて知らぬと申す僞はり表裏。系圖の詮議、問ふに及ばぬ汝が業、速かに白狀いたせ。

ト久國、目を塞ぎ、默つて居る。

沖波　一言一句の詞もなきは、すりや其方が業なるか。幸ひ義嗣公の御前、荷擔人倫類を白狀しや。

久國　エヽ、喧ましい。幾度聞いても同じ事。馬の耳に念佛。これから上の責苦には、水責め火責めぶり〳〵責め、五尺の體を粉になしても、知らない事が云はれるものか。この上おれに云はせたかア、酒と肴に女を集め、御機嫌が直つたら、その時云つて聞かせべいワ。

新兵　ヤア、憎かれ者の小唄とやら。責苦で吐かすか吐かさぬか、大道寺新兵衞、一責め責めて義嗣さまへのおもてなし

ト刀の鐺にて久國をこじる。

久國　まだ〳〵そんな事ぢやアいかない。とても事に肩骨背骨、よく揉みほぐしてくれろやい。

新兵　よし／＼。これでも吐かさにやア、望みの通りぶりぶり責。方々用意。

皆々　畏まりました。

ト立ちかゝらうとする。

義嗣　待て／＼。便々と何にもならない長詮議。久國も侍ひ、この期に及んで荷擔人餘類を白状もしまい。その上、系圖の詮議、兄義教公を害したる科、明白に顯はれし上は、何ゆゑ刑罰には行はぬ。久國とても天下の政法、とても覺悟は致して居らうな。

久國　こは有り難きお詞。存ぜぬ事も時の災難。義教公を害せし科、さま／＼の證據に是非もなく、私しめが引ツ被つて、餘人へ難儀をかけまいと、一心覺悟を定めたれば、いつ成敗に行ふか、いま切腹を云ひつけるかと、思ふに違ふ系圖の詮議。如何にも勝手だ、私しだ。しない事をいつまでも、まだら／＼と日を延すは、うぬらが勝手であるまいか。

新兵　イヤ、刑罰は一方ならぬ、足利の武將を害せし大罪人。

沖波　家の系圖詮議の上、今川左衞門貞世さま、上洛あつて禁廷の、お指圖受けねば、私しの業にはなりませぬ。

久國　そんなら猶更貞世どのは、腰が拔けても大病でも、伊豫之助仲秋在りながら、何ゆゑ拷問して一刻も早く、おれが獄屋の住ひ、この世の暇はくれないのだ。但し此奴も、今は行くへの知れない風來者、館の内にやア居ないのか。

沖波　イヤ、若殿には先達て、蘭麝待の名香、胡蝶姫の首、義嗣公の實檢に入れんと、夜を日に繼いで密かの上京。

義嗣　すりや、仲秋には胡蝶姫を

沖波　御意に叶はぬ姫が越度。

義嗣　靡かぬ科とて首討つたか。

久國　それも僞はり。ほんの事なら當地へ下向の義嗣どの、何ゆゑこの場にて、實檢に供へぬからは疑はしい。

沖波　イヤサ、その儀は。

義嗣　仲秋は何國に、胡蝶姫の首、蘭麝待、檢分しようワ。

沖波　イヤ、その儀は。

久國　いま吐かしたは僞はりか。

兩人　サ、それは。

義嗣　サア。

兩人　サア。

皆々　サア／＼／＼。

義嗣　蘭麝待諸とも實檢しようワ。
トきつと云ふ。向うにて、「伊豫之助參上」と呼ぶ。
皆々　イヤ、なんと。
ト誂らへの鳴り物になり、花道より、富士藏、綺麗なる奴の形にて、一本差し、三方に今川狀を載せ、持つて出て、直ぐに本舞臺へ來て
富士　お召しに依つて今川仲秋、參上仕りましてござりまする。
久國　なんだ。見りやア草履摑みの二番ばえ。
義嗣　われが今川仲秋か。
富士　イヤ、私しめは三保平が悴、富士藏と申す若者。若殿のお供仕つてござりまする。
義嗣　まだ吐かしやアがる。何所に仲秋。義嗣をたわけにするか。何所に仲秋。
富士　イ、ヤ、今川左衞門、愚息仲秋へ誓詞の條々。
楓　文道を知らずして、武道遂に勝利を得ざる事。
新兵　先祖の川莊寺塔以下、破壞して私宅を造る事、これ義嗣公の御行跡。
沖波　君父の重恩忘却せしめ、忠孝徒らに、安積大膳久國どのへ好い戒め。
新兵　臣下の善惡を辨まへず、賞罰正しからざる事、一つとして洩れぬ今川狀。
富士　愚息仲秋、義嗣公へ憚りながら御諫言。
義嗣　すりや、義嗣が行跡を、嘲り蔑みして汝等まで、
久國　小癪な諫めの今川狀、この身にあつちやア猶さらに、牛に經文、耳の端で、雀の囀り聞きたくない。見るも穢れな今川狀。仲秋貞世も土足にかけて、先ツこのやうに。
ト三方のまゝ踏み碎き蹴飛ばす。
進兵　ヤ、慮外の囚人久國。
ト立ちかゝる。
沖波　コレ、理不盡も法外も、誠を守る人の上。とても刑罰極まる科人。
義嗣　イヤ、囚人より義嗣の返答。
新兵　また品替へて科人めは、獄屋にて水責め火責め。
久國　貞世に逢つたら白狀せう。
百助　然らば此まゝ。
新兵　義嗣公には別殿へ。
義嗣　方々案内。
新兵　科人、立たう。
久國　うるさい奴等だ。また今夜も、御意に叶はぬ一杯飯。

ちつと料理を拵へてくりやれ。

義嗣　ハテ、この期にも遅ましい……イヤ、饗應の別席へ。

皆々　イザ先づ、お入りあられませう。

ト管絃になり、義嗣先に百助、進八、兵藤、付き、久國こなしあつて、新兵衛、この繩を扣へ、奥へ入る。

沖波、楓、富士藏、殘つて

楓　沖波さま、殿様の御病氣と云ひ、義嗣さまのお入り、心ならぬ事ぢやアござんせぬかいな。

富士　左様でござりまする。仲秋さまの事に付いて、義嗣さまの無理我まゝ、斯様いたせと殿様の、お指圖ゆゑに若輩な富士藏が出面の奉公。

沖波　イヤモウ、無理も我まゝも、義嗣さまの弟顔。おいとしや胡蝶の前さま、お心に従はぬ科とあつて、仲秋さまにはお云ひ號けの、表を立てるお心より、お首討つて蘭奢待諸とも、京都へ御持參なされたるお留主ゆゑ、知つての無體の御意。これに付けてもお家の系圖。

楓　少しも早うお手に入り

富士　仲秋さまも御歸國あり

沖波　事の納まる好い思案が

三人　ありさうなものぢやなア。

ト向うより、足輕一人出て來て

侍ひ　申し上げまする、兼ねて仰せつけられましたる女子、三保平召連れ、お中の口に扣へ居りまするが、これへ通しませうや。如何計らひませうな。

沖波　オヽ、その事ゆゑに殿様にも、度々お尋ね。急いでこれへ。

侍ひ　ハツ。畏まつてござりまする。

ト引返し入る。

楓　ほんに疾から御意なされた、前奥様によう似た女中。

富士　左様ならば沖波さま。

沖波　富士藏、おぢや。

富士　ネイ。

ト唄になり、沖波先に楓、富士藏、付いて奥へ入る。直ぐにこの唄をかりて、花道より、おりく、着流し、後ろ帯の形。三保平、序幕の奴の形。志津平、同じく奴にて、風呂敷包みを脊負ひ、出て來て

三保　ヤレ／＼、嬉しや。どうか斯うかマア、お屋敷へ連れて來た。

志津　イヤモウ、こなさんのきついお世話。シタガ、これからが大事のお目見得。どうぞ巧くやりたいものだねえ。

りく　サイナア。これまでどう云つてよい事やら、わたしや心が落ちつかぬわいなア。

三保　ハテ、それだから道々も、大概お屋敷の御家風は云つた通り、奥様はなし、殿様は世間でも知つた慈悲深い、下々で云へば大通だ。氣遣ひな事はない。マア、おれ次第にして歩びなさい。

ト矢張り唄の切れにて、本舞臺へ來て

志津　三保平どの、こなさんばかり呑み込んで居ても、平常から口不調法な女。鈍な事でも云はにやアよいがの。

三保　ハテ、さう案じたものでもない。一體初手から云ふ通り、左衞門さまの今度の御病氣、京都の騒動何やかやで、お氣鬱から出た病かして、無性に女の奉公人をお抱へなされ、その中へ、お過ぎなされた奥様に、よう似た貴様が清見寺の、門前に居る事を、誰れか内證で申し上げ、それから云ひつかつたおれが役目。根が御病氣の事だに依つて、只殿様の御機嫌に、障らぬやうに上手も機轉も、持ち前にありさうなものだ。

志津　それ〳〵、兎角お氣に入つて、願ひの叶ふやうになれば、おれも仕合せ。何をするも男の爲だ。ちつとも早く御機嫌に、入るやうにしやれ。

りく　おやと云うて、わたしがやうな者が、如何に先の奥様に似たと云うて、お氣に入るやら入るまいやら、どうやら怖い、恥かしいものぢやなア。

三保　ナニ、生娘ぢやアあるまいし。みんな美味は志津平に、疾に賞翫させて置いて。

トおりくが尻を叩く。

りく　エヽ、何てんがうさしやんすぞ。

三保　ほんに殿様のお上がりだの。

志津　ハヽヽヽ。

りく　オヽ、嫌いなア。

ト恥かしきこなし。障子の内にて

貞世　姦しき高聲立て。參れ。

志津　ヤア、あの聲は。

三保　コレ、殿様だ。暫らく……け。

ト志津平、心得、下の柴垣へ小隠れする。

皆々　殿様、お目が覺めましたか。

貞世　腰元ども、障子を明けい。

ト唄になり、正面の障子上げる。此うちに貞世、羽織衣裳、病ひ鉢巻の形にて、褥の上に脇息にかゝり居る。この側に刀掛け。左右に、腰元三人、並よく居並び、

三保平、下へ下がり、その前に、おりく、こなしあつて扣へる。貞世、兩人を見て

貞世　それに居るは、誰れぢや。

三保　ヘイ、三保平めでござりまする。

貞世　して、その女子は。

三保　ヘイ、なにサ、御前樣でござりまする。

貞世　ナニ、渚ぢや、ドレ、顏を上げい。

トおりく、ウヂ／＼して居る。三保平、袖を引くゆゑ、是非なく少し摺り寄つてこなし。貞世、ヂッと見て

オヽ、渚ぢや／＼。ハテ、ようおぢやつたなう。遠慮なう、近う／＼。

三保　ソレ、お召しなさるゝ。お側へ／＼。

りく　有り難うござりまする。左樣ならば畏れながら。

ト貞世が側へ來る。

貞世　苦しうない。なんの恐れ。さてマア、聞いたよりは面ざし恰好、過ぎ行きし奥に其まゝ。フウ、三保平、よう召抱へて參つたなア。

ト餘念なき思ひ入れ。奥バタ／＼にて、富士藏、走り出て

富士　御前、これに入らせられまするか。縛め置いたる安積大膳、繩引切つて裏道より、逃げ失せましてござりまする。

貞世　ヤヽヽ、なんと。大膳久國獄屋を遁れ、逃げ失せしとな。ハテ、折惡う大道寺新左衞門は上京。追手の役目は誰れをがな。オヽ、若年なれども幸ひ、三保平が悴富士藏。コリヤ、其方は兼ねて武藝も心がける由。かゝる時節に手柄するは、武士たる者の望むところ。急ぎ追ひかけ討ち留めて參れ。

富士　畏まつてござりまする。目指すは慥か賤機越え。程は行くまい、ぼツかけて、討取つてお目にかけませう。

三保　イヽヤ、小腕に覺束ない。獄屋の縛め切る程の、安積大膳、なんとして。悴に替つて拙者めに、この儀は仰せつけられませい。

貞世　云ふな三保平。汝が骨柄、人に勝れて逞ましく、天晴れ勇氣に見えながら、刃物を見れば忽ちに、亂心いたす難病あり。それゆゑ賤しき中間奉公。せめて悴を侍ひにと、武藝を勵ます兼ねての聞え。さすれば汝は危ないもの。是非富士藏を遣はせサ。

三保　イヤ、憚りながら、それは一圖の御料簡。彼の下世話にも申す如く、其所が氣狂ひの水こぼさず。例へ刃物

を見たりとも、一心に討たうとなれば、よも仕負ふせぬ事はござりますまい。
富士　イヽヤ、主人のお指圖にて、私しへ仰せつけられたに、こなたをやつては卑怯になる。氣遣ひさつしやるな。たつた今、首引提げて瞬くうち。
　ト此せりふ云ひながら、花道の角へ來て
手柄はこの時。イヤ、まかしよとな。
　ト尻をからげ、一散に向うへ走り入る。三保平、伸び上がつて、これを氣遣ふこなし。
貞世　若輩なれども仕兼ねぬ富士藏。先づ安堵……不慮な儀で稀れ人へ不馳走。時に其方が名は、何と云ふぞ。
りく　ハイ、りくと申しまする。
貞世　フウ。りくとは好い名ぢや。俤し、側近う召仕へば面影も其まゝ。矢張り呼び馴れた、渚々。
りく　ハイ、なんとなりと、お呼びなされて、お目かけられて下さりませ。
貞世　お目かけられいでならうか。コリヤ、腰元ども、不機轉な者ぢや。さう付き張つて居られては、ナウ渚。
りく　ハイ／＼、モウ、これからは何なりと、私しが承りまするわいなア。
貞世　ハテサテ、氣の利かぬ。斯う云うても、まだ立たぬか。用がない。次へ行け／＼。
皆々　ハヽ、左樣ならば殿樣。
貞世　でも、四角四面な奴等ではある。
　ト合ひ方になり、腰元三人、奧へ入る。貞世、おりくを引寄せ
よう／＼此方の世界になつた。サア、これからは今の、お目かけられて下さりませいなぞと、二つ指を取揃いて、心なう物云うてもらはねばならぬ。マア、見たところが、手蹟は尋ぬるに及ぶまいし、琴はなるか。
りく　ハイ、モウ、ほんの覺えて居りまするた申すばかり。御意に入れまする と云ふやうな事ぢやござりませぬ。
貞世　イヤ、その卑下が奧床しい。して、歌はなるか。
りく　ハイ。
貞世　歌道がなれば、連歌蹴鞠、女子の茶なども、しをらしいものぢやて。
りく　ハイ／＼。
　ト挨拶に困る思ひ入れ。
貞世　武藝も少しは長刀小太刀、亂舞はどうぢや、舞もなるか。

りく　ハイ〳〵。
ト迷惑なるこなし。三保平、此うち、富士藏を氣遣ひ、
ウロ〳〵と向うを見て居る。
貞世　これはさて、何を云うてもハイ〳〵ぢやの。イヤ、亂舞で思ひ出した。この烏帽子狩衣は、先君足利義教公のお筐。
ト上に飾りある折烏帽子と狩衣を取つて
在すが如く朝夕に、君に仕ふる心にて、居間に飾つて今日まで、お傍に拜なせしが、思へば病中不淨の虞れ。暫らく別間へ。コリヤ三保平、御座を清めて招待いたせ。
ト側なる刀を取つて立ちかゝり
手討の成敗。覺悟なせ。
トすらりと拔いて振り上げる。三保平、これを見て、
ウムと悶絶する。おりく、恟り走り寄り
りく　ヤア、コレ、目が舞うてか、三保平どの。常の病と聞いたれと、こりやマアどうせう。コレイナウ、心を付けた三保平どの。奴どのいなう。
ト呼び生ける。これにて、三保平、むつくと起きて、
あたりを見廻し
三保　ハテナウ、おれは何しに爰へ來た。オヽ、それ〳〵、アレ〳〵、嫁入りぢや〳〵〳〵。
ト氣狂ひのこなしにて、立ち上がり
ハヽヽ、イヤ〳〵〳〵、一世一度の祝言に、こんな形では行かれまい。
トあたりをウロ〳〵見て、狩衣、烏帽子を取上げ
オヽ、幸ひ爰に好い襠裲、綿帽子も有り難い。
トこれより
上るり〽これを着ましよと云ふ儘に、しどろもどろに引纏ひ。
アレ〳〵、あそこに待女郎、君が待つてぢや。ドレ、行かうか。
りく　オヽけうと。何を見付けてキヨロ〳〵と。何所に誰れが居るぞいなう。
三保　アレ、あれが見えぬか。
りく　エヽ、何がいなう。
三保　アレ〳〵、家毎に飾る松飾り。
りく　エ、なんと。
〽先づ正月の壽は、上は九重、下は町家の裏小路、廻れ〳〵年の夜は、足を空なる行交ひも、曙告ぐる山まゆの、ぢつと笑顔に新玉の、年の初めの若夷、さて我が宿

に恵方棚、燈明上げて神棚あけて、妻諸ともに着衣始め、差向ひたる鏡餅、もちと云ふ名のめでたさは、金持ち家持ち子持ち娘、福大黒を見さいな。

りく　ホヽヽヽ、ほんにをかしい人ぢやなア。

三保　ヤイ〳〵〳〵、何がをかしい、法界悋氣。わしが殿御と花見に行くが、をかしいか。

〽羨やましうてなるまいぞ、主さんござんせと先に立ち、小褄からげてしな〳〵〳〵、すなり〳〵の歩き振り。

なんと見事かえ。美しう、咲いた〳〵。

〽咲いた櫻になぜ駒繋ぐ、ヨイナ、駒が勇めばヤレ花が散るぞいな〳〵。

アレ〳〵〳〵、駒さへ勇むぢやないかいの。それにお前はなぜ浮かぬ。エヽ、聞えた。今の唄が氣に入らぬか。イヤ、そんなら拍子でやつてくりよ。浮かせ〳〵、浮いたる物に取りては、鵜川の鵜舟に色が浮いて。

〽龍田川には紅葉が浮けば、吉野川には櫻を浮かし、桂川には筏を浮かす。

まだも浮かすは、瓢箪腰におッ付けて、鯰川へ飛び込んだ。

〽ぬるりと辷り、ぬるり〳〵〳〵、うつぼり〳〵浮いて來た、誰れも浮かれたかしのやつさ、コリヤ〳〵〳〵、エイ〳〵ヤツトサ、トチテン〳〵。

オッと待つたり。大事の殿御に引分かれ、トチテンどころぢやござんすまい。

〽あゝ戀しや、さるにても、又いつの世に逢ふべいぞ。

りく　ホヽヽヽ、女子だてらに、べいとは、なんぢや。形に似合はぬ奴どの。

三保　奴々。供先下馬先、下座切るべい。

〽振れ振れ〳〵振れ〳〵さ、しよんしよろさんまのはんなかさ、臺笠立て笠大鳥毛、アレハサテナ、アレハサテナ、供先片寄れすつ〳〵〳〵、姿詞のあやもなく、狂ひ亂れて伏し轉び、正體もなく見えにける。

ト浄瑠璃のうち、三保平、振りあつて狂ひ伏す。

貞世　女、見たか。興の覺めたる彼れが振舞ひ。難病とは云ひながら、思へば不便千萬な。

ト抜身を納める。これにて、三保平、むつくと起き上がり、キヨロ〳〵見廻し

三保　こりやア、アタ勿體ない、烏帽子装束。おれはどうして着て居た知らん。

ト云ひ〳〵、烏帽子装束を慌てゝ脱ぎ捨て

ハア、こりやア又、持病が發つたか。モシ、なんにもお慮外な事は致しませなんだか。

りく　イヤナウ、慮外の段ではない。拔身に遭うて正氣を亂し、殿様の前をも憚らず、そゞろ言云うてゞあつたわいなア。

三保　南無三。チエ、、御免なされて下さりませ。面目砂にまぶしました。

　ト頭を掻いて悄げる。

貞世　オ、、慮外も恥も辨まへぬは、生得病の業なれば、赦す〳〵。勝手へ立つて休息。

三保　テエ、、有り難いお詞。左樣ならば、暫く。

　ト花道へ來て

腰様越えは一跨ぎ。ソレ。

　ト身拵らへして、一散に走り入る。貞世、これに構はず

貞世　サア〳〵、渚、これへおぢや〳〵。これはしたり、どうぢや。さう堅うては、折角伽に抱へた今川左衞門が妾ではないか。但し、手を取らうか。

りく　エ、、畏れ多い。それへ參じまする。

貞世　ハテ、けうとい。サア〳〵これへ。

りく　ハイ。

　ト合ひ方になり、貞世の側へ來て

申し殿様、斯うお側へ召しますれば、わたしがやうな不束な者でも、末長うお見捨てなされぬお心で。

貞世　ハテ、初めからきつう、調べるワ〳〵。オ、、その調べると云へば、其方は琴もなると云やつた。病中の徒然、一手所望ぢや。彈いて聽かせてはくれまいか。

りく　オ、、わつけもないお望み。不調法な私しが爪音。お慰みにならいで、お氣の障りになりませう。

貞世　イヤ〳〵、それが氣の藥。コリヤ、誰ぞ琴を持て琴を持て。

奥で　畏りました。

　ト腰元、琴を持つて出て、おりくが前へ直す。

貞世　サア〳〵、一曲、是非に〳〵。

りく　ぢやと申しまして、拙ない爪音。

貞世　ハテ、卑下せずと、彈きやれ〳〵。

りく　ハイ。

　トこれより、おりく、琴にかゝり、獨吟琴の唄になり

琴唄獨吟〽假初めに、結ぶ妹脊の緣の糸、脊や二つに引分けて、卷けど解けど縒糸の、結ぼれ解けぬ二思ひ。

トこの文句のうち、おりく、琴を調べる。貞世、これに聞き惚れ、脇息に凭れて、そろ／＼眠る。下の柴垣より、志津平、窺ひ出て、ソレと目配せする。おりく、懐劍を抜き持ち、立寄る。貞世、身じろぎする。これにて、おりく、ハッと立退き、琴にかゝり、手に懐劍、片手弾きに琴をあしらひながら、立つて居る志津平、焦る思ひ入れ。この仕組みよろしく、矢張り獨吟にて

〽うしや隔てゝ山鳥の、おろの鏡の影さへも、つまに引かるゝ灯の火影、消えぬ名殘を狩人の、思ひは的にたつか弓。

ト双方この文句一杯の仕組みにて、トヾ志津平、窺ひ寄つて、後より、貞世へ切りつける。貞世、これに目覺まし、立廻りよろしく、志津平が刀を打ち落し、直ぐに引きつけ、捻ぢ据ゑ

貞世　誰そ參れ。

三保　ハッ。

ト花道より、三保平、富士藏に久國が切り首を提げさせ、立歸つて來て、この體を見て、ツカ／＼と切戸の内へ入る。

三保　忰富士藏、久國を追ひかけ

富士　即ち首討ち、立歸りましてござりまする。

貞世　出かした／＼。予が推量に違はず、若手ながら天晴れ器量備はる富士藏。褒美は今川譜代の忠臣、苗字を許して今日より、片桐才藏と名乘れ。手柄の樣子、家中へ吹聽。奥へ參つて休息せい。

三保　こは有り難き御褒美。富士藏喜べ。

富士　お主の御恩、身の面目、何この上のござりませうや。チエ、有り難うござりまする。

三保　喜びは理り。御意に任せて休息いたせ。

富士　ハッ。

トこなしあつて、勇ましく奥へ入る。

貞世　三保平、此奴不敵の曲者。今まどろみしうち狙ひ寄り、切りかゝらんとせしは仔細あらん。糺明して白狀。ソレ繩打て。

ト志津平を下へ蹴落す。

三保　ハッ。

ト手ばしかく捕り繩にて、志津平を縛しめ

稀代の狼藉曲者め。サア、有やうに仔細を吐かせ。

ト引据ゑる。志津平、こなしあつて

志津　聊爾さつしやるな。私しめは、今日召されし女が兄、

殿様まどろみ遊ばすうち、妹めが琴を止めましたは氣隨者。お側で叱るも不作法ゆゑ、脅しの爲の刀を御覽じて、お疑ひは迷惑。外に何にも仔細のある事ではござりませぬ。

三保　ヤア、陳ずるは不屆き。おのれが主人へ敵對は、妹めも胡散者。兩人ともに拷問する。女め、うせう。

ト立ちかゝる。

貞世　イヤ、待て〳〵。彼れは婦人、仔細はあるまい。其奴をキッと詮議いたせ。女はそれにて今一曲。三保平、急いで拷問なせ。

三保　畏まりましてござります。

貞世　女、なぜ彈かぬ。とく〳〵所望の琴を彈け。

りく　ハイ。

トまた獨吟になる。おりく、琴にかゝる。

〽惜しめど散らす花紅葉、風が嫉むか時雨の色に、憎やうつらふ仇心、元は浮氣で逢初川の、深うなる程哀れはせいて、越すに越されぬ人目の關を、忍ぶ恨みの遣る瀨なや。

ト此うち、三保平は志津平を引上げ、上の柱卷きの松へ吊り上げて拷問する。おりく、始終心遣ひして、しどろに琴を彈き納めるまでに、三保平、捨ぜりふにて、志津平を責め苛なみ、琴唄の止む時

三保　サア、苦しくば云つてしまへ。白狀すれば繩目を赦す。吐かさないうちは、どこまでも、命限り根限り。これでも云はないか。吐かしてしまへ。

ト吊り上げ吊り下ろし拷問する。志津平、苦しみに堪へ兼ね

志津　暫らく情に繩目を赦せ。

ト苦しみながら云ふ。

貞世　さてこそ白狀。責を赦せ。

三保　畏まつてござりまする。

ト志津平を吊り下ろし

サア、有やうに白狀しろ。吐かしやうが遲いと、この上に水喰はせても赦しはしない。

ト突き据ゑる。志津平、やう〳〵に眼を開き

志津　本望を達するまでと、包み隱すも苦痛に堪へ兼ね、白狀するワ。殘念ながら、某は元敵討、富士淺間の神職、大宮若狹と申す者。如何なる遺恨か四年以前、老鳥の森のあたりにて、親與太夫は情なや、今川左衞門貞世さまのお手にかゝり、相果てし砌りより、敵を討たんと付け

狙ひ、時を得て今日、入込む手筋も天の與へ、本意の時節と思ひの外、斯うなり果つるは運の盡き。疾く／＼首を刎ねられよ。この外仔細はござりませぬ。

ト立派に云ふ。貞世、始終を聞いて

貞世　ハテ心得ぬ。我れ一生に人を殺めし覺えなければ、汝が親も何者か知らぬ。定めてそれは人違ひ。

志津　そりや御卑怯な殿のお詞。いま眼前に某が首刎ねらるゝ期に及んで、ナニ僞はりを申さんや。フヽヽ、誠に尊きも賤しきも、命惜しまぬ者はなし。無道の君は世に長らへ、弱き者は命取らるゝ。口惜しい縛めだよなア。

トきつとせり詰めて云ふ。貞世、暫らく思案して

貞世　我が身に覺えなけれども、親の敵を狙ふ者。情なくその首討ちたりとも、末代卑怯の名を取らん事、本意ならず。三保平、彼れが縄を赦し、件の一腰を渡せ。

三保　畏まつてござります。

ト志津平が縄目を赦す。おりく、志津平、嬉しきこなし。

貞世　命を助け得さするからは、いま尋常に勝負して取らせんか、我が祖父耕基公より、代々傳はる今川の系圖、先達て紛失いたせしより、病氣に事寄せ、斯く本國へ引移り、武將を憚る私しの籠居。その上、先君義教公薨去あつて、未だお世継の沙汰にも及ばず、命を捨つるは不義不忠。さるに依つて我が名代、三保平に勝負させん。

三保　イヤモシ、拙者めは、御存じられた例の難病、刃物を見れば忽ち亂心。なんの役にも立ちませぬ。

貞世　フウ、その役に立たぬ者が、氣狂ひ水をこぼさずと、一心に討たうと思へば、仕負ふせぬ事はないと、ソレ、わりやア最前云うた。

三保　イヤサ、成る程……誠に左様でござります。

貞世　コリヤ／＼男の子、若狭とやら、いま三保平が勝負を決し、この場を切り拔け後日に來れ。その時は貞世が勝負して取らさう。また三保平は、主に仇するその下郎、隨分働らき討ち留めい。

兩人　すりや、我れ／＼にこの場の勝負。

貞世　双方互ひに手練と手練、必らず未練働らくな。コリヤ、新参の渚、其方は其まゝ、奥庭の紅葉を興に酒宴の伽。

りく　お相手いたすも今さらに。

貞世　ハテサテ、いらぬ心遣ひ。斟酌せずと、奥へ來い。

ト唄になり、貞世、こなしあつて、おりく、是非なく

これに付いて、奥へ入る。三保平、志津平、殘つて

三保　ほんに禍ひは口からと、迷惑な役目を受取つた。假初めながら命づく。志津平、わりや見事勝負をして見る氣か。

志津　おれが事より三保平、おぬしやア刃物を見ると氣狂ひ。その業喋しを、相手にする志津平では……と云つて助けても置かれぬ。不便ながらぶッ放して立退き、重ねて今川左衛門どのと、勝負をするわえ。

三保　フ、、、其やうに心安く切らるゝやうな、奴ぢやないワ。われが刀を抜き放すまで、コリヤ、この手を遊ばせて置きさうなものか。

志津　フウ、さう吐かしやア、どうかちつと骨があつて面白い。

三保　エ、此奴が〳〵。口は立派に明いた任せ。今その顎を叩きかくぞ。

志津　其らおれがこの兩手を、棚へでも上げて置くまいソ。

三保　果しのないせりふだ。キリ〳〵來い。

志津　われからかゝれ。

三保　イヤ、われから。

志津　われから。

三保　われから。

兩人　ドッコイ。

トこれより、三味線入りの賑やかなる鳴り物。立廻りあつて、双方立別れ、身拵らへのうち

三保　まだゞぞ。抜くな……まだゞぞ。

ト三保平、このせりふを云ひながら、志津平が脇差を抜かせまいとする。タテよろしくあつて、トゞ志津平、引抜いて打ちかゝるを、三保平、よろしく立廻り。志津平が持つたる脇差ともに腕首取つて、キッと見得。志津平、ギヨッとして

志津　ヤア、わりやアこの刃物が禁物ぢやアねえか。氣が狂はない。ハテ不思議な。

ト三保平、これに構はず、志津平が一腰を、ためつすかめつ、とつくと見て

三保　ヤア、この一腰は紛ひもなき、天國の作。フウ……ハテ、心得ぬ。これを所持する其方は何者。

志津　何者と聞いて何にする。

ト同じく一腰を抜いて

三保　志津平、これを見やれ。

ト志津平へ差しつける。志津平、その手を取つて、兩方組み合ひ

志津　フウ、こりやコレ同作の天國、しかも大小、さては兼ねて聞き及ぶ、父滿祐の讓りの二腰、

三保　幼なき時より別々と、鎌倉に育つて程隔たり、互ひに面は知らねども

志津　名は聞き及ぶこなたは、兄の赤松次郎則貞どの。

三保　其方は弟の赤松五郎則安か。

志津　絶えて久しき兄弟の

三保　名乘り合ひしも血筋の緣。

志津　不思議に揃ふ天國の

三保　拔かぬ刀も互ひの切端。

志津　兄とも知らず

三保　弟とも

志津　初めて明かす

三保　この場の名乘り。

兩人　危ない出合ひであつたなア。

ト兩人、一緒に一腰を納め

三保　斯く名乘りし上は、某が所存。兼ねて今川へ遺恨あれば、姿をやつし、先達て入込みしが、主人に油斷をさせん爲、刃物を見れば亂心すると僞はり、彼の天國をも先つ頃、人數を語らひ、某密かに奪ひ置く。

志津　さ、某も女房が、淸御前に似たるを幸ひ、近付つて今川左衞門を、最前討たんとせし所、見顯はされて出放題、敵討と云つたも僞はり。

三保　實に斯く兄弟心を合せば、この場の品を取繕ろひ、追ひ〳〵本意を遂せんは治定。其方は女房を連れ、一足も早く爰立退け。

志津　イヤ、左衞門討ち果せと、詞番ひし上からは、篭忽にこの場を立退けば、兄者人の身の上、氣遣はしい。

三保　そりや、某が病に依つて、取逃がせしと云へば濟む。汝は見咎められぬ其うちに、女房を連れて一刻も早く。

志津　然らば萬事、追つての密談。

三保　出逢ふ所は興津の濱。

志津　重ねて再會。兄者人。

三保　弟、行け。

ト管絃になり、兩人よろしくあつて、志津平は下座へ、三保平は枝折り戸の外より欄干の下へ入る。障子の内にて

貞世　沖波々々。近う參れ。

ト矢張り管絃にて、障子上がる。沖波、下座より出て
來り

沖波　御用でござりまするか。

貞世　病中とは云ひながら、武將義教公の御跡目、勅使を以て再三のお尋ね。評定の間、引籠りても居られず、今より直ぐに上洛せん。供の人數、用意いたせ。

沖波　こは心得ぬ仰せ。俄かに上京遊ばすには、御大切なるお家の系圖なうては、御所への仰せ分けられ、御思案ばしあつての事でござりまするか。

貞世　ホウ、その系圖は計らずして、不思議にも我が手に入つたり。三保平參れ。

三保　ネイ。

ト欄干の下より出て

拙者をお召しに御用かな。

貞世　おのれが盜み所持いたす、今川の系圖、これへ出せ。

三保　エ。

貞世　イヤサ　系圖を出せと云ふ事。

三保　思ひも依らぬ殿のお詞。徒士中間風情の三保平が、大切なお系圖、盜んで何に致しませう

貞世　コリヤ〳〵、三保平、最早あらがふ所ではあるまい。隱す程猶、罪が重い。早う系圖を。

三保　イヽヤ、存じませぬ。知らない〳〵と申すに、この奴めが慥かに盜み取つたと云ふ、なんぞ證據がござりますかな。

赤津　オヽ、その證據、卽ちこれに。

トまた管絃になり、下座より、志津平、上下衣裳、大小の形。おりく、襠裲衣裳に改めて出て來る。三保平、これを見てギョッと思ひ入れあつて

三保　ヤア、心得ぬ。今までは下郎と思ひしに、志津平夫婦が、この體は。

志津　ホウ、驚ろきは尤も。某暫らく匹夫となつて、志津平と呼びしは、武將足利義教公の公達、義若君を守護の爲。

りく　自ら事は、梅津掃部が娘、國町と云ふ者。義教公のお情受け、身に宿したる義若君、都は讒者の巷を避け、卽ち當國庵原村に、忍び〳〵の御養育。

志津　まつた最前其方の弟、赤松五郎と名乘りしは、猶以て僞はり。誠は今川譜代の忠臣、荒川藏人重行とは我が事。誠、汝が弟こそ、最前追ひかけ首討つたる、安積大膳久國が實名、赤松五郎則安とは知らざるか。

貞世　有り名は呼ばず氏を替へ、武將を謟らひ、義教公を害せしは叛逆。

三保　ヤヽヽ、すりや大膳久國は、幼少にして別れ、顔も知らぬ弟赤松五郎なりしか。チエヽ、計られたか、口惜しい。

ト思ひ入れ。

貞世　ホウ、さこそ〳〵。先達て其方、下郎となつて入込みしより、合點ゆかぬ面魂ひと、心を付ける折柄に、義教公薨去のその砌り、共に失ひたる當家の系圖。

志津　さてこそ根强き企みあらんと、我が君汝をお疑ひ。某先年お家を出て、公達守護のその爲に、庵原村に忍ぶを幸ひ

りく　似ても似付かぬ自らに、過ぎ去り給ふ渚さまに、似たと云うたも手段の一つ。

志津　夫婦と見せてお家へ奉公。我が君へ仇ある體をなし、自然と贋名名乘らせし、天國のこの一腰こそ、安積大膳久國が、隱し持つたる仕込みの一腰。

沖波　いつぞや即ち今泉の民家にて、召捕り歸る大膳久國。拷問なして委細の白狀。

貞世　兄弟互ひに面を知らず、天國の兩腰、滿祐が血筋の證據と、明白なる訴へに依つて、手段を廻らし、斯く顯はれたる系圖の盜賊。

志津　最早遁がれぬ。イザ、疾く〳〵。

沖波　名乘つて系圖を渡すまいか。

ト三人、キッと詰め寄る。三保平、ヂリ〳〵口惜しき思ひ入れ。

三保　チエヽ、口惜しや。僅かの謀り事を頼んで、聰明叡智の謀り事に、落入りし我が愚さを、悔んで返らぬ事ながら、系圖を奪ひ、今川家に敵對する事、非義ならぬ一通り、云うて聞かせん。元來我が父赤松滿祐、具平親王の後胤にて、代々播州白旗の一城、弓矢を穢さぬ勇ありしも、大内義弘謀叛の時、軍勢催促に從はざる越度。今川左衞門貞世が父、駿河守國範に、武將の御前を退けられ、探題職の願ひも叶はず、父は切腹、某は、隱岐の國に流罪せられ、赤松の舊領、剩へ探題職まで、今川左衞門貞世に賜はる。その鬱憤止む時なく、何卒當家を亡ぼし、赤松の家取立てんと、いろ〳〵に企て系圖を奪ひ、かゝる蟄居の身をなせしも、我が大望の成就の爲。下郎となつてこの家へ奉公。その甲斐なく運盡きて、今顯はるゝと雖も、斯くまでに心を碎きし系圖の一卷、やわか此ま

ま渡さうや。體に息のあるうちは、龍の顋の玉同然、赤松次郎則眞が、所持なす一卷、不敵にも、ならば手柄に取つて見ろやい。

ト則眞、キッと思ひ入れ。

志津　愚かや則眞。この期に及んで未練にも、渡さぬ系圖とあらば、荒川藏人、取つて見せう。

三保　小癪な。われが。

志津　赤松、覺悟。

ト立ちかゝる。

貞世　ヤレ待て藏人。汝が手を下ろすに及ばず。者ども參れ。

ト花道より、小倉臺八、清瀧三平、高尾權藤、龍田高平、揃ひの捕り手の形にて、バラ／＼と出て

四人　赤松次郎、腕廻せ。

ト取卷く。

三保　ヤア、事たかしきうづ虫めら。片ッ端から撫で切り。この世の暇。目に物見する。觀念なせ。

四人　赤松、捕つた。

トかゝるを、則眞、立廻りよろしく、四人を追ひまくりて、下座へ入る。

志津　御覽あつたか我が君。小敵とても侮らぬ古語の戒め。稀代の曲者。

りく　名に負ふ赤松、この上に

沖波　討ち洩らしてはお家の瑕瑾。

貞世　如何にも、手段は計らひ置きし、兼ねての手配り。藏人には組子を下知し、奥庭傳ひ。國町、沖波、續いて參れ。

トどん／＼になり、貞世、先に志津平、身拵らへ凛々しく、おりく、屋體、付いて奥へ入る。チョン／＼にて、障子屋體を東へ引いて取る。淺黄幕切つて落す。

舞臺、一面に紅葉の庭、日覆より吊り枝、向う中二階まで打抜き、誂らへの通りの紅葉の林、眞中に岩組、これへ高欄附き綺麗なる紅葉の反り橋。この上に、三保平、肌脱ぎ、繩襷、大刀にて拔刀の立ち身。臺八、三平、權藤、高平、突棒刺股にて、これを取卷きたる見得。矢張りドン／＼、貝鉦法螺、物凄く、舞臺先よき所まで押出す。

ト三保平、キッと思ひ入れあつて

三保　しや、しをらしきうんざいめら、貝鉦太鼓こと／＼

しく、取巻く庭庭。片ッ端から血汐の紅葉だぞ。覚悟なせ。

臺八　覚悟は兼ねて人數の手筈、紅葉々々の奥庭へ、もみ出したる一番手。

三平　清瀧三平初めとして、屈強一の若者に。

權藤　若葉の色を染め替へて、高尾權藤が武者振りに。

高平　命もまゝの紅葉は一木、一際目立つ龍田の高平。

臺八　小倉臺八今一度、御幸冬木と枝々の、散らせないうち観念して

四人　赤松、腕を廻せエ、。

三保　何を小癪な。

四人　ドッコイ。

　トこれより、賑やかなる鳴り物にて、四人を相手に大タテよろしくあつて、トゞ切りまくられ、四人、花道へ逃げて入る。矢張りドン〳〵貝鉦にて、三保平、抜身を引下げ、上なる井筒に足をふんがけ一息つく。この時、奥より、貞世、志津平、出て来て

貞世　ヤア、云ひ甲斐なき者どもが働らき。曲者彼奴に息つかすな。

志津　仰せにや及ぶ、手に餘らば屈強の組子、一騎當千の者こそあれ、呼び出して只今、召捕りまするでござりませう。

三保　ヤア、事をかしや。何奴なればぬきん出て、某に手かけんもの。恐らく日本六十餘州、天が下に覚えにない。

志津　オヽ、その組子は兼ねてより、貞世公の御賢慮用意。イザ〳〵急いでこれへ。

　ト掲げ幕にて

富士　畏まつてござります。

　ト誂らへの鳴り物になり、花道より、富士藏、小手、脛當、はれ襷、大小、鉢巻の凛々しき形にて、ツカツカと出て来る。三保平、これを見て、悦り思ひ入れあつて

三保　ヤア、すりや一騎當千と名乗りし、捕手は倅富士藏。

　ト仰天する。富士藏、こなしあつて

富士　最前我が君貞世さま、苗字を賜りお側近く、召遣はるゝ片桐才藏、主君に敵對ふ赤松次郎、搦め捕れよとの主命に、御恩を請けし我れなれば、容赦は致さぬ。父さま必らず恨みに思はず、イザ尋常に。

　ト立ちかゝる。三保平、思ひ入れあつて

三保　どちらが討つとも

富士　討たるゝとも
三保　勝負は互ひの運次第。
富士　赤松次郎。
三保　イザ。
富士　イザ。
三保　イザ。
　トじり／＼と詰め寄り立廻り。
貞世　ヤア、卑怯なり則貞。廣言にも似合はぬ猶豫の體。
志津　何ゆゑ富士藏を切らぬぞ。
貞世　サア、討て。
志津　切らぬか。
貞世　討たぬか。
志津　フ、、、ハ、、、、。
貞世　流石恩愛。
志津　未練の奴の。
　ト此うち、三保平、幾度か富士藏を切らうとして、拔身を振上げ、思ひ直して又振上げ、このタテ二三度よろしくあつて、トヾ拔身を捨て、どつかと座し
三保　チエ、、情ない血筋の罠。地を走る獸、空を翔る翅まで、子を憐れむは親の道。百萬騎の強敵も、切り拔けんとは思へども、忰を打つべき刃はない。とても遁れぬ我が天命。サ、、立寄つて繩をぶて。
　ト我が手に腕を廻して思ひ入れ。
志津　富士藏、繩打て。
富士　ハツ。
　ト繩捌きして、三保平へ立ちかゝらうとして
如何に主命なればとて、子として親にかける繩。チエ、、勿體ない身の冥加。
　トたぢ／＼として
ヘイ。
　ト泣き落す。三保平、チツと見て
三保　ヤア、未練な富士藏。わりやこの親へ繩かけねば、御恩を請けし主命に背く。
富士　サ、、それはな。
三保　イヤサ、忠義が立たぬうろたへ者めとは云ふものゝ、道理々々。我れこそ不覺にこの年月、今川貞世は父の仇、時節を以て報はんと、うつら／＼と現在敵の祿を食み、その恩を身に脊負ひし忰。誠や諺に、山賤の焚木を負へる花の影、その樣賤しき我が心。形に咲かせても、これまで祿を喰ひたる、御身に如何で刃向はん。コリヤ忰、

汝が忠義は誠の道。イデ〳〵縄にまさりたる、手柄の一
品、これ受取れ。

ト隠し持つたる系圖の一巻を取出し

足疾鬼が佛舎利より、取り得難きこの一巻。主君へ差上
げ忠義に致せ。

ト富士藏へ渡し

藏人、お見やれ。悴が忠義、これにて恩義は報へども、
現在敵もエ、討たず、禄に引かるゝこの腸、摑み出して、
オ、それよ。

ト刀を取出し、腹切らうとする。貞世、ツカ〳〵と立
寄り、刀を踏み落し

貞世　ヤア、切腹とは叶はぬ事。汝は正しく隱岐の國の流
人、遁れ歸りし罪を糺し、法に行ふ。これ國政。さりな
がら、その逞しき性根を、善心に基き、君に仕へば天晴
れ忠臣赤松の家を引起す、功を立てぬは、殘念々々。

三保　フウ、善を以て功を立てるとは。

貞世　ホウ、それこそは、神代より傳はる三種の寶。未だ
南朝吉野にあつて、宸襟穏やかならざるこの時、汝彼の
地へ立越えて、奪ひ取らば朝廷へ忠臣。この儀に心付か
ざるか。

三保　イヤ、その儀も某が、配所を遁がれし重罪の、掟
を破るも本意にあらず。

貞世　藏人、富士藏に縄打ち、禁獄いたせ。

三保　ヤ、なんと。

貞世　親子は一體今よりは、彼れを赤松次郎と名乘らせ、
禁獄さすれば掟は立つ。家來の三保平、構ひない。

三保　エヽ、有り難きお計らひ。

貞世　富士藏、異議はあるまいかな。

ト下座より、義嗣公、出て

義嗣　そりやアならない。今川貞世、没收せられし赤松よ
り、この義嗣への返事はどうだ。

貞世　その御返答は義若君、急いでこれへお供いたせ。

りく　畏まりましてござりまする。

ト奥より、おりく先きに新兵衞、以前の形にて、義若
君、差扶中啓を持ち、新兵衞抱き、沖波付き添ひ出て
來る。

貞世　四海の武將尊氏より、七代の正統、足利義勝公、お
世繼定まるからは、義嗣どのには東福寺に於て、矢ッ張
り元の御出家堅固。

義嗣　すりや、この小兒が義教どのゝ。

りく　お胤を宿す自らは、梅津掃部が娘の園町。

志津　庵原村にこの年月、守護なす藏人重行。

沖波　御代しろし召す上からは

新兵　直ぐに內裏へ繼目の參內。

義若　左衛門貞世、嬉しいぞよ。

貞世　有り難き御諚。一刻も早く赤松次郎は、三種の神寶。

三保　取り得て歸る、時節は直ぐに赤松再興。

貞世　云ふにや及ぶ、同席に、肩を並ぶる一國一城。

三保　その時こそは父滿祐が仇討、左衛門貞世と誠の勝負。

志津　イヤ、その時は荒川藏人、主人に替つてお邪魔いたす。

三保　何を小癪な。再會には、首を洗つて今川貞世。

貞世　後日の參會、義は鐵石。

三保　先づそれまでは

貞世　彥次郎則泰。

三保　荒川藏人。

貞世　方々。

皆々　さらば。

　ト何れも居並びの、見得よろしく

貞世　先づ今日はこれぎり。

ト打出し。

赤松蟾兎見島臺（終り）

めでたく幕

時代狂言愛護若

花薗の袖競にお主は大き刃の御太刀拔さしならぬ梅丸が鎌田又八と對決に及はぬ願ひも雲井御前が忠孝の婦徳傳

日吉山王　さるわかの造營

世話趣向千兩幟

吉原の星合に向ふの人と呼子鳥の香合明て云はれぬ岩川が鐵が嶽と立引に胸あはねども錦木太夫が拳酒の取組附

淺山鐵山が皿屋敷のむかし〳〵蟲の音凄き月の夜頃妹が姉の敵討名乘つて勝負を信濃の名所

けいせい鏡臺山

榮堺町

四番續



初演の繪本表紙

けいせい鏡臺山

第一番目三建目

二條館の場
梅ヶ鼻の場

役名──幸崎宰相賓道卿。二條愛護の若。同姉、雲井御前。同下部、早苗之助。御嶽惡五郎高貞。明石平馬。神崎岩藏。鎌田又八秀春。三上彌太六。燒物師藤兵衛。高階彈正景連。腰元、松ヶ枝。荒木左衛門近國。白川六郎國則。青山妹、八汐。矢橋龍左衛門。黑澤軍八。庄屋、杢作。鹽屋村娘、お禮。同、お瀧。同、お松。同、お市。同、お政。同、お菊。船瀨娘、お照。青山兵庫之助兼光。

本舞臺、三間の間、一面に練り塀、内に寶藏を見せ、爰に明石平馬、神崎岩藏、外二人、忍びの形にて内を窺ひ居る。御嶽惡五郎高定、ぶッつり前髪にて同じ忍びの形。唐鞍を引ッ抱へ、塀を切り破り出かゝり居る。忍び三重、時の鐘にて幕明く。

四人　まんまと寶は。

惡五　上首尾々々々

ト舞臺へ出て

高階彈正景連どのゝ頼みに依つて、忍び込んだる二條の館。寶藏の壁を穿つて、二つの寶を尋ねしに、刄の太刀は早、先達て何者か奪ひし樣子。いま一種の天の唐鞍、盗み取つて、まッこの通り。

平馬　すりや、刄の太刀は疾に紛失。併し、どの道紛失すれば、高階どのにはさぞ滿足。

侍一　今日この館へ勅使の入來は、二條藏人清平が、死後の跡目は愛護の若へ。

侍二　家相續のその折柄、禁庭より預かりの、二つの寶が無い時は、愛護の若は縛り首。

岩藏　後へ廻つて彈正どのから、その唐鞍を差上ぐれば、所領は殘らず景連どのへ。

惡五　その時いまの褒美は悉皆。それ樂しみに、夜明けぬうち。

皆々　跡白浪と、ふけようかえ。

ト小太鼓の樂になり、惡五郎先に四人、花道へかゝる。向うより鎌田又八秀春、赤面、柿の上下にて、三方へ日吉の板札を載せ、持ち出て、花道にて行き逢ひ、キッと思ひ入れ。惡五郎、悔りする。四人も氣味惡さうに舞臺へ立ち戻る。又八、皆々を押へて來り、四人を撲り倒し、逃げようとする惡五郎が鐺を取つて、しやんと見得。鳴り物かすめて打つて居る。

又八　まだ明けやらぬ東雲に、鎌田又八秀春が、春日山王權現へ、愛護の若のお身の上、祈念を籠めて歸りがけ、五人一座の黑出立ちは、振られた客の早歸りと、よくよく見りやアおやつかな、正しくお家の重器の一つ、天の唐鞍。黑い目にかゝつた、うぬらは不運だと吠え面搔くであんべいが、法の功德に助けてやる。鰒のめぞつこめら、唐鞍渡して、失くなるまいか。

惡五　エ、、忌々しい。どうで誰れぞが目にかゝり、曲者立たうであらうとは、思ひの外に其方から、命を助けてくれるのは、忝ないがこの一品、渡す事はマアならぬ。

平馬　いらざる邪魔立てしようより、この場を見ぬ顏すればよし。

侍一　達つて吐かしやア此方から、うぬが骨に相場を立て。

侍二　五輪五體を我れ〳〵が、寄つてたかつて切り刻み

岩藏　荒い憂目に遭はするが、邪魔立てせずとお侍ひ。

五人　通さつしやい。

又八　ハヽヽヽヽ、あんまり出づら早々から、イデ物見せるが氣の毒さに、助けてやれば死神の、たかつ足らぬか死急ぎ。望みの通り秀春が、命を取つてやるべいが、マア唐鞍を。

惡五　イヤサ、ならない。

ト立廻りにて、又八、手をかけるを振り切つて

ソレ、合點か。

ト四人、又八が腰に取りつき

四人　早くこの場を。

惡五　オヽ、さうだ。

ト唐鞍を引ッ抱へ、バタ〳〵にて向うへ逸散に入る。

又八　大切なるあの唐鞍を。

ト四人を投げ退け、行かうとする。後から四人一度に拔き連れて切つてかゝる。立廻り。どつこいととまる。大太鼓入りの鳴り物にて、四人を相手に又八、大まくしの立廻りになり、手頃なる松の木を引ッこ拔き、四人を一度に叩き据ゑ、松の木にて押へ、キッと見得。

カケリになるとこの道具ぶん廻す。

木舞臺、三間の間、向う一面の御館、御殿金襖極彩色、欄干築込みとも結構に仕立て、舞臺の上下柴垣、石の手水鉢、よき所に猿を書きし衝立あり、爰に高階彈正景連、すりはがし、上下衣裳。三上彌太六、上下衣裳にて燒物師瀨戸藤兵衞、木綿やつしの形にて、小さき箱を抱へしを引きつけて居る。管絃にて道具とまる。

藤兵　モン〳〵、お侍ひ樣、こりや私しを、何となされます〳〵。

彌太　何とするとは、今日お勅使のお入りの館へ、見馴れぬ町人。して、其方は何者だ。

藤兵　ハイ〳〵、私しは西の京に居ります燒物師、瀨戸藤兵衞と申します者でござりますが、先達て愛護さまより、水差のお誂らへが出來上がつても、お人も參らず、どうした事と存じますれば、館の殿樣御死去とやら。大方今日は御法事も濟んだ時分と、御覽じませ、持參いたしてござります。

景連　何と申す。すりや、其方が噂に聞いた、陶物造りの藤兵衞とな。

藤兵　左樣でござります。

ト景連、思ひ入れあつて

景連　某も幸ひな處、ちと其方へ誂らへたき品がある。

藤兵　そりや有り難うござりますが……何ぢややら、あんまり心の善ささうにもないお侍ひ樣。マア、ちよつとこの水差しを。

ト奧へ行かうとする。

景連　藤兵衞待て。

藤兵　ハイ〳〵。

ト氣味惡さうに下に居る。

彌太　其方はあなたを何人と思ふ。愛護の若の叔父君、高階彈正さまだぞ。われの細工が御意に入れば、その身の仕合せ。

景連　用事の筋を云ひ付ける。それまでその座は動かさぬぞ。

藤兵　これは又迷惑な。

景連　コリヤ藤兵衞、近う〳〵。

彌太　ズツと參れ。

藤兵　イエ、モ、これが勝手でござります。

彌太　さう云や、われを。

ト藤兵衞を引ッ立てるを、藤兵衞、箱を抱へて

藤兵　アヽ申し、割れ物でござります。

ト此の時向うより

呼び　勅使

トこれにて景連、彌太六向うをキッと見て

彌景　早、お勅使の御入來とな。

ト云ふうち藤兵衞、ちやつと振り切り

藤兵　一昨日お目にかゝりませう。

トついと下座へ逃げて入る。二人あと見送り、思ひ入れあると、下がり葉になり、向うより、辛崎宰相資道卿、冠り裝束にて笏を持ち、後より仕丁大勢、朱の傘をさしかける。後より荒木左衞門近國、上下衣裳にて付き添ひ出て、花道にとまる。下座より二條愛護、兒髷、振り袖、刺貫の形にて中啓を持ち、白川六郎國則、上下衣裳にて付き添ひ出る。舞臺の二人もよろしく出迎へ

景連　當今よりの勅使として辛崎宰相資道卿。斯く申すは二條の叔父、高階彈正景連。

愛護　藏人清平が長男、愛護の若。

六郎　その他譜代の近臣ども。

左衞　お出迎ひとして館の執權、荒木左衞門近國、路次の警衞仕つてござります。

宰相　愛護の若へ禁庭より、仰せ下さる勅諚の趣き、それにて演舌致すであらう。皆々出迎ひ、大儀にこそあれ。

左衞　資道卿には、先づ／＼あれへ。

皆々　お通り下されませう。

トまた下がり葉になり、皆々舞臺へ來り、宰相、上座、皆々それ／＼に住ふ。

宰相　勅使。

皆々　ハッ。

ト平伏する。

宰相　二條の藏人逝去の後、幽回の忌も早滿ずれば、今日改め二條家へ、預け置かるゝ刃の太刀、天の唐鞍檢分の上、愛護の若へ家督の儀、相違なく下し置かるゝ勅諚の使ひ。右の趣き、とくと承知いたしてよからう。

愛護　委細有り難く、承知いたしてござります。

景連　愛護の若は申すに及ばず、連なりまするす彈正景連。

左衞　臣等に至りますまで、この上もなき仕合せ。天機よろしう資道卿。

皆々　奏聞願ひ上げます。
景連　それに付けても雲井御前、現在姉たる身を以て、この場にも在り合さず
彌太　大方いつもの琴三味線か、例の御[illegible]でござりませう。
愛護　ア、イヤ〳〵、勅使のお入りに姉君様、何とて遊興遊ばされんや。定めしこれへお出でなきは、御饗應の品々を、お指圖でがなあらう。
左衛　憚りながら叔父上様、申さばこれはお家の浮沈。表立つたる儀でござれば、女儀の要らざる御采配と、それゆゑ控へなさるゝと見えました。
ト心遣ひの思ひ入れ。
景連　イヤ、荒木の左衛門、さうでない、藏人逝去のその砌り、愛護の者は弱年ゆゑ、寳藏の鍵は雲井の前が預かり。其方も聞く通り。すりや、二品の寳、資道卿へ御検分に入れる今日のこの席。差扣へて居て濟まうと思ふか。何は兎もあれこれへと申せ。
彌太　畏まつてござります。
ト立ち上がる。皆々心遣ひ。御簾の内にて
雲井　月花もなくて酒呑む獨り哉。
皆々　あの聲は。姉君様。

雲井　雪はなくとも、御簾を巻きや。
ト唄になり、御簾巻き上げると、雲井御前、二つ髷、裲襠衣裳にて褥の上に座し、脇息にかゝり、杯を持ち居る。腰元松ケ枝、銚子を持ち扣へて居る。[illegible]らしあり、上の方に冠り臺に冠を載せ、黒塗りの蒔繪の裝束箱飾りあり、これへ神酒長熨斗据ゑてあり
愛護　姉君様。
皆々　勅使のお入り。
雲井　なんぢや、猪口にせい。イヤ〳〵、猪口より矢ツ張りこの杯。併し、オヽ、そこにいつものわしが相手の彌太六。サヽ、爰へ來て合ひしてたも。
ト彌太六、術なき思ひ入れ。
松枝　モシ、御前様、今日は吉日とて、禁庭より跡目の御勅使、あれへお入りでござります。
雲井　何と云やる。跡目の銚子が替つたとか。ドレ、そんなら、もう一つ呑まずばなるまい。
左衛　アイヤ、雲井どの、如何いたした儀でござります。寳検分いつは兎もあれ、今日は大切なるお家の定まり、愛護さまには、それに飾りし淸平公、首尾よく濟めば、お冠り裝束を付けさせられ、資道卿と直に御參内。その

お形見へ遠慮もなう、御酒宴どころぢやござりますまい。ちとお嗜なみなされませい。

雲井　これは〳〵、御家老樣の御意見。成る程、爰には過ぎ給ひし、父上樣のお冠り裝束。ほんにこりや、爰で酒呑んだら、父上がさぞお叱りなされてあらうなう。

景達　ヤア、性根を付けて雲井御前、これへ參つて資道卿へ、御饗應申してよからう。

雲井　さう仰しやるは叔父御樣。委細畏まりましてござりまする。

ト手を突いて鹿爪らしく云ふ。合ひ方になり、始終生醉ひの思ひ入れにて、松ヶ枝、介抱しながら下へ下りて來る。

愛護　姉上樣、資道卿へ御挨拶。

雲井　合點ぢや〳〵……これはあなた樣には、ようこそお出で遊ばされた。早速ながら自らがこの杯。憚りながら上げませうかいな。

ト杯を宰相へさす。松ヶ枝、心遣ひして袖を引く。皆々氣の毒な思ひ入れ。

宰相　イヤこの資道、九獻は一向用ひ申さぬ。

雲井　アノ、上がる所では上がるでござりませうがな…この雲井は幼ない時、云ひ號けの菊地左馬之助數直さま、赤松家と供に謀叛とやらで御生害。それから兎や斯う云ふお方があつても、とんと夫は重ねぬつもりでこの切り髮。それゆゑ浮世の樂しみは、月にも花にも酒を友。ドレ、お勅使樣がお嫌なら、も一つ重ねて、叔父君さま、この杯上げますぞえ。

景達　大切なる勅使へ對し、失禮至極。骨肉の弟、愛護が家督定めの今日の日に、醉ひどれて事が濟まうか。

愛護　姉上樣、父上逝去の嘆きに引替へ、今日の勅使は家の喜び。

左衞　何卒醉をお醒ましあつて、勅使の饗應。モシ、あなたの無禮は、愛護さまのお身の上にかゝりますぞや。

松枝　これまでは一吸も上がらぬ酒。どう云ふ事にやこの程より。

六郎　これと云ふのも側から勸め、惡い事には染み易く、席をも分たぬ御行狀。

四人　チエ、、お情ない、お心ぢやなア。

雲井　ア、、コレイナウ、折角面白う醉うて居る者に、野暮らしい酒の意見。措いてたも〳〵。

景達　ヤア、この期になつて雲井の前へ、酒の意見しよう

よりは、資道卿へちつとも早く、刃の太刀、天の唐鞍、御檢使に與へてよからう。

愛護　委細畏まつてござります……近國、寳物持參いたせ。

左衞　ヘツ。

ト　この時向うバタ〳〵にて、二條の下部早苗之助、奴にて走り出て

早苗　一大事が出來いたしてござります。

左衞　一大事とは氣遣はしい。近う參れ。何事ぢや。

早苗　只今お庭へ參りしところ、御寳藏の壁を毀ちござるゆゑ、これはと吟味いたせしところ、大切なる刃の太刀、天の唐鞍二品とも、紛失いたしてござります。

ト　皆々悄り思ひ入れ。

愛護　すりや、大切なる刃のお太刀。

雲井　アノ、唐鞍まで。

ト　思ひ入れ。

皆々　紛失せしとか。オヽヽ。

ト　驚ろく。

宰相　禁庭より預け置かるゝ、寳紛失なす時は、愛護の若へ跡目も叶はず、それのみならず身の上に……ハテナア。

ト　思ひ入れ。

六郎　ソレ。

ト　駈け出す。

左衞　白川、何れへお行きやる。

六郎　打捨て置かれぬ寳の紛失、その曲者を引ッ捕へて。

左衞　コリヤ待て。

六郎　なぜ留め召さるゝな。

左衞　寳を奪ひ取つたるは、定めて夜半の闇紛れ。明け放れたる今この時。盜賊がウカ〳〵居らうか。

六郎　でも、勅使の御前へ檢分に入れざる時は、お家の大事、草を分つて二品を。

彌太　詮議と駈け出す國則どの、日本國を經巡らば、日數も凡そ三年越し。それまで勅使がべん〳〵と、このお館にござらうか。

六郎　さは云へ盜賊詮議して。

景連　イヤ、その盜賊は知れてある。

六郎　なんと。

ト　立ち戻る。

愛護　叔父君樣、して盜賊は。

皆々　何者でござりまする。

景連　彌太六、早苗之助に繩を打て。

彌太　心得ました。

ト早苗之助にかゝる。早苗之助、恫りして、立廻つて彌太六を投げ退け

早苗　こりや彈正さま、何ゆゑ下郎に。

景連　何ゆゑとは寶の盜賊、尋常に繩にかゝれ。

早苗　この下郎を盜賊とな。

景連　ヤア、盜人猛々しい。餘人の行く事叶はぬ奧庭へ、おのれが忍んで二種の、寶を盜みその科を、人に塗らうと紛失を、注進したであらうがな。

早苗　これは又迷惑千萬。成る程、餘人の參らぬ奧庭へ、今朝掃除は下郎が役目。折節昨夜は紙帳の中、蚊と蚤に責められて、寐られぬ儘に明け六ツの、鳴るのを待つて朝直ぐに、目を擦りながら奧庭へ、參りかゝつた足許へ、どつさり落ちた藏の壁。なんでも盜人捉まへてと、見ればニつのお寶紛失。南無三方と、その足で、直ぐにこれまで御注進。毛頭この身に盜賊の、覺えはちつともない奴。滅多な事をなされますな。

景連　口賢く吐かしても、その云ひ譯は暗い〳〵。骨を拉いで拷問なすが、それでも在所を吐かすまいか。

左衞　イヤ、彈正さま、見ましたところが、この下郎め、よもや左樣の盜賊は……こりや外にキッと盜賊が。

景連　ムウ。して、又、外に盜賊を、近國、知つてお居やるか。

又八　その寶の盜賊は、鎌田又八秀春が、お目にかけるでござりませう……盜賊めら、うしやアがれ。

ト大太鼓のサラシになつて、向うより、又八、大繩にて四人を縛り上げ、繩先を引ッ擔いで出て、直ぐに舞臺へ來り

今朝日吉の戻りがけ、古風な出立ちの盜人めら。お家の重寶唐鞍を、盜んで行く道、某が、出合ひ頭に捉へるうち、一人素早くお寶を、奪ひ取つて逃げ失せたれば、殘りは十把一からげに、束ねて參つた。叔父御樣、斯う盜人が出ましても、早苗之助に疑ひがござりますかな。

景連　成る程、斯く盜賊の出る上は、この下郎めに疑ひは晴れた。

早苗　すりや、奴めが身の明りは。

彌太　達てと云はれぬ四人の盜賊。

愛護　秀春、とくと吟味を遂げい。

左衞　金銀に目をかけず、お家の寶を奪ふ曲者。こりや賴み手がなけりやア叶はぬ。彈正どの、なんと左樣ぢやご

ざりませぬか。

景連　イカサマ。

六郎　鎌田どのゝ誠忠にて、寶出づれば上なき働らき。

松枝　雲井さまにも、お心強う思し召されますわいなア。

雲井　寶の行くへが知れぬ時は、愛護の若より差當り、鎰預かりの自らが難儀。アヽひよんな事ぢやと思うたら、酔もさつぱりその所へ、鎌田がしかも盗賊を、たんと連れて見えたので、もう大船に乘つた心。ドレ、前祝ひに、サア〱、ついでたも。

松枝　アレ、皆様のお心遣ひ　もう、お酒はお止めなされませいなア。

雲井　ハテ大事ない。酒で明かさぬ夜半もなしぢやわいの。

又八　サア、盗人めら、鎌田又八秀春さまが、御自身に拷問遊ばす程に、唐鞍の行くへ、刃の太刀の在所を吐かせ。

平馬　コレサ〱、成る程二條の家に預かる、天の唐鞍、刃の太刀。二種とも盗みに來たが、刃の太刀は疾に紛失。

侍一　誰れが仕事か行くへ知れない。それゆゑ殘りし天の唐鞍。

岩藏　ひん盗んだに違ひはないが、その頼み手も在所も知らない。

四人　知らない〱〱ぞ。

又八　流石うぬらも盗賊だけ、一應ぢや吐かすまい。刀の鐺でたつた今、白狀させてくれべいか。

ト立ちかゝる。四人、悄りして

四人　アヽ、申します〱。

トこれにて景連、彌太六思ひ入れ。

又八　して、何者に頼まれた。

早六　キリ〱吐かせ。

平馬　その頼み手は。

四人　鎌田又八秀春だワ。

ト又八、悄りする。

皆々　なんと。

平馬　コレ、秀春どの、こなたは〱、もう破れかぶれだ。白狀すべい。

侍一　何の恨みか存じませぬが、現在お主の寶物。

侍二　盗んでくれたら褒美の金と、あるが嬉しさ忍び込み

岩藏　骨を折らせて首にする、志しが口惜しさに

四人　サア、すつぱりと白狀しました。

又八　ヤイ〱〱、泥坊めら、飛んだ事を吐かしやアがつたな。ハヽ、こりやア根深く企らんで、もししくじつ

たら斯やら〳〵と、云ひつけられた目算だた。

六郎　イカサマ、人にこそよれ貴殿に於て、左様の心ござらうや。

景連　今まで忠臣第一と、思つて居つた鎌田又八。

彌太　滅多に油断はならねえわえ。

又八　イヽヤ、この拷問は人に頼まぬ。どこまでも又八が詮議しぬいて、二品の在所を云はせて見せますべい。サア、盗人めら、眞直に吐かせばよし、曲つた事をほざくが最後、生首を引ッこ抜くぞ。命が惜しくば有やうに、先づ頼み手から吐かしやアがれ。

四人　ハテ、頼んだ奴はどこまでも、鎌田又八、お身様だワ。

又八　うぬ、まう吐かしやア。

ト大太刀にて四人をポンと切り倒す。

左衛　オヽ、こりや大切なる寶の手筋を……ハテ、短慮千萬。

又八　アヽ、やつと癇癪が納まつた。

ト愛護の若、ツカ〳〵と寄つて、又八が襟を掴み、扇子にて打ち据ゑる。

こりや若旦那、何ゆゑ拙者を。

愛護　何ゆゑとは、茲な不所存者めが。二條の家の繼目とて、勅使にお立ちなされた資道卿へ、二品の寶検分相濟まねば、某が家督叶はず、如何はせんと思ふに幸ひ、その盗賊手に入りながら、少しの怒りに命を絶ち、寶の手筋を失なふ粗忽。不忠者の又八、目通り叶はぬ、そこ立つてうせう。

又八　すりや、拙者が粗忽ゆゑ。

愛護　目通り叶はぬ。キリ〳〵立て。

又八　ヘイ、誤まり入つてござります。

景連　イヽヤ、それぢやア相濟まぬ。いま盗賊が白狀にて、秀春に疑ひかゝつた。

又八　例へ何と吐かせばとて、この身に曇りない事は、天照大神がお請合ひ。拙者が盗賊になつて、この場が濟む事なら、サア、繩打つて御勝手次第。

雲井　イヤ、その繩かゝるはこの雲井。

松枝　ヤ、御前様、滅多な事を御意なされますな。

雲井　ハテ、よいわいの。生醉ひで云ふのおやなけれども、人酒を吞み、酒人を吞むとやら。酒に吞まれて大切な、鍵預かりの役目を忘れ、二つの寶を盗賊に、奪ひ取られたは、この雲井。

松枝　すりや、鍵預かりのあなたゆゑ。

雲井　なんと叔父君様、そんなものぢやァござりませぬかえ。申し、お勅使様、こりやわたしが無理かえ。なんと無理ぢやあるまいがな。サア、縄かけて下さりませ。併し、縄にかゝつたら、杯が持たれまいなう。

愛護　イエ／＼、例へあなたが宝蔵の、鍵預かりのお役目とて、どうしてあなたに。差当つたる越度は私し。宝道卿、何れの道にも愛護の若を。

雲井　イヤ／＼、自らが。

愛護　イヤ、私しを。

宰相　天に風雨の愁ひあり、人に不時の災難とは云ひながら、如何いたさん宝の紛失。

ト思ひ入れ。

左衛　イヤ、恐れながら宝道卿へお願ひ。何卒宝の御検分暫しの間御容免、偏へに願ひ上げます。

宰相　そりやいと易き願ひながら、暫しのうちに宝の在所。

景連　知れざる時は、愛護の若が身の滅亡。

彌太　二條のお家も、忽ち草叢。

左衛　ハテ、一時延びれば尋とやら。

早六　及はずながら我れ／＼も

又八　とつくと思案を。

雲井　先づそれまでは。

愛護　奥にて暫時御休息。

宰相　然らば、方々。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト管絃になり、宰相先に愛護の若、景連、彌太六、六郎、早苗之助、左衛門、こなしあつて下座へ入る。又八、思案して居る。

雲井　ほんにうたての勅使様で、ホッとしたわいの。

松枝　さぞかし、お気詰遊ばしたでござりませう。併しながら雲井さま、二品のお宝が出ませぬ時は、お家の大事。マア、どう遊ばさうと思し召しますえ。

又八　それに付きまして、この鎌田が粗忽ゆゑ、愛護さまのお目通り叶はぬ首尾も、あなた様のお執成しを持ちまして。

雲井　ハテ、よいわいの。マ、、そんな事は捨て置いて、一つ呑みや／＼。

又八　イエ／＼、モウお酒も咽喉へは通りませぬ。あなた様もお酒には、好い加減にお止めなされたが、ようござります。

雲井　そりや、なぜにえ。
又八　ハテ、今日に迫つたお家の大切。それにあなたは、うつら〳〵と。モシ、愛護さまのお身の上、御心勞にはなりませぬか。
雲井　サア、さう思うたとて、女子のわたし、とんと仕樣がないわいの。
松枝　サ、、左樣でござりませうが。
雲井　コレ、其方まで同じやうに、そんな事云はずとも、サ、、酒にしや〳〵。
又八　待たつしやりませ。それ程酒がお好きなら、好い杯を獻じませう。
ト管絃になり、飾つてある冠りを持ち來り
この杯で雲井さま、あなたは御酒を上がりますか。
雲井　こりや父上の、お冠りではないかいなう。
又八　如何にも左樣。淸平公の筐のお冠り、それでお酒が上がられませうか。
雲井　どうも云へぬわいの。また珍らしい一入の杯。サ、、注いでたも〳〵。
松枝　でも、これは勿體なうて。
雲井　なんの大事があらうぞいのう。

ト無理に冠りへ酒を注がせようとする。又八キッとなつて、この冠りを引ッたくり、これにて雲井を散々に打つ。
ア、コレ、自らを家來の身として。
又八　イ、ヤ、秀春ではござらぬ、こなたの父君のこの淸平公が娘を打擲……エ、、こなたはなう。これまで嫌ひの氣狂ひ水、父御の死後より夜晝なし、酒で明かしてお家の大事、出來しても心にかけず、うか〳〵今日の日を過して、弟君にもしもの事があつての後、姉の身で眺めてござつて、この冠りの父君へ立ちませうか。
松枝　どうぞ心をお付け遊ばし、お家の繼目も愛護さまへ、めでたう御家督あるやうに、とも〴〵どうぞ御思案を、遊ばして下さりませ。
ト云ふうち、雲井、打たれし儘、杯臺を枕にして寢る。
又八　誠に曲つた性根。叔父御樣へ何の心も付かず、酒に性根を奪はれて、どうしやうと思はつしやる。サ、、奧へござつて近國とも〴〵、お家の納まる工風を、コレ、雲井さま、御前樣。
ト松ケ枝とも〴〵起す。雲井、一向他愛なく寢て居る。

松枝　秀春さま、よう御寝なつておやわいな。

ト又八、思ひ入れ。

又八　イヤ、呆れたものだ。

トこの時、向うより、菖蒲革の袴着たる侍ひ、走り來り

侍ひ　申し上げます。青山兵庫之助さまより、御内意の御使者、矢橋龍左衛門、只今これへ。

ト云ひ捨て直ぐに引返す。

又八　ナニ、心も知れない兵庫之助どのが、内意の使者、龍左衛門に應對するも面倒だ。それより荒木左衛門と事を計つて。さうだ。

ト大小三味線入りの合ひ方になり、又八、下座へ入る。直ぐに向うより青山兵庫之助妹八汐の前、振り袖、練りの帽子にて、蒔繪の文箱を持ち出て、直ぐに舞臺へ來り

八汐　青山兵庫之助より内意の使者。誰そ雲井さまへお取次、お願ひ申します。

松枝　お使者のお名は怖らしい。龍左衛門さまとやらに引替へ、可愛らしい女中のお使ひ。先づ〳〵これへ。

八汐　兵庫ことは、室町御所へ出仕につき、内意を受けて、即ちこの矢橋龍左衛門參上いたす。御免なされて下さんせ。

ト上へ通る。

松枝　何かは存ぜず、雲井さまには、勅使のお入りにお心遣ひ。それゆゑ只今御覽の通り。併し、お入りのその樣子を。

八汐　ハテマア、矢張り其まゝに。

松枝　でも、餘り無禮……モシ、雲井さま、兵庫さまより御内意とて、お使者のお出で。お目を覺まし遊ばしませ。

ト搖り起す。

雲井　なんぢや。青山兵庫さまより。

松枝　左樣でござります。

ト雲井、やう〳〵起き上がり、八汐を見て

雲井　お使者と云ふは八汐さま、ようお出で遊ばしたなア。

松枝　そんならあなたは。

八汐　龍左衛門が名を借り、兵庫之助が妹のわたし。使者の役目は内意の文箱。人に知らさぬ密事あつて。

雲井　青山どのより、この雲井へ。マヽ、とつくりと……コレ、誰そ、水をたも。

ト醉醒めの心にて、手を叩く。下座にて

早苗　畏まつてござります。

ト合ひ方になり、早苗之助、手桶に柄杓を添へて持ち出て來り

水と御意遊ばすゆゑ、持參いたしてござります。

ト八汐を見て

ヤア、あなたは。

八汐　其方は。

早苗　これはしたり。

ト柄杓にて思はず叩く。これにて水濺れし思ひ入れ。

松枝　アヽコレ、何をさんすぞいなう。

早苗　眞平々々。

ト手拭にて、そこらを拭く。

松枝　さうしてマア、召上がるものを仰山な。

早苗　下郎めは又、お庭の打ち水と存じて。ハヽヽヽヽ。

雲井　八汐さま、あなたは、あの者を御存じかえ。

八汐　アイ……サ、どうやら見ましたやうにもあり。

雲井　そちや八汐さまは、お知り人か。

早苗　ヘイ……どうか、見上げ申したやうでもあり。

雲井　ハテナウ……さうして、兵庫之助さまよりの。

八汐　內意は文箱のこの中に。

ト雲井、文箱を取り、內より短册を出し

雲井　戀ひ死なん命の程は惜しからで、報はん君が事ぞ悲しき……なんの事ぢやぞいなア。

八汐　サア、何か樣子は自らも。

松枝　御存じなうて內意のお使ひに。

八汐　參るはいとはぬ兄妹仲。人に洩らさぬ密事とあるゆゑ。

雲井　戀ひ死なん命の程は惜しからで、報はん君が事ぞ悲しき。

松枝　そんなら、あなたに青山さまが。

ト思ひ入れ。

雲井　アヽコレ……ハテ、何であらうなう。

トわざと考へて居る。始終生醉ひのこなし。合ひ方になる。燒物師瀨戶藤兵衞、下座よりツカ〳〵と出て來り、早苗之助見咎め、雲井短册を懷中へ入れる。

早苗　ヤイ〳〵、町人、扣へ居らう。

藤兵　南無三、また叱られた。

早苗　これに姉君、雲井の前さまもお入り遊ばすに、ツカ〳〵と何者だ。

藤兵　ハイ〳〵、先刻もお伺ひ樣が、さう云うてござざり

ました。私しは西の京に居りまする、瀬戸藤兵衛と申す、燒物師でござります。

早苗　勝手知らずば許して遣はす。早く行け〳〵。

ト藤兵衛、行きにかゝる。

雲井　コレ〳〵、町人待ちや。

藤兵　何ぞ御用でござりますかな。

雲井　サア、用と云うたら酒の相手ぢや。サ、爰へ來や。

藤兵　それは有り難うござります。

雲井　その代りには、なんぞ話しをせねばならぬぞや。

藤兵　その代り話しをせい。

八汐　ほんにこりや、よからうわいなア。

松枝　サ、雲井さまのお望みぢや程に、マア〳〵、話しから先へしや。

早苗　日待ち氣取りで、話しやれ〳〵。

藤兵　話しと云うては、生れ付いて不調法な私しでも、折角のお望みゆゑ、なんぞお話し申しませうか。

皆々　サア〳〵、話しや〳〵。

藤兵　何をお話し申しませう。落し話、色事噺。オヽ、化け物話しに致しませう。

皆々　こりや、よからうわいの。

藤兵　エヽ、所は東の洞院で、米屋の娘でござりますが、イヤ、その美しさ〳〵、兩親も自慢心で、御室に花見と出掛けました。その歸りに彼の娘を、年經る狸が魅入りました。

雲井　そりや、ひよんな事ぢやなア。

藤兵　サア、歸つてから亂騷ぎ。かち〳〵山へ人を遣れの、文福どのが見えたなら、八疊敷へ通せのと、あられぬ事を云ひ散らし、御飯を一度に六升づつ。

皆々　ヤア、。

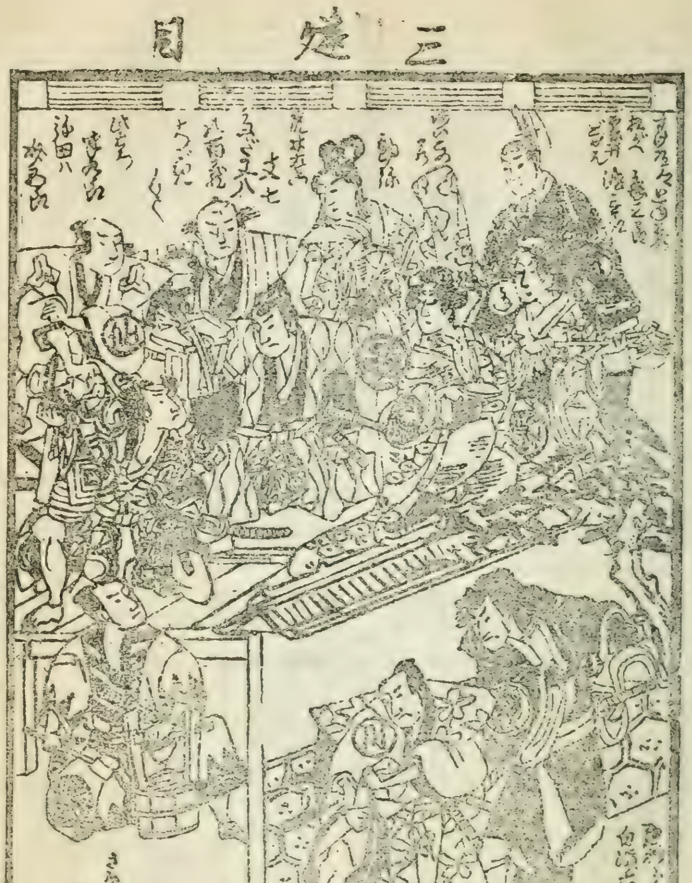
ト膽を潰す。

藤兵　サア、飯食ふと得手ものゝ、腹鼓を打ち掛けて、ぽこぽん〳〵、腹の都は歌でやはらぐ、しきしま原に

早苗　なんぞと狸が洒落るのか。

藤兵　洒落るの段か。そこで家内が、あそこへ祈禱、爰のお加持よ法印樣のと　イヤモウ、困り切つたその所へ、旅僧が一人來て、この家の娘は狸が魅入つた、これには昔話しの通り、兎は狸の禁物ゆゑ、卯の年の男を側に置けば、忽ち病氣は平癒と、敎へに任せて卯の年を探したところが、幸ひ丹波から來た飯焚き男に、サア卯の年ゆゑその日から、娘の側に置いたところが

八汐　病はそれで癒つたかいなう。
藤兵　サア、不思議な事は、その晩から、ちつと娘も静まり加減。
早苗　こいつはその男が針通したわい。
松枝　なんの阿房らしい、それから後はえ。
藤兵　サア、これからが怖さ〳〵。
皆々　ヤア。
ト思ひ入れ。
藤兵　何が或る晩しよぼ〳〵雨が降つて來る。風もざわざわ吹く中へ、六角堂の九ツが、ゴウン〳〵と鳴る時分。
トこの話しのうち、段々八汐は早苗之助が側へ摺り寄り、松ケ枝は雲井が側へ、てんでに少し怖き思ひ入れ。その狸娘が、飯焚きの八助の手を斯う取つて。
ト腰元が手をギツと取る。
松枝　エヽ、氣味の惡い。
ト振り放す。
藤兵　コレ、八助や、其方はアノ嫌ひかや。
早苗　ムウ、そりや狸娘が。
八汐　何が嫌ひぢやと云ふ事ぢやわいなう。
藤兵　マヽ、なんであらうと、サ……そこで彼の八助も、こんな娘は始めてゆゑ、その嬉しさと云ふものは、お嬢様さへお好きならと、云ひつゝ側へ寄るや否や、娘はすつくと立ち上がつて、これでもお好きかと。
トこの話しのうち、左衞門、後へ出、思ひ入れあつて、有り合ふ長熨斗の三方を冠り、話の切れに、三方をガタガタ鳴らして、モングワアと眞中へ出る。皆々一度にワツと驚ろき騒ぐ。始終話しのうちに、八汐、早苗之助いろ〳〵思ひ入れ。藤兵衞は松ケ枝へ心ある模樣。左衞門、皆々を追ひ廻し、八汐、早苗之助が手を引き、下座へ逃げて入る。松ケ枝、藤兵衞に怖さのまゝしがみつき、雲井は、よろ〳〵逃げて二重舞臺へ上がる。左衞門、雲井を追うて上へ上がり、後より留める。雲井これを拂ふ拍子に三方取れる。この時、雲井の懐より短冊落ちる。
左衞　この短册は。
ト取ると、ゴウンと時の鐘鳴る。雲井、しやんとなる。
雲井　近國、なんと。
トちよんと御簾下りる。此うち藤兵衞、白襦袢の半袖引き切り、松ケ枝、雲井の聲に、上を見て行かうとするを、藤兵衞留める間に簾下りる。



初演の繪番附

松枝　さうぢや。

ト行きかける裾を踏まへて藤兵衛、手早く手水鉢に指を當て、五郎太石にてぽんと指をぶち切る。松ケ枝驚ろく。藤兵衛、其まゝ引き切りし襦袢の袖へ小指にて誓紙を書く。

藤兵　これ受取つて下さりませ。

ト出す。松ケ枝、合點のゆかぬ思ひ入れ。

松枝　なんとえ。

藤兵　初めて逢つたお腰元へ、ぞつこん惚れた。證據は神を誓ひしこの誓紙。お名さへ知らぬ身を以て、血汐の起證が誠の心。どうぞ納めて、色よい返事を。

ト寄らうとするを突き退けて

松枝　ア、コレ、滅多な事を云はしやんな。いつしか逢ひも見もせぬ人へ、なんぼ志しが嬉しいとて、爰でその返事が。

藤兵　サ、、そこが縁づく、惚れたが因果。戀に上下の差別がないと、譬へて云へどこれがマア、云はれるものか。コレお女中。生れ付いたる正直者。酒が嫌ひで博奕は知らず、今見てぞつこん惚れ込んだ、色がこの身の玉に疵。藤兵衛を助けると、不便に思つて、たつた一度、お情を掛けて下さりませ。コレ、頼みますわえ〳〵。

トこなし。

松枝　嬉しうござんす。數ならぬ身をそれ程までに、思ひ込んで下さんすお前の深切。藤兵衛さま、その誓紙はとてもの事、この松ケ枝が心の誠も認めた上、起證と引替へ。

藤兵　すりや、アノ願ひを聞き届けて。

松枝　なんの僞はり。二世三世。

藤兵　變らぬ夫婦の

松枝　固めは後方。モシ。

ト囁く。この時下座から

彌太　松ケ枝どの〳〵。

藤兵　エ、、折惡しいあの聲は。

松枝　意地惡の、三上彌太六。

藤兵　覺られぬうち、マ、早う。

松枝　必らず待つてござんせい。

ト合ひ方になる。松ケ枝、下座へ入る。

藤兵　てもマア可愛らしい志し。それはさうと後方まで、どこに隱れて居たものであらう。

トあたりを見廻して居る。下座より彌太六出て、有無

を云はず繩を掛ける。

彌太　吐かすまい。何科あつて私しには。

ト藤兵衛が懷中より袖を出し

コレ、この誓紙。なんと動きは取れまいがな。

ト藤兵衛、ハッと俯向く。下座より

景連　その成敗は、彈正が致してくれう。

ト管絃になり、彈正景連、下座より出て

ヤイ藤兵衛、おのれ憎い奴。掟嚴しき館へ入込み、不義を働らく横道者。助け置かれぬ。覺悟いたせ。

藤兵　マヽ、申し、そりやお情ない。不義とは云へどたつた今、口ばかりの約束。併しお家の掟とあれば、是非もない事ながら、年寄りました一人の母親、私しが殺されますと、直ぐに路頭に立ちまする。そればかりが冥途の障り。どうぞ命は。

彌太　ヤア、叶はぬ事だ。母親が路頭に立たうが、氣が狂はうが、うぬが身の約束事。彈正さまの、お手にかゝるがわれが仕合せ。

藤兵　アノ、命を取られてどこに仕合せ。どうぞ此まゝ。

彌景　ならぬ事だ。

藤兵　すりや、どうあつても。

ト思ひ入れあつて、どつかり坐り

これまでのおれが壽命。どうするものかッサア、御刑罪なされませう。

景連　好い覺悟だ。

ト刀を拔き、後へ廻り、襟髮を撫で上げ

今打ち放すが、覺悟はよいか。

藤兵　南無阿彌陀佛。

ト景連試す事よろしくあつて、彌太六と顏見合せ、景連、繩を切る。藤兵衛、恟りして

これは。

ト思ひ入れ。彈正景連、其まゝ刀の背を藤兵衛が首へ當て、こなしあつて

景連　罪を犯した瀨戸藤兵衛、命を助くるその代り、某が賴みの一儀、得心いたしてくれうぢやまで。

彌太　嫌だと吐かしやアころりばつたり。いま此うちが、地獄極樂。

藤兵　ムウ。して、賴みと仰しやりまするは。

景連　その儀は汝が誓紙の上にて。

藤兵　幸ひこれに名宛のない、起請が直ぐに誓紙の一書。

景連　この彈正が名を認め、早々これへ。

藤兵　畏まつてござります。

ト小指の血にて名を書く。兩人あたりへ思ひ入れ。

イザ、お受取り下されませう。

ト彈正取つて

景連　出かした。神を誓ひのこの一書。しつかりと受取つた。

ト改めて

我れ思ひ立つ仔細あつて、青山兵庫之助と心を合せ、謀略用意の毒藥。人の心の付かざるやうに、器物へ燒き込み用ひんと、思ふに幸ひ汝が職分、東山義政公より、青山が拜領いたせしところの唐繪の皿を、一揃ひ似せて製しくれなば、事成就全き後は、武士に取立て、あの松ケ枝も彈正が、仲人なして汝の女房。この儀をとくと承知なしたか。

藤兵　すりや、室町どのより、青山へ拜領の唐繪の皿、其まゝ似せて毒藥を……して又それは何人へ。

彌太　ハテ、誰れであらうと、誓紙まで認めた瀨戸藤兵衛、遁がれッこのない一味同心。早くお請けをするが身の爲だ。

藤兵　成る程、とても非道に落入るこの身。道ならぬ事ながら……承知いたしてござります。

彌景　すりや、毒藥の皿、得心とな。

藤兵　如何にも。命を助くる御恩と云ひ、心を掛けし松ケ枝まで、女房とある褒美に、何しに否やがござりませう。

景連　併し他聞へ洩らさぬ大事、その皿出來いたすまで、身が館は當家の聞え。青山が館へ留め置く。

藤兵　そんなら御用の濟むまでは。

彌太　われが骨を、われが人質。

景連　彈正が家來參れ。

ト下座より菖蒲革の侍ひ二人出る。

コリヤ、これなる藤兵衛を、青山の屋敷まで、キッと伴ひ參つてよからう。

兩人　畏まつてござります。サア、藤兵衛とやら、立ちませう。

藤兵　アヽ、それを知りつゝ身を惡事に。

彌景　ヤ。

ト藤兵衛、氣を變へ

藤兵　サア、參りませう。

ト時の鐘、太鼓になり、藤兵衛、二人に圍まれ、向う

へ入る。ト兩人見送り思ひ入れ。バッタリと音して本神樂になり、緣の下より御嶽惡五郎高定、以前の形にて鞍を抱へ、白刃を振つて出て來り、替々と顔見合せ

惡五　彈正さま。

彈正　御嶽惡五郎。

惡五　お頼みの通り、二品をと思つたところが、刃の太刀は疾に紛失。それゆゑ天の唐鞍を盗んで、歸りかける處へ、あの鎌出めに見咎められ、四人の奴等が支へるうち、手早く拔けて、あなたの屋敷へ行つて見たりや、この館にと聞いて、又々水門から下家に屈んで、樣子を窺ひ、立役めらが居ぬ間を考へ、やう／＼只今。イザ、唐鞍をお渡し申します。

ト唐鞍を景連が前へ置く。

彈正　出來た／＼。併し、刃の太刀に心を掛け、我れより先へ盗ませし奴。ハテ、何者か、心憎い。よし／＼。二品揃はずとも、清平死後にましらの判、打割り置きし體に見せ、これこの如く隱し置けば、これも何ぞの一つの便り。

ト懐中より、錦の袱紗に包みし袖判を出して見せる。

惡五　然らばそれが二條の藏人、用ひしところの、ましらの判とな。

彌太　イカサマ、それは叔父御樣、出來ました／＼。

彈正　それにつけてもこの唐鞍、勅使がこの家を出立まで、何處ぞへ暫し隱し所が。

彌惡　ハテ、何れがようござらうな。

ト三人あたりを見廻し

彌太　屈竟なる装束箱。あれへ暫らく。

惡五　成る程。

ト装束箱より装束を出し、鞍を抱へて、また箱の中へ隱し

斯うして置けば、滅多に氣の付く奴はござりますまい。

彈正　猶も汝は忍んで樣子を。

惡五　心得ました。

彈正　彌太六、其方には未だ談ずる仔細もあれば、身と一緒に。

彌太　然らば御嶽惡五郎。

惡五　萬事は後刻。

彈正　ぬかるまいぞ。

ト管絃になり、彈正先に彌太六、下座へ入る。

惡五　ヤレ／＼、茶入れや玉と違つて、嵩張り物の天の唐

鞍。しんまくに負へないものだ。身ばかりになりや、うぬが三昧。ドリヤ、勝手な所へ忍ぶべいか。

ト 行かうとする。この後へ下座より白川六郎國則出かかり、立ち塞がり

六郎　曲者動くな。

惡五　こりやア、何をするのだ。

六郎　樣子は聞いた唐鞍の盜賊。サア、眞直ぐに在所を吐かせ。

惡五　イヽヤ、おらは唐鞍の行くへは知らない。空巣を踏んで藥罐から、履物位の小泥坊。免して通して下さいまし。

六郎　ヤア、とつくり仔細は聞き取る白川。爭はずとも白狀しろ。

惡五　イヽヤ知らない。

六郎　知らずば斯うして。

ト ちよつと立廻り。どつこいと見得。これより大小入りの鳴り物にて、兩人面白きタテあつて、トヾ、惡五郎、六郎を當てゝ柴垣の蔭へ忍ぶ。六郎心付き

南無三、曲者。ソレ。

ト 早神樂になり、六郎、逸散に向うへ入ると、御簾の内にて

雲井　不忠の左衞門、そこ退くまいか。

左衞　色よい返事ござるまでは、滅多にこの座は立去りませぬぞ。

ト 管絃になり、御簾卷き上げると、立ち身の雲井に左衞門抱きつき居るを、雲井、振り切り、下へ下りる。左衞門も下りて、有り合ふ手桶を中に置き、袖を扣へ

申し、そりや餘りお情ない。未だあなたはいとけなき、振分け髮の頃よりも、コレこの水鏡に眉揚げの、俤映す艷かさ。アヽ、お主でなくばとその折から、思ひ込んだる荒木左衞門。

雲井　ムウ。そんなら其方はこの雲井に、心でもつれ筒井筒、いつの程にや憬がれて。

左衞　思ひ煩らひいつそはと、待つに甲斐なき家來の悲しさ、只明け暮れに思ひ佗び

ト 以前の短冊を出して

戀ひ死なん命の程は惜しからで、報いん君が事ぞ悲しき……こりや誰れ人の秀歌か知らねども、まツこの如く墻へ忍び、云ひそゝくれしも今日の今、口外いたせば武士の意地。是非とも一夜は雲井さま。

雲井　それ程までに自らを、慕うてたもる志し、否にはあらぬが、すりや眞實。

左衛　君ゆゑ狂ふ荒木の左衛門、切なる心を汲み分けて。

雲井　逢うてしつぽり嬉しい返事……云ひたい

左衛　聞きたい

ト思ひ入れ。

雲井　ものながら、返事はならぬ。

左衛　エ。

雲井　兹な左衛門の不所存者め。今日に限りし家の大事、弟の事も打捨て、現在主の自らへ、不義云ひかゝる不忠の近國。詞交すも穢らはしい。とつとゝそこを退くまいか。

左衛　さう云ふつれないお心なら、是非に及ばす、無體の戀路。

雲井　すりや、どうあつても。

左衛　思ひを爰で、ついちよつと。

ト嫌がる雲井を無理に捉へ、上へ乘りかける。この時下座にて

又八　不義者見つけた。動きやアがるな。

トこれにて悔りして左衛門、飛び退き、煙草盆をしやんと抑へる。雲井、煙草をちやつと懐中して所體繕ろふと、管絃になり、下座より又八、八汐、早苗之助を引立て出て

雲井さま、近國どの、只今聞ひで兵庫さまのお妹御と、早苗之助の戀慕れゝつ。不義はお家の御法度ゆゑ、これへ引立て參つてござる。

雲井　そんなら、今の不義と云うたは。

左衛　早苗之助と、八汐さまの事であつたか。

雲井　さうとは知らず。

ト左衛門、ムウと落ちつくこなし。

又八　して、兩人の不義者は、どうしたらようござりませう。

左衛　ハテ、どうと申して、思ひ思うた仲なればこそ、怖い人目を隱れて忍び……ナ、怖い人目を隱れ忍んで、契りを交すなどと申すは、誠に切ない戀でござれば、女夫に致して遣はしたら、その喜びは如何ばかり……ナア申し、雲井さま、なんと左樣は思し召しませぬか。

ト雲井へ當てゝ思ひ入れにて云ふ。又八、膽を潰す。

雲井　イヤ、さうはなるまい。二人が二人家來なら、キツと掟を糺さにやならぬが、何を云うても兵庫さまのお妹

御。ハテ、どうしたものであらう。

ト此うち八汐、早苗之助差俯向いて居る。

早苗　御前様、斯く目立ちました上からは、是非に及ばぬ不義の咎め。キッとお糺しなされずば、お家の掟が立ちますまい。

八汐　殊にこの身は兵庫が妹ながら、今日は使ひに立つたる家來同然。兄への聞えを御遠慮なら、二人を糺明なされずば、他の聞え。覺悟いたして居りますれば

早苗　露塵お恨み申さぬ命。

八汐　サア、御刑罪に。

早苗　遊ばしませい。

ト覺悟極めて思ひ入れ。

左衞　コレサ／＼、ハテサテそれは惡い料簡。助かる事なら助かつて、時分がらのものぢやに依つて、御膳白玉を貰つてなりとも、夫婦暮らすが最上の樂しみと云ふものぢや。先づ我れ／＼に斯やうの儀もござらば。

又八　何とさつしやる。

左衞　この思案に一決いたすぢや。

ト又八、呆れるこなし。

早苗　イヤ／＼、人と生れて道を知らぬは、人面獸心。

八汐　科を犯せば身に報ふと、辨まへながら戀の闇。

早苗　迷つた罪は、ちつとも早く。

又八　流石は武家の妹御。また下郎にも好い覺悟だ。出かす出かす。ドレ、秀泰が成敗して。

ト立ち上がる。此うち雲非思案して、又八と入れ替り

雲非　イヤ、この成敗は雲非がする。サア、二人とも、獄屋へ引いて糺明遂ぐる。キリ／＼立ちや。

ト兩人を引立て、下の方へ突きやり、有り合ふ衝立を隔てに立てる。

左又　これは。

ト思ひ入れ。

雲非　糺明の上刑罪と、獄屋へ引く道、女子の甲斐なさ、取逃がしたか。ハテ、殘り多い。

八早　そんなら二人を此まゝに。

雲非　コレ……取逃がしたは自らが誤まり。恩に着すとも、早う／＼。

八汐　お志しの嬉しさに。

早苗　盡きぬお禮を。

ト思ひ入れ。雲非、コレと云ふ思ひ入れ。早苗之助、八汐と入れ替り。

ござりませ。

ト早三重になり、兩人、バタ〳〵にて向うへ入る。

又八　サア、今の二人は掟が立つ。これからは御家老さま、貴殿も不義の相伴おしやれ。

左衞　待つた秀春、某に不義の相伴とは。

又八　知るまいと思はつしやるが。酒に性根の亂れたお主へ、付け込んで、無體の戀慕。

雲井　サア、それは、この身に露程も

又八　畏りがたいとて人の口、常にお身持ち好からぬゆゑ、その雷の虚に乘つて、雲へ付け込む獣め。それでも二條の御家老職か。

左衞　サア、それは。

又八　人畜生の人でなしめ。

左衞　南無三、しまうた。さりながら鎌田氏、堅いぞや堅いぞや。貴殿、徒然草を御存じないか。色好まざれば男子はいと騷々し、玉の杯に底なき心地こそすれと。貴殿色道を知らぬゆゑ、ちよつとの事にも人畜生の、イヤ人でなしのと色氣がない。色でつくねた今の世の中。惚れた段にはお主であらうが、親兄弟でござらうが、とんとその差別はないぢや。コレ〳〵、貴公に好い譬へがある。

ト衝立を眞中へ持ち出す。

コレ、この猿と云ふ奴は、をかしいもので、千疋のそのうちに滿足な猿が一疋、殘りの鼻缺け猿がその一疋を笑ふげな。マア、申して見れば、貴殿は武邊一通りに心を委ね、滿足な猿どのぢや。そこで我れらを始め、外々の者は、色事ばかりを心に掛ける鼻缺け猿。その中に貴公一人ござると、多くの猿は皆笑ふぢや。すりや、笑はれて得もない。それより同じ鼻缺け猿が仲間に入つて、ともども色にお狂ひなされと申すが、左衞門が意見ぢや。なんと御得心が參つたかな。

又八　ハヽヽヽヽ、鋸屑も云へば云はれる。途方もない猿の意見。聞きたくもござらぬ。鼻缺け猿の近國どのへ、又八が又、意見は幸ひ

ト側にある手桶を持つて來て、衝立の前へ置き

これでござる。

雲井　ムウ。猿を畫きし衝立に、手桶の水を添へし心は。

左衞　あなたは譜代の御主人ゆゑ。

雲井　及ばぬ戀と猿猴が、月に譬へて近國へ、思ひ切れよと其方の意見か。

又八　現に猿猴水月を、探ると云へる佛經の意。水に沈み

し月影を、高き梢の猿猴が、取らんと手に手連なりて、水の面に至る頃、數疋の猿の重みにつれ、かよはき梢もほつきりと、折れて殘らず水の底、その身を失ふ智慧なし猿。猿は即ち荒木の左衞門。雲井御前の名月を、手に入れうと踠くうち、水に溺れてその身の破滅。それより人の口の端に、かゝらぬ先に、心を改め、お家の安危を計るが忠臣。なんと、さうは思はつしやらぬか。

左衞　とんと存ぜぬ。二條のお家の納まるより、雲井御前を婦妻にしたい某が存念。

雲井　そんなら、あれ程秀春が、事を分けての今の意見も。

左衞　拙者が耳には空吹く風。戀風が身に沁みて、どうも堪らぬ、雲井さま。

ト側へ寄るを、又八押し隔て

又八　すりや、どうあつても。

左衞　思ひ切らぬ。

又八　思ひ切らにやア又八が、すつぱりと切らせて見せる。

左衞　そりや又、どうして。

又八　身共が斯うして。

ト抜きかゝる。左衞門、留めて立廻り。兩人、柄へ手を掛けて思ひ入れ。雲井、その中へ入る。三人見得。

この時向うより

兵庫　兩人お待ちやれ。靑山兵庫之助兼光が留め申した。必らず聊爾おしやるな。

ト太鼓謠になり、向うより兵庫之助、鉢鬘、長上下の形にて出で來り、花道に留まる。此うち雲井、又八を制す。又八、是非なく左衞門も思ひ入れあつて解れる。

雲井　これは〳〵、存じ寄らざる靑山さまの御入來。

左衞　何は兎もあれ

又八　先づ〳〵これへ

三人　お通りなされ下されい。

兵庫　兼光これへ參りし仔細、まつた見請けし兩士の爭ひ、それにてとくと承はらん。許し召されい。罷り通るでござらう。

ト太鼓謠の切れにて、兵庫之助、舞臺へ來り、上の方へ通る。

雲井　して、あなたは、何ゆゑ今日。

兵庫　參上いたした仔細は追ひ〳〵。何か差措き二人の近臣、何ゆゑ爭論召さるゝのぢや。

雲又　サア、これは。

ト云ひ兼ねる。左衞門、思ひ入れあつて

左衛　戀でございます。
兵庫　ヤ。
左衛　賢を賢として色に替へたる荒木左衛門、それを武骨の鎌田又八、達て差留めまするゆゑ、やむ事を得ず斯くの仕合せ。その相手も外ではない。これなる御主人雲井さまへ、無體の戀慕。
兵庫　ハテナア。二條の執權、荒木左衛門、仁義を守る者と聞く。定めてそれは當座の戯むれ、酒興の上の事と見える。
左衛　イヤ、全く以て酒興でなし。
又八　眞實底から。
雲井　自らが振分け髮の頃より、思ひをかけてと、今日始めて云うての後は、ひたすらに
兵庫　すりや、酒興でなく眞實以て、多年思ひを懸けておやまで。
左衛　なか／＼左様。年頃日頃、見上げ申して誠になア。盛りのお身も云ひ號けの、菊地左馬之助さま、赤松と共に亡びし後、浮世を捨てしあの剃髮。雨を憂ふる芙蓉のお姿、見るに思ひのいや増て、忠義の心も破れ口。
又八　意見お人目も構はぬ隋弱、忠義に替へて一筋に。
左衛　戀ひ死なん命の程は惜しからで、報いん君が事ぞ悲しき。
又八　兵庫さまには御存じか。
兵庫　イヽヤ、知らぬ。
雲左　ハテ、御存じないぢやよなア。

ト此時御簾の内より

愛護　行くへ知れざる二品の寶の勅答。愛護の若、申し上ぐるでございませう。

ト管絃になり、御簾卷き上げると、上の方宰相、愛護、彈正、並よく列び、下座より彌太六出る。

兵庫　ムウ。すりや今日、家督に檢分の寶、二品とも紛失となア。
彈正　靑山どのには、よくこそ御入來。お聞きの通り大切な寶の紛失。勅使の手前、如何いたしてようござらう。
雲井　今日に限りて寶の檢分、二條の家の安危この時。
又八　云つて歸らぬ事ながら、あの最前の盗賊めら。
彌太　サ、それを云へば云ふ程、その身の粗忽。
左衛　後の祭りで額へ筋立て、騒がずと、扣へ召されい。
又八　落着き自慢のその口を。
宰相　して、今の間に二品の、在所は知れしや、勅答なん

と。

愛護　その勅答は只今切腹……叔父君樣、介錯願ひ上げます。姉上さらば。

ト下へ下り、腹切らうとする。皆々驚ろき、雲井慌て

雲井　コレ待ちや。先刻にも云ふ通り、鍵預かりのこの雲井。すりや、越度はこの姉、自らが。

ト愛護が短刀にて自害しようとする。互ひに爭ふ。

兵庫　イヤ、その生害には及び申さぬ。

皆々　なんと。

兵庫　かゝる事とは存ぜねども、今日跡目の勅使に付き、もしも二つのお寶に、凶事ある時は二條の家の、一大事と思ふより、義政公へ申し上げ、仰せを請けて青山が、罷り越したも我が寸志。寶の詮議日延べの願ひ、將軍家より禁庭へ、お願ひあらば御許容あらん。詮議の間は愛護の若、某が方へ預かり、共に寶の行くへを、尋ね出しなば、めでたうその時家督。

愛護　すりや、云ひ譯立たざる身の科を。

雲井　青山どのゝ計らひにて

彈正　禁庭濟まざるその時は。

兵庫　この兵庫が命一つ。雲井どの、愛護の若、必らず逸まり召さるゝな。

愛雲　エヽ、忝ない。

又八　然らば拙者を、せめてお供に。

彈正　イヽヤならぬ。盜賊の誤まり拔けぬ秀春。供に叶はぬ、罷りならぬ。

又八　すりや、最前の誤まりゆゑ……エヽ、忌々しい。

左衞　雲井どのには左衞門が、お側でキッと宿直役。婦妻と存じて大事に致す。

トしなだれる。

雲井　主の難儀を餘所に見る、不忠の左衞門、暇をくれたぞ。

左衞　暇とあれば主從の、緣が切れゝば恐れはない。サア、身と一緒に。

ト手を取つて引立てる。

又八　天命知らずの荒木の左衞門。觀念ひろげ。

ト拔討ちに打ちかける。左衞門、手早く立廻つて裝束箱にて受け留める。仕掛けにてこの箱切れる。中より裝束に纏ひし唐鞍出る。又八驚ろき

こりや紛失の天の唐鞍。

愛雲　ナニ、唐鞍とや。



初演の繪番附

左衞　ト彈正、それと寄るを、又八隔てる。左衞門、見て
　誠に疑ひもなき寶の一つ。
兵庫　ト後より兵庫之助取つて
　唐鞍身共が預かつた。今一品の刃の太刀、心を付け
　て詮議おしやれ。
左衞　でも、その品を。
彈正　暇の出たる荒木の左衞門。
雲井　ソレ、門前より追ひ拂や、
彌太　畏まつてござります。
宰相　この資道も立歸り、右の樣子を奏聞せん。
又八　唐鞍出でし上からは、拙者が粗忽を御宥免あつて、
　お供を何卒若君樣。
兵庫　その願ひ尤もながら、刃の太刀の出ぬ時は、愛護の
　若は云はゞ科人。路次の供は相叶はぬ。後より身共が館
　へお來やれ。
又八　すりや、お後より、あなたの館へ。
愛護　姉上樣、今日まで片時も離れぬ身が、かゝる仕儀に
　て暫時のお別れ。隨分ともに御機嫌よう。
雲井　其方も無事で……とは云ふものゝ、たつた一人の弟、
　せめては父御に仕へる心で、この裝束を朝夕に。
　ト裝束を愛護に渡す。愛護、押戴き
愛護　このお筺の裝束も。
左衞　今は仇なれさりとては、つれない心の雲井さま。
　ト寄らうとする。又八隔てる。
彈正　ソレ、左衞門をぼッ拂へ。
彌太　近國、お立ちやれ。
兵庫　勅使の御歸館。
　ト下座にて
大名　ハア、。
　ト靜かなる下がり葉、時の鐘を冠せ、宰相先に、下座
　より仕丁出て、後に付き、愛護、裝束を持ち、兵庫、
　鞍を抱へ、思ひ入れあつて、花道へ入る。左衞門先に
　彌太六、割り竹にて追つて立て、後より彈正付き添ひ、
　東の花道へ入る。後矢張り時の鐘。雲井、後見送り思
　ひ入れあつて
雲井　刃の太刀の紛失より、わざとこの身の不行跡、酒に
　亂れしその隙に奪ひ取られしと、科をこの姉が引請けて
　斯くもと思うた事も皆仇事。
又八　ムウ、すりや、あなたの醉どれは。
雲井　弟に罪を着せまい爲。

又八　さうとは存ぜず。
ト　ばた〳〵にて下座より、松ヶ枝、文を持つて走り出で
松枝　申し御前樣、左衞門さまがお館を、立退いたその後にて、これを私しへ。
ト　文を出す。雲井、取つて見て
雲井　こりや最前自らへ、送つた艶書。この文が、
ト　雲井、手早く讀み終る。此うち下の松の木へ惡五郎出て窺ふ。
又八　仔細は其うちとりつくりと。
雲井　そんなら不義を云ひ掛けしも。
松枝　秀春さまと不和なる體も
又八　兩人竊かに云ひ合せ、惡人めらに氣を許させ、寶の詮議いたさう爲。
雲井　それにつけても心得ぬは、あの青山兵庫さま。
又八　若君守護と二つには、彼奴が實否を。
雲井　糺すは雲井、その手懸りはこの戀歌。
ト　和歌の短册を出す。
松枝　色に事寄せ。
雲井。コレ。

ト　この時、惡五郎が顏、手水鉢へ映りし思ひ入れにて、雲井、簪を拔きエイ。
ト　手裏劍に打つ。これにて惡五郎、落ちる所を、又八、其まゝ取つて押へる。
松枝　さてこそ。
又八　曲者。
雲井　心を付きや。
ト　三人、思ひ入れ、この途端よろしく
ト　直ぐに踊り地の打ち續けにて、ツナギ、拍子木直すと、片シヤギリになる。引返し。

本舞臺、三間の間、一面に栗丸太の垣、後ろ淺黄幕、左右に彩色の紅葉を散らしたる大高張り。これに梅が鼻踊り場と書いてあり、見事なる切子を二面に吊り下ろし、下の柱外に播州梅ヶ鼻と記したる杭建て、片シヤギリにて幕明く。
ト　鳴り物打ち上ぐる。下座より音頭の上げになり、千代の始めの一踊り、これを見よかしのえ、と太鼓地に

なる。向うより鹽屋村お禮、同じくお市、同じくお霜、お瀧、お松、同じくお花、同じくお政、お菊、妹お照、何れも一對の踊りの形。紫の頬冠り、てんでに紋の付いたる金扇を持ち、踊りながら舞臺へ來り、それえそれえヤアトヤアと、これより誂らへの踊りになり、よろしく振りあつて又踊り地になり、皆々下座へ入る。あと矢張り踊り地。引違へて下座より、矢橋龍左衛門成信、黒澤軍八長連、着流し羽織、大小の形にて、鹽屋村の百姓杢作、木綿やつし、短かき小紋の羽織を着て、誂らへの杯を持ち、三人捨ぜりふにて出て

杢作　マア／＼、これで一つ上がりませ。

ト三人、床几に腰を掛ける。

軍八　コレ／＼杢作、世話を掛けたその上に、また此やうに馳走になつては。

杢作　なんのお前様、御注文通りの奉公人さへござりますれば、御馳走位はなんでもござりませぬ。

龍左　イカサマ、主人青山兵庫さまの、思し召しに合ふ奉公人さへあれば、過分の給金を遣はさるゝ事ぢやに依つて、一通りの女子を世話いたす口錢でもあるまい。併し、大事の役目を云ひ付けられる奉公人ゆゑ。

杢作　モシ、御用はどんな事か存じませぬが、一人々々お目にかけるも御面倒と、そこでこの梅が鼻の盆踊りは、播磨近在の娘が皆出ますゆゑ、御同道申しました。只今御覽なされるうちには、ござりませなんだか。

軍八　サア、目利き致さうと存じて、龍左衛門どのもこの軍八も、隨分心を配つて居つたが、呉服屋へ買ひ物に參つたやうで、眼移りがして、どれがどれやら分り憎いて。

杢作　左樣なら斯うなされませ。いま一人づゝ爰へ連れて來て、何とかかとか話しを致して居りますうち、御意に入らずば、エヘン／＼と咳拂ひをなされませ。これと云ふ奴には、女郎買の初會氣取りで、杯をなされませ。そこで私しが相談を致して、奉公に出しますやうに致しませう。

龍左　こいつは出來たわえ。イカサマ、目見得と申して、氣に入らねば却つて氣の毒。そんなら爰で、とくと見極めよう。

軍八　氣に入らぬのは、エヘン／＼と咳拂ひ。好いと思ふのには、初會の心で、杯をすれば掛合うて、奉公に出すぢやな。

杢作　左樣でござりまする。

龍左　軍八どの、こりや好い思ひ付きではござらぬか。
軍八　然らば杢作、ちつとも早く。
杢作　畏まりました。モシ、咳とお杯をお忘れなされますなえ。
龍軍　承知々々。
杢作　ドレ、連れて參りませうか。
　ト　これより始終踊り地。杢作、下座へ入る。
龍左　彼奴、大の慾張り者と見え申した。
軍八　左樣で。時に詳しい譯は存ぜぬが、兵庫さまには妾でもなく、過分の金子を遣はさるゝ奉公人。大切の御用とは、如何の儀でござらうな。
龍左　その儀は、彼のお館へ預かりの、愛護の若を。
　ト　囁く。
軍八　すりや、あの愛護を。
龍左　コレサ……人が心を付かぬやうに、機轉の利いた女に、申し付けるはそれゆゑの事サ。
軍八　成る程。
　ト　奥より
杢作　お禮さん、ちよつと來なさい／＼。
　ト　お禮の手を引いて出る。

れい　杢作さん、ちよつと來い／＼と。さうして用は何ぢやぞいな。
　ト　此うち杢作、これを見ろと云ふ思ひ入れ。兩人は床几にて酒を呑みながら見て、いろ／＼思ひ入れあるべし。
杢作　サア用はの、なにサ、オヽ、それ／＼、爰はの、飛んだ涼しい風が來るに依つて、涼ませやうと思うてサ。
れい　ほんに爰へは、好い風が來るわいなア。
杢作　お禮さん、お前、芝居へ行つたか。
れい　イヽエ。
杢作　一昨日から西山の瑞徳寺へ、芝居が來たとサ。
れい　さう云ふ事であつたわいな。さうして役者は、誰れが來たえ。
杢作　マア、立役は染川權左衞門に、お前の贔屓の玉崎久七、篠田善之丞、女形が市谷金五郎、神崎半彌。
　ト　云ふうち、龍左衞門咳拂ひ。
れい　さうして、狂言は何をするぞいなア。
杢作　マア、狂言は明日話さう。此方へ來なさい／＼。
　ト　手を引ッ張る。
れい　エ、モウ、なんのこつちやいなア。

ト手を引かれて下座へ入る。

軍八　龍左どの、只今のは如何でござつた。

龍左　イヤ〳〵、初めから極めずとも、マア、もそつと見ました上。

軍八　イカサマ。

ト下座にて

杢作　サア〳〵、お花さん、來なさい〳〵。

ト お花を連れて出る。

はな　コレイナア、話しとは何ぢやぞいな。人が折角涼んで居るものを。

杢作　何もさう腹を立つ事はない。お前に話しは何よ。連れ立つて、どこぞへ行かうと云ふ話しよ。

はな　サア、アノわたしや、どうぞ一度は江戸へ行て見たいわいなア。

杢作　そんなら江戸へ。この頃涼しい日に朝から一日、先づ五百羅漢を始めて、柳島の妙見から、橋場の渡を通つて、王子から雜司ケ谷、堀の内へ參つて、大師河原へ拔け、池上から目黒、芝の神明、築地の門跡、深川の八幡を。

はな　お前も滅相な。この播州から一日に江戸へ行て、日のうちに器用に歩かれるものかいなア。

杢作　ほんに爰は播州だつけ。

ト 軍八、咳拂ひをする。

お花さん、あつちへ行かう。

ト手を引く。

はな　エ、モ、なんのこつちやいなア。

ト手を引かれて入る。

龍左　あの女めも、ちと引摺りと見えました。

軍八　左樣でござらう。

ト下座にて

杢作　お市ぼう、お政ぼうも一緒に來るか。

ト お市、お政を連れて出て

なんと今日も、飛んだ暑いぢやァないか。

兩人　アイ。

杢作　お前方、今日の髮は誰れが結つた。飛んだ似合つた。お禮さまか、お霜さまか、イヤ〳〵、矢ッ張り母さんだわえ。

兩人　アイ。

杢作　時に、今年の揃ひは飛んだ揚りがよい。堺川の八三が内で染めたの。そしてマア、思ひ付きがあつて。

ト何を云つても二人ながら、只アイ〳〵とばかり云つて居る。龍左衛門、軍八咳拂ひをする。

二人ながら咳と見えた。サア又、ちつと彼方へ行て涼まう。

兩人　なんのこつちやいなア。

ト お市、お政を杢作連れて入る。

軍八　あの兩人は、餘り物を申さぬではござらぬか。

龍左　左様でござる。餘り無口では御用が辨じませぬ。

ト下座にて

杢作　コレサ〳〵、おれを何處へ連れて行くのだ。

ト お瀧、お松、杢作を連れて出る。

たき　サア、あそこはいつぞ、蚊が居てならぬ。

まつ　ちつと爰へ來て、涼まうと思うて。

杢作　さうしておれに用とは、なんだ〳〵。

たき　杢作さま、お前に用と云ふはな、この頃西岡山へ芝居が來たが、お前、知つてかいなア。

まつ　わたしや又どうぞ、江戸へ行て見たいものぢや。お前、連れ立つて下さんせぬかえ。

たき　マア、今度來た役者は、アレ、染川權左衛門に玉崎久七、篠田善之丞、女形が市谷金五郎に、袖崎半彌。

まつ　先づ江戸へ行たらば、五百羅漢を始めとして、柳島から王子へ廻り、雜司ケ谷から堀の内、大師河原へズツと拔けて。

たき　あすこの狂言は五日目ゆゑ、お定まりの忠臣藏。

まつ　池上から目黒へ參り、芝の神明、築地の門跡。

ト杢作、始終ハテナ〳〵と頭を掻いて居る。龍左衛門、軍八呆れて無性に咳拂ひをする。

杢作　コレサ〳〵、その後は明日聞かうよ。

瀧松　そんならちつと彼方へ行かうかいな。サア、ござんせ。

杢作　エヽ、モ、なんのこつちやいなア。

ト二人に引摺られて入る。

龍左　ハテ、初手の二人は無口であつたが、今の奴等は大のおしやべりではござらぬか。

軍八　イヤモウ、ひよんな儀を約束いたして、咽喉も何も堪るものでござらぬ。あの女めに七色唐辛子の云ひ立てが申させたい。

兩人　ハヽヽヽヽ。

ト下座にて

杢作　マア、お霜さん、ちよつとお出でよ。

ト お霜を連れて出て
なんとマア、暑いぢやアないかえ。
しも モウ〳〵、この年のやうな、暑い事はござんせぬわいな。
杢作 なんと明日の晩、舟へ出ようぢやアないかえ。
しも こりやよからうわいな。わたしや去年も屋根船で。花火を見に行て、簾へ觸つて、簪を川へ落したわいな。
杢作 イヤ又、花火を見るなら小舟の事よ、錢の一貫も懐へ入れて、枝豆を食ひながら、イヨ玉屋も氣が晴れてよい奴よ。
しも どうしてマア、女子に、そんな眞似がなるものかいなア。
杢作 ナニ、夜だもの、構ふ事があるものか。そんならちよつと船を着けて、五色茶漬と洒落ようか。
しも それがよいわいなア。
ト 此うち軍八、咳拂ひする。
杢作 これが咳ぢやむづかしいわえ……そんならマア、そのつもりで、此方へ來なさい〳〵。
ト 無性に引ッ張る。
しも エヽ、モ、なんのこつちやいなア。

ト 手を引かれ入る。
軍八 あの女は、ちと粗々つかしいと見えます。
龍左 左樣でござる。
杢作 コレ、お照さん、マア〳〵なんでも來ておくれよ。
ト お照を無理に連れて出て
お照さん、お前よく今夜、踊りに出かけなさつた。
てる サア、皆樣は每晩々々出やしやんすけれど、わたしは内に何やかや用が多くて、一度も踊りには來ぬゆゑな、母さんが云ふと、姉のお菊があのやうに惡性する、踊りどころぢやあるまいと叱らしやんすゆゑ、ソッと姉さまに云うたれば、母樣へは沙汰なしに、行けと云はしやんしたゆゑ、モウ〳〵どこがどう。
ト 兩人、お照を見て、これだと云ふこなし
龍左 杢作々々。どうぞその娘御に、ちよつと合ひをしてもらひたい。
杢作 エヽ、そんなら、このお照さまに杯を。
軍八 オヽ、サ、龍左どのが、合ひを頼みたいとぢや。
杢作 ソリヤ、何よりお易い事さ……お照さま、あのお侍ひ樣方は、わしが近付きのお方だが、お前に合ひを頼みたいと。

てる　そりやモウ、お合ひは致しませうが、わたしは生れ付いて、お酒はさつぱり。お杯ばかりはちよつと。

龍左　シタリ、酒はならぬと云ひながらも、杯ばかりもとは、ハテ、人を外らさぬお娘が挨拶。

軍八　器量と云ひ、見掛けから、發明は一目で知れます。

てる　なんのつがもない、私しがやうな鈍な者を、モウモウ、そんな事を仰しやると、お合ひは致しませぬぞえ。

龍左　コレサ〳〵、さう云はずと龍左衞門が杯、ちよつとちよつと。

ト呑んでお照へ献す。お照杯を取り、軍八、酌をする。

てる　これへ下さりませい。

軍八　なんの〳〵。

ト注がうとする。

てる　お注ぎなされますな。とんと不調法にござります。

軍八　でも、これは一つ〳〵。

ト無理に注ぐ。

てる　こりやモウ、これを食べましたら。

杢作　ハテ、醉うたら内まで負つて上げるワ。

龍軍　靜かに呑みやれ〳〵。

ト　お照、嫌さうに少しづゝ呑む。

杢作　イヤ又、こんな姉妹と云ふはござりませぬ。この子の姉も、今年二十でござりますが、第一マア母御に孝行亭主を持てば不孝になると、まだ獨り身。このお照さまと云へば、申し、これが〳〵。

ト劍術の眞似をして

強勢なものサ。斯う揃つた姉妹を持つ親御は、果報でござりまするな。

軍八　ハテ、それは頼もしい事な。

ト云ふうち、お照呑み終り

てる　なんのあなたの御存じない事まで……ホヽヽヽ。左樣ならお合ひのお杯は。

ト龍左衞門へ、献す。

龍左　なんぼ呑めぬと云うても、も一つ位はよからう。

てる　イエ〳〵、もう御免なされませ。

軍八　でも、餅屋の餅も強ひねば食はれぬと云ふ事がある。

杢作　お照さま、も一つやりなさい。

てる　お前までが同じやうに……モウ〳〵、御免なされませ。

龍左　サア〳〵、爰らが酒盛の處だ。

軍八　是非々々、も一つ呑みやれ〳〵。

てる　イエモウ、お免しなされませ。

ト龍左衞門、お照が手へ杯を持たせる。軍八、無理に注ぎにかゝる。お照、懐より守り袋を落す。これを知らずに揉み合ひ、始終踊り地にて、向うより、三井伴平、飛脚の形にて、三度笠を手に持ち、狀箱を持ち、考へながら出、思はずこの中へ入り、これより入り亂れ、お照ツッと脱けて入る。伴平をお照と取違へ、龍左衞門提へる。軍八、狀箱を持ちし手へ酒を注ぐ。杢作、違うた〳〵と云ふ思ひ入れ。やう〳〵氣が付いて顏見合せ

龍左　ヤア、今の娘は

杢作　奥で相談して見ませう。

ト とつかは下座へ入る。

伴平　コレ、大切の狀箱を。飛んだ事をした。

ト思ひ入れ。

龍左　さう云ふは、三井の伴平ぢやアないか。

伴平　あなた方は、龍左衞門さま、軍八さま。私しをば、飛んだ目に遭はさつしやりましたな。

龍軍　料簡しやれ〳〵。

軍八　時に、何れへ參るのだ。

伴平　私しは主人高階彈正さまより、あなたの御主人、兵庫さまへ密事の御用に付き、急のお使ひ、その道で、お二人さま。さて〳〵今日は伴平が爲には惡日。この後の濱邊で石に躓き、がらゝ狀箱はこの通り。

ト割れた狀箱、密書を見せ

どうしたものと思案しながら、來かゝる今の出合ひ頭。大事の御狀は酒だらけ。兵庫さまはこれでは濟まぬと仰しやれば、屋敷へも歸られず、扶持の食ひ上げ。マア、どう致したらようござりませう。

ト當惑のこなし。

龍左　密書を濡らしたは、我れ〳〵が身にもかゝる事。どうぞ目立たぬ致しやうが。

ト取る。伴平、嬉しさうに渡し

伴平　ようなされて下さりませ。

龍左　封を臺なし。軍八どの、その火入れを。

軍八　合點々々。

ト龍左衞門、封を解いて、火入れの上にて干す心にて開き

龍左　「わざ〳〵飛札を以て申し入れ候ふ、然らば貴殿方へ



初演の繪番附

お預かり罷りなり候ふ愛護の若儀、存命いたし居り候うては、貴殿我れ／＼大望の妨げと相成り候ふ間、よろしく御手段なされ殺害の儀、專一に奉存じ候ふ、然る上は兼ねて御執心の雲井御前、身の上は、お心任せなさるべく候ふ、且又二條家領地の儀は、某へ仰せつけられお執成しの段、偏へに願ひ入り奉り候ふ、くれ／＼も愛護の若殺害の儀、お急きなさるべく候ふ頓首。青山兵庫之助どのへ、高階彈正」

ト此うち、伴平、何心なく聞いて居て恟り驚ろき

伴平　ヤ、、、。そんならその一通は。

ト龍左衞門、拔討ちにボンと切り倒す。

軍八　龍左衞門どの、何ゆゑ彼奴を。

龍左　心ならずも讀んだる密書。承つた三井伴平、高階どのゝ家來ゆゑ、大事ないとは思へども、下郎の事ゆゑ。

軍八　イカサマ、これは御尤も。して、密書はな。

龍左　某が手より御主人へ。

軍八　併し、僅かの間も大切の密書。我れらが懐中より、人の氣の付かぬ所へ。

龍左　成る程なア。

ト、あたりを見廻し、軍八、落ちたる守り袋を取上げ

軍八　コレ／＼、爰に落ちたる守り袋、この中へ捻り込んで持つて居りやア。

龍左　イカサマ、誰れも氣が付くまい。ドレ。

トこの守り袋へ捻ぢ込み

軍八　これぢやア氣遣ひござるまい。

ト守り袋を持つていろ／＼あり、此うち下座よりお照、其處爰と守り袋を尋ねる心にて出て來り、フッとこれを見付け

てる　こりや、私が守り袋。

トちよいと引ッたくる。龍左衞門、恟り。軍八、それとかゝる。お照、振り切るはずみに、軍八宙返り、龍左衞門、呆氣に取られ、後を見送つて居る。お照は見向きもせず、守り袋を持つてツイと向うへ入る。矢張り踊り地にて、よろしく

幕

第一番目四建目　船瀬内の場

役名＝後家、お幸。庄屋、本作。鹽屋村の多四郎。姉娘、お菊。妹娘、お照。

本舞臺、貧家の飾りつけ。下の方に門口、これに船瀨園右衞門と書いたる表札。正面暖簾口、一間の障子屋體、長押に大層なる鑓薙刀を飾りつけ、暮の内より船瀨園右衞門後室お幸、老けたる屋敷の形にて團扇を持ち、傍らに掛け火鉢に蚊遣り仕掛け、娘お菊、やつし着流しの形にて、お幸が肩を揉みながら、折々團扇にて蚊を追ひ、よき所に行燈。百萬遍にて幕明く。

こう　コレ、姉や、もう初夜でもあらうに、アノ妹のお照は、踊り場から、まだ戻らぬかいの。

きく　ハイ、お前樣のお鹽梅の惡い事を存じて居りますに依つて、今にも歸りませうわいなア。

こう　此やう事ぢやに依つて、わしは若い娘の一人、あの大勢の踊り場へ行かぬものぢやと云ふけれど、其方のあれ程に、友達衆やあたり近所の娘達が、誘ひにお出でぢやに依つて、やつてくれいと云ふ事、聞かぬやうにも惡いさかい、やりはやつたが、心遣ひでござるわいの。

きく　ちつとも母樣、お案じなさる事はござんせぬ。人中で怪我でもせぬやうにと思うて、わたしが肌身も離さぬ、目白明神樣の劍難除けのお守り、アノお照に貸して出しましてござります。

こう　それ程までに、妹が可愛いものかいの。今さら云ふ事でもなけれども、其方の親御は船瀨園右衞門と云うて、二條の藏人淸平さまの、お目付け役を勤められ、殿樣の思し召しにも叶うたお人であつたが、其方の母御は、其方を產み落さるゝと血が上がり、七夜も立たぬうちに亡くなられ、わしは後添ひ。あの娘のお照が生れし時、わしが乳の好さがお上へ知れて、その頃御誕生遊ばした、愛護の若さまへ、差上げるやうにとある事ゆゑ、若君樣へお乳奉公。長う勤めて居るうちに、相役の嫉みにて、八年以前牢入りされ、今の堺の多四郎が親御の世話にて、この國の鹽屋村へ、親子四人引越して來てからは、園右衞門どのは病死。人に苦勞は絕えぬものぢやわいなう。

きく　左樣ならばアノ妹と、愛護さまと、お乳兄弟でござりますか。

こう　サア、冥加ない事ではないか。云はゞ其方は生さぬ仲の姉娘、粗末に育てゝは人は知らず、あの佛壇から實の母御や、園右衞門どのが見てござらうと思うて、血を分けたお照より、わしが其方を可愛がれば、其方も又、

何にも知らいで、生みの子も及ばぬ程に、何から何まで心を付けて、少しの事でもわしが云ふ事を逆らはぬやうにしてたもれば、わしや嬉しうて、心で禮を云うて居ますわいの。

さく　勿體ない事云うておくれなさります。初めて承はりました私しが身の上。これまで御丹誠なされて下されましたものを、却つて眞實の母樣より、あなたが有り難うござります。モウ〳〵、お心措きなく、この後とても、何なりと仰しやつて下さりませ。さりながら、甲斐性のない女子に生れまして、一人の母樣に不自由させます事かと存じますれば。

　ト思ひ入れあつて

これはしたり、蚊燻しが消えたさうなわいな。

こう　また後に足を揉んでもらひませう程に、マア〳〵、ちと休んで、門でなりと涼んだがよいわいなう。

きく　アイ〳〵。今のうちに、お照が行水しやるやうに、湯でも沸して置いてやりませう。

こう　イヤ〳〵、あんな人の云ふ事聞かぬ者へ、なんの熱い目せずと、捨て置いたがよいわいの。

きく　アイ〳〵。左樣なら茶でも入れて上げませう。

ト　お菊、二重舞臺の圍爐裡へ、茶釜を焚きつける。此うちてんつゝになり、向うより、お照、以前の形にて團扇を持ち、續いて杢作、提灯を提げ出で、直ぐに本舞臺へ來て

てる　モシ〳〵、杢作さま、これが私しが内でござります。

杢作　慥か門口に、舟瀬閑右衛門と書きつけござつたの。

てる　左樣でござります。マア〳〵、内へお入りなされませ。

杢作　そんなら許さつしやい。

　ト二人、内へ入る。

きく　お照、いま戻つてかいなう。

てる　アイ。母樣、只今戻りましてござります。

こう　只今どころではないわいの。平生鑓薙刀を稽古したり、小太刀を遣うて見たいのと云やるやうな、大それた望みする事ぢやに依つて、大勢の所も構はず、若い身空で踊りをかこつけに、夜歩きするは、うとましい事ぢや。姉のお菊が心遣ひしやるに依つて、云ふまいとは思うたが、居合ひ兵法の稽古しやるやうな心ぢやに依つて、ついと云うて置くのぢやわいの。

きく　ほんに、それは悪い事でござります。その事もわた

しが又、申しますでござります。コレイナウお照、なぜ、もつと早う戻つてはくれぬぞいの。

てる　サア、わたしもお前が其やうに、氣を遣うて下さんすに依つて、踊りしまうたら、直ぐに戻りませうと思ひました所に、モシ／＼姉様、喜んで下さんせ、お屋敷に御奉公の口があつて、母様はどうあらうか知れねども、わたしやいつまでも此やうに内に居て、氣の毒な事もござんすに依つて、どうぞお前もとも／＼母様へ、好いやうに云うて、わたしを御奉公に出して下さんすまいかいなア。

きく　マア、それは悪い事を聞くやうにもない、母様にも喜ばしやんせいでわいなう。モシ／＼、お聞きなされましたか。アノお照が、好い奉公の口がござりますといなア。

こう　わしも爰で聞いて居ましたが、お武家様の御奉公なれば、連合ひ園右衛門どのにも、草葉の蔭でさぞ喜びであらう。そりや又、どなたのお世話ぢやぞいなう。

てる　ハイ、梅が鼻の杢作さまのお世話で。

きく　主もお照と一緒に、爰へお出でなされておやわいなア。

こう　これは／＼杢作どの、ようお出でなされて下されました。コレお菊、お茶でも上げて下されぬかいなう。

きく　ハイ／＼。

てる　サア／＼、お煙草お上がりなされませ。

ト　お照は煙草盆を出す。お菊、茶を盆に載せて囲爐裡より酌んで来り出して

きく　サア／＼、お茶一つお上がりなされませ。

杢作　構はつしやりますな。時にお照の阿母、斯うでござります。今日は梅が鼻の踊りで、西垂見から東垂見村の間の、娘子供が出た程に、どれとてもこんな在所に似合はぬ娘揃ひ。その中で爰の内のお照さまが、どうやら見掛けから器量と云ひ、立振舞ひ、播州のお屋敷へ御奉公に、お抱へなされたいと、お侍ひ衆がお頼み。屋敷は當時室町の御出頭、青山さま、お當がひが七兩二分に二人扶持。お茶代が二季に一兩二分に二度のお仕着。もし殿様のお氣にでも入つて、表奉公にでも出るやうになれば一夜檢校。阿母も姉御も、どのやうな結構な身の上に。こりやマアその時の事サ。差當つて急に抱へなされたいと、コレ／＼。

ト　懐中の紙入れより金包みを出し

支度金として十五兩。なんと、木に餅の生るやうな相談でごんすが、この十五兩を盆前の役に、立てる氣はござらぬか。

こう　それはマア、何から何まで、いかいお世話でござりましたな。

杢作　サア、わしもお照さまの世話するのも、二十五兩の一割の禮が貰ひたいばつかり。サア、何もかも打明けた相談がようごんす。

こう　左樣でござります。併し、お志しは有り難うござりますが、内縁ござりまして、嫁ぎます事ならば、どのやうな小身な御家中でも大事ござりませぬが、御奉公と申して、はお氣の毒ながら、お照はどなた樣へも上げませぬわいなア。

杢作　そんなら相談申すお照どのを、御奉公に出されずば、姉御のお菊さまを、お屋敷の御奉公はどうでござらうの。

きく　ハイ、私し事は御奉公に限りませぬ、例へ緣付きの事でも、母さへ得心いたされます事なら、どのやうな事でも、否とは申されませぬ。私しが自由には及ばれませぬわいなア。

杢作　今時の娘に、こなさんのやうな、律氣貞法に親を大事に思つてる人は、この鹽屋村に又と二人ござりますまい。

きく　なんのマア、親を大事にする事は、その身の冥利でござります。

杢作　奇妙々々。時に妹御は、見掛けに似合はぬ、やつとうが好きとは、飛んだ事でござるの。

きく　ぢやに依つて、男を何とも存じませぬわいなア。

杢作　と云つて色氣のある事わいの。そんなら又、屋敷方に、片付きの口でもあつたなら、相談を。

こう　ア、申し、折角御深切にお出でなされました杢作さま。せめてお禮に酒一つ、お上げ申したいものぢやなア。

きく　ハイ〳〵、あのやうに世話燒かれます。もそつとお話しなされて下さりませ。

てる　また其うちに、今の相談も、出來まいものでもござりませぬわいな。

杢作　親御が親御なれば、姉妹仲も草と水。そんなら寢酒に一杯、やつて行きませうか。

こう　餘り爰は端近、奥でゆるりとお禮申しませう。

杢作　これは〳〵。肴は鯛の鹽辛でようござるぞや。

きく　アイ〳〵。マアお出でなされませ。

杢作　そんなら、御馳走にあづかりませうか。
てる　なんのマア。
こう　斷うお出でなされませ。
ト唄になり、お幸、杢作を連れ、障子の内へ入る。
きく　サア／＼、わが身に行水させうと思うて、湯を沸かして置いた。サア／＼、早う使うたがよい。
てる　イエ、わたしや杢作どのへ酒上げて、お前の脊中流して上げう程に、姉樣、先へ使うて下さんせ。
きく　何やら忘れたと思うた。それ／＼、日向明神の、劍難除けのお守、掛けて戻つてたもつたかいなう。
てる　アイ／＼。有り難いお前のお守。すんでの事に失ふ所であつたわいなア。
ト襟に掛けてある守り袋を取つて戴き、お菊に渡す。
きく　そりや勿體ない事であつたの……わしが守は此やうに、嵩高ではなかつたが。
ト合點のゆかぬ思ひ入れあつて、守り袋の内より以前の一通を出し、思ひ入れあつて、行燈を引寄せ、上書を見ようとする。お照、立ちかゝり
てる　青山兵庫之助どのへ、高階彈正。
きく　コレ。

ト　お菊、一通を懷中へ入れる。
おおや。
ト唄になり、お菊、お照、暖簾の内へ入る。この唄のうち、向うより鹽屋村多四郎、剃下げ頭、大やつしの形に一腰ぼッ込み、襟に手拭を卷き、墓場の盆提灯を提げ出て、直ぐに舞臺へ来て、門口を足にて明け、ズッと内へ入り、あたりを見廻し
多四　叔母貴、何處にごんす。お菊は居ぬか。お照はうしやアがらぬか。
ト怒鳴つて居る。障子の内よりお幸、團扇を持ち出る。これより合ひ方。
こう　他人ではないが、どうしたものおぢや。人の内には、ちと遠慮もあるものぢやわいの。
多四　遠慮のあるも凄まじい。叔母貴と云へば何ぞと云ふと叱り手。姉は鼠取らず、妹はお轉婆。内で地獄でもするではなし、なんの遠慮があるものかいの。
ト云ひながら、上の方へぶッ坐つて大胡坐を掻き、煙草盆を引寄せる。お幸、氣の毒なる思ひ入れあり。
こう　そのマア憎らしい顏わいの。人にこそ云はね、幼ない時分から盜み根性のあるおのれ。せめて孝經は讀ますず

とも、實語教でも讀み居つたなら、さうでもあるまいに。
多四　サア、わしも惡黨仲間の付合ひも、疎覺めが惡さに、この頃は學問ばかりして居ますわいの。
こう　學問するとは、まだしもの事。そりや定めし、大學でも讀むと云ふやうな事かいの。
多四　イエ〳〵、四角な字はいけんゆゑ、女房持つたら見せつけやらうと思つて、いろは短歌を讀みますわいの。
こう　しや、ほんに、其方のやうな惡者に、誰れが女房になる者があらうぞ。
多四　その女房になり手がないに依つて、わしや叔母貴に逢ひに來たのでごんす……七年後に、ソレ、叔母貴の病氣の枕元で、用立てた十兩の金。へ、、、、なんと才覺して、どうぞ仕樣はござるまいか。
こう　成る程、その金の事忘れはせぬ。少さい時分、姉のお菊と末々一つにしてくれるやうにと、佛樣の遺言なれど、見屆けぬ其方の事、金借りる譯はなけれども。
多四　サア、そこが親類は親類、指が汚ないとて切つて捨てられませうかいの。そんなら、なんと、わしにお菊を下さらぬかいの。
こう　又そんな事吐かし居る。おのれがやうな奴、長く置いたら、どのやうな事云うて、わしに恥を掻かさうも知れぬ。コレ〳〵お菊、早うおぢや。

ト奥にて

きく　アイ〳〵、母さん、何の用ぢやえ。

ト團扇を持ち出て來て、お幸を煽いで居る。

こう　コレイナウ、また惡者の多四郎が、うせ居つた程に、早う去なせてたもいの。

トお菊、多四郎を見て

きく　ほんにお前は、甥御の多四郎さま。お前も母樣の氣質、知つてゞはござんせぬか。何を云うてあのやうに、お腹を立たして下さんすぞいな。

ト多四郎、お菊を見て、嫁らしきこなし。

多四　なんの、そもじが大事にしやる叔母貴を、わしが熱くせうぞいの。今夜ばかりは眞人間になつて、云ひ號けのわが身を、わしが女房に貰ひに來た。サア〳〵、早う帶でも仕直し、夫婦睦まじう、手に手を取つて行くのを、叔母貴に見せうかいの。
こう　イヽヤ、お菊を多四郎に添はす事は、わしがならぬ。
多四　ハテ、物覺えの惡い。云ひ號けではごんせぬか。
こう　お菊、彼奴に構ふ事はない。爰へ來て居やれ〳〵。

多四　そんなら、おれが云ふ事は不得心か。不得心なら破れかぶれ、たつた今室の津へ打ち賣つて、貸した金を取らにやア置かぬ。女、うしやアがれ。

トお菊を引立てる。

こう　こりや、お菊を何とする。

多四　何とせう、そびいて行くワ。邪魔になりや、叔母とは云はさぬ。踏み殺すぞ。退きやアがれ。

こう　ならぬ／＼。

トお菊を連れて行かうとする。お幸同じく多四郎を留めて居る。この立廻りよろしく

きく　危ならござんす／＼。

トお幸を圍ふ。多四郎これよりお幸を突き廻し、上の方へ投げ出し、お菊を連れて行かうとする。奥よりお照走り出て、お菊を引退け、ちよつとかゝり、多四郎を物の見事に投げ退け、起き上がらうとする所を、お照、懷中より紙に包みし金を出して多四郎に投げ付け

てる　その金を持つて行かしやんせ。

ト多四郎、金を持つて膽を潰す。此うちお菊、お幸を引き起し、介抱して居る。お照、側へ寄つて

何處も痛みは致しませんか。

きく　サア、お湯なりと、一つお上がりなされませ。

ト甲斐々々しく茶碗に湯を汲んで來て、お幸に呑ませる。

こう　なんと、あの多四郎は、憎い奴ではないかいの。

てる　左樣でござります。姉樣も姉樣ぢやわいなア。

きく　サア、何を云はれても甥御の事。ちつとは義理も。

てる　なんの他人、多四郎と云ふ人に、義理があるものでござんすぞいな。

多四　義理がないとはよく云つた。阿母の金の十兩、爰で取つたは夢に牡丹餅。サア、これからが利息の勘定せねばならぬ。三兩一分にしても、七年では八十四ヶ月、七十兩も取らねばならぬ所を、盆の報謝に五十兩に負けてやる。その代りにや妹のお照を、年一杯稼がせる。多四郎と一緒に來い。

ト立ちかゝつてお照が手を取る。

てる　尾羽打枯らせど舟瀬國右衞門が娘、慮外せば、身內の人とて免しやせぬぞ。見苦しいこの手を離すがよいわいな。

ト多四郎を投げ退ける。多四郎、直ぐに起き直つて、尻をからげ、鉢卷をする。

多四　うぬから先へ、ぶッ放してくれべい。

　ト　お照へ切りつけろ。お照、多四郎が利腕を取つて振り廻し自由にする。多四郎、堪えられぬ思ひ入れ。

てる　コレ、他人の多四郎さま、なんぼ他人と云ふ異名が付いてあつても、よう聞かしやんせ。ひよつとこの刃物の先が、鵜の毛で突いた程も母様に疵が付いては、こなさんの爲には叔母は親、後は云はいでも悪名は、こなさんもよう知つてゞあらうがの。此やうな人嚇しな事さんせずと、早う去なんせ。

多四　サア、去なんす程に、マ、、この手を放してくれろ放してくれろ。

てる　こなさんもこれに懲りて、この後とても、必らずあの姉様に、嫌らしい事云はぬがよいぞや。

　ト　直ぐに多四郎を門口まで連れ行き、其まゝ花道の中まで突きやり

早う行たがよい。

　ト　門口をしめる。合ひ方になり多四郎、痛むこなしにて、やう〳〵起き上がり、拔身を取上げ、鞘を忘れる思ひ入れあり、フツと心付き、懐中の金を出してニツコと笑ひ、また懐中へ捻ぢ込み、拔身を取つて鞘を取りに歸らうとして、氣味の悪き思ひ入れにて思案して

多四　サア、どいつらでも、寄りやがつたら撫切りだぞ。

　ト　生酔のこなしにて花道へ入る。時の鐘鳴る。

こう　コレ〳〵お菊、もう多四郎は去んだかいの。

きく　アイ、もう、歸られましたわいなア。

　ト　お幸、思ひ入れあつて

こう　コレお照、爰へ來や。

てる　アイ。

　ト　お幸が側へ來る。

こう　今わが身が、多四郎へ渡しやつたあの金は、ありやマア、どうした金ぢやぞいなう。

てる　サア、あの金はな……モシ、姉様、先刻出た物、早う母様へ、讀んでお聞かせ申して下なんせいなア。

きく　併し、あれを母様に。

　ト　思ひ入れ。

こう　お菊、そりやなんぞ、案じる事かいなう。

　ト　氣遣ふ。

きく　サア、それはな……アノ、常々御苦勞に思し召してお出でなされます、愛護の若さまのお身に付きましてな。

こう　なんぢや、愛護さまの事とは氣遣ひな。そりやマア、

どんな事ぢやぞ〳〵。
きく　そのお心ゆゑ、どうもお聞かせ申し惜いものぢやけれど。
てる　それでも、お聞かせ申さいでは、わたしが事もお聞入れが。
こう　エヽモ、二人ながら詳々と。サヽ、ちやつと早う云うて聞かしやいなう〳〵。
トおろ〳〵する。
きく　サア、そりやアノ……これでござります。
ト以前の密書を出す。
こう　その手紙は、どうしました。サヽ、早う讀みや〳〵。
きく　ハイ〳〵、只今讀みます「わざ〳〵飛札を以て申し入れ候ふ、然れば貴殿方へお預けと罷り成り候ふ、愛護の若儀、存命いたし居り候うては、貴殿我れ〳〵大望の妨げに相成り候ふ間、よろしく御手段なされ、殺害の儀專に存じ奉り候ふ、然る上は、兼ね〴〵御執心の雲井の前の身の上は、貴殿お心任せになさるべく候ふ、且又二條家所領の儀は、某へ仰せつけられ候ふやう願ひ奉り候ふ。」
ト此うち、お幸、いろ〳〵あり

こう　ドレ、その手紙を。
ト無理に取つて、つく〴〵と讀み
すりやアノ、わしが大切にお育て申した愛護さまは、青山どのへお預けとおなりなされたその上に、お命までも……ムウ。
ト思ひ入れ。
てる　サア、斯う云ふ手紙を見ましたゆゑ、縱しもわたしは青山さまへと、思ふ矢先に多四郎どのが、無理の督促、聞いて居られず、渡した金は、ありや杢作どのから、受取りました支度金でござりますれば、どうぞわたしを御奉公に。
こう　イヽヤ、ならぬ。
てる　エ。
こう　ヤイ、慈な妹の不孝者めが。
ト　お照、思ひ入れ。合ひ方になり
コリヤヤイ、可愛い其方達二人に替へて、大事の〳〵和子樣のお身の御難儀、お救ひ申して好い事なら、なんのおのれを遣るものぞ。それにマア、この密書を見居つたならば、斯う〳〵と、早速母へ話しするが道理。それをおのれが我まゝに、わしがならぬと留めた奉公。杢作ど

のと掛合つて、金受取つて他人に渡し、後で斯う云ふ譯ゆゑに、屋敷へ遣つてくれいとは、母に退引き云はさぬ爲ぢやな。

てる　ア、申し、さうでは。

こう　イヤ〳〵、さうぢや。さうでないなら、なぜ母がならぬと云うた詞を用ひぬ。

てる　サア、さう思し召しては、お腹も立つでござりませうが、さら〳〵あなたを手詰めにして、奉公と申すのではござりませぬ。一旦御恩のお主樣、その難儀を救うたら、少しは忠義の端ともなり、父御樣のお名までもと。

ト此うち、お菊、氣の毒がり、お照の袖を引く。

こう　精々また云ひ居るか。そりやおのれが名聞。忠義なぞとは白々しい。なんの要らざる出かし立て。おのれがやうに云ふ事を、聞かぬは母が、斯う〳〵して。

ト煙管にてお照が額を打つ。お照が額疵付く、お菊驚ろき留めて

きく　マア〳〵、御堪忍なされませ〳〵。コレ妹、其方も又……オヽ、其方の顏へ疵が付いたわいの〳〵……モシ、母樣、お照が顏へ、疵が付きましたわいな〳〵。

ト お幸、思ひ入れあつて

こう　なんの疵が付かうと構ひがあらう。捨て置きや〳〵。

きく　それでもお前、杢作どのから……モシ、そんならわたしや、ちよつと多四郎どのに逢うて、今の金を取り戻して。

ト立ち上がる。

こう　アヽ、イヤ〳〵、あの惡者の多四郎め、どのやうに云うたとて、どうして金を戻し居らう。儘にしや〳〵。

きく　でも、杢作どのへ支度金を。

こう　サア、その戻す支度金は……この母が胸にある。

きく　エ。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。お照、此うち疵を押へて思ひ入れ。

こう　お菊、其方は母と奥へ居ぢや。

ト行かうとする。お照取りつき

てる　モシ。

ト思ひ入れ。お幸、振り切り

こう　不孝者めが。

ト お照、ハアと泣き伏す。唄になり、お幸、お菊はお照へ心を殘し、一緒に奥へ入る。あと合ひ方。お照、額を上げ



附　番　繪　の　演　初

てる　日頃から苦勞にしてお出でなさるゝ、愛護さまのお身の御難儀、お聞きもあらばと思うた母様、常に替つてあの様子…．手詰めの金ゆゑ、多四郎に、渡したが曲事とて、剰さへこの顏へ、疵までつけてのお腹立ち…なんぞ思案のある事か。どうも合點がゆかぬわいなう。

トいろ／＼思案して居る。奥にて

杢作　お照どのや／＼。

ト矢張り合ひ方にて、暖簾口より杢作出で、お照、思案して居る。

オヽ、お照どの、爰にかえ。さて／＼御馳走で、ついトロトロとやらかしました。

ト云ひながら、お照が顏を見て驚ろき

ヤア、お照どの、ソレ、こなさんの顏へ疵が付いた／＼。

てる　オヽ、杢作さま、今つい我が手に、烟草盆へ轉げかかつて此やうに。

杢作　此やうにどころぢやござらぬ。それぢやア奉公に出られませぬぞえ。

てる　サア、とてもわたしは…　これでは參られませぬわいなア。

杢作　どうして／＼。生々しい疵で、明日や明後日。コレマア、飛んだ事だ。お屋敷へどうも云ひ譯がない。マア、何にしろ、奥で渡した支度金、返して下さい／＼。

てる　サア、そのお金はな。

杢作　無いぢやア濟まない。支度金を取つて、直ぐに行くつもりのところが顏に疵。どうもわしが、なんと云ひ譯のあるものだ。よい／＼、金の道行きが付くまで、あそこにある大層な鑓薙刀、あれでもお役人に渡して、詫び言でもしにやならない。

てる　アヽ、モシ／＼、杢作さま、御尤もではござりますが、鑓は仁王三郎、薙刀は貞宗と云うて、父御様の大事のお形見。どうもあれは。

杢作　渡されぬと云つて、どうさつしやる。向うが青山兵庫さまだけ、ちつとむづかしうござるぞや。

てる　サア、そこをどうぞ。

杢作　それだと云つて仕様がない。マア、金の方の付くまで。

ト無理に取りに行かうとする。お照、引留める立廻り。此うち奥よりお菊出て、この中へ入り

きく　モシ、杢作さま、御尤もでござります。お前もお屋敷へ云ひ譯がございますまい。斯うなされて下さりませ。

妹の代りに青山さまへ、わたしを遣はされて下さりませ。

ト お照、思ひ入れ。

杢作 なんと、妹の代りにアノお前を、そりやモウ、お前なら、目見得をせずにわしが請合ひ。お屋敷へは持つて來いだが、モシ、そりやア母御は合點かえ。

ト お菊、お照へ氣兼ねして

きく サア、母様は。

ト 閊へる。障子の内にて

こう 母は得心。御奉公に遣はしませう。

てる エ。

ト 思ひ入れ。合ひ方になり、障子の内よりお幸出る。

杢作 そんなら姉のお菊さまを。

こう 杢作さま、お世話なされて下さりませ。

ト お菊は始終お照へ思ひ入れ。お照ムッとして

てる モシ、母様、お前はアノ姉様を。

こう また親に差配立てか。

てる さうではなけれど。

こう 默つて居らぬか。

ト お照、腹の立つこなし。

杢作 コレナウ姉さん、お前、いよ〳〵ござるかえ。

きく サア、母が参れと申しますゆゑ……隨分参りますでございます

杢作 母様、お前承知だな……ナニサ、世話はちつとも構ひませぬ。そんなら、もうお屋敷から、迎への人が來て居ませう程に、サア、支度をして下さらぬか。

ト お菊、思ひ入れあり

きく モシ、どうぞ斯うなされて下されませ。直ぐにお宿まで参りませう程に、どうぞお先へお出でなされて下さりませい。

杢作 成る程〳〵、そんならわしは先へ行きませう。どうぞ早く來て下さりませ。

ト 云ひながら、小提灯提げて門へ出る。

幸菊 ようお出でなされました。

杢作 ほんに、わしが内は梅が鼻の、庚申塚の後でござる程に、お菊どの、待つて居ますぞや。

ト 合ひ方になり、とつかは向うへ入る。お幸、お菊あと見送つて、お照と顔見合せ、思ひ入れ。お菊、門口閉める。お照、思ひ入れあつて、お幸が側へ寄つて

てる モシ、母様、先刻はわたしをあのやうに、お叱りなされてこの顔へ……それに又、いま姉様を青山さまのお

屋敷へ

きく　行けと仰しやる母様の、お志しの嬉しさと、云ふに云はれぬ其方の手前。モシ、譯をとつくり妹へ、お聞かせなされて下さりませ。

てる　そんなら姉様、なんぞ樣子が

ト思ひ入れ。

こう　ムウ、なうてどうせう。コレ、お照、マ、爰へ。

てる　アイ。

ト思ひ入れあり、お幸の側へ寄る。お幸、お照を見て

こう　さぞ其方は母ながら、わしが恨めしからうなう……折角あれ程思ひ詰め、忠義を立てに行く其方を、無理に叱つて今姉を、青山どのへ奉公に、行けと云うたは過ぎ行かれし、位牌の夫へ、母が義理。

てる　なんとえ。

ト合ひ方變つて本調子になる。

こう　二條の關白兼基公より、連綿たるお家の若君、お預けの身となり給へば、どうがなしてと忠義の武士、定めて心を碎くであらうが、門戸の出入り嚴しくして、入込み難き青山どの、そこへ幸ひ奉公は、こりや願うてもない天の導き。首尾よう虜の若君を、誘なひ申して立退くは、浪人しても船瀨園右衞門が娘、オヽ、天晴れ健氣出かしたと、妹の其方を譽めるにつけ、姉の身として安閑と、母親の腰に付き、妹に劣つた埒明かず、愚かな者よと噂せば、草葉の蔭の父御前が、身腹を分けぬお菊ゆゑ、血を分けた子の妹に、手柄をさせてひけらかす、誠に繼母根性と、もし思はれてはどうも立たぬ。それゆゑ最前あの密書、開くうちからして思案を極め、妹の代りに義理のある、姉に忠義が立てさせたく、可愛さうに形振りを繕らふなりの娘の顏へ、疵を付けたはあつちから、變替へさせう爲ばかり。お照、さぞ本意なからう、口惜しからうが、母が心を推量して、堪忍してくれいやい。

ト思ひ入れ。お照、此うち、いろ／＼こなしあり

てる　アヽ、モシ／＼、勿體ない事仰しやります。常々からのあなたのお氣質、それに引替へ先刻の折檻、これには何ぞ樣子があらう、とは思へども年取らぬ身の悲しさ、ちつとは恨んで居りましたが、モウ／＼、そのお話で、わたしや何とも存じませぬ。ようこの顏へ疵付けて下さりました。却つてわたしや、お嬉しう存じます。

ト思ひ入れ。

きく　最前奥で母様の、斯う／＼した譯ゆゑに、青山どの

の屋敷へ行けと、仰しやつて下さんす、お志しは有り難けれど、其方の心も思ひやり、御辭退申せば御位牌の、父樣に恨ますか、但しはもしもの時はと、心臆れて行きとむないかと、わざと勵ますお慈悲のお詞。否と云はれぬお主の難儀。それゆゑ妹、其方の手柄は、この姉が貰うたぞや。

てる　なんの他人ぢやあるまいし、二人が仲で若君を、お救ひ申せば忠義は一つ。

こう　とは云へ未だ善惡の、誠知れざる青山どの、密書の心に違ひなくば、もしもの時に女の身一つ。

てる　西も東も敵の中、取圍まれたら、なんとなさんす。

きく　わしも舟瀬が娘ぢやもの、命を捨てゝも若君を、お救ひ申して、首尾よう館を

てる　立退かしやんす、その所を。

ト側より鑓の炭取を打ちつける。お菊、其まゝ中に打ち落し

きく　こりや妹、何しやる。

てる　サア、もしやとそれが氣遣ひさに。

きく　ムウ、そんならわしが嗜なみを。

てる　御慮外ながら。

きく　アノ爰で。

てる　サア。

きく　サア。

てる　サア。

ト圍爐裡の自在を鑓にして突いてかゝる。お菊、有り合せたる鞘にて鑓先を刎ね、兩人ちよつと立廻り、お幸、二人に目を付ける。兩人左右へ別れてしやんと見得。これより白囃子になり、兩人掛合ひの立廻りよろしくあつて、トゞお菊、お照の鑓を卷き落す。お照、思ひ入れ。

流石は姉樣。

こう　オヽ、出かしやつた。

ト三人、顏見合せ、チヨンと拍子、木の頭。

きく　お恥かしうございます。

ト行儀に手を突く。この仕組みよろしく

幕

第一番目五建目　青山館の場

役名——二條愛護の若。高階彈正景連。黑澤軍八。

赤石兵馬。尼崎大藏。御嶽惡五郎。木田村又兵衞實ハ御ヶ瀬兵部。田舍娘、お松實ハ腰元松ヶ枝。青山妹、八汐。下郎、早苗之助實ハ山名主水之助持定。山名左衞門持豐實ハ鹽屋村多四郎。燒物師藤兵衞。鎌田又八秀通。腰元、お菊。同妹、お照。青山兵庫之助兼光後ニ鐵山。

本舞臺、三間の間、向う高足、金襖、總張り障子。上の方手水鉢、大きなる芭蕉の大株、好みの道具。幕の内より向うにて、高階彈正さまお入りと呼ぶ。下がれ〳〵の聲。太鼓謠、てんつゝにて幕明く。

ト下座より黑澤軍八長連、明石平馬、神崎大藏、上下大小にて出迎ふと、向うより高階彈正景連、御嶽惡五郎高定、上下大小にて侍ひを連れ出る。後より木田村の又兵衞、百姓の形にて藁苞を脊負ひ、菅笠を持ち、お松、田舍娘の形、菅笠を持ち、これに早苗之助、奴の形にて六尺棒を持ち

早苗　下がれ〳〵〳〵。

ト花道より

又兵　モシ〳〵、私しは木田村の又兵衞と申します者。爰へ連れて參りましたは、私しが姉の娘。

早苗　ヤイ〳〵、役にも立たない身の上話し。あなたをどなたぢやと思ふ。二條家の伯父御、高階彈正さま。

又兵　サア、その高階さまが、青山兵庫さまのお屋敷へ、お出でなさるは、ちよつと好い折柄。ナウお松。

まつ　それ〳〵、斯う云ふ所へ來合せたも、死なしやんした母樣の、お願ひが叶うたと云ふ印でがなござんせう。

ト嬉しがる。

彈正　この家の主の兵庫之助に、申し談ずる仔細あつて參る折柄、幸ひの願ひとは、合點のゆかぬ兩人。

惡五　賤しい樣をして、高階さまへ直々に、慮外な奴の。

軍八　兵庫之助申し付けにて、お出迎ひに罷り出でました黑澤軍八。

兵馬　赤石兵馬。

大藏　尼崎大藏。慮外者を、追ひ下げい〳〵。

早苗　下がれ〳〵〳〵。

軍八　何は兎もあれ、先づ〳〵これへ。

彈正　罷り通る。

又兵　申し、どうぞ。

早苗　イヤ〳〵、下がれ〳〵。

ト右の鳴り物にて皆々本舞臺へ來り、好きやうに坐る。

軍八　誠に彈正さま、今日のお入りはな。

彈正　兼ねて二條の藏人存生の砌り、一家たる身共へ殘し置いたる遺言狀。先達て申し出づべき處を、寶紛失ゆゑ愛護の若は當家へお預け。二條の家も退轉ゆゑ、その儀にも及ばず。然るところこの程、その刃の太刀を詮議仕出せし者には、御恩賞賜はらんとの風聞。

惡五　外々で詮議されうより、御一家の彈正さま、お尋ねなさるに付いても、清平卿の遺言狀が第一。

軍八　して、その遺言狀は。

惡五　知れた事。雲井御前は女、愛護は弱冠なれば。

彈正　迷惑ながらこの彈正に、二條の家を繼いでくれいと、兄清平の遺言。

又兵　モシ〳〵、彈正さま、憚りながら、さう承はりましたゆゑ、お願ひに參りましたは、この女子。

ト　お松を其處へ連れて出て

此やうに致して置きますれど、こりや二條の藏人清平さまの、落し胤でござります。

皆々　ヤア〳〵。

ト彈正、お松を見て

彈正　ヤア、わりや雲井の前の腰元、松ケ枝ぢやアないか。

まつ　成る程、二條のお家に勤めて居りました。

又兵　サア、これが母は私しが姉、二條のお家へお茶の間の奉公、清平さまもお若い時分。緣でかなお手かゝり、身持ちになつても奧樣の嫉妬強く、在所へ引込み、安々と、平產の上で、これが母が亡くなりました時分、御家老樣を以て仰しやつて下されましたは、例へ腹は卑しくとも、胤は清平公の御胤。末々惡いやうにはせぬ程にと、それを聞いて姉は臨終。それから手一つで育てました。牛にも馬にも踏ませぬやうになりましてから

まつ　わたしが願うて二條のお館へ、御奉公に上りましたは、勿體ない事ながら、お主樣ではない、心の内では父御樣に、お宮仕へ致す心で居りました所に、お家の騷動。

又兵　これが事を申し出さうと思ふうち、お家は沒落。せう事なしに又在所へ、引取つて置きましたが、今も承はれば、二條のお家を、あなたがお繼ぎなさるとやら。左樣ならどうぞ。

まつ　母樣の遺言でござりますれば、愛護さまの兄弟とも云はれ、父上清平さまの御菩提をも弔ひたうござります。

彈正　成る程、筋の無き事をも申すまいが、その女、清平

が胤と云ふには
惡五　何ぞ慥かな證據があるか。
又兵　ほんに。姉が病氣の時分、お屋敷へ使ひに參つた節、密かにお庭へ呼び出され、相違ないおのれが胤、後日の證據と淸平さまが、直ぐにお書付けを下さりました。コレコレ。
ト懷の紙入れより一通を出して
この折捺して下さりましたは、在所ではマア、印形なれど、何ぢやか斯う大きな……モシ、何とやらでござりました。
軍八　オヽ、淸平さまの袖判なら、そりや猿の印であらう。
又兵　成る程、その印とやらが證據でござります。
ト出す。軍八取り、彈正へ渡す。彈正見て
彈正　ナニ〳〵「木田村の又兵衞養育の、松と申す女、某が落し胤に相違これなく候ふ間、淸平死後二條家相續の者、粗略あるまじく候ふものなり。淸平」……ムウ。この一書に猿の印を捺されたは。
又兵　なんと證據でござりませうか。
彈正　成る程、斯う云ふ書面を所持するからは。
兵馬　淸平公の御胤に。

大藏　違ひござりませぬか。
彈正　如何にも身共、二條家を相續いたさば。
まつ　お屋敷へ引取りなされて下さりますか。
惡五　これあればこそ玉の輿。
彈正　取立てゝやらうと云つたら好からうが、茲な大騙りめ。
松又　エヽ。
彈正　淸平の奧方は身共が姉。操正しく、悋氣嫉妬は七りけつぱい。それに何ぞや、淸平が胤を、何として打捨て置かう。これが騙りの顯はれ口。
まつ　イエ〳〵、なんぼさう仰しやつても、書いた物の慥かな證據。
彈正　そりや、謀書謀判だ。
ト懷中より袱紗包みの猿の印を出して、鼻紙へ捺して
淸平の袖判は、コレこの通り、珊瑚樹を以て彫刻したる、猿の印とはこの事。この書面のは寸法相違。
松又　エヽ。
早苗　すりや、此奴等は騙りでござりますか。
彈正　騙りも騙り大騙り。以後の見せしめ。打ちのめせ。
兵大　心得てござる。

又兵　こりや堪らぬ。

ト　お松を連れ、逃げ出すを、惡五郎、軍八、取つて押へる。

まつ　マア〳〵、待つて下さりませ。たつた一言申したい。お情でござります。成る程、こんな騙り事に、參りましたは悪うござりますれど。

又兵　たつた一人の母親が大病人、氣を入れねば本腹せぬと醫者どのゝ話し。貧乏人の才覺ならず、二條家を聞いて、こんなどさくさに斯うしたら、それから金にせうと、フト致した出來心。

まつ　これも母樣大事、孝行ゆゑぢや。お免しなされて下されませ。

又兵　御免なされて下さりませ。

早苗　どこへ御免。御兩所樣、手緩い〳〵。この奴めがこの棒で。

ト　惡五郎軍八を押退け、兩人を叩く。又兵衞、お松、命から〴〵逃げて向うへ入る。早苗之助も追ひ駈け行かうとするを、惡五郎留めて

惡五　奴待て。

早苗　イヤ、今の騙りめを。

惡五　イヤ、騙りより詮議はおのれ。爰へ來い。

早苗　ヘイ。

ト　舞臺へ歸る。彈正、目配せする。

皆々　動くな。

ト　取卷く。向うにて「八汐さまお歸り」と呼ぶと、直ぐに鉦入りの賑やかなる出唄になり、向うより八汐、裲襠衣裳にて扇を持ち、後にお菊外四人、何れも腰元の形にて、手頃なる短冊竹へ色紙、梶の葉、銘々これを持ち出で本舞臺へ來て、早苗之助を圍うて八汐、上へ通り

八汐　早苗之助。

早苗　八汐さま。

惡五　これで讀めた。先刻から見た顏だとは思つたが、道理こそ、荒木左衞門が下部、アノ早苗之助。又この屋敷へ奉公に失せたか。

早苗　遙か下ざまの者ゆゑ、御存じないと思ひの外、お見知りある上は、如何にも早苗之助めでござります。

彈正　云はゞお咎め同然の荒木が下部、素浪人の食ふ物がないゆゑに、また二君に仕へるか。併し、そりやそれにもしろ、下部の參る事ならぬこの奥御殿に、まごついて

うせるは、盜みでもひろがう爲か。何れも、繩掛けさつしやい。

皆々　腕廻せ。

ト　かゝる。

きく　アイヤ、憚りながらその者に、繩は掛けられませぬ。

彈正　わりや新參の腰元お菊。此奴に繩が掛けられぬとは。

きく　サア、下部の參る事ならぬ奥御殿へ、參りましたは御用があつて。

惡五　そりや誰れが。

きく　八汐の方さまの。

皆々　なんと。

八汐　ア、コレ。

きく　ハテ、今日は七夕の御祝儀。乞巧奠へお上げなさるこの短册、此やうに認めてお出でになりたれど、折惡しうこれを高う上げてくれ手がないゆゑ、幸ひな事と、御用を仰せ付けられた奴どの。サア〳〵、この笹を、早う上げて下さんせ。

ト　短册竹を持つて來る。

兵馬　ハテ、高が短册竹位ゐ、隨分身共に云ひ付けてもよい事よ。

きく　イヤ、お前樣ではならぬ。なぜと仰しやれ、お前樣のお名は兵馬さま、七夕さまは牛と馬とは、乘換にやアなりませぬ。

大藏　然らば尼崎大藏は。

きく　大藏さま、象も矢ッ張り獸のうち。差合ひでござります。

女皆　こりや、尤もぢやわいなア。

ト　此うち早苗之助、短册竹を下の方へ括る。

彈正　新參者にしては、なか〳〵小氣轉の利いたお菊とやら。身共は高階彈正、只今の知行に二條の家督も取るならば、龍に翼の身分なれど、心に任せぬは色の道。それなる八汐に執心ゆゑ、申し入れて、兼光は得心なれど、兎角彼れこれ返事の延引。なんと其方が働らきにて、首尾なるやうには出來まいか。

ト　八汐の前へ嫌らしき目遣ひ。

八汐　また彈正さまの嫌らしい事ばかり。なんぼ兄上の仰せでも。

きく　モシ、それも一槪には仰せられぬもの。何事も御緣次第。その辻占はこの七夕さまの、あの短册の歌が、好い吉凶でござりますわいな。

女皆　成る程、これも好いわいなア。
軍八　好いと聞いては、身共もこの中に執心な女がある。ドレ〳〵。
ト短册竹の歌を一枚取つて
年毎に逢ふとはすれど七夕の、ぬる夜の數は少なかりける。
きく　これは、年毎にお前が、附けつ廻しつ、逢はう〳〵と思はしやんしても、先で嫌がつてぢや程に、ぬる夜の數ぞ少なかりける。
腰一　ドレ〳〵、わたしが思ふ戀を。
ト一枚取つて
天の川遠きあたりにあらねども、君が綱手は年にこそまく。
きく　サア、遠き渡りにあらぬお前の戀人、心長う待つたなら、君が綱手はあると云ふ、好い歌でござんす。
腰二　ほんにきついもの。八汐さま、あなたもどこやらの人の心をな。
八汐　ほんに、それ〳〵……七夕の夜とての姿立ち隱す、霧の戸張に秋風ぞ吹く……こりや判じてもらふに及ばぬ。夜とての姿立ち隱すとは、思はぬ事にて久しう逢はぬうち、云ひ交した緣も、霧の戸張りに秋風ぞ吹く……なぜに秋風が吹くぞいなア。
ト早苗之助へ思ひ入れ。
早苗　イエ〳〵、その秋風は、女七夕にありたがるもの。なぜと仰しやりまし。男七夕が牛を牽いて、のろ〳〵して居るうち、機を織つては居いで、得て夜這星に歩きたがる、天の川の水臭い、短册の短氣が起りますわいの。
八汐　アレ又、あんな。わしが心を七夕の疑がうても、手爾波が合うて居るわいなア。
きく　ア、申し、心を紅葉の橋よりも、願ひのいとしい可愛いは、互ひの情を立琴次第。梶の葉の取りやうで、星の契りは叶ひますわいなア。
惡五　何の講釋。根ッから解るものぢやアない。
彈正　イヤ、解つてある。思ひ内であれば色外に顯はる。八汐が素振り、身共を嫌つて居らうとも、兼光に申し入れたれば、兄の威光で。
早苗　得心させる思し召しか。
八汐　なんの返事をしませうぞいなア。
トぴんとする。
きく　ハテ、それもこの短册竹の、割つて云はぬが心の花。

八汐　色紙の紙の色見えて。
彈正　うつらふ心か。
早苗　うつさぬか。
惡五　兼光どのに逢つた上。
軍八　有無の返答。
彈正　女ども、案内しろ。
女皆　サア、お出で遊ばしませ。

ト唄になり、お菊、八汐へ思ひ入れ。八汐、先に腰元、大藏、兵馬、後より早苗之助、思ひ入れあつて下座へ入る。お菊殘り、こなしあつて

きく　御主人愛護の若さまの身の上に、危ない事のあると云ふ、密書が不思議に手に入つて、妹が參る御奉公を、母樣の云ひ付けで、わしがこの館へ入込み、心を付くれど、兵庫之助は惡事を企む樣子も見えず、その上、愛護さまに、情を掛けるは、どう云ふ心か。底心が知りたいものぢやなア。

ト思ひ入れ。管絃になり、向うより鎌田又八秀春、上下股立ちを取り、大小にて、大きなる提げ籠に、肴大根牛蒡青物を入れ、提げて來り、直ぐに舞臺へ來る。お菊見て

きく　ヤア、お前は又八さま、どこへござんしたぞいなア。
又八　オヽ、お菊ぼうか。今日は七夕の御祝儀。何はなくとも愛護さまに、腥物を据ゑやうと、門前の肴屋と八百屋へ行て來た。
きく　お前はマア滅相な。如何に節句の腥物が据ゑたいとて、愛護さまを獨り置きましては。
又八　イヤ、そりやア大事ない。お上からの預かり物。手ざす事はならねえが、兎角油斷のならぬは上がり物。そこで外の者が進めた物は、何でも上がるなと斷わつて置いた。
きく　ソレイナア、わたしもお前に話した通りの身の上ゆゑ、御奉公と云うて來たも、有やうは愛護さまのお身に付き添ひ、お宮仕へ申さう爲。
又八　イヤモウ、兼光がこの屋敷へ、愛護さまお預けになり給ひし時、付いて來たこの又八。何を云つても獨りぽつち。相棒がどう袋へ、そもじが來たので鬼に鐵棒。
きく　サア、鐵棒なら好いけれど、南無三方にならぬやうにと。
又八　コレサ、そんな氣にかゝる事は云ふものぢやアねえ。
きく　氣にかゝると云へば、兵庫之助どのが愛護さまに、

見せろ〳〵と云ふは、ありやア何を見せいと云ふのぢやえ。
又八　ありやア、二條の系圖を。
きく　それを見たがる兵庫どの、そりやア何ぞ心の内に。
又八　サア、さうあらうと思ふゆゑ、紛失の刃の太刀を詮議仕出してくれたなら、系圖を見せうと、此方も難題云つて置くのよ。
きく　サア、その太刀の詮議より、心ならぬは愛護さまの身の上。この屋敷を、連れて立退きたいものぢやわいなア。
又八　立退きたいにも囚人同然。神へ詣づる事までも、切手なければ門の通用、許さぬ鎌光。
きく　すりや、愛護さまに限つて……して、その切手は。
又八　懷中離さず持つて居る。
きく　それを此方へ。
又八　してやる工面が
きく　有りさうなものぢやなア。
ト障子の内にて
兵庫　愛護どの、二條の系圖を見せさつしやれ。
愛護　その儀は御免下されませう。

菊又　ヤア、あの聲は。
愛護　そこに居るは、誰れぢや〳〵。
ト思ひ入れ。唄になり、障子を引拔く。上の方に愛護、壺折り刺貫にて、經机に裝束を載せ、手摺の花拵らへして居る。側に兵庫之助、上下衣裳にて、煙草盆引へ居る。
きく　あなたは殿樣。
又八　兵庫之助どの。
兵庫　腰元お菊、鎌田又八。何かヒソ〳〵。仲の好い話しぢやなア。
ト兵庫之助、愛護、舞臺へ下りて來る。お菊こなし。
又八　イヤ、こりやア物でござる。愛護さまと身共は、この館の居候ふ。部屋子は奉公人の請けが肝心ゆゑ、いま愛嬌を云つて居ました。
兵庫　二人とも、私しならぬ預かり人。その心遣ひに及び申さうや。愛護さまにも、必らず心措き召さるな。
愛護　その預かりの寶、紛失させし科、糺明にも及ぶべきを、其許樣のお情にて、館へ引取り、お隱まひ下さるゝと云ひ、御懇意の段、忘れは置きませぬ、忝なう存じます。

兵庫　なんの〳〵、情は人の爲ならず。さしも名家の二條の沒落。拙者に於ても歎かはしい。やがて寶を詮議仕出し、元の通りに致して進ぜう。

又八　天地をも計るべし、只計り難きは人の心。淸平卿のお胤、御男子と云うては、一粒物の愛護の若。鎌田又八が守り立つて、心を付けにやアなりませぬ。

兵庫　三軍の亂れも狐疑より起る。疑ひ晴らすは、ハテ、どうがな。

ト思ひ入れ。

きく　憚りながら殿樣には、別してもない事に御思案遊ばさずと、マア、お煙草でもお上がり遊ばしませいなア。

ト煙草盆を出す。

兵庫　イカサマ、煙草もよからうが、膝とも談合。お菊、義信の立つて義信の知れぬは、なんと心苦しいものではないか。

きく　そりやアモウ、斯うと思し召すお心の届かぬは、自烈たいやうなものでござりますが……なんの、今は日蔭者の愛護さま、捨て置いたがようござります。

兵庫　すりや、其方もさう思ふか。

きく　ハテ、名を取らうより得の世の中。

兵庫　それもさうかえ……要らぬ氣もせに、こりや、肩がつかへて來たワ。

きく　お肩が張りましたら、ちと捻つて上げませうか。

兵庫　オヽ、導引、よからう〳〵。

きく　畏まりました。

ト琴入りの合ひ方になり、兵庫之助が肩を揉みにかゝる。愛護、思ひ入れ、

愛護　今日は未だ父上の御回向申さぬ。この中の御裝束を御位牌に例へ、心ばかりの花供養。普門品讀誦せうか。

ト二重へ上がり、經机に直り、心の内にて唱へる。又八立つて緞子障子をさし

又八　ドレ、其うち一服いたさうか。

ト大煙草を出し、煙草をのむ。

きく　ほんに、御縁と申しますものは味なもの。お馴染み申すが否や、不束な新參者を、外の女子衆よりお目かけられ、お側近う召使はれますは、冥加至極もない、有り難う存じます。

兵庫　なんの〳〵、心利きたる女子を尋ね、召抱へたも、愛護どのに付き添へん爲。ソレ、疑ひを受けると云ひ、其方も捨て置けといふは、コレ、緣なき衆生は度し難し

ぢや。イヤ、緣と云へば、そちや親兄弟があるか。
きく　ハイ、母と妹がござります。
兵庫　母と妹……妹も其方に似て、さぞ美しからうな。
きく　アノ、仰しやります事わいなア。
又八　イヤ／＼、美しいと云つたなら、油斷しないがよい、兵庫さまは、あゝ見えさしつても、大の女好きだよ。
きく　アノ、堅いお顏を遊ばして。
又八　オ、サ、二條の姫君、雲井の前さまに。
兵庫　ヤ。
又八　イヤサ、雲井と云ふ室の津の傾城に
兵庫　執心の事知られたか。
又八　蛇の道は蛇。穴の事なら、見通し／＼。
兵庫　さう天眼通を得られた上は、何を隱さう、あれには身も、ぞつこん執心なれど、雲井に梯橋。及ばぬ／＼。
きく　イ、エ、そりやア……枝高き花の梢も折れば折る。私しがその雲井さまなら、雨の降る夜も風の夜も。
兵庫　呼んでくりやるかえ。
きく　呼ぶどころか、居續けに。
兵庫　置き炬燵と口合ひか。
ト此うち又八、手拭を冠り
又八　花魁、燗が出來いした。
兵庫　こりや、面白くなつて來たワ。
又八　寐轉べ／＼。
ト又八、兵庫之助、寢轉ぶ。
兵庫　ア、コレ、禿が寐るものか。
又八　オツトシヨ。
ト起きる。
きく　禿開け、夜寐る鳥ぞ時鳥……鳥さへ寐ぬに其やうに寐なんすと、モシ、こそぐるぞえ／＼……とサア此やうに申しませうかな。
ト此うち兵庫之助、すや／＼寢るこなし。
これはしたり、御寢なるさうな。モシ、お風邪召しますなえ／＼。
ト起しても寢て居る。又八ちよつと拔きかける。お菊コレと押へる。管絃になり、お菊、思ひ入れ。又八、呑み込み、障子を明け、愛護を連れ出る。此うちお菊、矢張り揉む振りをして、兵庫之助が懷中より切手を引き出し、投げて遣る。
又八　こりや、通用の門切手。
きく　ちつとも早う。

又八　ソレ。
ト愛護を連れ行かうとする。
兵庫　盜賊待て。
又八　なんと。
兵庫　エイ。
ト起きながら手裏劍を打つ。又八、切手にて受ける。
切手割れる。
その切手では通用叶はぬ。兼光が手の內見たか。
きく　すりや、今の手裏劍で。
兵庫　打ち割つたら木片も同然。それで門が出られるもの
か。ム、、ハ、、、、。
又八　ムウ。
ト口惜しき思ひ入れ。直ぐに拔いて切つてかゝるを、
お菊、愛護を圍ふ。立廻り。兵庫、經机の上の裝束を
差しつけ
兵庫　待て又八。こりや淸平が着馴れし裝束。主を切つて
も大事ないか。
又八　なんと。
兵庫　手向ひしないは兼光が、二心あらざるこの場の潔白。
愛護　すりや、この愛護に、實心を以て。

兵庫　心を盡すも系圖が見たさ。
愛護　イヤ、その返事は、まツこの通り。
ト花手桶の水を裝束へ掛ける。
三人　これは。
きく　こりや、取りも直さず筑紫の濡衣。
三人　なんと。
きく　サア、濡衣とは、無き名を流す枕詞。愛護さまにも、
身に覺えなき實の惡名、これも濡衣。
ト花手桶へかける。
兵庫　この靑山に野心あると、疑ひ受けるこれも濡衣。
愛護　濡衣の袖より傳ふ淚こそ
兵庫　なき名を流す
又八　例しなりけり。
きく　この場で云はぬを花活けの、一旦こぼれし水に沁み
愛護　互ひの疑ひ晴れたる上は
兵庫　望みの系圖、見せるぢやまで。
又八　愛護さまのお身さへ無事に
兵庫　世に出す筋もあるならば
きく　わたしも素性をお話し申さん。
愛護　先づそれまでは

又八　濡衣の
兵庫　乾くその間が
きく　思案の納り
兵庫　しかと
又八　詞を
きく　モシ、武士に二言があるものかいなア。
　ト唄になり、又八、愛護、お菊、思ひ入れあつて、裝束を持つて奥へ入る。兵庫之助、殘つて
兵庫　新參のお菊め、濡衣の故事を引いたは、筑紫に生ひ立つた太宰の梅丸と、この衆光を感づいたか……ムウ、まゝよ。
　ト管絃になり、上の方の襖を明け、瀬戸藤兵衞、三建目の形にて、細工の箱を抱へ出る。兵庫之助、小聲になり
瀬戸の藤兵衞、誂らへの品は出來いたしたか。
藤兵　やうやく今朝までに、上がりましてござります。コレコレ、御覽じまし。
　ト箱の中より唐繪の皿を出す。兵庫之助、紙を啣へ、よくよく見て
兵庫　東山どのより拜領なし、身が家の重寶と爲す唐繪の皿に、一分一點も違はず。天晴れ藤兵衞、よく似せた。併し、土へ調合の彼の藥は。
藤兵　サア、砒霜石斑猫を土へ交ぜ、高野の奥の玉川の水で捏ねまするゆゑ、手の付けられぬむづかしい仕事。これもいつぞや二條の屋敷で、腰元松ヶ枝に惚れたが露はれ、お仕置になります處を、助かつたは嬉しいが、直ぐにこの屋敷へ虜、出來上がらぬうちは歸す事はならぬと、あの一間で、日の目も見ずに土の牢同然。松ヶ枝に早う逢ひたいたいの、その精力ばかりで仕上げましてござります。どうぞお約束の通り侍ひになつて、お金をたんと戴き、内へ歸りたうござります。
兵庫　尤もの願ひ。約束の通り侍ひに取立て、褒美もくれう。
藤兵　と云はせて置いてバッサリ。芝居でするやうなこつちやアござりませぬか。
兵庫　ハテ、かゝる大事を頼んだ其方……併し、拵らへたばかりで、未だ用ひぬその皿。首尾よく仕負ふせたその上で。とばかりでは落ちつくまい。
　ト箱の内より今一枚の皿を出して
手本に遣はし置いた誠の皿。十枚揃ふが家の重寶。これ

を一枚。
藤兵　すりや、これを私しに。
兵庫　オヽ、預かり置いて、褒美と引替へ。
藤兵　有り難うござります。左様なら、もう歸つてもよう
　ござりますか。
兵庫　人の目褄にかゝらぬやう、密かに。
藤兵　畏まりました。
兵庫　行け。
　ト管絃になり、毒の皿を袱紗に包み、持つて入る。
藤兵　ヤレ／＼嬉しや。こりや聞き及んだ青山さまの唐繪
の皿。これがありやア、御褒美は占めたもの。ドレ、内
へ歸つて、のう／＼とせうか。
　ト行かうとする。後へ軍八出て、懐中へ手を突ッ込む。
こりやマア、何をさつしやります。
軍八　褒美代りに預けたその皿。おのれにくれろ。
藤兵　ヤア、飛んだ事を宣まふな／＼。燒物師に皿は附き
物。そんな茶碗は置き物に、爰に伊萬里が德利と、そこ
を明けて、藤四郎燒々々々々。
軍八　おきやアがれ。面白くもない燒物盡し。處を。
　トかゝる。

藤兵　イヤ、猪口才な。
　トこれより碪の合ひ方になり、兩人をかし味の立廻り
あつて、トヾ藤兵衞、軍八を當てゝ皿を持つて向うへ
逸散に走り入る。と管絃になり、奥より彈正、兵馬、
大藏出て
彈正　軍八、何をキョロ／＼致す。
軍八　イヤサ、皿を。
兵馬　皿とは貴殿の目の玉が皿。
大藏　彈正さまの御用がござる。
彈正　コレ。
　ト最前の印を出す。
軍八　すりや、この猿の印を。
彈正　打ち碎いて清平の棺へ、入れ置いたと云つて置くこ
の神判。持つて居ては心遣ひ。どこぞへ早く。
軍八　畏まりました。
　ト鴨居へ上げたり、手水鉢の下へ入れたり、いろ／＼
あり、皆々頭を振る。軍八やうやく心付き
屈竟な處がござります。アレ、あの芭蕉の玉卷葉の中へ。
それ／＼。
　ト水上の石へ上がり、芭蕉の玉卷葉の中へ印を隱し、

あゝして置けば七夕の星も、御存じござりませぬ。

皆々　出來た〳〵。

ト向うにて「上使」と呼ぶ。

ナニ、上使とや。

トまた「上使」と呼ぶと、太鼓入り謠になり、山名左衞門持豊、向うより烏帽子大紋にて出る。皆々出迎ふと、左衞門持豊、直ぐに舞臺へ來り、上の方へ通る。皆々顏見合せ思ひ入れ。

持豊　山名左衞門持豊、當館へ參つたは、關白公より愛護の若へ上使。

ト奥にて

愛護　ハツ。

ト管絃になり、愛護、又八出で、下の方に坐る。

彈正　愛護の若へ上使とござれば、一家の拙者立會ひの上。

愛護　御上使の趣き、仰せ聞けられ下されませう。

持豊　上使の趣き餘の儀でござらぬ。二條の藏人死去の後、弱冠なれど愛護の若、家督相續もあるべきところ、禁庭より預かり奉る天の唐鞍、刃の太刀、紛失させし科に依つて、家名沒落、唐鞍はその節詮議出せしと雖も、刃の太刀は今以て知れず。然るところ淸平の忌明けなば、一旦家名を立てんとの御詮議のところ、承はれば、藏人存生の砌り、遺言狀を殘し置きしと聞く。その遺言狀は、愛護の若所持召さるゝや。又は外にあるや。某參り、事を糺せよとの上使。

又八　イヤ、憚りながら、拙者は鎌田又八と申し、二條家譜代の者なれど、藏人遺言狀を殘し置かれし事、目以て。

彈正　默れ又八。家の大事を、わい等が知らうか……ハツ、その遺言狀は斯く申す彈正、所持いたして罷り居ります。

ト差出す。

持豊　これへ。

ト取つて

ナニ〳〵一藏人養生叶はず、相果つるに於ては、弱冠の愛護の若、殊に家を繼ぐべき器にあらず、依つて高階彈正、血緣たるに依つて、家督相續いたし、二條の所領一圓領すべきものなり。景連どのへ、淸平」と、神判を以て捺されあれば、こりや相違ない遺言狀。

軍八　なんと聞いたか。あゝ云ふキッとした物があれば、なんぼ實子の愛護さまでも、四の五とは云はれまい。

兵馬　それ〳〵、鎌田又八で候ふと、びくしやくしても、今までは居候ふ。これからは宿無し。

大藏　赤い顏に似合つたやう、唐辛子か達磨豆腐でも賣るがようござる。ハヽヽヽヽ。

又八　たわ言吐かすと、頸をぶツ裂くぞ。

ト立ちかゝるを、愛護、コレと留める。ト下座より惡五郎、早苗之助を引立て出る。

惡五　うしやアがれ〳〵。

ト管絃になり、これをお菊支へ出て

きく　こりや早苗どのを、なんとするのぢや。

惡五　知れた事だ。何れも樣、お聞きなされ、この奴めは彈正さま、御執心の八汐どのと、一間の内で上になり下になり、押への重たい石橋山。飛んだ組打ちをおッ始めました。

彈正　ヤア〳〵。して八汐めは。

惡五　兼光どのが引ツ捉へて仕置最中。この奴めは引ツ立て參りました。生ツ白けたこの面で、色事を稼ぎやアがるか。

ト扇子にて打たうとする。

きく　いとほしなげに、そりや又あんまり。

ト留めるを

持豐　ヤイ〳〵、上使の手前で、じたばた騷ぐな。

きく　ナニ、御上使とや。

ト持豐を見て

ヤア、こなさんは。

ト恟り。

持豐　わりやア。

トこれも恟り。

きく　味いな顏で、ようもマア。

ト云ふを打消し

持豐　アヽ、コレ〳〵、こりやこの形は上使。ナア、上使なれば、わいらがやうな、下々の下々等は、知らぬぞ知らぬぞ。

ト紛らかす。

きく　どちらが下々の下々ぢややら……まだ心が直らしやんせぬなう。こなさんは〳〵。

持豐　アヽ、コレ、何にも云ふな〳〵。

ト術ながる。

又八　上使どの。云ふなとは。

持豐　サア、云ふなとは、わいらが支へこさへを云つても遺言狀が物を云ふワ。

彈正　それ〳〵、愛護の若、身共に家督を繼がせうと、お

請け申しやれ。
又八　そりや又、なぜに。
愛護　さほど慥かな事ならば、父上お知らせあるべきを、御沙汰なきは、合點ゆかざるその一通。
軍八　まだお云やるか。あれ程慥かな證據があつても。
惡五　それ〳〵、清平どの死なれた時、葬送の棺へ打ち碎いて入れたと云ふ、神判が捺してある遺言狀。
持豐　これが書面を以つて、家督違背いたさば、僞になるまい。
愛護　サア、それは。
きく　あのマア眞面目な。こりや云はにやアならぬわい。
彈正　コリヤ〳〵、大切な家督の評定、滅多な事を吐かすと、親兄弟まで祟りが行くぞ。
トお菊、思ひ入れ。
持豐　愛護の若、鎌田又八。
軍八　お請けしないか。
愛又　サア、それは。
敵皆　サア〳〵〳〵、どうだ。
又八　道に非ざる家督定めも、遺言狀があるゆゑに、手を出す事も叶はぬか、エヽ。などと云ふやうな又八ぢやアねえ。
敵皆　なんと。
又八　清平公御死去の砌り、打ち碎いて埋めたとか云ひ觸らし、その神判をひん盜んで目算した、遺言狀であんべいがな。
きく　サア、斯うあらうと思うたゆゑ、先へ廻つて拵らへ事の、種を此方へ取りました……ナニ、二人のお方、早うこれへ。
民部　心得ました。
トばた〳〵にて向うより、柳ケ瀨民部、上下大小。腰元松ケ枝、三建目の形にて走り出る。
惡五　ヤア、わりやア最前の田舍者め、
民部　木山村の百姓又兵衞と云つたは僞はり。誠は二條家國詰めの浪人、柳ケ瀨民部。面體知らぬを幸ひ、松ケ枝どのと云ひ合せ
松枝　藏人さまのお胤ぢやと、あられぬ騙りも忠義の端。
民部　猿の印を盜み、所持する證據は、最前取つたこの印鑑。
ト幕明きの印鑑を出す。
きく　なんと、これでも、家督を繼がうと仰しやりますか。

彈正　サア、そりやア。
きく　犬骨折つて高階さま、もう嘘ぢや誤まつたと云うて、
おしまひなされませいなア。
早苗　サア、山名の僞はり者から、化の皮を引ッ剝げ〳〵。
ト前へ出る。
持豐　ナニ、この上使を似せ者とは。
早苗　山名と云ふが似せ者の骨頂。その山名左衞門は某が兄。二條家騷動ゆゑ、荒木が下部となつて、善惡理非を檢分いたせと、東山どのゝ仰せを請け、入込み居つたは、山名主水之助持定と云ふ者だワ。
持豐　さう聞いちやア、うぬ
ト切つてかゝるを、又八取つて投げる。持豐、烏帽子素袍を引ッ剝ぐと、四建目の多四郎になる。早苗之助、上へ通る。
又八　さてこそ似せ者。
ト立ちかゝるを
きく　マア〳〵、お待ちなされませ。惡人ながらこれも血筋、母さんの意見も用ひず、又しても惡事ばかり。他人多ー郎の他人となつて、高見で見ようと思へども、血筋の緣にこのお詫び。親子の者が忠義に替へ、命ばかりはお助けなされて下さりませ。
ト又八、愛護へ面目なきこなし。
又八　エヽコレ、お菊が口を添へずばなア。命冥加な野郎めだ。
多四　ソレ〳〵、榮螺のやうな握り拳で、頭の鉢も微塵にならうに、忝ない〳〵。お主が意見で、これからとんと、心を矢ッ張り改めないワ。
きく　エヽ、お前はなア。
ト思ひ入れ。
早苗　サア、これから彈正どのゝ、謀書の落着。
彈正　イヤ、こりや謀書ではござらぬ。あの者どもが皆云ひ掛け。
又八　イヤ、さうは云はせぬ。最前捺した猿の印は。
民部　彈正どのゝ
松枝　懷中に、
又八　爰へうしやアがれ。
ト彈正を引寄せ、懷中を改め、無き思ひ入れ。
彈正　どうだ。猿の印はあつたか。
又八　そんなら、うぬらが懷に。
ト惡五郎、軍八、兵馬、大藏を手籠めに懷中を改め、



初演の繪番附

無き思ひ入れ。
惡五　どうだ。おいらが懷に
軍八　袖判が
敵皆　あつたか。
又八　サア、それは。
彈正　どうして〳〵。その遺言狀へ捺すに、打ち割つたものが、あつて堪るものか。こりや、うぬらが云ひ掛けだな。
きく　サア。
敵皆　サア〳〵〳〵、なんと。
立皆　ホイ。
民部　最前みす〳〵しまつた懷中。
又八　手籠めに一々探つても無いは
きく　却つて此方の越度となつて
愛護　愛護が家督は叶はぬか。
松枝　何れも樣。
立皆　思へば〳〵。
ト口惜しき思ひ入れ。此うち雷、鳴り出す。
敵皆　ヤア〳〵、雷が鳴つて來た。
ト怖がる。

きく　爰は端近。愛護さまを。
民部　我れ〳〵が守護いたさん。
松枝　イザ〳〵。
愛護　參れ。
ト愛護、民部、松ケ枝、ツヽと下座へ入る。次第に雷大きく鳴る。兵馬、大藏、耳へ手を當て押へる。
大兵　桑原々々。
ト逃げて入る。
彈多　サア兩人、うぬらが企みか。
菊又　サア。
彈多　サア〳〵〳〵。
ト詰め寄る。お菊、又八、口惜しきこなし。この途端に大雷ゴロ〳〵、ぴつしや〳〵、雨頻りに降る。敵役皆々捨ぜりふあり、耳を押へ倒れる。お菊、又八に取りつき居る。この時、上の芭蕉の玉卷葉、段々開きて、中より袖判顯はれ出る。どゞん〳〵と雷落ちたる音にて、大雷雨止む。お菊、心付き
きく　ても恐ろしい今の音。
ト方々を眺め、芭蕉の葉を見て
ヤア、芭蕉の中。

又八　さてこそ、あれ
ト取りに行かうとする。敵役皆々起き上がり
敵皆　イヤ、さうは。
ト留める。立廻りにて、又八、神判を取つて
又八　紛ふ方なき猿の印。
彈正　それを。
トかゝるを立廻り
きく　葵の花は日を見て轉じ、芭蕉は雷を聞いて開くと云ふ。
早苗　あの玉卷葉に隱し置きしを
多四　今の雷で開いたか。
又八　叔父御の謀判。云ひ譯はあるまいがな。
彈正　サ、それは。
立皆　サア／＼／＼、何と。
敵皆　もくが割れたら。
ト切つてかゝるを立廻りに、又八、早苗之助、軍八、惡五郎は二重へ上がる。舞臺は多四郎、彈正、お菊にかゝるを立廻りあり
きく　芭蕉も開いてお家も開く。
多四　捨てる神ありやア
きく　助ける神あり。
ト敵役皆々、うぬとかゝるを立廻つて
ハテ、好いおしめりであつたなア。
ト取つて押へる。皆々よき見得。早き序の舞にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、上の方少し前へ出して、九尺の數寄屋。床の間に掛け物。花活けてある。風呂に釜かゝり、圍ひの飾り付け。下の方、向う廊下、障子立て、いつもの所に枝折り門。上の方、柳の立ち木、吊り枝。この前に苔蒸したる古井戸。好みの道具。爰に兵庫之助、以前の形、大小にて、八汐を引きつけて居る見得にて道具とまる。

八汐　すりや兄上樣、どうあつても。
兵庫　下部早苗之助と、兄も許さぬ不義密通。さつぱりと思ひ切つて、彈正どのゝ心に隨へ。
八汐　イエ／＼、なんぼ兄さんのお詞でも、貞女兩夫に見えぬ譬へ。否ぢや／＼、否でござりますわいなア。
兵庫　死太い女郎め。達て否と吐かせば、一旦彈正に番つた詞。酷い責苦に遭はせるぞよ。

八汐　例へ責め殺されうとも、それぱつかりは。
兵庫　否と吐かせば、ソレ腰元ども。申し付けた責め道具を持て。
女三　畏まりました。
ト管絃になり、奥より腰元野分、桔梗、玉章、島臺等を持ち出て列べる。
八汐　これは。
トめでたき謠になり、兵庫之助、あたりを見廻し、奥より早苗之助を連れ出る。
ヤア、其方は早苗之助。
野分　イエ、あなたは山名の御舍弟、主水之助持定さま。下部となつてお出でなされたは、義政公の隱し目付け。
桔梗　あなた樣の聟君には、願うてもない幸ひと、兄上さまのお仲人。
玉章　さぞお嬉しうござりませうな。
早苗　イヤ、それは內證事。この主水は目付け役。高階彈正書の惡事、言上を急ぎますれば
兵庫　ハテ、善は急げ、惡は延べよ。妹が心落ちつく爲。
野分　それ〳〵、マア、御祝言のお杯。
三人　遊ばしませいなア。

兵庫　ヤレ聲高し。奥には彈正。其方達は次へ。
三人　畏まりました。
ト合ひ方になり、三人、奥へ入る。
八汐　今まではつれない兄上と、恨んで居たが勿體ない。堪忍して下さりませ。どうぞ早う祝言の
トあたりを見て
モシ〳〵、杯がござんせうわいなア。
兵庫　オヽ、その杯は。
ト水屋より蒔繪の箱を取り來り
こりや兵庫之助が家の重寳、蒔繪の皿。老先祝ふ祝儀の杯代り。
早苗　聞き及びし蒔繪の皿。拜見いたすも妹御に、緣を結びし拙者が大慶。
兵庫　サヽ、八汐。一つ飲んで聟どのへ。
八汐　アイ。
ト嬉しさうに蒔繪の皿を取り上げる。兵庫之助、長柄の酒を注ぐ。八汐、一口呑んで三方の上へ置く。兵庫之助また注いで早苗之助に進める。早苗呑んで三方の上へ置く。兵庫之助、思ひ入れあつて
兵庫　先づ祝言の……〽納まる手には壽福を戴き、萬歳樂

には命を……ム、、、、、ハ、、、、、、。

ト皿を取つて愁ひを含み笑ふと、本調子の合ひ方になり、此うち八汐、早苗之助、毒の廻りし思ひ入れあり

早苗　ヤ、、、いま唐繪の皿を杯になぞらへ、祝言の酒を呑むや否

八汐　骨も砕くるこの苦しみ。

兵庫　皿に仕込みし砒霜斑猫。ハテ、稀代な毒を見るものぢやなア。

ト思ひ入れ。下の障子を明け、お菊、様子を見て居る。下座より彈正出て

彈正　青山どの。

兵庫　高階どの。

彈正　某が惡事、云ひ上げうと云ふ山名主水。妹と共に毒殺なし、この彈正に心を運ぶ、兵庫之助、頼もしい。

早苗　すりや、仇になる主水ゆゑ、彈正と云ひ合せ、毒の皿にて祝言させ、命を取らん企みと知らず、うか〳〵乘つたか。エヽ、殘念やなァ。

八汐　エヽ、胴慾な。兄さんと云ふも穢らはしい。鬼よ蛇よ。自らばかりか戀人まで。ようも〳〵。

ト苦しむ。

早苗　主水さま。

毒で死するは家名の穢れ。

ト苦しみながら刀を拔き、腹へ突ッ込む。

八汐どの。

八汐　未來は必らず。

早苗　一つ蓮。

ト手を取り交し、苦しみ、死する。

彈正　ハヽ、、、よい態〳〵。猶この上も兩人、心を合せる印。隱し置いたる刃の太刀。其方へ。

ト刀を拔いて渡す。

兵庫　忝ない。

きく　そんなら。

ト兵庫と顔見合せ、お菊、障子ピッシヤリ、

彈正　今のは。

兵庫　ありや堺爭ふ村雀。暮れぬその間に、御歸宅あれよ。

ト我が刀を差替へに遣る。

彈正　諸事は其うち。

兵庫　高階どの。

彈正　さらば。

ト唄になり、彈正、向うへ入る。此うちお菊、以前の裝束を持ち、民部、ツカ〳〵と出て

きく　兼光さま、この濡衣の乾かぬうち、あなたの疑ひ晴れまして

民部　愛護さまにも殊ない滿足。

兵庫　はしをり鏡の妹に、繋がる縁の主水まで、毒殺なしたは、この刃の太刀を取らうばかり。

ト ほろりとして太刀を差出す。

きく　そのお心を見る上は、兼ねてお望みの二條の系圖。

兵庫　内見を許されうや。

民部　拙者預かり、持參いたした。

ト懷中より一卷を出して渡す。兵庫之助、太刀を民部に渡す。

兵庫　忝ない。この上は、愛護さまに心置かれず、その太刀持つて記錄所へ、家督の事を願はれよ。

きく　柳ケ瀨どのには、ちつとも早う。

民部　それよ。

ト行かうとするを、軍八出て

軍八　樣子は聞いた。太刀を渡せ。

ト かゝるを民部、見事に取つて投げ、返るところをお菊押へ

きく　構はずと。

民部　それよ。

ト三重になり、民部、太刀を持つて逸散に向うへ入る。軍八、直ぐに起き上つて切つてかゝるを、その刀を引ツたくり、兵庫之助、軍八が首をポンと切る。管絃になり、お菊、手拭掛けの手拭にて血刀を拭く。兩人、氣味合ひあつて、兵庫之助、刀を納め

兵庫　お菊、濡衣の返答聞いて、其方もさぞ滿足であらうな。

きく　これが嬉しうなうて、何と致しませう。マア、さう云ふお心とは知らず、お疑ひ申しましたは、御免なされて下さりませ。してこの上は、愛護さまは。

兵庫　高階彈正に表面の一味顯はれなば、何かの爲に惡しかりなん。近江坂本山王の別當は、二條家の由緣と云ひ、某も入魂なり、今宵密かに其方供して、道の程は遠くとも、暫しがうちの隱れ家に。ナ、合點か。

きく　すりや、お預かりの愛護さまを。

兵庫　取逃がせし御外聞、申し開きは、まヅこの通り。

ト 髻を切る。

きく　そんならあなたは。

ト驚ろく。

兵庫　愛護さまを落せし科、薙髪は閉ち切り髪替り。一人の妹を害せしも、疑ひ受けし武士の意地。捨つべきものは弓矢とは、思ひ當つて今日より、青山鐵山と名を改めて、心は隱遁。

きく　それ程までに愛護さまを、思ひ餘つて現在の、妹御さまにこの世の別れ。

兵庫　其方達にも今宵が名殘り。

きく　悔んで返らぬ事ながら

兵庫　又も愛護を門出の喜び。

きく　野邊の送りの手向けには

兵庫　茶事に越したる事もあるまい。幸ひ好きの道と云ひ、鐵山と云ふ隱者の名開き。其方と愛護に、一席進めう。

きく　茶はよく欝を散じます物とやら。捕はれのお方には一入のお待遇。

兵庫　妹が追善、逆勝手も。

きく　詫びに營むお茶のお手前。

兵庫　門出の祝ひと

きく　手向けの佛事。

兵庫　月の夕の

きく　夜もすがら。

兵庫　殘る螢は

きく　門火のまなび。

兵庫　涙拂うて、支度せうかえ。

ト　これより獨吟。

〽袖に置く、露に思ひぞ知られける、桐の一葉の恨みもほんに。

ト兵庫之助、思ひ入れあつて奥へ入る。お菊、殘る。唄の切れに桐の葉一枚、靜かに飛んで來てお菊が袖へ落ちる。合ひ方になる。

きく　夏果てる別れや桐の一葉かな……桐の一葉の散るを見て、秋を知ると云ふ事はあれど、わしが袖へ此やうに、落ちると云ふは物の知らせか。アヽ、氣にかゝる

ト思案して

なんの、薙髪して、鐵山と名まで變へてのあの深切。もう愛護さまのお身の上に、氣遣ひなければ、この身も無事、女子の愚痴であつたわいなア。

〽月の夕の色袱紗、捌き兼ねたる胸の戸を、あゝどうせうぞ、なんと障子に音づれて、我が身一つに吹くや秋風。

トこの唄のうち好き程に圍ひの簾を卷き上げる。この内に兵庫之助、茶服の形にて竹臺子の前に直り、茶を立てゝ居る見得。小道具飾りつけ、よろしくあるべし。好き程にお菊、愛護を連れ出る。愛護三方に最前の猿の印を載せ持つて、座に附く。唄切れるまでに兵庫之助、茶を立て

兵庫　お菊、取次。

トお菊「ハッ」と取つて愛護へ渡す。愛護、取つて下に置き、一禮して

愛護　東山どの、風雅の聞えあればこそ、皆一統にかゝる物好き。感心いたす。

ト呑む。

これはいかう、念が入りました。

兵庫　口取りは手製の淞壽香。それへ。

ト毒の皿へ口取りの載せたるを持ち出す。お菊、何氣なう愛護が前へ出す。薄ドロ〳〵にて三方の猿の印、おのれと割れる。兵庫之助、刀を持ち、立ちかゝり見て居る。

愛護　珊瑚樹を以て彫刻したる猿の印。仔細もなきに割れたるは、ハテ心得ぬ。

ト兵庫之助、ハッと思ひ入れ。ツカ〳〵と舞臺へ下りる。

きく　桐の一葉の知らせと云ひ、さては。

トお菊、愛護を後へ圍ふ。これより竹笛入りの合ひ方になり

兵庫　どうしたと。

鐵山さま、これまであなたの心底ゆゑ、心を許して居りましたが、こりや矢ッ張り愛護さまを。

トきつとなる。

きく　サア、その皿は、最前八汐さまや主水さまの、命を取つた、毒の皿でござりませうがな。

兵庫　ヤレ、滅多な事を云ふな。こりや十枚揃ふ家の重器。コレ、この皿と同出同生。

ト蒔繪の皿の箱を見せる。

きく　イエ〳〵、どのやうに仰しやつても、そりや十枚の外の皿。

兵庫　まだ云ふか。これが十枚の外なら、われがそこで算へて見ろ。

愛護　コレ〳〵お菊、あの皿の數を改め、十一枚なら拵らへ物。



附番繪の演初

兵庫　十枚なら誠の皿。愛護に進めるこの口取り。サア、取出す程に數を取れ……ソレ

ト皿を一枚々々取り出す。お菊、愛護を圍ひながら

きく　一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ。

兵庫　箱の内には、もう無いぞ。

きく　エヽ、これを合せて十なれど、十の數さへ合はされぬ、この皿ばかりは。

兵庫　疑はしくば、われ、毒味して愛護に進めろ。

きく　サア、それは。

兵庫　ならぬか。

きく　サア。

兵庫　進めるか。

きく　サア。

兵庫　サア／＼／＼。

ト皿を突きつけて、お菊を、じろり／＼と舞臺へ付け廻す。お菊、思ひ入れあつて

きく　もう、是非がない。

ト皿を取つて微塵に割る。兵庫之助、カッと急き上げお菊が襟髮を取つて捻ぢ据ゑる。愛護、ソレと寄らうとする所へ、惡五郎、鞍を抱へ出で、愛護を支へながら

惡五　ヤア、仕込みに仕込みし毒の皿を、こりやア、お菊めが打ち割つたか。

愛護　そんなら矢ッ張り毒の皿か。

兵庫　刃物で殺せば後日の咎め。人知れず毒害なし、日頃の恨みを晴らさんと、薙髮までして謀りしに、この女めゆゑ水の泡。

きく　日頃の恨みとあるからは、兼ねての根組みのこの惡事。すりや最前の刃の太刀も。

兵庫　系圖を奪はん表面の情。似せ物を授けて遣つたワ。

きく　エヽ。この屋敷へ入込みしも、母様のお指圖。惡事の密書はありながら、情々に女の迷ひ。船瀨園右衞門が娘ともあらうものが、油斷なせしか。エヽ。

ト懷中より守り袋を出し、密書を見てこなしして、刃の太刀は。

兵庫　この鐵山が知るものか。

愛護　二條の系圖に心を掛け、數多の寶を集むるからは

兵庫　今は名乘らぬ青山鐵山。愛護の若は擒り虜。御嶽惡五郎、鹿鞍諸とも汝に預ける。

惡五　畏まりましてござりまする。

きく　それ渡しては。

ト行かうとする。兵庫之助、引きつけ

兵庫　行け。

惡五　ハツ。

ト惡五郎、唐鞍を抱へ、愛護を引ッ立て、逸散に向うへ走り入る。お菊、續いて行かうとする。兵庫之助、一太刀切る。お菊、二の太刀を網代笠にて受けとめる。兩人キッと見得。蜩の聲、凄き合ひ方になり、お菊、段々切られる仕組のタテよろしくあつて、兵庫之助、守り袋を引ッたくり、口に啣へ、トヾお菊を古井戸へ押し掛け抉る。

きく　殺さば殺せ青山鐵山、魂は冥途へ赴くとも、魄はこの世に止まつて、愛護さまの御先途を、見屆けいで置かうか。

ト苦しむ、薄ドロ〳〵にて燒酎火燃ゆる

兵庫　こま言吐かさず、くたばれ〳〵。

ト井戸へ酷く切り込む。忍び三重、時の鐘にて、下の方、藪の垣を押し分け、お照黒仕立ての形の上に、足輕の法被を纏ひ、手拭を口に啣へ、一腰を差し、窺ひ出て、兵庫之助を見て、切つてかゝり、立廻りに兵庫之助、懷中より系圖を取落す。お照、取上ぐる。兵庫之助、それをとかゝるを、大ドロ〳〵にて、井戸より魂ひを引き上ぐる。兵庫之助、茫然とする。

きく　エヽ、恨めしいなア。

てる　すりや、姉樣は。

ト兵庫之助、お照もキッとこなし。お照、守り袋に手を掛ける。兵庫之助よろしく切り拂ふ。お照も刀を拔き、受ける。この所よろしき見得の仕組みあつて

ひやうし幕

第一番目大詰

鐵山屋敷の場

淨瑠璃「三紅閨時酒」富本連中

役名――二條愛護の若。同姉、雲井御前。御嶽惡五郎。赤石兵馬。尼崎大藏。五種香賣り、虎屋五郎八實ハ赤松次郎政則。荒木左衞門。お菊の亡魂。青山鐵山實ハ太宰大貳梅丸。

本舞臺、三間の間、青山長屋の體。橋懸り打返し、

正面、海鼠壁の書割り、下の柱、柳の大木、この枝、屋根へ枝垂れかゝりあり、爰に御嶽惡五郎、五建目の形にて唐鞍を引ッ抱へて、左右に赤石兵馬、尼崎大藏、五建目の形にてこれを支へて居る。時の太鼓にて幕明く

惡五　こりや、惡五郎を何とするのだ。

兵馬　何とゝはその唐鞍。

大藏　何處へ持つて

兵大　ふけるのだ。

惡五　何處へと行つたら、うぬが三昧、二條の家から先つ頃、物したおれが今持つて、行くのをいらざる差配立て。妨げせずと、そこ通せ。

兵馬　さてはこれまで鐵山公と、彈正さまへ一味の汝。

大藏　日頃に似合はぬ立振舞ひは、こりや返り忠

兵大　ひろいだなア。

惡五　推量されたら是非がない。成る程一旦惡事に組みしたが、つくづく思へば思ふ程、敵役の納まりは、よくないものと感心して、心を改め實事師。愛護の若もそれゆゑに、疾に荒木左衞門へ、送つた次手に、この唐鞍、今また元へ納めるのだ。

兵馬　そんなら虜の愛護の若、こかしてしまつたその上に

大藏　大切なる唐鞍まで、渡して企みの底を割る。

兵大　丁稚め、生けては置かれぬわい。

惡五　小癪な奴等。そこ通せ。

兵大　唐鞍渡せ。

ト兩方よりかゝる。立廻りあつて三人、どつこいと見得。これよりタテの鳴り物になり、惡五郎、兩人を相手に花々しき立廻りあつて、トゞ兩人一度に惡五郎へ打ちかゝる。ト大どろ／＼になり、塀の上より魂ひを引き上げる。これにて兩人、塀の際へ引きつけられる。此うち、惡五郎、唐鞍を持つて花道へかゝる。兩人これを追はうとする。大どろ／＼にて連理引きにて苦しみ、一時に中返りして死ぬ。惡五郎見て

惡五　ヤヽ、あれこそ正しくお菊が魂魄。惡を退く忠義の一念。何は兎もあれ近國どのへ……忝ない。

ト大どろ／＼、時の鐘早めにて、惡五郎、鞍を持ち、向うへ走り入る。此うちに死骸を消す。矢張り大どろどろ。ゴン／＼にて、正面の塀を引いて取る。

本舞臺、姫葭の簾を掛けて、高足の蹴込み、掛け物。

上の方、以前の柳、これに礎振り出す仕掛けあり、下の方の柱、百日紅の實木に誂らへの盆燈籠、後に灯の消える仕掛け。見付けよき所に小萩の生垣、これに萩薄咲き亂れ、橋がゝり誂らへの枝折り戶。道具とまる。途端に下の塀打ち返す。この内に富本連中居並び、鳴り物打ち上ぐる。蘭彈きになる。

〽夕暮れのかねて供養の有髮の僧、設けの爲の風流は、露にも宿る盆の月、角の取れたる丸太船。

ト竹笛入りの合ひ方。雲井御前、比丘尼の拵らへ、笈笠を冠り、足駄を穿き、牛王箱を抱へ、びんさゝらを持ち、花道の中頃よりセリ出る。

〽笘の香も、まだ川口に殘り寐の、ひんせうの名も恥かしき、もみの笠紐うつろひて、顏に夕日の明石潟、衜も波に流れの身、川竹ならでびんぎゝら、梅は匂ひよ櫻花、人は眉目より只心、ちとくわんと御贔屓修行の歌比丘尼、柳も門に立ち姿。

ト これにて雲井御前、舞臺へ來ると、向うにて

五郎　虎屋の五種香、晴明香の御用はござりませぬか。

ト直ぐに浮いた合ひ方になり、向うより虎屋五郎八、染めやつし着流しの形にて、柿の頭巾、脚絆、中拔を穿き、三尺手拭を締め、線香の箱を萌黄風呂敷に包み襟に掛け、三升の紋の付いた團扇を持つて出る。

〽月の名高き明石の町を、秋の牛をぼんのくぼと申す、ほんに女の香も懷かしや、得意さま方へ商ひは、無性無てんに神引き茶、女房持ちやらば、甘茶にしやれ、濃茶こちや〳〵、こりやよい五種香、買はんせ〳〵買はしやんせ、お買ひなされと廣め來る。

ト この文句にて、五郎八、舞臺へ來る。

雲井　モシ〳〵、商人さん、この青山鐵山さまのお屋敷に盆のお供養なされますかいなア。

五郎　サア、播州一ヶ國の坊主達に、施行をお出しなさるとの事。わたしや明石の町の虎屋五郎八と云ふ、五種香賣りでござります。匂ひ線香、晴明香、甘茶挽茶もこのお屋敷へ、賣りつけようと思つて來ましたのサ。

雲井　そんならお前、虎屋五郎八さまと云ふお方かいなア。

五郎　明石町ぢやァ商賣がらで、ちと煙つたい男サ。

雲井　見掛けから、どうやら頼もしさうな五郎八さま。なんとわたしに、頼まれては下さんすかいなア。

五郎　オッと皆まで仰しやるな。お前樣は二條の藏人淸平公の姬君。

雲井　雲井の前と云ふ事を

五郎　知らないで、どうしてこの淨瑠璃に、斯う云ふ形で出られませう。お隱しなされますな。青山鐵山さまに……やるものぢやござりませぬ。

雲井　さう云ふ事なら、何も隱さぬ程に、どうぞ自らを。

五郎　お取持ち致しませう。

雲井　そりや嬉しいわいの。とは云ふものゝ、どうして鐵山さまに、お目にかゝつたものであらう。

五郎　サア、そこが芝居の狂言の通り、施行をお出しなされる處へ、そのお姿は當り前。定めて鐵山さまも、甘臭い匂ひがすると、待つてお出でなされませう。

雲井　そりや又、どうして

五郎　エヘン。ちと洒落臭くはいへども、さらばお話し申さうか。

〽げに有り難き供養の庭、八宗九宗十二宗、これ坊さま逢はせませう、ござれ〳〵と夕暮れに、比丘尼橋とは有り難い、渡りに船と五郎八が、得手に帆懸けて乘せかける、雲井の前も面はゆげ、亂れ小柳亂れそ柳、我れも亂るゝ思ひより、切つて捨てたる黑髮も、また煩惱に心引かされて、やつす姿も伊勢比丘尼、さても見事なお葛籠馬よ、蒲團重ねて後つきつけて、都上りの三度笠、ナアエ嶋さん紺さん中乘りさん、やてかんせ拋らんせ、姿も振りも影法師、さつてもえらい、こりやえらい、ちよつきりちよつと虎屋五郎八が。

この波錢を斯う持つて、錫杖なんぞは、どでごんす。

〽さまが道中安全を、拂ひ淸んめたん〳〵奉る、ノオ、下はしだいの天王なり、さてもその後爰に又、八官町に名も高き、小吟小芳が派手競べ、色の出店も和泉町、ちよつと神田で後から、三島橫町大橋の、袂の袖の振り合せ、大たか小たかに打込んで、通ふ安宅の假枕、祟りをなすなよ御祈念と、大汗流してしやべりける。

ト五郎八、手拭にて汗を拭く。雲井御前、有り合せたる團扇にて煽ぐ。雲井御前、立ちかゝりて

雲井　面白い事であつたわいなア。

ト奥にて「鐵山公のお入り」と呼ぶ。雲井御前、五郎八、顏見合せ

アレ〳〵、鐵山公のお入りぢやといの。

五郎　オウと、よし〳〵。時に、このお姿では、あんまり色氣がござりませぬぞえ。

雲井　自らもさう思うて、その用意もして來たわいなア。

五郎　そんなら、占めたものだ。とても物事に、斯うなされませ。

ト雲井御前に囁く。雲井、呑み込んで

雲井　そりや、恥かしいわいなア。

トまた「鐵山公お入り」と呼ぶ。

五郎　アレ〳〵、もうこの所へ鐵山さまが。

雲井　どうしようぞいなう。

〽恥らふ姫を五郎八が、心で諫め夕日映え、雲井も戀の山の端に、奥深くこそ入り給ふ。

トこの文句にて雲井御前、牛王箱を抱へ、五郎八に押しやられ、下座へ入る。五郎八これより下の方に煙草のんで居る。簾の内にて

鐵山　なか〳〵になき魂ならば故郷へ、歸らんものを今日の夕暮れ。

〽釣り簾隙洩る蘭の香も、床し、懐かし律の風。

トこの文句にて正面の簾を上げる。この内に鐵山、長絹、法眼袴、總髪の拵らへにて、懐中へ中啓を入れ、小さ刀を差し、蒔繪の刀架に刀を懸け、錦の褥の上に乘り、琴を調べて居る見得。

〽實にや青山鐵山が、琴の調べぞ興床し。

ト直ぐにドロ〳〵になり、日覆より七曜の星、雲間より下りる。鐵山キツと見る。管絃になる。

鐵山　ハテ心得ぬ。神人和悦、妖邪を遠ざくるとは和琴の妙所。然るに今、鐵山が調べる琴の音に、自然と殺伐の調子顯はれ、折柄一天を窺へば、破軍星は光りを失ひ、武曲星は赫耀たり。未だ帝座を犯さゞるは心得ぬ……時は七月、夷則に當れり、夷は破れ、則はのりなり。物初めて破れ、刑法を案むる數へなるか。ハテ、奇怪の事を見る事ぢやなア。

ト思ひ入れ。ドロ〳〵にて星を引き上げる。直ぐに合ひ方。五郎八、思ひ入れあり。

五郎　そんなら、いよ〳〵。

ト鐵山、顏見合せて、こなしあり。

鐵山　それに居るは、何者ぢや。

ト五郎八ツト出て

五郎　ハイ、私しは何やらでござりました。オヽ、それそれ、虎屋五郎八と申します、ハイ、五種香賣りの商人でござりました。

鐵山　何とも合點がゆかぬ。誰れが許して、この所へは參りしぞ。

五郎　サ、それは何やらでござりました。オ、それ〳〵、このお屋敷さまで、御法事がござりますと、承りましたに依つて、有り難い御出家樣を、お供申して參りました。

鐵山　鐵山この程、召遣ひの者を成敗に行ひしが、便なき事に思ひ、佛事追善を營む折柄、智識を伴ひしとは、當國に聞えし性元上人と云はるゝ程の出家なるか。

五郎　イエ〳〵、私しが同道いたしましたは、本肉山後家寺の尼君、雲井上人さまをお供いたして參りました。

鐵山　ナニ、雲井……上人とは、これまでついぞ聞きも及ばぬ聖。

五郎　モシ、お隱しなされますな。何もかも存じて居ることの商人。二條の姫君、雲井さまが、御回向にお出でなされましてござります。

鐵山　すりや、其方は、何もかも樣子存じて居るか。

五郎　モシ、やるものぢやアござりませぬて。

鐵山　さう知られたら是非がない。如何にも某、雲井の前には大執心。なんと其方が働らきで、逢はせてはくりやるまいか。

五郎　承知之助でござります。左樣ならば何事も、私しにお任せなされませ。

鐵山　然らば其方が仲立ちして。

五郎　後とも申さずたつた今、お取持ち申しませう。

鐵山　それは近頃忝ない。

五郎　いつその事に出番の氣取りで、お床を先へ廻しませう。

〽蒲團重ねて敷妙の、お枕元に煙草盆、錦の夜具の花紅葉、吉野龍田をくらぶ山。

ト此うち五郎八、奥より、誂らへの錦の夜具重れ蒲團長枕、誂らへの六枚屛風を持つて來て、見付けよき所へ床を敷き、これより蓋の臺、長柄の銚子を持ち來り前に置き

〽屛風に洩れし衣の香は、雲井の前の白重ね、會釋に愛も零れけり。

トこの文句のうち、奥より雲井の前、白の裲襠、衣裳、扱帶の形にて、丸綿、帽子を着て、鐵山の上の方へ坐る。

〽サア、これからはお杉役、八百屋お七に道通り、先づ土器は三つ重ね、花嫁君に二度ついて、左へ二足立つ時は、くはへは三足歩み寄り、女男の銚子の口と口、仲人は宵の明星と、一つ呑み干し舌皷、御機嫌ようと花魁の、



初演の紋番附

座敷氣取りで浮かれ行く。
トこの文句のうち、五郎八、路の臺の土器にて、長柄の銚子を持ち、杯させる事、いろ〳〵あつて、淨瑠璃の切れに五郎八、向うへ入る。雲井の前、思ひ入れあつて

雲井　戀死なん、命の程は惜しからで

鐵山　報はん君が事ぞ悲しき。

雲井　思ひ餘りしあのお歌に、云ひ號けありし左馬之助さまの事も何處へやら。遙々これまで自らが、參りました心の内……お恥かしうござります。

鐵山　菊地左馬之助落命の後は、兩夫に見ゆる心もなく

雲井　菩提の道に入りしものを、ほんに思へば我れながら。

鐵山　ヤ。

ト雲井、恥かしき思ひ入れ。

〽雲井の前は積る戀、雪の帽子もいつの間に、解けて寄り添ひ鐵山が、顔見ぬ振りで又見惚れ、今日まで戀しう思うても、致直さまへ情を立て、添ふに添はれぬ因果なわたし、身の惡業にうんじ果て、思ひ切らうと思うて見ても、情なや獨り焦れし月の船、身は泡沫の哀れとも、問ふ人もなき命ぞと、消えも入りたき風情なり。

ト文句のうち、鐵山、雲井を引寄せ抱きつくと、ドロドロになり、門口に掛けてある花燈籠仕掛けにて消える。此うち誂らへの屏風にて、雲井の前が通りの形にて、お菊、入れ替る。鐵山フツと見て

鐵山　ヤア、其方は。

きく　どう致しましたぞいなア。

〽殿御心のこちや憎らしい、袖の涙は井筒の忍ぶ、保ち兼ねてや露の音、味氣ない世ぢやないかいな。更くるにつけて蟲の音も、鐵山が身に物凄く、風凄まじき庭の面お菊が聲の數へ歌。

一つ。

〽獨り寢。

二つ。

〽二つ枕を並べて置いて。

三つ。

〽身も。

四つ。

〽よもあられぬ思ひ。

五つ。

〽いつか女夫の。

六つ。
〽睦ましい。
七つ。
〽なる氣で。
八つ。
〽嬰兒揺け、いんの子〳〵と我が子より、獨お乳參らせしたらちめの、育て上げたる和子の爲。
九つ。
〽この身の限りとは。
ハア、。
〽悲しやと泣き沈む、さてはお菊が亡き魂の、濁りの葉に引かれしやと、鐵元寛ろげ立ち寄れば。
二上り「姿はくねる女郎花、葛は恨みに枯れ殘り、猶妄執の霧の海、瀬ぎる思ひ三つ瀬川、鐵山は寂念と、護身の術と結ばるゝ、なう情なや忠孝の、爲にこの身を貫かれ、浮みもやらぬ身の業苦、思ひ知らせん待たれよやつと、野分にさつと後ろ髮、引かれ引かるゝ。
ト三重になる。お菊、連理引きの立廻りあつて、鐵山トゞ刀を拔き放し
鐵山　お菊が妄念、立去れ〳〵。
〽姫とお菊が双面、深き恨みは皿屋敷の、古井にその名や殘るらん。
ト段切れになると、太夫座を打返しにして隱す。この文句のうち衝立にて、お菊の亡靈と雲井とを入れ替へる。ドロ〳〵止む。茫然となつて心付きたる思ひ入れ。
鐵山、白刃をキッと見て
鐵山　今に始めぬ刃の太刀の奇特。稀代の劍もあるものぢやなア。
ト雲井の前、思ひ入れあつて
雲井　疑ひもなき刃の太刀。それを。
ト取りにかゝる。鐵山、白刃を鞘へ納めて、雲井を鐺にて突き退け
鐵山　何をひろぐ。
雲井　假にも女子の不義徒ら、貞女の道を破つても、家の寶を尋ね出さんと、これまで心を盡したる甲斐あつて、その重寶、雲井御前に。
トまた寄らうとする。鐵山、突き退けて
鐵山　小癪な。身を僞はつて入り込みし雲井の前。
ト太刀を拔かうとする。ドロ〳〵にて拔かれぬ思ひ入れ。この時、上の柳の木へ、お菊を以前の形にて振り

出す。
鐵山、お菊が亡靈、又らせたか。
きく　エヽ、恨めしい鐵山どの。
雲井　ナニ、お菊が亡き魂とや。
鐵山　うぬも地獄の巣守りにせん。くたばつてしまへ。
トまた抜かうとする。大どろ／＼にて、いろ／＼苦しみ、立ち竦みになる。雲井、手早く刃の太刀をもぎ取り
雲井　刃の太刀が手に入りしぞ。
きく　若君樣の御安泰、二品の寶揃ひしが、せめての本望、嬉しやなア。
雲井　心よう成佛しや。
きく　名殘りは盡きじ。
雲井　忝ない。
ト早三重になり、大どろ／＼にて、雲井御前は太刀を持つて向うへ走り入る。お菊はぶん廻しにて消える。どろ／＼止む。此うち奥より彈正、五延目の形にて、股立ちを取り、肩衣を外れ、押取り刀にて出て窺ひ居る。鐵山、思ひ付いたる思ひ入れにて、ホッと溜息を吐く。

彈正　琴に仕込みし狼煙が合圖、搦め捕られぬ其うちに、汝に組みせし彈正へ、首を渡して味方を助けろ。青山鐵山。
鐵山　武士に似合はぬ卑怯な景迹。慮外ひろぐと摑み殺すぞ。
彈正　その息の根を、ぶッ留めてくれべい。
ト彈正、刀を抜いて、鐵山に打つてかゝる。鐵山立廻りにて、彈正が持ちたる刀を奪ひ取り、直ぐに切りつける。彈正、有り合せたる琴を持つて受け留める。この途端に琴を切り割る。舞臺先にて煙硝火パッと立つ。直ぐに彈正、鐵山が刀を取りにかゝる。立廻りにて彈正が首を切り落す。これより方々にて遠責めの法螺を吹き立つる。鐵山、血刀を提げ、方々見廻し、キッと思ひ入れあつて
鐵山　最前調べし琴の音に、殺伐の調子ありしは、かゝる凶事の知らせなるか。ハテ、夥しき發聲ぢやなア。
ト思ひ入れ。ドン／＼早めになり、花道よりアリヤアリヤの聲にて、捕り手八人、四天、手甲脚當にて走り出て
皆々　動くな。

ト鐵山を後ろ身にて取卷く。向うにて

五郎　ヤア、方々扣へい。青山鐵山へ、赤松次郎政則、見參見參。

トつツかけにて向うより、五郎八貫は赤松次郎政則、陣羽織に小手臑當、半大口、白鉢卷の形にて采配を持ち走り出る。此うち捕り手八人は、下の方に立ちかゝる。鐵山、床几にかゝる。

皆々　どつこい。

政則　高階彈正が返り忠に依つて、姓名知れたる太宰の梅丸。最早遁がれぬ汝が逆謀。事顯はれし上からは、切腹なすか縄かゝるか。義政公の嚴命を蒙むり、討手に向ひし某こそ、赤松次郎政則。返答聞かん。如何に〳〵。

ト鐵山、思ひ入れあり

鐵山　天なる哉我が大望、二條の系圖を手に入れて、關白職とも經上らば、雲井の前は政所。足代八代の武將を蹴落し、海内を掌握せんと、思ひ詰めしが時を得ず、由なき彈正を幕下に付け、斯く露顯なす上からは、今は何をか包むべき。豐後の國の一城主、太宰の大貳梅丸とは、身共が事だ。

政則　さてこそな。

鐵山　鐵桶の如く取圍むとも、一方を切り破り、本國へ歸城する。其處押開いて通すまいか。

皆々　どうだ。

ト下座より

呼び　愛護の若さまお入り。

ト直ぐに下がり葉になり、正面の簾を卷き上げる。この内に愛護、長上下、指貫の形にて、系圖を持ち、床几にかゝり居る。荒木左衛門、熨斗目長上下の形にて、唐鞍を持ち、扣へ居る。鐵山、思ひ入れあつて

鐵山　愛護の若、この體は。

愛護　天の唐鞍、刃の太刀、二條の系圖揃ふ上は。

左衛　參内あれば直ぐに御家督。太宰の大貳は二條家の類葉、梅丸どのゝ一命は、若君よろしく奏聞を遂げられんとの、御仁心に免ぜられ、助命あるこそ武士の情。領承あれや政則公。

政則　愛護の若の參内の壽き、荒木の左衛門が忠義に愛で、例へこの場は見遁がすとも。

鐵山　戰場にて再會せん。

左衛　先づそれまでは。

愛護　方々。

皆々　さらば。

鐵山　これより。二番目始まり。

幕

けいせい鏡臺山（終り）

傳記及解說

渥美清太郎

眞の意味で江戸の芝居に寫實劇を創始した人は、初世櫻田治助である。彼れは早くから世話物が得意だつた。市井の風俗流行を描寫するのに妙を得て居た。最初は四世團十郎初世仲藏に附いて居た爲に、その手腕を發揮し得なかつたが、中途から當時の世話狂言の名手たる、四世幸四郎に從つたので、以來彼れの作は非常に生き／＼として來て、遂に從來の時代物臭い世話狂言を、生世話にまで延長し、寫實劇としては眞に完成の域に達した、文化文政度の基礎を築いたのである。この點に於る初世治助は、江戸演劇史上、第一の功勞者と云ふべしである。

彼れの傳記はハッキリ解つて居ない。生れは享保十三年らしい。本姓は田川と云つたさうだが、中村氏だといふ說もある。幼名は治三郎、通稱は笠屋善兵衛、生地は櫻田門外の久保町といふのが本當だらう。作者になつてからは移轉好きで、度々內を變へたやうだ。お定まりの芝居好きで二十五歳の時に壕越二三治の門に入り、見習ひとして市村座へ出勤した。途中で五年ばかり大坂へ修行に行き、歸つてから又五年目の明和五年に同座で立作者に昇進し、「都鳥東小町」といふ狂言を書いて披露をした。南北なぞよりはズッと出世が早い。以來トン／＼拍子に筆も地位も進み、天明から寬政へかけては、押しも押されもせぬ江戸一の作者として尊敬されてゐた。並木五瓶が下つて來てからは、稍勢ひを殺がれた氣味はあつたが、それは珍らし物好きの江戸人が一時歡迎しただけの話で、眞に江戸氣性の看客の心は治助でなければ完全に掴む事が出來なかつた。文化三年六月二十七日、七十三歳で歿するまで、その地位もゆるがず筆もにぶらなかつた。

治助が江戸劇壇へ殘した功績としては、少くとも三つを數へる事が出來る。一は寫實劇を完成した事、一は淨瑠璃所作事に名作を殘した事、一は江戸劇壇宿弊の一部を破つた事である。淨瑠璃所作事と來ると、江戸劇壇全部を通じて、彼れ程多く書き、名曲を殘した人は無い。現今まで舞臺にお浚ひに、彼れの作は澤山に傳存されてゐる。高尾さんげ、身替りお俊、戻り駕、おはん、女房鳶、長作、蜘蛛の拍子舞、十二段、なぞは、その代表的な作である。また一日の狂言が一二番目を通じて筋を同じ世界に統一されなければならなかつた窮屈な習慣を、天明元年に完全に破つて、全く一番目とは緣のない世話物を二番目に据ゑたのは彼れの創意である。五瓶はこの改革の範圍を更に擴張したが、手を附けたのは彼れが初めであつた。何でもない事のやう

だが、當時の劇壇としては、これは大改革であつた。治助は劇壇改新の先驅者であつた。五瓶と南北の力で、文化文政までにはからりと變つたが、その土臺は實に治助が築いたのであつた。

本集に收めた七篇、何れも彼れの傑作のみである。

國色和曾我（かいどういちやはらぎそが）

安永七年正月、中村座初演の曾我狂言。爰にはその二番目だけを揭載した。舊慣に依つて、吉原を背景にした世話物ながら、一番目の時宗や鬼王が活躍し、その外の役々も皆源平時代の英雄の本名を持つてゐる、古風な世話狂言である。

この狂言の中には當時の當込みがある。それは、近藤國平の本名を持つ鷄大藏慶政である。これはその頃有名だつた、鳥山撿挍を持込んだのである。鳥山撿挍は高利貸でウンと金を儲けて、安永四年に吉原の松葉屋瀨川を身請けしたので、江戸中の評判になつた。治助は早速それを取入れて、鬪鷄で名を暗示したのである。同時に田螺金魚といふ戲作者が「當世虎の卷」といふ洒落本で、彼れの事を桐山撿挍の名で書いた。鳥山は一層有名になつた。その爲でもあるまいが、同年十二月に、鳥山始め五六人の高利貸が一度に撿擧され、家財を沒收されてしまつた。

初演の役割は左の通り。

梅堀の町人小五郎兵衞 實ハ京の次郎祐俊（二世坂東三津五郎）夢の市郎兵衞 實ハ姉輪の平次（大谷友右衞門）樽拾ひ三吉 實ハ鬼王伜乙松（市川高麗藏）山形屋儀平次（中島三甫藏）鷄大藏慶政 實ハ近藤七國平（市川純右衞門）揚羽の長吉 實ハ曾我五郎時宗（二世市川門之助）黑雲武兵衞 實ハ章の菊王（大谷廣右衞門）傾城喜瀨川 實ハ佐藤忠信娘信夫（中村粂次郎）新造重の井（四世岩井半四郎）化粧坂少將（瀨川吉次）鬼王新左衞門（四世松本幸四郎）公達經若丸（中村七三郎）

大商蛭子島（おほあきなひひるがこじま）

天明四年十一月、中村座の顏見世狂言である。顏見世狂言と云へば、筋立は支離滅裂、荒唐無稽、たゞ部分々々の特殊の味を喜ぶべきなのだが、これに限つては秩序整然、立派な時代狂言と云へる。河津の最期と賴朝旗擧の史實を巧みに歌舞伎化した結構と、その臺辭の面白さとは、治助の長所を遺憾なく發揮したもので、顏見世狂言中の白眉であり、彼れが傑作中の傑作でもある。

二番目で、伊藤辰姫が髮梳の嫉妬に使ふめりやすは、今でも子供が長唄の手ほどきに教はる「黑髮」である。「黑髮」

は地唄にもあつて、何方が先へ出來たのか判然しないが、曲の構成から觀ると、どうしても芝居で使つたものとしか思はれない。江戸の方が先であらうと思はれる。

河津三郎祐安、正木幸右衞門 實ハ源頼朝（三世澤村宗十郎）眞田與市義貞、鬼王庄司左衞門近淸（市川八百藏）白拍子風折 實ハ鎌田兵衞娘淸瀧（中村里好）江間小四郎義時、祐信奥方玉琴（佐野川市松）祐信妹梛の葉（三條勘太郎）八幡三郎行氏、頼朝長六（尾上紋三郎）小藤太妹眞弓、天野妹歌形（瀧中歌川）河津一子箱王丸（市川海老藏）三島入道茯苓（鳴見四郎五郎）伊藤入道祐親、長尾新吾爲景、長田太郎忠宗（大谷廣右衞門）時政娘政子（佐野川萬菊）股野妹誰が袖、百姓五平次、八牧判官兼隆（中村助五郎）烏帽子折りお京 實ハ岡部娘照葉、祐安妻滿江、幸右衞門女房おふじ 實ハ伊藤娘辰姫（三桝德次郎）股野五郎景久、曾我太郎祐信、地獄谷の淸左衞門坊主 實ハ文覺上人、北條四郎時政（五世市川團十郎）

傾情吾嬬鑑（けいせいあづまかゞみ）

天明八年正月、中村座初演。「鈴ヶ森」の開祖と云つてもいい點で、頗る重要視すべき狂言である。幡隨院長兵衞も白井權八も、以前から舞臺に現はれてゐたが、この兩人の出合ひが眼目となつたのは、この狂言が初めで、箱根山からいつか鈴ヶ森に變り、江戸の俠客の相と、この時代の警句とを、其まま今日まで傳へて居るのである。

二番目で、富本の淨瑠璃を船の中で語らせる趣向は、前の「國色和曾我」で鬼王に齋宮太夫の三味線を彈かせる思ひつきと共に、流石治助だと云へる。斯うした技巧は先輩だけあつて、慥かに南北以上である。

二番目の序幕と二幕目では、多少筋が重複したり、矛盾したりしてゐる事に氣が附く。これは、最初は序幕までゞ打出し、後に吉原から敵討の場を出した時には、序幕は拔いてしまつたので、斯うした結果になつたのだと思はれる。

佐々木太郎丸（松本米三郎）本庄助太夫、畑右衞門母おあさ（市川幾藏）岩井右内（松本小次郎）唐犬十右衞門（中島和田右衞門）比企判官能員（澤村仲五郎）畑右衞門女房お町、傾城花紫（嵐村次郎）藝者おすみ（芳澤五郎市）本庄助市（市川波龍藏）岩井源之丞（澤村淀五郎）川口屋お花（嵐他人）源之丞妹八重梅 後ニ小紫（中山富三郎）赤堀源吾（坂田半五郎）白井權八、長兵衞女房お濱（三世澤村宗十郎）男達幡隨長兵衞（四世松本幸四郎）箱根の畑右衞門下部三五平（大谷廣次）

江戸富士陽曾我（えどのふじわかやぎそが）

寛政元年正月中村座初演、春狂言二番目の大切一幕である。この二番目は五節句五月變りの趣向であつたが、病人が出來て中止になり、このお染久松だけになつてしまつた淨瑠璃に相變らず面白く技巧を凝らしてあるのと、立役の門之助がお染を勤めた事が當時としては記錄的な事なのと後の「ちよいのせの善六」の土臺になつてゐる脚本なのとで、一部ながら收めて置いたのである。

油屋娘お染、稻荷の九藏 實ハ油屋多三郎（二世市川門之助）丁稚久松（市川高麗藏）油屋母つや（松本小次郎）女髪結ひおまさ（小佐川常世）藝者おくめ（市川光藏）辻山郡司（中村此藏）手代善六（市川幾藏）手代源右衞門（中島勘藏）片瀨村の久作（大谷廣次）山家屋佐四郎（四世松本幸四郎）

春錦伊達染曾我（はるのにしきだてぞめそが）

寛政二年正月、中村座の初演。曾我を土臺にして、伊達騷動を組み込み、お初德兵衞、お半長右衞門なぞも關聯し三月になると、鏡山まで加はつて來たので、實は名題だけ同じで筋は切れ／＼なのであるが、そこに多少の緣を引いてゐるところは、まだ昔の行き方を襲踏してゐたのである。

茲に出したのは、三月に入つてからの鏡山の幕だけである鏡山は天明三年の四月に、義太夫から取つて、其まゝにやつたのが初めだが、その時は中役者で、大當りでも、後まで殘す程の舞臺成績ではなかつた。治助はこれに目を附けてこの時組み込んで見たところが、松助の岩藏常世の尾上、菊之丞のお初とも大々の當りで、爾來盛んに上演され、改作又改作で今日まで傳はつたのであるが、本篇は純歌舞伎に脚色された第一の鏡山として、極めて重要な脚本である。

中老尾上（小佐川常世）賴朝息女大姫君（瀨川富三郎）海野太郎行氏（坂田時藏）腰元滿汐（市川光藏）井上次郎（中島勘藏）根の井次郎直行（中山小十郎）堀の藤內（中村此藏）横雲大膳（松本小次郎）小動求女之助（市川男女藏）足輕九平次 實ハ手塚太郎光盛（坂田半五郎）片岡幸之進（森田勘彌）淸水冠者義高（市川高麗藏）局岩藤（初世尾上松助）足輕曾根崎德兵衞 實ハ齋藤五國武（二世市川門之助）尾上召仕お初（三世瀨川菊之丞）

赤松蟾兎見島臺（あかまつつきみのしまだい）

寛政十二年九月中村座初演のお家狂言である。大詰に「倭假名在原系圖」蘭平の件をソックリ取込んである所が面白いので、茲に加へたのである。

奴三保平 實ハ赤松次郎則眞（市川八百藏）百姓五郎作 實ハ靑砥五郎、奴志津平 實ハ荒川藏人（市川高麗藏）今川仲秋（坂東三津五郎）飛鳥井中納言 實ハ猫殿五郎太夫（初世尾上松助）藏人女房おりく（中山富三郎）濱名息女胡蝶姫・五郎太夫娘おゆき（四世岩井半四郎）今川左衛門貞世（四世松本幸四郎）

けいせい鏡臺山（きやうだいさん）

文化二年七月、中村座上演のお家狂言。內容は「播州皿屋敷」の書替へのやうに見えるが、實は名題で暗示してある通り、安永年中に有名な鏡臺院お家騷動を中心にして、それへ矢代騷動を加味したものである。お小納戶役を勤めてゐた旗本森半左衛門の妾小夜が、主人の死後鏡臺院といふ尼になり、旗本靑山主馬と通じて我が子を當主に立て、幼主の新三郎を毒殺せんとしたが、事顯はれて遠島に處せられた事件は、當時非常に名高かつた。靑山鐵山に靑山主膳を代表させ、雲井御前の放埒に鏡臺院を聯想させ、料理人の木津藤兵衛を燒物師藤兵衛に當嵌めたのである。雲井御前が比丘尼屋の件や、鎌田又八の名なぞは、矢代騷動から持込んだものだ。斯うしたからくりを知つて後この脚本を讀むと、狂言の味以外に又一種の面白さが見出される。

八汐の前、鹽屋村おれい（中村七三郎）百姓又兵衛 實ハ柳ヶ瀨民部重行（尾上雷助）御嶽惡五郎高定（坂東鶴十郎）三上彌太六（中村助五郎）白川六郎國則（小川重太郎）高階彈正景通（藤川叶助）愛護の若（森田勘彌）鹽屋村他人太四郎（荻野半左衛門）燒物師瀨戶藤兵衛（花井才三郎）下部早苗之助（尾上紋三郎）妹松ヶ枝（瀨川龜三郎）鎌田又八秀春、虎屋五郎八 實ハ赤松次郎政則（市川八百藏）雲井御前（瀨川路三郎）後家お幸、荒木左衛門近國（中山文七）妹お照（五世岩井半四郎）姉娘お菊（四世瀨川路考）靑山兵庫之助兼光 後ニ靑山鐵山（三世坂東三津五郎）

カタリ、役割、挿繪等に關し、山形の秋葉芳美氏から、御援助を戴いた事を厚く御禮申しあげる。

編纂校訂責任
渥美清太郎
鈴木侃

日本戲曲全集・第十卷
初世櫻田治助篇・第十八回配本

編纂者檢印

昭和五年二月十二日印刷
昭和五年二月十五日發行　（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一
三七八八
振替東京一六一七

製版所　新倉東文堂

（神田區松下町七番地・明治印刷株式會社）



